丸く収まったこの世界

榊屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
丸く収まったこの世界

【Ｎコード】
Ｎ７００３Ｏ

【作者名】
榊屋

【あらすじ】
世界は所詮、すべての物事が丸く収まるようにできている。それはこの地球の形状そのもののようだ。
世界観はこの世界。皆が居るこの世界だ。その世界においては、異常性―それすなわち、『能力』と呼ばれる物―が存在する。それは個人個人にある個性や、オリンピック選手たちやパズルを解く力、勉学に秀でていることすら関わっているのかもしれない。君の隣に居るような、そういう奴らも、ある意味で『能力者』なのかも知れない。しかし、それはこの物語にはそこまで関わっていない。

嘉島奏明と王城隼人は異能の力が備わっている。両者ともに、超能力者であり化け物である。両者ともに利用し合い、両者ともに生き延びるために『仲間』をやってきた。

閑話休題。

嘉島たちの出会いの夏休みを終えた9月8日。暇を持て余して（いたかどうかは定かではないが）、街を歩いていた嘉島は運命を変える一人の少女と出会う。その日から嘉島の中で『仲間』というものの考えが変わった――　◇ほぼ毎日更新。　誤字脱字が多発している恐れあり。見つけたら報告お願いします。推理であり、バトルであり、人間ドラマ。笑いあり、涙あり、恋愛ありの青春感動作品である。はず◇

超能力者を相手取る、新感覚推理＆バトル！

企画　キャラクター投票　結果発表　オマケつき

一周年記念企画です。

こうして一年間も長々と作品を続けられたのも、読者様のおかげでございます。

何か企画をと思いまして、友達に聞くと
「キャラクター投票すれば？」
と言われたので、それをやらせていただきたいと思います。

ポイント方式をとらせていただきます。

自分の中でのベストスリーを感想ページにお願いします。

1位　5ポイント
2位　3ポイント
3位　1ポイント

とさせていただきます。
できるだけ多くの人に参加してほしいです。よろしくお願いします。

エントリーキャラクターは登場したキャラクター全員です。
結果はそのキャラクターに反映したいと思っています。

締切は12月中旬までにします。よろしくお願いします。

☆結果発表☆

感想ページに送るのが嫌だったのか、それともやり方の説明不足かどちかはわかりませんが、メッセージの方に何件か寄せられました。

総合結果発表します。

1位　嘉島奏明　３３票
2位　海馬　正　３０票
3位　王城隼人　２９票
　　虎郷火水　２９票
5位　常盤　雅　１５票
6位　楊瀬　通　３票
7位　東　諒　１票
　　一条字玲王　１票

うん、人気のあるキャラと人気のないキャラが完全に分かれてますね。

お礼を付けます。ありがとうございました。

＞i３７５２９―４７０７＜

嘉島奏明　illust：鈴瀬凛様

０１ー運命の日ー（前書き）

誤字脱字があるかも知れませんがよろしくお願いします。
この物語はフィクションです。

０１ー運命の日ー

「相変わらずだよな・・・・・・」
俺は思うところをぶちまけるようにそう呟いた。
秋が始まりを告げた、９月１日から１週間が経った、９月８日のことである。
夜――なんとなく夜が長くなった気がしたその日の夜に、特に何かするでもなく外の世界を眺める様な気分で居た。空の星やら月やらを適当に見ていた。
さて・・・・・・時間を守らなければ、あいつに鍵を閉められてしまうだろう・・・・・・。
今は何時だろうか。
そんな事を思って、街を少し足早に去って行こうとするサラリーマンの方へ向かう。急いでいる人である方がいいだろうとアイツが言っていた。そして、そのサラリーマンとすれ違う。

『１１時２２分…あーーー！電車間に合うかぁ！？』

サラリーマンは走って通り過ぎて行く。俺は、少し歩いて進むが、立ち止まる。
「あぁ…。１２時までに帰るなら、もう帰っとくかぁ…。」
そう呟いて、少し歩いて、街の中心街から広い道へと移動する。
途中には踏切があるが、電車が来る気配はない。
ここは、中心街のようなネオンもなく、それ故に人の姿もほとんどない。この世界をだらしなく生きて行こうしているチャラい（古いかな？）男女のカップルと、この世界の未練を思い出しているのだろう、熟年の夫婦。そのくらいだった。
そこまで「恋」というものに対してに興味のなかった俺は、どことなく不快だったので、さっさとその道を去りたかった。

だから、直ぐに角を左に曲がり、遠くに逃げようとしたが。

ドンッ！

少し焦っていたのか、同級生くらいの少女とぶつかった。

「痛ッ」

「あ、ゴメ―」

『明日……で……が起こる……』

頭に、言葉が流れ込む。かなりノイズが入っている。

「―ン」

暗くて表情はよくわからないが、髪は腰のところまである。男子としては、それが長いのかどうかわからない。その少女に右手を差し伸べる。

理由は2つ。1つは、その少女がぶつかった衝撃で、倒れてしまったからだ。

もう1つは――。

「結構よ」

少女はそう冷静に断ると、自然な動作で立ち上がり、そのままそそくさと歩いて行ってしまった。

「明日……何か起こる……！？」

少女が角を曲がった。少し遅い反応だったが、走りだす。もちろん間に合うと思っていた。

予想通り、すぐ目の前に、少女はいた。

踏切が下がっている。電車も、右方向２０ｍ（メートル）くらいの所に見えている。

そこに向かって少女は歩いていく。

「……セーフ」
心からそう思っていた。
しかし、その少女は何の躊躇(ちゅうちょ)も無く、踏切をくぐりぬけて行く。
「！！」
俺は走りだした。
間違いなく、逃げられる。

電車が目の前を通り過ぎる。
俺は少女の方向を見る。電車の連結との間で、彼女の姿が見える。
その姿は見え隠れしていてよくは見えなかった。しかし、どこか悲しそうにも感じる。
そして最後の電車の車両が通り過ぎた。もう彼女の姿は見えない。
中心街の方向に出たのなら、追いつく方法はないだろう。闇雲に探して見つかるようなところでもないだろうから。
もう周辺には、俺以外の姿はなかった。先ほどの老夫婦やカップルも居ない。
「・・・・・・どうしようか・・・・・・」
俺は、可能性を探すために自分のパーカーの肩のところを見た。
運よく、1本の髪の毛が引っ掛かっている。引っ掛かりやすかったのだろうか。
長さ的にはさっきの少女の物とみて間違いないだろう。本日この日は、学校の女子とも関わっていないはずだ。
その髪の毛を右手で取った。
『虎郷(こざと)　火水(ひすい)』
その髪の毛がそう告げた。
「まぁ…。明日もここにいるだろう」
そう思って、今しなければならないことを実行することにした。
11時40分。
ダッシュで帰らないと間に合わないだろう。
「あ～ぁ」

そう呟いて、夜の街を、走りだした。

家に入った。この家には、俺とあいつが住んでいる。まぁ正確には、家というより、単なる建物なのだが。故に、部屋は、かなり余っている。（その全貌については、乞うご期待）

鍵は開いていた。

１１時５６分という時間から、俺は絶対に危機的状況から誰かを救うヒーローにはなれないだろう。

しょうもなく、仕方がなく、しょぼいことを考えながら、俺は部屋のパソコンをつけた。

頭の中に何も無い真っ白な世界と、２人の人間の姿が見える。

『どもっす』

〔お、生きてたか〕

〔てっきり滅んだのかと〕

『どんな会話してたんですか・・・・・・』

〔気にしなくて良い・・・。些細な事だ〕

『お前の些細はまったく些細じゃねぇんだよ』

〔はい。喧嘩はしねぇの。管理者権限で消すぞ？〕

『そんな事はともかく、今日は、面白い人に会ったぜ』

〔面白い人・・・・・・。アクターか？〕

『多分なぁ。まぁ、どんな奴かもわからねぇさ』

〔・・・つーこたぁ、このギリギリ襲来もそれに関係してんだな？〕

『あぁ。おかげさまで、鍵は閉められなかったけど』

［ありがたいと思いたまえよ］

〔まぁともかく、明日はその件を2人で任せようか〕

『了解』［御意］

電源と同時に脳内が切れた。

いわゆる夢の世界への旅立ちである。

０１ー運命の日ー（後書き）

面白いと思っていただけた方は、評価をぜひ宜しくお願いします。
感想、ご意見等もお待ちしています。

０２ー冥福ー

次の日は金曜日だった。通っている学校は「榛谷(はりがい)第２中学校」。特に進学校ってわけでもないので、土曜日は学校は無い。

昨日の夜、１１時５６分に家に入った。門限には間に合ったので、あいつに鍵を閉められることは無かったが、既に寝ていたため昨夜の話はできなかった。

とか何とか言いながら、既に半分くらい昨日の話は忘れていた俺であった。

学校の始業の時間は８時４０分。今の時間は６時２２分。こんな早い時間に来たのは、やはり、あいつのせいだ。

「６時３０分に図書室に来たまえ」

・・・・・・面倒だ。

そう思ったつもりだが、呟いていたかもしれなかった。まぁ、そんなことはどうだっていい。

朝練に励んでいる、野球部とサッカー部の横を通り過ぎる。そして校内に入る。靴箱のところに、

クラスメイトの一人が立っていた。青色の髪の毛と、首につけている、手錠で作られたペンダントが目立つ。

海馬(かいば)・・・・・・・・正(ただし)だっけか？

もう９月だというのに、まだクラスメイトの名前をはっきりと覚えていないが、これに関しては、正解だろう。

「よぉ、海馬」

「ん・・・」

海馬は眠そうな顔をしている。相変わらずクールだ。

「あぁ、嘉島か。おはようだな」

そういって、ニヒルに笑ってから歩き始めた。

いつもは社交的なのに、１人で居る時はクールな表情を見せている。

うーん・・・・・・絡み辛い。
そう思いながら、3階の教室（数人の女子と、机に突っ伏した海馬がいる）に荷物を置く。そして、渡り廊下を越えて、図書室に入る。中には目立つ一人の少年以外いなかった。
「6時31分」
そいつは、眼鏡に金髪という、奇抜な男だった。金髪は地毛だから、何ら問題は無い（そもそも髪を染める事にも、別に問題は無い）。その金髪は、朝整えていないのか、寝癖がそのままのようなぼさぼさの　髪を形成している。
王城隼人様（ｗｗｗ）だ。
「いつも通りの1分遅れかい？適当な男だね」
机の上に立ち歩く。そして、俺の正面に立つと、俺の頭をつかんだ。
「相変わらず人を見下すんだな、隼人」
そういいながら、頭に置かれた手をはじく。
「ソウメイってのもやめろよ」
「君がそういう限り、やめないさ」
ひねくれ者め。
「で、何のようですか？隼人様」
「おいおい、怒ったのかい？悪かったね。謝るよ」
「単調にリズムよく、その馬鹿は言った」
「・・・・・・・・・」
ドライアイスのような眼をして、隼人はにらんできたが、そんな攻撃は俺には通用しない。
「で、何の用だ？」
「君の話を聞かせてもらえるか？」
「拒否権を発動」
「・・・・・君のことは良く分からないけれど、協力したくないって言うのかい？」
「悪ぃな。これに関しては少し思うところがあってな」

俺がそういうと、隼人はそのぼさぼさの髪をかきむしり、ずれた眼鏡を上げて
「そうかい。そこまで言うなら、初動は君に任せるよ」
と、机を飛び降りて、扉へと歩いていった。
「隼人」
俺は隼人を呼び止めた。
「なんだい？」
「でも、多分・・・・・・力を借りる」
「・・・・・・そうかい」
そして、後ろ手で扉を閉めた。
結局俺は、始業のチャイムが鳴るまで、考え続けていた。
俺は何をすべきか。彼女のために。

授業が終わった後、誰よりも早く学校を出た。
家に荷物を置いて、制服から私服に着替える。まあ、俺の服のセンスはどう突き詰めても、ジーンズとパーカーなわけなのだが。
昨日、彼女……虎郷（こざとひすい）火水と出会ったのは、中心街のほぼ南にあるところだった。
踏切は今は上がっている。とりあえず、このあたりで待ってみる事にした。
何かが起こるのを。
近くにあったベンチに腰を下ろす。
「今が１５時５０分くらいだから、昨日と同じ時間まで待ってみるか」
特に誰に言うでもなく、ふざけた調子で言った。
出来るだけ前向きな気持ちで、持ってきておいたお茶とポテチを食べ始める。

２１時３１分
「……あ」
寝ていたようだ。物は何も取られていない（というか取られるものはない）。
というか。
「…なんか騒がしいな」
向こう……東側にある、電車の駅で、何か騒ぎが起きている。
「……あんまり人が多いとこには行きたくねェけど」
俺はその方向に向かって歩き出した。

「何かあったんですか？」
近くにいた、女性に聞いてみる。
「あの娘（こ）よ」
「？」
駅の前で少女が何人かの男女と言い争っている。
「この電車に乗るのはやめなさい。一本後にするの」
少女の言葉に男が反応する。
「はぁ？何で！」
それを質問と受け止めたのか、少女は
「死ぬわよ」
と即答した。しかし
「いいから行こうよ。どうでもいいわよ、こんな奴」
一人の女が、言葉を無視して通る。
「待ちなさい。死にたいの？」
「あんた……頭、おかしいよ」
女はそう付け加えると、きゃはきゃはと笑った。
「待ちなさ―――」

俺はその少女の手を取った。

「……何よ。貴方」

その声が届く前に、別の思いが俺に届く。

「……！！電車が…！？」

「！！」

少女は、俺の手を振り切り、踏切の方に走る。

「くっそ……。お前ら、死にたくなかったら電車に乗るな！」

そして少女……虎郷　火水を追いかけた。

振りかえると、先程の塊は2、3人になっていた。

しかし、今はそれを気にしている場合じゃない。虎郷を追いかけなければ。

踏切の近くに彼女は立っていた。

「今すぐ、この踏切から離れなさい」

「あぁ？なんだよ……」

その辺にいた、男女をまた説得している。

あぁ……また、同じような事を……。

彼女の横に行って、

「いいから、さっさと離れろよ」

と俺も加勢した。

「あぁ？お前もかよ…。なんだ？喧嘩売ってんのか？」

男は手を伸ばす。

俺はその手を取って、

「谷村　京平：高校三年生　誕生日：3月22日　学校名：鹿原高校　趣味：後輩いびり」

その男の個人情報を呟く。

「……まだバラされたいか？」

俺の問いかけに、男は引きつった表情をうかべて、背を向けて逃げた。同時に、他の男女も逃げて行く。

「こんなところか」
「……あなた…一体？」
虎郷の言葉には耳を傾けない。
「あんた、物体浮遊（サイコキネシス）使えんだろ？」
「・・・・・・」
「アイツが言ってた。未来予知とかの能力の根源を持っているものは、思念（サイコキネシス）が使えるって」
「・・・・・・やってみる」

俺は地面を触れた。踏切の前のアスファルトが盛り上がって、壁を形成する。
そしてサイコキネシスでその上にベンチや樹木を置いて行く。
「まぁ……これが限界だな。俺の力も」
「あなたも……」
「あぁ。化物だよ」

そして2人そろって、電車を見た。踏切が降りてきているから、電車も発車するのだろう。

「俺達も離れるぞ」
「えぇ」
数人、俺達を見物していた人がいたようで、俺達が動くと目をそらした。俺達はそいつらの横に立った。
そして見送る事にした。
電車は、こちらに向かって進んできた。
そして、踏切に差し掛かった途端。

爆発した。

コミカルに言うなら「どかーん」と。
リアルに言うなら・・・・・俺の語彙では無理か。

俺達は、ご冥福をお祈りするとしよう。

忠告をきかなかった、彼らの。

03 ―俺たちというもの―

電車が爆発して、警察が直ぐにやってきた。
しかし俺達は、周りの人々が事件に驚いている間にさっさと逃げていた。
そして、中心街から離れて、三叉路に差し掛かったところで、
「ねぇ」
と、虎郷(こさと)がようやく話しかけてきた。
「あなた、こういう力のこと知ってるんでしょ？」
「あぁー……。やっぱその話だよな…」
俺は頭をかいて、
「こういうのは、名前や存在意義、過去とかにかかわる、人間意識と自然摂理の共鳴が引き起こす、連鎖　反応による能力で、いくつかに分かれる…って」
そこで虎郷を見ると、不思議そうに首をかしげていた。
「あぁ……そうだよな。しゃぁねーや。ついてきてくれ」
「？」
「いいから」
「……」
俺が歩きはじめると、黙ってついてきた。
「15分くらいかかるんだけど、大丈夫か？」
「別に構わないわ」
とか何とか言いつつ、物凄く不快な顔している。
「しゃーねぇ」
俺は、電話を手にして、番号を入力する。
3コール程して、つながった。
「うぃーっす。なんだー」

「東先輩。早急に来てくれ」
3秒。

一台の黒塗りの車がやってきた。
「来たぜ」
「……！」
虎郷は驚いている。
まぁ、連絡して数秒で来るような人間が居たら驚くよな。
「この人も、俺達と同じような奴さ」
「さっさと乗れよ。隼人とこだろ？」
「あぁ。さ、乗れよ」
「え……えぇ」
何と言うか、あなたには驚かされてばっかりね、と虎郷は続けて車に乗った。
「あんたも化物か？」
「……」
「ははっ。アンタは認めたくねぇ口かよ」
「その辺にしといてくれよ。デリケートな問題だろ」

俺は、東先輩をとめる。
「あいよ」
「そういや、昨日はWRにいなかったな」
「お前が来る前まではいたんだよ。っとついたぜ」
「……相変わらず早いな」
そう溜め息をついてから、
「降りてくれ」
と虎郷に言った。
「……あなた、さっきからなれなれしいわよ」
ジト目でそう言いながら降りる。俺も次いで降りる。

「助かったよ。東先輩」
「おう、これからもご贔屓(ひいき)に」
そういうと、爆走して去って行った。
俺の家は全体は白色になっていて、入口は1個だけ。しかし、これは過去に王城グループが作った、何人かが共同で住める家である。
まぁ、つまり家族で住むための家として想定されていたのだろう。
玄関のドアを開けて入り、リビングの扉を開けると

「やぁ、来たのか・・・・・・」

正面のソファーに、隼人は座っていた。首だけ後ろに向けてこちらを見ている。
「ああ、来客なのかい？」
そう言っている割に、机の上には俺と隼人と虎郷の3人分のカップが置かれていた。

「君が、例の彼女かい？」
「あぁ。虎郷(こざとひすい)　火水って名前だ」
「どうして、私の名前を……！！」
虎郷が目を丸くして、尋ねてきた。
「あ、いや。実は昨日、俺とお前ぶつかってんだよ。その時に聞いた」
「聞いた・・・・・？」
虎郷がそう反応すると、
「彼の力さ」
と隼人が答えた。
「嘉島(かしまかなあき)　奏明の能力さ。で、君はそういう「能力」を知りたいんだよな？」
見透かしたように、隼人は言った。
「……ええ」

「僕は王城（おうじょう）隼人（はやと）。じゃ、こういう力について話そうか」

「僕らは、こういう力の事を、『アクター』と呼んでいる」

隼人は俺のときと同じように話を始めた。

「『アクター』ってのは、例えば、物体浮遊（サイコキネシス）とか空間移動（テレポート）とかの超能力って呼ばれている物のことさ。元々は、もう一人の自分って意味で、『アバター』って言ってたんだけど、近代に異常が起こってね」

俺も聞いた事の無い話を隼人は思い出すような素振りも見せずに、つらつらと述べる。

「僕らの力に『電気使い』や『水使い』とかの現象っていう名の能力。そして、『レーザ』や『無限銃』とかの兵器っていう能力が生まれた。これらは、もう一人の自分には程遠い。だから僕らはこれを、『アクター』自分を演じているもう一人、という事にしたのさ」

「……」

「あぁ、もちろん便宜上だし・・・・それに、これらの能力が生まれたのはごく最近１９４５年以降・・・・・つまり戦争後だね。」

言った後、ペンと紙を取り出して続ける。

「組織図でいうと、

／スーパーナチュラル（超能力）

アクター　――　フェノメノン（現象）

＼ウェポン（兵器）

こんな感じなんだけど、こいつらの能力が起きる理由もあるんだよ」

「起きる理由？」
「お、いい反応だね。こちらとしても話しやすいよ」
隼人はそこで、一旦話を切るようにした。
隼人の交渉術に近い、話術のようなもの。
それの１つだ。

「これらが起きる理由として、現在分かっていることは、名前から生じる『ネーム』、存在・過去から生じる『ミラー』、突発的に生じる『アウトブレイク』って言うのが主流かな」
そう言って隼人は持っていたペンをゴミ箱に投げ捨てた。ゴミ箱のふちに当って、悲しい音を立てるが、気にせず隼人は続ける。

「名前から生じるってのは、もしも『天変地異』なんて名前の人がいたらそいつの能力は『自然災害（アースプロブレム）』になるだろう。存在や過去ってのは、まあ生まれてきた時に持っていたり、生きていた過程によってきまったりするのさ。まぁ、ソウメイ君みたいなパターンだよ。突発的ってのは、本当に、そういう能力を心の底から願ったら、出てくる能力さ。今すぐ消えたいって思ったら『透明人間（ステルスアーマー）』とかね」
「ちょっと待って」
虎郷は話の流れに、首を突っ込んできた。
「そんな事が起きたら、この世の中のほとんどの人が能力者…『アクター』ってことになるわよ」
虎郷がようやく質問らしい質問をする。それに、隼人は
「うん。そうだよ」
と答える。そして

「普通ならね」

と続けた。
「この世の中はそう簡単には廻らない。能力者は、この地球におい

て、そんなに多くはないんだよ。能力ってのは、できるだけ強い願いを持ったものしか居ないからね。でも、マンガから看過された日本人にはかなり多いのさ。だから、こうやって、この現場に既に3人もいるんだよ。結局、見えないところに何でもあって、見えなきゃそれはそれで解決する。嘘つきだったり、マジシャンだったり・・・・・・。そういう職業の中にだって隠れているかもしれない。」

と笑いながら答えた。

「そんな風にこの世界は丸く収まってんのさ」

隼人はそう締めくくった。

俺は虎郷の顔を見る。

納得しているように・・・・・・は、見えない。

「・・・・・・確かに、この能力とかのことも分かったし、自分の存在も理解した。でも」

虎郷は顔を上げて、

「では、あなたたちは『何』？」

と、睨んで聞いてきた。

『何』

そんな風に彼女の言ったことを心で反復した。

「僕らは何でもないよ」

隼人は虎郷の質問にそう答えると、そのまま続ける。

「能力の意味も意義も摂理も知らないくせに、その能力を自慢する奴らや、知っても暴れている馬鹿共でもないし、自殺してしまうような人々でもない」

実際そういう奴らも見てきたのだろう、言葉に力がこもっている。

「単純に、生まれたり願ったりした事で人生を直してもらった・・・

・・・その代償として、アクターとして演じ続けている。それ以外の点では普通の人間と一緒だと思うよ？」
そう続けた。そして今度は、
「で、君は一体何なのかな？」
と、虎郷に質問した。
虎郷は、特に動揺する様子もなく
「私には『未来予知』がある」
と答えた。
「人や物が壊れるような事件・事故が起こる場所に近づくと、そこで起こる事件・事故を予測できる。……というよりは、見えるって感じかしらね。最近は遠くの事件も予測でき始めたけれど」
それだけ。
と、虎郷は続けて隼人を見た。
その隼人は、上の電灯を見ている。いつもの癖だ。このときは、考えているということ。
そして5分程して
「『フューチャー・ライン』」
重々しく、隼人は言った。

０４ー つまらない世界ー

未来は変えられても、運命は変えられないらしい。

それは、＋の未来を－にしたとき、未来は「変わった」と言える。

しかし、未来が変わったというその事実が「運命」である。ということらしい。

だから未来を変えることに意味なんて無いのである。

それでも変えようとしているのだった。

彼女の言葉を、頭の中で反復する。

変わらない　未来なんて　つまらないから

俺と虎郷はまた、夜道を歩き始めた。

９月１０日（土）の真夜中０：００頃である。

「歩いていたら、彼女が何か、見るかもしれない。それ待とうよ」

そう、隼人は言って、俺たちより先に外に出た。一体何をしに行ったのか。

「早く行くわよ」

虎郷にそう急かされて、俺も遅れて外に出た。

結局、今は俺と虎郷の２人で歩いている。しかし、何故だろうか。

俺自身が、この２人組みをもし見たとしても、この２人がカップルだとは思えないだろう。

違和感。

それは、俺は感情というものに渇いていて、それを潤す気もないから。

そして、彼女にとって、俺という存在はただの道具に過ぎないからである。

特に何を話すでもなく、歩いていた。

ので。

とりあえず先ほどの話を回想することにした。

「『フューチャー・ライン』」

隼人は重々しく口を開いた。

「先ほど君が言ったとおり、君の能力は『未来予知』だ。そして、それは便宜上『フューチャー・ライン』と呼ばれている。こういう能力者は原型（オリジナル）だから、サイコキネシスが使えるね」

隼人は続けてそう言った。

「フューチャー・ライン？」
まぁ、当然の結果、虎郷は聞き返す。
それを待っていたように、隼人は答えた。
「未来に向かっていく道を見ること。という意味で未来を見る能力をそう呼ぶことにしたんだそうだ」
と隼人は言ってから、
「君は一体どんな未来を見てきたんだ？」
と唐突に質問した。
「答える必要は無いわ」
「あぁ。それもそうか。ソウメイ君」
「おう」
と。
俺は、彼女の手を取った。
流れ込む。

脳の中に。

「……銀行強盗、落盤事故、電車の脱線……本当に、事件や事故だけだな」
「！」
虎郷は俺の手を振りほどく。
「うぉ！」
俺の腕を下に向かって振りほどいたことによる衝撃で、俺は縦に1回転した。そして滞空状態にあった俺を彼女の右腕が的確に狙う。
「痛ェ！！」
俺は、隼人の横のソファーに激突した。
昔読んだ少年バトル漫画を思い出す。滞空中に攻撃を受けるのは何だかんだ初めてなような気がする。
「どうやら怒らせると怖そうだね。何か格闘技でもやってんのかな」
隼人は冷静に分析している。怖そうと言っている割に全然怖そう

に思ってないようだ。
「その辺は後で聞いてみるよ」
痛みを我慢しつつ体を起こすが、ソファーからは動きたくない。
ダメージは案外でかいのだよ。
「あなた・・・・・何？」
何　というのは相変わらず変わっていない。
そう、それでいい。俺たちは、何かなのだから。
「この力は嫌いだ。だから、言いたくはない」
「そ」
……淡白な女だった。

「で」
隼人が口を開く。
「君は、その事件・事故に関わったわけだ」
「えぇ。それらに関わった人たちを助けようとした」
「……『ようと』ってことは、つまり」
「そうよ。一度も成功したことはないわ」
隼人の言葉を遮るように、続きを虎郷が言った。
「んー・・・・・そもそも、願ったらなるようなタイプの力じゃないんだけれど・・・・・」
そう言って隼人は考えるような素振りを見せる。
演技のような白々しさも感じるが、本気で思っているようにも見える。
それから、隼人は笑って
「ちなみに、君の名前の漢字は？」
と、尋ねた。
「『虎』に故郷（ふるさと）の『郷』、火と水で『火水』で虎郷火水（こさとひすい）よ」
彼女は、そう言った。
「そうか。わかった」
どうも早々と分かっていたようで――つまり、先ほどのは演技に

近かったようだ――そう呟いた。
そして、重々しく隼人は口を開いた。
「『ファントム・ダーツ』」
と。

「どうやら珍しいタイプのようだよ」
「どういうことだ？」
隼人の発言に、彼女本人より先に質問する。
「彼女の能力は『フューチャー・ライン』の進化・・・・・・・というよりは、派生形に当る、『ファントム・ダーツ』だ」
隼人は笑った。
「君は『ネーム』だよ」
そう言ってまた笑った。
「『ファントム・ダーツ』は、悪い事件・事故限定で見る能力さ。そして、この能力を持った人には、ある程度の『意志』が存在する」
「意志？」
今度は虎郷だった。
「そもそも、『フューチャー・ライン』は、自分の得することに寄って行き、自分の不利益なところには、近づかないためにあるのさ。そういう自分勝手な能力なんだよ。でも君は、不利益なことに近づいていく。自分が危ないとわかっていながら、守ろうとする。だから、『フューチャーライン』は、『彼女は不利益なもの行く習性がある。なら、そちらに偏ればいい』という判断に変わって、『ファントム・ダーツ』に変わったのさ」
「待てよ、隼人」
俺は隼人に疑問をぶつける。
「そういうのは、まぁわかったけど。じゃあどうして『ネーム』に

なるんだ？そういう存在、性格ってことで、『ミラー』になるんじゃないのか？」
俺の質問に隼人は
「『こさと』だよ」
と簡潔に答えた。
「どういう意味？」
当の本人、虎郷が聞く。
「『こ【ざ】とへん』に火と水で『？』と『？』なんだけど、これは旧字体なのさ。これらは『陽』と『陰』という事。おそらく『陰陽師』だろう。『易者身の上知らず』って諺（ことわざ）は有名だけど、実は、ほぼ同じ意味で『陰陽師身の上知らず』って諺もあるんだよ」
「あー悪ィ。その『易者身の上知らず』ってのを知らないんだけど……」
「『易者身の上知らず』というのは『占い師は他人のことは占う事が出来ても、案外自分の事は知らないものだ』という意味よ。話に水を差さないで、黙ってなさい」
怖いなー。
隼人と何処となく似ているような気がする。
えーっと、つまり『虎郷』のというのは『こざとへん』のことを表していて、それに『火』と『水』が合わさる事で、『陰陽』の旧字体を現している。それが諺になっている。
ってことで大体合っているな。よし。

「つまり『未来を見る私自身が、自分の事を良く分かっていない』ということ？」
「いやいや、まだまだ君の名前には、秘密が隠れているよ。ネームの中でも多いほうだね・・・・・・」

「『虎の尾を踏む』だよ。危険な事をわざわざ行う、危険を冒すということ。そして、『郷』という字。『三つの郷』の『六行』にも

あるような性格が君には現れているようだ」
当然、俺が不思議そうな顔をしていると
隼人は
「後で自分で調べたまえ」
とため息をした。
「つまり、君の能力である『ファントム・ダーツ』は、君の名前から起こったんだよ」
隼人はそう言って締めくくった。
かと思うと、「それにしても」と続けた。

「ここまで言いえて妙な、名前は珍しいよ。この能力を手に入れるために生まれたといっても過言ではない。さらに君は、悪い出来事に首を突っ込む習性がある」
「・・・・・・・・・・・・」
「さっきも言った通り、そもそも、『未来予知』は、自分の得することに寄って行き、自分の不利益なところには、近づかないためにあるんだよ。そのために、アクターの原型としての『サイコキネシス』も使うことが出来る。それなのに、君は首を突っ込んだ。結局のところ、君の責任なのさ。結局一人も助けられないのに、人を助けようと努力する。無意味な事をするもんだよ、全く・・・・・・」

そして。

「自分の事も知らないで、勝手な事やるなよ」
隼人は、冷たく言った。
その発言にしばらく沈黙が流れたが、
「……つまらないから」
虎郷はそう呟いた。
「何が？」

・・・・・・隼人は聞いた。

「変らない未来なんてつまらないから」

彼女はもう一度。
しかし強く。
そう呟いた。
「こんな未来はあってはいけない。欲しくない。見たくない。だから私は何と言われようと、事件を止める。人を助ける。人が死ぬなんて……嫌だから」
そう言って、身を翻して玄関に向かった。
「ありがとう。私の力もよく分かったし、私がどうするべきかも分かったわ」
まぁ、あなたの言う通りにするつもりもないけど。
虎郷はそう続けると、リビングの扉に手をかけた。

０５ー気まぐれー

「気が変わった」
隼人はそう言った。
いや、それが誰かに言おうとしていたわけではないのだろう。その証拠に床に向かって言っている。
単に呟いただけである。

「気が変わったよ」
今度こそ、俺たちに向かってそう言った。
「そうだね・・・・・・新しい未来を見てもらって、それを解決しようか」
隼人は俺達に向かって提案するように言う。
「……助けてくれるの？」
虎郷は隼人を見て尋ねる。
その言葉に隼人は１度固まる。それから、
「……君は勘違いしているよ」
そう言って話を続けた。
「僕たちは、誰かを助けられると思ったらだめだよ。僕らは他の皆が努力しているというのに、アクターを利用する事で『逃げた』のだから。僕らは誰かを手伝うだけ。アクターである君を助けるのは普通の人々には出来ない。だから僕らが君に手を貸す。そして見届けるよ。君の『不運な世界』の創世を」
……おい。『僕ら』って…。
「もしかして、俺も手伝うのかよ」
「当たり前だろ」
当たり前なのか。
俺は危ない橋は渡りたくないんだけどな・・・・・。

「じゃあ、君らは、今からその辺を歩いて来てくれる？歩いていたら、彼女が何か、見るかもしれない。それ待とうよ」
そう言って、隼人は外へと颯爽と出て行った。

回想終了

「ねぇ」
虎郷が丁度話しかけてきた。
「何」
「彼も能力を持っているの？」
「あぁ。超能力さ」
「どんな能力なの？」
「あいつもあいつの能力は嫌ってるからなぁ……。本人から聞いてくれよ」
「そう」
ふむ。この淡白さから考えて、単に話し掛けただけという事か。単純に静かなのが嫌いなのかもしれない。
あ、いや、そもそも彼女の性格が淡白なのかもしれない。さっきもそうだったし。
「そう言えば、少し寄りたいところがあるのだけれど」
「いいよ。好きにどうぞ。君が好きなようにやってくれればいいんだから」
隼人も歩いていればどこでも良いって言ってたし。
「では、好きにさせてもらうわ」
と角を左に曲がった。
俺もついで曲がる。

「着いたわよ」
１０分ほど歩いて、高級マンションに着いた。
「こ…こんなとこに家族で住んでんのかよ…」
「違うわ」
「え？１人暮らしなのかよ……」
「はずれ」
「はぁ？」

最上２７階に彼女は住んでいるらしい。
ちなみに２７階というのは、屋上である。よって、エレベーターは２６階で止まった。そこからは、階段で上る。
そこに、物置という雰囲気（部屋は１つであろう）の家が存在していた。
「大家さんが知り合いでね。良い場所はないかって聞いたら、ここを家賃なしで貸してくれたわ。まぁ、もちろん事情に感情移入してくれたというのも、あるのだろうけれど」
「事情？」
俺の質問と同時にその家（部屋？）の扉が開いた。
「よ！……お？」
青年がいた。とても明るくそこに座っていた。
「今日は遅くなんじゃなかったのか？」
「少し用事があったのよ」
そう言って部屋をあさり始めた。
「ったく…。よぉ、少年。」
青年が話し始めた。
「えーっと…俺は、木好（きよしかずや）一也」

木好さんはそう言って右手を差し出した。
「俺は、嘉島奏明です」
俺は、その右手に手を差し出した。
[誕生日2月1日血液型A型年齢17・・・

その間に、虎郷はその部屋を出た。
「ったく・・・」
俺が、ため息混じりに言うと、
「・・・ところで嘉島って、あいつと知り合いなのか？」
と、木好さんが質問してきた。
軽く語尾が強調されている。思うところでもあるのだろうか？
「・・・いえ、おととい見かけて、昨日知り合ったばかりですよ」
日付変更に基づいた計算である。
「・・・へぇ。もしかして一目ぼれか？」
「まぁ、そんなところです」
あながち嘘ではない。彼女の「存在」には興味がある。
「木好さんもそうなんですか？」
「いいや。俺はあいつのただの幼馴染だ。ガキのころからの付き合いだよ」
「でしょうね」、だって聞いたから。心に。と、言えるわけも無いけど。
すると、もう一度扉が開いて、
「何をしているの？さっさとしなさい」
と虎郷は俺を手招きする。
「おう。では、またいずれ」
「じゃーな！」
そんな感じで別れを告げて、再会を約束した。

「何を話していたの？」
「最近のニュース。不景気だなぁって」

「彼は、テレビも新聞も読まないから、今が不景気というのも知らないはずよ」
「・・・・・・・・・」
なるほど。どんな人にも欠点があるわけか。
いや、反論だッ！
「でも外に出て仕事してりゃ、嫌でも知る事になるんじゃないか？」
「あなたのその言い分では、やっぱり、ニュースの話をしていたというわけでは無さそうね」
しまった！
こういうのは苦手なんだよな・・・。
「それに、彼はあの部屋で、携帯電話だけで仕事をしているわ」
「え？」
「電話で会社を経営しているの。彼は経営の手助けとして働いているのよ」
・・・・・・・・・凄い人のようだ。

その辺で、２６階のエレベーターの前に着いた。
と、同時に１人の女性を乗せて、エレベーターが到着した。
どうやら、２６階の住人らしく、すぐ隣の部屋に入るのを確認してからエレベーターに乗り込んだ。
虎郷は、エレベーターのボタンのすぐ目の前に、俺は鏡のすぐ目の前に立った。
そこで俺は
「なぁ」
と虎郷に話しかける。
「質問に答えるとは限らないわよ」
まだ何も言っていないのに釘を刺されてしまった。
その対応にちょっと、勢いを弱らせながらも
「・・・木好さんってお前の何？」
と訊いた。

「幼馴染よ」
「ふむ。食い違いはなしっと」
「私からも質問いいかしら？」
「答えるとは限らないぜ？」
「彼・・・王城隼人って、何者なの？」
何者・・・・・・か。
「あまり多くは語らないけど、これだけ言えば分かると信じるぜ」
「何かしら？」
「王城グループ・・・・・・知ってるだろ？」
「・・・・・・王城・・・・・・まさかとは思っていたのだけれど」
「そのまさかであってるよ」

そう。あいつ、隼人は王城グループの末裔にして御曹司にして跡取り息子だ。
あの髪型も髪質も、王だからこそ全く気にせず、先生も文句は言えないのである。
しかし、彼は自分の存在を認めようとしない。
それは彼が本来の家に住んでいないことからも証明できる。
彼は、自分が王城グループを継ぐ事を認めていない。
確かその理由は・・・・・・あ。

「そうか！」
思わずそう叫んでいた。
「どうかしたの？」
「あ、いや・・・・・・」
「？」
虎郷は何か言おうとして、口を開いたがすぐに開くのをやめて俺の隣に来た。肩がぶつかり合うくらいに。
何だこれは！いつの間にか俺はフラグを立てていたのか！？

などという嘘は放っておいて、驚いたのは事実だった。
しかし、そんな疑問もすぐに払拭された。
エレベーターが、『チーン』というベルのような音を立てて、？のマークで止まった。
なるほど・・・・・人が来るのが分かったから、こちらに寄ってきただけってことか。

しばらくして、黒いパーカーを着て、サングラスをした男が乗ってきた。
・・・・・不審者だなぁ
そんな見かけだけの判断をした後、そのまま黙って1階に到着するのを待った。
その時、虎郷が震えているのに気づいた。
そこまで寒いわけでもないから、寒さに震えているというわけでもなさそうだ。
それに、目も閉じているし顔色も悪い。
つまりは多分・・・・・。

『チーン』
？のマークに到着した。
彼女が動こうとしないので、俺はその手をとって連れて行く。
男は、そのままエレベーターで上がっていった。

俺は、マンションの敷地内から出ると、
「お前、あいつ知ってるのか？」
と尋ねた。
「・・・・・・・・・」
「おい！」
「！」

ようやく目を開けて、俺を見る。
「な・・・何？」
落ち着きは取り戻したようだが、顔色は悪いままだ。
「さっきの男・・・・・・知り合いなのか？」
「いいえ。全く知らないわ」
「本当か？」
「ええ。何なら、確かめれば？あなたなら出来るでしょう？」
どうやら、俺の能力を分かってきたようだ。
「・・・そうさせてもらう」
彼女の手を取った。
［火：ロックを確認しました。解除コードの確認後、もう一度お願い致します］
バチィッ！！
火花が散って、俺たちの手は強制的に離された。
「「！？」」
もちろん2人同時に驚く。
例の声が聞こえたのは俺だけだが。
「そうか・・・・・・」
「何があったの？」
「いや。お前が本当に知らないってことが分かったよ」
強制的に心の奥底に封じ込まれているか、あるいは、完全に隠し切っているということか・・・。
この場合は前者だろうな。

考えるのは苦手だから、後で隼人に相談するか。
「・・・・・・・・来た！」
虎郷がそう叫んだ。
「何が？」
「見えてきた・・・・・・・」
「！！」

俺は、その手を掴(つか)んだ。

視界が吸い込まれていく。

東先輩、俺、虎郷が、車でどこかに向かっている。
俺は携帯電話を耳にして、何か叫んでいる。
虎郷は、さっきのように震えている。
東先輩は、険悪な表情でハンドルを握っていた。

どこかに到着した。そこには、隼人が立っていて、何かを見上げている。
それは俺には、蝋燭(ろうそく)に見える。周りから溶けた「ろう」のように、何かが少しずつ落ちてきている。
それを見て、隼人は冷静に見上げて、俺は愕然として見たいた。
そして、彼女・・・・・・・・・虎郷は泣き崩れた。

視界が渦巻状になって、もとの視界に戻った。

「何だ・・・・・・・これ」
「・・・・・・・いつもこんな感じよ。こんな感じに不鮮明な状態から場所を割り出すの」
「・・・じゃあ、どこなんだ？」
「今回ばかりはね・・・。あなたが手を掴んだせいで、どうやら情報が半分くらいになったようだから」
「・・・そうか」
俺は、手を離して、携帯電話を手に取った。

『何だい？』
「あいつが見たぞ」
『そうか、じゃあ迎えの者を呼ぶから』
ガチャッ！
一方的に電話を切ったがすぐに、１つのキャンピングカーが目前にきた。
「乗れ」
・・・東先輩だった。
「迎えのものねぇ・・・」
「おう」
後ろの扉が開いた。

「さぁ。さっさと乗りなよ」
隼人はそう言って笑った。

０６ー蝋燭ー（前書き）

何でも最後に（笑）ってつけりゃいいんだよ。

明日は晴れかな（笑）？あいつは元気かな（笑）？
テストが近いぜ（笑）！景気が悪いぜ（笑）！
地球が滅ぶぜ（笑）！
とか何とか言って
全く笑えないよねぇ（笑）

06 ―蝋燭―

「な・る・ほ・ど」
と、隼人は俺達の話を聞いてそう言った。

キャンピングカーで、俺たちの見た未来を話を聞いての感想だった。
「それにしても、貴重な体験だよ。『フューチャー・ライン』のアクターがどんな感じに未来を見ているのかが分かるだなんて。いいねぇ。君の能力は」
隼人は俺に向かってそう言った。
「そんなことは、どうだっていいんだよ。さっさと、お前の調査結果を発表しろよ」
「は？調査ぁ？」
と、間抜けな声で隼人は答えた。
「……ん？」
俺は、聞く。
「ん」
隼人は答える。
「…何の調査もしてないのか？」
「うん」
「じゃあ何してたんだ？」
「ツイッター」
「……」
こいつは・・・・・・・・・・・・！！
「で、どこか分かったの？」
「うん？」
「場所よ。私たちが見た場所。分かったの？」
「うん」

「どこよ」
虎郷がそういうが、隼人は答えずに、指を1本突き立てた。
「少し考えてみたまえ。頭を冷やしてね」
そして、
「じゃあ、僕はこれで」
と言って、キャンピングカーから降りた。
次いで俺も降りる。

「何か用かい？」
「え？いや、ついて行くだけだけど」
「ダメだよ」
・・・なんでだよ。今までいつも一緒だったじゃないか！！
とかいう悲観の叫びは無い。
「どうしてだ？」
「彼女のサポートを君には続けてもらう」
そういって、
「彼女の能力には、君のサポートが必要だ」
と続けた。
「ファントム・ダーツが生まれるような原因は、彼女の心に問題があるはずだ。それを見つけるためには、ロックを解除する事になるだろうから・・・君の力が必要なんだ」
「・・・・・・・・・ロックなら見つけたぜ。解除コードのキーは『火』だ」
「！・・・・」

ロックとは――

人が無意識に心の奥底に隠している事、全力で隠さなければならない事。

そして、その人の心を開けるための『キー』が俺には聞こえるのだ。
しかし、能力に見合ってないのか、俺には『キー』を使って心を開く事ができない。
『キー』に密接に関わっている既成事実『解除コード』を、推理しなければならない。
それを、俺の代わりに隼人がやっている。
彼の天才的能力なら、『キー』だけで『解除コード』を推理できるのだ。
まあ。
つまり俺がバカなのが悪いのだが。

「そうかい。ＯＫ。じゃあこちらの手の内も見せよう」
と、携帯電話を開くと、
[虎郷火水（こざとひすい）に関する記述]
以下、文字数が１００００近くあるので、表記を断念する。
「・・・・・・・・何だこれ」
「ツイッターと僕の家にある書物とか、後は東先輩に手伝ってもらったり」
俺は、そのまま携帯を返す。
「見ないのかい？」
「見たところで、俺にはわからないよ」
そういって、俺はキャンピングカーに身を翻した。
「にしても、平和主義かつ、人道支援大嫌いなお前が、人に協力するとはな」
「・・・君とか、東先輩とか、今日元さんに感化されたのかもね」
「本当にそうか？」
「・・・・・・・・」
その反応に、俺は笑って、
「俺も推理力は無くも無いみたいだな」

「うるさいよ。それ以上は、侮辱と看做して攻撃に移る」
「はいはい」
「あと、これからどこかへ行く必要がないなら図書館に行っておいで。あそこは、僕が開けてもらえるように、今日元さんに頼んでおいたから」
「おう」

そして、ここで隼人と別れて、俺はもう一度キャンピングカーに乗った。
「どうだ？」
という俺と同時に
「どうかした？」
という虎郷の声がした。
「「いや、別に」」
今度も同時に答えた。
「東先輩、図書館へ直行してくれ」
「図書館？」
虎郷が疑問を口にした。
「隼人がそう言うんだからいいんだよ」
「けどよぉ、流石に図書館も閉まってるだろう」
と、東先輩が車の時計を指差しながら言った。針は数字の１で重なっている。
つまり、９月１０日の１時５分ということか。
「大丈夫。今日元さんが鍵を開けとくってさ」
「今日元・・・・・・？」
とても不快そうな顔で東先輩がそう言った。
「チッ！いつも自分勝手に！」
そして、ハンドルを握ると、爆走し始めた。
「３分で着く！」

「了解」

「ねぇ」
「何だ？」
「あなたたちの仲間って何人いるの？」
虎郷がそう言うと、東先輩は
「仲間？俺たちは仲間なんかじゃないぜ！少なからず嘉島はな！」
とイラツキで口調を変化させたまま言う。
「・・・どういうこと？」
「そいつは、俺も今日元も隼人も、さらに言えばお前のことも仲間にするつもりは思うぜ？」
・・・・・・・・・・。
俺は沈黙を守る。
「・・・私は、あなたたちを利用しているに過ぎないから、責めるつもりは全く無いけれど・・・・・・どうして？」
「・・・・・・・・・・俺は・・・」
・・・・・・・。
「詳しくは話せないけど、俺もお前と同じだよ」
「？」
「この人達を利用してる。あわよくば、お前もな」
「・・・・・・・そう」
淡白な女だった。いや、感情が少ないということなのだろうか。
すると東先輩が、
「まぁ、俺たちも似たようなもんさ。お互いがお互いの目的のために、利用しあってる。でも、嘉島以外の俺たちは少なからずお互いを仲間だという意識はある」
そして、
「でも、俺も今日元も隼人もお前さえ良ければいつだって仲間だと

思えるんだぜ？お前が勝手に落ち込んで、皆を守ろうとしているだけだろ」
と続けて、車は急ブレーキで止まった。
「着いたぜ。とっとと降りろ」

キャンピングカーから降りて、すぐに東先輩は車と共にどこかへ爆走していった。
それを確認してから、虎郷の待つ図書館内へと入った。

「さて、ここで何しろってのかな？」
俺がそういう疑問を持っている中、彼女は「地域」のコーナーへ。
「おい何して」
「彼の趣旨は、きっと私たち自身に見た場所を確認させようという魂胆ね」
と、俺の言葉を遮ってそう言いながら、地域の写真アルバムを取り出した。
「ここ最近の建物から探してみようかしら？」
「・・・そうだな」
しかし・・・こいつと隼人は、物事の視点が同じのようだ。

・・・・・・・・・・３０分程経過しただろうか。
「無いな」
「無いわね」
地域の写真には、無かった。俺はともかく、彼女も無いと言って

いるのだから大丈夫だろう。
いや、大丈夫ではないのか。
「建設物から探してみるか？」
「そんな・・・・・・不動産屋じゃないのよ？そんなものがあるはず無いわ」
俺は、物件情報の本を取り出した。
「ここは、王城グループ管轄の図書館だぜ？」
「・・・・・・そうだったわね」
少し溜め息交じりに彼女はそう言った。

南区、東区、西区、北区、中央区。の５つ。
「どこにする？」
「俺は、東にするかな」
「じゃあ、私が東にするわ」
東区のファイルを取った。
「・・・・・・・・・・」
俺は黙って、西区にファイルを取った。
北区、南区、中央区のファイルは、そこに置いたままにしておいた。

「ところで、あの未来見たとき、どう思った？」
唐突にそう聞かれた。
「どうって？」
「どう思った？」
尚もそう聞いてくる。
「・・・・・・・・・んー」
少し考えた後、
「東先輩があそこまで険しい表情していたところから考えても、少し難題だったか・・・あるいは、焦らす要素がとても近くにあったか・・・・・・。なんだかんだであの人、とっても優しいんだよ」

「・・・・・・・・・」
「あと、お前がさっきみたいに震えてたな」
「・・・・・・さっき？」
「え？あ、あぁ。あの黒いパーカー来た人にすれ違った時・・・・・・・・・・！！」
彼女の顔が青ざめていく。
ヤバイ！また震え始める！
「大丈夫だ！」
思わず叫んだ。

どうやら彼女の場合、隠している内容はトラウマのようなもののようだ。思い出しそうになると、拒絶反応が起こるようだ。そして、記憶を無くす。

俺は、彼女の正面から、隣の椅子へと移動した。
「・・・・・・・・・落ち着いたか？」
「・・・ええ」
しかも、自分が何故取り乱していたのかも、分からず、しかし、取り乱していたこと自体は、覚えている。そんな様子だった。
重症だな・・・。

「お前はどうだったんだ？」
「何が？」
「あの映像だよ」
「あぁ・・・」
あごをつまんで、少し考えると
「あの建物は、見たことがあるような気がする。懐かしいような・・・そんな感じ」
そう言った。

「笑顔」で。

「そうか」
よくよく考えると、こいつの笑顔は初めて見るな。
「あなたはどうなの？」
「ん？」
あぁ、そうか記憶はないのか。
しかし、さっきの禁断の言葉をいうわけにもいかない。
「あ」
「どうしたの？」
「あの、燃えている建物だけどさ」
「？」
「蝋燭（ろうそく）に見えた」
「ろうそく？」
「そう、蝋燭」
周りから落ちる、建物の欠片とかも・・・・・・。
「ろう・・・・・・そく・・・・」
な！また、禁断症状か？
と思ったが、そうではなかった。
彼女は本棚から、中央区の本を取り出した。
そして、そのまま床で、あるページを開いた。
俺はそれを見て、
「これだ！！」
と、思わず叫んだ。
「・・・・・・やっぱり」
「何で？」
「・・・私もあなたと同じように、これを見たとき思ったのよ。蝋燭みたいだって」
そういいながら。

彼女はまた震え始める。
しかし、さっきとは違う。
「どうかしたのか」
「その写真の建物・・・・・・」
「？」
高級マンションで、２６階建て。屋上は、１つの小屋がある。

「こいつは！！！」
「そう、私の家」
「！！」
俺は、携帯を取り出して。
俺たちは、同時に走り始めた。
「東先輩！」
『おう！』
以心伝心とは、とても便利である。
仲間じゃないけど。

図書館を出たと同時に、黒塗りの車が、後部座席のドアを開けたまま来た。
「乗れ！」

「すぐに、さっきのとこまで！」
「3分だ！」
「2分で！！」
虎郷は、震えている。
『ＰＲＰＲＰＲＰＲＰＲ』
携帯電話がなり始めた。
「隼人？どうした？」

「・・・蝋燭だよ」
「！！」
それはつまり、
「もう燃えているのか！？」
「！！」
俺の声に、虎郷の震えが勢いを増す。

その時だった。
窓の外。
「蝋燭・・・！」
マンションの最上階から、下３つまでが、燃えている。

俺たちは車から降りて、すぐにその蝋燭を見上げた。
「隼人！」
「・・・・・・僕が来た時には、既にこうなっていたよ」
「・・・・くっそ！」

屋上の小屋は、どうなったのだろう。
あそこには、虎郷の思い出と、大切な人がいたはずなのに。
そう思っていた矢先に。

１番上から、何か落ちてくる。
それは紛れも無く、炎の中にあった。
彼女の部屋で、家であり、帰る場所だった。
それが。
今。

僕たちの。

目の。

前で。

落ち「あああああああ

０６ー蝋燭ー（後書き）

夢って自由だよね。

交通事故で死んだ彼女が、やさしく笑いかけたり

０７ー捜査ー（前書き）

人はいつ死ぬのでしょうか。
命が消失したときか。心臓が止まったときか。未来に絶望したときか。
死を覚悟したときか。人に忘れられたときか。
逆なのです。
人は生まれたときから死んでいて。
神様に命を返却したときに。
『生きた』が生まれるのです。
それが死ぬときです。いや。
『死んだ』が生まれるのです。

07ー捜査ー

役目を果たしたその建物に、救急車と警察。そして、もはや何の役にも立たない消防車がやってきてから1時間ほど経った。
隼人が、東先輩の車から出てきた。
「・・・・・・虎郷は？」
「車の中で休ませてる。東先輩が看病してるから、心配は無いよ」
「そうか」
そう言いながら、俺たちは小屋を見る。

あの後、彼女は倒れてしまった。このままでは、救急車に乗せられてしまうので、東さんの車に乗せて休ませている。
ちなみに僕たちは、マンションの近くにいたが、野次馬ということで、救急車には、乗せられなかったが、マンションの方々は全員、救急車と事情聴取のため警察へと運ばれてていった。
木好さんも同様に。
焼け焦げた死体が運ばれていった。

「ときに、ソウメイ君」
「何？」
「木好一也という人間の人格について知りたい」
「あぁ、そうか。会ったことは無いんだっけか」
俺は、少し考えてから、
「まぁ、気さくな性格で虎郷から聞いた話だと、外には出ないらしいよ」
と報告した。
「何か問題は無かったかい？」
「？いや、性格はよさそうだったし、それに顔立ちもよかったから、

人とは問題を起こしそうでもないよ」
あ、でも外には出ないのか。
そんな事を考えていると
「そういうことじゃないよ」
と、まるで「的外れだよ」というように言った。
「え？」
「彼の手も取ったのだろう？」
「あ・・・！」
そういえば。
「・・・・・・危険・・・・・・」

「彼の手に触れた時、最後に［危険］って声が聞こえたんだ！」
「・・・もしかすると、彼は身の危険を感じてたのかもしれないね」
そういうと、彼は小屋のほうに向かって歩き始めた。

警察に向かって
「王城隼人です。早急にココを捜査させていただきたいのですが」
と言うだけで、警察官たちは立ち退いていった。

最後に残った、警部が話しかけてきた。
「よぉ、頭脳探偵」
「どうもです。龍兵衛さん」
彼は各務原龍兵衛（かかみがはらりゅうべえ）警部。見た目は２０才前後だが、年齢は４３才だ。
隼人と俺を１人前の探偵と見てくれているようで、何とも恐縮である。
「出火原因は、分かってるんですか？」
まずは、隼人が質問した。
「いいや。まだだ」
「そうですか。では、解剖の結果が出たら教えてください」

「おう」
そういって、ドアを閉めて去っていった。
「さて、捜査を始めようか」
手袋をしてそう言った。
俺も同じように手袋をはめたが、俺はそこに立っているだけだ。
「・・・・・・・・何かが燃える時って、1番長く炎があった所が焦げ付くはずなんだよ。もちろん例外もあるけど」
「どういうことだ？」
「つまり、1番黒ずんでいる所が出火した所って事さ」
「・・・でも、そんなことで分かるなら、出火原因もわかっているはずだろ？
龍兵衛さんは、出火原因は分からないって言ってたろう？だったら・・・」
「そうとも限らないぜ・・・。火元は分かったけど、原因は分からないってことだろう」
「そんなこと・・・」
ないだろ。
そういうつもりだった。

「ほら」
「ん？」
出火元は分かった。でも、それは刑事ドラマでよく見る、白いテープで囲まれていた。
「・・・死体！？」
黒いところは、死体を囲むテープの中にあった。
「そ。つまり死体から出火したんだよ」
「・・・・待てよ・・・。てことは！」
「冴えてるねぇ。その通り。これは何者かが木好さんを燃やしたん

だ」
「つまり、この火事には犯人がいるってことだな」
俺がそう確認を取ると、隼人は「ニッ」という効果音が付きそうな笑顔をした。
「あとさぁ」
と続けて言った。
「君もヒスイ君も、彼は外に出て行ってないって言ってたよね？」
ヒスイ？あぁ、虎郷火水か。
「あぁ。そうだけど？」
「それは、ヒスイ君の勘違いだね」
「え！？」
「これ」
と指差した。近くには警察の方が置いたと思われる『6』の黄色い札があった。
そこには、ティッシュの燃えカスと思われるものがあった。
にしてもあれだけ燃えてよく残ってるもんだな。
「これがどうかしたのか？」
「近くにビニール袋みたいな者とその中に携帯の広告が入っているはずだ」
「はぁ？」
確かに入ってるけど・・・・・？
「これが何？」
「それは、昨日の真夜中に爆発した電車の駅前だけで、その日に配られていたティッシュだよ」
「え・・・？」
あの事件か・・・。
「だとしたら虎郷が持って帰ったんじゃないのか？」
「彼女にそんな余裕があったと思うか」
今度は厳しい口調で言った。
「だから、これは昨日、彼が駅前に居たこと・・・つまりは、彼が

何者かが爆弾を仕掛けるのを見てた可能性があるってことだ」
「てことは、この事件と爆弾事件は同一犯・・・」
「である可能性が高いだろう」

「これからどうするんだ？」
「まずは、僕のネットワークで情報収集だね」
「そうか。じゃあ俺は、情報回収といこうか」
「情報回収か。いいネーミングだね」
そういって隼人は立ち去ろうとした。
「あ、そうだった」
俺は隼人を引き止める。
「あの、虎郷のキーの事だけどさ、完全に分かるまでは解除しないほうがいいかも知んないぜ？」
「？どうしてだい？」
俺はパーカーの男の話と、彼女にはそれに関する何らかのトラウマがあることを話した。
「・・・なるほど。とても苦しい思い出なんだろうね」
「ああ。だからあんまり追究しないように」
「残念だけど、彼女の解除コードは、ほとんど分かっている」
・・・・・・マジすか。
「それにしても、おかしいな。住人の中に黒いパーカーの人なんて居なかったけど・・・」
「パーカーくらい脱ぐんじゃねぇか？」
「今は、ちょうど寒くなってきた時期だよ？部屋に居ても寒いけど、暖房器具を導入するほどでもない。そんな時期だから、部屋でも暖かい格好をしてると思うけど」
「・・・・・・確かに」
だが。
例えそうだとしても。
「だとしたら、どうだっていうんだよ」

「・・・・・その人、エレベーター降りてドッチに言った？」
と、道路を指をさした。
「いいや、あの人は降りずに上がっていったよ」
俺はそう言って、上を指差す。建物自体は無いけれど。
すると隼人は固まって、ロボットのように首を回して俺を見た。
「・・・・・・マジかよ・・・・・・じゃあ犯人そいつじゃん」
「え？」
「この家では、近所付き合いはほとんど存在しないんだそうだよ」
「だから？」
「・・・つまり！」
察しの悪い俺に対して怒るように言った。
「近所付き合いがないってことはエレベーターは、下までの道順に過ぎない。なのに途中から乗り込んで、上に上がるって事は、そこに何らかの理由があるからだろう」
・・・・・・・そうか。
確かに近所付き合いが無いとしたら、エレベーターは帰ってきたときで無い限り、下まで降りるのにしか使わない。
途中から乗り込んで上に向かうということは、そこより上の階に用事があったということになるのか。
「そういう・・・ことか・・・」

さっき言ったとおりに、俺と隼人は別れて捜査を再開した。
「・・・さて」
俺は右手の手袋を取り、壁に手を当てた。

［2人の男が居る。どちらかが叫ぶ。
『あんたが例の爆弾しかけたんだろ？俺は見てた！！』
すると、もう一人が言う。

『・・・だから？』
『俺には金が必要なんだ。一緒に住んでる女のために！』
『・・・ゆすりか。フン』
冷静な男が殴った。
『悪いなぁ。お前はココで最後を迎えろ！』
倒れ込んだ男に・・・・火が点いた。」

！！
なるほど。
若干複雑なようだ。
「木好さんは、虎郷のためにゆすりを働いた・・・・・・ということなのか？」
これ聞いたら、また虎郷は狂い始めるんだろうなぁ。
「はぁ・・・・」

次はティッシュに触れてみる事にした。
「木好さんがティッシュを受け取って、電車の方向を向いた」
・・・・え？
「これだけかよ！」
あんまり役には立たなかった。

しかし・・・大丈夫。木好さんの恨みも、虎郷の敵も隼人が解決してくれると信じていた。
信じていた。
物語が狂った方向に進むとは思っていなかったのだが。

０８ー利用価値と死体ー

とりあえずは、あの人を紹介しよう。
今まで、自然な流れで出てきた、今日元さんのことだ。

今日元終。
東諒――つまり東先輩と同級生にして、殺人犯として、死刑が確定していた高校生である。
高校生にも死刑が執行されるような時代の出来事だと考えてくれればいい。
ともかく、そんなこんなで俺は警察署に面会に来ていた。
理由は主に２つ。
１つは警察署に居れば１００％隼人が現れるから。もう１つは、警察署で待っていれば解剖結果が受け取れるから。まあハッキリ言ってその間暇だからココに来ているわけだ。

「暇つぶし扱いでこの俺を頼るとは、偉くなったんだな」
「いえいえ。そんなわけないでしょう。暇つぶしなんかでココには来ませんよ」
てか、別に頼ってきたわけじゃないけど。
「事のついでだろう？」
「ハイ」
「正直だな」

ちなみに彼女の罪は冤罪である。夏休みにその犯人を見つけ出したが、その犯人が何者かによって殺害された。それによって、彼女の冤罪を証明できる者もいなくなったが多くの人間がその犯人の存在を認識しているため、彼女の免罪は分かっているが、上からの命令で彼女を解放しようとしない。

だそうだ。

「んで？何のようだ？」

「お礼ですよ。図書館の件で」

「あぁ。いいよ。そんな感謝される事じゃない。助けたとも思ってないよ。なんて言うと隼人は『その通りです。僕らは誰かを助けたりできません。』とか言うんだろうな」

「ですね・・・。あ、それであなたも色々と警察内の情報には詳しいと思うので聞きにきました」

「・・・前々から、言ってるけど敬語はやめろよ・・・。東には2人ともため口のくせに」

「いえいえ。隼人がしている方針に俺は従うだけですから」

そういう受け答えをした後、彼女は口を開いた。

「署内の電子機器とか監視カメラとかを利用して収集した情報だ。回収って言うのか？お前では」

「それは置いといて」

「死体だが、焼け方が不自然なようだ。まぁ、俺も詳しくは、知らないけど。死体を見た感じだと、1箇所だけ集中的に焼け焦げているような感じでは無く、まるで炎が分散されたように一気に燃えた感じだな」

「一気に？ガソリンでもぶちまけて燃やしたんですかね？」

「あるいは、粉塵爆発とかでもやってのけたか・・・」

「あ、でも」

俺はそう言って、今日元さんの話を区切った。

「俺は見たし、聞きましたけど、何か道具を持っていた感じではありませんでした」

「てことは、能力者かもな」

「やっぱりですか」

何か当たり前のように話しているのが不思議だが。

やはり、ここで話を整理しておこう（理解できている方が多いと思うが）。
俺たちはアクターだ。隼人、東先輩、今日元さん、俺（それぞれの能力の説明はいつかあるだろう）はそれぞれの目的がある。それを叶えるために俺たちはそれぞれを利用している。

「利用価値だろうな」
「？」
「俺たちには、お互いを利用する事に意義があることを知っている」
「そう・・・ですね」
「俺たちはれっきとした仲間だからな」
「・・・・・・・・・」
「いつも言ってるけど、俺たちは仲間でいいんだ。お前が受け止めてくれるのを、俺たちは待ってる」
「・・・・・・・・・今日、同じことを東先輩に言われましたよ」
「・・・そうか」
「やっぱり、息ぴったりですね」
「そうだな。あいつは嫌ってるけど」
「俺と隼人みたいなもんですね」
「・・・そうだな」

面会を終了し、早速、龍兵衛さんの元に向かった。
「お」
予想通り、そこに隼人が居た。
「やはり、ここに居ればお前も来たか」

「ふむ。君にも学習能力はあったようだな」
「酷い物言いだ！」
なければ、テストなんかボロボロだよ！！
ちなみに隼人はトップ。俺は上の中ってところだ。
ばらしてしまえば、隼人の能力はいわば「天才」だから、当然で。
俺は自分の能力で解いている（にもかかわらず、満点でない）ので、あまり正攻法とは言えない。

「おらよ。仏さんの司法解剖結果だ」
無造作に封筒を投げつけた。
「外部には出せねえから、ココで覚えてけよ。探偵ども」
「分かってますよ」

隼人はその封筒から紙を取り出して、すぐに読み始めた。
そして、３０秒と立たないうちに読み終えて、龍兵衛さんに返した。
「死体を見せてください」
「いいだろう」
そういって、安置室に入っていった。
本来ならただの部外者だが。王城の名と俺たちの功績と、信頼関係が結果を生んだのだろう。

「不自然だ」
「死体か？」
「うん」
「もしかして、例の死体の燃え方のことか？」
「その通り。よく気づいたね・・・って、あぁ。もしかして、今日元さんに聞いたのかい？」
「まあな」

「ということは、アレが能力である事にも」
「当然気づいている」
「流石僕の師匠だね」
「勝手なことを言うな」
まだキャラ設定が、皆様にご理解頂けていない以上は、それで定着するようなことは避けたいのである。
実際にはそんな事実は無いのでご安心ください。

俺は2度目の再会を果たすはずだった。
「またいずれ」そう言った俺に「じゃーな！」と答えた。
俺は、再会を約束したのだと思っていた。いや、今でもそう思っている。しかし、もしかしたらアレは、本来の意味は「じゃーな」というのは、本来の意味での「さよなら」だったのかもしれなかった。或いは、その両方。
だって俺は今、その両方を経験しているのだから。
彼とは事件での『人』として別れ。
そして、今、木好さんかどうかも分からない『それ』と対面しているのだから。
「こいつが死体だよ」
そう言って見せてくれた。
「ふむ」
「・・・はぁ」
隼人は冷静に、俺はため息をついて、その原型をとどめないものを見た。
「・・・お前は、よく冷静に見えるな。ホント普通の中学生じゃねぇよ」
「当たり前だ。僕は王城の名を持つ、頂点に立つべき人間だからね」
隼人は俺の皮肉をさらりと受け流す。

「まぁ、これを見て吐かない情報探偵も普通ではないが」
龍兵衛さんは俺にそう皮肉を言って、その部屋の隅から話を続けた。
「仏さんの名前は、証言を元に木好一也と認定したが、前科はもちろん、そいつの個人情報はほとんど無かった。分かっているのは、虎郷火水という少女の幼馴染という事実だけだ」
これについてはまだ、裏づけは済んでいないがな。と、龍兵衛さんは締めくくった。
「その情報に関してはまだ調べていませんね、後で確認しましょう」
「・・・で、他に何かありませんか？」
自慢話のように言う隼人の言葉は全面的に無視して俺は尋ねた。
「1つ分かっているのは、例の建物から出た2つの指紋のうち、1つがその仏と一致した。焼け焦げていて、検出は難しいかと思っていたがな。そして、例の列車爆破の指紋とそのもう1つの指紋が一致した」
「やっぱりか」
俺がそういうと、隼人が
「情報回収の成果かい？」
と聞いてきた。俺は黙ってうなずく。
「・・・・・いつも何をしているのかは知らんが、それで成果が上がるのはいいということにしておこう」
と、龍兵衛さんは不満そうながらも言った。
「で、ここでわざわざ隠しても読者の皆さんも気づいているだろうから」
「お前は何目線だ」
「ある可能性を示唆しておくべきだろう。この死体が木好さんじゃない可能性だ」
俺の発言を無視した挙句、とんでもないことをぶちまけた。
「まじかよ・・・」
「いや、それは無い」

同時に、俺と龍兵衛さんが言った。
「・・・どうしてですか？」
「自分の推理を否定されて怒る気持ちは分からないでもないが、頭脳探偵。それはないんだよ」
「だから、どうしてですか？」
「死体の腕の時計はどうやら耐熱に強い新型だったようで、全く燃えていなかった。その腕時計に指紋が検出された」
と言って、俺を見る。え？俺？
「その情報探偵だ」
「！？」
隼人が驚く。
「まさか、お前がパーカーの男の腕時計に触るチャンスがあったとも思えん。ならば、可能性の高いのは木好という男のほうだろう。手首側に指紋があったことからも、大方握手でもしたんじゃないか？」
「・・・あぁ」
ここでもし俺の指紋でなければ『彼がパーカーの男の腕時計に触っていないなんて言い切れない』とか言うかもしれない。
しかし俺ならその男の真意――つまり、事件を起こそうとしていることに気づく事ができてしまうため、こんな事件すら起きていない。
うむ。流石の隼人もここまでのようだ。食い下がる事はできない。
「・・・そうですね。なるほど」
隼人は、悔しそうな表情を浮かべていた。
「では、そろそろ退散するとしようか」
「え・・・あぁ」
俺はしどろもどろになりながらも、退散する事に同意した。
「では、僕はこれで」
「俺も失礼させていただきます」
「おう。また困った事でもあったら、いつでも言ってくれ」

「さて、これからしばらくは、大筋一緒に行動する事になる」
「そうか。合同捜査か」
「でも、割とすぐに解散して捜査する事になりそうだ」
「そうか。俺が所轄だな」
冗談を交えてから、俺達は解散した。

こうして、木好さんとは3度目のお別れを果たした。
ちなみに2度目のお別れは世界とのお別れという意味合いである。

「では、解除コードの入力を果たそうか」
「え！？分かってたのか？」
「まあね。もうほとんど分かってるって言ったろうに」
「あぁ・・・そうだったな」

俺たちは、東先輩の車に乗り込み、虎郷のキーを解除しようしていた。

のだが。

そこにあったのは――いや、何も無かったのだ。

東先輩は車のそばで、彼の愛車に背中を預けて

頭から血を流して倒れていた。

「「東先輩！！」」
俺と隼人は同時に叫んだ。
「どうしたんだ！東先輩」
「大丈夫、呼吸はしているようだよ」
そして、隼人は携帯を取り出して救急車を呼んだ。そして、龍兵衛さんも。
「一体なんで・・・！？」
気絶しているその体に向かって俺は問いかけ――
「急げ」
俺の思考の最中にその声は聞こえた。
「・・・急げ・・・。嘉島・・・・・・隼人」
東先輩は、俺の方をつかんでそう言った。とても力強く。頭を殴られているとは思えないほど。
「東先輩！！」
俺は叫んだ。
「虎郷を・・・追え・・・」
「誰が連れ去ったんだい？」
隼人が近寄って質問した。
「わからん・・・。が、・・・虎郷が危ない・・・急げ・・・追え・・・」
「どういうことだよ！！」
「俺には・・・・何もわからない。が・・・嘉島・・・」
そして、より一層力強く俺をつかんで
「絶対に・・・助けろ・・・」
「俺にも、わかんねーよ！！」

「・・・・・・隼人が・・・いるだろう」
そして、
「仲間・・・なら・・・で・・・きるさ・・・」
「東先輩！！」
力がだんだん弱くなる。弱くなって・・・消えていく。
「か・・・んがえ・・・ろ」
そして、腕はぶらりと垂れ下がった。

「東ぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「大丈夫。気絶しただけだよ」

・・・いやいや知ってるよ。寝息が聞こえるもん。
でもさぁ！！叫んだ、俺の立場は！？
とか、そんな事を思いつつも、冷静さを取り戻す。

「・・・虎郷を助ける」
「言われずとも。僕にとっては彼女ももう仲間だから」
「・・・そうか」
「君も、君さえ受け入れれば仲間なんだよ？」
「・・・一日で三回もその言葉を聞くとはな」
「・・・今日元さんと東先輩か・・・」
「・・・さて、悪いけど、俺はもう一度別行動を取る」
「同意見だ」

こうして救急車と警察がきてから別れることにして、俺は龍兵衛さんと一緒に警察署へ行った。

さぁ、物語終盤をむかえてもまだ、今は９月１０日（土）１４時なのであった。

０９－狂いだす歯車－

「死体に触る・・・？」
「はい」
「そんな事は、絶対に許されない」
「だからこうしてお願いしています」
「・・・・・・・・俺の権限じゃ無理だ」
「触れば真相が見えるんです」

警察署内までの車での走行中での話だった。
俺は、すぐにでも解決の必要があった。
だから、「木好さんに虎郷の心当たりを聞いてみる」と隼人に言った。
彼も「それで事件は解決するね」といって別れたのだ。
そして、俺はパトカー内で龍兵衛さんに頭を下げた。
「死体に触れさせて下さい」
と。

「だいだい、そんな事してなんになるって言うんだ」
「それは・・・」
「とにかくそんな事は無理だ。もしばれたら、俺の人生に支障をきたす」
「隼人の功績を盾に上に掛け合うことはできませんか？」
「無理だろうな」
「・・・・・・・・・では、手柄は全て龍兵衛さんの物にするというのはどうでしょう？」
「・・・・・・・・・・・・」
あ、ゆれてる。今が畳み掛けるチャンスだな。
俺は隼人に連絡した。

答えは

『いいよー。僕らの手柄なんだし、それをどうしようと一緒さ。僕も君が確かめればその考えに合点がいくしね』

「てことは、虎郷がどこにいるか分かっているのか？」

ツー・・・ツー・・・ツー・・・。

返事しろよ。

「今、隼人の許可を得ました」

「・・・いいだろう。乗ろう」

「ありがとうございます」

安置室に入った。俺と龍兵衛さんはその死体に出会った。３度目の出会いを果たしたのであった。

「・・・触れたら何が分かるってんだよ」

「心配しないで下さい」

右手で、彼に触れた。

「そんな・・・」
全てを見た俺の最初の言葉は驚きだった。
「どうかしたのか？」
そんな龍兵衛さんの問いかけに、俺は答えず、
「すみません。ありがとうございました。約束は守るのでご心配なく」
早口でそう言って走る。

俺は携帯を手にして、署の外に出た。
「隼人！！」
『真相にはたどり着けたか？』
「・・・あぁ」
『じゃぁ、僕は引き続き彼女を捜索するよ』
「分かってなかったのか・・・」
『分かったなんて言ってないよ』
「じゃあ、見つけたらお互い報告で」
『了解』

その後、すぐの事だった。
虎郷を見つけた。例の図書館だった。
「虎郷！」
「・・・・・・・・・ソウメイ君」
「何してんだよ・・・！」
俺は、食いかかっていくような勢いだった。客観的に見てそう思う。
「・・・・・・・・犯人が分かってしまったの」
「俺も犯人が誰かは気づいている」
「・・・今から犯人に会いに行く」
「止めるつもりは無いさ。だけど俺も同行する」
「・・・そう」
冷静に、淡白にそう答えた。
「じゃあ、今から隼人に連絡するから」
「分かったわ」
俺は携帯電話を取り出し、
電話番号を押して、
発信ボタンを押して、

ドガ！

そして、俺の意識は消えていく。
その時に、俺が気付いた事は、２つ。

東先輩を殴った犯人は虎郷だったのか、ということ。１人で行動するためには東先輩が邪魔だったのだ。

もう１つは、彼女は本来淡白な性格ではないのではないか？という疑問。
犯人に対しての自分の感情を抑え切れていない。
それが怒りなのか恨みなのか――いや。

そんなはずが無い。
そんな簡単なものじゃない。犯人に対しての彼女の感情は。
だって、彼女は木好さんを本気で愛していたのだから。

１０ー目線を変えてこその世界ー（前書き）

今回犯人の正体が分かりますぜ。

っとぉ、ちょいまちな。旦那も気がみじけぇや。

犯人を考えてからやったほうが面白いですぜ。

以上を棒読みでお楽しみください。

１０ー目線を変えてこその世界ー

俺の気絶時間は、午後７時。図書館が閉まる時間だった。

＝＝

私は、真実を知っていた。

東さんという――なんとなく一也に似ていたような気がする――人に、頼んで１度外に出た。

私は私で犯人を知りたかったから。

でもその時

私は出会った。

犯行現場で。

犯人と。

そして、手紙をポケットに入れられた。

犯人が部屋から出るのを見てから急いでその手紙を読んだ。

『お前ならすぐ来るだろうと予測していた。監視の目をかいくぐって、１７時までに図書館に来い』

だから、私はその部屋にあった灰皿を持って。

車の前で待っていた東さんを。

殴った。

すると割とすぐに王城君と嘉島君がやってきた。

このまま、やり過ごすと言うのも手ではあったが敢えてこの場所から離れると言う方法を選んだ。

が、東さんが私のことをばらさないという可能性も無くは無い。

だから私はそこで聞き耳を立てると言う方法に出た。

しかし、彼は私を犯人だとは言わずに、彼らに助けるように命令していた。

さらに、王城君は私を仲間だと言ってくれた。

その後、彼らは分かれて捜査を始めていた。

嘉島君は警察の人とどこかに行ったから警察署。

だとすれば、私の場所がばれる事は無いはず。

まだあと3時間もあるが、早めに行くとしよう。

そう思っていた。

しかし、私が図書館に着いた15時に、先客があった。

王城君だ。

彼はおそらく気づいたのだろう。

東さんを殴ったのが私だということも、図書館に私が現れるということも。

犯人の正体も。

このまま出会うのは危険すぎる。

私はとりあえずそこを離れた。

とりあえずは、人の多いところに行って身を隠す事を選んだ。
が、その時に妙な感覚に襲われた。

自分の動きが遅くなる・・・いや、自分以外の全てのスピードが上がっている。
ドラマやアニメでたまに出てくるシーンのように。

となると、やはり自分以外にも、同じ時間にいる人間がいた。
黒いパーカーを着て、周りより遅いスピードで歩いてきた。
そして、私のポケットに手紙を入れた。
・・・・・・その時に。
私は犯人の顔を見た。
横顔だったけれど、それで充分だった。

その男が完全に視界から消えてから、振り返った。

世界は元に戻っていた。私も、世界も同じ時間を共有し始めた。

『あの男は危険だ。１９時に変更する。裏口のドアの左から2番目の窓を開けておく』
手紙にはそう書かれていた。

そして、図書館に入ろうとして、私は見つかってしまった。
嘉島君に。

だから、私は彼を殴った。

腕には自信があったから、３０分くらいなら気絶させる事くらいは出来る。
そう思っていた。

オチからいってしまえば、私の誤算は、彼の力量を見誤り、執念で最後の最後に発信ボタンを押していたことに気がつかなかったことだろう。

＝＝＝

そんな効果音で、手から炎が燃え上がり始めた。
「！！」
「まぁ、図書館にお前を呼んだのもこんな理由なんだが」
そうか。
図書館は本というとても燃えやすい物が置いてある。
「私を・・・殺す気だったの」
「ああ。いい加減我慢ならないからな」
「・・・どういうこと？」
「それを知っておく必要は無い」
「・・・そう」

結局こんな能力でも、
不幸な未来が見えても、
命は助けられない。
自分の命すらも・・・助けられない。

その男は、本棚に向かって炎を放つ。
簡単に燃え移る。

そして、左手を今度は私に向けた。
「じゃあな」
「そう・・・残念」

・・・心残りは、この近くに居て嘉島君が死なずに入られるのだろうか。
燃える時には、意識を取り戻してくれるだろうか・・・。
その時は隼人君と一緒に、犯人を見つけ出して、
そして私の心を助けてほしい。一也の心も救ってほしい。

そんな風に思った。

私は、左手から炎が出てくるのを見「よっと」
私の視界は、急激な移動を始めた。
天井に向かって強制移動された。

＝＝＝

「約束どおりだな。木好さん」

というわけで、俺と木好さんは約束どおりの「またいずれ」を果たしたのであった。

１０ー目線を変えてこその世界ー（後書き）

まぁ、そんな感じで、微妙ですが。

次回の話に期待大。

でもまって、じゃ今回どうすんだい。

１１ー怒りの敵と遅刻のヒーロー、時々気取った語り部でお楽しみください ー

サブタイトル長ッッッ！！！

11ー怒りの敵と遅刻のヒーロー、時々気取った語り部でお楽しみください ー

「・・・で」
木好さんは左手をそのまま構える。

「どうするつもりなんだ？」
「いやぁ・・・どうするも何も」
俺は虎郷をお姫様抱っこのまま（「離しなさい」と虎郷は言っているが無視である）立ち上がり逃げる。
「させるか」
本棚の炎が弾けるように、他の本棚に向かって燃え移る。

「燃やした炎も動かせるのか・・・」
「・・・っかしーよな？」
急に木好さんはそう言い出した。
「何が？」
自然、犯人である木好に対して敬語は使っていない。
「普通こういうの見たら驚くだろ？虎郷がそういうのだってのは、昔聞いたけど」
「あぁ・・・。俺も同類だからな」
おかしいのはお互いさまだろう。
そう続けようとした時だった。
「そうか・・・」
左手の炎がより一層燃え上がった。
「・・・俺たちだけじゃないのか。俺と虎郷だけの物じゃないのか」
「・・・？」
「俺たちは運命じゃないのか」
「・・・！！」
東先輩は姿を消した。

そういえば、バトルマンガで見たことがある。
腕からの炎の推進力で高速移動する・・・とか。
なるほど。こういうことか。
「・・・グッ・・・」
消えた木好さんは、俺の目の前に現れたかと思うと俺に激痛を置いて離れていった。
あ。違った。俺が飛んでっているんだ（ついでに虎郷も）。
攻撃はどうやら俺の腹部に当ったようだな。
俺から器用に離れてった虎郷は、見事に着地した。
俺は不恰好ながらも地面に一度転げてから、腹をかばった状態でしゃがみ、臨戦態勢を取った。
「痛ぇな」
「そうでもなさそうだな」
木好さんはまた消える。
そして、俺の目の前に現れた。そして今度は右手で俺をつかみ、
「消えろ」
そういって、左手を向けた。
「できれば、きれいな死体がいいんですが？」
「無理だな」
俺は、左手を右肘で外側にそらせる。
自然、炎の方向はそれる。
その隙に俺は左足で木好さんの腹部を蹴り飛ばした。
「ぐぁッ！」
地味ながらも怯んだ木好さんをつかんだままの右手をつかみ返して、投げ飛ばす。
「よっしゃ！」
俺は、追撃を仕掛けようと試みた。

しかし
「！？」
また消えた。
そうか、地に足が着く必要性は無いのか。
そう思ったときには、もう殴られていた。
右手で俺をつかんで。左手・・・燃える左手で。
「いいこと思いついたよ。虎郷。俺を裏切ったらどうなるか教えてやるよ」
「どういうこと！？」
「知る必要はないんだよ！！」
燃え盛る左手で俺の腹部を連打しながら木好さんは言う。

「・・・・・・・！！」
拳の熱さと周囲の熱さと攻撃の痛みが見事なハーモニーを醸(かも)し出していて
その素晴らしさに驚き声も出ないというわけだなこれが。
冗談を言うぐらいしか余裕はハッキリいって無い。ていうか思っているだけである。

そして、木好さんは俺を投げ捨て、
「燃え尽きろ！！」
そう言って左手を構えた。
「やめて！！」
虎郷は木好さんの左腕につかまり、邪魔をする。
「のけよ！！」
それを振りほどいて、もう一度俺に炎を向ける。あ。
「ヒーロー気取りもこれで終わりだなぁ。嘉島奏明！」

「俺はヒーローじゃない。司会進行で語り部だ」
「何言ってんだボケ！！」
左手の炎の勢いが上がる。なるほど。怒りで火力が上がるのか。
怒りの炎という感じか。

おい、
時間稼ぎしてんだから、

見てないで（・・・・・）助けろよ。
あ、助けないんだっけ？

「だってヒーローは」
俺は木好さんに言う。

ドガッシャ！！
木好さんが視界の左へと消えていった。
炎の推進力ではないだろう。
「その通り。だってヒーローは遅れてやってくるんだから」
「なんだ・・・お前」
本棚に体がめり込んだ木好さんは、こちらを睨んで聞いてきた。

「頂点に立つ王の称号を持つヒーロー・・・」
右手を銃の形にして木好さんに向けた。
「王城隼人、以後宜しく」
そして、俺たちを見て彼の決め台詞。最後の最後しか言ってくれない言葉。

「さて、助けに来たよ。ソウメイ君、ヒスイ君」

１１ー怒りの敵と遅刻のヒーロー、時々気取った語り部でお楽しみください ー

名前とかすごいのいたよ。

一って書いて「にのまえ」だってさ。二の前だから、一なんだと。

１２ー真相は『愛』ー（前書き）

恋愛感情は感じた事はあっても、人と付き合うってのは良く分からない。

なんか、付き合ったことある奴を、見ると基本的に分かれていったような
気がする。

んん・・・。一概に恋愛は、いいともいえないのかな？

12ー真相は『愛』ー

「・・・ちょっと遅かったかな？」
「嘘付け。お前そこで見てたろうが」
あまり大声で叫ぶ余裕も無いので取り合えず睨む。

「まぁ、気にしない方針で」
そう言って隼人は茶化して、木好さんを睨む。
その木好さんは立ち上がって、
「でお前は何なんだ？」
と睨み返してきた。
「ヒーロー」
真っ直ぐに隼人は言葉を返す。
「ふざけんなぁ！！」
と今にも飛びつきそうな勢いの木好さんに向かって、
「ロックオン、キーは『炎』」
隼人は言った。
意表をつかれた木好さんは驚きと疑問を掛け合わせたような何ともいえない顔をしている。

「キングダム。解除コードは『家の火事』」
言った瞬間だった。

空気が変わる。彼の能力『シンキング・キング』の真髄『キングダム』である。
能力の内容を説明しようと思う。今現在の場合、俺と隼人と虎郷と木好さん以外の人・物はこの世界に干渉しない。
原理的に言うと、隼人の王としての『威圧感』が、他の何かを感じられないようにしているらしい。

炎の熱さを感じたり、本棚の存在を目が認識する事も無い。

イメージとしては真黒な世界に、緑色で方眼用紙のような線が、壁と床に引かれているイメージだ。

「これは・・・何？」

虎郷が驚いている。

「俺の能力の１つの『キーポイント』つって、人の無意識に隠していることや、絶対に隠し通そうとする心を見破る能力だ。普通に隠しているくらいには簡単に気づけるけど、まあ無意識に隠しているのを見破る時に使うんだよ」

俺は、自然に立ち上がる。

「・・・大丈夫なの？」

「この世界では痛覚も無視できるからな」

「・・・続けてくれる？」

「ん？あぁ。で、それで嘘があるのを見破るためには、解除コードって言って、まぁいわゆる『キーワード』だよな。本当は俺がやるっきゃないんだけど・・・・・・能力に見合ってないくらいに俺は馬鹿だ」

「そうね」

「否定しろよ！！」

「いいから、続けなさい」

「・・・・・・・・んで、隼人の能力は『最高の天才的な知能』なんだ。その力とこの空間『キングダム』を使えば簡単に終わるんだよ」

俺はそこで終わらせたつもりだったのに、その後

「だから僕とソウメイ君は名探偵コンビなんだよ」

隼人が勝手にそう言った。

「さて、始めるよ。虎郷」

「え・・・？」
「パーカーの男のこと、思い出してごらん」
「・・・・・・・・・！！」
虎郷が拒絶反応を始める。
「無駄だ」
木好さんがそう言って笑う。
「そいつは、過去の事は完全に忘れている」
そう続けて、余裕ぶって高笑いを始めた。

「・・・！！」
「虎郷！！」
俺が止めに入ろうとした。
「止めるな！！」
隼人が叫ぶ。さらに
「思い出せ！キーワードは『炎』だ！！」
「忘れるな！！あの日だ！！2年前！中学校に入りたての頃だ！！」
「君の家が燃えて、あの男が現れた日だ！！」
畳み掛けるように、虎郷に向かって叫び続ける。
「！！」
急に虎郷の震えが止まった。
「解除コード『家の火事』だ」
ココからが真実である。しかと耳に入れるように。

「まずは、この事件は2年前から始まっていた。彼女が忘れているのはその事件のことなんだけど、その事件は今回のような放火だったんだ」
「放火？」
「彼女の家が燃やされたのさ」
「燃やされた・・・。まさか、木好さんか！！」
木好さんは、すこしドヤ顔。

「ん？あぁ。うん。でもそんなことはどうでもいいのさ」
木好さんは、少しイラツキ。
「もちろん、犯人は捕まらなかったんだ。その事件で、両親共に亡くなってしまった」
家族のいない苦しみは重いもんだよね。
と、少し違う内容を繋げて隼人は木好さんを睨んだ。
「君にはわからないんだろうね」
「あぁ。わからん」
木好さんは嫌な笑顔で答えた。
俺は思わず殴りかかろうかと思った。おそらく隼人も。両親が死んだ虎郷も。
でも、隼人が作ったこの状況を崩すわけにはいかない。

「・・・さて、続けようか。彼女が、そうして両親の死んだ苦しみを感じていた時、中学校のやさしい先輩、木好さんが現れた。でもおかしいんだよ」
そう言って、不謹慎にも彼は笑う。
「彼女の周りに居た人は『木好一也』なんて人間知らないんだ」
「・・・・・・どういうこと？」
虎郷が聞いた。そりゃそうだ。幼馴染の存在を知らないなんてありえない。
「だから、幼馴染じゃないんだよ。君たちは」
「！！」
木好さんが顔色を変えた。
それはつまり・・・・・・。

「木好さんは、ヒスイ君の不安定な心の前に現れたんだ。人は心が不安定になると記憶に錯誤が起こるんだよ。まぁ、滅多にないケースだけどね」
「・・・って、事件を起こしたのは木好さんだろう。それなのに不

安定な心の虎郷に優しい言葉をかけたってことなのか？」
「それは、動機が分かれば分かる事さ」
「その動機は？」
「で、その2年後、次の事件がおきたんだよ」
「・・・・・・」
ためてまで言いたいのか。全く困った相棒だ。
「その事件っていうのが、列車の爆破」
「・・・・え？」
またも、虎郷の驚きだった。

「あの事件は、今回の事件と密接に関わっていたんだ」
「ああ。それは俺も見たからな」
「じゃあ、ちょっとその話をしてみてよ」
「ん？いや、木好さんが男に、電車の爆破を起こしたのはお前だろって言って、女のために金が必要だってゆすって、それで燃やされて・・・・・ん？」
あれ、どういうことだ？
木好さんが、男に燃やされたんだとしたら、木好さんはココには居ない。
でも逆の立場なら木好さんは電車の爆破を起こした事になる。
あ、確か木好さんは電車の爆破の近くに行っ・・・て・・・た・・・。

気付いた。
「木好さんが、爆破犯だ」
俺は、冷静ではないがハッキリとそう言った。

「その通りだよ。俺は、家でゆったりしてると見せかけて、金のた

めに裏でいろんなことをしてるんだ」
木好さんが答えた。
さっきのような、睨んでいるような感じではなく、俺たちに興味を抱いている感じだ。
「面白いな、お前ら。ただの探偵ごっこのガキ共だと思っていたよ」
「侵害だね。僕は王の称号を持つ男だよ」
本当にふてくされるように言う。
「まぁ話が脱線する前に戻しとこうか。これはソウメイ君の能力で分かったことだけど、ゆすってきたのは、今では死体になってしまった、ヒスイ君に過去を思い出させた、名前も分からないパーカーの男なんだよ」
ゆするという愚かな行為に対して怒っているんだろう。厳しい言い方である。
「そして、その男を燃やして、今こうなったってわけさ」
「・・・」
だまったまま、木好さんは拍手した。
「で、終わりじゃないよな？」
「一つ解明されてないわね」
「動機だな」
木好さん、虎郷、俺の順番である。
「動機はね。この事件が起きた真相と密接に関係しているんだよ」
そして、隼人は両手を胸に当てた。

「真相は『愛』だったんだよ」
「お見事だ」
もう一度そう言った隼人に木好さんは感嘆の声を上げた。

「俺は虎郷が好きだった」
「！！」
虎郷は驚く。
「虎郷もそうであったと思っていた。でも、俺と虎郷には、親とかそういう邪魔があった。だったら、それらを燃やしたいと思った。そのとき俺はこうなった」
「・・・何で？」
虎郷は――――
眼に涙をためていた。
「そんなことしなくても・・・・・・伝わっていたのに・・・」
「・・・そうかもしれないけど、でも、俺は心配だったんだよ。いつか、恋愛感情なんてものは消えてしまうんじゃないかって。現に今、お前は俺に恋愛感情は抱いていないだろう？」
「・・・・・・・・・・・」
「俺はな、お前の親を殺して、お前とたった一つの存在になれたと思った。その時に、お前の能力も知って、お前と運命なんだと思った。でも、」
そこで、一度区切って、俺を見る。
「嘉島とか、そこのヒーローとか・・・お前は俺以外の男とも関係を持ち始めた。それに悩んで、嘉島を殺そうと思ったときだった。あの男が現れて思いついたんだ」
そして、木好さんも、眼を潤ませていった。
「俺が死んだ事になって、お前を殺せばお前は、一生俺の物になるんじゃないかって」

歪んだ愛情。
それが、今回の事件の引き金で、今回の事件の悪夢だったんだろう。
しかし、まだだ。
これからが本番なのだ。

１３ー助ける意味ー（前書き）

僕が、お気に入りにしている『蛇豆』さんの作品は、
何というか、現実的なフィクションという感じです。
とても、おもしろいので是非是非閲覧してみてください。
あ、１話１話が、とてつもなく短いです。

以上、榊乃幽也ぷれぜんつ、ＣＭでした。

１３ー助ける意味ー

「で、これからどうするつもりだ？」
木好さんは、潤んだ瞳を袖でぬぐってから、左手を構えてそう言った。
「俺はお前らを殺して生きて見せるぜ」
左手は炎を纏う。
なるほど、一気に燃やすより、殴って動けなくしてから燃やそうと言う事らしい。
「あ、ダメだ。もうキングダムは終わる」
「あぁ、そうなのか」
「基本的には推理するだけのものだから。思考能力と相手との対話をしやすくするためのものさ。周りの時間も止まってるわけじゃないしね。後１０分もすれば図書館は崩れ落ちるだろう。あ、嘉島君は倒れといたほうがいいよ。痛覚も復活するから」
「・・・了解」
いつもの事だが、
なんというか、古傷がないから良く分からないけど、「古傷が痛む」みたいな感覚になるのだ。
「戻れ」
パチンッという音を指パッチンで鳴らして、
世界はそれを合図に戻った。
瞬(まばた)きしたら、世界が戻っていたという認識でいいだろう。
「・・・いてぇ・・・」
俺は、またも動けなくなった。
虎郷は泣きじゃくって顔を伏せて座り込んでいる。
「ぶっ殺すぞ」
「僕は見た目以上に強いよ」

言ってから1秒と立たず、衝突となった。
木好さんは消えて、隼人の前に現れて右拳で鳩尾(みぞおち)を狙ってきた。
隼人はその拳を両方の二の腕で挟むという方法でガードする。
「すげぇなぁ・・・。瞬間移動すらも、見極める『脳』なのか？」
「いやいや・・・。お褒めに預かり光栄ですが、僕のは脳の伝達速度が速いというだけですから。反射神経の伝達速度の問題ですよ。
「へぇ・・・。面白いな！！」
木好さんは、炎を纏った左腕を構えた。そして、思い切りその手を振りかぶった。
「ヤバイな」
二の腕を離した。
が、今度は木好さんの右手が、隼人の右の二の腕を掴む。
「燃えろ！！」
左手の炎が纏う状態から、発射する状態に変わる。
「拒否」
掴まれた状態で、体のみを反って避ける。
「今のも脳神経か？」
「勘だよ」
隼人は、体を戻す反動で、木好さんの顔面に頭突きという手法をとる。
「ぐッ！！」
「もう一回！」
今度は、二の腕を掴んでいる木好さんの右手の肘を膝で外側に折る（ひざかっくんの肘バージョン）。
その所為で一気に縮まった距離を利用してもう一度頭突きをする。
それで、木好さんの右手は離れた。
「それも、能力ってか・・・？」
苦しそうにそう言った。
「『頭脳』力です」
「うぜぇ！！」

炎を纏った左腕で隼人の腹を狙う。
「何度やっても同じ・・・」
消える。ギリギリで手首を内側に曲げて炎を発射して消えた。
「後ろだ」
反応速度はもちろん間に合うはずが無い。
木好さんの左手は、背中にヒットした。服が燃える。皮膚が焼け爛れている。
一瞬でここまでとは、火力は本当にやばいな。
「・・・まだまだぁ！」
「そうこないとな！！」

「なぁ」
俺は倒れたまま虎郷に話しかけた。
「……」
「何で隼人はお前を助けるんだと思う？」
「……」
虎郷は黙ったままだけど俺は構わず続ける。
「アイツはお前と一緒で決まった未来ってのが気に入らないんだ」
「……」
「アイツは王城グループの跡取りとして・・・王としての教育を受け、風格を持ち、頭脳を手に入れた」
「・・・・・・・・」
「でも、アイツは王城グループを継ごうとはしない。何故だか分かるか？」
当然、返事するはずも無い。
「アイツは、お前と一緒だったのさ。決まりきった未来なんかつまらないって。アイツは、基本的に誰かに協力したり、助けたりする事は無い。でも、アイツが誰かを助けるっていうのなら、それはつ

まり、ソイツを仲間だと思っているっていう証拠だ」
「・・・・・・・・・」
「まぁ、心配するな。お前が死にそうになっても、殺されそうになっても、死にたいと思っても、壊したいと思っても、消えたいって思っても、全てから・・・お前の心からでさえも守ってみせる。俺達が」
「・・・・・・・・・・・・そんなボロボロで言われても、何の説得力も無いわね」
　虎郷はそう言って立ち上がった。
「まぁ・・・それもそうだな」
「そうよ」
「・・・俺たちがお前を助ける方法は1つしかない。お前自身の心を苦しみから解き放つ事だ」
「・・・・・・・・・どういうこと？」
「そもそも助けるなんていった割には、何をどう助ければいいか、正直よく分かってなかった。でも今分かったよ。俺たちは、過去に縛られているお前の心から、お前自身を助けなきゃならない。そのためには、お前の思いを・・・お前の想いを解き放つ事だ」
「つまり、私自身が一也と戦わなければならないという事ね」
　そういうことだ。
　俺がそう言おうと思ったときに、
　ドガッシャ！
　木好さんが図書館の壁に激突した。
　衝撃で上から、一本の鉄骨が落ちてくる。
「ヒスイ君。さぁ、やってごらん」
　隼人は身を翻し、こちらに歩いてきた。
「恋愛もトラウマも火事も家族も全てを分かった上で、忘れるのではなく、自らを解き放つんだ。僕らと来ても大丈夫だよ。君が僕らと一緒に来て不幸な未来は見ていないだろう」
「・・・嘉島くんと同じようなことを言うのね」

「まぁ、僕らは息ぴったりの相棒だからね」
「おう」
ま、ここは肯定しておこうか。

虎郷は、歩き出した。
赤く泣き腫らしたままの目だったけれど、それでも一歩ずつ、自分の気持ちを踏みしめて。

「一也」
「・・・・・・火水。お前は俺のものにはならないのか」
「残念だけど、私はそういうものではないわ」
「・・・・・・・・・そうか」
「でも、私はあなたを愛して後悔はしていない」
「・・・・・・・・・そうか」
一つ一つの言葉が木好さんの涙腺をノックする。

「ありがとう」
虎郷のその言葉に、木好さんは
「・・・・・・・・・またな」
そう言って。

木好さんの目から涙が零れた。

倒れたままの木好さんの、腹の中心に、虎郷の拳がヒットする。

ほぼ同時に図書館は轟音を鳴らしながら、崩れ落ち始めた。

１３ー助ける意味ー（後書き）

俺様クンの反論コーナー。

いわゆる世界観というものは人の考え方によって変わるもので、
現実的な、リアリティのある物語を主とし、超能力のようなものや、
何かに逸脱した、スキルなどを嫌うものも居る。
僕としては、そのような話も好きだが、
自分が書くという点において言うと、俺はスキルというものに頼る
のが好きだ。
何というか、化物染みた人間でも、それは結局ただの人間で、
それなりの心を持ち、傷ついたり、仲間を持ったりというストーリ
ーが
好きなのである。
そういう超能力のようなものが、残機　∞　が最強とは限らない話
が作りたい。
そういう能力者が主人公ならば、それより強い敵を作ればいい。
主人公も普通に傷つき、普通に泣き、普通に怒り、普通に笑う。
そういう物語にこそ意味があるのだろう。
そういう人間にも、越えられない壁は有ってそれこそ、それを一般
人でもない
超能力者が越えるまでの物語を作りたい。
長くなってしまったし、キザだし、ウザいと思われたたり、かっこ
つけと言われてもいいが。
僕は、超能力者の物語に対する偏見を越えるのを目標にしたい。
落ちも無いくせに、長くて申し訳ない。
ただ、格好をつけたいわけではない事をご了承いただきたい。

１４ー まとめ ー（前書き）

注意

この「１３ー まとめ ー」は、語り部は嘉島奏明ではない。

１４ー まとめー

事件は、２年前の５月５日。子どもの日。

４月８日、入学式に木好一也は虎郷火水に一目惚れした。

しかし、ゴールデンウィークという大型連休の所為もあって、木好は虎郷に会うことが出来なくなり、我慢の限界になって、犯行に及んだのだ。

本当は見に行っただけだったのだが、彼女はそのころ空手を習っていた（強さの秘密はこれ）らしく会うことが出来なかった。

そんな行き違いが過去にもあったのだろう。このままでは、会う時間より会えない時間のほうが多くなってしまう。

そこで木好は考えた。

「一緒に住めばいいんだ」と。

では、どうすればいいか。家を・・・帰る場所を消してしまえばいい。しかし警察は優秀だ。

簡単に自分が犯人だとばれないようにする方法・・・・・・・・・・。

そして、強く願った。その時に生まれたのが「パイロキネシス」とほぼ同じ能力だった。

自分を邪魔する障害を消滅させる。燃やして、消す。消し炭にしてやる。

そう思って、願って。事件は起こった。

結局のところ、隼人の想像通り、木好はその時に虎郷の前に現れ

た。

その時に木好は、期せずして「幼馴染」へとなったのだ。

それから2年（その前に、例のマンションへ引越しした。事情を説明したらあの部屋になったらしい）経って、次の事件が起きた。

木好はとっくに卒業していた（現在17歳ということは、2年前に俺たちと同い年だった）ので、高校には行かずに仕事を始めた。

その仕事は、何でも屋のような仕事だった。但し内容は「犯罪行為」だったらしい。

例えば、麻薬の受け渡しの仲介人。

例えば、どこかの警備会社へのハッキング。

例えば、電車の爆破。

依頼人の意向や趣旨、動機なんて知った事ではない。

必要なのは、金だった。

虎郷火水を養えるだけの金が必要だった。それだけだった。

だから、例えそれを見られたとしても、強請（ゆす）られたとしても金を払う必要も理由も意味も義理もないのであった。

彼に大事だったのは『虎郷』と『愛』と『金』だったのだ。

その後のことは木好が言っていた通りだった。

虎郷を自分のものにするために、自分を死んだ事にして――その際に、その男に腕時計をつけさせて――虎郷に会いにいったそうだ。

ただ、虎郷にとっての木好への愛情は、木好が望むような愛じゃなかった。

では、何なのかと問われてもそれはもう何かは分からないが、主観的且つ希望的観測をするならば、死んだからこそ感じるような愛で、追悼や悲哀の気持ちに起因するものだったのだろう。

本来積極的であるはずの・・・愛するために、好きになるために努力するというような積極的ではなく。

でも、それでもいいと思う。

そのおかげで、木好も虎郷も、「想い」を自らの物とすることができたのだから。

虎郷にとってはそれすらも自らを解き放つ理由であったけれど。

木好にとっては自分の物とはならなかった虎郷との思い出という自分の物になった、唯一の結果ではあるのだろう。

だから、そういう真の愛とはいえないけれど大事な愛情とかそういうものがあったと。

そういう風に言うしかないのだと思う。

まぁ、なんだかんだで木好も死んだわけではないから

愛というものを感じる事のできるいい話なんだろう。

１４ー まとめ ー（後書き）

僕としては、わりと飽きっぽい性格なんですが、
話を作る際に、別の話を思いつくと、やめがちなんですけど。
珍しく、僕としては続いています。

１５ー まとめには入りきらない、現実世界での話ー（前書き）

とりあえずは、頭の中で考えていることを、書き連ねているだけなのですが。

何かすっごいスムーズにかけますね。

１５ー まとめには入りきらない、現実世界での話ー

「アレは、ファイアー・ファイターで、まず間違いないだろう」
「それって・・・消防士じゃないのか？」
俺と隼人は、病院で話をしていた。

あの後の事はホントもう、いっぱいいっぱいだった。

木好さんを殴った虎郷は、気絶した木好さんを担いでいた。
あんな華奢体（きゃしゃ）（腕や脚）のどこに、そんな力があるんだろうか。
いや、まぁそんな疑問は置いておいて大変な事態になっていたのだ。
虎郷が木好さんを殴った衝撃が原因で、崩壊速度が速まっていた。

「ちょッ！タンマ！」
俺は動けなんだぜ！？
「心配するな。僕の計算によれば後１３秒だ」
ヒスイ君、嘉島くんに近づきたまえ。と隼人は続けた。
そして、その虎郷が倒れたままの俺に近づいた時
ガラガラッ・・・・・・・・・・。
大きな音を立てて、一気に建物が崩れ始めた。
「おい、大丈夫じゃないじゃな――――」
言い切る前に、驚きの現象が起きた。

崩れ始めて、弱まった壁を突き破って、救急車が入ってきた。

「緊急搬送・・・派手に行くぜぇおい！」
「あ・・・・・・・・・東先輩」
頭から流した血が、少し黒色に近くなっている。時間が経ったと

いう証拠だろう。
瞬間的に、隼人は後ろに乗り込み、虎郷は木好さんを投げ込んで
「え」
俺を投げ飛ばした。いやはや、病人を投げ飛ばすとは全く・・・・・・・・・。

まぁ、そんなこんなで現在は21時である。
何か日時がとても経ったように感じるのにも拘(かか)わらず、まだ、9月8日の21時である。
俺と東先輩は病室で療養という事になったが、王城の御曹司、隼人の掛け合いの元で個室になった。
そして、虎郷と隼人は一度帰り、隼人が帰ってきてからの虎郷を待っている間のたわいも無い会話の一部なのであった。

「木好さんは、一体どんな能力だったんだろうな？」
「あぁ。その話か。あれはパイロキネシスの派生系だろうね」
「ぱいろきねしす？」
「ん？あぁ、有名な炎の超能力だよ」
といって、冒頭の
「アレは、『ファイアーファイター』で、まず間違いないだろう」
「それって・・・消防士じゃないのか？」
という会話になったのだった。
「そう、消防士。その発想はとてもいいよ」
「・・・いやそれ、『炎』を消す立場の人間だからな？」
「この場合の消防士は、『炎』を『消して』『防ぐ』人という意味ではなくて、『妨害するもの』を『炎』で『消す』人、というニュアンスさ」
「つまりは、消『妨』士・・・妨げるという事なのか」
「ん。それそれ。そもそも、ファイアー・ファイターは、そういう

ものなんだよ。願った時に、邪魔な物を消したいという意志と、それに炎という条件さえあればそうなるのさ」
「まぁ・・・・・・・・そりゃそうなんだろうな」
「能力自体には差は有れど・・・例えば、炎を飛ばすような奴も居たかな？あと、睨んだ箇所から発火するとか・・・でも、結局のところそいつらに共通するのは、邪魔な物を消したいと願った事と、炎が起因していることなんだ」

つまり、家が・・・家族がなければ、虎郷と一緒に暮らせるという願いを叶えたい木好さんは家を燃やしたように。
例えば――あくまで例として言えば――消防士が仕事がほしいという理由で『平和』を消したいと思って、睨んだところから発火して火災を起こすというような感じだろうか。
「だいたいそんな感じだよ」
そう言って、隼人は個室専用のソファーの背もたれにふかぶかと座った。
「そうそう、今日からしばらく入院だからね」
「・・・何とか掛け合って、退院させてくれねぇか？」
「ダメだね。医術に関しては、医者の方が分かってるんだから。休める時に休むべきなんだよ」
「・・・でも」

その時に、虎郷は部屋に入ってきた。
「こんにちわ。犬の死体のような状態で寝転んでいる、嘉島君」
少し、笑いに近いような声でいった。実際微笑んでいるし、笑っているのかもしれなかった。
「今のは、『犬』の死体というのと『ネコ』ろんでいるというのを掛けたのか？」
「え？あぁ。そういえばそうなっているわね。しかし、そんなつもりは無いわ。深読みしすぎよ、嘉島君。或いは、行間を読みすぎと

いうのかしら？」
「しかしヒスイ君、期せずして持ってしまったというのは怖いよ。そういうところから、僕らのような能力者においての『ネーム』たちが出来上がってしまうんだから」
「それもそうね。それに期せずして、一也も私の幼馴染となってしまったわけだし」
そんな風に会話をして、俺と隼人どちらが先に切り出すか迷ったが、俺が言うことにした。

「・・・もう、気分は落ち着いたか？」
・・・いや、別にこれが聞きたかったわけではない。
本当に聞きたい事をいきなりは切り出せない、ヘタレ的なアレ。
「そうね。まぁ落ち着いたって程ではないけれど、解き放たれたというか、清清しい気分ではあるわね」
「そうか。そりゃ良かった・・・・・で、俺たちと一緒に来るか？」
1番聞きたい事を2番目持ってくる法則。
「そうね。できればそうしたいわ。私の能力も利用価値はあるだろうしね」
「そうか。じゃあ隼人」
俺は、後を隼人に任せた。
「これ」
と、隼人は虎郷に白くて小さな鍵を渡した。
「飲み込んで」
「え？」
「仲間の印だ。まぁ、僕らも1度は飲み込んだよ。大丈夫。胃酸で溶けるらしいから」
「らしいって・・・・・・・・？」
「今日元さんって言ってね。男らしい女の先輩が作り上げた部屋への鍵さ」

「・・・・・・・・・」
黙って、少し葛藤(かっとう)した末に、虎郷はその鍵を飲み込んだ。

「これで、僕らは仲間だ」
「そうね」
「俺を含めるなよ」
そう言って、俺は天井を見上げた。
「俺は・・・仲間じゃない」

１５ ―まとめには入りきらない、現実世界での話― （後書き）

その理由に関して最近気づいたのは、

キーボードを打つスピードが最近速くなってきているようです。

16ー嘉島奏明ー

それから5分位して、2人は「帰る」と言い出した。

「僕の家の空き部屋にヒスイ君は今夜から住むから」

「よろしくね」

「・・・いや。ちょっと待て。俺は、今日からここに入院するんだぞ。一つ屋根の下に中学生という青春真っ盛りの少年少女が2人きりというのは危なくないか？」

俺の優しい優しい忠告に、2人は

「心配するなよ。僕がそんなキャラに見えるかい？」

「あなたが妄想しているようなことは、ありえないでしょうね」

と、安心するセリフを吐いた。

「そうか。良かった」

「「最も、そんな妄想が現実になってしまう可能性もなくはないけどね」」

2人はそうハモると、部屋から出て行った。僕に心配を残したまま。

「・・・・・・・・・・」

俺という存在がこうもあいつらと仲間という状況を拒んでいるのか。

それは、俺の目的にあった。

俺があいつらを利用しているのは、「家族」のためだ。

俺には、病院で昏睡状態の姉が一人。それを慕っている妹が一人。

俺たちを支えるために必死で働いている兄が一人。昔、山の土砂崩れで行方不明になった父が一人。

そして、その人たちと俺を支えているのが母だった。

俺は、父を探し、兄を助け、姉を治し、妹を世話し、母を楽にさせてやりたい。

そのためには、どんな危険も厭(いと)わない・・・・・・はずだった。

俺は、隼人たちに出会って心が変わった。

もし。ここで、俺が死んだらこいつたちを悲しませた上に、妹と兄と母に・・・昏睡状態の姉も目を覚ましたら、こいつらは俺の死について責められるんじゃないだろうか。

俺がこいつらと仲間だったら。親父みたいに消えたとき、或いは、死んでしまった時。

悲しみ、怒り、憎しみの心は増幅するだけではないのだろうか。

だったら、せめて俺はこいつらと仲間の関係であるべきではないのではないだろうか。

その考えが俺の仲間意識というものを妨害しようとしているのではないか。

そんな風に思って。

部屋の天井を見上げて眠りについた。

１６ー嘉島奏明ー（後書き）

僕は、いつも小説を書くときは、
音楽にあわせて動かしてみます。
バトルだと、とても軽快にキーボードをたたけるので、楽しいです。

１７ー同時刻の隼人&虎郷ー（前書き）

今日は、続々と更新していってます。

もう４話くらい更新している感じです。

17 ―同時刻の隼人&虎郷―

帰り道で、ヒスイ君は僕に、ソウメイ君が仲間にならない理由聞いてきた。

「家族？」

「うん。彼はきっと、僕らに迷惑がかかるとか、家族の悲しみや怒りが増幅するだけだとか、そういう間の抜けたことを考えているんだと思うよ」

僕には、全てお見通しなのに。

と、僕は思った。

「だったら、どうしてそう言ってあげないの？」

ヒスイ君はそう言って、僕をみた。

僕のほうが背が高いから、自然、首を下げなければならない。

「この間いったろう？僕らは、誰かを救う事なんてできない。それと同じ意味で、僕らは、誰かに教えてあげるとか、説教するとかはできないんだよ」

嘘だ。本当は、彼の口から言ってもらいたいだけなのだ。

「嘘ね」

見透かしているのか、ヒスイ君は言った。

「まぁ、そうだね」

とりあえずは、見苦しく嘘を続けるよりも、こうしたほうが得策だろうと考えて、肯定しておいた。

「あなたは、嘉島君から、仲間だって言って欲しいだけなんでしょう？」

そういうのは、優しさというよりは同情に近いような感じなのでしょうね。

と、そこまで虎郷は言い切った。

確かにそれは、同情のようなものなのかもしれない。
家族の中身を知ってしまった、僕としては、そういう感情を持っていることを否めなかった。
でも。
それでも。
だからこそ。
僕は、彼の口から『仲間』という言葉を聞きたいのだった。

１７ー同時刻の隼人&虎郷ー（後書き）

連休とか大型休みがあるときって、何かテンションが上がるようで下がります。

やっぱ、平日が好きなんでしょうね。

イベント染みた事は、物によっては嫌いですね。

１８ ―ＷＲと今回のオチ―（前書き）

あぁ・・・長いようで短い一生だった。

あ、違う。一章だった。

１８－ＷＲと今回のオチ－

さて、俺もあの部屋「ＷＲ」に行かなければならないだろう。
俺は、隼人が置いていった、ノートパソコンの電源を入れて、ベッドに横になった。

「すいません。遅れました」
俺がそういうと、白い机に、それぞれ好みのドリンクを置いて、白い椅子に座っていた。
「遅かったな。嘉島」
「遅かったね。ソウメイ君」
「遅ぇじゃねぇか。嘉島」
「遅かったわね。嘉島君」
・・・一応説明しておくと、
上から今日元さん、隼人、東先輩、虎郷である。
「だから、遅れました、って言ったじゃねぇか」
主に、隼人に向かって投げかける。
「それもそうだね」

この部屋が一体何なのか。
これは、今日元さんが俺たちと気兼ねなく会話できるように、つまりは刑務所などというものを関係なく、生活できるように作られた部屋である。
名称：ホワイト　ルーム　表記時：ＷＲ
という。
これは、この部屋のほとんどのものが白で作り上げられているか

らだ。

今、俺たちがいるのは夢の世界なのだが、そこで「トランスミッション」という、今日元さんの能力が発動するのだ。ここではその一部を紹介しておく事にしよう。

この能力は端的に言って、電子機器から電磁波を送り、夢を作り上げ、その際に同じ世界にいけるようにするらしい。彼女が言うには「夢の周波数を合わして、同じ夢を見ているのと同じ感覚にしている」だそうだ。

但し、さっき言ったとおり、ドリンクというものがあった。

アレは、夢だからこそ作れる物である。にも拘わらず、現実世界と一緒で味覚は作用するし腹も減る。

ここはそういう世界なのだ。

「君が、この間、嘉島が言っていた、面白い能力の女の子なんだろう？」

今日元さんが言った。

「ええ。私の能力は『ファントム・ダーツ』というらしいのですが、今は『フューチャーライン』も

使えます」

「あぁ。なるほどねぇ。私は今日元　終。こう見えて、同じ女の子だ」

「あ、はい。虎郷火水です」

と、向こう側で会話が弾んでいる。

「俺は東諒だ。この間はきつい一発ありがとう」

「すみません。私にも事情があったので」

あまり、感情のこもっていない声で言った。

「ともかく、これで僕たち5人は仲間だね」

「俺を含めるなって」
「まぁ、そういうなよ、嘉島。隼人だって、君を仲間にしたいんだ」
今日元さんにたしなめられてしまった。

結局のところ、俺はこの４人に仲間という認識を得られてしまった。
が、別に嫌な気分になるわけではない。
俺が、仲間になりたくないと願っていても世界は決まった形には進まないのだから。
彼女、虎郷火水が俺に見せたのは「決まりきったこの世界」に変わらないものは無いのだ。
決まりきっているこの世界でも、何もかもが変わっていく。
俺が、彼らの仲間になるためにも、変わってもらうしかない。この世界に。
「決まりきった未来なんて」つまらないから。
「決まりきったこの世界」の運命を替えていくべきなのだろう。
彼女の能力のように。

１８ －ＷＲと今回のオチ－（後書き）

オチって、何か、すごく難しく感じませんか？

今回のオチは・・・微妙ですね。

だから、僕の１番オチに相応しい言葉を引用します。

「何物も何者も変わらないものなどないというのなら、
運命にも変わってもらうとしよう」

後日談ー年齢ー（前書き）

説明しよう、後日談とは！　おまけである！

後日談ー年齢ー

次の次の日の夕方、つまり9月12日月曜日の夕方のことだった。
「そういえば、知らないのだけれど、東さんって何歳なのかしら？」
虎郷がたわいも無い話のように入れてきた。
「・・・・・・17歳」
俺は恐る恐る答える。
「え？でもそれって・・・」
虎郷が何か言おうとする。
が、
「うん。君の疑問は最もだ。高校生の年齢だからね、彼も学校に行かなければならない事を心配しているんだろう？」
と、隼人が無理やり話を入れてくる。
「いや、そうではなくて・・・・・・」
「でも、大丈夫。彼は高校には行ってないんだよ。王城グループの御曹司・・・つまり僕の専属ドライバーとして、働いているんだ」
「・・・・・・もしかして話をそらそうとしているわね？」
「・・・・・・・・・」
「私が言いたいのは、無免許運転じゃないの？って言いたいのよ。彼、高校生なんでしょう？」
虎郷が、隼人を見た・・・だろう。
隼人は目をそらした・・・だろう。
いや、俺も既に目をそらしているから分からないのだ。
「今日元さんはいくつなの？」
「・・・・・・16歳」
俺は答えた。目をそらしたまま。
「・・・どうして、その年で」
「その通り。東さんと同い年で――――」
「死刑囚なの？」

今度は隼人の言葉で止まることは無かった。
俺は目を外の窓にむけたまま。
返事をしない。

「・・・・・・・・・」
「まぁ・・・。彼らは少し特別だと・・・そういう認識で宜しく」
と、隼人は言った。
虎郷は俺たちを睨んでいるが、
無視、無視。

後日談ー年齢ー（後書き）

ふむ。

後書きと前書きのネタが尽きた。

０１ ― クジと植木鉢とサッカーボールと落下速度と偶然の確率論 ―（前書き）

０１ ― クジと植木鉢とサッカーボールと落下速度と偶然の確率論 ―

あれから・・・・・・虎郷火水の事件から、２週間近く経った。
正確な日数を言えば９月１０日からなので、２０日経った、９月３０日だった。
確か１０日は土曜日だったはずなので、９月３０日は金曜日という事になるのだろう。

その日の終わりのＨＲ（ホームルーム）に、来週から１０月と言う事で、席替えがあった。
俺からすると、９月に入ってから８日間しかこの席に馴染んでおらず、退院して学校に行ったその日に席替えになってしまったのだから、なんというか、虚しい気分になった。
しかしながら、それでも席替えというのは少しワクワクしてしまう（つまり俺もまだ子供と言う事だろう）。
だが。
いつもの事だが席替え後には、友達とは離れてしまい、何とも言えない空気になってしまうのだ。
俺にはその心配は無い。友好な人間関係を持つ人間、つまり友達がそれほど多くないからだ。

「嘉島」
俺の机の上に右腕を乗せて身を乗り出してきた男が居た。
俺の前の席に居る海馬という男だ。
「お前どこの席がいいんだ？」
「は？」
「ついでに席が近くになりたい奴教えろよ」
「何言ってんだよ」
「いいからいいから」

「・・・・・・そうだな」
ま、とりあえず話しに付き合ってみることにした。
俺は自分の今の席を見る。
長い事座っていたわけではない上に窓際だ。

「この席のままでいい。後、隼人を近くに置いてくれ」
「そうか。じゃあ俺は廊下側の一番後ろの席に行くかな」

そう言って立ち上がった。俺もついていく。

席替えは、今回はくじ引き形式だった。
教卓の上に置いてあるくじに書かれている番号と、自分の名前を紙に書いて先生に出す。
全員が提出し終わったら、その紙を見ずに黒板に席の見取り図を書いて、そこに番号を書いていく。
その番号のところにさっき提出した番号と一致するところに座るということである。
番号を紙に書いて提出する事で不正を禁止する。
ちなみに名前を書かなかった連中は「死よりも恐ろしい罰ゲーム」らしい。

さて、俺と海馬が教卓に着いた時、同時に隼人もいた。
「・・・海馬君。それに、ソウメイ君」
「俺はついでかよ」
「よぉ」
上から隼人、俺、海馬の順である。
「さっさとくじ引こうよ」
隼人が手を伸ばした。その手を海馬が弾く。
「これと、これと、これだな」
海馬が適当に取った。

そして一枚ずつ俺と隼人に渡した。
「何やってんだ？」
俺は自然に疑問を口にした。
「まぁ、気にすんな。確率は同じだろう？」
「いや、そりゃそうだけど・・・」
と、その間に海馬は名前を書いて提出して、席へと戻った。
「・・・・・・何なんだい？彼」
「いや・・・・・・俺にもさっぱり」
本当に何がしたいんだか。

その後、驚くべき結果が出た。俺の望んだ席、つまり、今俺が居る席の番号が１４。
俺のくじの番号も「１４」だった。
「すごいな・・・」
ともかく、皆が動いている中、俺は一人、この動作の流れが止まるのを待っていた。
「・・・・・・・・・？」
俺の前の席に、
「やぁ。ソウメイ君。奇遇だね」
「・・・」
なんだろう。この仕組まれた感は。
ふと。
俺は廊下側の席を見る。一番後ろ。
海馬が座っていた。
こちらを見て、ニヤリと笑った。

俺たちは、教室で荷物を片付けながら、以下のような会話をしていた。
「もしかしたら、彼には全てが見えていたのかもしれないね」

「全てが？」
「クジの番号も先生がどこに何番を書くのか・・・とか」
「未来予知ってことか？いや・・・こんな近くに2人も同じ能力のアクターがいるものなのか？」
「多分だけれど、未来予知ではなく『目』だろうね」
「『目』？」
「うん。ウェポンには、武器・・・アームと、人体自体に備えつく、或いはそれ自体が武器になる、サイボーグがある・・・って、この話はしてなかったような気もするよ」
「あぁ。聞いた事無いな」
「まぁともかく、もしかしたら彼は『サイボーグ』にあたるアクターなのかもね」
「・・・この片田舎の街に、こんなに多いアクターが居るものなのか？そもそもアクターってのは、そんなに多いわけでもないんだろう？」
「でも、願う者が居たらそこに生じるはずだよ？それに、ここは片田舎ではないし。王城グループの本社があるような場所なのだからね」
「・・・それでも、あんな気さくなキャラクターの奴が、何かを願うとは思わないよ。深い願いでこそ意味があるわけだし。やっぱり、ただの偶然だろ？」
長々と間髪入れずにしていた会話に空白があく。
教室には誰も居ない。部活に入ったりとか忙しいのだろう。
そう思っていると、ようやく溜めが開放される。

「キャラクターなんか関係ないさ。どんな性格でも願いは重いもんだよ？思いだけにね。それに、偶然って・・・君はこういうつもりかい？」
と一度、ニヤリと不敵な笑いをして
「偶然自分の前の席だった海馬君が、偶然君の願いを聞き、偶然僕

とも出会って、偶然引いた3つのくじが、偶然先生の書いた見取り図と一致して、偶然君と海馬君の願い通りだった・・・と」
「・・・・・・・・・」
「6個も偶然が有ったら、1個くらいは誰かの意図する物だと、そうは思わないかい？」
「・・・なるほど。流石だな。隼人」
そうして、俺と隼人は外に出た。
「あ」
そこで、海馬を見かける。
玄関ホールを出た所であった。

「危ない！！」
場面がスローモーションに見えた。

上から声が聞こえる。
上は確か、飼育委員・・・動物だけでなく、ベランダで、植木鉢に入った植物を育てている。
俺は、上を見た。ベランダの真下に俺たち。その少し前に、海馬。
植木鉢が落ちてきている。海馬の頭上に。
と思った時には、既に落ちているのがこの世界だ。
その時に、海馬の足元にサッカーボールが転がってきた。
海馬はそれを、左足の爪先と右足のかかとで器用に上に打ち上げた。
植木鉢と衝突する。その二つの物体は、お互いの軌道線を変えて、植木鉢とサッカーボールは海馬の近くに落ちる。

「すみませんでした！！」
上からの声。同時に右からも、サッカー部の人が言った。
「気にすんな」
振り返らずに、海馬は帰り道に歩を向ける。

いや、それより。
これは一体・・・。
植木鉢が落ちてくる位置を『見ず』に。サッカーボールの存在にも『気付かず』に。
落下速度も『分からず』に。軌道線をずらした。
これが偶然以外の何であろうか。
いや、偶然ではなく
「・・・アクター・・・」
その呟きが聞こえたのか、海馬は振り向いた。
言った。
「へー・・・・・・こういうのアクターっていうのか？」

０１ ― クジと植木鉢とサッカーボールと落下速度と偶然の確率論 ―（後書き）

偶然の出会いっていうけど、運命的には偶然の出会いも必然なんだけどね。

02ー解析ー

「何だってんだ・・・・・・・・・・・・！！」
土曜日、１０月１日。
本当の家・・・つまり、俺の家族が居る家の俺の部屋で、考え事をしていた。

あの後海馬は笑って、そのまま帰宅の道へ足を戻した。
「待ちたまえ！」
珍しく隼人は叫ぶ。
その声を無視して、海馬は足を進めていった。
なんとなく、俺達は動けなかった。

隼人の家について、
「何なんだ！アイツは！！」
リビングに入ってすぐ、彼は叫んだ（門をでてから不機嫌で一言もしゃべらなかった。これを叫びたかったのだろう）。そして、３人掛けのソファーに鞄を投げて、１人用のソファーに座り込んだ。
俺はその３人掛けのソファーに座る。
「・・・・・・そんなに何に怒ってんだ？」
「何に？何にだって？」
ドン！
と、音はしなかったがそんな勢いで足を組んだ。

「全部だよ！彼は、植木鉢の方向もサッカーボールの位置もそれらの速度も見てなかった！そんな能力は知らない！最初は「ブラインド・アイ」かと思ったけど、アレは見なくても分かるだけの能力だ

！それにあの能力は、運動が出来ない事を悔んで、願った時に発生する能力だ！彼は運動神経はそんなに悪くない！サッカーだってそうだ！彼には運動神経は高かったから、アレくらいなら出来るのかもしれないけれど何も見ずに狙うなんて事は無理だ！！それに、最後の最後は僕を無視しやがった！何の能力を持ってるんだ！！」

相当切れてるな・・・でも、最後の１つは微妙だ。
自分を何だと思ってるんだろう、彼は。
ああ、王だと思っているに違いない。

「で、何の能力だったか分かったのか？」
「・・・・・・知らないよ！あんな能力！」
「お前、この世の『アクター』の能力を全部知ってるんだろ？」
「でも、知らない物は・・・知らないんだ」
だんだん冷静さを取り戻してきた隼人は、少し落ち込む。
「それこそ、新しい物があるということ以外考えられない」
「そんな出会いはそうそう無いだろう？」
「そうでもないよ。この世には同じ「アクター」は存在しない。君と僕はたまに居る能力者だけれど、ヒスイ君は珍しい能力だよ。不幸を望むなんてね。でも確かに新しいアクターが少ないのは事実だね。基本的に人間は同じ願いを持っているものだからね」
「そうか・・・」
「・・・・・・先生に連絡しておいてくれ」
・・・・・・何を？そう思ったときには、リビングの東にあたる部屋に隼人は入った。そして気付く。

アレは彼の部屋だ。ちなみに西側が彼の部屋で、俺の部屋が隼人の部屋から見て左隣。北側は窓。
後、２階に部屋とトレーニングルームがある。３階もあり天窓つ

きだが、部屋というかホール。まぁ、王城グループの建物だから。
「おい！お前、学校休むつもりか！！」
「あぁ。部屋にこもって考えるよ。分かろうが分かるまいが3日以内には出るから心配しないでくれ」
「・・・・・・くそッ！！」
俺は少し憤りを感じる。
「いつも自分勝手すぎるんだよ！！」
俺たちは2人でこそ意味がある！！
思ったけれど言わなかった。
「君も勝手にしたまえよ。彼に触れれば分かるだろう？でも、僕には教えないでくれよ」
そう言って物音がしなくなった。
完全に動かずに考える状態だ。ベッドに横になっている状況が目に浮かぶ。
「・・・しばらくは、家で過ごす」
そう扉に呟いて、リビングにたった。
「くそが！！」
そして、俺は俺の部屋の扉を蹴った。扉が部屋に向かって倒れる。
「何かあったの？」
「？」
鞄を持った虎郷が、リビングの扉を開けて立っていた。
「・・・虎郷・・・」
「何かあったの？」
「いつから見てた？」
「王城君が部屋に入ってから」
「・・・あぁ。じゃあ聞いてたと思うけど、3日くらい出ないから」
「ええ。嘉島君が叫んでたのも聞いたわ」
「あぁ。そうか・・・じゃあな」
「？どこへ行くの？」
「うちに帰る。そのうち戻るから」

「扉。壊れてるわよ」
「知るか」
俺は、玄関を出た。
「くそッ・・・・・・・・・・・・！」

０３ー久々の休日ー（前書き）

そろそろ色んな人に宣伝しているところ。皆さんも、この話を面白いと思ったら、周りの方に宣伝してください。（作者の本名を知ってる場合は、伏せてください）

あと、「ＥＹＥＳ」は、マジでお勧めです。

０３ー久々の休日ー

簡単に説明してしまうと、あの時から真っ直ぐ家に帰ると、母親はパートで妹は姉の病院へ行っていた。
俺は部屋に入りそのままベッドに横になると、そのまま次の朝まで寝ていた。

そして、前話の冒頭に戻るのであった。
俺は、何をどうしていいか分からないので、とりあえずはベッドに横になったまま携帯を開いた。
とりあえずは、まぁ、着替える事にしよう。制服のままで居たところでどうにもならない。
昨日、隼人は学校を休むことを決意したようだけれど、今日と明日は土、日だから休みだ。つまり、明後日までに終わらせればいいのだろう。
しかし・・・休日を休日と理解する事は久しぶりだ。夏休みから９月８日までは、隼人や東先輩や今日元さんたちと、運悪く出会ってしまって忙しかったし、この間の休日は虎郷の事で忙しくて休んでいる暇は無かった。そしてその後から今までは入院中だったので、毎日が休日みたいなものだった。

いやー、ホント隼人は迷惑な男だ・・・。

全く、しばらく関わらないでいいと思うと、清々するぜ！
とか、そんな風なことを考えても、自分で自分が虚しくなる。

しかし、そう考えると休日は何をしていたのか分からない。というわけで、朝飯（時間的にはすでに昼食なので、ブランチというところか）の最中に聞いてみた。

「兄ちゃんは知らないな。割と忙しかったし」
「私も、姉ちゃんのことで忙しかったからね」
「中学1年の時みたいに、事件に巻き込まれていたんじゃない？」
兄、妹、母の順番だ。でも、結局誰の意見も参考にはならない。母の意見には覚えがありすぎてどれがどれだか。中学1年生の頃は・・・・・・父さんのことで忙しかったな。あと、何か有ったような気がするけれど、まぁいい。
ともかく、休日の過ごし方が分からないということは、逆に言えば今日と明日の過ごし方には、好きな選択ができるということだ。では、本日は学校の宿題にでも充てるとしよう。

しかし・・・彼は一体何者なんだろうか。宿題をやっている間に、そんな事を考えた。
海馬正。日本海の「海」に、天馬の「馬」――そういえば、海馬という部分が脳にあった気がする。記憶を司る器官だったかな？まぁともかく――に、「正」しいと書いて、海馬正。
「ネーム」になりそうな名前ではない。となると、自分の過去や現実からの「ミラー」か、或いは突発的な「アウトブレイク」ということになる。
でも・・・。
「俺の場合は『ミラー』だったしなぁ・・・」
とりあえず、ここで情報を思い出してみる。
彼は、くじ引きの結果を操作した。それは、先生の心もくじの数字も見透かすような力だった。
しかし、心を読むのではない。それは、俺の専売特許だ（その気になれば、同じ芸当もできる）。
それを隼人は『目』と言っていた。彼は全てを知る『目』がある。そういうことなのだろう。

しかし、それと同時に、彼は狙い澄ましたように、植木鉢とサッ

カーボールを直撃させた。
もし、先の『目』のような能力（彼は「ブラインド・アイ」といっていた気がする）だとすれば、願いは「運動が出来ないことの僻（ひが）みから来る」らしい。と言う事は、海馬は『目』ということではない。

「・・・・・・試してみるか」
そう思って、パソコンを開いて、キーワード検索をする。「海馬正」と。
ある可能性を狙って。

「・・・・・・出た・・・・！！」
射撃の競技での優勝者。競技方法はいたって簡単。
赤外線レーザーでダーツのような的に当てるらしい。また、ライフルの方の射撃も上手いらしい。
怖いもんだ・・・。しかも、その時の彼は、「初心者」だったらしい。
彼の射撃スピードは半端ではないらしい。銃を抜くと同時に撃っている・・・だそうだ。
その時の彼のコメント。「なんとなく撃ったら、全発当たるので」といって、その場を去ったらしい。

と言う事は、彼の能力である可能性は「狙う」なのか・・・・・・・いや、そのセンスはあったのかもしれない。ということは、全てを見る『目』なのだろうか・・・。

ともかく、明日の予定は決まった。
「海馬正・・・・・・・俺のこの右腕で、全て見抜いてやる！」
そう宣言した。

「お兄ちゃん、うるさい！」

・・・・・・・・ともかく・・・・。そのためにも、静かに宿題をしなければ。

俺はパソコンの電源を落として、シャーペンを持って机に向かった。

０４ー解剖『嘉島リンク』ー（前書き）

今回はとても短いような感じですね。

これからもこんな感じなことが多々ある模様。

０４ー解剖『嘉島リンク』ー

さて、来る日曜日。
俺は海馬を尾行することにした。方法はいたって簡単・・・ではなかった。
まぁ、彼の家に行く事は簡単だった。学校から彼の残留思念を読み取り、それが導く道を進むだけでいいのだから。
だが、そのためには、彼が外に出るまでには、家につかなければならない（まぁ、彼の家から残留思念を追いかけるという方法もなくはないのだが）。
というわけで、響也（きょうや）（兄）と、奏（かなで）（妹）、そして母親が寝静まった後、こっそり家を出ようとした。が、リビング。
食卓の上に「朝ごはんは、一日の活力の源なので、しっかり食べてから巻き込まれるように　奏」と書かれた紙とあんぱんと牛乳（張り込みか！！いや、張り込みなのだが）が置かれていた。
妹は本当に家族の事ならなんでもお見通しだな・・・。小学６年生とは思えない気の遣い方だ・・・。

１０月２日午前２時３０分。ミッションスタートである。

「・・・よし」
まずは学校に向かってダッシュで向かう。
４０分には学校に到着した。歩いて３０分かかる距離を１０分かかってしまった。
「運動不足か・・・」
そう呟いて、呼吸を整える。
そして、右手を学校の校門の地面につける。
学校の人数分の情報が頭に入ってくる。寝不足でお腹のすいた状態の頭にはダメージが大きい。故に気分が悪い。情報整理は苦手だ

が、そんな事を言っている場合でもない。
まずは、２６センチより大きい靴の情報を探す。アイツの靴のサイズだ。
本当は、ぴったり２６センチにしたいぐらいだが、そんな余裕は俺にはない。
半分くらい・・・つまり、男子のものが残った（のだろう）。
次に体重。
道路に対する負荷を見つけるしかない。
昨日の玄関の植木鉢。割れた破片は回収されているはずだが、少しくらい残っていてもおかしくは無い。
で、見つけた。茶褐色の植木鉢の破片が、多少ながら残っている。回収する公務員の方は老人だから、残っていると思っていた。昨日回収したのだから、他の人が気付くはずもない。後は、この破片が見たはずの「海馬正」と道路が記憶しているはずの「海馬正」の足跡をリンクするしかない。
つまり連立方程式とかいう奴だ。言葉は知っているけれど、やり方はわからない。

頭の中で情報をまとめる。
かき混ぜる。作り上げる。創造する。

「これは時間が掛かりそうだ」

０５ー海馬家ー（前書き）

今回は初めてだと思われる、１０００文字以下です。

あぁ・・・なんか寂しいな・・・。

けど、毎日更新のためならば背に腹は変えられぬ。

０５ー海馬家ー

「しまった！」
３時。
リンク接続の所為で、気絶してしまっていた。大幅に体力が取られた。
気付かないうちに倒れてしまったが・・・まぁ大丈夫だろう。頭痛が痛い（！？）けれど。
とにかく、情報を入手する事ができた。
俺はその方向に向かって歩を進める。ゆっくりと、海馬の意識を探りながら。

「な・・・・」
声が出なかった。いや、近づいた時からなんとなく予測はしていたのだが。
「・・・どんだけだよ・・・・」
彼の家は豪邸だった。
おそらく、１５階建てのマンションを横にして、２つ並べたような敷地面積。建物自体は、俺の家を１つと、その３倍の大きさの建物をもう１つくらいだ（読者さんの家の大きさで考えてください）。
「ともかく・・・・」
俺は今、その家の見える道の角で待機している。
警備員が２人、門に構えている。
現在の時刻は４時。アイツは学校から徒歩で１時間もかかる所に居るのか・・・。
まぁ、とはいっても俺は、海馬の意識を辿りながらきているので、４０分というところだろうが。
取り敢えずはしばらくはアイツが来るかどうかをここで待つこと

にしよう。
俺はその壁にもたれながら待機する事にした。

０６－友達なら－

午前９時。

俺は、壁にもたれた状態から目を覚ました。
「・・・いや、この状態で寝れるって俺は一体・・・」
ほんとに、良く分からん男だ（自分を敢えて客観的視してみた）。
「・・・ん？」
車のエンジン音。俺のもたれている壁の後ろから・・・あ、そうか、この壁も海馬家の敷地か・・・。
ということは、海馬がこの家を出ようとしている可能性があるということ・・・。
車で出られると追いかけられないな・・・。遠い距離から感知してみようか。
と、挑戦しようとしたが
「お待ちください！」
と、老人の声が聞こえる。
「大丈夫だって。徒歩でいけるよ」
海馬の声だ。どうやら言い争いのようだ。
「そういうことではなく、ご主人さまやご婦人に外に出すなと・・・！」
「なんだよ・・・射撃場くらい大丈夫だって、爺や」
「しかし・・・！」
老人の声が聞こえなくなる。
「なんだよ・・・。大丈夫だよ、心配してくれるのは爺やくらいのもんだ。アイツらはもう俺には興味ないんだから」

すぐ戻るよ。
と続けて、海馬の足音が離れた。

射撃場・・・あの、ＵＦＯみたいなのを撃つアレか。
っと、ということは門を見とかねぇと―――

「やっぱり来たのか。嘉島」
「げ・・・！！」
海馬が俺がもたれていた壁の上に居た。
「おはようだな、嘉島」
「・・・おはようございます、坊ちゃま」
「その言い方はむかつくな・・・」
と、海馬はそのまま自由落下し、一度縦に回転して降り立った。
いや、低くは無いとは言っても、２メートルくらいだぞ・・・。
そのあたりが、運動神経ということなのだろうか。
「あの、爺さんは？」
「執事の・・・そうだな・・・セバスチャンで」
「執事が全部セバスチャンなわけないだろう、真面目に答えろ」
「県（あがた）寅兵衛だ。兄弟がいるそうだが、有った事はない。ああ見えてまだ４９歳だよ。割と強い。警備会社で働いていたそうで、そっちにも仲間が数人居るそうだよ」
「あぁ、そう」
いや、別にそこまで聞きたかったわけでもない。

「で、どこ行くんだ？」
「聞いてたんだろ？」
「射撃場か？」
「あぁそうだ」
「じゃあさっさと行こうか」

「付いてくるのか？」
「おう」
そんな風な会話以降、俺と海馬は何の話もせずに射撃場へと向かった。

＝＝＝

その3人が来る瞬間に、
「両親の会社の人間だ」
と、俺に呟いた。ということはもう1人は部外者ということなのだろう。

「こんにちは。会社の方・・・ですよね？四葉さんと新嶋さん・・・後、古桜さんですね？」
「おお！覚えているのか！」
「君くらいのものだよ、会社の人間全員の名前を覚えているのは」
どの人間がどんな格好、性格、容姿であるかはモブキャラなので無視。

「ん？」
俺に気付きやがった。よし、逃げるぞ。嘘ですよ。
「僕の同級生ですよ」
海馬が言った。一人称を使い分け、印象を変えるという技を使用している。
「嘉島奏明です。どうも」
そして、便宜上の挨拶をして、握手を避ける。言動を全て吸収すると俺の頭がパンクして2度と機動しなくなるからである。

「正君は、すごいタイミングで撃つから見ててごらん」
1人の大人に言われたので、まぁ、海馬の撃ち方を見ることにした。

「・・・・・・・・」
海馬は黙って、ライフルを構えた。こういう競技をライフル射撃というらしい。
「・・・！」

片手だった。狙う気など無いように。

バッ！

白い円盤が出る。

ほぼ同時だった。妙な角度に向かって、銃を撃っていた。

バン！

当った。超高速の早撃ちだ・・・。

「・・・すげ――――」

「流石だねぇ、正君！」

俺の感嘆の声を掻き消す声で３人の大人が海馬に駆け寄る。

「いえいえ・・・」

結局、それから媚を売る社員の話をそれとなく聞いていた。

１２時になってから俺たちは射撃場を後にした。

「お前すごいな。なんて速度と角度だよ・・・」

「いちいち気にするな。あんなの勘だよ」

「勘？」

「あの辺かな？と思う位置に向かって撃っただけの事だ」

「そんなのでよく当るもんだよ・・・」

ファーストフードの店でハンバーガーを片手に２人で話していた。

こういう場所では、隼人とは話せないから新鮮な体験ではあったけれど、俺はこんな感じの気さくな感じが好きだ。

「嘉島、お前ってさ」

「何だ？」

「俺の能力について解明しようっていう魂胆なんだろう？」

「あぁ」
「・・・正直だな」
「隠し立てするような事でもないからな」
実際、そういう問題なのだった。俺にとって、そんなに重要視するわけでもない。どうせ、隼人が見つけるはずだから。
「でもさ、俺についてくる意味は無いと思うぜ？」
「？何でだ？お前についてりゃ、お前という存在が分かれば十分な資料だろう？」
「俺自身、俺の能力はよくわからないんだよ」
「・・・・・・・そうなのか」
「もちろん大雑把な感じでは分かっているんだぜ？」
「そうか。でもまぁいいんだよ。友達として、楽しめりゃ」
「え？」
そう。隼人が見つけるはずの事実をこうも追いかけているのはそんな理由だった。
「単純にお前と友達になりたくてな」
「・・・なんでだよ」
「最初は、そんなつもりじゃなかったんだけれど、爺さんとの会話とか会社の人間との接待みたいな会話に耐えているところとか、そういうの見ると急にそう思ってさ」
「・・・そうなのか」
「まぁ、俺は友達って言うか・・・仲間モドキなら居るんだけど、そういうのを増やすのも最近は悪くないかなって思ってるんだよ」

まぁ、実際。俺には既に仲間と呼んで良いはずの人間が居るのだが。今になってそう呼ぶのもなぁ・・・と思ったり、俺がもし死んだら迷惑がかかるとか、そういう類の思想をもっているのだが。
いや、もしかしたら、裏切られるのが怖いのかもしれない。自分を守るためにやっている行動なのかもしれない。
でも。

それでも。
俺は仲間が必要だと、そう思うようになっていた。
俺たちはその後、中学3年生らしい生活を始めた。
バッティングセンターに行ったり、ゲーセンで遊んだりした。

月曜日、明日には隼人は帰ってくるだろう。まぁ、気にせずに俺は先生に
「新手の引きこもりです。明日には帰ってきますので、お気になさらず」とだけ告げておいて、その日は　平和に終わった・・・・・・ら良かったのに。

昼休み、海馬とともに食事を摂る事にした。海馬は友達が少ないわけではないし、どちらかというとリーダーシップを発揮して、皆に慕われているが、昼食は1人で摂るタイプだったので誘うのは容易だった。
そして、食事を終えて、さぁ今から昼寝・・・というときだった。外がざわついている。その程度で別に寝ないわけではないのだが、しかし
「美人の女だってさ」
という声が聞こえた。男の端くれである俺としては見ないわけにはいかない（かと言って恋愛には今のところ興味はないのだが）。
「・・・ん？」
そこに居た女の姿を見た。そして、俺は逃げるか、とっ捕まえてどこかへ行くかの2択を考える。

以下の発言を聞いて、誰なのか判断して欲しい。
「あんた誰？」
１人の男子が聞く。
「あなたのようなゴミに用は無いわ。すぐに嘉島君を呼びなさい」
「・・・嘉島？」
「分からないの？嘉島奏明よ。まぁ、分かる人が呼んでくれればいいわ」
「・・・お前、嘉島の何かなのか？」
「嘉島君の？そうね――」
ダッシュ！！
俺は走る。腕を掴む。運良く、２階と１階は吹き抜けなので飛び降りる。
「虎郷・・・今、適当なこと言おうとしたな？」
「恋人と」

07ー現在の友情ー

「またややこしいことに巻き込まれているようね」
「あぁ・・・。って、隼人に聞いていないのか？」
「彼、部屋から出てきていないのよ」
「あぁ、そういやそうか・・・」
最近向こうで生活してなかったからなぁ・・・。そろそろ生活軸をもどすか。
どうせ、明日であいつも出てくるからな。
明日にでも荷物をまとめて、本格的に向こうでの生活を始めよう。
そんなに遠い距離でもないので、いつでも帰ってこれるだろう。

「で、何かようか？」
「さっき言ったでしょう？ややこしいことに巻き込まれているようねって」
「・・・だから？」
「ややこしいことに巻き込まれているようね」
「・・・」
察しろってことか？
・・・何を？
「・・・ふぅ」
均衡状態、沈黙状態の空気を流したのは、虎郷のため息だった。
「私達は1ヵ月ほど前に、ある一定の関係性を持った」
「『仲間』とか言うんじゃないんだろうな？何度も言っているだろう、俺は――」
「『友達』よ」
俺の発言を遮りそう言った。
「『仲間』では無いにしても『友達』であるとは、自信を持ってそう思うわ」

虎郷はそういった。
「だから、問題は1人とか2人とかではなくて、皆で分け合うべきだと思うの。それが友達としての当然の行いだと思うわ」
「・・・そうだな」
「友達は私だけじゃなくて、終さんや東さんもあなたにとっても私にとってもそうであるとは思うわよ」
「・・・それもそうか」
でも・・・。
「でももなにもないわ」
「人の心を読むなよ！！」
「あなたに言われたくはないわ」
うッ・・・それもそうか・・・。
いや、ココで俺は折れないぞ！
「人の心を意図も簡単に読むなんて、プライバシーの侵害よ」
ぐぅ・・・。ぐうの音も出ないというのはこのことか・・・。
だが、俺のメンタルはそう簡単に・・・
「どう責任をとってもらおうかしら・・・」
クスリと、とても恐ろしい微笑をした。
これは、女子のセリフではない！ヤクザのセリフだ！
俺の中でセリフが「どう落とし前つけてくれるんかいのぉ！おお！？」と変換された。
「まずは・・・フフッ・・・」
「俺が悪かった。取り敢えず、不敵な笑みを取り下げろ」
メンタルの弱い男だと思うがいい。

私の心は半分に折れてしまった・・・・・・！

「で、何があったの？」

「・・・ん・・・？あぁ・・・」
折れてしまった心に修復期間を与えるために、俺は虎郷の申し出をしぶしぶ受けた。
それら全てを聞いた虎郷の反応は、
「そう」
と、淡白だった。

「淡白なのは生まれつき・・・ではないわね。2年前からよ」
虎郷が俺の心を読んできたことに関しては割愛（しないと俺の心はぽっきりと折れる）。
それにしても。
2年前か・・・。
彼女も苦労しているということだろう。その心を修復するには、俺と同じく修復期間が必要だろう。
しかし、期間は長く。その修復作業に、俺が手を貸すことは・・・
まぁ、吝（やぶさ）かでは無い。
けれどそうするべきだとは思わない。ここからは彼女自身で助かるしかないのだと思う。
それでも、何とかしたいと思うのは、『友達』だからなのだろう。
そうであれば嬉しいし、
『仲間』であれば尚嬉しく思うのである。

０７ー現在の友情ー（後書き）

もしかしたら、近未来的に地球が滅ぶとしたら、後悔しないような生き方をしたい。破壊的でも消失的でも自発的でも受身形でもいいや。恋をしようと思う。

論外問題ではない。「論内」だ！

０８ー解析終了の音は金鎚ー（前書き）

雨が降ろうが槍が降ろうが・・・とか
例え火の中水の中・・・とかって。そういう職業の人いるよね？
順番に。
古代の戦争の最中の兵士たち。
消防士とスイマー。
そういうのもいるよね。

０８ー解析終了の音は金鎚ー

「で、能力は解明できたの？」

昼休みの間に虎郷を彼女の中学校に返す事にした。
うちは「榛谷（はりがい）第２中」で、進学校ではないのに対して、
彼女の学校は「東海林（しょうじ）中学校」という進学校の在校生である。

「いや、分からん」
「考えてみたの？」
「・・・いや・・・隼人が考えるだろう？」
「・・・ふむ」
と顎に右手を添えて、虎郷は言った。
「さっきは、仲間を・・・友達を頼れって言ったけれど、だからと言って頼りすぎじゃないかしら？」
「どういうことだ？」
「自分で考える事も大事だと思うわよ」
「・・・それもそうだな」
というわけで考えてみた。しかし、最終的には
「でもなぁ・・・総合的に考えるとそれこそ何でもできる能力としか思えないんだよ」
という結果だった。
「何でもできる・・・か」
「ん。いや、何でも見えるなのかな？未来が見えるのか・・・人の思いが見えるのか・・・」
「私やあなたと同じような能力という考え方ね」
「あぁ。でも、何かそんな感じじゃないんだよな・・・」
「・・・深く考えるとむしろ出て行けなくなるタイプの問題かもし

れないわね」
と。そういう結果だった。
「この地球・・・世界だってそんな物よ。太陽との距離とか人間が生まれて文明が発達したりとかそういうものはほとんどは、偶然がもたらしたものなのだから」
と。
きれいに丸く収めた虎郷は
「ここでいいわ」
と言った。
「ん？まだ後１０メートルくらいあるぞ？」
「だから、よ。学校にこられたら、後で噂になると困るのよ。私は清楚で可憐な「深窓の令嬢」を演じ続けるのだから」
「人の学校には侵略してきて、よけいなこと言おうとしたお前が言うのか」
「それで人の心を読んだ責任はチャラということにしましょう」
「安ッ！」
まぁ、安い事に越した事は無いけれど。

そして、結局そこで別れ俺は学校に戻った。昼休みは丸つぶれだったが、掃除の時間には間に合った。

俺は学校ではあまり囃し立てられるようなキャラクターでは無いので、学校に帰っても何か言われる事は無かったが、皆から不思議な目で見られるし、あの女のことを「深窓の令嬢」などと呼ぶ男まで生まれてしまった。
あぁ・・・憂鬱だ・・・。そして隼人のせいで全てこうなったのだろう・・・。
アイツは何もしなくても俺には迷惑をかけるようだ。
そんな事を考えながら、窓の風景を眺める事で本日を終えた。
学校から帰る前に、虎郷の言った事を思い出す。

頼りすぎ・・・か・・・。でも確かに、俺はどうすればいいのだろう。
俺は、アイツが居なければ何もできないのだろうか。
例えば、アイツはもし俺が居なくても事件を解明する事はできる。俺が居る事に意味があるのは、５日かかるのが３日で済むだけの話である。
でも、俺だけでは事件を解決する事はできない。隼人は事件の早期解決のためだけに俺たちを『利用』しているだけの事だ。
早い方が優秀で。速いほうが強い。
だから、疾風の鳥「隼（はやぶさ）」なのだ。
そんな事を考えた後、誰も居ない教室で
「はぁ・・・」
俺はため息を吐いた。

そして気付けば校門に立っていた。
「ここでアイツの能力を見たんだよな・・・」
ボールの速度と植木鉢の落下速度、ボールの足捌（あしさば）きのテクニックや、全ての位置。
飼育委員の声を聞いてからの反応速度とは思えない。それこそサッカーボールを上に蹴ったらそこに植木鉢が落ちてきたようなものだ。
それに、くじ引きの時もそうだ。隼人が言っていたように、あそこまで偶然が重なるなんてありえない。別の何らかの能力が起因していると考えるほうが自然のはずだ。他人の考えを読めるような・・・見えるような能力と言う事だろうか？
「何もかもありえねぇよ・・・」
そう、ありえない。あってはいけないのではなく、あるはずが無い。

「・・・・・・・・・まさか・・・」

突然、脳神経に電撃が走るような感覚だった。コナン君はこんな感覚を持っていたということか。

俺は走り出した。歩かなければ、隼人の家まで15分もかからない。

その途中に虎郷がいた。

虎郷が俺の方を振り向いた。同時に俺は虎郷の手を掴んだ。

「って・・・何？」

「分かったんだ。多分・・・」

「あぁ、その人の能力の事？」

「ああ」

「どんな結果？」

「常識で考えたからダメだったんだ」

「？」

「だって俺たちは・・・っと」

着いた。そして、玄関のドアを開けた。鍵は開いていた。全く・・・部屋に引きこもるなら、家の鍵は閉めろ！と思って気付いたが、基本はオートロックだった。のでそれはつまり隼人はそこにいるということ（しばらくしてから気付いた）。

そして解析終了の音が鳴る。隼人は頭に白い手ぬぐいを巻いていた。

トン、カン、と。金鎚が音を鳴らしていた。

「・・・あ、嘉島君」

「隼人・・・！」

「ダメだろう、ドアを蹴破っちゃ。まぁ直したけれど」

そして、頭に巻いていた手ぬぐいをはずして言った。

「君たちはさっさと着替えて。行くよ」

その発言に虎郷が反応した。

「どこに？」

「海馬君家(かいばくんち)。聞いてるよね？」
そういって、隼人は準備完了していた。

着替えを終了させた俺たちは、リビングに立った。
「隼人・・・」
「・・・嘉島君も分かったんだね？僕とは多分違う結果だろうけど」
相変わらず、見透かしたような態度をとった。
「あぁ」
「で、どんな結果なのかしら」
虎郷がさっきと同じ質問をする。
「常識で考えちゃダメだよ・・・だって僕らは、」
俺の方を向いてアイコンタクト。
「「非常識だから」」

０８ー解析終了の音は金鎚ー（後書き）

新作考えると今の作品に支障が出てしまうタイプなので新しい小説のネタは闇に葬ってみた。

うむ。どうにも頭から消えない。

０９ー王の『推理』と俺の『実験』ー（前書き）

こんな世界に生きる意味なんか考えてはいけない。

生きてほしいと願う人がいるなら、それは自分の命じゃないのだから。

僕には哲学的にそれを語れないから、感覚で理解してもらうしかないのだろう。

０９ー王の『推理』と俺の『実験』ー

「で・・・・どんな話を聞かせてくれるんだ？」
長い机に夕食を用意していて、晩餐会という雰囲気だった。メンバーは４人。
俺と隼人と虎郷と海馬だけである。
海馬の家についたのは、７時だった。
門に着くと、警備員が
「嘉島奏明に王城隼人、それに『深窓の令嬢』・・・か。本当にきたのだな」
と言って門を開けてくれた。
「夕食の準備ができている。入れ」
・・・夕食？

といったところで、今現在。
冷静に食べる隼人。自己紹介もしてない状態で、ふてぶてしくも食べる虎郷。行き場の無い俺。
そしてニコニコ笑顔の気さくな海馬君。４人、それだけだ。
「食事中に言ってもいいのかい？」
「別にいいが・・・『深窓の令嬢』のアンタの名前聞きたいなぁ」
「あ、そうね」
口をナプキンで拭いて（この間まで決して裕福ではなかったくせに様になっている）お辞儀した。
「虎郷火水です。漢字は―」
「虎に郷里の郷、火と水だろうな、合ってるか？」
「流石ね。それがあなたの能力なのね」
虎郷はそれだけ言うと、水を飲んだ。
「じゃ、君の能力の証明だ。せーのッ」
俺たちは同時にナイフとフォークを投げた。

６つの刃が１つの的に吸い込まれる。
距離は遠いが、男子に届かない距離ではない（虎郷の腕力は女子のそれと同等ではない）。
が、時間差はある。海馬がナイフを投げた。
海馬の投げたナイフが１番近かった隼人のナイフに当る。
その衝撃で、海馬のナイフの軌道線が上、隼人のナイフが下に落ちる。
そのまま海馬のナイフが隼人のフォークに当たり、それでナイフは落ちる。が、フォークは軌道が下になりつつも進む。その間、最初に衝突した隼人のナイフが落ちる軌道に俺のナイフがあった。当然２つともが落ちる。結果、テーブルに３本のナイフが落ち、そのうち１本が刺さる。その１本向かって俺のフォークと虎郷のナイフが当り、落ちる。最後に、軌道線を変えた隼人のナイフと虎郷にフォークがぶつかって落ちる。計、７本の食事用道具が落ちる。
「おいおい・・・。急に投げんなよ。ビックリしたじゃないか」
「・・・推理通り」
ニヤリと隼人は笑った。
「君の能力は『狙える』んだ。何かを狙う際に全てを見極めるんだよ。君の頭の中に狙うための全ての情報が流れるんだよ」
つまりは、くじ引きをしようということになれば、どれを引けばいいかが分かる。席を狙うことが出来る。植木鉢を狙うならば、ボールをどのように弾けばいいかわかる。と、隼人は言いたいのだろう。

「残念はずれ」
海馬は言った。
「・・・え」
隼人は言った。というかぼやいた。いや、呟いた。でもなく、声が漏れたという感じだった。
「え・・・」

次は虎郷の声。これは驚きの声に他ならない。隼人の推理が外れた事に。
「もう一度言うぞ。残念はずれ」
「そ・・・んな・・・ばかな・・・」
隼人の心が折れた。
ぽっきりと。半分に。
プライドが高いからなぁ・・・。
5秒ほど時間が空いた後、
「・・・拍子抜けだぜ」
と海馬は言った。
「俺は、今日、お前らに能力が解析されると思って呼んだんだけど、まさかこんなもんだったのか？」
海馬はそう続ける。
「隼人・・・3日も考えてそれが今回の結果なのかよ・・・マジでねぇわ」
と海馬最後に言って立ち上がる。
「帰るぜ。俺は。お前らもでてけ」
「あ、海馬」
俺は提案する。
「紙を2枚と鉛筆1本持ってきてくれ」
「・・・？」
「俺が別の推理を見せてやる」

俺のは隼人の推理とは全く違う結果が出た。
隼人と虎郷が俺に驚きの顔を見せ。
海馬は、ニヤリと笑って
「いいぜ」
と言って出て行った。

しばらく・・・というほどもせずに海馬は帰ってきた。
そして、それらをココに置く。
「で？どうすんの？」
俺は海馬に紙を投げ、鉛筆を置いた。
「1・・・いや、0～9まで、好きな数字を10個書いてくれ。俺は見ない」
「・・・・・・いいぜ」
俺は自分の席に戻り、座った。これでアイツが何を書いているかは分からない。
その間に周囲をうかがう。
部屋の隅には一個だけ、小さなゴミ箱があるが、野球部が投げないと入らないだろう距離にある。
隼人は少し放心状態で、虎郷は関心を持った顔で話を聞いている。

「書いたよ」
と海馬は顔を上げた。
「おう。じゃあ、鉛筆だけくれ」
海馬は遠い距離から鉛筆を投げる。
俺は、紙に数字を書きながら言った。
「もし、隼人が言ったとおりならば、海馬は今何を狙ってる事になるんだ？」
「え？」
「今、海馬は何を狙って書いたんだ？」
「・・・別に何も狙ってないんじゃないかい？」
「いや、俺たちは何かをしようと思ってそうなるわけじゃない。それはお前も知っているだろう？ということは、今こいつは何かを狙っているはずだ。だとしたら、何を狙う事になるんだ？」

「・・・」
「分かってるだろう。こいつは当てたわけじゃない。当ったたんだよ」
俺は、紙を見せた。
３＋１　２＋２　５＋９　７＋３　１＋５　３＋５　６＋３　２＋５　７＋１
と書かれてあった。
「海馬・・・。見せろ」
「・・・まさか・・・」
海馬は紙を上げた。
４　４　１４　１０　６　８　９　７　８
「答えはあってるだろうな」
海馬は言った。
「わざと９個にしても、０～９って言っておいて、答えが２桁になるようにしても、一緒だったという事・・・それはつまり、そういうことだ」
俺は言って、指を銃の形にして続けた。

「彼は運が良いという能力だ」

決まりきった世界に。

決まりきった未来が見えた虎郷のように。

偶然がもたらした世界に。

偶然で自分自身の世界を作り上げていた男。

それが海馬　正。

脳の海馬・・・記憶に関係なく、正しい世界を見つけることができるという。

そんな幸運かつ不幸な男だった。

１０ー身勝手な怒りと衝動的怒りー

「・・・・・・どうしてこうなった」
俺は呟いていた。
俺と海馬はかなり広い庭にいた。但し俺は立っていて、海馬は仰向けに倒れている。夕食の部屋の壁が傍らに落ちている。警備員たちが来るかと思ったが、全員帰らせたようだ。
もう、後には引けない。

「・・・海馬。価値観を押し付けてやる」
「・・・・・・・・・ぶっとばす」
海馬はゆっくりと立ち上がり、俺を睨んだ。

こうなってしまった理由は一体なんだろうか。とりあえず、少し前の俺の記憶を見てみることにしよう。

「その通り。俺の能力は『運がいい』それだけだ」
そう言って海馬は紙をグチャグチャに丸めて、ゴミ箱を見ずに後ろに向かって投げる。俺のと海馬のを右手と左手で。
紙はゴミ箱に吸い込まれるように入った。
「俺は狙わなくても入る。俺は何かをしようと思っても思わなくてもそうなるはずだ」
そう言って、海馬は笑った。
「席替えの時も、そういうことだったんだな」
そう、隼人が言ったとおりだったんだ。

「偶然自分の前の席だった海馬君が、偶然君の願いを聞き、偶然僕とも出会って、偶然引いた３つのくじが、偶然先生の書いた見取

り図と一致して、偶然君と海馬君の願い通りだった」のである。

「・・・で、何かようなのか？」

今度は隼人に向かっていっていた。隼人の放心状態は解消されている。

「僕らは、君の能力を解明したかっただけさ。でも、どうやらその能力は以前からあったものではないね。つまり新しいものだ。だからそれには『名前』が必要だ。」

「そうなのか。ふーん」

「名前は君が付けていいよ。ていうか、そうしないとダメだ。君の体を能力の方にのっとられる可能性がある。そのために物事に『名前』は存在するのさ。まぁ、そういうタイプの能力じゃなさそうだけれど」

「・・・何か規制はあるか？英語とか・・・」

「そっちの方が僕は好きだね。まぁ、日本語バージョンもなくはないけれど」

「・・・『サデンリィー・ラック』、日本語なら『必然的偶然』だな」

「悪くないセンスだね。後、できれば君の過去について聞かせてくれるかい？」

「理由にもよる」

なんかどんどんと話が進んでいるな・・・。

隼人はきっと過去に関する話からその能力が生まれたと思っているのだろう。つまり、海馬は『ミラー』ということか・・・。

「君の過去が、この能力に関わっていると思う。僕はその能力とかを蒐集（しゅうしゅう）したいんだよ」

「・・・つまりはどうやったら俺の能力が起こるかということか？」

「察しがいいね」

「・・・いいだろう」

海馬の言葉と同時に、隼人は目を閉じた。

「俺の家は今日、昨日できたような現状だ。隼人も何の仕事を海馬家がしているかは知らないだろう？」

「そんなには聞かないな。まだできてばかりの会社でこの裕福っていうのはすごいけど・・・」

「そんなすごくは無いな。この会社は俺の力で建てたようなもんだ」

「？」

「・・・別にそこまでいい環境だったとは言わないが、少なからず家族の関係は良好に保たれていた。だが、少し前に宝くじが当ってしまった・・・。2億だったな。もちろん俺の能力だ。その時までは自分の能力を俺は理解してはいなかったがな。その後、俺の父親の立場に居るはずの人間が俺の力に気付いて――このとき俺も始めて気付いたのだが――いろいろな宝くじを買わされた。それらのほとんどが当るんだから、父親の立場の人間から馬鹿笑いがでたな。そして、母さんもどんどんと蝕まれていった。金という欲望に。俺は自分の運を恨んだな。どうしてこうなってしまったのか。本格的にナゾだった」

それ以上は語らなかった。

「そんなところだ」

と海馬は締めくくった。

「なるほど・・・ね」

と、隼人は目を開いた。

「・・・一応聞いておいてもいいかい？」

隼人は指を出した。そして、

「死にたいとは思わなかったのかい？」

そう聞いた。

「死ねると思わなかった。死ねるはずが無い。俺は俺の命を絶つことすら許されてねぇんだ」
海馬は笑った。笑顔ではなかった。

「死ねるほうが幸せだ。俺は運が悪い。死ねたらどれだけ楽だろう」

瞬間的に俺の体は動いていた。
机を強制的に立ち退かせ（蹴飛ばした）、海馬の顔を殴った。
勢いあまって、そのまま壁に激突する。粉砕する。そして・・・・・・。

あぁ今はそういうことなのか・・・・。
じゃあ、ちゃんと言っておこうか。
「ぜってー命なめんな！」
俺の発言。
「ぶっ飛ばす！！」
海馬の怒り。

11 ―謎を謎のままにはしない―（前書き）

以下です。

11 ―謎を謎のままにはしない―

俺の能力は『リメンバー・リメイン』
この右手で触れば、そこに残った残留思念を読み取る事ができる。
それは死体からでも、物体からでも、現状の人間からでも同じだ。
この手はいわば「受信手」。
その人間の名前を髪の毛から読み取るために。
その人が見た記憶を俺が読み取るために。
対して俺の左手は、「送信手」だ。俺の左手は死体でも物体でも現状の人間でも、思念を送ることができる。俺は物体にその手で触る事で形状を変えられる。ある程度は好きなように。軽い錬金術のような物だ。
爆発する電車を守るためにバリケードを作るために。
鍵のついた図書館の扉を壊すために。

これが俺の能力なのだ。

11 ―謎を謎のままにはしない―（後書き）

これだけですけど何か？

12ー俺にゃまだなんかあんだってー（前書き）

「シンデレラ。バトローション」っていうのも書いてますのでそっちも宜しく。イメージが違うので、危険性があるよ！

１２ー俺にゃまだなんかあんだってー

海馬が突っかかってきた。拳を固めている。
「ぶっ飛ばす！」
彼の運動神経は俺よりも上だ。正面から正々堂々と戦って勝てるような自信は無い。正々堂々と奇襲戦法だ。
俺は、地面に左手を構えた。地面が捲れあがる。
海馬の拳はそのまま突き破る。
「お前・・・地面をぶっ壊したって事だからな・・・」
「俺の強さをなめてかかるなよ・・・！」
めくりあがった地面の厚さは３０センチ・・・十分な厚さだ。別になめてかかったわけではない。単純にそこまでの強さがあるとは思わなかっただけだ。
当然、俺は後ろに下がる。間合いを取らなければ勝てそうにも無い相手だ・・・。
「距離をとっても勝てはしない」
「俺の心ってそんなに読みやすいですか？」
思わず敬語。同時に、何か飛んでくる。
さっき破壊した床の破片だ。投げたのか・・・。
「もう一発だ！」
２個目が飛んで来る。今度は、左手で受け止める。そして形状を変え、ナイフの形にする。

「うぉぉぉお！」
そんなに軽くはない。質量自体は変わらないのだから。
「飛び道具なら、俺には当たらん」
そう言って真っ直ぐ突っ込んできた。
目の前に立った。いや、立ったというほどの長さ正面にはいなかった。左手の甲で俺の右頬を殴る。

強い・・・・・・。
なめていたわけではないけど、ここまでとは思わなかった。本格的に死ぬ。
そこで俺の視界から強制退去を命じられた海馬が言う。
「俺の運のよさはさっき分かったろう？こんな方法をとってまで何がしたいんだ」
「命の尊さを教えたいと思う」
「ふざけるな！！」
俺に向かって、石を投げ続ける。壁の破片も含めて投げてくる。
俺は、左手でボロボロにするか、よける。
大丈夫・・・隼人が何とかしてくれる。

「嘉島君！」
ほら来た。
「昨日の植木鉢だ。どうしてあんな事が起きた。それに、本当に運がいいのなら、彼は自分の過去を・・・・・・母親や父親に対する憎悪を感じる事なんて無いはずだ！！」
「うるさい！！」
隼人の声を海馬が遮る。
一体何の事だろう。そう思ったときには海馬の投げた破片は俺に衝突する。
「！！」
もちろん痛い。しかも、１個くらうとリズムが崩れる。バイオリズムが崩れるとはこのことか！！いや、違うけど。
２個、３個、４個と追撃する。
隼人・・・一体何を俺に伝えたいんだ・・・。
植木鉢のことが起きたのは何故か？そんなの決まってる。
飼育委員が植木鉢を落としたからだ。あの植木鉢が落ちてこなければこんな事にはならなかったろう。
・・・・・・ん？どうして植木鉢が落ちてきたんだ。だって、根

本的に運がいいのなら――。

植木鉢は落ちてこないはずではないか！

そうだ。運のよさが最高級で完璧ならば、植木鉢が落ちると言う事もない。

過去の話もそうだ。もし、彼の運がそうであるならば、母親が彼の言うようなことになるはずが無い。

つまり、彼の運には何らかの弱点がある。

それさえ分かれば・・・。

俺は右手を地面につけた。もう既に、１０個近くの破片が当っている気がする。そのままの態勢で地面を壊した。俺はそこに自らの脚を引っ掛けて、転ぶ。

「！」

案の定、そのタイミングで投げた彼の石から衝突を免れた。

俺は、地面を強制的に捲り上げて壁を造る。

「・・・・」

俺が、海馬の弱点を探る方法。それは海馬に近寄って気持ちを読み取る事。俺の能力は、右手と左手に偏っているが、何もしなくてもどちらともの能力を軽く持っている。俺が近づけば、その人から情報を軽く認識できるし、俺が立っている近くの空気は軽くなっている。だが、深くの事を読み取るためには、彼に右手で触れるしかない。

ならば。

そう思ったときに、予想通り俺の正面の壁が右手で壊される。

俺はその腕を右手で掴んだ。

探せ！3秒以内だ！！
そして、2秒で、左手の追撃によって、俺の体は後方に向かってぶっ飛ばされる。
あぁ・・・本当に運がわるいな・・・
「何をしたいかは分からんが、お前の能力で、俺の弱点を調べようとしたのであろうと言う事くらいは分かる。だが無駄だ」
「・・・・・・」
「俺も知らん」
そう、読み取ったが、分からなかった。というか、彼にはこの能力について、『運がいい』という要素以外を知らないようだった。
「・・・」
俺は、倒れた体を起こした。
「「ある1つの仮説を立ててみよう」」
俺と隼人は同時に口を開き、同じ言葉を吐いた。
俺は、両手に石の破片を持つ。そして、それの形状をナイフにする。
走りだす。海馬の正面に、向かってそれらを投げる。
「俺に飛び道具は効かん！」
それを回し蹴りではじく海馬。
「じゃあ、飛び道具で勝ってやるよ」
海馬はその蹴りの勢いで、1周回ってから振り向いて
「なっ！」
驚きの声を上げた。
俺は地面に触れたまま――1メートル四方くらいの地面をずっと伸ばしながら。
海馬に突っ込む。

「おりゃぁぁぁぁぁぁ！！」
その伸ばし続けた床を槍のように鋭くして、巨大ナイフを1本作りだして、海馬にさした。
「ぐあああああ！！」
痛みには慣れていないようで、すごい声を上げた。耳が張り裂けそうだ。

「ど・・・どういうことだ！！俺の運が負けるわけが無い！」
「『仮説の結果はこういうことだ。君は・・・君の運は、『予想外の事』には対応できない』」
つまり、あんな巨大なナイフが出てくるはずが無いと思っていたことが原因だ。
まさか、母親があんなことになるとは思っていなかったのだろう。
まさか、植木鉢が落ちてくるとは思わなかったのだろう
だから、彼の運は悪いように作用した。

「・・・そう・・・いうこと・・・か」
そして、海馬は少しずつ冷静さを取り戻していく。
「・・・流石にあんな巨大ナイフを見せ付けられたら、俺ももう予想外なんて事はなさそうだ」
「・・・そうでもないぜ？」

俺は左手を構えた。
「隼人も虎郷も予想外の必殺技だ」
俺は左手を、引いた。

「・・・何をする気だ・・・？」
「飛び道具で勝ってやるって言ったろう？」

隼人も虎郷も海馬も不思議な顔をしている。当たり前だ。俺だってできると思っていない。

俺は左手を前に突き出した。

「！！」

海馬の体が後ろに向かって吹き飛ぶ。

門に激突する。門の扉をへしゃげることでようやく海馬は止まった。

「・・・あちゃ・・・手加減できなかったか・・・」

「な・・・何をしたんだ？嘉島君」

隼人も虎郷も驚いた顔をしている。当たり前だ。俺が１番驚いている自信がある。

まぁ無理も無い。俺は、海馬に触れずに、海馬を１０メートル程度ふっ飛ばしたのだから。

俺の体は、能力上何かの『記憶』を送信し続け、何かの記憶を受信し続けている。つまり普段、何もしていない時には空気の『記憶』を送信し続け、空気の記憶を『受信』し続けている。左手はその中でも、空気への送信が激しい。つまり、そこには空気が密集しているのだ。

だから、俺はそこにある空気をふっとばした。

この年でカメハメ波を成功させてしまった少年であった。

１２ー俺にゃまだなんかあんだってー（後書き）

・・・・・・長かったな。

読者さん。お疲れさまです。目を休めてください。

１３ ー まとめ ー （前書き）

相変わらず、まとめは嘉島ではなく「俺」が担当する。

彼に重い話をすれば、能力で心が折れるだろう。彼の能力は人の心が読めてしまう。感受性が豊かなんだから。彼の能力はとてもやさしいんだから。

13 ―まとめ―

さて、いつもどおり、話のまとめを言っておく事にしておく事にしよう。

海馬正の過去の話には、彼自身も気付かなかった事実が数多くあった。もちろん、真実を言うのに俺は各かではないが、但し、傍観である立場の「俺」がそれを語ってしまうというのは、どうだろう？という気がするので、ココからは隼人の推論を俺の口で言わせてもらう事にしよう。まぁ半分以上は正解なのでいいだろうと思う。俺が知っている情報も付け加える。

彼がまだサッカーをしていた当時に、宝くじが当たった。

彼の能力は、初めて宝くじが当たった時にはまだ無かった。あれは、単純に彼のパーソナリティとして、それこそ普通に「運が良かった」のだ。だから、その当時はまだ普通の家庭環境を保っていた。しかし、それが原因でもあったのだ。

2億もの大金があれば、欲が増すのは当然のこと。彼の父親はギャンブル等に走り始めた。結果、海馬家は破綻した。そして海馬は考えた。思った。

「俺がもっと願えば、こんなことにはならなかったんじゃないのか。家族の運がよければ・・・俺の運の良さがもっと良ければ、こんなことにはならなかったんじゃないのか。もう1度宝くじが当たるだけのパーソナリティが俺にあれば良かったんじゃないのか」と。

これが1度目の家族の崩壊。母親は離婚した。父親の立場の人と。

海馬はサッカーをやめた。

海馬の母は再婚した。海馬は前の父も今の父も「父親という立場の人間」と称していた。会社の人間の前では、印象良くしていたが。まぁそれでもこの家庭はまた、普通に良い家庭だった。何の問題も無い、むしろ以前よりもいい環境を作り上げていた。

苦あれば楽ありとはよく言ったものだ。

苦しみを越えてきた彼と母親には楽しみがあったはずだ。が、長くは続かなかった。

楽あれば苦ありとはよく言ったものだ。

理由は大人になれば誰しも1度は挑戦するであろう、そう「宝くじ」。またも宝くじだった。そして、運の悪い事に、運良くそれが当たってしまった。海馬は自分には運がいいというパーソナリティがあることを悟った。

だが、それが2度も当たった――運悪く当たってしまった――ことの証明にも言い訳にも理由にも原因にも同情にも金にもなるとは思えないが。

そして、彼は思った。

このままじゃ、また破綻する。俺はまた何か失う。運が悪い。運良くも運が悪い。このままじゃ俺は家族を・・・母親を失ってしまう。何とかしないと。

家庭を滅ぼさないためには、宝くじを当て続ける事。

そこまで考えたとき、彼は9歳だった。

父親（の立場の人）と一緒に、あらゆるくじに挑戦した。もちろん１００パーセント当たるようなことは無かったが、それでも、生きていくには十分な物だった。

だが、それで父親も分かった。こいつには才能がある、と。
そして、それを使って金を集めるという目的を行った。
そういう状況まで予測していなかったため、彼の運は思ったより作用しない。父親は切れる。理不尽な怒りをもって。
海馬は考えた。このままでは、母親が崩れる。家庭が終わる。それはダメだ。

そして彼は、願った。常人が持つような運を求めるような以上の願いだ。
「母親を守れるだけの運の強さが必要だ。俺に・・・それだけの力を」
結果、家庭は別の形で崩壊した。
物欲、金欲に塗(まみ)れた。

母親も

13 ―まとめ―（後書き）

本末転倒が今回の話のオチだろう。どうしても俺はそう思わざるを得ないんだ。

１４ ―あれ、何で？―

「君、僕に借金したってことだからね？これは、王城の金ではなく、僕個人の資産なんだから」
「おう。サンキュー、隼人」
あの次の日。もう曜日の感覚も日の感覚もかなりなくなっているが、たしか１０月４日の火曜日だ。
海馬の家の修復に金を使った、隼人の。

「いや、感謝しても感謝したり無いなぁ、隼人には」
「全く誠意が伝わってこないよ」
と、隼人は俺の言葉の返事を溜め息で代用した。
「で、多分だけど君は彼も仲間に引き入れようって魂胆じゃないだろうね？」
「・・・あぁ。仲間じゃないけどな」
「ま、反対はしないけど。それにしても僕も君もヒスイ君も彼も、家族に不和と歪みを抱えているよね」「否定はできないよ。俺はそれらに惹かれているという気もするけどな」
俺もそうであるように。
・・・奏も響也も心配しているだろうな・・・。母さんは俺を心配するような余裕が無いだろうけれど。
「で、どうするというんだい？」
「・・・海馬にはこれを渡す」
そう言って、俺はポケットからカードキーを出した。
「・・・何だい、それ・・・あ、今日元さんか」
そう、これは虎郷が飲み込んだ物と同じ物だ。形状は違うけれど。
「どうやって渡すかが問題だな」
「そうだね。僕らが彼の家に侵入するのは難しそうだ」
「いっそのこと、投げ飛ばすってのは？」

「・・・・・・普通に考えても、修復作業中の工場員に化けるべきなんじゃないかい？」
「ん？あ、そうか」

というわけで。
３人で侵入ミッションに参加した。

「何で虎郷まで着いて来るんだ？」
「これから仲間になる人と対話したいじゃない？」
「はぁ・・・」
「心配するな。何があっても僕らはそれなりの手を打っている。僕とヒスイ君が考えた最高の策だ」
もし、こいつらがアレを本気で言っていたら、こいつらはそれなりに馬鹿だ。馬鹿と天才の紙一重を見ることになるだろう。

最初は順調だった。
作戦としては、まず、虎郷が「フューチャーライン」で、未来を見て人間の移動ルートを確認。
それを聞いて隼人がルートを検索。何とか移動ルートを見つけ出す（時間差さえ利用）。
上記２つについては工事用の地図を利用した。
そして、そのまま行くはずだった・・・のだが。

「おい。ルートミスじゃないか。何で人がいるんだ？」
そこに本当に人がいた。
「・・・ヒスイ君」
「・・・王城君」
同時に言った。
「どこをどうミスったんだ？」
「どこをどうミスったのかしら？」

「他人に責任を押し付けあうな！」
「何とかしよう」
「そうね。ケンカしている場合ではないわ」
「何とかって？」
「「囮作戦」」
そして、彼らは異常に速いスピードで消えていって。

俺は、その男の人に質問された。
結果。

工事関係者じゃないのにも拘らず、その服を着ているということで、俺は縄で縛られて、牢獄のような部屋に入れられた。

何で、牢獄のような部屋が何であるんだよ。

そう思ってから、気絶した。

１５ー嘉島と虎郷の即興マシーンー（前書き）

何か人気になる秘策みたいなの無いですかね？

ダメだしでもなんでもいいから、感想を下さい。

15 ―嘉島と虎郷の即興マシーン―

「何で気絶したんだっけ・・・」
まずは記憶を辿る。確か捕まって投げ飛ばされて、閉じ込められて。あ、そうだそうだ。寝ようと思ったけれど寝れないから、ためしに全力で頭を打ってみたら、気絶したんだ。
「・・・じゃあそろそろ行くか」
縄を分解して外す。さらに牢獄の扉（檻みたいなアレ）を捻じ曲げる。もちろん能力である。
さて、もうココまで来てしまえばなんでもいいや。不承不承、隼人と虎郷の作戦を利用すれば何とかなる。俺は、そこに有った黒いカーテンを破りさって体に巻いた。そして、地面を思い切り蹴った。
「な・・・何だお前！」
どうやらココは地下室のようだ。階段が上にあるのに対して、下には無い。1階にこんな部屋は無かったから間違いないだろう。てか、この家の警備員か。仕方がない。俺は少し前の床を左手で変形させ、捲りあげた。そこに向かって走る。多少なら遠距離でも、俺の左手の効果はある。
「快刀乱麻」
言いながら、俺は捲り上げた床を伸ばす（床には余裕があるから、いくらでも伸ばせる）。ループを作り上げて万有引力の法則を無視し、床を走る。
一応伝えておくと、このとき俺は「快刀乱麻」は、怪盗なのだと思っていた。本当に恥ずかしい。
ともかく。
彼の部屋が何階にあるのかは知らない。だから、俺は全力で走り続ける。
「・・・・・・・・あ」
そうだ。右手と身体で隼人を捜そう。と思いついて3階廊下で止

まったと同時に、虎郷が正面に現れた。
「何だ、嘉島君か」
「残念がるな。俺のガラスのハートが傷つく」
「そう。ならば、粉砕してあげようかしら？」
「お前は、防弾ガラスだな」
俺が何か言うたびに、それ以上のダメージを俺に与えようとする。
「最上階・・・・・・屋上は含めないわよ？そこに彼の部屋があるわ。王城君もきっとそこにいるでしょう」
「そうか。じゃあとっとと行くか」
俺は走ろうとする。が、その手を虎郷につかまれる。
「・・・・・・何？」
「走る必要はないわ」
と、天井を指した。
「あなたの左手と私の力が有れば十分でしょう？」
「あぁ・・・そうか。最上階って何階？」
「１０階」
「了解」
俺は床に左手で触れた。
「じゃあ、嘉島エレベーター起動」
感情のこもらない声で虎郷が俺の肩をたたく。
「虎郷デストロイロケット発射」
俺はそう言い返して、床を上に向かって伸ばす。嘉島は足を構え、思い切り足を突き上げた。足と天井の間には３０センチくらい差が有ったのに、天井をぶっ壊す。ソニックウェーブか！衝撃波だな！と思ったが、それを言ってられる程僕には余裕はないし、彼女も反応するような余裕は無いだろう。なぜなら、２秒の休みも無く、彼女は天井を破壊しなくてはならないのだから。
というわけで、４、５、６，７，８，９と壊して、そこで降りた。途中何人か警備員が吹っ飛んだ。
「どうして止まったの？」

「上を蹴飛ばして、隼人が居たらどうするんだ。あいつは俺より弱いんだよ。耐久力はな」
「そう。では速く行きましょう」
俺よりも、1．2倍くらい速いスピードで階段に向かった。俺は念のため、階段前に壁を設置した。

「さて・・・始めようか」
会談を。

１５ ― 嘉島と虎郷の即興マシーン ―（後書き）

絶対、嘉島君は錬金術師だと思う！

１６ー飛び降りるー

「ソウメイ君。ヒスイ君。思ったより早かったね。床を壊していたのは君達だったか」
階段を上って早々、彼は見透かしたようにそう言った。
１０階には１つしか部屋の扉が無かった。
「ここが彼の部屋だ」
その扉のドアノブに手をかける。
「待て！」
俺は走ってその手を止める（虎郷の手を無意識に掴んで、つれてきてしまった。後で謝罪しよう）。
「中に警備員が待ち構えていたらどうするんだ？」
「・・・・・・あぁ。そうか」
コイツは本当に何も考えていないんだな・・・・・・。それをサポートするのが俺の役目と言うことか。まぁ、いいや。その役は俺が夏休みに買って出たんだから。
「・・・・・・」
俺はドアノブに手をかけた。というか、乗せただけである。最近入った人数は・・・・・・３人か・・・。
「内装分かるか？」
「僕らが食事したのと同じくらい長いテーブルがある。そして、その部屋の西側に部屋があって、それは、彼の寝室と学習室をかねている」
つまり、彼は家族と食事を共にせず、この長いテーブルで１人で食べている・・・いや、あの優しそうなおじいさん・・・虎兵衛さんだったか・・・と食べていると言う事なのだろう。
「で、結局のところどうなのかしら？」
「中には３人。つまり、３人の警備員がいるだろうことが分かる。最初の部屋に１人、海馬の部屋の扉の前に１人、海馬の寝室に１人

だ。だから・・・・・・・隼人任せた」
「了解」
隼人は、思案を始めた。それも、ほんの3秒程度だった。
「君の左手で、牽制(けんせい)を入れて、相手の注意をひきつける。その後、虎郷君のスピードで1人潰す。それを狙ってきたもう1人の警棒を僕がはじくから、その間に嘉島君が残り1人を排除してくれ。その後は全員で好きなようにやろう」
「了解した」
「了承したわ」
俺は、扉に手を触れた。イメージは槍のような物・・・扉ごと全て作り変えて、向こうに突き刺そう。イメージは完璧。後は、速攻でやること。
「5、4、3、2、1」
俺は扉全てを槍へと変形させながら飛ばした。
「！」
警備員が警棒を構えようとしたのが見えた。が、ほぼ同時に、虎郷が蹴り飛ばした。そして、隼人の予想通りもう1人が虎郷を狙う。が、その警棒は隼人の足によって蹴り上げられて、宙を舞う。その隼人の頭を飛び越して、嘉島パンチ！という感じで。
「完了か・・・」
が、隣の部屋からもう1人が出てくる。
「！！緊急連絡！至急応援頼む！」
トランシーバーで連絡した。
「何でこんなに警備が固いんだろうな？」
「庭を破壊した挙句に、海馬君に怪我を負わせたからだろう？」
「・・・あぁ・・・・・・そうか」
という間に、虎郷が警備員をトランシーバーごと粉砕した。
「大丈夫かい？救援が来るようだけれど・・・・・・」
「壁を作っておいた。バズーカー砲2発分くらいの耐久力はあるだろう」

と言いながら、俺は海馬の部屋の扉に手をかけた。

「・・・・・・よお。嘉島」
「率直だが海馬。一緒に来ないか？」
「・・・・・・全く話が読めないな」
まぁ、だろうと思った。というわけで、俺たちの関係性を話した。つまり、俺たちは利用しあっているという事を。
「・・・・・・なるほど。しかし、俺たちにはお前らを利用する目的がないぞ」
「だから、俺たちはお前が必要だから・・・・・・少なくとも俺には必要だからな」
「・・・・・・・・・」
ドォォォォオン！！
「海馬、もしかしてバズーカとか家にあるのか？」
「あぁ。地下の武器庫にある」
武器庫って・・・・・・。

「逃げよう！」
「ああ」
「ええ」
隼人と虎郷が窓に手をかけて、飛び降りた。
「・・・・・・！！おい！」
海馬が叫んで下を見た。と同時に2人は上に上がってきた。
「ひ・・・・・・飛行機！？」
海馬が叫んだ。飛行機に縄がついていた。そこに、2人は捕まっている。
「・・・・・・早くしたまえ、嘉島君」
俺は窓に手をかけた。

「・・・・・・」
俺は、そのまま海馬に顔を向けた。
「一緒に来い。海馬」
と言ったと同時に、警備員数人と、虎兵衛さんがやってきた。

「爺や・・・」
「・・・・・・行くのですか？」
虎兵衛さんが訊いた。
「・・・・・・・・」
「あなたの好きになさってください」
虎兵衛さんが続ける。
「海馬。来い」
「・・・・・・俺はどうやってココから出ればいいか分からないんだ」
海馬は呟いた。
「ココを出て行くと、何もかもが俺から消えていくような気がするんだ」
「・・・・・・・・・・・・」
母親・・・家庭か・・・。
「どうすれば、俺はココを出て行けるのだろうな？」
「簡単だ」
俺は手を差し伸べる。
「ほら、ここを飛び降りるだけ」
「・・・・・・・・」
海馬は足をかけて、
「行ってらっしゃいませ」
「行ってきます。あの人たちにもよろしく言っといてくれ」
海馬は飛び降りて、縄に捕まった。

１６ー飛び降りるー（後書き）

手滑ったら死ぬな。

いや、運良く下にトランポリンでもあるかな？まぁ、結局生きるだろう。

17 ―目的―（前書き）

第二章終了。

もちろん、後日談もありますよ。

17ー目的ー

「お前が自ら引き入れてくるとはな」
「ということで、受け入れてくれますね？」
「それはそれ、これはこれだ。何の能力かも分からない、どこぞの馬の骨をおいそれと仲間にするわけにはいかないな」
「信用は出来ますよ」
「俺もそんな感じはするけど、それもそれ、だ」
ＷＲで、俺たちは会議をしていた。議題は当然、『海馬正の引き入れ』について。まぁ、会議とは言っても、今現在は、バーのカウンターに座っている。
「でも今日元。俺は、嘉島の言っている事を尊重するべきだと思うぜ。コイツが少しでも仲間じゃなくても、友達という形でも、俺たちをそう見てくれりゃあ、それは良い事だろう？」
「・・・・・・そうだな」
東先輩の意見を聞いた今日元さんは、海馬の方を見た。
「まだ話してないからよく分からないけれど悪い奴ではなさそうだな。それはともかくとして、アイツは何の能力・・・・・・アクターなんだ？」
「珍しい事にオリジナルだそうです」
今日元さんの問いに隼人が答えて、皆が海馬の方を見た。当の本人はダーツの矢を持って、ダーツ板に背を向けて座っている。
「見ていれば分かりますよ」
虎郷が今日元さんにそう伝えると同時に、海馬はダーツの矢をそのままの状態で板に向かって投げる。中心に突き刺さる。さらにもう1本投げると、それは中心に刺さった矢の後ろ側に突き刺さる。さらに、同じようにもう1本投げ、同じように刺さった。
「・・・・・・御見事」
今日元さんが、感嘆の声を上げた。

「『サデンリィー・ラック』だそうです。予測不能な事態に対しては対処できないようですが、運の良いという能力ですよ。十分な逸材です」
「・・・・・・海馬っていう人ー」
今日元さんが、手招きで海馬を呼んだ。海馬は急遽呼ばれた事に驚いたようで、今日元さんの前に立つと、驚いた顔をした。
「美しい・・・・・・・」
・・・・・・まさかの事態。何に驚いているんだコイツは。
「は？」
今日元さんはもう一度驚く。
「嘉島、この人がリーダーか？」
「・・・まぁ、そうだ」
「名前をお教えいただけないでしょうか？」
「今日元・・・・・・終・・・・・・」
「今日元さん・・・ですか。あなたのような人間に出会えなかったとは、俺は不幸ですね」
「え・・・あ、あぁ・・・」
今日元さんが反応に困っている。ペースを乱されているようだ。
「で、一体何のようですか？」
「・・・・・・えっと・・・・・・」
今日元さんは、　ゴホンッ　と1度咳をして、
「お前に対する質問だ。それで受け入れるかどうかを決める」
「何なりと」
「俺たちを利用しあう目的は何だ？」
目的・・・・・・つまり、俺たちが利用しあう理由・・・・・・か。だが、彼を引き入れようとした時、目的が無いという話もした。今までの話を聞いて、彼に目的が出来たとも思えないけれど・・・・・・。

「・・・・・・この世界は、俺なら好きなように生きていけると思っていた。でも、嘉島や王城、虎郷が価値観を変えた。俺には未だ予測不能なことが起きる。お前らといると、異常事態って感じだ。でもだからこそ俺がコイツらと付いていけば面白そうだ。つまり、俺の目的は」

海馬はそこで笑った。

「運試しだ」

「合格だな・・・」

彼にとっては何もかもが偶然なのだろう。

幸運な偶然。

偶然がもたらしたこの世界というのは、彼には1番的を射ている。

でも。

それだからこそ。

俺達との出会いだけは、偶然でないと信じたい。

１７ー目的ー（後書き）

最近、１時間しか執筆時間がないので必死です。

更新がたびたび遅れます。

２作品書いてるという点で、了承をお願いします。

後日談ーWRでー（前書き）

麻雀のルールって分かりますかね？

後日談ーWRでー

「なぁ、海馬。もしかして、お前って女たらし？あ、隼人、それ、ポン」
「その言い方は気にくわねぇな。何処にそんな証拠が？」
「いや、そういう事を言ってる時点で、認めてるよね？タダシ君。まぁ、僕がとやかく言う事でもないんだろうけどさ」
「というか、あなた、私にも今日元さんにも『美人』だの『可愛い』だの言ってるわよね？」
「あ、虎郷、それチー。ってか、自分で自分のこと褒めてるよな？それ」
「勘違いするなよ？俺は可愛い或いは美人限定だ」
「むしろ性質が悪いよ……タダシ君それチー」
「いいじゃないの。私のことを傾国の美女と言ってくれているのよ？」
「そこまでは言ってないと思うぞ」
「そんな事をしてふざけている間にリーチだ」
「タダシ君が最初にふざけたよ・・・・・・」
「私は勝つことはないでしょうけど、まぁ負けないでしょうね。リーチ」
「ふっ。俺が勝ってやるぜ」
「ロン！」

海馬が、牌をこちらに見せた。1・9・1・9・1・9・東・南・西・北・白・撥・中の13。対して俺が置いた牌は白。つまり……

「国士無双だ。俺が勝ったから褒美は、今日の夕飯係交代だ。もちろんビリとな。今日元さん、コーラ下さい」
そう言って海馬は立ち上がった。

「……俺が負けってことだよな？」
「うん。夕飯よろしく。なんだかんだで君の料理は美味しいから期待してるよ」
隼人は立ち上がり、肩に手を置いて、今日元さんに「紅茶を……ダージリンで」と頼んでいた。

コイツに勝てる奴いるのかな？現在、アイツに勝てるゲームはチェスで隼人、ダウト（トランプゲーム）で俺、オセロで虎郷が勝てる。現在、通算３勝２０敗。残念な感じだ。うーん、次は何で行こうか・・・。

あ、とりあえず、夕飯は「カツカレー」。
ゲン担ぎだっての。

後日談ーWRでー（後書き）

次回「響き渡るこの世界」

毎日、生命の誕生の声、テレビの映像の音、増えていく音楽。この世界は音が響き渡っている。だけれど、もしかしたら、気付かない音もあるのかもしれない。それに気付けるのは自分自身だけなのだ。

０１ー王の予定ー（前書き）

これから第三章です。

まぁ、お手柔らかに。

01－王の予定－

１０月１０日、第２月曜日。すなわち「体育の日」にあった体育祭を無事終了し、俺と隼人と海馬は、２階のトレーニングルームの居た。

「疲れた日に２倍運動して、明日休めば超回復で筋肉増強だ。明日は振り替え休日だから、ゆっくり休めるぞ。さぁ頑張れ！」
「嘉島・・・・・・お前体育会系だったのか・・・・・・」
「・・・・・・・・死ぬ・・・・・・・・」
俺達３人はルームランナーで走り続けていた。現在２０時だから２時間くらいか？あ、今２１時になった。

「よし！終わり！」
俺の声を合図に、隼人が崩れ落ちる。海馬も息を切らしている。
「お前ら、体力無いぞ？大体、こんな良い部屋があるのに使わないなんてもったいないじゃねぇか。なぁ隼人？」
「・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・息切れか。５秒待機。
「確かに・・・そうかも・・・知れないけど・・・流石に・・・疲れたよ・・・」
うーん。俺の体力は割と凄いな。ブランクがあるとはいえ、元サッカー部の海馬より体力があるようだ。
「・・・・・・とりあえず、早急に俺は風呂に入るから、この辺か・・・・・・あるいは、下でストレッチでもしてろろよ」
俺はそう言い放って、下に降りて、バスルームの扉を開け――る前に、虎郷の位置を確認せねば。中に居て、所謂（いわゆる）お色気シーンに巻き込まれることを俺は望んでいないのだから。という訳でノック。
「はい？」

「あーやっぱ居たのか。ＯＫ、次は俺が入るから」
何か、年頃の男女が同じ風呂っていうのはどうだろうと思っている人、心配ない。なんかよく分からないセンサーで、人が１人入るごとに水が入れ替わるらしい（設計者は潔癖症とお見受けする）。まぁ、同じでもいいと思うけど。あと、水の無駄遣いのような気もする。流石、王城グループ。
ともかく、取り敢えずはリビングに戻って、降りてきた隼人とＶＳダウト。能力は使用不可（自然現象で起こる物は別）だが、それも一興だろう。
というところで、
「どうぞ、嘉島君」
虎郷の登場。
「あぁ・・・・・・。！」
バスタオル１枚だった。
「なななななななな何してんだお前！！」
「？風呂から出てきたのよ」
「服を着ろ！」
「悪くないスタイルだな」
「お前何言ってるか分かってんのか！」
「何よ、あなたもうすぐ高校生でしょう？」
「まだ、中学３年生だ！」
いや、待て俺がおかしいのか中学３年生はそういう方面に耐性があるべき或いは喜ぶべきなのだろうか海馬のような対応が正しいのか正だけにいや上手くないっていうかそうじゃなくてアレが大人の対応なのかなぁ隼人？というか平静さを保てずに疑問符と句読点が消え去った読みにくいなコレ。
と、見ると隼人は居なかった。おそらく、自分の部屋に逃げ込んだのだろう。
あぁ、俺と同じと言う事か。
所謂、「はやとはにげだした」だ。回り込まれなくてよかったな。

取る物も取り敢えず、海馬が虎郷に対して暴走しないように（ちなみに中学３年生にしては虎郷のスタイルはいいらしい。いや、俺はそういう類に興味がなかったから、よく分からないんだけど）注意してから、風呂に入り（出た時には虎郷は着替えていた）、その後、隼人と海馬も順番に入浴した。

「お前にはいつも驚かされるよ・・・」
「嘉島君に・・・・・・バスタオル１枚で出て来いって脅されて・・・・・・・」
「お前がそういうだけで、誤解されるからやめろ！！」
一瞬隼人が本気で驚いた顔をしたので、一応言っておいた。
「お前には、おどろおどろかされるなぁ・・・・・・」
「私に対して、よくそんな表現が出来たものね。とそれはともかく、明日の予定はどうするのかしら」
と、虎郷は俺の話を無視した。
「俺は今日元さんにナンパしに行くかなぁ」
「ＷＲは、あの人のバイオリズムに合わしているから、夜の９時からしか入れないよ」
隼人は海馬の問題発言を受け流す。
「何！では今すぐ行こう！」
「落ち着け、海馬。隼人は明日どうするんだ？」
俺は、基本隼人に合わせる。だから、隼人に訊いた。
「明日は宿題もないし、久しぶりに１人で動いてみるよ」
「！・・・・・・」
ほー・・・・・・。なるほど・・・・・・。
「じゃあ、僕はもう眠るよ。誰かのせいで、体力の限界を感じる。明日は勝手に起きるよ」

と言いつつ、部屋に入った。

「・・・・・・嘘ついてたな」

俺の発言に、

「そうなのか？」

「そうなの？」

と、２人は返答した。

「明日、アイツは俺に知られたくない事をしようとしている。それを隠そうとすると、アイツはいつも、『１人で』っていうんだよ」

俺の発言に対する２人の反応は以下のようだった。

「・・・・・・明日の予定」

海馬はニヤリと笑う。

「決まったわね」

虎郷も同様だった。

気が合うなぁ・・・。

明日は隼人を追跡だ。

02 ―王の追跡―（前書き）

02ー王の追跡ー

「・・・・・・」
ガチャ・・・。と、静かな音を立てて玄関の扉が開いた。
「わざと音を少なくしているわね」
「まぁ、推測はぴったり一致だな」
『外側に来たぞ。まずは俺が追いかけるから、後から嘉島は来てくれ。虎郷は見た未来を元に先回りをよろしく頼む』
海馬が電話で言った。
「了解したわ」
「う～っす」
何か凄い格好良いことをしているように見えるが、そうでもないことに気づけ俺達。何か凄くしょうも無いぞ。しかも、3人ともサングラスをしている。うん、後で外そう。
「じゃあ、先に行く」

1分程して、俺も外に出て海馬の気配を感じ取りつつ追いかけた。すると、街中の方に向かっているようだった。
「どうだ？海馬」
「あぁ。どうやら誰かと待ち合わせているようだな。街中の方向に向かっているから、喫茶店で間違いないだろう」
「そうか。よし」

俺は、隼人の方に意識を働かせる。遠距離でも、特定の事にのみ意識を全力でやればなんとかなるものである。それで、振り向くかどうかを確かめる。
「・・・よし・・・何とかなったな」
と、そこで電話が鳴った。

『嘉島君？どうやら、街の東南の方向にある、最近有名な喫茶店の予約席に誰かを待っている女子がいるわ。恐らくそこでしょう』
「わかった。取り敢えずその女子の動向を見といてくれ」
『了解したわ』
向こうから電話を切った。一応言っておくと、電話を掛けた時は、掛けた方から切るのがマナーだ。
「どうだ？隼人は」
「そこの角を曲がった。追いかけるぞ」
と、海馬が少し早足になった。ので
「待て」
俺は、海馬の肩を掴んだ。
「アイツは今こっちを見てる。何かを悟ったらしい。先回りして俺達も待機だ」
「・・・・・・分かった」

虎郷は外にいた。
「あら、来たの。王城君は？」
「ココに来る事はほぼ間違いないから、先回りした」
「そ・・・。あ。来たわよ」
その言葉どおり、その本人は来た。取り敢えずは物陰に隠れる。
彼と、その女子の席はショーウィンドーのように外から見えるようになっている。
「中に入ったな・・・。外から見える範囲だな。ここでいいだろう」
「そうね」
ふむ・・・。一体何の話をしているかは分からないが、まぁ、あの女子の正体が分かれば――
「あ」
思わず間抜けな声が出た。

「どうしたの・・・。あ」
虎郷も同様だった。
「何か有ったのか？あ」
海馬も同じ反応だ。そりゃ唖然とするだろう。その女子は隼人に向かって抱きついていった。隼人もそのまま受け止めていたのだ。
そして・・・・・・
「あーあ」
またも間抜けな声。
「・・・クスッ」
虎郷は笑った。
「まさかの展開だな」
海馬も笑いながらそう言った。

俺の口からは言いにくいので、昔風に言うと（そこまで昔ではないし、今でも言うかも）、
２人は口づけをした。

コレは話も聞かないとな・・・・・・。

０２ー王の追跡ー（後書き）

うん。何か最近、僕のキャラ崩壊です。

あぁ・・・何か自分で自分が嫌になってきた。

秘技：忍法：記憶喪失　さらに　現実逃避を召喚する。

０３ー王の盗聴ー（前書き）

将来を決める事はたやすい。

将来を選ぶ事は難しい。

将来を見ることは不可能。

０３ー王の盗聴ー

『どうだ？画面には映ってるか？音も拾うから待ってろ』
電話からの今日元さんの声がして、海馬のタブレット端末に、店の中の監視カメラの映像が入ってくる。遅れて音も聞こえてきた。
「ありがとうございます。今日元さん」
とりあえず、今日元さんにお礼を言った。
『いいさ。気にすんなって。それに俺も興味あるなぁ・・・。アイツ女には興味なさそうだったのにな』
「或いは、だからこそ、ですかね」
『そうかもな』
「あ、そうだ。海馬の電子板の画面にこれますか？」
『ん？あぁ。ちょっと待ってろ』
そして電話が切れた。
さて、今日元さんが来るまでの間に、彼女の能力についてこの間の続きと行こう。
彼女の能力は「トランスミッション」。身体、或いは意識を電子化し、電気を使っている全ての物に干渉・介入・侵入することが出来る。今のように、監視カメラに侵入し、映像を別のところに送ることも出来るのだ。所謂（いわゆる）ハッキングという物だ。その能力を使って俺達の胃の中にある「ＷＥ」すなわち、Ｗｈｉｔｅ　Ｅｌｅｃｔｒｉｃ　――あの鍵の形状だったり、カードキーの形状だったりするもの――を利用して、「ＷＲ」を作り上げているのだ。また、彼女の体（主に脳）は、携帯電話の代わりにもなる。そして、最大の特徴はどんな場所でも出来るということ。例え電波を遮断しても、意味を成さないのだそうだ。

『お、来れたな』
「今日元さん。助かりました。今日、一緒に夕食でも」

海馬がまたナンパを始めた。やれやれだな。
『WRでな。皆で食べような』
「クッ・・・！2人ではダメなんですか」
「馬鹿やってないで、画面を見なさい」
「へーい」
という訳で、監視カメラの映像に注目する。
以下盗聴と盗撮。
「・・・・・もう少し、人目を憚(はばか)れよ。響花」
「あまり気にしても仕方がありませんから」
女の方は響花というらしい。ふむ、名前は兄と姉に似ているな。
親近感がわかないでもない。だが、格好は、最近の女子のファッションではないであろう、ハンチング帽とサングラスで、若干の変装という感じだ。もしかして有名人なのだろうか？
閑話休題。
「で、隼人はどうするんですか？その・・・来月」
「・・・・・うん。参加するよ。会長の・・・お爺様の移行だからね。従わざるを得ないし」
「参加したくなかったらしなくていいと思いますよ。あなたの意志しだいです。王城は関係ないのでは？」
「いいや。どうせなら参加して、君の未来を見て帰るよ」
「そうですか・・・」
うむ。一体何の話をしているのやら。

「虎郷、海馬。分かる？」
俺の質問に2人は
「ふむ。察するに、彼女は王城君が好きだけれど」
「隼人は気付いていない。さらにあの2人は幼馴染・・・か」
と答えた。
『その場合、あの2人は外国の生活が長かったかもな』
「あんたら、観察力凄いな」

「後は・・・来月何らかのイベントがあるってことくらいかしら」
「ふーん」
と、気付くと。
響花という女性がこちらを見ていた。
そしてその姿を見た隼人がこちらを見て、
「！」
あ、凄い顔した。そして今度は監視カメラと目線がかち合う。
「！」
あ、顔から血の気が引いて、マンガのような縦線がつく。

「行こう！」
「ばれた！」
俺と隼人の同時発言。

『「「へ？」」』
3人とも気付いてなかったのか。とか言ってる場合じゃない！一万円置いて「釣は要らん」とか言ってるよ。ヤバい。
と思ったときには店を出て、街中に行った。
「捜すぞ！」
性も無い事に関しては全力投球の俺達なんだよな。

０３ー王の盗聴ー（後書き）

将来を共にするのは絶対。

０４ー王の逃走ー（前書き）

僕らは走り続ける。足に痛みが来ようが、友が先に行こうが、絶対的な自分のペースで。
僕らは走り続ける。自分の真価を問い続けるように。

０４－王の逃走－

「ほら、見失った」
すぐに追いかけたが、結局見失う羽目になってしまった。
「何でアイツが気付いたって分かったんだ？」
海馬の質問は最もだが、そんなの１つしかない。
「勘」
「あぁ・・・そう」
うん。そういうもんだよ。
「残念だけど、私の能力でも探索は無理ね」
『こうなれば人海戦術だな』
人海戦術か・・・。
「こうなったら・・・」
俺は携帯電話を取り出した。人海戦術といったら、機動力だろう。
「東先輩。昨日の話しだけど」
【分かってる。ＯＫだ。俺達はいつでも動けるぜ】
「よし。任せたぜ、頭領（ヘッド）」
【ああ。行くぞ！てめぇら！】
オォォォ！
という雄叫びが聞こえたと同時に電話が切れた。

「というわけで、何とかなるぞ」
『しかし、いくら暴走族（・・・）といえど、街中でバイクは走らせまい。特にあの頭領は、人に迷惑をかけない主義だからな』
「・・・・・・そうだな。じゃあ今日元さん。監視カメラの映像で捜してください」
『残念だが、俺は完璧じゃない。方向音痴だから、どのカメラがどこなのかもわからない』
・・・・・・若干万事休す。少しだけ打つ手無し。

「・・・はぁ・・・」
海馬が溜め息を吐きながら携帯電話を取り出し、電子板をいじり始めた。
「あ、もしもし・・・。あ、いや、それは・・・うん。ごめんなさい。で、頼みがあるんだよ。あ、いや、あのそれは・・・・・・うん。それは分かってる。・・・・・・え！・・・・わかったよ。約束するよ。で、この2人を捜して欲しいんだよ。あぁ、頼んだ。・・・・・・え！？いや、今・・・友達といるから・・・・・・分かってるよ。約束は守るから・・・・。うん、じゃあな」
で、通話を終了した。何か顔が青ざめている。マンガで言うと3本線だ。
「もうすぐ・・・見つかるから。うん。・・・はぁ」
「・・・・・・電話の相手は・・・訊かないで置くわ」
「・・・・・・ありがとう」
で、海馬の電話が鳴った（海馬はビクッとした）。
「・・・・・・おう分かった約束は守りますハイ」
一気に言って、無理やり電話を切った。
「・・・・・・見つかったぞ」

うむ。海馬にも秘密がありそうだ。何か、友達の秘密がどんどんと分かってくるな・・・。隠れた性格を知れて楽しいな・・・。
さて、『追跡』『盗聴』『逃走』とくれば、ようやく、『尋問』だな。但し、『王への』だけどな。

０５ー王への尋問ー（前書き）

捲る。捲る。日にちを見る。

巡る。巡る。日にちは廻る。

０５ー王への尋問ー

さて。
「チッ」
アレから、すぐに隼人は見つけることは出来たのだが、そこに女の姿は無かった。てことで、家に帰った。で、家で会議が始まる。その時の俺の第一声だった。声とは言えないだろうけれど。
「で、君らは何がしたかったんだい？」
「何が・・・って」
ん・・・？
「何がしたかったんだろうな」
「理由なんか分からないわ」
「てか、無くね？」
「というか、面白そうだったからな」
と、俺達の会話を聞いて彼は、
「死ぬか、お前ら」
と言った。うわー。久々の性格変動。虎郷以来だ。大変だ。
「とは言ったが、結局隼人は落ち着きを取り戻した」
「モノローグを自分で言うな。落ち着いてねぇよ」
うむ。俺の作戦失敗。
「とはいえ、僕も軽率だったね。君らに何も伝えないというのも仲間という枠を無視していたかもね」
「そうそう、元はと言えばお前が悪かったんだよ」
「調子に乗るなよ、海馬。殺すぞ」
「ごめんなさい」
この辺はギャグパートと言う事で・・・でも、これ終わるのかな？
「で、隼人。あの女の子は誰だったんだ？」
「彼女は幼馴染だよ」
「あなたは幼馴染とキスをするの？」

「そんなもんさ。外国の生活をともにしていたからね。一緒に暮らしていたし、男女という感じではないよ」
「・・・ふぅ」
と、このタイミングで彼女は溜め息を吐いた。何故だろうか。海馬は笑っている。
「・・・まぁそんな感じさ」
「で、彼女は結局誰だったんだ？」
「・・・嘉島君はともかく、君らなら知っているだろう？音河響花だ」
「！」
「！」
「？」
俺ならともかくって・・・。しかも、2人とも気付いてるみたいだし・・・。落ち込むなぁ・・・。
「まぁわざわざ仕方なく面倒だけど嘉島君だけのために教えてあげよう」
「・・・・・・」
「彼女は所謂『超中学級の音楽家』だ。バイオリンとピアノ。その辺に詳しくは無いんだけどギターやドラムとかの軽音は携わってないらしいんだ。言っても彼女もお嬢様だからね」
隼人がそう説明すると
「昔、俺の家のパーティーに来たな。確か、その時はフルートを演奏していた。俺は音楽には疎いが、彼女の演奏には感動したな」
と、海馬が細く説明した。さらに
「私も2年前にテレビで見たわ。中学1年生のころで同級生だったから、少し気になったものよ。スーパー中学生として人気だったわね」
と虎郷も続けた。しかし・・・2年前か。彼女としては思うところもあるだろう。
「ちなみに、彼女には両親が居ない」

俺と同じ事を隼人も考えていたようだ。彼女も2年前に両親をなくしている。そのころ、彼女に親が居たのか居なかったのかはわからないが、テレビならその話題も言うだろうから、彼女はそれも知っているだろう。どちらにしても、今、彼女は共感するところがあるはずだ。

「君は本当に聞いたことが無いのかい？」

「・・・俺は音楽関係には疎いからな」

「疎いじゃなくて、避けているんだろう？」

「その話はしたくない」

本心で言っている。取り敢えずは逃げる事にした。虎郷と海馬は不思議そうな顔をしている。しかし、結局

「で、彼女は一体何なのかしら？ただの幼馴染なら私達に隠れて合う必要は無いでしょう？」

と、俺から興味を外して話を元に戻した。

「・・・まぁ、隠しても仕方が無い。来月にはまたどこかに行くしね」

隼人は足を組みなおした。そして、

「来月、彼女は婚約者選びをする」

と言った。その時の俺のコメント。

「って・・・なんだ？」

０５ー王への尋問ー（後書き）

つまり

カレンダー作成中。

物語内の日にち用の。

０６－王の立場－

婚約者選びというのは、金持ちや上に立つ者としては良くあるらしいのだ。海馬もそのイベントがあったらしいが、逃げたらしい。彼にも事情があるのだろう。

ともかく、彼女・・・音河響花の家系は、昔から何かに秀でているらしい。彼女の場合はそれが「音楽」だったということだ。そしてその家系では、「婚約者選び」で結婚相手を決めるらしい。ここで決まったことは絶対。否定した場合は相手を殺すことで「やり直す」という方式らしい。

「なーるほどねー」

全てを理解した上で海馬は言った。

「俺らもその婚約者選びって見にいけるのか？」

興味本位で俺が訊いた。

「一般人も参加可能だけど、無理だろうね」

「どうして？」

今度は虎郷が訊いた。

「彼女はそこでピアノの演奏をするんだよ。そのステージの席は全て埋まっている。君らはもう遅いよ。１ヶ月前から買わないと」

そこまで言ってから、隼人は部屋に入った。

「・・・私達のすることは決まったわね」

「そうだな」

また、虎郷と海馬が世界に入った。

「・・・えっと？」

「あなたもしかして気付いてないの？」

「呆れるぜ」

また馬鹿にされた・・・。

「話の端々から推測し、監視カメラを見たときの話をあわせると」
「ある事実が浮かび上がってくるわ」
「ある事実・・・？」
「「その婚約者選びには、彼・・・王城隼人も参加する」」
２人はハモって言った。うーむ、もしかして異常なまでに僕は推理力が無いのかもしれないな。

「で、俺達は何をするんだ？」
「まだわかんねぇのか？」
「本格的な馬鹿ね」
「・・・で？何をするんだ？」
「彼と彼女をその関係に持ち込むサポートをすることが、俺達キューピットの役目だ」
キューピットねぇ・・・。
「恐らく、そのイベントにはそこまで多くの人間は参加しない。が、そこに参加する面々はどんな手を使っても、婚約に持ち込もうとするだろう。どんな方法を使ってくるか分かったものじゃねぇ」
多分、どうしてどんな手でも使ってくるのかということが分かるのかを訊いても仕方が無いのだろう。俺には理解できない世界だということだ。

「でもどんな奴が来るかも分からない上に、席は取れないんだろう？」
「それは俺が打開できる」
と言って、海馬は携帯電話をだした。

「・・・・・・爺やか？急遽だが・・・・」
と彼は電話を始めた。爺や・・・つまりは・・・。

そして、物語は、約１ヶ月くらい経った、１１月１９日土曜日。
その例の婚約者選びを成功させる作戦「Ａｎｇｅｌ」を始動させたのだった。

０７ー王の未見ー

１１月１９日土曜日。作戦名「Ａｎｇｅｌ」。これは、恋のキューピット＝天使　という考えに基づいて、海馬が考えた物だ。俺は悪くないと思っている。

現在は午前８時だった。婚約者選び―以降はこれを「選挙」と呼ぶことにした―は正午から始まる。まずは正午に、音河響花のピアノ演奏がある。その後、選挙が始まる。その選挙に出るメンバーは４人。音河家が選抜した、「選りすぐりの４人」である。その４人の説明はまたの機会にしておこう。

で、俺達は隼人に内緒でココにいるのだ。キューピットとは結ばれるべき２人にバレないようにしなければならないそうだ（ｂｙ海馬）。とはいえ、最終的にはバラすらしいのだが。

「後、４時間もあるんだが？」

「下見だ。他のメンバーがどんな手を使ってアピールしてくるか分かんねぇだろ？」

「どんな手って・・・？」

「つまり、極悪非道な手を使ってくる可能性もあるということよ。例えば、会場内を部下に爆発させ、その犯人を突き止める・・・とかね。わざと事件を起こして、それを解決する事で株を上げようということ。そんな事をしても彼女を振り向かせる事は無理でしょうね」

「・・・・・・なんで？」

「彼女は王城以外を選ばねぇだろうよ」

「・・・・・・どして？」

「お前とは会話したくねぇな」

「貴方とは会話したくないわ」

「・・・・・・」

つまり、俺は鈍感だから分からないが（多分隼人も分かってないだろう）、彼女は隼人の事が好きだということか。まぁ、恋愛感情はあんまり分からないな。俺、こう見えて「そーしょくけー」だからな。

「でも結局いまからどうするんだ？」
「あらかじめアポはとっているから、先に入れるぜ。隼人達は、控え室から出られないらしいから、鉢合わせの危険性はねぇよ」
「へぇ・・・下準備はバッチリって訳だな」
「では行きましょうか」
俺達はその声を合図に立ち上がった。
さて冷静に話しているが、実は今居る場所は、その会場のロビーに違和感バリバリで座っている。海馬はピシッとスーツで決めているのに、虎郷はまさかの着物姿。で俺は、海馬に渡された謎の服。着てみたら分かったが、胸のところが開いたホストのような格好だった（しかも自分で言うのもなんだが、割と似合っている）。貴族と上流と亜流の3人がロビーに座っているのだ。目立たないはずもない。

「まずは、電力室だ」
「そんなところ、関係者でもないのに入れるのか？」
「俺は海馬正だ」
それが理由になると思っているのだろうか？
と思ったら入れてしまった。
「ここに爆弾を仕掛けたら1番有効だろうな」
という俺の言葉に、
「そうかしら？」
と反論した。
「ここに入れる人間なんてそうそう居ないわよ。しかも、厳重なチェックがあるからそう簡単には成功しないわ」

「あー・・・でも、爆弾作りの能力者だったら大変だよな」
「それこそそんなには居ないわよ」

で、僕らは外に出た。
そして最大のミスを犯してしまった。

「・・・あら」
虎郷がそう言って、見た先には

「・・・こんにちは」
ある人物が目を丸くして立っていた。

「あの・・・どなたでしょうか？」
音河響花その人だった。

０８ー王の婚約者ー（前書き）

何か友達が誰かと付き合うじゃん。

滅ぶ時を待つのはまぁまぁ楽しいけど、滅んだ後の２人を見てると、痛々しくて仕方がない上に、周りの生活にも支障が出るよね。

０８ー王の婚約者ー

というわけで、音河響花の控え室に入った。
「ということは、ＶＩＰという立場でよろしいのですね？」
「ええ。そんなところよ」
俺は口下手だし、海馬は
「あのタイプは口説きにくい。相手が居る場合は落とし難いんだよ。愛が純粋であればあるほどに」
と言って、学校での「いつも通りの冷静な少年」を演じている。ので、相手は虎郷がすることになった。
「でも招待状は誰からもらったのでしょうか？席は確か基本的には埋まっていたと思います。招待客の顔は大体拝見しましたけど・・・その・・・皆さんのような特徴的な方々なら覚えているはずなので・・・」
あー。疑ってるなぁ・・・。ちなみに、隼人の知り合いである事は隠してある。そしてあることないこと（主にないこと）を話して、結果的には「ＶＩＰ」という立ち位置にいるようになってしまった。
「その点は心配要らないわ。彼はいわゆる富豪なのよ。金さえ使えば簡単に入れる物よ」
「はぁ・・・」
そこまで驚いていないようだ。これが別世界か。
「信用してもらえたかしら？」
「はい。信用に値できそうな方々だと感じました」
所々、失礼な人のような気がする。堂々と言えるところが怖いよな・・・。
「自己紹介は・・・しない方がいいわね」
「？どうしてですか？」
「本当に信用されていないのに、自らの素性を明かすのは私は好まないの。行きましょう」

俺の肩をたたいて、部屋を出た。海馬は誰よりも早くその部屋を出た。
「・・・あの」
思わず振り向いてしまう。
「どこかで・・・会った・・・いや、見たことあるような・・・」
「・・・・・・」
昨日のことか・・・。
「・・・昔・・・そう、3年前・・・」
「！！！！」
俺は急いで立去った。

そこから離れて、これからどうするかを話し合った。
「んじゃ、侵入経路を確認してみるか」
「どういうこと？」
「つまり、その選挙に参加する人間・・・参加者が、仲間を使ってこの会場に侵入してくる可能性があるだろう？」
「あー。それもそうね。では、裏口から見てみましょうか」
・・・。
「嘉島君。どうかしたの？」
「いや、少し気になる事があってな」
「そう。言いたくなさそうだから訊かないで置くわ」
「ありがとう」
3年前か・・・。

その後、危険のあるポイントを見回って、危険物の設置を確認して、11時になったので会場の中に向かっていくことにした。空気はどことなく、緊張した面持ちを否めない雰囲気をかもし出していた。上の世界というものが、如何なるものなのかということを俺は

身を持って感じていた。

「・・・・・大変よ。２人とも」
「どうした？虎郷」
「見えたわ」
「・・・・・・何が？」
「ファントム・ダーツ」
「なっ！」
「これから、４つの事件が起きるわ」

０８ー王の婚約者ー（後書き）

まぁ、人の自由だから迷惑ではないな。

恋愛って言うのは自由なんだろうな。自分を自由に表現することの一環だろうな。

０９ー王の戦いー（前書き）

僕らは知らない間に、地獄に向かって歩を進めている。

それも「常に」である。どんな地獄を過ぎても目の前には常に地獄があるのだ。

０９－王の戦い－

本当は事件を解決するために尽力するべきなのだろうけど、俺達は現状理解に勤しまざるを得ないのだった。なぜなら、彼女の見た事件を訊こうとした時、ホールでは演奏が始まっていたからだ。そして俺達はそれに完全に引き込まれてしまい、自分の座っていた席（ＶＩＰ席）から微動だに出来なくなってしまったのだった。

ピアノか・・・。懐かしい・・・。

そんな事を思いながら天（井）を仰ぎながら音を聴いていた。

「何か・・・夢に入ったような気分だな・・・」
「そうね・・・引き込まれていく感じ・・・」
「・・・俺は音楽には疎いと思ってたんだけど、撤回しねぇとな・・・」
誰がどれを言ったのかは考える必要はない。語り部という役を放棄したいくらいだ。

音がフェードアウトしていく。夢に入った気分もどんどん抜けていく・・・。なんだろう・・・。たったの１０分くらいで中毒になってしまったようだ・・・。

「終わったな・・・」
「いや、これから始まんだよ」
「その通りよ。私達の目的は『Ａｎｇｅｌ』なのだから」
そういえばそうだった。本当に語り部放棄状態だった。

会場から、数人の人間が消えていく。残った人にとっては今までのは余興だったという印象を受ける。周りの人間はさっきより目が爛々としている。
彼女のピアノのすばらしさが分からないのだろうか・・・。自らの目的なんざ忘れてしまってもおかしくはないのに・・・。あ、そうか。この周りの連中は、「参加者」の関係者か何かなのか・・・。

「さて、では『選挙』を始めます」
司会のような立場の人が言った。
「この選挙は、我等、音河財閥の後継者、音河響花の婚約者を選ぶ物です。決定権は現在の音河財閥社長の音河未来様です」

「なッ」
当の本人が決定するのではないのか・・・・!?
「そんなことなら、私達が来なくても王城君が選ばれるでしょう？何のために私達が来たと思っているの？」
「そこまで俺に話してくれてなかっただろ！」
「まさか分かってねぇとは思わねぇだろうがよ」
・・・そうか・・・。俺は基準にはならないのだ。なることはないし、なれもしない。だが、虎郷が知っているのはどういうことだろう・・・。もしかしたら彼女も「そういう人間」なのだろうか。
「違うわよ」
「人の心を読むな」
「私はそういう物に詳しいだけ」
「そう・・・なのか」
そんな事を考えた後、俺は司会の方を見た。参加者の説明が始まっていた。司会の人は媚を売って異常に遠回りをしていたし、話が脱線していたような気がするし、何が言いたいのか分からなかったので、俺なりに要約してみた。

１人目：御堂　遥（はるか）　１７歳

彼は、最上級の人間というべきだろう。彼は運動の天才である。運動のプロの選手でも、彼に勝つのは至難の技であるそうだ。反射神経、動体視力、腕力、脚力。それらは最大ではない。だが、それらは全て最上級である。何かに特化しているのではなく、それらが一番ではないがそれにかなり近いものである。例え強くても、遅ければ意味がない。見えても対応できなければ意味がない。その欠点を、最上級の力でカバーしているのだ。悪い言い方になってしまうが、中途半端なおかげで最上級になれるのだ。

２人目：ジャン・リオン　２１歳

どこかの国の貴族・・・王家の血を引いた男である。王子ということらしい。彼には、膨大、絶大、最強、最大の「財力」と「兵力」がある。その気になればこの国も簡単に破壊できると言っていたがそんなはずはない。いや、割とマジで。アメリカ黙ってないって。どこからどう見ても、自分を御曹司としてしか見ていない、愚かなお坊っちゃんと言う感じだ。

３人目：西条　翔（しょう）１５歳

さて、「運動」「財力と兵力」ときて、次は「正義感」だそうだ。いやいや待ってくださいよ正義感が何だっていうんですか力が無ければ意味はないでしょう、と思うけどその辺りはもう気にしない方向にしてみた。彼は、「西条」という自動車会社を経営している。年下なのにすごいなぁと思うが、反面、生意気だなと思ってしまう。

４人目：王城　隼人

彼に関しては説明は要らないだろうが、周りの皆から見て彼は「知能」の最強だけとしかみられてないようだが、彼の正義感は何だかんだでかなり高い。さらに、彼の脳ならば「御堂　遥」の運動神経にも勝る。また、王城の財力は半端じゃないし、人間１人が、戦車１台分の力を持っている・・・そうだ。実際、隼人の兵力は１人で自衛隊の５人を相手に出来るそうだ。

この４人が戦うそうだ。女と権力を手に入れるために。

０９ー王の戦いー（後書き）

テストって嫌だよね～。共感する人は全員友達！

１０ー参加者戦争ー（前書き）

偽善偽証偽装偽造偽計偽称・・・・・・

この世の中は偽者と偽物で回っている。

しかし、偽は世界で一番大切なのだ。

１０ー参加者戦争ー

「では、１人１人に自己紹介をしていただきます」
司会がそう言って、御堂の話が始まった。
「俺は、運動の神です」
アホだ。
「運動ならば誰にも負けません。それは武術に対しても同じです。どんな兵力で来ようと、如何なる正義感でも、最高の知恵でも俺は負けない自信があります。俺は、ボクシングでも空手でも柔道でも最高級の力を誇っています。俺に勝てる大人はそうそう居ませんよ」
それから、自分の経歴を長々と話し始めた。優勝の回数とか、準優勝の回数とか、取った賞の個数、勝ったプロの選手の人数などの自慢をした。

次はジャンだった。
「この世で１番大切な物は、お金です。これは間違いありません」
最悪だぁぁぁ。
「私は誰よりも金に関する能力が高い。金の能力というのは、使うタイミングやモノに対する払うべきお金が一発で分かってしまうのです。それによって私は絶妙な兵力を手に入れました。また、私の軍略は最高を誇っています。ただの知力レベルではありません。その証拠に私は今までチェスで負けたことはありません。また、ポーカーも負けたことは滅多にありません。どうです？後で誰かカジノで１戦でも・・・」
それから彼は自らの知力や戦略についてグダグダと話し始めた。全く・・・彼らの頭はどうなっているんだ。明らかに、社長さんは面白く思っていない。この距離でも感じる。・・・そういえば、彼女は親が居ない・・・ということは社長さんはおばさんかな？

そして西条。
「・・・僕は、皆さんと違って自慢話になるようなことはあまりしていません」
お、いい印象を受ける出だしだ。
「唯一のとりえが、正義感があることですが、だから何だ、という印象を受ける人も居ると思います。その通りです。正義感だけがあっても仕方がありません。でも、僕は不正は行わないという絶対の自信と埃があります。僕は誰よりも信じられる人間になりたいと思っています」
・・・うん。コイツは俺は好きだな。誠実さを感じる。最も、近づかなければ分からないのだが。

最後に隼人だった。
「・・・・・・」
「王城さん。何かありませんか？」
「・・・・・・・・・僕は・・・・・・・」
隼人は少し口ごもって、その後、決意に満ちた目で、こう言った。

「僕は王城は継ぎません」

空気が変わる。社長さんを含めた皆が驚いている。驚いていないのは、王城グループの人間と、僕ら3人だけだ。

「僕は―」
隼人が口を開いた。

542tuojnidgsoahbioa9@u827!!!!!

同時、警報音と爆音と轟音、そして周りに居た警備員の無線機がなった。

「・・・・・・何かあったんですか？」

流石正義感代表の西条が質問する。

「・・・・・・玄関ホールが爆発、カジノでヤクザの暴動、男が人質を捕まえて立てこもりました」

司会の人が、気が動転した状態で言った。

同時、3人の男が立った。

「俺は、立てこもりのところに向かうぜ」

御堂。

「私はカジノに向かいましょう」

ジャン。

「僕は玄関ホールへ」

西条がそう言って足を進めた。

隼人は動こうとしない。全く動かない。微動だにしないどころではない。無の境地だった。

「・・・・・・隼人はどうしたんだ？」

海馬が誰に聞くでもなく言った。

「・・・私の見た未来と全く一緒よ」

「そう・・・か」

ということは・・・。
「俺は玄関ホールへ向かう。海馬はカジノへ。虎郷は」
「立てこもり犯ね」
「ああ。任せたぞ」
「隼人はどーすんだよ？」
「長年・・・って程じゃないけど、アイツの事は俺が1番分かってる」

俺達はホールを出た。

「アイツはもう推理を始めてるんだよ」
俺達3人はバラバラに行動を始めた。

俺は隼人の考えている事が分かっていたわけではない。ただ、

「頼んだよ。タダシ君、ヒスイ君、ソウメイ君」
隼人はそう呟いたような気がしたからだ。

１０ー参加者戦争ー（後書き）

だって僕らは偽者だから。１人も本物はいない。

嘘をついたことのない人間は居ない。存在が嘘だもん。

11ー偽物の事件ー

さて、バラバラに行動するということは俺には虎郷や海馬の状況を話せなくなってしまうので、伝聞から、さも今のように語ることになってしまう事を了承していただきたい。

「・・・なるほど・・・」

虎郷は立てこもった男の前に立っていた。男は、部屋の扉を開けたままで女性を1人捕まえた状態で立っていた。女の首筋にナイフを突きつけて、意味深な笑いを浮かべている。

「予想通り、誰かが引き起こした事件のようね・・・」

おそらく、その誰かとは、今ココに来ている、御堂で間違いないだろう。その御堂が言った。

「おい、そこの立てこもり犯。ぶっ飛ばしてやるから、さっさと構えとけよ」

御堂は挑発するように言った。男は苛立った表情で睨んできた。しかし、虎郷には分かる。これが演技だということが。

「おい、コイツがどうなってもいいのか！」

お決まりのセリフを彼は吐いた。

「どうにもできねぇよ、てめぇは」

彼は走った。と、思った瞬間には

「か・・・はっ」

男の懐に拳が入った。スピードには定評があると自慢していただけはある速さだった。

そして、男の腕から女性を引っぺがす

「くそッ！」

その間に男は部屋を出る。警備員は残念ながら手も足も出なかっ

た。
「逃がすかよ！」
御堂は走り出した。そう思ったときには、彼の背中に馬乗りになっていた。
「ど・・・どういうことだ！」
「警備員の人、早く！」
「話が違うぞ！」
この話を聴いていて、俺達のように「演技」だと分かっている者がいたら、事情はすぐに飲め込めるだろうが、少なくとも現状では虎郷だけだった。
「お前は警察行きだよ」
彼は言った。
「・・・・・・フッ」
男は笑った。タイミングとしてはおかしいだろうに。
と虎郷が思ったときにはすでに第2ラウンドは始まっていた。
「なッ！」
もう1人男が出てきて、御堂を後ろから羽交い絞めにした。
「な・・・何だ・・・コイツは！」
「御堂さん・・・いや、貴様ならそういう手でくると思っていたよ！」
困った状態になった。
「私が頑張らないといけないのかしらね・・・」
虎郷はそう言って、俯いて。
笑った。

カジノではヤクザとジャンが睨み合っていた。コイツラは・・・仲間だろうか？と、海馬は考えていたが、どうやらそんな感じだ。
睨み方にアイコンタクトが含まれている。
3人のヤクザの内1人が言った。

「んだ、てめぇ・・・」
「王」
「っざけんな！」
短気な性格だとお見受けする。
「何をしているんですか？」
「別に・・・。ちょっとムカついたから、ぶん殴ってただけだ」
「迷惑です。やめていただけませんか？」
「はッ！やめさせてみろ！」
ボスと見られる1人を除く2人が、ジャンに突っかかった。

「待ってください」
その言葉に威厳は感じられなかったが、2人の男は止まる。打ち合わせの成果だな。
「あ？」
「ココはカジノです。カジノらしく勝負しましょう」
そう言って、彼はテーブルに座った。競技は「ポーカー」だ。

その勝負は割りと速攻でついた。ボスの男が戦ったのだが、5回のうち全てに彼は勝った。
「迷惑かけた分の賠償はしてくださいね？」
と、彼はぴしゃりと言い放った。
周囲からは拍手喝采が浴びせられる。彼は満更でもない顔をしている。
さて、海馬はここで考えた。これが演技であることは間違いない。だとすれば、今のは何処かに不可解な点があったはず。ならば、ここで彼を止めなければならない。どうしようかと。
そして海馬は言った。

「今、イカサマだな？」

「・・・・・・はい？」
怒りと動揺と驚きに満ちた表情でジャンが反応した。

さて、ようやく話しやすい自分のターンだ。
俺が玄関ホールに行ったのは、西条というあの男が気になったからだ。正義感に溢れた、あの男が。

「これは・・・爆弾？」
西条は言った。
「絶対に捕まえてみせる・・・」
周りの人に見せようとしているのではなく、本当に正義感故に思っているような表情だった。だが、しかし、俺には分かる。聞こえる。彼の本心が。

『上手くいった』
彼がそう思っていることが・・・。

１２ー真実の解決ー（前書き）

最近、人気が落ちてきて、悲しさのあまり引きこもり化しそうです。

12ー真実の解決ー

立てこもり犯の前、5メートルの距離に虎郷は立って、言った。
「さっきの言葉……どういう意味？」
「あ〝？」
「貴様ならそういう手でくるだろうって……」
「あ～。その話ねぇ…ククク……」
男2人は笑った。そして立てこもり犯の男が叫ぶ。
「聞いて驚け！！」
「や…やめろ！！」
御堂の抗議は虚しく、立てこもり犯は続ける。
「コイツは俺達のような人間を利用して、自分の株を上げようとしていたんだ！！！！」
狭い廊下にその声が響きわたる。ざわめきが割と大きくなった。
「そう。それだけ聞ければ十分だわ」
虎郷はそれだけ言うと一歩ずつ近づき始めた。
「はぁ？お嬢ちゃんは退いとけ……よ……」
語尾がだんだん弱くなったのは、彼女の殺気に、2人の男も御堂も気圧されたからだ。
「お、おい！！！コイツがどうなってもいいのか！」
とうとう死亡フラグというか負けフラグを立てた。
「どうなってもどころか、どうでも良いわよ。そんなくずみたいな人間」　と、虎郷はまるで蔑むように言って
彼らの視界から消えた。
「がッ……はッ……」

次の瞬間には、３人とも纏めて地面に叩きつけられた。
「コレで解決ね……」
虎郷はレコーダーの電源を切って、気楽な声で
「警備員さーん」
と呼んだ。静まった廊下に先ほどのように声が響きわたった。

カジノでは、騒ぎがむしろ2倍になっていた。
理由は2つ。1つは格好良く締めた一国の王に向かって「イカサマだ」と言った男とその王の戦いが始まってしまい、人が2倍くらい集まったためである。もう1つはその賭けの戦いに、1万で戦ってきた王に、１００円で戦いを開始して、男が勝っているからだった。ちなみに王の方は既に１０万ほどを費やしている。ポーカー、ブラックジャックと来て、今はルーレットだった。

ディーラー（恐らくジャンの息（というか金）のかかった人間）が玉を転がす。
「あ…赤１１」
「黒２１」
玉が転がり落ちる。入ったのは、黒の２１番。

「また、あの男だ…」
「アイツ強いなぁ…」
本来、強いなんて物ではない。相手の息のかかったディーラーにさえ、勝っているということなのだから。
「……！！！」
ジャンが立ち上がり、海馬のスーツの襟を掴む。

「貴様…何をした…！」
「何のことだ？」
「こんなに勝てるはずがないだろう！ポーカーすればフォーカードかフルハウス！ブラックジャックなら必ず21！ルーレットはピッタリ一致！あり得ないだろうが！」
「何であり得ないなんて言えるんだ？」
海馬が挑発する。とうとうジャンは痺れを切らして言った。

「だぁかぁらぁ！！イカサマしているトランプ勝負に俺が負けて、金で雇ったディーラーにすら勝てるなんておかしいっつってんだよ！」

カジノという空間には場違いな音…つまり、静けさを作り上げた。気付いたジャンは
「あ…アァ…」
と、今更ながらに渇いた声を上げた。
「残念。もう釈明はできないぜ」
海馬は少しだけ哀れんだような目でジャンを見た。それは同情に近い物だったろう。そして海馬はニヤリと笑って言った。
「運が悪かったな」

ようやく俺なわけだが、虎郷や海馬とは違ってド派手な展開はない。
「おい、西条さん」
俺は声を掛けた。
「・・・・・・何？」
明らかに訝しんだ目と声で俺に応対する。
「怪しいもんじゃないって・・・。そんで、」
取り敢えず釈明してから、ソファーを指差した。
「そこのソファーの下に、もう1個爆弾があるぞ」
「え？」
西条はソファーの下を覗き込む。
「・・・・・・あった」
西条は素早くそれをはがして、乱暴に振り上げた。周囲の人々は一歩下がりながらも、感嘆の声と拍手を西条に送る（俺は！？）。
「良かった・・・。これで安心だね」
「・・・どうやら、そうみたいだな。上の階で犯人が数人の警備員を殴っていたようだけど、もう捕まったようだ。メチャクチャ暴れたらしいぜ」
「そう・・・・・・なのか」
と、俯いて苦笑いした。
「それにしても彼女はどうしてこんな犯行に至ったんだと思う？」
「・・・・・・どういうことだ」
「いや、こんな犯行を行う理由はなんだったのかな？って」
「そこじゃない」
俺は周囲の目を気にせず、西条を追い詰める事にした。

「何で犯人が女だと思うんだ？」
「え・・・？」
「俺は一言も女だと言ってない。むしろ、殴ったとか暴れたとか言って、男の印象をつけたはずだ」

周囲の人も数人は頷いている。同意見のようだ。

「いや、それは・・・」

「そもそも、お前の対応はおかしいだろう。どうして、爆弾に対して何の処理も行わず持っているんだ」

俺は西条の手から爆弾を奪う。そして、タイマーの部分を指差す。8：88　というデジタル表記で止まっている。

「これ、作動してないだろう？」

「・・・・・・！」

「どういうことだ・・・？」という周囲の声。警備員が西条に対して疑いの目を向ける。

テロリロリーン。嘉島のパラメータがアップした。注目度が15上がった。

「大体、爆弾をどうしてあんな乱暴に扱えるんだ？振り回したら危ないだろう。現に周囲の人間は一歩下がってた。危機管理能力が無さ過ぎるぞ。アンタほどの人間なら、水銀レバーくらいは聞いたことあるだろう？無駄に振動を与える事は危険に繋がる」

「・・・・・・・・・」

俺に対する注目度が上がる。周りの人々は唖然として見続けており、警備員は興味深く聞いている。それでも俺は彼を追及していく。

「1番疑問があるのは、お前の安心した瞬間だよ」

「ど・・・う・・・」

動揺しながらも俺に向かって目を向けて対応する。どういうことだ・・・と言いたいのだろう。

「何で、2個目の爆弾が見つかって安心できるんだ。2個見つかったらもっとあるかも知れないだろう？つまり、お前は知ってたんだよ。爆弾が作動しないのも、爆弾が2個しかないのも、犯人が女である事も」

「う・・・あ・・・・・・・」

さて、出来れば目立つ行動は控えたいがここまでくれば言うしか

あるまい。

「この爆発事件はお前の仕業だ」

一応、探偵を名乗る以上の仕事は何とか出来ただろう。

１２ー真実の解決ー（後書き）

追伸

僕は今「超高校級の嘘つき」を目指していると言う事を考えて、前書きをお読みください。
ちなみに、まだ中学生。

１３ ― 参加者尋問 ―（前書き）

生きたくて生きる人と死にたくて死ぬ人の違いはたった一つしかないのです。

この世界を楽観視したのか悲観視したのか。

13 ー参加者尋問ー

3人の男を捕まえた俺達3人は、周囲の人々が唖然としている中隼人の前に立った。

「隼人様。命令通り、犯人を捕まえておきました」

俺が悪ノリで言うと、

「少し体力を使いましたが、着物が少し乱れる程度で済みましたわ」

「稼がせてもらえて、光栄ですよ。王」

と、2人も乗ってきた。挙句の果てに

「くるしゅうない」

と隼人は続けて笑った。

「彼らは一体何者ですか？」

と司会の人がマイクを通さず質問してきた。隼人は答えようと口を開いた。

「僕の仲「部下です」

彼の発言を強制終了させるように、3人同時に言った。

「彼の命令で彼らを捕まえさせて頂きました。」

と顎で彼らを指した。

俺達は3人を縄で縛って、このホールに連れてきた。見せしめにしたかった訳ではない。そもそもココに連れてこさせたのは俺達ではなく警備員の方々だ。隼人を含めた俺達はその3人の前にたった。

「何であんな真似をした」

「……ポイントを上げるためだよ」

御堂は言った。

「私からすればアナタが何もしない方が不思議ですよ、王城隼人。それが幼なじみの余裕ですかねぇ？」

続けてジャンがそう言った。さらに御堂が

「だからこそ、俺は努力しなくてはならなかったんだよ。お前がいる限り、彼女はお前を選ぶ。だったら他の人に求められるしかない。決定しちまえば彼女は俺を振らないだろう。そうなれば俺が死ぬことになるからなぁ……。彼女はそんな真似ができるはず無い。あの娘は優しすぎる」

と、自らの作戦を暴露した。ジャンも笑っているから、恐らくは同意しているのだろう。

「西条。お前もそうなのか？」

俺は興味本位――ではなく、確信があっての質問だった。

「どういう――――」

「お前もそんな浅はかな考えなのかって意味だよ」

彼の言葉に被せて俺は続けた。

「……誰しも思っているはずだ。正義感があるから何なんだって…。それだけじゃ何の役にも立たない」

司会者がマイクを向ける。面白いと思ったのだろうか。

「金も知恵も運動神経もない。だったら唯一の取り柄の正義感しかないだろう？まぁそれでさえも、危険が低い、爆発事件にしかいかないような小さな取り柄だよ。もちろん、事件を作り上げたからっていう理由もあったけどさ」

と自らを嘲るように笑って言った。

「……西条」

俺は西条に目線が合うようにしゃがみ込んだ。

「何で俺がお前について行ったか分かるか？」

「…え？」

「お前ほどの正義感を持った男が不正を犯してまで戦おうとするはずがないと、信じていたからだ」

「逆だろ……」

西条はそう言ってまたも笑った。

「戦おうとするはずだと思っていただろう」

「違う。だって、お前の正義感は間違いなく本物だったからだ」
「そんなの分からないだろ」
「そう、分からない。けど俺には『聞こえる』んだよ」
「？」
俺達以外の人間が不思議そうな顔をしていた。そりゃそうだろうな。でも説明するつもりはない。
「お前はこう思ったんだよ。『誰か怪我をしてしまっていないだろうか』って。お前が、爆発事件を選んだのも、最も大きい事件でありながら、誰も居ない場所で起こせる爆発事件だった。玄関ホールを選んだも建物本体に影響を与えにくいからだ」
「・・・見透かした事を言うな」
西条は静かな怒りをもって、こちらを睨んだ。
「お前に何が分かる」
「何も分からないさ。俺には。もちろん誰一人分かるはずがない。人の気持ちなんて」
捨てるように俺は言葉を吐いた。
「・・・・・・」
「でも」
俺はそこで司会者が差し出していたマイクを握りつぶした。奇怪で迷惑な音が鳴り響く。
「聞こえるよ。お前の『優しさ』が」
俺は、真っ直ぐに彼の目を見て言った。何がその相手に伝わったかどうかは分からない。だが、これが俺の精一杯だ。
そこで、舞台袖から音河財閥の社長が出てきて、
「結果が出ました」

といった。

俺と海馬と虎郷はその場から退散しようとして、身を翻した。これで決まったと安心したからだ。この場に居た誰もが結果を聞かずとも理解していた。

はずだった。

「この中から、婚約者は選びません」

予想外の発言で、会場内の空気が騒然とする。

社長はそれだけ言うと、俺達と同じように身を翻して、また舞台袖の闇へと消えていった。

俺達と言えば、翻したはずの歩は動きをやめ、疑問を頭に残す結果となった。

そのとき俺達は忘れていたのだ。まだ事件は3つしか終わってなかった事に。

１３ ― 参加者尋問 ―（後書き）

生きたいのに死ぬ人と死にたいのに生きる人の違いは数多くあるのです。

でも共通点は一つです。

この世界に嫌われているのです。

１４ー最後の一手ー（前書き）

最後っていつ？　幕引きってどれ？

究極ってどこ？　破滅ってなに？

14ー最後の一手ー

結果発表が終わり、納得のいかない人達はそのまま会場で待機していた。俺と海馬と虎郷は自分の席へ。隼人達参加者は（縄を解いて）ステージの席に座っていた。

そして予想通り、音河社長の説明が始まった。

「……今回は先程言ったとおり、残念な結果となってしまいました。不正を犯してまで勝ち取ろうとするものが3人も出てきてしまったのですから。彼らを選ぶわけにはいきません」

その通りだ。彼らを選ぶわけにはいかない。だったら誰もが思うはずだ。

どうして王城隼人が駄目なのか。

「しかし、それも1つの愛の形です。何もしようとしない者を選ぶことも同じく相応しくないのではないかという判断をさせて頂きました。まして、何も持っていない者を選ぶことも相応しくない」

思わず身を乗り出すように立ち上がりそうになったが、両肩を海馬と虎郷に抑えられる。

「何で止める！！」

声を抑えながら叫ぶ。偉業だ。

「どうせ『何も持っていない』ってセリフに怒ったんだろ？でも、そりゃあ的を射ちまってる」

「何言ってんだ！！アイツは王城――――！！」

言いかけて気づいた。アイツは自己紹介の時に言ったんだった。

唯一、一言だけ。

「『王城を継がない』という彼の言葉は、自らの価値を捨てたようなものよ」

「でも、アイツは――」

「あなたが彼の何を知っていてもそれは皆は知らないのよ。私達の知っている彼では意味はない。周りの人々の目は、彼の価値は『王城の御曹司』だ、という点に集中しているの」

虎郷に言われてようやく理解できた。

そうか。俺達以外の人間には、王城の王たる所以を理解されることはないのか。

「しかし、今回の事件のおかげで良い教訓を得ました。この昔ながらの手法では、よい結果は得られないようですね。ですので、彼女の相手は私達が捜して決めるとしましょう」

社長さんはそれだけ言うと、後を司会者に任せるように舞台袖に消えていった。

「……えー…。では、後味の悪い結果となってしまいましたが、これで終わりとさせていただきます」

これで終わり……か。

会場にいた人々もどんどんと外に出て行こうとホールの出口に向かう。俺達は隼人の横にたった。

不正を行った3人も帰ろうとしている。と、そこで疑問

「お前らは警察行きだろ？」

「私の犯罪をもみ消すために警察に金を回したところ、残念なことに私の不正を隠すためには他の皆さんの不正も隠さなければなりま

せんでした。という訳でおいとまさせていただきますよ」
俺の質問に流ちょうな日本語でジャンが答えた。そして3人とも出口に向かった。

「……隼人」
「良かったんだよ」
俺が名前を呼んだだけで、隼人は全てを見透かした。
「これで良いんだ。彼女の相手は決まらなかったけど、少なくとも犯罪者と結ばれることは無いのだから」
と、安心したように言った。
その顔から読み取れたのは本心からの声だった。

『本当に良かった』

つまり、彼は彼女を本心から昔からの親友(しんゆう)として、親身に思っていたということだ。それが彼女にとって、嬉しい事なのかといえば、甚だ疑問――――いや、こんなところでわざわざ難しい言葉を使う必要性はない。

間違いなく、彼女にとっては悲しみを増幅させる一手に過ぎないだろう。

「本当に良かったのかしら」
小さな声で虎郷が言った。
「私たちが関わるようなことではないのでしょうけれど・・・。少なくとも、それで良かったとは私達は思わないわ」
「・・・ヒスイ君。それはどういう――」
「おい！」
彼の発言を邪魔するように、野太い声が上がった。見れば、司会者に突っかかっている。

「どういうことだ！こいつは！」
「え、はい？」
司会者はうろたえながら、男の言葉に対応している。
「出口が開かないんだよ！」
「！」
確かに、あの3人も含めた、全員が出口付近に固まっている・・・。しかし・・・。
出口が開かない・・・！？
「どういうことなんだ？隼人？」
「この会場の全部屋の入り口と出口は、電気によって制御されている。それはこのホールにも適用されている。つまり、電気に異常があるか、プログラムそのものに異常が出てるということだ」
隼人の声が聞こえたのか、司会者は
「今、確認を取ります」
と、トランシーバーを取った。

ゴトッ
ほぼ同時に、舞台袖から何かが飛んできた。

「・・・！」
それは音河社長の姿だった。
「しゃ・・・社長！」
司会者が音河社長を抱きかかえる。そして、舞台袖を睨む。
「お前・・・何者だ！？」
ギィイイイイイイイイイイン！
その言葉をかき消すように、ギターの音が鳴り響く。
「ぐあああああ！」
司会者の人が何かが当ったように、吹っ飛ぶ。そして、動きを止めた。恐らく気絶しただけだろうが、危ない状態ではある。
「な・・・何だ・・・？」

先ほどまで威勢が良かった男が後ずさる。
そして、その舞台袖からギターを持った女が現れた。服装は、ファッションに疎い俺としては、ロックテイストとしか言いようがない。特徴は、目の下にある謎の模様。ロックを歌っている歌手が良くしている、悪魔の羽のような形をかたどったマークだった。
「・・・・・・何よ・・・・あれ・・・・」
「何なんだ・・・アイツは・・・」
周りの人々が言う。完全に空気に飲まれている。と、そこで参加者の3人の男が寄ってくる。目立つポイントとでも思ったのだろうか・・・・。

「何なのかは、分からないが目立って見せるぜ」
「誰でしょうかね・・・あの女は・・・」
「・・・・・・」
3人とも不思議そうな顔をしている。俺も虎郷も海馬も分からない。何なんだ、これは。

「・・・やっぱり、誰も分からないんだね。そりゃそうだよ。だって貴方達はそういう奴らなんだもんね。貴方達が興味を持っているのは、音河なんだよ。私はどうでもいいんだよね？」
その声を聴いて、ようやく俺は分かった。でも、それよりもずっと前から分かっている奴が居たようだ。
「・・・・・・響花・・・・！」
隼人が目を丸く開いていった。
俺達の前に居た、隼人以外の全てから見た「ソレ」は、今回の主役でありながら、端々へと追いやられていた、音河響花だった。
とうとう彼女のステージがようやく始まった――ようやくステー

ジに立ったのだ。

１４ー最後の一手ー（後書き）

何もまだ始まっていない。始まらないものは終わらない。

15 ー女王の逆鱗ー

彼女の正体を理解した人間は後ずさる。つまり、ステージ上にいた人間だから俺、海馬、虎郷、ジャン、御堂、西条、隼人の7人だ。いや、隼人は動かなかったから6人か。

「あれが……音河響花……！？」

「い、いや……違う。あんなのじゃなかったはずだ！」

ジャンと御堂が言った。すると、音河が笑って

「そうだよ。「これ」が私なんだ。「こんなの」が私の心なんだよ」

と皮肉まじりに言った。

「……何なんだよ…コレは…！！」

西条達3人が背を向けて走り出す。

「こんな人生もういやだ」

音河はギターのピックを持った。

ギィィイイン！ギィィイイン！！ギィィイイン！

ギターの音が鳴る。と同時に何かが飛んでいく。

「！」

それらは3人の背中に当たる。その衝撃で3人はステージから突き落とされる。突然のダメージに受け身がとれない3人は、そのまま床に倒れたり、椅子に激突したり、階段に顔面をぶつけたりしていた。

いや、彼らには悪いがもっと大事なことがある。今ギターから飛んでいった物……。

「……隼人…今のは！？」

「……音符…だったね」

俺達が見たのは間違いなく音符だった。

「どうなってんだ？王城」
　海馬が焦るように王城に訊く。
「まだ分からない。でも、彼女がどうなっているのかは分かる」
「分かるのか？」
「僕らと同じさ」
　俺達と同じ……アクター……。
「隼人…お前なら知ってたんだろ？幼なじみなんだから」
「残念だけど知らなかったよ。つまりは彼女は久しぶりの突発的（アウトブレイク）ってことだ」

　と、そこで彼女は動いた。社長の髪を引っ張り顔を上げさせた。
「ほら、見なよ。あの3人は私なんてどうでもいいんだよ？私のことなんか分からなかったんだから」
「…くっ…」
「私の人生を貴方が決めないで」
　そう言って彼女は社長を投げ飛ばした。
　そして、ギターに手をかけた。っておい。
「ヤバい！！」
　ギィィイイン！
　叫んだときにはもう遅かった。ギターの音色は俺の声をかき消した。何かが飛んでいく。今度こそはっきりと見た。間違いなく音符だった。宙を舞っている社長を狙っていた。

　ガギィッ！
　音符は社長の居た位置に向かって飛んでいったが、空を切って（音符が空を切るのかどうかは分からないけど）後方にある照明に衝突した。隼人が下に向かって社長を引っ張ったからだ。俺が叫ぶより早く走り始めていたのだ。
　隼人は社長を床において、音河を睨んだ。
「響花……」

「どうして…」
　ギターを持って彼女は言った。
「どうして邪魔するんだよ！！！！」
　ギターをかき鳴らす。ギターの音色が響いた。
「！」
　音符が飛んでいく。隼人が壁に激突する。その後も何１０発かがヒットして、壁ごと外に押し出されてしまった。音河はその隼人を追いかけて外にでた。そして、隼人を蹴り飛ばして追い打ちをかける。会場からどんどん離れていく。
「隼人！！」
　俺も次いで外に出ようと駆け出した。しかし
「待って、嘉島君」
　と、また虎郷に止められた。
「今度は何だよ！」
「彼はきっとワザとダメージを受けている」
「ワザと？」
「ここから皆を逃がすためよ。囮（おとり）になって、会場から離れようとしているの」
「そう・・・なのか？」
「たとえそうでなくても、今しかチャンスはないわ」
「・・・分かった。避難を優先させよう」
　俺は隼人の方向を見た。
「！」
　音河がこちらを睨んでいる。そして、猛スピードでこちらに迫ってきた。
「海馬！止めてくれ！」
「あ？って・・・何だってんだ！？」
　１００メートル余りの距離を３秒で縮めてきた音河を海馬が止める。
「５秒だけそのままで頑張ってくれ！」

「無理だって・・・の・・・！」
と言いながら音河を止めていた。
「何で、このタイミングで帰ってきたんだよ・・・」
「私は聴覚は優れている自信があるんだよ」
音河は海馬を睨む。
「このタイプの女は苦手なんだよな・・・」

その間に俺は、出口に立つ。そして
「早急に出て行ってくれよ。迷惑だからよ」
と言ってから、出口を破壊した。
そこから雪崩のように人が出て行く。気絶した人間は虎郷に運んでもらった。

「大丈夫か！海――」
声が出なかった。海馬は床に突っ伏していた。そしてその海馬に音河はギターを立てていた。
「・・・・・・海馬」
「邪魔だったからね。壊させてもらったよ」
「・・・・・・！」
怒り任せに俺は突っかかった。会場の1番上からステージに向かって、一歩で飛んだ。
「君も邪魔だよ」
「失せろ」
音河はギターを構える。知るか。ぶっ壊してやる。と思った瞬間。
「！」
音河の姿が消えた。いや、入れ替わったように見えた。
さっきまで音河が立っていた位置に隼人が立っていたのだ。
「乱暴な真似はよしたまえよ。ソウメイ君。聡明に相応しい性格でいたまえ」

「隼人！？」
俺は無理やりにスピードを抑えた。どうやら、音河を後ろから蹴り飛ばしたようだ。
「お前・・・大丈夫なのか？」
「まぁ、痛いは痛いけど平気だよ。多分ね」
と、隼人はこちらを見ずに音河を見ている。
「・・・・・・」
音河はあまり痛みを感じていないようだ。いとも簡単に起き上がってきた。
「きっとギターを盾にしたんだろう。衝撃が受け流されたような気がしたわけだ」
音河はスカートについた汚れを少し払って、またこちらを睨んだ。
「・・・隼人も私の邪魔をするんだね」
「・・・」
「いいよ。私は自分の道は自分で決める。隼人が受け入れられないのならもっと他を捜すだけだ」
「・・・響花・・・」
隼人は構える。

そして睨んでいる彼女の目を真っ直ぐに見つめて言った。

「大丈夫だ。君を助ける」

１６ー女王の声明：王への衝撃ー（前書き）

僕はどちらかと言えばってか、楽器で１番好きなのはドラムだな。

１６ー女王の声明：王への衝撃ー

助ける。
彼がなかなか言わない言葉を飲み込んだ彼女は、開口一番にこう言った。

「うるさい！」

ギターの弦をピックで弾く。
音符がこちらに飛んでくる。

「っておい！」
床を変換させて壁を作る。
「ダメだ！ソウメイ君！音符を避けるんだ！」
言いながら隼人は壁から離れた。
「どういうこ――」
横腹に激痛が走った。そして外に向かって弾き出される。

「・・・ぐ・・・ッ」
受身を取って何とか音河の方を見た。もう既に１０メートルも会場から離れている。
「どういうことだ！」
すぐに走ろうとしたが、俺の方向に向かって隼人が飛んできた。
しかしダメージを負った様子ではない。
「アレは『音波』と『振動』だ」
登場するなり彼は言った。
「はぁ？」

「ギターから流れる音が自分に近づいてくる事によって、ソレが今1番自分に近い状況を『無意識』に頭で判断する。それを感じ取った時に、振動がピンポイントで入れば衝撃を受けたように『錯覚』するんだよ」
「何だそりゃ。そんな理論で起こる現象じゃないだろう？現に痛みも感じてる」
「多分だけど空振みたいなものだろう。火山活動の際のアレだよ。可聴周波数の振動は爆発音として聞こえる・・・ってそれはどうでもいいや。空振は窓を破壊したり、ドアを歪ませたりぐらいなら出来る。それを密集させて・・・とかじゃないかな」
「何か曖昧だな」
「そもそもこれらに理論を求めちゃいけないんだよ。僕や君らのだって理論は説明しにくいだろう？」
・・・確かに。そう言われると言葉がない。

そこまで会話が終わって、疑問。

「じゃあお前はなんでダメージ食らわずに来れたんだ？」
「いや。ダメージは食らっていると思うよ。単純に脳を騙しているんだ。すぐにガタが来るさ」
「それ冷静に言う事じゃないぞ」
だがそんな芸当が出来るのは、彼の脳があるからだろう。
と、そこで音河が猛スピードでやってきた。そのまま俺達2人突っ込もうとする。
「これなら・・・」
俺はまた床を変形させて壁を作成する。
「！」
音河は今度は急ブレーキで止まる。
「君も・・・特別なんだね。いや、異常なのかな？まぁ、いいや」
「・・・これはどういう原理なんだ？」

「・・・まぁ、反作用だろう。床とか壁に向かって音符を発射するんだよ。で、その方向とは逆向きに飛ぶって訳だ」
「なるほど、理論で説明できるものもあるわけか」
「でもそもそも音符が飛ぶ原理は説明できないけどね」
・・・確かに。
「そんなことはないよ」
俺達の疑問に答えたのはなんと音河だった。
「アレは振動で形を作っているだけだよ。いや、作ってるというよりは、何もしなくてもそういう形になってしまうんだよ」
そして、音河は。
ギターを槍のように構えた。
「弦（ストリング）と音符（ノート）」
ヘッドの部分から弦が伸びてくる。反応できない速度で。
「！」
それが俺の体に突き刺さった。
「しばらく動かないでもらうよ」
言いながらギターをかき鳴らす。
「な・・・」
なんだ。これは。
「あ〝ああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」
体に何かが流れてくる。電波かなんかがのうないにながれてくるようなかんじだというかどんどんとのうがまひしていくやばいこれはやばい。
「大丈夫かい？ソウメイ君」
「・・・・・・麻痺た」
舌が思うように回らない。困った。
「彼女はこの間に成長しているようだね。音符にも性能の違いがあ

るようだよ」
「・・・ごめん。後は任へた」
俺は語り部に専念する事にした。

「響花。もう一度だけ言っておくよ。君を助ける」
「無理だよ。私のことは私以外分からないもん」
「そんなことはない」
「そんなはずないよ。だって、私のことが分かってるなら、隼人はそんな態度じゃないはずだよ」
「・・・？」
「私の幸せを理解できてないんだよ。隼人は」

ギターのボディから棘が出てきた。それは、彼女の怒りを証明している事が容易に想像できた。
「また・・・進化した・・・」
驚いている隼人。
その隼人に、音河は言った。

「私は・・・隼人が好きだ」

彼女は隼人を見て言った。

その隼人は、目を大きく見開いて動きを止めた。

１６－女王の声明：王への衝撃－（後書き）

・・・こういうセリフ言わせるのは得意じゃない。

てか、キャラじゃないから知り合いとかが見たらひくだろうな・・・。

１７ー家臣の説教：王の決断：家臣の助け：女王の瞳ー（前書き）

久しぶりに長いです。約３５００文字です。よく準備してからお読みください。

17ー家臣の説教：王の決断：家臣の助け：女王の瞳ー

「響花……？何言ってるんだ……」

隼人は彼女の発言に驚いてようやく口にした言葉がコレだった。

「そうやって何も気づかないから私は傷つくんだよ。だから私の心は痛むんだ」

音河は言いながら動いた。隼人は茫然として動けない。

「だから私は怒っているんだ！！」

1歩で踏み出して、ハンマーのように振り落とした。

「！」

隼人はそれでも動かない。否、動けないんだろう。脳内容量がキャリーオーバーしたのかもしれない。故に、攻撃はそのまま隼人に振り落とされた。

「隼人！！」

「！」

俺の叫び声でようやく少し動くが、時すでに遅しで、肩にヒットした。　メキィッ！

「ぐぁあああ！！」

何かが砕けるような、折れるような音がした。その対象は間違いなく「骨」だ。

女子の腕力だったことで、力が入っていなかったことと狙いが定まっていなかったことと、少しだけ動いたことが不幸中の幸いで、頭に当たることはなかったが、棘が合ったためダメージはそこまで軽減されないだろう。

「……もっかい」

宣言通り、ギターを引っ張り（自然、棘が肉をえぐり取るような動きをする）、もう1度ギターを隼人にぶつけた。今度は横殴りに脇腹にヒットさせた。

「がっ……」

少し斜め下からの攻撃だったようで、隼人は１０メートル先の空に向かって飛んでいく。

「ストリング」

ヘッドから弦が飛び出る。１メートル、２メートルと伸びていき、１０メートル先の隼人を掴んだ。

俺のときと同じ事をしようとしているのかと思ったが

「アァァァァァ！！」

と叫んでそのままギターを振り回した。力業だった。

１周回ったところで、隼人を地面にたたきつけようと、ギターを縦に振った。

が。

地面に向かって落ちては行ったが、ぶつかることはなかった。

「……王城君」

「ヒスイ……君」

虎郷が王城をキャッチしたのだ。３人の男子がボロボロで、女子に助けられるという、とてつもなく恥ずかしい状況になってしまった。

距離は遠いが、周りに人がいないから俺の耳と能力なら聴こえる。

「……」

虎郷は黙って、伸びていた弦をねじ曲げて壊した。

「ありがとう。ヒスイく――――」

「だから言ったでしょう？本当に良かったのかって」

「……！？」
「彼女の最後の一手になったのは、あなたの『これで良いんだ』という言葉のせいよ。アレで彼女は詰んだのよ。王が王女を詰むというのも、皮肉な話だけど。その証拠に今あなたはこうやって窮地に立たされている」
　虎郷も音河と同じように睨む。
「今回の事件はあなたの責任。不用意な余計な１言で――――それが最後のトリガーとなって、彼女は能力を完成させた」
「僕の……責任……」
　隼人は言い聞かせるように繰り返した。
「もちろん、根拠のない推論よ。女心って奴かもしれないわ」
　自分に相応しくないと思ったのか、笑いながらそう言った。
「もう一度だけ聞くわ。これで良いのかしら？」
「……」
　隼人は黙って立ち上がった。
「行ってくる」
　そして走り始めた。
「弦乱射（ストリング・ガトリング）」
　ヘッドから弦が、拡散するように飛び出す。そして途中で方向を変え、隼人を狙う。合計１０発だ。大きさはギターのそれとは違い、直径１０センチくらいだ。
「アァァァァァァ！！」
　音河は叫ぶ。弦は速さを増す。
「……同じ轍は２度と踏まない…。踏むわけにはいかない！！」
　隼人は飛び上がる。３メートルは越えただろう。１発目はそれで避ける。鉄の刃のように、コンクリートに突き刺さる。
　しかし、２発目が隼人を襲う。追尾弾のようだ。
「……うぉぉぉああ！」
　空中で身動きがとれない隼人は、雄叫びを上げながら体を捻って左向きに回転する。体が少し左に動きながら落下する。危ういが、

２発目を避けて地面に着地する。
が。
「！」
無理な動きと、ダメージを脳を騙すことで軽減していた反動のためか、動きが突如として止まった。一秒程度とは言え、それが命取りとなる。３発目と４発目が、左右から来る。
「ヤバい……」
「怪我しないように気をつけて」
万事休すで弱音を吐いた隼人を投げ飛ばす。

後ろから走ってきた虎郷が、だ。
「ヒスイ君！」
隼人が叫ぶと同時に、虎郷の体に２発の弦がぶつかり、煙を起こす。虎郷に突き刺さったのかもしれないし、コンクリートの方に刺さったかもしれない。あるいは２発の弦に挟まれたかもしれない。
「……すまない……」
言いながら隼人は、音河の方に向かった。それでいい。じゃないと虎郷が身代わり（死んだかどうかは分からないけど）になった意味がない。
５発目は正面から来た。隼人はまたも飛び上がって避ける。そして、６発目が同じように隼人を狙う。
「……大丈夫だ」
しかし、今度はその５発目の上に乗ることで現状回復した。そして、６発目を飛び上がって避けて、前に進む。直径１０センチしかない上に、丸い形で、バランスも悪いだろうが、お構い無しに走る。
残り５メートルまで近づいた。
「……良いはず無い」
隼人は走りながら呟いた。
「ウァァァアアアア！！」

音河が叫ぶ。7発目と8発目と9発目――――計3発が隼人に一斉に襲いかかる。速さはさらに速くなった。それでも隼人は走るのをやめない。そして
「良いはずが無いんだ！！」
叫びながら隼人は跳んだ。
身動きがとれなくなるのも構わずに。
ザシュッ！
1発が隼人の右肩に突き刺さる。続いて、2発ともが、隼人の左腕と左肩を突き刺した。
「うぉぉぉぉぉ！！！！」
それでも隼人の勢いは収まることなく、前へ突き進む。同時に地面へと体は向かう。
「……！！」
音河は一瞬狼狽える。
「ぉぉおおお！！」
隼人がそのまま跳んでいる間に、突然、弦が切れる。
「……私を理解なんて出きるはずない！！」
怯んだはずの音河は、先程以上の勢いで叫んだ。
それは悲痛の叫びだったのだと思う。
「！」
すると、最後の1発――――10発目の大きさが、急に膨れ上がるように大きくなった。直径は20センチぐらい。隼人と俺達との距離は2メートル。
先程以上のスピードとなった弦は、1秒もなく、隼人に到達した。
グサァッ！！
それは間違いなく突き刺さった。2メートル先の

コンクリートの壁に。

「……！！」

驚く音河。

その彼女にようやく呂律が回るようになった俺は言った。

左手を地面につけて。

「2メートルくらいなら俺の力も届くさ」

音河はこちらを睨んでギターを構えた。

ちょっとは役に立ったかな…隼人。

そんなことを思った俺に隼人は

「流石だよ。相棒」

と。

1メートルの距離で言った。

「！！」

だが、それはつまり、音河との距離に等しい。

「衝撃音（ソニック・ノート）！！」

音河は振り向きながら、ギターに手をかけた。

ギィィィィィン！！

豪快な音を立てたギターから出たその音符は。

「！」

空を切った。理由は間違いなく、ギターの向きがズレたから。

そしてその理由は、ギターに瓦礫がぶつかり、標準がズレたからだ。

「ナイスだ。タダシ君」

「お褒めに与り光栄の至りだっつーの。最後ぐらい活躍させろ」

見ると、１０メートル先の会場から、海馬が瓦礫を蹴ったままの態勢で立っていた。最高の運とブランクがあるが、元サッカー経験者という履歴が良いように作用したらしい。

そして隼人はギターを右足で地面に向かって叩きつけた。ギターを肩に掛けていたスリング（で良いのかどうかはしらない）が切れて、ギターごと地面に落ちる。

「響花……」

隼人は彼女の正面に立って、いつも通り彼女の名前を呼んだ。

「……どうして？」

音河は目に涙を溜めながら、隼人を睨む。

「どうして邪魔するんだよ！！私を理解できる人なんていない！！隼人は自分の人生のために、王城との縁を切ったけど私にそんな勇気ない！！隼人にだって私を理解できないんだよ！！」

「あぁ。理解できない」

「だったら邪魔しないで！早く消えてよ！！私は――――」

と。

そこで彼女の叫びは止まった。或いは止められたと言うべきかも知れない。

俺も、目を丸くして見るしかなかった。

なぜなら、彼女の発言が止まったのは、隼人が音河を抱きしめたからだ。隼人より少し小さいその体躯を。

「理解はできなくても、受け入れることは出きる」

隼人は言った。
「君が何をしようと僕が受け入れる。僕は――僕らは、君の味方だ」
隼人がそう言うと、
「う――――うわぁぁぁぁぁぁ、あ、う、うあああああ――――――」
彼女は糸が切れたように泣き叫んだ。
心を吐き出すように。
思い悩んできたことを。
想い悩んできたことを。
悲痛の叫びというなら、こちらが本当なのかもしれない。
俺達も味方に含めるのかよ
なんて、野暮な突っ込みも入れない。
彼女のギターも、飛んでいった弦も全て消えていく。
彼女の悩みと同じように。
彼女の願いが叶うように。
地面や壁に爪あとを残しつつも、１つ残らず全て消えた。

１７ー家臣の説教：王の決断：家臣の助け：女王の瞳ー（後書き）

一応解説。

「思い」は考えていた事で、

「想い」は募る恋心だと、僕は判断しています。

それにしても、「泣く」を表現するのって難しいね。

18 ―まとめ― （前書き）

さて、今回もまとめは「俺」が担当する。

いい加減、「アンタは一体誰だ」って質問が飛び交いそうだが、

まぁ、優雅かつ華麗に無視するとしよう。

18 ―まとめ―

今回の事件の責任は、虎郷が言っていた通りだ。その責任は全て、隼人にあるということになる。事件というのは、選挙戦での3つの事件も含めた、4つの事件だ。そういう意味では、彼女・・・虎郷が全てを理解したように話していたのは、事件を見ていたからなのかもしれない。だが、そんなことは今更いっても仕方がない。

隼人の言葉が、音河響花の心を暴走させた最後のトリガー・・・すなわち、決めの一手になったわけだが、そもそも彼女の願いはなんだったのか。

別にクイズでもないので、早急に答えると

「自分を認識する」という願いだった。

それはつまり、自らの道を自らで決めたい。誰かに決められたくないという願いだった。そう願ってしまったのは、社長が嘉島達に、婚約者を選ばなかった理由――隼人が選ばれなかった理由を話した後の社長と音河響花の会話のせいだった。

当然、響花は訊く。

「どうして隼人が駄目なんですか？」

と。

それはそうだ。暴れなかったよりはマシなはず。いくら王城を捨てたと言ってもだ。しかし、社長はその質問にこう答えた。

「何も持っていない者を音河の婿にするわけにはいかない」

それはつまり、王城の名を捨てたものは必要ない、という解答だったのだ。しかし、彼女はこの言葉に怒りはしたものの、頭ごなしに否定できる内容ではなかった。

彼女の心を蝕んだものは、社長の去り際の一言だったのだ。

「貴方のためなんだから」

心の中で何かが歪(ゆが)んだ。何かが叫び声を上げた。そして怒りがこみ上げた。

私のためを思うなら、そんな解答にはならないはずだと。

そんな歪(ひず)みと歪(ゆが)みによって、不安定に曲がった心のままステージに向かった。

そして、隼人の発言を聞いてしまった。

これで良かった。

彼女の中で何かが叫んだ。自らの心を開放した。彼女の心が折れ曲がり、自らの願いを叶えようと何かが爆(は)ぜた。それが彼女のアクターとして力を得た「願(りゆう)い」だった。

今回は、男子の属性――女子にもたまに当てはまるが――にある、「鈍感」が招いた結果なのだ。

そんな結果になってしまったのは、彼女が自らの世界を縛られていたせいなのかもしれない。

そんなことから考えても、今回のオチは「悲憤慷慨(ひふんこうがい)」という言葉が相応しいのだろう。

18 ―まとめ― （後書き）

ちなみに説明しておくとすれば、

「悲憤慷慨」とは世の中の不義不正や自分の運命に対して、悲しみ憤ること。

皮肉にも、狭い世界に居た彼女にとっては、相応しい言葉なのだろう。

19ー王が王であるが故：女王が女王であるが故ー

「エイム・ノート」

状況が一段落着いてから、隼人が言った。

一段落とは言ったが、この場合のそれは、糸が切れたように泣き始めた彼女が、またも糸が切れたように突然気絶して、それを地面に置いてから、自分たちの応急処置を始めた――までが一段落である。

ちなみに一番危ういと思われたのは虎郷だが、何ら問題なく、ピンピンしていた。ので、一番酷かったのは海馬だろう。

とりあえず、いつも通りに質問する。

「また突然だけど……そいつは彼女の能力でいいんだよな？」

「うん。元は『エモーション・エイム』というものなんだけど、派生して色々作られてるよ」

「エモーション……感情か。それで、エイムってことは狙う……か」

隼人が言うには、エモーション・エイムの特徴としては、アクターの所有者の感情を反映する。

そもそもアクターは、所有者の意思（或いは意志）や感情が反映されている（そもそもアクターは願望や欲望から生まれてくる物だから、当然といえば当然だろう）のだが、エモーション・エイムはそれの比ではない。

まず、所有者の脳がシンクロしている。

所有者の目が見て、それを危険だと判断したとき、アクター自体に指令を出すのが通例（俺の左手がその例だ）だが、エモーション・エイムは、指令を出す必要がない。それは、彼女の怒りや叫びで弦の速さが速くなったことが証明している。

次に、アクターの能力が変わる。

それはつまり、属性変化である。最初はただの衝撃波だった物が、麻痺……一種の電撃のような作用を果たし、麻痺させた。また、弦をミサイルのように飛ばすという攻撃もできた。隼人は進化だと最初は言っていたが、どうやら感情による変化だったらしい。

俺を邪魔だと思えば、麻痺の属性になったし、強い攻撃の意志から弦がミサイルなった、ということだ。

そして、アクターそのものが意識を持つ。

これは彼女のような例が典型的で、「存在」や「自分」という願望を持つ事により、アクターそのものにも「存在」が生まれる。というより、エモーション・エイムの類のアクターを持つ者は、それに近い願いをするらしい。それは、自分という存在が否定されたからこそ、それ以外を否定せずに生きようという決意の表れであろう。

語尾が曖昧なのは、そのアクターになった者にしか分からないからだそうだ。隼人が言っていた。

アクター自身の意識は、所有者の意志を邪魔するものではない。むしろ尊重するものだ。だが、所有者の身の危険を感じれば、何よりも早く動く。また、アクター自身が見える視界の情報も、シンクロしている脳を通じて所有者に入る。所謂、もう1人の自分がいると言うことだ。

「それが今回は『音楽』だっただけの話なんだよ」

話を終えて、隼人に声をかけた。

「でも、どうして音河はそんな風に服装が変わったんだ？」

ロックテイストの格好になってしまっている彼女。

隼人はその音河を背負って、会場の方に向かった。俺と海馬と虎郷も、その背中を追いかける。

「彼女のアクターは、Ｗｅａｐｏｎだ。これは、ＣｙｂｏｒｇとＡｒｍｓに分かれるんだけど、これらの特徴は所有者の姿が変わることだ。まぁ1回目くらいだよ、ここまでになるのは。2回目以降は感情の整理がついているはずだからね。まぁ、暴走でもしない限り

大丈夫だろう」
「いくらなんでも変わりすぎじゃないか？」
俺の代わりに海馬が続けて質問した。
「いや。実は東先輩もＷｅａｐｏｎでね。Ｃｙｂｏｒｇの方だったんだけど、彼は暴走族になってたよ。今は抑えているけど、たまに感情が爆発したら、リーゼントになってそれなりの格好になる」
「へぇ・・・。初めて聞いたな」
「まぁ、僕らは自分の能力――アクターを他人に話したがらないから」
そう言って、話しているうちに会場に着いた。
「・・・・・・王城君。まさか、彼女を置いていくの？」
「・・・いいや。彼女の件は今日元さんに相談するよ。何とか説得してみる」
「なら、何をしに来たの？」
「・・・決意表明・・・かな」
そして音河を背負ったままの隼人は、倒れたままの音河社長の元に向かう。俺達は状況を察して、それ以上は近づかなかった。

「・・・音河社長」
社長を見下ろす角度で、隼人は言った。
「・・・」
「起きてると思うので勝手に言います」
そのまま腰を曲げる事もなく見下ろす。
「僕は響花を守り抜きます。ですから、貴方から彼女を解き放ちます。許可は取りません。ただの決意表明です」
「・・・・・・何も持っていない貴方に何ができる・・・・・・」
社長はそのままでも、王に対して屈することなく言った。勢いだけでも威厳がある。倒れたままの市井は直ることはないが。
「お前はその娘を幸せにはできない。何も持っていない貴様に何が

できる」
厳しい口調で社長は続ける。
「・・・・・・僕は王城を捨てました。なぜなら僕には目標があるからです」
そして。
隼人は遅ればせながらの自己紹介を始めた。
「目標・・・・・・？お前はそのまま王城に居れば、最高級の幸せを手に入れられたはずなんだ。どうせくだらない目標のために貴様は――」
「僕は！」
社長の嘲笑するような物言いを無理やり遮って止める。
「王城を越える組織を作る。僕は王を越える。頂点を目指す。成りえない者・・・神に近づいてみせる」
そう。
それが俺達とつるむ彼の目的。
「王城を越える」
それが彼の最大の目的だった。
隼人はこちらに向かってきた。帰路に立ったということだ。社長も何も言えずに口を噤(つぐ)んでいる。
「それに僕は持っている。最高の仲間を。それだけで最高級の幸せだ」
隼人はそれだけ言って、俺達の前を通り、俺達の前を歩き始めた。

時刻は６時。１１月にもなり、日が沈むのが早くなった。

だが、その光でさえ、王と王女を祝福するように――いや。

未来の神と女神への賛美のように、

後光をさしていた。

２０ －ＷＲと駒－

「いいよ。好きにしろよ」

音河の勧誘に関しては割と簡単に承諾を得た。

「俺や嘉島や東を助けてくれたお前には返しても返しきれない恩がある。お前の久しぶりのワガママだからな」

という言い分だった。

「それなら、俺も東先輩や今日元さんを助けるのには尽力したんですけど……」

「お前には謙虚さが足りん」

自己主張したら、叱られてしまった。

「……ありがとうございます」

それだけで俺達はＷＲを後にし――――ようとしたのだが、

「嘉島。ちょっと残れ」

と、今日元さんに止められた。

俺だけ残って、今日元さんのチェスに付き合った。

「何すか？」

駒を動かしながら話す。

「ん？いや、まぁ……ちょっとな」

「今日元さんにしては言葉を濁しますね」

俺の言葉に少し間を空けて、今日元さんは言った。
「……アクターが発動してすぐの人間の心は不安定なんだ。表面で元気そうでも、案外、中はズタズタだったりする」
夏休みを思い出す。そういえば、東先輩や今日元さんは長い間アクターとつき合ってはなかったな……。
「彼女の力になってやれ」
今日元さんは俺に向かって言った。
「……それは幼なじみの隼人や同性の虎郷の出番じゃないですか？」
「あぁ、そうだな」
「だったら――――」
「だからこそ、だ」
俺の言葉を遮るように言って、真っ直ぐ俺を見る。いつもなら照れていたが、今はそんな空気じゃない。
「彼女に今1番必要なのは、新しい環境だ。海馬は金持ちだから同じような空気を醸し出す。虎郷は同性。隼人に至っては、幼なじみだ。新しいのは場所だけ。周囲は何1つ変わっていない」
……なるほど。不安定な心を治すには、自然の中に行ったりするなぁ。似たような感じで、環境を変える……というわけか。
「でも、それなら東先輩でもいいんじゃ――――」
「てことは、嘉島でもいいよな？」
……言い返したいが、一理ある。
「同年代ってのもピッタリだ。それに――」

と。
そこで1度口ごもる。
が、結局は最後まで言った。
「それに、お前と共通の話題があるだろう」
「……」
「音楽だよ」
「俺は……音楽には疎いですから」
「避けているだけだろう？」
「……それは……」
「逃げずに受け入れろよ。お前はもう受け入れられるだけの器があるはずだ」
……。
確かに最近は仲間意識も芽生え始めた。受け入れられるキャパシティも増えたはずだ。だが――。

「それに、響花って名前も、お前の姉さんの名前を連想させるだろう」
「……でも、俺は――」
「チェックメイト」
見ると、俺の駒が完全に追いつめられていた。
「今のお前は過去に支配されて、こんな感じになっている」
俺のキングを指差す。
「……」
「でも、支配（ルール）を超えれば、勝てる戦いもあるさ」
と今日元さんはチェス盤を投げ捨てた。

「心配するな。お前の王城（キング）はしっかりしてる。虎郷（ルーク）は統率力もある。海馬（ビショップ）も力強いし、東（ナイト）はいつも通りに頼りになるよ。さらに、音河（クイーン）まで入ってきたんだから、後は嘉島（ポール）が努力するだけだよ」
「それだと、今日元さんが入ってませんよ」

「俺は最強の駒を使って戦うプレーヤーだよ」

と、今日元さんは快活に笑った。

「……フッ……」

俺も思わず笑う。

「じゃ、後は任せたぞ。兵士」

「了解」

そして俺は今度こそ、ＷＲを後にした。

後日談ー恋バナー（前書き）

まぁ、いつも通り後日談といこうか。

何かいいことあったらいいね。お相手は榊乃幽也でした。

後日談ー恋バナー

あれから数日後。

「なぁ、隼人と音河って、どんな関係として理解すればいいんだ？」
リビングで、俺と虎郷と海馬と隼人と音河（多分これからは、これが基本メンバーとなろう）で、たわいもなく話していた最中の俺の疑問だった。

「？」
隼人は不思議そうな顔をしている。
「別に付き合ってるって風じゃないよな？」
「あぁ・・・。もう、婚約でいいんじゃね？」
海馬が適当に答える。
「そんな簡単に決めていいもんじゃないだろう・・・」
「・・・・・・まぁ、そういうのはあまり考えなくてもいいんじゃない？」
俺の疑問に虎郷は素気なく答えた。
「付き合ってるとか、カレカノ関係では無いでしょう？強いて言うなら『好き合ってる』ってかんじでしょうね」
「あ～・・・・・・。なるほどな」
「あの・・・私たち抜きで話し進めてない？」
音河が割ってはいる。しかし隼人は
「でも、まぁそんな感じの理解でいいんだと思うよ。僕もそうでありたいと思うから」
と、虎郷の言い分を肯定した。すると今度は音河が、
「そうだ。ついでだからこっちから質問するよ」
と、明るい顔で言った。うん、拒否する暇なし。
「皆の恋愛経験は？はい、まず嘉島くん！」

「・・・・・・なし・・・だな。初恋くらいならあったと思うけど、今思い返してもそんな深い思いではない」
「はぁ・・・・・・。そうなんだ」
なんか残念そうに言われた。そんな顔されてもなぁ・・・。
「火水は？」
「私は、本気で愛していた人がいたわ」
「へぇ！」
「まぁ、偽物の愛……いえ、騙されたと言うべきね」
虎郷はそう言って、虚空を眺めながら笑った。
分からない人は一章を読もうね。
「ん？んー……？」
音河が唸る。うん、流石に一章を読めとはいえない。

「まぁ気にしなくて良いわ。結局、言ってしまえば、恋にはどこにでも落とし穴があるのよ。恋に落ちたり、相手に落とされたり。そう思えば、いつのまにか、失敗の方向に落ちていったり」
と、虎郷は言って締めくくるように、海馬の方に質問するように促した。

「海馬はなぁ…」
俺は思わず笑ってしまった。
「そいつは美人や可愛い人なら誰にでも声かけるからな」
「しかも無駄にもてる」
「女たらしね」

かしま、はやと、こさとのさんれんこうげき！
「ハッ！」
しかし、かいばにはきかなかった。

「はぁ。でも私は声かけられてないから……私は美人じゃないって

ことだね」
音河が落ち込む。しかし海馬は、
「違うな。音河は美人だが、すでに相手がいる。そんな幸せを破ることを楽しみにはしていないからな」
と、静かに釈明した。
「でもお前は女たらしだろ？恋愛経験は豊富そうだな」
「いや、恋愛まで発展することは無い。というか、大きな勘違いがあるぞ」
「勘違い？」
俺の疑問に頷くように、隼人と虎郷も海馬を見る。

「俺には彼女がいる」
海馬は静かに言った。
「……」
ということは、だ。
「お前、相手がいるのに女子口説いてんのか！？」
「当然だ」
「当然じゃねぇよ！」
俺が叫んだあと、隼人は
「本当に女たらしか…」
と呟いた。
「きっとこの間の電話の相手ね。タジタジって感じだったから」
「あ、そうだ」
言って、海馬は立ち上がり部屋にはいると、荷物を持って出てきた。
「その電話で約束していたから行ってくる」
「どこに？」
「デート。言っとくけど、つけ回しても無駄だ。俺の運とあいつなら逃げ切れる」

そして出て行った。

「……うん。この話は終わりにするよ」

音河が何らかの空気を察したのか、話を打ち切った。

しかし……。

東先輩と今日元さんの関係はよく分からないから言及できないけど、贔屓目に見たとしたら。

恋愛経験が無いのは俺だけなのか。

……どうして、恋愛ができないのかも自分で分からないから解決のしようがないな。

まぁ、いっか。気にしなくてもいいだろう。

このときはそう思っていたが、真剣に考えることになってしまったのは、3ヶ月程経ったときだった。

だが、まぁ、このときの俺はそんなこと予測もしていなかったので、しばらくは、普通に物語が進むだろう。

後日談ー恋バナー（後書き）

次回予告。

第四章『回り廻るこの世界』

この地球は絶えずまわっている。まわっていない時間なんて無い。

その回転が止まる時はこの世の終わりなのだ。

あるいは、生命が終わった時。もしくは、自分の世界が滅んだ時。

01_Encounter_（前書き）

新章「回る廻るこの世界」

1話「遭遇」

01―Encounter―

今回の物語を紡ぎだすには、俺が見た「アレ」について話さなければならない。冒頭より前の、所謂前日譚（ぜんじったん）という感じだろうか。少なくとも音河の騒動が終わった後だということだけは分かる。だが、はっきり言って、いつの出来事だったのかも覚えていない。

街の中心部を歩いていた（目的があったかもしれないし、なかったかもしれないが、一人だった）ときに、俺はそれに注目した。

身長も体格も小柄な子どもが、数人の青年達と一緒に居た。最初はなんか事件にでも巻き込まれたのかと心配したがそういうことではなかった。それらの集団はストリートダンサーらしい。道で、ヒップホップ系統の音楽を流して踊っていたのだ。

まぁ、それくらいなら俺も見るだろう。たまにはそういう連中も居る。

しかし。

俺の目はそれに釘付けになってしまった。原理も理論もあったものではない。しいて言うなら、

俺達と同じ感じがしたのだ。それはつまり・・・・・・。

その時、俺はそちらに向かおうとしたのだが、別の集団が来て何処かに行った。

俺は単純に興味本位だったのだが、今回の物語に「アレ」が関わろうとは思っても見なかったのだ。

01―Encounter―（後書き）

1話目は短めになっています。今章の題名は英語で行きたいと思うので、

皆さん！辞書の用意を！

02―Detective Work Start―（前書き）

第2話　「探偵業　開始」

僕のお気に入りユーザーの人もはまってるんだけど、ダンガンロンパってゲーム。
めちゃ、面白いよ。いや、これマジで。推理ゲームを超えてるよ。

02―Detective Work Start―

さて、前日譚を話し終えたところで、ようやく物語を始めようと思う。

今回の物語を始めるには
１２月９日金曜日が物語の冒頭を飾るのに相応しいと思う。今日はうちの学校の入学説明会と、そのための職員会議とかで忙しいらしく、昼前には帰らされた。

「久しぶりの依頼だよ」
隼人は俺の部屋をノックして入ってくるなり言った。
さて、皆さん忘れていると思うので一応言っておくと、俺達（俺と隼人）は生徒でありながら、ネット上で興味を持った場合のみの探偵をしている。一応サイトがあり、遊び半分で投稿してきていない情報で、隼人が興味を持った時のみ、それらを調査しているのだ。ただ、俺は真面目にやるつもりはなかったんだが。

隼人は俺の部屋で話を始めた。印刷されたウェブのページを見せつける。

「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ　という組織の正体を暴いてほしいんだそうだ」
「・・・・・・「りーどたーる」ってどういう意味なんだ？」
俺の発言に対して隼人は
「ふぅ……」
とため息をはいた。俺の部屋から即刻退去しろやこの野郎。
「……最初のＲＥＡＤは、過去形の「レッド」の発音だね。次のは「テイル」だけど、「ｔａｉｌ」とは違って、この綴りの場合は「

架空の話」って意味だから、それっぽく訳すと「架空の話を読んだ」ってことになる」
「で、そいつらはどういう組織なんだ？」
「所謂、革命家だね」
「革命家？」
いきなりぶっ飛んだところだな。
「でも実は彼らは、色々な立場に居るんだよ。革命家だったり、犯罪者集団だったり、テロリストだったり」
「結局のところ、この国に何らかの影響を及ぼす物ってことか……。でもそんな連中を国がほっとかねーだろ？俺達が関わらなくったって――――」
「いや、彼らは行動を起こしたことはない」
「はぁ？」
「まだ都市伝説とか噂の部類だよ」
「……」
ちょっと待ってよ隼人君。まさか、俺達はあるかどうかも分からない話を探しに行くんですか？
「そうだよ。僕らは突き止めるのさ。あるかないかも分からない話を、だ。そう考えると、「架空の話を読んだ」ってのは言い得て妙だね」
「完全に矛盾してんじゃねーか。ないものをどうやって――」
「あぁ・・・。語弊があったね。ないというのは、革命軍として存在はしないということ。他のサイトでも紹介されていたから、レッドテイルは間違いなくある」
「どっちだよ・・・・・・」
「『革命』じゃないってこと。あと『集団』ではなく、『チーム』って感じらしい。友達で仲良くつるむような感じらしいよ」
「何でそんなことがわかるんだ？」
「それら・・・ってか、その人たちはこの小さな町に住んでるのさ」
・・・・・本格的に怪しいな。全く信用できない。

「それ・・・・・・俺も手伝わなきゃダメか？」
「あぁ。最後くらいは手伝ってくれたまえよ」
隼人のセリフにいらだちを覚えつつも、
「分かったよ」
と返事した。

俺は取り敢えず、「部屋から出ろ、このやろう」と隼人を追い出して（その際、「見られたら困る物でもあるのかな。主に本だね」という男友達が男友達の家に遊びに来た時のイベントをふざけてやったのは言わずもがな）、リビングで作戦会議を始めた。

「って・・・あれ？」
誰も居なかった。
「海馬たちは？」
「海馬君は電話に出て、ものすごい勢いで謝りながら、少し青ざめた表情で出て行ったよ」
「・・・例の彼女か・・・。虎郷は？」
「響花と一緒にショッピングだそうだ。何を買うか聞いたら、別に決まってないってさ」
「女子はあんまり、買うものを決めてから行かなかったり、買いたいものを買っても、店内をぶらついたりするらしいからな。まぁ、噂だから良くわかんないけど」

という会話の後、俺達は昼食を取る事になった。皆も昼には帰ってくるらしいので、５人分作らなければなるまい。そういえば、説明していなかったが、音河も当然この家で生活しているが、１階にしか部屋がないとは言え、まだ部屋数に余裕はある。
閑話休題。
昼食を取る・・・つまり、昼食を俺と隼人で作るということだ。

それはつまりジャンケン大会である。
ちなみに料理を作るのが上手いのは、虎郷、俺、音河、海馬、隼人の順だ。隼人の料理は1番まずい。隼人は不器用なのだ。

「どっちが作るかだな」
「負けたほうだね」
「能力の使用は有りだ」
「いいのか？君のジャンケンの勝率とその際の出した手を僕は全て記憶している。統計的に考えて、この緊張状態で君が何を出してくるかは、期待値を出す事で容易に分かる」
「ふん。そうやって、俺の心を揺れ動かそうというのは見え透いている。なら俺はそれを知った上でお前の心を見透かしてやるよ！」

「「ジャン！ケン」」
ポン！

その結果で俺が分かった事。

俺が緊張状態で出す手は、グーが多いようだ。

03 ―READ TALE―（前書き）

今回の題名に説明は要らないと思う。

今回の話は、一応言っておくと別に推理じゃないよ。

03－READ　TALE－

５人分作り終えた段階で、ちょうどいいタイミングで、３人が帰ってきた。ちなみに本日の料理は、即席ラーメンと電子レンジで調理できるチャーハンだ。総時間、３０分。ガスコンロも電子レンジも３個ずつついているので、早めに調理が終わった。

「ていうか・・・・・・・」

帰ってきたメンバーは、あまりに対照的だった。

虎郷と音河は、いい笑顔でそこに居る。親がいないとかそういう境遇から意気投合できるらしく、１番仲のいい友達だろう。今回のショッピングは彼女達の仲をさらに深めたのだろう。

対して、海馬。

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・うん。朝より顔色が悪いね」

彼は、どうやらまた何かがあったらしく、とても顔色が悪い。この間のデートに行ったときと帰ってきた時はいい感じの表情だったのに。

「・・・・・海馬。何かあったのか？」

「いいや。何もない。俺が悪かったんだ・・・・・・俺が悪かった・・・・・・俺が悪かった・・・・・・」

何か催眠術のように自分に言い聞かせている。精神的な重症患者のようになってしまっている。

「とりあえずお昼にしようか」

という隼人の発言で、皆は食事を始めた。

まぁ始めたとはいえ、何か生産的な会話があったわけではない。適当に会話していただけだ。

そして、食べ終わってからようやく話が始まった。
「さて、久しぶりの事件だ」
「事件？」
俺と隼人以外の行動が止まる。
「ヒスイ君は知ってると思うけど、僕らは探偵業もやっているんだ。というか、そもそもは探偵業から始めていたんだよ。7月にソウメイ君と会った所為で」
「奏明だ」
「と会った所為で、東先輩とか今日元さんと関わることになっちゃって、最近はおろそかになっていたからね」
俺の発言を気にせず、話を進める。
一応釈明しておくと、別に俺の所為で事件を解決できていないわけではない。元々、そんなに高い頻度で事件に関わっていなかっただけの話なのだ。
「ふーん。で、俺達もその事件を手伝えばいいのか？」
海馬はテンションを戻して言った。
「できれば、だね。君らの力を借りたいと思うんだけど、いいよね？」
何の問題もないように彼は訊いた。3人も暗黙の了解のように黙って隼人の話を聴くために身構えている。
少し間を空けてから隼人は少し微笑みを持ったままの口を開く。
「まず、今回僕が解決したい事件は、僕一個人の興味本位から来た物だ。だから、これを解決する事で何か利益が手に入るわけではな

いってことだけ言っておきたい」
そして、隼人はさっき俺に見せた紙を机の真ん中に置いた。
「今回の目標は「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」だ」
「レッドテイル・・・・・・」
３人の動きが止まる。あれ？もしかしてまた、俺だけ知らないタイプ？
「さっき行った店で、龍兵衛さんに会ってその話を聞いたわ」
虎郷が口を開いた。
「龍兵衛さんに？」
「うん。私は始めて会ったけど、あの人は年齢より見た目は若いね」
「・・・で、どんな話だった？」
音河の関係ない話を無視して、隼人が虎郷に訊いた。最近思うのだが、音河はもしかしたら天然なのかもしれない。そして、そんな音河を隼人は無視することが多い。その時の音河の切ない表情は萌える（もちろん嘘だ）。

「ネット上の噂だったのが、本格的に行動を始めたらしいわ。革命家として・・・ね」
「革命家・・・」
隼人が、思考をめぐらすために顎に手を添える。彼が考えるときの癖らしい。
「・・・海馬」
「・・・なんだ？」
「お前も何か知ってんだろ？」
俺の発言に海馬は眉を動かした。驚いているということだ。隼人たちも海馬に目を向ける。
「・・・・・お前にはどうせ隠せないな」
海馬は笑った。そして続けた。

「革命軍だかなんだかは知らねぇが、俺は、レッドテイルを知っている」

03 ―READ TALE―（後書き）

恋は惜しみなく奪う物・・・らしいよ。
でも出来ない人もいるよね。

04―The Blunder Of King―（前書き）

４話　王の失態

何も書いてなくても人が来るのに、投稿すると、してない時より人数が少ない。

04―The Blunder Of King―

次の日。つまり、12月10日土曜日に時間は飛ぶ。
海馬いわく、ある建物の中にいるダンスクラブのメンバーに「レッドテイル」がいるらしい。

「本当にここにいるのか？」
龍兵衛さんは東先輩のキャンピングカーの中で言う。今は、そのダンスクラブがある建物の駐車場内にいる。龍兵衛さんにも協力を頼んでいたのだ。

「間違いありません。僕らで裏づけもしましたから」
「僕ら・・・ねぇ・・・。ちょっと見ない間に増えやがって。しかも、失踪した王城の坊っちゃんと、この間のホール破壊事件以降、めっきり世間に登場しなくなった、昨日の音河のお嬢さんじゃねぇの」
「・・・・・・」
「まぁ、いいや。お前らの言ってることなら、多分本当なんだろうからな。信じてやるよ」
と、龍兵衛さんは車を出た。そして、パトカーで来ていた部下と合流して、建物に行った。

さて、今、俺達は東先輩を含めた6人で行動している。とは言っても東先輩は
「俺は今日は今日元のところに面会に行くんだよ」
といっているので、行動は結局5人ということになるのだろう。
この建物は、ビルディングというよりは、スポーツジムのような建物なのだが、印象としてはスタジアムの大きさ分の土地面積があるような気がする。

「気のせいじゃないよ。ここは昔コンサート会場だったんだよ。私も演奏した事があるよ」
音河が俺の発言にそう答えてから車を出た。俺達もそれに続いて車を降りた。

まずは、俺は隼人に確認する事にした。
「隼人。これから一体何をするんだ？」
「まずはメンバーの把握だね。誰が革命家の一員かを理解する必要がある」
と、隼人が答えると、海馬が
「でも、メンバーって言ってもかなりいたと思うぜ？そんないっぱいいる中から、数人捜すのかよ」
と反発してきた。確かにそうだ。隼人はどうするつもりなのだろう。

「・・・・・考えてなかったね。てっきりタダシ君がメンバーも知ってると思ってたよ」
・・・・・ヤバイな。コイツの性格は、後悔先に立たず且つ猪突猛進なのだった。
「心配しなくても、きっと私たちの能力で回避できるよ。それに龍兵衛さんがいるだろ？」
音河が元気な声で言った。
「・・・・・そうね」
「そうだな」
「しくったー。タダシ君知らなかったかあ・・・。どうしようかな・・・」
1人、バグってる奴が要るけど、取り敢えず放っておこうか。
「それにしても、王城君の考えの無さにはたまに舌を巻くわね」

「当の本人はショックで何か病的になってるけどな」
「昔から隼人は思い込みが激しかったからね」
「俺の意見に頼ってんじゃー王城もまだまだってこった」
恐らく、口調と隼人に対する呼称で違いが分かると思うけど、上から虎郷、俺、音河、海馬だ。

今は、とりあえずはスタジアムの周辺をくるくると回って時間を潰している。
「メンバーってそう人数何人くらいなんだろうな」
「１００人は軽く越えているだろうな。ダンスレッスンとは言っても、クラシックやバレエのような種類の人も居る訳だから、まぁ、おばさんやおじさんもいるわけだから・・・」
「なるほどな。てことはしらみつぶし作戦は決行できないわけだ」
「そもそもする気も無いわよ。私、細かい作業は嫌いなの」
「料理が得意な奴が言うセリフではないよな」
「嘘ですわ、と付け加えておきましょうか」

と、そこでようやく
「あ。そうか」
と、隼人が口を開いた。

「龍兵衛さんに訊けばいいんだよ。怪しい人をさ！」
自らの考えのように堂々と言ったので、俺達は言った。

「「「「「遅いわ！！！！」」」」」

０４―Ｔｈｅ　Ｂｌｕｎｄｅｒ　Ｏｆ　Ｋｉｎｇ―（後書き）

あと、書いてる量が極端に少ない気がしなくも無い。

何もしなくても５０とか来る奴・・・あこがれるよな！

05 ―Suspects―（前書き）

今の僕の目標。生きてきた分の金を稼いで死ぬ事。

05－Suspects－

革命軍（いわずもがなと思うけども、それはもちろん「ＲＥＡＤＴＡＬＥ」のことである）のメンバーの容疑を固めるのにはそこまで時間がかかることは無かった。
「これが、容疑者だ」
玄関ホールで出会った俺達に、龍兵衛さんは数枚の紙を渡した。
「これは・・・」
時間がかからなかった理由は、そこまでメンバーが絞れなかったからだそうだ。
「合計、４０人だ。しかも、子どもから高齢者までだ。これは骨が折れそうだな」
「こんなに・・・」
隼人が頭を抑えた。またも予想外だったのかもしれない。
「ところで、１つ疑問があったんだよ」
俺がそういうと、龍兵衛さんが
「一体、アイツらが何をしたのかってことだな？まぁ機密事項だから知らないのも無理ない」
と先に答えてくれた。どうやら、他の４人も同じ意見だったようだ。
「３か月前の電車爆破事件・・・覚えているだろう？」
「！」
顔立ちのいい虎郷の目が丸く開かれる。電車爆破事件・・・・・・確かあの犯人は・・・。
「あの爆破事件の犯人は木好一也だっただろう。しかし、あれに使われた爆弾の作成者はレッドテイルだ」
「爆弾の作成者・・・・・・」
「また、この間のホール破壊事件での西条の爆弾もレッドテイルだ

った。そして、今回はこれだ」
そう言って、ポケットから紙を取り出した。そこにはこう書かれていた。
『今度は我々が実行する。覚悟しておけ』
これはつまり・・・。
「犯行声明文か・・・」
海馬が言った。
「俺達はさっさと先手を打ちたいんだよ。だから犯人を捜す。悪いが今回はお前らにそこまでかまってやれないから、警察として協力は出来ないから学校のミステリー研究会ぐらいにでもしておいてくれ」
それだけ言うと、他の警察官と一緒に建物の奥へと入っていた。
「・・・・・隼人。どうする？」
「まずはこの容疑者の特定だね。男子と女子で別れて行こう」
「そうね。じゃあ2時間後、どこかに集合すると言う方針で」
「じゃ、そういうことで」
こうして、二手に分かれて捜査をすることになった。

05－Suspects－（後書き）

明日への希望＋昨日の後悔＋未来の光＋過去の苦痛＝自らの世界

（怒り＋無価値）×　x＝他人の世界（但し、x＝その人の知らない部分とする）

理不尽＋無関心＋不の感情＝この世界

それでも生きる物＝僕ら

06－Team：Boys－

「というわけで男子チームで行動する事になった俺達であった」
「・・・・・・嘉島？誰に話しかけてんだよ」
軽くふざけてみました。
さて、女子チームを社交ダンスやジャズ系統の方の調査に向かわせ、俺達はヒップホップ系統の方の調査に向かった。
「隼人。どうやって調査するんだ？人数を絞れそうか？」
「全く。何の方法も浮かんでないよ」
「堂々と言うな」
コイツは何でも自信たっぷりに言いやがるからムカつくんだよ。
結局
「ま、一人一人調べていったらいいんじゃね？どうせ２０人くらいだろう？」
という海馬の意見を参考にして、一人一人逐一調査する事にした。

１０人目まで調べた（俺の右手と隼人の脳。心なしか海馬は後ろのほうに下がっていた）ところで、１度休憩を取った。建物内にあった休憩所でジュースを飲みながら
「まぁ、感じたところでは今のところは居ないな」
「まぁ、考えたところでは今のところは居ないな」
「まぁ、何もしていないが今のところは居ないな」
という何の意味も無い会話をしていた。
「そういえば、何で海馬はＲＥＡＤ　ＴＡＬＥの存在を知っていたんだ？」
「ん・・・・・・。いや、俺はＲＥＡＤ　ＴＡＬＥを知っていたわけじゃないんだよ」
「は？でもお前知ってただろう？」

「ああ。だから俺は―」
海馬の動きが止まった。それは、
「あら」
と、女性の声が聞こえたのとほぼ同時だった。
入り口の方向を向くと、大人びた顔の少女と少し幼い顔の少女が居た。
大人びた顔の少女は、特徴はほとんどないのだが、目の色が青い。だが、あれはどう見てもカラーコンタクトだろう。あ、ズボンのベルトを通す穴に、黒いアクセサリーがついている。
幼い顔の少女は、ヘッドホンを首に引っさげている。髪の毛が赤色でポニーテールで髪を結わえている。大人びた顔の少女に対して、こちらは割りと目立っている。

「海馬君じゃない。どうしてここにいるの？」
「・・・・・・長柄川（ながらかわ）・・・・・・」
なにより不思議なのは、異常なまでに海馬が動揺していることだった。

07―The Ringleader―（前書き）

7話　首謀者

生きたいという気持ちも死にたいという気持ちもどちらも欲望なのに、どうして皆、死にたい気持ちはダメだって言うのかな。

07―The Ringleader―

「海馬君・・・なんでココに居るの？」
「あ・・・いや・・・ちょっとな・・・」
海馬は狼狽えながら1歩、2歩と下がっている。
「・・・・・・おい、海――」
「俺、トイレ行ってくる！」
俺が海馬の名前を呼ぼうとしたが、焦るように休憩所を飛び出していった。
「・・・・・・何なんだ？アイツ」
「あんなに恥ずかしがらなくてもいいのに・・・」
長柄川さんは呟いた。どういう意味だろう・・・？
「どういう意味ですか？」
俺が疑問に思ったと同時に隼人が質問した。
「彼、付き合ってる人がいるでしょう？これでお分かりでしょうね」
「・・・なるほど」
長柄川さん・・・このメンバー表にいる、長柄川　里子だろう。
彼女はつまり、海馬の彼女ということか・・・。アイツはいつも彼女を怖がっていたからそれも裏づけになるだろう。

「あの、貴方達は何なんですか」
機嫌悪そうに、幼い顔の少女が言った。
「あ、俺達は・・・」
何て説明すればいいんだろう・・・。よく考えると、疑ってかかってると思われちゃ困るから、探偵クラブという言い訳もするわけにはいかないだろう。
「見学だよ。僕らもこのダンスクラブに入ってみようかなと思ってさ」
隼人が声に何の違和感も残さず嘘をつく。

「本当ですか？そんな事に正先輩が来るとは思いませんけど」
と、幼い少女（本当は幼女と略したいが、これは別の意味を含むので却下）が、相変わらずの訝しんだ顔で見ている。先輩ということは年下なのか。
「彼にはここを案内してもらってるんだ。ところで君達の名前を教えてもらえるかな？」
口からでまかせ、でっちあげの隼人君が彼女達に質問した。
「私は長柄川　里子」
「私は常盤　雅（みやび）です」
と答えてくれた。とりあえず俺は
「何で海馬はどうして彼女である長柄川を避けるんだ？」
と、何とも無い質問をした。単純に距離を縮めて、疑いの目を避けるためだ。が、そのなんでもない会話に
「・・・」
と長柄川さんの動きが一瞬止まった。が本当に一瞬で
「彼は恥ずかしがりやなのよ。知らなかった？」
と元の通りに戻った。何だったんだろう。

「長柄川先輩。時間です。行きましょう」
「あ、そうね。じゃ、もしかしたらこれからよろしくね」
と、長柄川さんが手を出してきた。あ、握手か。都合がいい。
「宜しくお願いします」
手を握った。
［ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ：ボマー］
来た・・・！レッドテイルのメンバー・・・！

「じゃあね～」
「はい。また」
俺も隼人のように言葉に違和感のないようにしゃべる。

「隼人。あの長柄川・・・READ　TALEだ。しかも能力者だろう。ボマーだから、爆弾の能力だと思う。首謀者だろうな」
「・・・そうか。残念だね」
「残念・・・？何で？」
「海馬君がREAD　TALEの存在を知っていたからだよ」
隼人は暗い顔で言った。

「彼は彼女と交際していた。つまり、彼は彼女・・・・・・READ　TALEを知っていた可能性が高い」

それはつまり、海馬が今回は敵である可能性があるということ・・・・・。

07―The Ringleader―（後書き）

だって、誰かが死なないといけない時に、生きたいなんてわがままいえないじゃん。

結局、自分がしたくないことは誰かがしようとしていることをさせたくないんだろうね。

だから自殺志願者は誰かに迷惑をかけたり、一緒に死のうとするんだね。

０８ーＳｅａ　Ｈｏｒｓｅー（前書き）

８話　直訳してください。

何ほとも平和で、事件なんて物はひとつも無い。異常は何一つ見つからない。
退屈であり何事も無い。異常が存在する隙間が無い世界。それを求める者がいる。

08－Sea Horse－

「・・・終わったか？」
「・・・・・・あぁ」
海馬がタイミングを見計らったように帰ってきた。その、本当に少し前。
「絶対に海馬君に悟られちゃダメだよ。僕らが考えている事をばれる事は、今や死に等しい。いつも通りの対応を心がけたまえ」
と、隼人に命令された。

「アイツらはどうだった」
「あ・・・・・・あぁ。まぁ大丈夫だったよ」
隼人の命令は残念ながら遂行できそうに無いな。
「どうかしたのか？」
「いいやなんでもないよ。さっさと続きのメンバー捜そうか」
「続きのメンバー？もう1人目が見つかったのか？」

「「しまったーーーー！」」
思わず隼人とハモってしまった。

休憩所の椅子に座りなおして、俺達は話を始めた。
長柄川にと海馬の関係だけふせた状態で―つまり、海馬を疑っているという情報だけを伝えると、
「そんなわけないだろ」
と俺達の発言を一蹴した。
「そんなことだったら、俺はお前らとは組まない。そんな事のために俺はお前とつるんでるんじゃないんだよ。運試しっつったろ？お

前らといれば不思議な体験が出来ると思ったんだよ。ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ　に異端なら、そのままでもいいんだよ」
あぁ・・・なるほどね。一理あるな。
「だいたい隼人は思い込みで話を作りがちなんだよ。全く・・・きちんとしてくれないと困るぜ？リーダー」
と海馬は椅子に深く座りなおした。そして思考を始めるように、顎に手を添えてから
「にしても長柄川か・・・・・・」
と話を始めた。
「だとすれば・・・・・・そうだな。そろそろ１度集合しよう。犯人の目星はついた」
「ホントかよ・・・・・・」
「男子チーム女子チーム集合だ」
と、海馬はニヤリと笑った。

０８－Ｓｅａ　Ｈｏｒｓｅ－（後書き）

それって間違いなく異常な世界だよね。

求める人間が居るこの世界。異常でよかった。

０９－Ｍｅｅｔｉｎｇ　Ｏｆ　Ｂｏｙｓ＆ａｍｐ；Ｇｉｒｌｓ－（前書き）

問：神様と悪魔が目の前に居ます。どちらかが願いを叶えてくれます。

どちらを選びますか？但し、条件は同じとします。

09－Meeting Of Boys&Girls－

とりあえず俺達はダンス教室の建物の近くにあった、ハンバーガーショップで会議をすることになり、そこを集合場所にして、先に男子チームが到着したため、とりあえずは昼食タイムということにした。

「・・・・・・おかしい」

「ああ、俺も思っているところだ」

俺と隼人は静かに会話を始めた。

「海馬、お前もおかしいと思わないか？」

「は？何が？」

「これだ」

俺は海馬と話しつつ、俺は、俺の買ったレモンティーと隼人の買ったミルクティーを指差した。

「俺のは１２０円なのに隼人のは１１０円なんだよ。一体何が違うっていうんだ」

「そんなことしるかよ！」

「待ちたまえ。タダシ君。これは死活問題ともいえることだよ」

「言えねぇよ！」

というまぁ、そこそこにどうでもいい話をしながら過ごしていると、

「待たせたわね」

と、女子連合軍もやってきた。

「単刀直入に言う。ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥのメンバーは、長柄川　里子、花咲　満（みちる）、丹波　龍馬（りゅうま）、長堂寺（ちょうどうじ）　志楽（しらく）・・・あとイレギュラー

が数人だ」
海馬はチーズバーガを食べながら言い切った。
「あら、奇遇ね。私達も全員調査したけど、誰一人として当てはまる人間は居なかったわ」
と、虎郷は続ける。
「どうしてわかるんだ？」
「私や響花は他人の目を気にして生きてきたから、人間の目を見れば、どういう人間かは大体分かるわ。その結果、あそこにはそんな事出来ないほどの臆病な人間か、優しい人間かだと思うわよ」
「そうか・・・。」
俺は取り敢えず納得して、
「じゃあ海馬・・・。そいつらに関して聞かせてくれないか？」
「オーケーだ、ブラザー」
「誰がブラザーだ」

「まずは、長柄川　里子・・・。アイツはまず第一に誰よりも器用だ。それは運動でも勉強でも同じくらいだろうな。アイツは、1度やったことや覚えた事を自分の体に染み込ませたかのように、何でも一発で出来てしまう」
「超人みたいな女だな・・・」
そしてそんな奴が海馬の彼女なのか・・・。だがますます分からん・・・。どうして海馬はそんな奴を避けるんだろうな・・・。
「花咲　満は、どんな奴でもない。あるいは、誰でもある」
「は？」
「外連味（けれんみ）や言葉遊びじゃないぜ？アイツは声色と仕草を誰にでも出来る。ものまねの超人だなと思っていたが、変装の達人でもある」
「・・・・・・なんか、気のせいかもしれないけど、そいつらってもしかして超人？」
「ああ、あいつらはそういう集団だ、話を続けるぜ？

丹波　龍馬は、目がいい。どんな距離のものでも見渡せる。また、耳もいい。アイツには、１０メートルまでは視野の範囲だ」
・・・・・・これは・・・手ごわそうだ・・・。俺が１番相手に出来ないタイプだな・・・。
「長堂寺　志楽は、速い。これも、何においてもだ。頭の回転、行動、記憶・・・ソレに伴い、忘却、失敗までの経過時間もな・・・。欠点であり、美点でもある」

そこまで話しを聞いて、隼人は口を開いた。
「全員アクター・・・・・・か」
「だろうね。ここまでくれば私たちと同じような人間だと思わざるを得ないよ」
「・・・・・・だけど、ソレはそうだとしても、まだ問題が残っている」
隼人は指を海馬に指して睨む。

「君は彼らとどういう関係なんだ？」
・・・海馬の動きが止まる。
確かにそうだ。ここまで詳しく知っていたのにも拘らず、今更「単なる知識だ」ということもできないだろう。

「俺は守らなきゃならないんだよ。俺の原点であり、生きる希望があそこにはある・・・・・・。これ以上話すつもりは無い」
言って、海馬は立ち上がり、ハンバーガーを口に入れてから退席した。

「・・・・・・やっぱ・・・・・・、まだ海馬は何か隠してる・・・」
「・・・・・・調査を再開しよう。僕は別行動を取るよ」

「私もついてく」
隼人は響花と一緒に席を立った。
「俺達は海馬についていこう。行こうぜ、虎郷」
俺は虎郷に右手を伸ばした。
「・・・・・・あまり、女の子に簡単に手を出さないほうがいいんじゃない？」
「・・・・・・ああ。それもそうか」
俺は手を引っ込め―
「じゃあ行きましょうか」
虎郷に取られた。で、立ち上がってから虎郷は俺の手を離した。
「・・・・・・女は分からん」
言いながら、海馬の背中を追いかけることにした。

09－Meeting Of Boys&Girls－（後書き）

解答とソレに見合うあなた

神様：正さを求めているか、欲を求めている。

悪魔：悪を求めているか、ひねくれている。

自分で頑張る：正さも悪も両方をひっくるめた、正攻法です。

それ以外：僕と友達になろう。ちなみに僕の解答は「両方殺す」です（できるもんならやってみろ！）。

１０―Ｄｏｕｂｔ―（前書き）

１０話　疑う

10－Doubt－

「海馬君、どこに行こうとしているの？」
「メンバーに会いに行く」
「そんなことして大丈夫なの？」
「大丈夫だ。問題ない」
「ふざけてないで真面目に答えて」
「・・・・・・大丈夫だ。お前らをアイツらに会わせることが目的だからな」
海馬は言いながら、話しかけてほしくなさそうに歩くペースを上げた。
すると虎郷は俺の横に来て、
「・・・海馬君は何を怒っているのかしら・・・？」
「・・・・・・どうやら長柄川って人は、海馬の彼女らしいんだ。だから・・・・・・」
「なるほど・・・内心穏やかではないということ」
「まぁ・・・そういうことだろうな」
「それもそうね。私でもそんな状況なら・・・・・・」
そこで虎郷は口を閉ざした。

俺は思い出す。木好一也・・・・・・彼女の元彼で、彼の生きがいの根源だった存在にして、彼女をこんな風に作り上げてしまった青年・・・。虎郷との出会いにもなった事件。それの犯人が木好一也・・・・・・。
あの時、彼女も犯人であった木好さんに対して、怒りの気持ちと悲しみ・・・・・・そして紛れも無く、愛があったはずだ。
それがしっかりした物であったかは分からないけれど。
どちらかと言えば、歪んでいた。
と俺は思うけれど。

そんなことは俺はが言えることじゃないと、同時に思うのだった。

しばらくして、建物内の1つのホールに到着した。そこには今のところ1人の女性が居る。
「・・・・・・あ、確か、嘉島さん・・・・・・・と・・・・・・・そちらは？」
「虎郷です。こんにちは」
「長柄川です。どうも」
とそこまで当然の流れのように済ませた後、長柄川は海馬の方を見た。

「どうしたの？またココに来て。もしかして、もう1回ここで踊ってみようとか――」
「思わないよ。俺はサッカーをやめるときにここもやめたんだ。俺は元の俺に戻るつもりはない。あの時の俺は今の俺とは違う」
「・・・・・・そう」
若干暗い感じの空気を悟ったのか
「のどが乾いたわ。嘉島君。ジュース買ってきて」
と虎郷が言った。
「って、パシリかよ！」
「いいわよ。じゃあ一緒に行きましょうか」
と、それだけ言って、俺の腕を引いてそのばから消えていった。

休憩所の自動販売機の前に立って、動きを止めた虎郷。
「どうしたんだ？急に・・・・・・買わないのか？」
「・・・・・・ねぇ、嘉島君」
「・・・・・・？」

「海馬君・・・本当に長柄川さんと付き合ってるの？」
「え？」
「・・・・・・・・・・いえ、私の勘違いね。きっと」
と、納得しない顔でお金を入れて、缶コーヒーを買って、元の道へと歩いていった。

いや、それより・・・・・・長柄川さんと海馬が付き合っていない・・・・・・？例えそうだったとしても何の問題も無いんだろうけど・・・・・・。
この疑問・・・は何だろう・・・・・・。何か引っかかる。

「虎郷、どういう意味だ？」
「私はアレがカレカノ関係には見えないのよ」
「・・・・・・でもだからなんだってんだ？」
「・・・・・・いえ、いいのよ、だから。私の興味本位だから」
と、相変わらず納得していない顔で、俺の発言を受け流した。

「・・・・・・でももし」
虎郷は呟くように言った。
「そういう関係じゃなかったら・・・・・・海馬君はどうして怒ってるのかしらね」

今思うとこの時から俺は「レッドテイル」を疑うべきだったのかもしれない。

１１―Ｔｈｅ　Ｉｎｖｅｓｔｉｇａｔｉｏｎ―（前書き）

１１話　取調べ

大嫌いなものを好きになる方法。自分で考えてみてください。

11－The Investigation－

休憩所から先ほどのホールに戻ると、海馬を含めた5人が居た。
「・・・・・・ん？」
その内の気の強そうな男がこちらに気付いた。
「・・・・・・何だ？」
静かにこちらを睨んだ。それに気付いた海馬が
「あぁ・・・・・・。落ち着け満。俺の友達だ」
と、警戒を解かせるように話しかけて、こっちに来た。

「コイツは嘉島奏明、んで、こっちが虎郷火水だ」
まずは俺達の紹介をしてから、向こう側の紹介に入った。
「私はさっきも挨拶したよね？長柄川里子だよ」
と、長柄川が自ら挨拶すると続けるようにさっきの気の強そうな男が、
「花咲満だ。宜しく頼む。お前らの話は長柄川から聞いてるよ。見学しに来たらしいな」
と自己紹介した。
あぁ・・・・・・そういう話だったな。
さらに
「・・・・・・長堂寺　志楽。よろしく」
と、少し暗そうな少女が言った。てか女だったのか。
「俺っちが丹波龍馬だ。よろしくさん」
さらには明るい少年が続ける。

そして俺は。
1人ずつ握手する事にした。

［花咲満：ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ：諜報］
［丹波龍馬：ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ：防衛］
［長堂寺志楽：ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ：キラー］

間違いなかったな。俺の取調べ（手を取って調べる・・・・・・・我ながら上手いな）の結果、間違いなくコイツらは「レッドテイル」のメンバー・・・・・・ということか。

「じゃ、俺は取り敢えず別のところ行くわ。ココに居たら危険そうだし」
と言いながら、そこから消えていった。
「おい、海馬」
俺は呼び止めてみたが、何の返事も無く何処かへ行ってしまった。
「全く・・・・・・相変わらずだな、海馬は」
丹波が言う。
「昔からそうだ。自分が危ない時は基本的には介入してこない。仲間の危機にのみ介入して来るんだ・・・・・・。まぁ、それがアイツのいいところでもあるんだろうけど」
「あ」
ちょうどいいので訊いてみることにした。
「あのさ。海馬ってここでダンスのレッスンでも受けてたのか？」
「ん？まぁな。俺達とアイツらでよくつるんでいたよ。でも――」
丹波が口ごもった。それを見かねたのか、
「海馬君の過去は知ってるよね？」
と長柄川が言った。
「まぁ・・・・・・ある程度なら聞いているわ」
「ならわかるでしょ？彼の家庭が崩壊して、サッカーをやめてから、彼はココを去った。もちろん、ココに来なくなっただけだけどね」

なるほど・・・・・・。
「今は・・・・・・君達が彼の仲間なんだろう・・・・・・」
長堂寺がボソリと言う。
「彼は・・・・・・優しいから・・・・・・仲良くしてやってくれよ・・・・・・」
そうつなげてから、口を噤(つぐ)んだ。
「彼も居なくなったからそろそろ雅も来るでしょうし、このホールは使用するから、お引取り頂ける？」
「あ・・・・・・うん。分かった。じゃあ、また今度」
俺達はそこで、ココから退室した。
そして、事件は発生する事になった。

11―The Investigation―（後書き）

僕は、受け入れるのが精一杯です。どうすれば嫌いなものを好きで居られるのでしょうね？

12―The Explosion―（前書き）

まぁいわずもがな。

僕ぅーが僕ぅーであるためにー♪

・・・・・あと知らない。

12―The Explosion―

「隼人・・・・・・すぐに来い」
俺は炎を真っ直ぐに見つめながら、隼人へと現状報告を始めた。
『・・・・・・どうしたんだい？』
「大変な事になった」

事件の発端は海馬だった。
というか。
「海馬が居ねぇ」
だった。
「一体どこに行ったんだ？」
「目を離すべきではなかったわ。彼が何かに怒っているのは間違いなかったのだから」
「じゃあアイツの失踪は、アイツの怒りと何らかの関係があるってことなのか？」
「或いは、それ以上かも」
「それ以上？」
探索を開始しつつ、俺は虎郷の言葉に疑問を投げかける。
「彼の怒りは失踪以上の何かを引き起こすかもしれない、ということ」
「・・・・・・」
つまり、虎郷はこう考えているのだろう。
海馬は怒りの矛先である人（或いは物）に対して、何らかの行動

を起こす可能性がある・・・・・・・と。
しかし。
「本当に海馬は怒ってんのかな」
「・・・・・・どういう意味？」
動きを止めて、虎郷はこちらを見る。俺も動きを止める。
「いや、虎郷の言っていることは、多分そうなんだと思う。けど俺にはそうは見えない・・・・・・・いや、それだけには見えないんだよ。何というか・・・・・・悔しさとか寂しさとか・・・・・・そういう、他人への強い感情と言うよりは、自分への負の感情というか・・・・・・」
そんな俺の曖昧模糊（あいまいもこ）な発言を虎郷は咀嚼するように考えた後、
「そう」
と言って、探索活動に戻った。
が、もう一度だけこちらを見て、
「私のは一種の勘。あなたのは能力に基づく確かな感情。どちらが正しいのかは一目瞭然でしょう？」
それだけ言うと、また探索活動を再開した。

「・・・・・・居ないわね。本格的に大変な事態かもしれないわ」
「確かに、虎郷の言うような心情――推測だったとしたら、アイツが何か行動を起こす危険性があるってことだからな・・・」
「私の戯言（たわごと）は聞き流してくれていいのよ」
「・・・・・・なんか怒ってる？」
気のせいだといいんだが・・・・・・・。
・・・・・・・。
「否定しない！？」
「・・・・・・」
「まさかの無視！」
どうやら怒っているようだ。そんなに自分の意見を否定された事

がムカついたのだろうか？仕方が無い。ご機嫌を取るためには一体どうすればいいのだろう。こういうのは女子の扱いに慣れている海馬少年を・・・・・・捜さなきゃ！
いつの間にかループにはまっていたようだ。うーむ。事を丸く収めるには、やはり海馬の存在が不可欠だな。
そう思いながら、１階のロビーに到着した。

「あ」
さて、原因且つ、俺の救いの手がそこにはあった。てか居た。

「海馬」
「よう」
気楽にいつも通りの挨拶をした。

「急に居なくなってどうしたん――――」
「近づかないほうがいいぞ」
俺の会話を遮るように海馬が言った。

「どうしたの？海馬君」
「これだよ」
と、片手で１つのプレゼント仕様の箱を持ち上げた。
「これ、時限爆弾なんだ」
「なッ・・・・・・」
「あと５秒で爆発する上に、水銀レバーがかかってる」
「！」
俺と虎郷は同時に動いた。
俺は床を破壊して、虎郷は家具を念力で持ち上げる（？と思った方は、第１章を）。電車以来の、バリケードコンボだ。とか言ってる場合じゃなかった。
コミカルに言うと。

ぼかーーーん。
という音を立てながら、そのプレゼントが爆発した。ギリギリバリケードが間に合ったという感じで、周囲の人々は助かった。が、その人たちの野次馬根性と叫び声の所為で、現状理解という場合ではなくなった。だから取り合えず、俺は携帯電話を取った。

「隼人・・・・・・すぐに来い」

12―The Explosion―（後書き）

でも僕が僕であるために必要なのは、

間違いなく、希望だと思う。

１３ －Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ－（前書き）

題名は、後々分かります。

悩んでる皆さんに、この言葉を送ります。

「Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！」

13 ―Good Luck―

「ヤバいだろう・・・・・・」
「大変よ！」
「救急車・・・・・・救急車呼べ！」
周りの人々が騒ぎ出す。誰かが爆弾を持っていたことぐらいは分かっているらしい。

「おい！そこのガキども！」
そこに居た大人が俺達を呼ぶ。
「お前らの友達なんだろ！救急車くらいは呼べよ！」
「・・・・・・」
「あんなの食らったら、ひとたまりも無いだろうがよ！」
「・・・・・・そうね」
虎郷は冷静に答える。

「だから、救急車――」
「普通なら、死んでしまうかもしれないわね」
言いながら、虎郷は後ろを指差す。
「普通なら」
「残念そうに言ってんじゃねぇよ」
海馬の姿があった。
その大人は唖然としている。まぁ当然だろうな。だが、他の人々が気付いていない間にここから立ち退いて置く事が先決かもしれない。ということで。

「・・・・・・外に急ぐぞ。隼人を待たせてある」
「おう」

「爆発か・・・・・・」
出会ってすぐに隼人は呟いた。
「俺はあの空間から逃げたかったんでな。さっさと1階に降りたんだ。で、そこで椅子に座っていたら、誰かがその机の上にプレゼント仕様の箱を置いていったんだ。最初は開けるつもりは無かったんだが、『海馬　正へ』というカードが掛かっていたから、迷いながらも開けたんだ。そしたら爆弾だったから、驚きの余り、動揺してしまって箱を動かしてしまった・・・・・・」
「で、水銀レバーが作動しちゃったんだね・・・・・・」
音河が海馬の続きを言った。海馬はそれに頷く。

「そしてすぐに俺達が来たって訳だ」
「そういうことだ」
「・・・・・・」
隼人は黙って考え込んでいる。
何か今の会話に思うところでもあったのだろうか。

「それにしても、海馬の運は絶大だね。私としては羨ましいかぎりだよ」
「俺は最強の運の持ち主だからな。超高校級の幸運を目指して奮闘中だぜ」
「そういうネタを使うと、後々困った事態になるからやめろ」
「それはそうと」
海馬はポケットから1枚の紙を取り出した。
上の部分が破れたようになくなっている。爆風で破れたのだろうか。ただ、焼け焦げた後がある。
「これ。プレゼントの中に入ってたんだ」

その紙にはこう書かれていた。

海馬。
君の仲間も我々のことを嗅ぎ回っているね。
君らの頑張りを否定するつもりはない。でも、我々を追いかけることは不可能だよ。
我々は最強のチームだ。絶対に勝てないよ。これ以上の行動は、我々もそれ相応の手に打って出るよ。
さぁ、我々を止められるのだろうか？　Ｇｏｏｄ　Ｌｕｃｋ！
Ｔｏ　ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ

・・・・・・。
「おい、グッドラックだってさ」
「そうね。応援されているということでいいのかしら？」
「いや、これはそういう意味ではないさ」
隼人は、目に怒りの気持ちを表してから言った。

「これは皮肉表現。グッドラックは幸運を祈るだけど、皮肉な言い方で」
１度溜めて、背を向けてから言った。
「せいぜい頑張れ・・・・・・だとさ」
その背中からは憤怒の念を感じざるを得なかった。

13 ―Good Luck―（後書き）

いやはや・・・・・。

せいぜい頑張れって・・・・・・。

悩んでる皆さんに送る言葉ではないよね。

１４－Ｌｉｅｓ－（前書き）

１４話「嘘」

まぁ複数形ですが。

僕の苦手な事：絵、物作り、歌、正直に生きる事、

技術、美術、音楽の３教科が最悪だよ。

14－Lies－

「・・・・・・隼人は俺が追う。お前らはこの辺りで待機していてくれ」
俺は、3人にそれだけ告げてから、隼人の背中を追った。

俺はその隼人に後ろから言った。
「・・・・・・釈然としねぇな」
「何が・・・・・・？」
「お前がそういう顔してるんだよ」
「釈然としないな」
「やっぱりか」
「君も僕が分かってきたようだね」
隼人はそのまま、1階のロビーに向かった。

「で、何が釈然としないんだ？」
「海馬君が何か隠している可能性がある」
「・・・・・・はぁ？」
「彼ともあろう男が、爆弾程度にビックリするはず無いだろう」
「まさかそれが根拠だと？」
「彼が僕らに提示してきたあの紙・・・・・・君も見ただろう？」
「・・・・・・もしかして破けていた事についてか？」
あの紙・・・・・・破れていた。しかし、その破れ方には明らかな特徴があった。

「アレは爆風や自然現象、ミスとかの破れ方じゃない。人為的だ」
そして海馬の言っていた通り、アレがプレゼントの中に入っていたのだとすれば。

破る事が出来たのは・・・・・・・
「海馬正だけってことか」
「その通りだ」

だがしかし・・・・・・
「それをする意味は一体何なんだ・・・・・・。やっぱり、アイツは「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」のメンバーなのか？」
「・・・・・・それを確かめなければならないから、向かうんだ」
そこまでの会話を終えて、ロビーに到着した。
捜査を始める前に、隼人に
「でももし、海馬が敵だったら・・・・・・あの２人は危ないんじゃないか？」
と純粋な疑問をぶつけてみた。
すると、隼人は
「僕は彼を仲間だと信じている。敵じゃないことを判断するために僕は捜査をするつもりだよ」
それだけ言うと、捜査を始めた。

「龍兵衛さん」
「・・・お。探偵じゃねぇの」
龍兵衛さんはそう言って、こちらを見て笑った。
「お前らんとこの海馬の坊っちゃんがやられたらしいな。事情聴取はしたことにしておいたよ」
「では、僕から説明しますよ」
隼人はそう言ってから説明を開始した。俺はその間手持ち無沙汰なので、別の何かを捜す事にした。
１階のフロアは、２階まで吹き抜けになっている。最近この手の建物が増えているように感じる。ちなみに俺の学校も同じような感じだと考えてくれてよい。
まずは事件を整理する（のは隼人だけど念の）ために、深呼吸・・

・・・・・。
「・・・・・・・？」
空気が・・・・・・微量ながらにごっている。つまりこれは、この現状にそぐわない感情が、少しだけ入っているということ。俺の能力だからこそ分かる。発生源は・・・・・・。
「階段？」
俺は階段の方を見る。ちなみにこの1階に来るための道は、窓が開かないためあの階段を通る一本道しかない。
で、その階段。
「・・・・・・消えた・・・・・・」
そこに何かがあった空気は感じるが、空気の濁りは消えた。つまり、さっきまでそこに居た人物が、この事件に関して、野次馬と事件解決以外の何らかの感情を持っているということか。

俺は階段に向かった。
指紋検証に使われたと思われる、白や黒の粉末が産卵している・・・・・と同時に、普通の物でありながら、普通でない物がそこにあった。
「髪の毛・・・・・・？赤いな・・・・・・」
触れた。別に能力を使おうと思ったわけではない。だがそれを触って、俺の考えが一気に変化した。
あの4人以外にも・・・・・・レッドテイルが居る。それを知った。

［常盤　雅］

「！！」
常盤雅・・・・・・あの女の子・・・・・・。それが俺達を見て

いた・・・・・・。

もしかして、あの子まで・・・・・・。

そして彼女を含めるあのダンスグループの全員が「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」なのだとしたら。

海馬・・・・・・もしかして、お前も・・・・・・。

１４ ― Ｌｉｅｓ ―（後書き）

得意なこと：嘘、毒舌、理屈こね、揚げ足取り

何に使うんだよ。

15―He understands the truth―（前書き）

15話「彼は真相が分かる」

実は英語は不得意です。「understands」と「founds」をどちらを使うべきか迷うところです。

15―He understands the truth―

「どうしたんだい？ソウメイ君」
俺の思考は隼人の声で１度止まった。
「・・・・・・あ、話は終わったのか？」
「え、あ・・・・・・うん。どうやら、爆発はそんな強い衝撃ではなかったらしい。人を殺すような力はなかったようだよ」
「そうか・・・・・・」
「でも」
隼人はそこで、１度区切った。
「やっぱり、タダシ君の話は嘘だったみたいだよ」
「どういうことだ？」
椅子に座って、隼人は会話の準備をする。俺も隼人の対角に位置する椅子に座った。

「爆弾の威力が威力だったから、壁は破損されていない。彼は、水銀レバーが作動してから、周りに危害が及ばないように、窓ガラスが無い場所を選んだんだ。よって、外に爆弾の破片が飛んでいる事も無かった」
「なるほど」
「さらに火力も自然弱かったため、紙が落ちていたら、燃えカスが残ったらしい」
「で、海馬正へ　っていうプレカードは見つかったのか？」
「いいや。焼け焦げになっていて、文字のところは焦げ跡になって潰れていたけれど、屑にはなっていなかったから、鑑識が調べたよ」
「文字が潰れてても読めるのか！？」
「鑑識を甘く見ちゃダメだよ」
隼人は指を「チッ、チッ」と振ってきた。ウザし。

「そこには1文字だけ、「ト」と書かれていたそうだ。他の部分は焼け焦げていて、修復は不可能らしいよ」
「残念だな・・・・・・」
「でも、これで1つ判明したよ。海馬正へ　というカードは無かったんだ」
「・・・・・・残念だな」
結局海馬に悪い状況だけが出来上がってしまったというわけか。

「で、君は何を見たんだい？」
「ん？」
「何を見たのか。あの階段で」
・・・・・・コイツには何もかもお見通しというわけか。

「何を見たというか・・・・・・。聞いたんだよ。遺留物からな」
「遺留物？」
「赤い髪の毛だ」
「赤・・・・・・ああ、常盤雅か」
で。

隼人の顔つきが変わった。
その間、１０秒。

そして。

「分かったよ。この事件も。彼が隠している事も」
そこまで言って、隼人はにやりと笑った。
が。

「王城君！嘉島君！」

その声は突然聞こえてきた。
その方向には、まぁ俺達をそういう風に呼ぶのは虎郷だけだろう。
「どうしたんだい？そんなに焦って――」
「海馬君が・・・・・・1人で「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」のところへ」
「！？」
俺が驚いている間に、隼人は、
「どこに言ったのか分かるかい？」
と冷静な対応をとる。
「いいえ。彼のタブレットに送られてきた写真と文面を見て、すぐに走り去っていったわ」
と、海馬のタブレット（俺が電子板と呼んでいたもの。最近になって正式名称を知った）を見せて言う。彼の焦りが伝わってくる。
「それ、見せてくれるかい？」
隼人は相変わらず冷静な対応で、そのタブレット端末から写真を開いた。

「・・・・・・何だこれ」
俺がそれを見て開口一番のセリフがこれだった。
そこには、どこかの工場のようなところから窓の写真を撮ったようだ。
「文面を見る必要がありそうだね」
メール（を見るためのアプリケーションなのかは知らない）の画面を開いて、文面を見せる。
『君の大切な子が大変な目にあうよ』
それだけ書かれていた。
「・・・・・・やっぱりそういうことか」
隼人はそういうと、

「東先輩に連絡だ。彼ならどこのことか分かるだろう」
「分かったわ」
それらのやり取りの間に、俺は考えていた。
海馬の大切な人・・・・・・それは長柄川だ。しかし、長柄川はREAD TALEのメンバーのはず。仲間割れと言う事は無いだろう。彼女がリーダーのはずだ。爆弾を作っているのは彼女なのだから。
「・・・・・何がどうなっているんだ？」
そこまで考えている間に、虎郷は連絡を済ませたようで、
「2丁目のビルの裏側にあるらしいわ。ここから5分も掛からないそうよ。東先輩は来てくれないみたいだから」
といった。正確にはまだ言い切ってなかったが、俺は
「走るぞ！」
と、彼女の続きであるだろう言葉を叫んで、動き出した。
俺は考える専門じゃない。とにかく今は、海馬とその大切な人を守るために俺は力を使うしかない。

15―He understands the truth―（後書き）

最近は娯楽道具が無さすぎて
こまりものです（―＿―）

16―The Truth―（前書き）

１６話「真実」

真実はいつも１つ！

とは限らない。

16―The Truth―

「・・・・・海馬君・・・・・・どうしてそこまですんの」
長柄川　里子が言う。そして海馬の髪の毛を引っ張る。
「早く諦めたらいいじゃない。そして私たちと一緒に行動すればいいのよ」
「・・・・・・ざけんな・・・・・・・」
海馬は腹の奥から出すような声で言う。
「・・・・・・そうだよ・・・・・・・。彼のことは・・・・・・あの子達に任せたんだ・・・・・・・」
長堂寺　志楽が言う。
「戻ってきてくれたら・・・・・・・立つ瀬がないよ」
ドガッ！
長堂寺の蹴りが海馬の横腹にヒットする。
同時に長柄川は手を放したため、海馬の体は横に向かって飛んでいく。

「そういうな、長堂寺。アイツは利用できるだけの価値がある。俺は賛成だな」
そこに居た海馬の体を、花咲満は元の場所に投げ飛ばした。
「俺っちも彼を引き戻したいねぇ。それにコイツはアレがある限り、反抗はできないだろう」
丹波龍馬が長柄川同様に、髪を引っ張って言った。

「・・・・・・うっせ・・・・・・・。さっさと・・・・・・・助けろ・・・・・・」
「じゃあ、俺っち達の仲間になるのか？」
「・・・・・・・誰が・・・・・・・」

ドゴッ！
丹波が怒りの表情で、隼人を殴る。手は放さない。
「・・・・・・カハッ・・・・・・」
口から空気が漏れるような音。
海馬の限界が窺われる。

「もう殺しちまおうぜ？」
「嫌よ。彼は私のものにする」
どこから出てくる執着心なのかは知らないが、丹波の物騒なセリフを掻き消す。

「で・・・・・・どうするの？貴方が仲間になれば助けるわ」
「俺の・・・・・・仲間は・・・・・・アイツらだけだ」
「後１５分よ」
「・・・・・・くっそ・・・・・・が」

・・・・・・もうそろそろ危ないか。
「・・・・・・ん？」
丹波がこっちを向く。そういえばアイツは目と耳が良いのだった。
１０メートル・・・・・・許容範囲か。
「・・・・・・妙な音がする」
「音？」
長柄川が反応する。
「何か金属を叩く音だ」
「金属？」
「あっちだよ」
彼が指を指す方向。それは――。
「・・・・・・扉？」
隙間風が入る程度に開いた扉。鍵が閉まっていてそこまでが限界

だったのだ。
ガンッ！ガンッ！ガンッ！
「・・・・・・まさか・・・・・・」
長堂寺が驚く。彼のようなキャラクターでは珍しい反応だろう。
「丹波君！誰がいるの？」
「待て、今から見――」

ドゴォォォォ！
見事に扉は開いた。というか、壊れた。
「なかなかの重労働ね」
蹴破った残骸を見て虎郷が言った。
「女の子にやらせるなんて、男の子としてどうなのか・・・・・・。私としては甚だ疑問だよ」
音河がギターを構えたままで言いながら前へと進む。
「しょうがないだろう。僕が時間をかけるより、2人の力で開けるほうが圧倒的に楽なんだから」
隼人は誰よりも先に、虎郷が蹴破った扉を踏みしめた。
「別に俺が変形させて入っても良かったんだけど」
お約束ながら、俺は順番に則(のっと)って言った。

「さて、タダシ君」
隼人はそのまま扉の上を歩き、扉を越え終わった。俺達もそれに続く。
そして彼は決め台詞のように言った。

「助けに来たよ」

16―The Truth―（後書き）

だって正しい事がひとつじゃないから。

正しい事が2つあれば、たどり着く真実はそれ以上ある。

17―Do Battle :Start―（前書き）

17話「闘い　開始」

17―Do Battle :Start―

「・・・・・・来たのか・・・・・・・」
海馬は呻くように言った。

「・・・・・・あの扉を壊した・・・・・・・」
長柄川が1歩後ろに下がる。
対して丹波は冷静にこちらの姿を見つめる。
「・・・・・・ったく。支障ばっかきたす奴らだよ」
丹波は腕を振り上げる。
ガチャッ！
そういう音が周りから聞こえた。
工場には階段があり、1階を見渡せるようなベランダが備え付けられた2階が存在したらしい。
「・・・・・・へぇ」
隼人は感嘆の声を上げるが、俺はその2階を見て絶望の声（すなわち、声がでないというわけだが）しか口から出そうに無かった（つまりでてないのだが）。

その2階には、20人ほどのスナイパーが居た。その内数人は、手榴弾を持っている。

「そういや、海馬君も言ってたね。イレギュラーが数人居るって」
と音河が思い出したように言った。

「で、どうするの？隼人君」
「とりあえず、現状で分かっているのは2つ。まず、タダシ君は何かを守ろうとしている。そして、それを助けるためには海馬君が「READ TALE」の仲間にならなくてはならない」

「それを打開する方法は？」
「海馬君を助ける。事情を聞く。何かを助ける。以上だ」
「合点了解だ。隊長」

俺は左手を地面につけて、床を変形させる。作るイメージは「剣」
「隼人。俺は丹波は苦手なタイプだ。だからそれ以外で」
「了解。ヒスイ君はどうする？」
「そうね。海馬君の話から推測して、私が相手にしないといけないのは――」

言った瞬間、虎郷は俺達の視界から、右側へとフッ飛ばされた。
これは超高速で攻撃してきた事からも推測できる通り――。
「・・・・・・殺す」
長堂寺だ。
そしてそんな彼女に吹っ飛ばされながらも、虎郷はすぐに立ち上がり、
「彼女の相手は私がするから後は皆さんでご勝手に！」
と叫びながら走り始めた。
「大丈夫なのか！」
「心配している暇があったら自分のことを考えておきなさい！」
虎郷は長堂寺の攻撃をよけながら、俺の叫びに答える。

「僕が長柄川さんに行く。彼女を倒せば士気も下がるはずだ。リーダー決戦だよ」
「なら私が丹波君だね」
「俺が花咲か・・・・・・まぁ何とかなるか」

こちらを睨むは、「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」長柄川、丹波、花咲の３人。先鋒こと長堂寺さんは戦闘中の身でございます。
対するわれわれ、「あああああ（初期設定が面倒だったため、『あ』を連打しました）」は、王城、音河、嘉島の３人。我らが先鋒、虎郷さんも戦闘の真っ最中です。

いざ尋常に、勝負開始！

何を合図にか、俺達は一斉に走り始めた。

17―Do Battle :Start―（後書き）

さて、ようやく醍醐味だな。

18―I renounce the right of the story

18話「俺は語り部の権利を放棄した」

語り部が権利かどうかは知りませんけど。

多分権利じゃないけど。

18―I renounce the right of the story

何の合図も無く同時に走り出した俺達に待ち受けていたのは、また、何の合図も無く同時に放たれた機関銃やライフルの弾丸たちだった。

「・・・・・さっさと片付けるわよ。虎郷さんが居ない以上は、私たちの敵にはならないはず」

長柄川の指揮の元、2人は左右に散らばった。長柄川の足元に、海馬は放置されている。

「俺が右だな」

俺は花咲を追いかける。

「私が左だね」

音河は丹波を追いかけた。

「・・・・・・嘉島と言ったか？俺がお前の相手なんだな・・・・・・」

「はい。よろしく～」

俺はおどける様に言った。

「先に一度だけ質問しておく。海馬を助けたければ俺達のことは放っておくべきだ。どうする？」

「俺は海馬だけを助けるんじゃない。海馬が助けたい奴も助けるんだよ」

「そうか。貴様らがしたいことをやることに、俺はいちいち否定の目を向けるつもりは無い」

「あっそ。ならほっといてくれ」

で。

俺はあらかじめ作っておいた刀を投げた。
「――っと」
それを花咲はリンボーダンス（もっと分かりやすく言えば『マトリックス』）の要領で上半身のみを後方に折る。流石はダンスをしているだけはあり、平衡感覚はいいようだ。
が、その隙を俺が逃がすわけがない。

バランスの悪いはずのその足に、俺は右足を伸ばした。そこで俺の足と花咲の足が重なり、音を鳴らす。
ブォォゥン！
「ってアレ？」
俺の右足は空を切る。そして間抜けにも俺はバランスを崩して倒れてしまった。が、現状理解のために、取り敢えず身を起こす。
「・・・・・・！」
花咲はブリッジの要領で手を着いた後、両足を上へと持ち上げていた。そして俺は思い出した。
彼はただのダンスではない。ヒップホップである。ブレイクダンスを踊れるような人間は、それはもう、俺が比べられるレベルではないほどの運動神経を持ち合わせているはずだ。
「・・・・・・無様だな」
彼はそのままの態勢で、上半身を無理矢理回転させる。自然、体はバランスを崩して倒れる。が、それはもしも彼が1人であればの話。
彼が倒れる先には俺が居る。
「！」
突然の行動に俺は金縛りのように体を動かす事を体に拒否される。
彼の狙いはこれだったのだろう。花咲は空中で態勢を整える。それはもちろん着地する態勢ではない。

彼の右足のかかとは俺の左肩に落下した。
ゴキィィイイ！
肩が妙な音を立てて軋む。
「・・・・・・・！！」
お・・・・・・折れたか・・・・・・！？
俺は、自分でも不思議なくらい冷静に肩を見る。
・・・・・・ぎりぎり大丈夫そうだ。
「浅かったか」
俺の考えの裏づけのように花咲が言いながら、手だけを地面について、逆立ちの要領で体を持ち上げてから、そして腕の腕力のみで空中に飛び上がって、今度は間違いなく2本足で地面に立った。
「コイツは・・・・・・マジでやばそうだ」
それが俺の総合しての感想だった。
「これが最後の忠告だ。諦めろ」
花咲は腕を組んで言った。

「お前が知らないところで俺は既に俺の力を使っている」
「・・・・・・能力かよ・・・・・・・」
だがしかし、アイツの力は確か、所謂「モノマネ」だったはず。つまりは、戦うための物ではない上に、それをどう活用しようとも結局は単なるまねに過ぎない。だとすれば・・・・・・。
分からない・・・・・・。考えるのは苦手なのだ。
「・・・・・・返答無しか・・・・・・」
花咲はまたも動き始めた。俺は防御の態勢を取る。が、俺の防御をあらかじめ見越していたかのような動きで、俺の懐にスライディングのようにもぐりこみ、下から顎に向かって右足で攻撃してくる。
「くっそが！」
俺は花咲のように、上半身だけを後ろに反って避ける。
が、そのまま右足の膝部分を折り曲げて弱いながらも、俺の鳩尾にヒットした。

「！」

何なんだ・・・・・。アイツは俺の心でも読めるのか？

だが確かそんな能力ではないはずだ。一体何がどうなっているのだろう

「・・・・・・待てよ」

相手に変装するということは相手のあらゆるものを認識する・・・・・・。

「！」

つまり、相手の癖を見抜いているということ。それは攻撃、防御、回避それら全てに使用されるはずだ。俺みたいな性格の人間を花咲はそれだけ見てきたということだ。花咲は俺のようなタイプの人間の行動パターンや、俺の最初の攻撃からバランスを崩すところまでを見て、俺の体格などを見極めたと言う事か。

「くそ・・・・・・厄介だな」

「お前の行動パターンは見切った。貴様の武器がもう無い以上、俺の勝ちだろう」

そう言って花咲は笑った。

・・・・・・待てよ・・・・・・。だとすれば・・・・・・。

「・・・・・・こうなったら、思い切り行ってやる！」

「こい。次にやるお前の攻撃は見切っている」

そう言って、仁王立ちの姿勢から変わらずにこちらを睨んだ。

俺は地面を思い切り蹴って、走り出して突っ込んだ。

チャンスは1回。これを逃せば、勝つことはさらに困難になるだろう。

5メートルくらいの距離を一気に縮めて、目の前に立って俺は左手の拳を思い切り振った。

「くらえ！」

俺は叫ぶ。

「フン・・・・・・。そのくらい読めている」

花咲は余裕の表情で、俺の左手を受け流した。俺の体は勢いのまま、花咲の後方へと流れる。
が、そこまでは作戦通り。
「うぉぉおおああ！」
そのままの態勢で俺は右足を無理矢理、横薙ぎに振って背中を狙う。これが俺の思うように成功すれば――。
「分かっていたさ。お前がフェイントを仕掛けてくる事くらいな」
花咲は俺の右足をジャンプするという方法で避けた。見事に俺のフェイントまで見切っていたようだ。彼の予想通りの行動となってしまっていたようだ。
だから、俺がバランスを崩して、俺の体の後ろ側に左手をついて、格好悪く倒れるところまで予想通りだっただろう。

そう。

……
そこまでは。

念のためもう一度言っておこう。俺は、「左手」を自分の体の後ろ側についたのだ。
「・・・・・・・喰らえ」
俺は今度は静かに言った。
「が・・・・・・！」
空気が漏れるような声を出して、花咲は動きが止まる。
床を変形させた。形は槍を2つ。狙うのは、花咲の両肩。
そして、それらを甘く突き刺す。
「あああああああああああああああああああああ！！」
花咲はみっともなく叫んだ。そりゃそうだ。甘く刺さったとは言え、貫通する直前までは刺さっているだろう。空中で固まっている

ようなものだ。
「喚(わめ)くな。すぐ治まる」
俺は、その槍を突き刺したままの形で、花咲の体を拘束した。

彼の隙があるとすれば、俺の能力を知らなかった事。
俺の武器を、あの剣１つだと勘違いしていたところから、俺の能力を見ていなかったのだろう。あるいは、地面を変形させて出したものではないと思っていたのかもしれない。
が結局、フェイントまでしか予想していなかった彼の負けである事はゆるぎない事実ではあった。

「救急車は・・・・・お前らがさっさと助けさせてくれれば助けてやる。それまではそこにいろ」
俺は言った。が。
「気絶したのか・・・・・・・」
花咲は白目を剥いて俺の話を聴いて（？）いる。
「さてと」
俺の担当は確か語り部なのだが・・・・・・。どうやら、他の２人も終了したようだ。

18—I renounce the right of the story

だが、人は権利だと思うものを全て権利にしてきたようない生き物だ。

それゆえ、俺はこれらを権利と信じ続けて生きていこう。

嘘だけど。

19―ROCK 'N' ROLL―（前書き）

19話「ロックンロール」

19－ROCK 'N' ROLL－

さて、いくら語り部を放棄したとは言っても、何もかも無視すると言う方法をとるわけにはいかないだろう。俺としては、このまま3人の戦いを紹介しない方法も一手だとは思うが、まあ、語り部を担当していた以上は責任は俺が問われるのだろう。なので、3人の戦いを紹介するが、俺みたいに長くド派手にはならないだろう。

てな訳で、音河の戦い方を紹介しておこう。あぁ、心配しなくてもここも、まとめで担当している「俺」が、第三者目線として話をしよう。

「貴方が、丹波で間違いなさそうね」

音河はギターを構えなおす。

「・・・・・・まぁ、俺っちが丹波な訳だが・・・・・・。ぶっちゃけて良いっすか？」

丹波が頭を掻きながら言った。

「ぶっちゃけ俺っち・・・・・・興味ないんだよ。この闘い」

「・・・・・・」

音河は強くギターを握りなおす。

「そう身構えんなって。別に油断させようなんて魂胆じゃねえから」

丹波は態勢をリラックスするように猫背になる。

「この闘いってさ・・・・・・。単純にあの長柄川の私利私欲のためなわけ。海馬を自分の物にするための所謂、リーダーのわがままなのさ。あ、リーダーってのは『ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ』の・・・・・・って、知ってるか。まぁいいや」

丹波は独り言のように話を続ける。

「さらにぶっちゃけちまったら、俺っち・・・・・・長柄川が好き

なわけ。だから海馬をわざわざ引き戻すよりは・・・・・・ってわけ。だから偶然に見せかけて3回ぐらい殺そうとしてみたんだけど・・・。アイツはやっぱり運がいいな。俺としては迷惑な限りだぜ」
「・・・・・・」
だから何？
そう言いたそうな顔で音河が丹波を睨む。
「・・・・・・あぁ・・・・・・。もういいや。話し合いなんて何の意味もなさそうだ」
「そうよ。さっさと片付けさせてもらうわ」
音河はギターのピックを構えた。
「ショック・ノート！」
「・・・・・・あ。見えた」
丹波はそう呟いて、側転で避ける。
「超音波の一種か？いや、アレは衝撃波か。それにあのギター・・・・・・。やっぱお前らも俺っちらと同じか。皆気付いてるみたいだな。うん。よし」
そこまで丹波は言ってから。

高速で音河に近づく。
「！」
「ソイツは至近距離では利用できそうにないな」
丹波はそのままの勢いで両足でギターを蹴る。正確には音河がガードして、その位置にギターが来ただけなのだが。
「・・・・・・」
音河はもう一度ギターをかき鳴らす。今回は連発だ。
「うおわ！」
しかし丹波はその近距離では、どんな運動神経でも避けられないはずの音符弾丸を避ける。

「俺っちの目と耳を舐めるなよ！俺っちは周りの空気密度との違いを見分けられる！つまり――」
「衝撃で揺らいだ空気を見分けられるからそれなりの距離なら避けられるってことね」
「その通り！」
そのまま丹波は音河との距離を縮める。
「なら！」
音河はギターのヘッドを相手に向ける。
「スリングショット！」

ギターのヘッドから弦が伸びる。
それはつまり、目がいいことや耳がいいことは何の関係もない事が最大の特徴である。
「なんじゃそりゃ！」
丹波そう叫びながらこけるように地面に倒れる。
それだけでは格好悪いが、それが1メートルも無い距離でそれができると言うのは、十分の凄さである。イメージとしては、３０センチの距離でドッチボールの玉を避けるくらいの難しさである。

「どりゃあ！」
そのまま倒れた状態から右足を音河の腹を狙う。
「クッ！」
その腹をギターでもう一度ガードする。

「元の出来が・・・・・・違いすぎる・・・・・・」
音河はそう呟いた。
そして思考を始める。
一体どうやって勝てばいいのか。相性はともかく、あの運動神経と能力では攻撃が当る事は無いだろう。だとすれば、それこそ油断を誘うしかないだろう。

だがどうすればいいんだろうか。
その思考の間でも、丹波は攻撃を何度も向かわせる。もちろん音河は防戦一方になる。

「・・・・・・もう諦めろ！！」
丹波は叫ぶ。
「俺の運動神経と能力がある限りお前は――――」
コッ・・・・・・。
彼女の――音河のような耳でなければそんな音も聞こえないような音が鳴る。
が、丹波は
「！」
驚くように止まる。過剰にその音に反応する。
音源は、２回撃った衝撃波が当った先にあった工具が突然落ちてきたのだ。

「何だよ・・・・・・驚かせやがって」
そう言って、丹波はもう一度こちらを向いた。
それで音河は気付いた。
彼は耳が良すぎるから、どんな小さい音でも聞こえるのだろう。だから、その音が奇襲だったときのためにいちいち大げさに反応しなければならないのだ。
ということはそれで油断を誘えれば。
そう思ったときだった。

「あああ！」
どこからかそんな叫びが聞こえた。

嘉島だった。いや、正確には嘉島の攻撃で花咲が叫んだのだ。その痛みに対して。
そして・・・・・・。
丹波は以上に反応した。過剰に反応した。

そして音河はその穴を逃さなかった。
「スリングロープ！」
音河は弦を縄のように伸ばして、丹波の体に巻きつける。
「しまっ――」
「ショック・ノート！」
音河は衝撃波を放った。
当然身動きのとれない丹波は後方に向かって吹っ飛ぶ。
「く・・・・・・っそ・・・・・・」
そんな小さな声を吐いて、丹波は動かなくなった。
その声もきっと、音河にしか聞こえなかっただろう。

「何とか・・・・・・勝ったよ」
そう言って、地面にへたり込んだ。
そこで気付いた。
自分の姿がいつの間にか、ロックテイストの服装になっていることに。
「また・・・・・・制御できなかった」
少し残念そうに音河は言った。

２０－Ｇｅｎｉｕｓ－（前書き）

２０話「天才」

人間は完璧じゃないし、完璧な人間は居ないんだよ。

何か長所がある人には１つは短所があるらしい。

貴方が完璧だと思う人でも絶対に短所があるんだよ。

20－Genius－

「・・・・・面倒だね」
「あなたの速さほどではないわ」

先鋒の戦いの最中に居た虎郷と長堂寺の闘いを（過去と未来を）中継してお送りしています。
つまりは、虎郷の戦いだ。
だが、今回は能力等の余計（？）な物が入る余地は無い上に、無駄な会話も少ない。
純粋に戦闘を楽しむような人種・・・そして戦闘に向いている人種の闘い方だということだ。

「そろそろ諦めてくれよ・・・・・・」
言葉のやる気の無さを全く感じないレベルでの猛攻。
「私が諦めるのを諦めなさい。貴方は何でも早いのでしょう？」
同じく静かに言いながら、全ての攻撃を手や足で押し返すように防御と攻撃を同時進行する。
「諦めるのも・・・・・・早いはず！」
先とは違い、叫んでから思い切り長堂寺の拳にぶつけ返す。
「・・・・・・」
長堂寺はそのままの勢いで空中に吹っ飛ぶ。
「・・・・・・諦めが早いことは否定できないけど」
空中で1度回転して、地面に着地

するころには既に虎郷との距離を縮めていた。
「ダンスは諦める事は無かった」

そしてそのまま勢いで虎郷の腹を右足の蹴りで突く。

だが虎郷は黙ってそれを両腕の二の腕部分で、長堂寺のふくらはぎを上に向かって飛ばす。
そして若干崩れたバランスを狙い、右足を長堂寺の残った左足に向かって横薙ぎに振る。
しかし、そこも流石ダンサーと言ったところか、横から攻撃された足を流れに逆らうように筋力でそのまま立たせて、上に向かって強制退去させられた足をすぐさま戻して、結果、両足で虎郷の足を挟む。
「くっ・・・・・・」
虎郷が声を思わず声を上げる。
長堂寺は体をその状態でねじる。靴が引っ掛かり、そのまま虎郷の体が宙を舞う。
そして虎郷は地面に叩きつけられた。
「か・・・・・・はッ・・・・・・！」
衝撃を放出するべき場所が無かったためか、口から空気が漏れる。
「まだまだいくよ・・・・・・」
そう言って、長堂寺は虎郷の体を蹴り上げ

られなかった。
虎郷はその状態から長堂寺の首元に手を伸ばす。
それこそ突然思いついたように。忽然と思いついたように。
しかし、あらかじめ予想したかのような速さで手が伸びる。長堂寺がその位置に来た瞬間を、目を瞑ったままでも分かったように。

「見えてるのよ。私には」
「・・・・・・」
黙って、長堂寺が力を緩めた。
「諦めたの？」
「その辺は弁えてるよ・・・・・・」
言ってから、そのまま倒れるような勢いで折れ曲がる。そして

そのまま虎郷の体を前方へと投げ飛ばした。
「・・・・・・諦める事を諦めるのを待つのを諦めるべきだ」
ややこしいことを言いながら長堂寺は虎郷を追いかける。
「そう・・・・・・。じゃあいいわ」
言って虎郷は、着地しながら後ろに向かって拳を振るった。
それは、そこにすでに追いついていた長堂寺の顔面に直撃した。
「貴方の行動・・・・・・これから先は見えているわ」
「・・・・・・ギリギリのスピードで切り替えしてみせるから・・・・・・それは無理だ」
そう呟いてバク転で着地して態勢を整えた。
それと同時で虎郷が追いつく。その虎郷の肩の服を掴んで足を虎郷の腹に突きたてた。が、思い切りではない。それは所謂支点になるべき足。そのまま、虎郷の体を後ろに向かって受け流す。
巴投げだった（分からない人は検索！柔道の技）。
「・・・・・・！」
しかし虎郷の動きは先ほどまでの勢いとは違って、急にスピードが落ちる。というよりは、わざと重力をかけているようだ。
「見透かしているのよ。未来を」
そう言って虎郷は、投げ飛ばそうとする長堂寺を見下ろす態勢で止まった。
「どうやら貴方は、スピードの分攻撃力がないようね。もしかして衝撃の分散スピードも早いのかしら。まぁいいわ。これで終わらせるわ」
虎郷はそう言って、右腕を振りかぶった。
そしてそのがら空きの腹に向かって拳を振るう。
「しまった！」
珍しく早くしゃべって、肩から手を放して防御に向けるが、その所為で、重力加速度も拳に加わる。
「貴方の防御は意味を持たない」

静かに虎郷は長堂寺に吐き捨てて、拳を真っ直ぐおろした。

「・・・がッ・・・・！」

口から胃液の混じった血が飛び散った。そして一言

「僕は・・・・・・」

といって、気を失った。

何が言いたかったのか、何を伝えたかったのかはわからないが、1つ分かった。

「貴方・・・・・・・一人称は「僕」なのね」

文字通り、最初で最後の一人称だった。

20－Ｇｅｎｉｕｓ－（後書き）

それでも完璧な人がいたとしたら、

それは人間らしさという長所をなくしているから、すでに完璧じゃないのさ。

21 ―The Boss―（前書き）

21話「頭領」

21―The Boss―

隼人の戦いだ。これで４人分終わりだろう。

「さて・・・。リーダー対決と行こうか」

隼人は歩みを止めてそのまま直立する。

「あ」

が、そのままダッシュで左右をうろちょろと走り始めた。

２階部分にいる銃撃戦隊（勝手に命名）の銃口が全て隼人に向いていた。

というか連射されていた。

「なるほど・・・リーダーだから守らなきゃならないのか・・・・・・」

隼人は呟きながら、そのまま相変わらずぐるぐると長柄川の周りを回る。時には障害物をよけるために飛んだり跳ねたり転んだりしゃがんだり。

「王城くん・・・君、勝てる気で居るの？」

長柄川は隼人を冷めた目で見つめながら言った。

「諦めたほうがいいよ。私たちには勝てっこない。無駄な労力を使うだけだよ」

「僕は最強のヒーローだから。遅れてやってきたことがその裏づけかな」

隼人はそのまま空中を舞うように飛んだ。銃撃はその隼人を狙い続ける。

一応言っておくと、隼人は弾丸に当ってないわけではない。当りそうな弾は、障害物に潜り込んだり、最小限のダメージに抑えている。

「さて、久しぶりにやってみようか」

隼人は動きを止めた。
「キングダム」
言った瞬間空間が変わる。
そこに入ったのは長柄川のみ。
そして相変わらず隼人は動き回り始めた。
「この世界は痛覚は否定できても銃弾は否定できない。確実に銃弾はヒットしてしまうんだよ」
長柄川に説明しているようだが当の本人は驚きの表情をしながら
「やはり君も能力者ね・・・・・・」
「そうだよ。じゃ、解決と攻撃を同時に行うよ」
言った瞬間隼人は攻撃を始めた。その攻撃方法は超接近戦。
「・・・！」
長柄川が距離をとろうとしても、その距離を全力で縮めてくる。
「こうやって近づいて攻撃していればあの銃撃軍も君に弾が当るかもしれないから狙えないよね」
「くっ・・・・・・」
「こんな事件が起こってしまったのは、またもややこしい属性の何か。僕の不得意分野だよ」
隼人は言いながら攻撃を続ける。
「爆弾（ボム）：速攻（スピード）」
長柄川は手から爆弾を作り上げた。
「ウェポン・・・・・・しかもサイボーグに近いけどアームスか・・・・・」
呟きながら長柄川が投げる爆弾を他の方向に弾き飛ばす。
「で、話を続けるよ。これは君の私利私欲・・・つまり、偶然現れた海馬をそちら側に入れるために行われたものだったんだ」
「君のようなタイプにはこの爆弾ね。
爆弾（ボム）：衝撃（ショック）」
そのまま爆弾を隼人に向かって放り投げる。距離が近いから意味が無いのだ。

「名前からして衝撃を受けたら爆発するんだろうね」
「その通りよ。ココで地面に触れた瞬間や貴方が触った瞬間に爆発するわ」
「あ、そ」
そしてその爆弾を素通りする。
「！」
「君の考えは見透かしているよ。僕に爆弾をよけさせる、或いは当てることで距離を稼ごうって算段だろう？」
爆弾は地面に到着した。
が。
「どういうこと！」
「いったろう？ここは痛覚を否定するんだよ。だから、衝撃も無意味だ。話を続けたいけど、君が邪魔するからとっとと終わらせるよ」
隼人は長柄川を思い切り上に打ち上げた。
「が・・・・・」
「海馬君への愛だ。それにしても最近の犯人は愛を求めすぎだよね？」
言いながら、隼人は指を構えた。
「だれか！早く王城君を撃ちなさい！」
長柄川が叫ぶ。同時に、隼人は指を鳴らした。
パチンッ！
音がなって、空間が一瞬で元に戻る。
そして長柄川は。

1階の天井・・・つまり2階のベランダの下に頭をぶつけて、気絶した。
「君がその距離に逃げるまで時間を稼いだんだよ。空間が戻ったら頭を打つようにね」
隼人は言って笑った。
狙撃手たちは指導者を失って呆然としている。

「あぁ・・・・・どうやら僕が最初に終わったようだ」

隼人はそう言って、長柄川をロープを探して縛る事にした。

21－The Boss－（後書き）

今回は頭領というリーダーの意味と、
これで詰んだという投了の意味をかけてみました。

22―Elegance―（前書き）

22話「優雅」

正式には僕が出したかった意味ではないので、あとがきで紹介しますね。

22―Elegance―

俺達は取り敢えず全員を気絶させると言う方法で勝利を得た。
「響花！急げ！後５分だ」
隼人はそう叫んだ。
「え・・・・・・何が？」
「何かのタイムリミットが、だ！恐らくそれを解決するための何かを長柄川が持ってる！」
「何で私が？」
「僕が女子の体を触るわけには行かないだろう！」
「は、はい！」
凄い剣幕の隼人に音河は思わず丁寧な返事をする。

「・・・クスリだ・・・」
海馬が倒れたまま言った。
「ビンに入った・・・・・・緑色の液体がある。ソイツが必要なんだ・・・・・・」
「・・・・・・あった！」
音河がそれを持ってこちらへやってきた。
「海馬君。誰に渡すかはしらないけど、行ってきたほうがいいよ。君に行ってほしいな。私としては」
「あぁ・・・・・・。ゴメン、皆」
海馬が、それを受け取って歩き始めた。入り口に向かって。

「・・・・・・！」
俺は、長柄川の方を見た。それは俺だから感じられたかすかな気配。
「長柄川が起きた！」
という俺の事実報告と

「彼を撃ちなさい！」
という長柄川の叫び声が同時にその工場に響き渡った。
隼人が目を丸くする。この場合は驚きではなく、失敗したことに
愕然としている可能性のほうが高いだろう。
そして・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

発射音がしない。空砲のような音すらしない。
「・・・・・・どういうことだ！」
花咲が起き上がって叫んだ。そして同時に自分が拘束されている
事に気付く。
俺達・・・・・・敵味方含めて見たものは、

2階で倒れている狙撃手たちだった。
「・・・・・・お前ら！一体何をしたんだ！」
丹波も起き上がってそう叫んだ。
「・・・・・・ソウメイ君。何かしたのかい？」
「音河じゃね？」
「火水じゃない？」
「王城君でしょう」
1周回ってきた。つまりこの中にはいないだろう。ということは・
・・・・・。

「海馬か？」
「・・・・・・」
俺達の質問に海馬は黙っている。
いや、顔を青ざめている事から聞こえていないようだ。
だが、あの表情は不安や焦燥ではない。どちらかと言うとそれは、

驚きと恐怖・・・・・・・。

「くっそ」

「アイツか・・・・・・」

「あの状態でも私たちの前に立ちはだかるのね・・・・・・」

花咲、丹波、長柄川は呟く。

「・・・・・・だから・・・・・・怖いんだよ・・・・・・」

海馬は呟く。こちらに聞こえるか聞こえないか程度の声で。

「俺の能力を無視できる・・・・・・予想できない行動ばっかりだから・・・・・・」

そのまま一歩下がる。

「だからこそ・・・・・・なんだけど・・・・・・」

彼が口を噤んだと同時に、2階から何かがやってきた。

その何かは言った。

「正先輩はいつも元気が無いように見えます。どうしてでしょうか？私はどんな状況でも元気いっぱいですよ？」

その何かが物語りの元凶で鍵で、そして海馬の固い意志だった。

「・・・・・・雅・・・・・・」

22 ―Elegance―（後書き）

ようやく今回の章の「この世界」の登場です。お楽しみに。

「雅」というのは、日本独特なので、「優雅」という意味にしましたところ、意味が優美さと同義だったので、題名はそちらにさせていただきました。

２３ －Ｃｏｍｍａｎｄ　ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ－（前書き）

２３話「一世を風靡する」

見事８０話突破っす。

23－Command the world－

「アレは・・・・・・常盤雅・・・・・・？」
取り敢えず、俺としては驚きしかなかった。
あの赤毛の少女がどうしてココに現れたんだろう。そしてどうやって銃撃隊を倒したんだろう・・・。
まさかやっぱり、あの少女も「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」なのだろうか。
「違うだろうね。僕の推測によれば、彼女は「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」ではない」
そう言って常盤雅の方向を見た。
「全ての事件の元凶だよ」

「お前・・・・・・どうして来たんだよ」
「私は正先輩みたいにやわな体ではありません。自らの死が近づいているからと言って諦めるような心や体躯ではないのです。それより、その緑のが解毒薬ですね？」
「まぁ・・・・・・解毒と言う言い方はどうなのだろうか」
「そんな事はどうでもいいです」
そう言って、雅はその薬を奪い取った。
が。

雅の背後に黒い影が現れた。
「・・・・・・させないよ」
「・・・長堂寺先輩ですか」
虎郷の攻撃で気絶していたはずの長堂寺が動き始めた。

「ぶっ倒す！」
丹波がギターの弦を振りほどいて（というかぶち切って）走り始めて
「・・・振りだしに戻すだけだ」
花咲は自分を拘束していた地面と槍を足で蹴り壊した。
「私の計画の支障ばかり・・・・・・！」
長柄川は始めから何のことも無いように縄を両腕を無理やり開いて縄を切った。

そして俺達の背後から出口（或いは入り口か。しかし出口と入り口は常に表裏一体なのでどち（ｒｙ）に向かって走りこんだ。
「しまった！」
「ヤバイ・・・！」
俺と隼人は走り出した。
しかし、向こうは流石の体育会系なので俺や隼人の帰宅部スキルでは不可能だった。
このままでは海馬が危ない。
俺はそう思った。

が、ことは思っても居ない方向に向かって転んだ。

まず、超高速でやってきて、超高速で攻撃したはずの長堂寺の攻撃をターンでよける。
「先輩の速さと私の回転・・・・・・どちらが勝つでしょうか」
言って、緑色の液体こと薬を飲む。
「・・・治ったのかどうかは分かりませんが、信用しなくては意味もなさそうですね」
そう言って長堂寺に向き直る。
「・・・・・・面倒」
「そうですか。では先輩に習って早めに終わらせましょう」

長堂寺の右足が常盤の首を横から狙う。
が、常盤はそれを左手で受けて、その足を回転軸にして左回転で、その足の内側から外側に周りこむ。そしてそのまま勢いを抑えずに、裏拳で長堂寺の顔面を狙う。
「・・・・・・効かないよ」
それを右手で受け止めながら言った。
「残念です」
言いながら常盤は急にその場でしゃがんだ。
花咲が誰よりも早く追いつき、背後から常盤に拳を振ってきたのだ。
「回転の最中にでも見たのか？」
「花咲先輩でも私の旋回はまねできませんよね？」
常盤はそう言って、しゃがんだ態勢から、急に飛び上がる。結果、花咲の顎に常盤の頭突きが衝突した。
「悪い、花咲。そのまま倒れてくれ」
言って後ろから現れた丹波が花咲の肩を踏んで常盤の上から攻撃しようとする。
「しまりました」
常盤は、飛び上がった衝撃ですぐさまには動けず、そのまま静止してしまう。
そのまま両手を貝をあわせるような手の形にして、常盤の頭に向かって振り下ろす。

ブォォン！
丹波の両手は空を切った。
「あらよっと」
海馬が常盤の体を引く。社交ダンスのような回転で、海馬の胸の前に常盤の体が到着した。
「お前は本当に勝手な真似ばっかしやがるな・・・・・・」
「先輩の予測力が低い所為ですよ」

言って、2人は1度分裂した。
理由は長柄川の出現だ。
「雅！あんたはいつもいつも邪魔ばっかりしやがって！」
「長柄川先輩の気持ちには気付いてましたが、面と向かって言われると、心にこみ上げる物がありますね」
「何だ！？悲しみか！？怒りか！？」
「優越感です」
「殺す！！！！」
そして、2対4の乱戦が始まった。

「何が起こってるんだ・・・・・・」
「分かる事を適当にまとめると、海馬君が守りたかった物は、何らかの状況で被害にあっていた常盤雅その人らしいね」
「・・・・・・なるほど」

しかしその乱戦の様子は、どう見ても戦いには見えなかった。

4人の猛攻を色々な方法でよける。時には飛んだり、しゃがんだり。しかしそれらは常に海馬と常盤の2人組（ツーマンセル）みで行動していた。
その姿はどうみても、「ダンス」だった。彼らにそんな気はないのだろうが、海馬と常盤の2人を引き立てるような動きで4人が動いているように見える。

「お前はぶっ飛ばす！」
「・・・・・・殺す」
「俺っちがやってやる！」
「お前は邪魔なんだよぉぉぉぉ！」
口調とかメチャクチャ何でニュアンスで誰か判断してほしいがともかく、4人は一斉に常盤の四方から攻撃をした。それはつまり海馬もそこにいるということなのだが。

「先輩。邪魔です」
「了解。後は好きにどうぞ！」
海馬は上空に向かってとんだ。
それには目もくれず、４人は常盤を狙う。

「残念です。私としては仲良くしたかった」
言って常盤は右足を下げた。
そして、その右足を地面から思いっきり蹴った。
「一世風靡（ストリーム）！」
そのまま回転して４人を一気に蹴り飛ばす。
それだけには留まらず、そのまま回転する。
１回転、２回転、３回転・・・・・・・・・。
もはや、何回転したかも分からない。
そして、まるでアニメのように回転によって風が起こる。
「う・・・・・・うぉぉぉ！？」
彼女を中心にして風が彼女を囲んだ。
それによって４人が吹っ飛ばされてた。

しばらくして回転が止まり風が止む。
そして、ふらふらと常盤は回った後、後ろ向き体をそってしまった。
が、そこに海馬が現れて、常盤を受け止めた。
「・・・・・・目が回りました」
「おつかれさん」
背中合わせで２人はたって、ミュージックは終了した。

23―Command the world―（後書き）

ま、シリーズ化するし。

のんびりやっていきますか。

２４―Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｗｅｌｃｏｍ―（前書き）

ネタバレになるので訳は、後書きへ。まぁ多分皆知ってるよね？

事故や事件が多くなるなか、皆さんはいかがお過ごしでしょうか？

手紙の冒頭にこんなことを書いてはどうでしょう。

24―You are welcom―

２人が４人を倒した時、俺達は油断していた。

はっきり言おう。

俺達は油断していた。だから、彼女たちの心に気付いていなかった。

「大丈夫かよ、海馬・・・・・・と、常盤」

「いきなり呼び捨てですね。まぁいいですけど」

俺の発言に常盤はそう言った。

「・・・えっと、聞きたいことが幾つかあるんだけど」

「何ですか？手短・・・・・・にお願いします」

言葉を一瞬詰まらせて常盤が言った。

「やっぱり常盤君もアクターかい？」

「正先輩の言っていた、能力者の異名ですね？はい。私は「あくたー」です」

隼人の質問に常盤はそう答えた。

「名称はついてません。正先輩は自らで決めたらしいのですが、私のは――――」

「ターニングポイント」

常盤の会話を遮って隼人が言った。

「それならターニングポイントで間違いないだろう」

「何ですか・・・・・・それは・・・・・・」

常盤が苦しそうに言った。

「ターニングポイントっていうのは、回転力や遠心力によってエネルギーを作り上げる能力で――」

そこで隼人は喋るのをやめた。

そして、常盤をじっとみる。

「・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・だ、大丈夫かい？」
隼人がそう言って常盤に視線をむける。
「・・・・・・・・はぁ・・・・・・・くっ・・・・・・・・」
常盤は苦しそうにしゃがみこむ。
「な、何だ？どうしたんだ？」
海馬がそう言って常盤に近づいてしゃがむ。
俺も思考を開始する。何がどうなっているんだろう。何かに侵食されているように徐々に顔色が悪くなり、症状も悪化しているようだ。こういうタイプのは、タバコとかそういうタイプの毒・・・・・・！
「毒？」
そういえば、常盤は長柄川に何か仕掛けられていると言う見解だったな。ということは・・・・・・。いや、それはさっき浄化したはず。ということはそれ以外・・・・・・！！
「まさか！」
だとすれば、アイツは・・・・・・！

「・・・・・・・・・・・・・・クックックック」

長柄川は俺達の惨状を見て笑った。
どうやら彼女だけは気絶せずに残っていたようだ。だが、頭を打ったせいか初めからそういう性格だったのか分からないが明らかに妙な口調になっている。
「私が本当に解毒薬を持っているとでも思ったのか！持っていたとしたら気絶した振りなんかせずに意地でもその解毒薬は渡さない！！」
つまり・・・・・・。

「偽物を持っていたのか！」
「ちがうねぇ。私の「爆弾（ボム）：煙毒（スモーキング）」を解除する方法なんて初めから無いんだよぉ！！」
長柄川はそう叫んで、高らかに笑った。

「くっそ・・・・・・！」
海馬は動き出した。そして、長柄川に首元を両手で締めるように突っかかる。
「治せよ！お前らに協力するから雅を助けろ！！！」
「むっりー。さっきも言ったよ。解除する方法なんて無いよー」
ひゃはははは！
と、長柄川はあざ笑う。
「くそぉぉぉ！！」
海馬は拳をを振り上げて、長柄川の顔に向かって振り下ろす。
「待て！」
叫び声によって海馬の腕が止まる。
だれの叫びかと言うと、隼人だった。
「・・・・なんだよ、王城・・・・・・。お前にどうにかできるってのか・・・・・・？」
「僕にはどうにかできない。」
「だったら止めるな！」
「でも！」
隼人はもう一度振り下ろそうとする海馬の腕を掴んでから言った。

「響花ならどうにかできるかもしれない」
「え・・・・・！？」
言われた本人は驚いている。
「響花。君のギターなら何とかなるかもしれない。感情を込めるんだ」

「でも・・・・・」
「それしかないんだ。そもそも「エモーション・エイム」は救護者に能力者が多いんだ。何とかなるだろう」
隼人が説得するが、音河は若干戸惑っている。

「頼む！！」
その音河に近づいて、海馬が言った。
「音河だけが頼りなんだ！頼むよ！助けてくれ！！」
「・・・・・・」
黙っていた音河は、

「分かった。やってみるよ」
と、強い視線と声で答えた。
「だったら、俺の仕事もするか」
取り敢えず俺は宣言して、長柄川に近づく。

「おい。常盤のどこに仕掛けた？」
「教えるわけ無いよ」
「虎郷。ぶっとばせ」
「了解」
虎郷は右手を構えた。
「そ、そんなことしても私は答えないよ」
「いや、今の心の隙をついた。もう答えは聞いたよ」
言ってから俺は叫んだ。
「即効性はないようだ！腹の中央に置かないと効果は得られないから、そこに仕掛けられているはずだ！」
「！」

長柄川が驚いた顔をしたので間違いないだろう。
「響花。できるか？助けたいという感情だ。難しいかもしれないけど・・・・・・」
「大丈夫。絶対やってみせる」
音河はギターを構えた。
「・・・・・よし！」
ギュィィィイイン！！
音河はギターを鳴らした。
音符が飛んでいく。まがまがしい物ではない。
常盤の腹部の中心にヒットした。
「・・・・・・嘉島君・・・・・・・どう？」
音河が訊いてくる。

「・・・・・・ああ。長柄川の感情バランスが崩れている。間違いない。消滅した」
「・・・・・・・ふぅ」
音河が安心したように、地面に座り込んだ。
「常盤はしばらく倒れていると思うけど心配ないぜ、海馬。時期に戻るだろう」
「そうか・・・・・・」
海馬も同じように安心した声で胸をなでおろす。
「じゃ、最後の締め・・・・・・・海馬君やりなさい」
虎郷が道を開けた。
それは長柄川までのルート。
「・・・・・・長柄川」
一歩一歩踏みしめるように歩く海馬。
「やめて・・・・・・。い、嫌だ」

「お前はいつもそうだな。私利私欲のために頑張って、仲間を巻き込んで。そんなお前を慕ってる奴もいるってことが驚きだよ。嫉妬深い女だけど・・・・・・でも俺はそんなところが」
長柄川の目の前に立つ。
そして海馬はにっこり笑った。
長柄川も安心したように苦笑いする。

「俺はお前のそんなところが　大嫌いだ！」
長柄川が絶望の顔をした。そして、海馬は拳を振り下ろした。
ドゴォォォォォォォォォォォォ！
ものすごい轟音を立てて地面にひびが入る。長柄川はその床にめり込んで気絶した。

「・・・・・・皆・・・・・・・」
海馬は立ち上がり少し俯いて俺達の方を向いた。
そして照れくさそうに言った。

「・・・・ありがとう」
「どういたしまして」
俺達は全員声をそろえてそう答えた。
こうして、海馬とその大切な人の命は守られたとさ。

めでたし、めでたし。だけど、ま、次はまとめといこうか。

２４―Ｙｏｕ　ａｒｅ　ｗｅｌｃｏｍ―（後書き）

２４話「どういたしまして」

僕の友達にお礼と謝罪ができない奴が居ます。
友達には出来るのに、他の人にはできないんだよ。普通逆だよね。
まぁ言われるだけ、ましか。

２５ｓｅｔｔｌｅ（前書き）

２５話「まとめる」

さて、今回も俺の参上だ。
嘉島が今回は事件の本質を理解していなかったので、分かりにくいが俺の能力が間違いなければ推測はほとんど当っているはずだ。

25－settle－

今回の内容はほとんど纏まっていると思うが、取り敢えず復習と言う事でまとめてみよう。

彼らが今回の事件に関わったところから始めよう。

海馬がレッドテイルを知っていたのは、彼らと一緒にいたことだと推測される。

もちろん別の理由もあるだろうが、それはこの後嘉島や隼人が物語りを進めることで明らかになってくるだろう。

今回の事件が起きたのは海馬が1度やめて2度と現れることの無かったダンスグループの長柄川の目の前に現れたことが原因だった。初めてであったとき逃げたのは、運のいい能力を無視するほどの予想外さを誇る常盤雅から逃げる以外に、長柄川の気持ちに気付いていて――なおかつ、嫉妬深い性格であることも知っていたため、もしも海馬と常盤雅の関係に気付いたら大変な事態が起こると踏んだため、余計な発言をしないように逃げ去ったのだ。

しかし、その時常盤雅は「正先輩」と呼んでいた。その時に気付いた――或いはそれよりも前に気付いていたかもしれないが――のだろう。下の名前で呼ぶような関係・・・・・たとえ付き合っては居なくとも、そう呼ぶ関係を長柄川は許さなかった。

そこで彼女は動いた。

まずは爆弾作り。

彼女としては、「まずは」ではなく間違いなくこれで終わらせるつもりだったのだろう。何せ、あの爆弾を最初に持っていたのは「常盤雅」だったのだから。

嘉島がいっていた通り、窓は安全のため全て閉まっているので、海馬の居た1階に行くためには嘉島が通っていたルートを通るしかない。すなわち、あの時ダンスホールに集まっていたメンバーが嘉島の横を通っていない以上、「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」が海馬の前に現れるのは無理だ。

しかし、指揮官の指示で他のメンバー（狙撃軍団のような人間達）が運んだ可能性もあるので、これだけで全てを言い切ることは出来ない。なので別の方向からアプローチをかける。

プレゼントの箱にかけられていたと思われるプレートのような紙に書かれてあった「ト」という文字。

海馬正でない以上、「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」が狙うべき相手は「トキワミヤビ」しかいないだろう。端っこの部分で「ト」であったことからも正解だと思われる。

そして無造作に上の方が破られた、こちらへの挑発のようなメモ。これの上には恐らく、

お前の大切な人を奪って見せた。少なくとも病院送りだ。残念だったな。

と書かれていたのだろう。それを隠した意味は、嘉島たちを自らの戦い巻き込まないためだろう。元仲間である「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」の話によれば海馬は自分のことには他人を巻き込まず、他人のためには努力すると言っていたから、そういうことだろうと推測できる。

さて・・・・・・。後、海馬の行動は・・・・・・。

あぁ。そうだ。

彼ほどの男が動揺して水銀レバーを作動させてしまうはずがない。

と隼人は言っていた。

アレは対象である常盤雅を逃がした後、自らが自爆する事で、「

ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」への挑発行為をした。また、こちらに心配かけさせないように嘉島たちに危険を知らせようとしたのだ。どちらも彼の「運がいい」おかげで起こった出来事ではあったのだが。
それが彼なりの――他人にお願いが出来ない彼なりの、嘉島たちに対する「ＳＯＳ」だったのだろう。

常盤雅が事故現場の前に現れたのは、自分が何者かに渡された時限爆弾を持って海馬の前に現れ、「彼なりの」優しさでそのプレゼントを海馬に渡すように促されて、それを渡した。彼には爆弾だと推測がついていたのだろう。そして事件が起きてしまい、自分に責任を感じて現れたというところではないだろうか。

そして結果的に雅を殺す、或いは海馬を仲間に引き戻す――自分の物にする私利私欲の活動に失敗した長柄川は、ダンス仲間である「常盤雅」を殺す事を他のメンバーに伝えた。もしかすると他のメンバーはこの時点で長柄川に呆れていたのかもしれない。それに、彼らなら常盤雅の能力も知っていただろうし、戦うのが無駄だと気付いていただろう。
そして、拘束はせずに何らかの方法で常盤雅に爆弾を飲ませた。そして何らかの方法で眠りにつかしてから海馬を脅した。それからは皆もご存知だろう。

そして、結局起きた常盤雅は何らかの形で自らが危険にさらされている事と海馬がそのために死にそうになっていることを知った――――おそらく方法は東だと考えられる。虎郷が東に場所を聞いたときに、そこにいたはずの今日元なら隼人以上の推理力と情報力で解決したはずだから。
そして居ても立っても居られなくなった。ということだ。

今回は恋愛感情が交差したからだろう。純愛と嫉妬が混ざり合い、

それがこんな状況を作り上げたと予測される。

「疾風怒濤」の爆発と勢いで物語が進み解決へと導かれた。まぁ、俺としては仕事が減って嬉しい限りである。

25－settle－（後書き）

いい加減俺の謎を解決しなくてはならないだろうが・・・・・。

まあ、しばらく待っておいてほしい。

26－Solicitation－（前書き）

26話「勧誘」

今日のことを書いても仕方がないことはわかっていますが、題名にもちなんで、皆さんを勧誘させていただく事をあらかじめご了承ください。

現在、東日本大震災の被害が増大しております。様々なサイトで、メッセージを送ったり、募金活動が行われたりしています。はっきり言って、絶体絶命の事態です。自らに何もできないというような悲観的な意見を出さずに、何か1つでもできることをすることを、ただの1中学生の分際でお願い致します。

26 ―Solicitation―

さて、いつも通りのことではあるが説明しておくべきだろう。

あの後、龍兵衛さんを呼んで「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」のメンバーを全員引き渡した。最初は、こんな奴らが・・・と驚いていたが、冷静さを取り戻して気絶したメンバー全員を護送車へと入れた。で、今はＷＲで今日元さんを前に隼人が立っている。

理由は、研究材料である常盤雅をＷＲへ入れようとしているからだ。

「彼女はタダシ君の大切な人です。もしも彼女を仲間に引き入れなかったら、「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」の残党に襲撃されてしまう可能性があります」

「でも、お前のわがままをそんなに受け入れられないし・・・・・・」

「僕らの仕事はアフターケアまで担当しなくてはならないのです。僕らには責任があります」

「でもその子は強いんだろう？俺達がそこまでしなくたって――」

「今回の話は聞いているでしょう。油断する可能性があれば、その隙を突かれます」

「んー・・・・・・」

「頼みます。彼女の存在はソウメイ君たちに必要なんです」

「でもなぁ」

説得に対してしり込みしている今日元さん。後ろでは東先輩が背もたれが伸縮する椅子にゆっさゆっさと座っている。俺はその様子を眺めていたが、このままでは話が前に進みそうも無いので、必殺技を使うことにした。

「今日元さん」
「ん？」
「彼女を仲間にすれば、海馬が今日元さんにちょっかいを出しにくくなります」
俺の発言に今日元さんと東先輩が反応する。
「どうやら海馬は彼女を苦手としている節も存在するみたいです。今日元さんを口説く事は難しいでしょう。あの2人は付き合っているはずなのですから。それは東先輩にとってもいいんじゃないですか？なぁ隼人」
「あ・・・あぁ。そうですよ。どうですか？今日元さん」
「そうだな・・・・・・。まぁ、お前のわがままも聞いてみるか。嘉島も言ってるし」
と、俺達からしたらあからさまに責任転嫁することで話は落ち着いた。

東先輩の車に乗って別の場所へと移動する。
「・・・・・・助かったよ。ソウメイ君」
「気にすんな。でも、何であんなに必死だったんだ？お前にしては珍しいよな」
「ああ。さっきも言った通り、君らにとって彼女の存在は必要なんだよ」
「君ら？僕らじゃなくて？」
俺がそう質問すると、隼人は　にこっと笑って前を向いた。いや、答えになってないから。
そこで俺は思い出す。そういえば、思わずさっき仲間って言ってしまった。そういう言い方は気に入らなかったのに・・・・・・。もしかしたら隼人はそれが狙いだったのかもしれない。だとすれば何と見透かした奴だろう。
「隼人」

東先輩が言うと
「分かってるよ。もうついたね」
と、簡単に答えてから外に出た。今の言葉で何が分かったのだろう・・・・・・。
そう思ったが、とりあえず俺は隼人に次いで車を出た。

俺達が来たのは例のダンスクラブのビル。警察の出入りが見られるが俺達がそんなに気にする事は無い。
「ここに海馬達を集めてるんだよな？」
「いや、タダシ君がここにいるというのは分かっているんだけど、他の人は偶然集まったらしい」
「偶然？」
「いや、多分偶然じゃないんだろうけど」
そう言って隼人は階段を黙々と上り始めた。俺も続いて上っていく。
ここで、この間隼人がみんなの前で言っていたことを紹介しておくべきかもしれない。隼人も俺と話す気は無いようだし。

ターニング・ポイントとは、回転の能力らしい。それは脳の回転力でもある。だから誰かの予想をはずすほどの「転機（ターニング・ポイント）」を持っているのだ。そして、彼女の場合は動きにもその能力が加算され、ダンスクラブに所属していた事から、軸や運動神経がしっかりしている。だからあそこまでの風が起こせるのだ。これはとても貴重なタイプらしい。ターニング・ポイントはどちらかと言えば頭脳タイプ・・・発想力やＩＱに代表される「知能指数」が高くなるらしい。が、それと同時に常盤雅は攻撃型に転換されている。そう言えばターニング・ポイントという言葉には「転換点」という意味があった。だからこそ、隼人は研究材料として彼女を仲間に引き入れたかったのだろう。

と、そこで5階に到着。その階にある「休憩所」に海馬はいるらしい。
「・・・・・・ん？」
「どうしたんだい？ソウメイ君」
「いや・・・・・・何か妙な空気が流れている」
「妙な空気？」

そこまでで、休憩所に到着すると
「嘉島！」
と海馬が走ってきて俺を盾にするように後ろにすがり付いてきた。
そしてそれを追って来た虎郷と音河が
「どきなさい。貴方もろとも突き刺すわよ」
「それは女子の敵だよ！」
と、何とも物騒な発言をした。

「えーっと・・・・・・・」
俺はとりあえず隼人を見る。
「・・・・・・」
隼人は黙って肩を竦めた。

26 ―Solicitation―（後書き）

僕らに出来る事を捜しましょう。被災者側の方々がこれを読んでいる可能性はきわめて低いですが、悲観的にならずに、一日でも長く生きられるように前を見据えていてください。明日は絶対に来ます。

27－RED　TAIL－（前書き）

略。

パソコンの調子が悪いので、文章ミスは多めに見てください。

27－RED　TAIL－

まずは、少し前の話に戻る事としよう。

海馬と常盤と虎郷と音河が、何らかの「偶然」で集まったらしい。

「あら、偶然ね」

「・・・・・・王城が集めたのか？」

海馬が虎郷に訊くと

「いいや。隼人は何も言わなかったから好きなように動いてみたよ」

音河が代わりに返事した。

「・・・・・・くっそ」

「あの、皆さん」

「どうしたの？雅ちゃん」

音河が言う。

「この間はありがとうございました！」

「気にしなくていいわよ。私は頑張っていないから」

「そんなことありません。正先輩から聞いてますよ。同級生の中で、各パーツ全てが美しいって」

虎郷の動きが止まる。

「馬鹿！いきなり何言っ――」

「ちょっと待って、あの、え？」

珍しく虎郷が狼狽える。

「音河さんのことも聞いてますよ。美人だけど、すでに相手が居る人だって」

「は・・・ぁ？」

音河の声が裏返る。

「雅！ちょっと黙っ――」

「えっと、海馬君のそのキャラにはなれてるんだけど・・・・・・・」
音河が言いながら動きを早める。
「雅ちゃんは・・・・・・それでいいの？」
「はい？」
「自分の彼氏が色んな女子のこと誑(たぶら)かしてもいいの？」
「はい」
常盤は真っ直ぐ答えた。
「え、だってそれって当然ですよね？男子はそういうものなんでしょう？先輩が言ってました」
「いや・・・・・・あの・・・・・・・」
海馬があとずさる。

「海馬君、そこにそのまま立って」
「エイム・ノート、準備用意」
「ま、待った！！」

以降が今の現状である。
とりあえず説得に成功して、2人の怒りを鎮火できた。めでたしめでたし。
「まぁ、洗脳作業ってのはいただけないな、海馬」
「おいおい、そんな言い方・・・・・・」
女子2人の怒りの目線が海馬を睨む。
「そうですよねー」
棒読み口調で海馬が答えた。
「それはそうと隼人、どうしてココに来たの？」
音河が隼人に訊いた。
「ああ、レッドテイルの奥の方が分かったんだよ。これで海馬の言っていた事を証明できる」

さぁて。またまた彼の推理タイムです。

「『ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ』というのは、彼らのような部隊メンバーのことだった。あの爆弾を作った人間達だね。彼らは見えないところで色んな事件を起こしていたようだけど・・・・・まぁ。それはそれとしてだ。僕が最後まで持っていた疑問は海馬が何で「レッドテイル」を知っていたのかということさ」

「で、何で何だ？」

「彼も言っていただろう？彼は「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」は知らなかったんだよ」

「はぁ？」

隼人はそこで快活に笑った。

「君は本当にいい反応だよ。僕がバラエティ番組を作ったら君にぜひとも、ゲストになってほしいもんだ」

とそう言ってさらに笑う。うん、今日の隼人はとても気分がよさそうだ。

「で、王城君。一体何のことを言っているのか私にはさっぱりなのだけれど」

「うん。だから、紙が必要だよね。彼が「レッドテイル」を知っていながら知らなかった事を」

と、そこにあった紙ナプキンを取り出して、自分の万年筆を取り出した。

「もう一度言いながら書こう。

海馬君は「レッドテイル」を知っていた。でも、「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」を知らなかったのさ」

カタカナでレッドテイルと書いて、アルファベットでＲＥＡＤ　ＴＡＬＥと書いた。

「どういう意味だ？」

「実は面白い記述をネットで見つけたよ」

そう言って今度は別の紙を取り出した。
『この間、颯爽と街の中心街に現れてヒップホップ系のダンスを踊っている人を見かけた。周りには数人いたがその時友達になったように見受けられる。周りの人に聞いてみると、そのこは、ハンチング帽をかぶっているため男の子のような印象を受けるが、どうやら女の子らしい。たまにこの辺りに現れる。彼女が始めて現れたとき、日本人とは思えない、純粋な赤色を髪の毛を、ポニーテールでまとめている少女だったらしい。彼女の事を知っているストリートダンサーによると、彼女は通称こう呼ばれている』
そこで隼人は1度口を動かすのをやめて、ナプキンに文字を書いた。
そして言った。

「ＲＥＤ　ＴＡＩＬ」

「赤い色の・・・・・・ポニーテール」
俺には心当たりが有った。というか、答えは目の前にあった。

「そう。彼は、ストリートダンサーのレッドテイルを知っていたんだよ。そこに偶然僕らの求めるべきレッドテイルが居たんだよ。そうだろう？海馬、そして」

隼人はそう言って、２人を見た。

「ＲＥＤＴＡＩＬ・・・・・・常盤雅」
「ご名答です」
「正解」
・・・・・・。
「あのさ、せっかく溜めたんだからもうちょっと気のある答えかた

してくれる？」
隼人が無理難題ながら、正論をぶつける。うん、肯定が早すぎるな。

「・・・・・その通りです」
「まさかばれるとはな」
「今さらしても遅いよ！！！」
隼人は正当ギレで叫ぶ。

つまり、海馬が知っていた「トキワミヤビ」というREDTAILが居た場所に、偶然「READ TALE」がいたということ。簡単に言えばそれだけだ。

「依頼したのは、ミヤビ君だよね？」
「はい。私の気に入っている異名を使っている偽物がいたので。ネット内で有名だった探偵に頼んでみたら、私の危険まで助けていただいて、本当に感謝しています。」
「いや、別に気にしなくていいよ」
俺はそう言って少し考える。
ていうか、俺達がその依頼を受けなかったら海馬は行かなかったわけで、だから結局事件は起こらなかったのでは？

ま、でもそれは言わぬが花と言う事だろう。
こうして、新しい仲間・・・後輩という立場の「常盤雅」という仲間を手に入れた俺達。ようやく仲間という物をしっかり認識でき始めた俺。このまま、俺達が関わってしまった事件や、関わろうとしていく事件でも、隼人が居れば何とかなるんだろうと。

少なくとも俺はそう思っていた。

27―RED　TAIL―（後書き）

投稿に関しては運任せです。

後日談ー探偵ー（前書き）

今回で、４章は終わりです。コメディー仕様ですが、これはそのまま５章に続きます。

今回の章の最初の方を読んで復習しておくと５章を楽しめます。

後日談ー探偵ー

それは、１２月１６日金曜日。週末に突入と言う事で、休みがあることにより少しテンションが上がっていたときの出来事だった。
「こんにちわ。嘉島さん」
そこにやってきたのは常盤雅だった。リュックサックに荷物を入れて、家の前に居た。
「・・・・・・何やってんだ？」
「今日からココに来ていいって、王城さんから言われました」
「あぁ・・・そうなのか」
「でも家に誰も居なかったようで・・・・・・嘉島さんに来ていただいて助かりました」
「え？隼人帰ってないのか？」
俺より先に（というかアイツは誰よりも先に）教室を出て行ったのだが・・・。
まぁそれよりも先に彼女を家にいれることが先決だろう。
俺は鍵を取り出して玄関の扉の鍵穴に差し込――――。
「・・・・・・」
「どうかしたんですか？」
「泥棒だな」
「え・・・？」
「手伝ってもらうぞ」
俺は扉に触れた。
「・・・・・・ただの空き巣・・・・・・じゃないかもしれない。明らかに目的を持っていそうだ」
「分かるんですか？」
「俺の能力言ってなかったか？俺は物や人の記憶から情報を収集する。レンズとかだったらそこから見えていた景色とかな」
「流石探偵ですね」

「あと、物体変形とかな。さて、じゃあ俺が扉壊したら真っ直ぐ行ってくれ」
「了解です」
敬礼のように手を頭に掲げて言った。

「・・・行くぞ」
俺は左手を構えた。
「驚くよりも先に行ってくれよ？」
「はい」
俺は左手で思い切り扉を叩く。
バキッ！
という音を立てて、扉が吹っ飛ぶ。
その瞬間に常盤がその脇を通って、目の前に居た空き巣に到達する。
それで約2秒。何かを言う暇も無く、空き巣犯は捕まった。
「くっそ！」
「何とかなりましたね」
「あぁ」
安心しきっていると
「おりゃぁ！」
と、空き巣犯は暴れた。そこで思い出す。そういえば虎郷は強いのだ。だから、小さな体躯の女子が勢いのみで倒した程度では意味が無いのだ。最近の女子対象はギターという飛び道具を持った女子と最強の女子だったから、普通の女子の強さを理解できていなかった。
結果、立場逆転。常盤が押し倒される。
「くッ・・・・・・！」
「常盤！」
即座、俺は空き巣犯を突き飛ばす。
「大丈夫か？とき――」

「邪魔なんだよ！！」
突き飛ばされた空き巣犯はすぐに身を翻して、俺を攻撃の対象にしてきた。
「ぐあッ！」
相手の方が体ががっしりしていて、明らかに年上。勝ち目は当然無い。
体を倒された。そしてそのまま首に向かって手を伸ばされる。
「か・・・・・・」
息を強制停止。さらに呼吸活動も弱くなる。
「やめて！」
常盤がその空き巣犯に突っかかる。
「どけ！」
左手を俺の首から外して、常盤を突き飛ばす。
そして俺の腹を殴ってから立ち上がる。うむ、肺呼吸不能。皮膚呼吸に切り替えれたらなぁ。
「まさかここまで簡単にいくとはなぁ・・・・・・」
と空き巣犯は言って、ナイフを取り出した。
「死ね」
言って常盤にナイフを向ける。
そして、そのまま真っ直ぐ走って、動けそうにない常盤に突っ込む。
そして――。

ザシュゥ！

「・・・痛え・・・・・・」
俺は取り敢えず、手のひらで受け止めた。
「か・・・嘉島さん」
「おいこら、ぶっ飛ばすからな」
「くっ！」

空き巣犯がナイフを引き戻そうと頑張る。
が、残念。ナイフは俺の手を貫通して、柄の直前部分まで突き刺さっている。ので、俺はそのまま右手で空き巣犯の手を掴んだ。よって、空き巣犯はそこから動けない。
「左手で掴めばナイフ変形できたのに・・・・・・」
自分で愚痴を言いながら、俺は左手の拳を固めた。
「ま、待て！俺は命令されて――」
「んなこと知るか！」
そのまま俺は左手を顔面に向かってぶつけた。
「が！」
ナイフは俺の右手の平に残ったまま、空き巣犯はぶっ飛んだ。
そして、リビングの扉に頭をぶつけるとそのまま気絶した。

「大丈夫なんですか？」
空き巣犯は取り敢えず、しばってそこにおいておいた。後で隼人と一緒に取調べといこう（ちなみに一般人がそんな事すると捕まるよ。良い子はまねしないでね）。
で、俺の右手を見て常盤が言った。
「あぁ。左手で皮膚を変形させて無理やり止めるよ」
「それはダメです。そういう無理な方法は後で後悔します」
「え・・・・・・あ、あぁ。分かったよ。じゃあ包帯取ってきてくれ。多分台所の近くに救急箱があるから」
「分かりました」
そう言って立ち上がった。それにしても真面目な女子だな。
すぐに包帯を取って帰ってきた。
「血・・・止まりますかね？」
「いや、だから皮膚で――」
「ダメです。奏明さんはもうちょっとしっかりしてください」

「分かったよ・・・ってあれ？呼び方変えた？」
「はい。助けていただいたので、精一杯の感謝の印です」
「・・・・・そうか」
それで感謝が表せれると言うのも微妙だが、悪い気はしない。
「奏明さんも私のことは雅でいいですよ」
「そうか。俺もそっちの方が楽だ」
別に恋愛感情ではないので、それでもいいだろう。向こうもそんな気は無いはず。

そして、ナイフを抜いて（当然痛い）しばらくタオルで血を止めた。まぁ、こっそり少しだけ皮膚で絡めようとしたら、ばれて怒られてしまった。

しかし、作業に無駄が無い。もしかしたら虎郷より家庭的かもしれない。器用だなぁと思う。

「それにしても、アレはなんだったんだろうな？」
「さぁ。私としたは死ななかっただけ助かったと思います」
「それもそうだな」
「・・・・・・あ」
雅が俺の右手を掴んだ。
「また出血ですね」
「そりゃ止まらないだろう。仕方ないさ。でもしばらくしたら治まるよ」
「そうですね。では少しの間押さえときます」

で、そこで登場するのが
「や、ソウメイ君」
「あら、早いのね嘉島君」
「やっほー、雅ちゃん」

「あぁ、きてたのか雅」

で、４人停止。

理由は俺の所為かな？雅の所為かな？

まあ、どちらにせよ2人とも暴れた所為で服が乱れていて、なおかつ雅は左手で俺の右手を掴んでいることだろう。

・・・・・・危険の予感。修羅場の危険。俺の本能が言っている。

「いや、僕は何ともいえないけど、ほら、タダシ君の相手だよ？」

「何をしているのか分からないわ。意味が分からない。何をしていたの？2人して。いや、言わないで」

「あー。嘉島君は手が早いね」

「おい、嘉島。どういうつもりだ」

というか、俺だけ責められている。

「いや、奏明さんは何も――」

「奏明？」

４人全員反応。

二度目の停止。

「・・・うん、庇えられないよ、ミヤビ君」

「常盤。どういうつもりかちゃんと説明しなさい」

「雅ちゃん・・・どうなってるの？」

「おい、雅。いつの間にそんな事になったんだ」

と、雅が今度は責められる。

「いや、雅も何もしてな――」

あ、墓穴掘った。

三度目の停止。

「おい、こら、お前らどうなってんだ」
「ちょっと頭がパンクしそうよ」
「2人とも手が早いねー」
「・・・・・・殺す」

と、空き巣犯の事を忘れて俺達が責められると言う事態。しかも雅は俺の手を放さない。

せめてもの救いは、音河と雅が笑っていてくれることだった。

俺としては命の危険を感じてるが。

後日談ー探偵ー（後書き）

第5章「失って気付くこの世界」

地球が温暖化になってから僕らは行動する。地震がおきてから行動する。指令があってから行動する。自立をなくしているのに気付いていない。

僕らが物をなくしたとき、僕らはなくしてからようやく気付いて、それから行動するのだ。それは遅いのか。遅くないのか。

01 ―王城―（前書き）

さって・・・面白い世界で行こうか。

01－王城－

王城隼人は世界有数の財閥グループである、王城グループの人間である。それは気っても切れない関係にある。王城はそれが嫌だった。

金持ちであるということや上流階級の人間である事だけで、媚びへつらう大人たちや妙な目で見る同級生。あるいは、それを迫害しようという人間達。自分が王城グループの人間であるということだけで決まってしまった未来。だから、彼は同意見を持った虎郷を助け、同じ境遇に居た音河を助けた。全ては王城が王城であったが為だろう。

ともかく。

彼はそんな王城を嫌っている。だから、彼は堂々と宣言したのだ。「王城を越える」と。それは、王城グループの前でもそういったし、音河財閥の前でもそう言っていた。そして何より俺を引き入れるために彼は「君を利用する」と宣言した。それと引き換えに俺は願いを叶えてもらう約束をしたのだ。

隼　に　人　と書いて　隼人　。

彼は自分の名前をつけてくれた事だけには親に感謝している。彼はその由来を聞いたときにそう思った。全てを越えようという意識がそこにはあるのだ。

だから彼は手に入れた。最強の能力を。「シンキング・キング」というアクターを。

それは、情報があれば何でもできる能力。目的のために手段を見つけられる能力。もちろん穴はある。だがそれでも彼の力は異常なのだ。

そもそも彼がその能力を手に入れたのは、迫害を受けた時だったそうだ。
僕は一体何をすればいいのか。どうすればいいのか。何が足りないのか。何がおかしいのか。
僕は一体何が悪いのか。何をしてきたのか。どこにあるのか。いつ見つけるのか。
決して見つからないのか。どうして見つからないのか。いつもそこにあるのか。

何もしていないのか。

そういう希望や願望、欲望とは違う別の何か。意識や考えじゃない。
それは絶望から生まれたのだろう。

彼は自分が王城として生まれてきた事は、嫌だけど悪くは無いと言っていた。
「神様は生まれてくる場所を選ぶ。だから僕には選ぶ権利は無い。いや、それは人間全てに適応する事実なんだけど」
いつか隼人はそう言っていた。
「だとすればこれは運命なのさ。僕は王城を越えるために生まれてきたのさ。その権利を与えてくれた事を僕は光栄に思うよ。そして、僕をそういう風に育ててくれた両親にも感謝している」

神様から与えられた使命(アクター)。迫害から逃れるために導き出した絶望(アクター)。自分の走るべき運命(アクター)。

それを彼は神様から与えられた権利といっていた。

「あと、君みたいな人間に会えたことかな。僕はとてもいい気分だよ。君みたいなのには君だけだったから」

そういわれて俺は何と答えたろう。

照れくさくて笑った気もする。馬鹿か、と一蹴した気がする。或いは同意したかもしれない。

そんないつか忘れるようなことはどうでもいいのだ。

この世界が始まったのは12月16日金曜日

それから約一週間後の12月24日土曜日。クリスマスイブの夜だった。

王城グループ本社の屋上、ホワイトクリスマスの雪だ。電灯は明るくは無い。

風が強く、雪が凍てついて痛いが俺達はそこに立っていた。

「隼人・・・・・・・腕引きちぎってでも帰るぞ」

「奏明・・・・・・君をそう呼ぶようなときがくるとは思わなかったよ」

その言葉が終わると、待ち受けていたように雪が止む。

そして運命の乱戦が始まってしまったのだった。

俺達は失ってから気づくんだ。この世界の存在に。

01―王城―（後書き）

いい加減に僕も真面目に解説とかしようかな。

０２ー勃発ー

さて、話を突然戻す。
１２月１６日金曜日の出来事だ。
突然侵入してきた空き巣犯を捕まえて、王城たちが帰ってきてから話を開始する事にした。
そのときすったもんだ有った事はスルーしてみた。
「貴方は一体何者なのかしら」
虎郷がまず質問した。ちなみに海馬と雅は「会議だ。ちょっとこい」と海馬に言われて雅の部屋の整理を始めつつおそらく喧嘩中。誰の所為かといえばまあ俺なんだけど。
「・・・・・・」
口を固く閉ざしている。
「もう一度気絶してもらいましょうか」
と虎郷が言って拳を構えた。
「た、タンマ！」
男は危険を感じたのか叫んで、手を縛られているため足だけで後ろに下がる。
「俺は頼まれたんだって！ここで盗みをしろって！」
「嘘だね」
隼人が即座に言った。
「明らかに３０分くらいはココにいたと思われる。その証拠に荒らされていた部分は多いのにも拘らず、何一つ盗まれていない」
「やっぱりもう一度気絶させましょうか」
「わ、分かったよ！本当のこと言うよ！」
どうやら殺意におびえたようで、すぐにそう言った。

「頼まれたのは本当だ！ここに侵入しろって！そしたら誰か帰ってくるから、そいつを傷付けろって！最悪殺してもかまわないって！」
「そんな・・・・・・」
音河が驚く。だが、それよりも気になる。
「・・・・・・それは誰による指令だ？」
「・・・・・・・・」
「じゃあ、気絶させるとしましょうか」
「・・・・・・・・・それだけは・・・・・・言えない」
今度は恐怖に屈する事は無かった――いや、それ以上の恐怖があったようだ。それは決意と言うより、逃避に見える。
「・・・・・・響花。龍兵衛さんを呼んでくれ」
「分かったよ」
響花は携帯電話を取って、警察へと電話を掛けた。

すぐに警察が来て、空き巣犯を連行していった。

「どういうことなのかな、隼人」
「うん・・・・・・。多分、誰に指令されたのかばらしたら殺すとか、依頼者に言われていたのかもね」
「にしても、アイツの殺意も凄かったぜ？俺、殺されると思ったよ。元軍人なんじゃないのか？」
「例えそうだとしても私たちにどうこう出来る話ではないわ。警察の取調べの結果で何か分かるでしょう」
虎郷がそう言ってこの話は終わった。

「・・・・・あ。そういえば隼人はどこ行ってたんだ？俺より早く出て行ったじゃないか」
「ん？ああ。寄り道してたのさ」
「寄り道？どこにさ」
「工具店。まぁ結局無かったけどさ・・・・・・」

そしてそこまで言って隼人は少し思案顔になった。
彼があの顔をしたときたいてい事件開始の合図なんだけど。まぁとりあえず放置しておこう。
明日になれば事態は変わるだろう。そう思っていた。
次の日俺達は、とうとう自分の巻き込まれた状態を知った。

０３ー事故ー（前書き）

目の前での事故は、とめることは出来ない。

03ー事故ー

次の日。12月17日土曜日。
俺は虎郷と一緒に警察に行く事にした。
だが、俺達が龍兵衛さんから聞いた情報は以下だった。

「釈放だよ」
「・・・しゃ・・・・・・・釈放!?」
それって・・・・・・・?
「え・・・話は訊けたんですか?」
俺は取り敢えず質問した。
が。
「いいや」
と、首を横に振って
「何度も質問したが何一つ口を開かなかった」
と続けた。
「でも、どうして釈放なんですか?警察は48時間は拘留できるし、嘉島君たちを襲った事は間違いないのだから、送検は間違いないし、起訴されてもおかしくは無い状態です」
「ああ。俺も上司にそう掛け合った。が、どうやら上司じゃないようだ」
「じょ・・・上司じゃない?」
「もっと上だ」
もっと上・・・・・・警視総監とかか?
「或いは・・・・・・官房長とか?」
「いやいや・・・それは無いだろう」

俺と虎郷は取り敢えず冗談レベルで話していたが、
「有り得ん話ではない」
と龍兵衛さんに言われて少し顔を引きつらせる結果になった。
「ともかく、俺は1人で勝手に捜査する。何か分かったら、隼人の元へ連絡する」
と龍兵衛さんが言って車に乗り込み警察署から姿を消した。

「勝手にやっていいのかな？」
「いいはずが無いでしょうね。それより問題は王城君よ」
「は、隼人？」
どうしてここで隼人の名前が出てくるんだ？
「彼・・・・・・何か隠してるわ」
「何で？」
「今日も彼はいつの間にか何処かへ行っていた。まぁ、今回の出来事とは関係なさそうだけれど」
「ふーん・・・」
いや、しかし俺はアイツから何も感じなかった。俺の右手も感覚も普通だった。
だとすれば虎郷の勘違いである確率のほうが高いけれど・・・・・・。
「・・・・く・・・・」
歩いている途中に急に虎郷がうなだれた。
「どうした？虎郷・・・・！」
まさか・・・・・・見え始めたのだろうか。未来が。
「・・・・・・・そ・・・・そんな・・・・・・・」
そう呟くと虎郷は走り出した。俺の手を掴んで。
「お、ぐ、わぁ！」
無理やりな上急に俺の腕を引っ張ったのでそんなリアクションになってしまった。

「ど、どうしたんだよ！」
「響花が・・・・・・・」
「音河？」
「・・・・・・危ないわ。事故に遭う。結果は見えてないけれど」
「まじかよ・・・・・・」
しかしながら俺は虎郷より明らかに遅いので、このまま手を引かれたまま走るしかなかった。

俺達は5分と経たずに家に帰宅する事に成功した。

「音河！」
「うぉわ！ビックリした！」
中にいたのは海馬だった。
「どうしたんだ？」
「響花はどこ？」
「アイツはさっき出て行ったぜ？何か隼人が呼び出したらしい」
「・・・・・・王城君が？」
虎郷は動きを一瞬止めたが、また走り出した。

「どこに居るのか分かるのか？」
「貴方の右手に頼るわ！」
「嘉島、虎郷！何か手伝おうか？」
「ええ。響花を捜して！」
海馬も参加して、すぐに捜索を始めた。

だが見つけるのにそんなに時間が掛かる事は無かった。
俺達の隣を通り過ぎて行った救急車。

それは交差点に到着した。

そこに倒れていたのは、間違いなく音河だった。

03 ー事故ー（後書き）

例えそれが、自分の彼女だったとしても。

それが一生トラウマになっても。

それを隠しとおそうと別の嘘をついても。

答えは変わらない。

０４ー最悪ー（前書き）

最も悪いと書いて最悪。

でも、最悪はきっと無いんだと思う。

０４ー最悪ー

音河響花は命に別状は無かったが、今のところ絶対安静らしい。ので、取り敢えずは病室で、何があったのかを訊く事にした。海馬は音河のことは俺に任せるようで、ロビーの電話ボックス前に突っ立っている。今日は本来休みの日なので、入院患者以外の人間は居ない。よって、海馬は１人でそこに居る。虎郷は隼人に連絡するとのことで現在ここには居ない。

「何があったんだ？音河」
「分からない・・・・・・・。でも突き飛ばされたのは覚えてる」
「つ・・・突き飛ばされた？」
それは・・・・・・事故ではなくて
「殺人事件・・・・・・・」
「待ってよ、私死んでないから」
「あ、あぁゴメン」
それにしても・・・・・・だとすれば何が起こってるんだ？
こういうのは考える専門であるはずの隼人の仕事なんだけどな。
あ、隼人といえば。
「そういえば、隼人に呼ばれたらしいが、一体何のようだったんだ？」
「さぁ・・・・・私にも分からない。でも朝から居なかったから、気になってるんだよね」
「そうか。じゃあ本人に聞くしか方法は無いわけだ――」
ガラッ！
扉が開いた。
「響花・・・・・・」

そこにいたのは隼人だった。
「ど、どうして・・・・・・」
「隼人。お前が音河を呼んで、それでお前のところに行こうとしていたらしいぜ？」
「そりゃそうだろう。僕が呼んだんだから」
隼人は暗い顔で言った。
「・・・・・・私は大丈夫だよ。それより、私をこんな風にした犯人、絶対に見つけてね」
「ああ。分かってるよ。ゴメン、ちょっとヒスイ君が話したいことがあるらしいんだ」
「うん。分かった」
隼人は部屋を出た。
「悪い、俺も一緒に行ってくる」
「うん。じゃ、私は寝ることにする」
そう言ってベッドに横になって、すぐさま寝息を立て始めた。

「・・・・・・隼人。朝からどこに行ってたんだ？」
「昨日探していた工具をね。まぁ結局見つからなかったんだけど」
・・・・・・心に変化なし。やっぱり嘘はついていなさそうだ。

「ヒスイ君。話って何？」
「あなた・・・・・・何か隠しているわね？」
「隠す？・・・・・・って、何を？」
「とぼけないで」
虎郷は強く言った。

「・・・とぼけるも何も、そんなことしてたらソウメイ君が気付くよ」

「貴方がジャンケンで嘉島君に勝てることは知っているわ。ということは貴方は彼に心を読ませない方法も知っているの」
「・・・・・・」
「あなた、昨日からおかしいわよ。あの空き巣犯に心当たりがあるんじゃないの？」
「・・・・・・無いよ」
「嘘つかないで。正直に答えて」
「・・・・・・突っ込んでくるなよ」
虎郷の発言にそう言って隼人はその場を離れて、逃げようとする。
「響花と話をしないの？」
「・・・・・・」
「ほら、既におかしいじゃない。普通は話くらいしていくでしょう。貴方にはそれ以上に大事な事があるということでしょう？」
「・・・・・・」
「ちゃんと話して。私達は――」
「同じことを二度言わせるな」
そう言って隼人は虎郷の首を掴む。
殺意に満ちた目で。
憎悪を帯びた目で。
それが、仲間に対する――少なくとも仲間と認めている相手に対する目なのだろうか。
「突っ込んでくるな」
そう言って、隼人はまたその場を離れようとした。
が、そこで1度止まり、
「・・・心配するな。誰もこれ以上傷つかない。余計な事さえしなければ・・・・・・だ」
とこちらを向いた。
「これは僕の問題だ。君らが関わるべきことじゃない。嘉島、君なら分かるだろう？」

珍しく俺を普通に呼んでそう言って、ようやくそこを離れ――。

『緊急連絡！緊急連絡！ロビーの前の電話ボックスに横たわった学生と思わしき男性を発見。ナイフによる出血が見られます。速やかに緊急手術を始めなければならない状態です。即刻集合してください。繰り返します、ロビーの前の――』

「・・・・・・・」

え？は？ロビーの前？電話ボックス？

「は？」

０４ー最悪ー（後書き）

最悪と気付いた時には、それはもう考えられてないから。

つまり、最悪と気付く前に最悪は終わっている。

０５ー視線ー（前書き）

目ってのはどこを見てんのかね？

未来を見ろとか過去を見ろとか現実を見ろとか。

でも今、貴方たちが何を見ているかは分かるよ。

05 ―視線―

それから夜まで、俺と虎郷は病院に居た。

運良く一命を取り留めた海馬は、それでも気を緩められる状態ではないらしい。

隼人はあのアナウンスを聴いたら、先ほどまでの冷静さが嘘のような顔つきになり、走って病院を出て、車に乗った。ということは東先輩も一緒と考えていいだろう。

また音河は明日には退院できるらしいので、今は動く事の出来る状態にある。

だがそうは言っても俺達に何か出来る事なんて無いので今はこうして動く事も出来ず、海馬の病室前のソファーに座って、人を待っている。音河は退院の準備中。

「何で・・・・・・こんなことに・・・・・・」

「私も海馬君のあんな未来は見えてなかった・・・・・・。王城君への怒りで周りを見ていなかったのかもしれないわね」

「・・・隼人か・・・・・・」

確かに虎郷の言うとおり、アイツの行動はおかしい点が多い。しかし、それでもアイツが事件に関係しているとは限らないわけだが、アイツが事件を知っているという可能性は高い。

「虎郷さん！奏明さん！」

叫び声が聞こえて俺はそっちを振り向く。

「雅。叫ぶな。一応病院でしかも夜だ」

「あ、すみません」

待ち人は雅だった。
「今までどこに行ってたんだ？」
「一昨日のことが気になって、私なりに手がかりを探していたんです」
「一昨日？・・・あ」
時計を見るとてっぺん回って、次の日になっていた。
俺と虎郷が警察署を訪れたのが１０時くらい。それから話を聞いて、警察署を出たのが１時くらい。
音河の事故があったのもそのくらいだから、それはつまり、２時くらいから病院に居る事になる。
「・・・とにかく、雅ちゃんは海馬君のところに行ってあげて」
「分かりました」
雅は病室に入った。

「俺達はもしかして・・・・・・」
「間違いなく狙われているわね。何者かに」
「それを知りたいわけだけど、そのためには隼人が必要だけど」
「その彼が非協力的」
「万事休すか」
「断崖絶壁ね」
いまいち緊張感も無く話していると、

「さっさと退院するぞ」
と海馬が部屋から出てきた。
「か、海馬？大丈夫なのか？」
「あぁ。予想外の事態に俺の能力が化学反応を起こした」
「予想外の事態？」
「説明するつもりは無いから、想像しろ。それが答えだ」
「で、どうしてそんな急いでいるのかしら」
「雅が見てきたことによれば、隼人は東先輩と一緒に行動している

ようだ。もし隼人が今回の事件に関わってるんだとしたら、東先輩が何か知っていると見て間違いないだろう。そしてアイツが今居る場所と言えば・・・・・・」
「ちょ、ちょっと待てよ！」
俺はそこで思考を止める。
音河もちょうどやってきた。

「お前ら・・・・・・隼人を疑ってんのかよ」
「そりゃそうだ。今一番怪しいのはあいつだからな」
「そんな・・・・・・おかしいよな？音河」
「・・・・・・」
その音河は黙っている。
「お、音河？」
「私を呼んだのは隼人だった。もし、私たちを故意に狙う連中が居るんだとすれば、私を呼び出した隼人は・・・・・・」
「そ、そんな・・・お前ら・・・・・・」
仲間じゃなかったのかよ！
そう叫びたかった。
だが出来なかった。別に、夜だったり病院だったりとかそう言う理由じゃない。

俺だけは仲間と見ていない・・・・・少なくとも俺は皆を仲間と呼んでいないから。
だから俺はそう言うことはできないのだ。

「・・・いずれにせよ、早いとこ退院しなければなりませんね」
「何でなんだ？今すぐじゃないとダメな理由が――」
「まだ分からないのか？今、この現状で東先輩が居るところはＷＲだけだろう」
「だから？」

「東先輩が共犯だとすれば、あの人を傷付けるにはそれ以外の方法はない」
「・・・・・・まさか！」
海馬は頷いた。
「今日元さんだ。刑務所に居るあの人を狙うにはそれ以外の方法はない」

05 ―視線―（後書き）

画面。

06ー継承ー

「ん？何だ、お前ら。急ぎの用か？」
と、ＷＲで気の抜けた返事で返してきたのは東　諒その人だった。

「東先輩。訊きたい事が――」
「隼人のことだな。いいだろう」
見透かしたように東先輩は言うと、椅子を出現させて座り込んだ。
「何かあったらしいな。俺も聞きたい」
と、何も知らない今日元さんも話に参加して来た。
「音河と海馬が狙われた。それらに隼人と・・・・・・東先輩。あんたが関わっているかもしれない。俺達はそう考えている」
「そうだな。俺と隼人は関わっている。が、それだけじゃないな。あいつらは、嘉島と常盤も狙ったはずだ」
「・・・・・あれもか・・・・・・」
「それが、アイツらのやり方だったわけか。やれやれ・・・・・・・どおりで隼人が・・・・・・そうか」
「どういうことだ？」
「それはこっちの言いたいことだな」
東先輩はそう言って俺を睨む。

「アイツがこうなったのは仕方が無い。でも、アイツは不器用なりにヒントを出していたと思うぜ。助けてほしかったのかどうかは分からんねぇけど、少なくとも後のことは嘉島や虎郷、音河、海馬、常盤・・・・・・お前ら全員に託したはずだ。だとすれば、アイツは間違いなく、ヒントは嘉島・・・・・・お前に多く与えられていたはずだ」
「ひ・・・ヒント？」

何言ってんだ？
俺に・・・・・・アイツが・・・・・・助ける？
「何言ってんだ？東先輩」
心の中で呟いた事を今度は口に出した。
「分からないならそれまでだ。だけど、１つ忘れないでほしいのは、アイツはお前らを守るためにお前らを捨てたんだ」
「捨てた・・・・・・！？」
何だ、一体何が起こってるんだ？
いかん・・・・・・脳みそキャリーオーバーだ。
「捨てたって・・・・・・どういうことでしょうか？」
俺の代わりに虎郷が質問する。
「そのままの意味さ。少なくともこれから隼人はお前らの前に現れない」
「どこにそんな根拠があるってんだ？」
海馬がそう質問すると
「さぁな」
と東先輩は答えた。
「さぁな・・・・・・って、隼人と一緒にいたんですよね？何か知っているんでしょ？」
音河が珍しく怒る様な言い方で質問した。
「何か知っているからってそれが答えではないだろう？答えは必ずしも目の前には無い」
「何を言ってるんでしょうか？ハッキリしてください」
東先輩の要領を得ない発言に雅が言った。
「威勢がいいな、新入り。そうだな・・・・・・今日元、テレビ出してくれ」
「まぁ、いいけど・・・・・・？」
首を捻りつつも今日元さんはテレビを出した。こういう大型な物は今日元さんに権限がある。椅子や机くらいは俺達でも意識的に出現させられるのだが、バーカウンターや飲み物は基本的に今日元さ

んの権限である。
閑話休題。
で、そのテレビの電源をつけると、緊急記者会見と書いてあった。
「・・・・・そんな・・・・・・！」
画面に映っていたのは隼人。
そこに書かれてあったのは「王城グループ　次期社長」というプレートがあった。
「何かの間違いだ！そんなはずないよ！だって隼人は――」
そう言って音河は叫ぶが、その声は当の本人、隼人によって打ち消される。

「僕は次期王城グループの社長を継ぐことをここに宣言します」

隼人は強い意志を持った目で言った。

07 ―保護―（前書き）

守る事。

今、僕らに大切な事です。人だけじゃなく地球を。身近だけじゃなく全てを。

07ー保護ー

俺はWRから意識を切り離して、すぐさま隼人の部屋へと駆け込んだ。

「・・・・・・！」

そこには、全ての荷物をまとめて、すっきりとした一室があった。段ボールが数個そのまま置かれてあり、他に異常は何も無かった。

「・・・・・・・・・」

それらを眺める。東先輩の考えどおりなら、隼人がここに核心に迫るものを置いてあるはずだ。

「・・・・・・あった」

一番奥にあった積まれた段ボールの上、そこに封筒が有った。

「嘉島」

後ろから声をかけられる。海馬だった。

「それ・・・・・隼人からか？」

「多分」

俺はそう答えてからリビングに行った。

俺と海馬と虎郷と音河と雅がそこには集まった。まぁ、東先輩がくるはずもないからココにはそのくらいしか居ないだろう。

「・・・・・・手紙・・・・・・・読むぞ」

暗黙の了解を受けて俺は読み始めた。

『これを読んでいるということは、まぁ、僕は王城を継いでいるこ

ろだろう。ははッ。こんな書きかたしたらまるで僕が死んだような感じだね。
僕は一応ソウメイ君にはヒントを出したつもりだったんだけど、彼は気付いていた無かったようだね。この手紙を書いているのは、今からミヤビ君をWRに引き入れる説得をしに行くって言えば分かると思う。彼女の「ターニング・ポイント」なら僕と同じくらいの頭脳を引き出す事が可能だろう。多分、この手紙を読むきっかけになった、東先輩に達したのは、ミヤビ君のおかげだろうからね。これから、意地でも今日元さんを説得しようと思う。
僕は結局のところ君らを裏切る形になってしまった。どういう結果かは分からないけど、推測できる限りは、君らに命の危険が迫ったか、この家が燃えたとか、君らをバラバラにしようと策略が入ったかのどれかだと思う。大丈夫、僕はそんなことを言い訳にするつもりは無い。だから、お願いだ。
僕に関わるのはやめてくれ。僕に関わってきたら、間違いなく君らは消されるだろう。ここでやめておけば、攻撃される事は無い。犯罪を犯してまで僕を次期後継者にさせようとしていた連中だ。口止めのために殺す事くらいわけないし、その犯罪ももみ消されるに決まっている。まぁ君らが死ぬわけは無いだろうけど。
この事件を追わないでくれ。もう僕からキッパリと関係をなくしてくれ。僕は君らの前には現れない。絶対に。これが僕の最後のわがままだ。

仲間を裏切る形になった事を、とても残念に思う』

「だとさ」
俺はそう言って、手紙を放り捨てた。そして、いつもの隼人のように天井を見上げて、蛍光灯を眺める。

「・・・・・・隼人」

音河は俯く。
「王城がねぇ・・・・・・」
海馬は自虐のように鼻で笑う。
「奏明さん。ヒントに心当たりは無いんですか？」
「・・・・・・あるよ。言われて気付いた」

あんなに必死になって雅を仲間にしようとした事や雅の存在を「僕らに必要」では無く「ソウメイ君達に必要」だって言っていた事・・・・・・。
それらは自分が王城を継がなければならない事を知らしていたのだ。

何より、隼人は「ＲＥＡＤ　ＴＡＬＥ」の事件のとき言っていた。
「最後くらいは手伝ってくれよ」
と。
彼が僕に対して言ったセリフ。
アレが間違いなく、彼なりの最後のヒントだったのだろう。

０７ー保護ー（後書き）

なんというか・・・・・。

実のところ、ガラじゃない。

０８ー団結ー（前書き）

一致団結より、瞬時団結のほうが格好いいよね！

僕だけだろうな。

０８ー団結ー

次の日、すなわち１２月１８日　日曜日。

丸一日部屋にこもって考えた。

そして次の日、月曜日。

俺は学校を休んだ。

が、皆が学校になかなか向かわないので全員一斉に向かうことにした。

「・・・・・・雅の制服姿って、何か絵になるな」

「ありがとうございます！」

と馬鹿みたいな会話（虎郷と海馬の睨み付き。今なら音河の微笑みも付いてくる！）をした後、家を出ようとしたが、

「そういや雅って何年生なんだ？」

「中学３年生です」

「・・・・・・へ？同級生なのか？」

「はい。そうですよ」

「何で敬語なんだ？」

「なんとなくですし、癖ですよ」

「そう・・・・・・なのか」

と少しそういう会話をして俺と海馬は別の道へと足を向けた。常盤は別の学校で音河は以前の学校には行けないので、虎郷と同じ学

校へ行っている。
道を分かれて、俺と海馬は歩く。
「っと、忘れ物した。俺取りに行ってくるから、先に行ってくれていいよ」
「いや。待とう。ここにいるから」
「いや、先に行っていいって」
「やっぱ付いていこう。何忘れたんだ？」
「いや、大丈夫だから」
「嘉島」
海馬は俺の発言と行動権を止める。というか止められた気がした。
「1人で抱え込むな。お前だけの問題じゃない。隼人は俺達全員で助けるんだ」
「・・・・・・海馬」
そりゃそうだ。
仲間だと思ってくれている彼らが、一日部屋にこもって考えた奴そう簡単にほうっておくはずが無い。俺が隼人を諦めてないと分かっていたらなおさらか。

そして俺と海馬は家に戻った。
「で、これからどうする？」
「出来れば音河には関わってもらわない方向にしたい。でも雅には協力してもらいたいな」
「なるほど・・・わかった聞いてみよう」
俺達は制服から私服に着替えてから行動を再開した。

と、そこで机の上の俺の携帯電話が震え始める。警察署だ。となれば・・・・・・。
「・・・・・・龍兵衛さんだ」
俺は海馬にそう告げると電話に出た。

「もしもし」
『頭脳探偵が王城を継ぐって事になってからアイツと連絡が付かない』
いきなり迫ってくるね。
「何かあったんですか？」
『情報探偵とロリ娘、頭脳探偵の女房や新型少年を襲った連中が分かった。やっぱり王城グループのメンバーだったようだな。その線で引っ張ろうとしたが、上から止められた。やっぱり今のところはむりそうだ』
「そう・・・ですか」
ていうか。
俺は情報探偵。雅がロリ娘。音河が頭脳探偵の女房。海馬が新型少年らしい。
『だが、1人が口走った情報によると、今回の事件が起きた理由がある。で、それについて話したいから今すぐに、警察署に来てくんねぇか？二度手間は面倒だからな』
「二度手間？」
『今。そこに来てんだよ。失恋少女と探偵女房、ロリ少女の3人がな』
「分かりました。すぐ行きます」
・・・・・・・・・・。
「海馬」
「何だ」
にやりと笑った。
「一致団結のようだな。お前の所為か？」
「てへっ」
と、何の気持ちも無く、にやりと笑ったままの顔で言ったので、俺は当たり前の反応で返した。

「おのれ、確信犯か」

08 ―団結―（後書き）

あと、いつの間にか団結！
とか。

０９ー大人ー（前書き）

僕は大人と子どもの間を目指します。

・・・・・・いや、コナン的な意味じゃ無しに。

09ー大人ー

「・・・・・・なんでお前らまで勝手に捜査してんだ？」
警察署に到着して、３人の女の姿を見た俺はまずそう言った。
「貴方が一日で諦めて、別の行動を始めるはずが無いわ。どうせ１人で戦おうとしていたんでしょうけど、そうなれば私達も一緒に戦うわ。だって私達は彼が何と言おうと仲間なのだから」
虎郷が答える。音河と雅も同意するように俺の顔を見る。
「・・・・・・・・・・・・・・・」
全く・・・・・・。
どうやら隼人は裏切っても諦められる事は無い上にとても愛されているようだ。
そんな俺達の様子を見た龍兵衛さんは少しイラついた顔で言った。
「・・・おい。話、聞きに来たんだろう？喫茶店行くぞ」
「どうしてですか？」
「俺が捜査しているのがばれたら色々と困る」
それだけ言うとそのまま外に出て行った。

喫茶店についてすぐに、
「じゃ、事件の理由ってのを聞かせてもらえます？」
と海馬が言った。年上に対する敬意のような物を何一つ感じられない。
「一ヶ月前、王城グループの会長であり、頭脳探偵の祖父である王城　椎名が病床についた。それが事の始まりだそうだ。犯人のうちの１人が口走った情報から、ここまでたどり着いたんだ」
「どんな情報だったんですか？」
「どうやら、今回の事件を起こしたのは幹部の人間らしい。その情

報から、俺が頑張って捜してきた「仙波　周真」だそうだ」
さっきから地味に自分をアピールしている気がする。
が、その疑問は以下のように解決した。

「それ、龍兵衛さん1人で調べてないですね」

と、雅が言った。
「・・・・・・そうだな。警察として動いたのは俺だ。協力したのは今日元だ」
「今日元さんが・・・・・・・！？」
そうか。さっきから、自分をアピールしていたのは、こちら側から質問させたのだろう。おそらく今日元さんの性格からして「俺が協力した事は隠しておいてくれよ」とかそんな事を言ったのだろう。だから龍兵衛さんは相手側から質問されるのを待った訳だ。
「回りくどい事しますね」
「何の事だか」
そう言って龍兵衛さんは話を続ける。
「口走った情報は幹部に頼まれた、ということだけだった。だから他の情報は俺と今日元の2人で集めた事になるな。じゃあ続けるぜ。
王城グループの社長であり、頭脳探偵の父、王城　鉋は今、新しい研究のために時間を費やしているようで、その社長は誰かさんに遺伝させたように、猪突猛進な節があるらしい」
誰かさんね・・・・・・・。心当たりは1人しか居ないな。
「それで？」
「ああ。だから社長さんは研究に没頭中で気付いていないようだ。それで、幹部のやろうが勝手に行動を起こしたって訳さ」
「なるほどな・・・・・・・」
納得は出来た。

「よし、行くぞ」

俺は宣言した。
「殴りこみか？」
龍兵衛さんが訊いた。
「今すぐにでも行きます」
「やめておけ。死ぬぞ。これから先は俺に任せておけ」
「警察は動けないでしょう。だったら俺達でやって見せます」
「別に警察で動く訳じゃない。俺の兄弟なら精鋭の警備員数人くらいは集められる」
「それもどうせ上からの圧力とかで行動不能でしょうね」
「どちらにせよダメだ」
「俺達の責任です。俺達でやります」
「子どもに責任もくそもあるか！！」
龍兵衛さんが珍しく叫ぶ。喫茶店の空気が凍る。静まる。

「子どもが死んだら悲しむのは大人だろう。お前は悲しむ人間の事を考えちゃいない」
悲しむ・・・・・・。
俺が隼人たちと仲間の関係を作らない理由も、身近な人間が死ぬ悲しみを少しでも減らすためだ。
でも、俺は他の人を考えていなかった。自分が大切ならばそれでよかったのかもしれない。
「子どもは大人に頼っていいんだよ」
そう言って立ち上がった。
そして会計を済ませて、俺達全員で店を出た。

「そういえば、どうして龍兵衛さんは俺の携帯電話の番号知ってたんですか？」
「この間隼人に会ったときに、『僕にもしものことがあったらこっちに連絡してください』って頼まれたんだよ」

「・・・・・・」
心の中で笑った。
何とまあ・・・・・・先を見透かしたやろうだな。
先走りもいいところだ。いい意味で。
「じゃあ、お前らは何もするなよ。俺は何とかしてメンバー集めるから」
「了解です」
と、取り敢えず返事してから
「今日一日はおとなしくしよう」
という考えになり、帰路へと足を向けた。

そして家について、電話で先生から無断で休んだ事を咎められたので、明日からしばらく休むと思いますと告げた。
それ以外には何事も無く、そのまま俺達は夕食と入浴を終えて早急に睡眠に入った。今回はＷＲには俺は行かなかった。多分皆も行ってないと思う。
明日は龍兵衛さんがどうであれ、襲撃に行こう。
そう思っていた。

次の日、俺達は思わぬ方向からの襲撃を受ける事になった。
朝起きると、虎郷の姿が無かった。

１０ー襲撃ー（前書き）

襲撃・・・・・・終劇・・・・・・・・。

ひゃはははは。

10ー襲撃ー

朝は俺よりもいつも早く起きる虎郷の姿がその日は無かった。
最初は単に起きるのが遅いだけかと思ったが、玄関が開きっぱなしでそこに新聞が落ちてあった。

「連れ去られた・・・・・・わけじゃなさそうだな」
服を着替えてから外へ飛び出したようだ。
一体何故だろうか、という疑問とともに、冬の寒さを感じて玄関を閉じて、服を着替える作業に移ることにした。
新聞を掴んで、リビングの机の上において、どう突き詰めても最終的にジーンズとパーカーに落ち着く俺のファッションセンスによって着替えながら、一面の大きな記事を読んだ。

『刑務所・少年院　内部からの爆発　警察内部の犯行か』
・・・・・爆発？
詳しく読むと、昨夜、爆弾を作っていた少女が少年院を爆破する事によって脱出し、他の犯罪者も脱出させ、さらに刑務所まで破壊したらしい。

「・・・・・・おいおい・・・・・・」
少し寝るのが遅かったら昨日知っていただろう情報だった。
それにしても・・・・・・どういうことだ？内部から爆発って・・・・・・どうやってそんなことするんだ？
そして何だ・・・・・・この内臓をえぐるような嫌な感じは・・・・・・。
これが俺達に関わってくるってのか？
そして俺は、脱獄囚リストを見た。人数は警察の頑張りによって、

7人に抑えられたようだ。
「・・・・・・・・・・・・・・・！！」
これは・・・・・・・。

「どうかしましたか？」
「おはよー。どした？」
雅と音河が服を着替えて出てきた。そうか、女子は部屋で着替えるのか。という感想を持ちつつ、俺と同じくらい早く起きる海馬の姿が見えないことを疑問に思って、左右を見渡す。
「ん？どうかしたのか？」
と、そこで海馬の登場。どうやら、全員集合らしい。
・・・・・・何か雅が海馬を睨んでいる。喧嘩でもしたのだろうか。
「あれ、ヒスイが居ないね」
「ああ。どうやら家を飛び出したらしい」
「飛び出した？どういうことですか？」
海馬から距離を置いたまま俺の横に立つ。
「新聞見てくれ」
「・・・・・・刑務所・少年院　爆破・・・・・・・！？」
音河が目を丸くする。雅も睨んでいた目を強くする。視線は何故か海馬。
「で、それがどうかしたのか？」
海馬はやけに反応が薄いな。まぁいいけど。
「その脱出者の中に居るんだよ。木好一也・・・・・・虎郷の元恋人だ」
「こ・・・・・・恋人って・・・・・・。じゃあ、この間言ってた『本気で愛していた人』ってこと？」
そういえば、音河が仲間になってからそんな話をしていたような気がする。恋バナとしてだったか。
「・・・・・・そうか。つまり、そいつを追っていったってわけか」

「多分。だから俺は追いかけるよ」
「そうだな。俺も行こう。常盤と音河も付いて来い」
「了解ー」
と、気の抜けた返事で音河もついてくる。雅は黙ってついてきた。
そして玄関を出て数個の段差を降りて、扉を開ける。そして俺は右手を地面につけ――――。

「ぐおわ！」
海馬が上から落ちてきて、扉を通らず上を飛び越える。
「何すんだ！」
どうやら雅が海馬を蹴り飛ばしたようだ。
「ど、どうしたんだ、雅！？」
取り敢えずは雅に質問してみる事にした。
「・・・・・・違います。彼は正先輩じゃないです」
「は！？」
「私に対する呼称も違います。驚きが小さすぎます。起きるのが遅いです。違和感ばかりです」
「・・・・・・あっちゃー・・・・・・・。ばれてやんの」
そして、海馬は立ち上がり、上の服を脱ぐ。
まるで、マントで、一瞬隠れた時に着替えるような速さで、早着替えを成功させる。
「って・・・・・・・お前」
新聞をよく見ると書いてあった。
脱獄者
木好一也　長柄川里子　花咲満　長堂寺志楽　丹波龍馬　ｅｔｃ・・・・・・・
「花咲先輩」
「変装が役に立ったと思ったんだけど・・・・・・・。どうも俺は演

技は苦手みたいだな。細かいミスがある」
そう言って花咲は戦う態勢を取った。
「悪いけど俺は逃げる方向性をとらせてもらうぜ。3人も相手には出来ないからな」
「海馬はどうしたんだ！？」
「アイツには風呂場で寝てもらった。後ろから殴ってみたから動かないだろうな・・・・・・っと！！」
花咲は思い切り腕を振った。
先頭に居た雅はそれを受け止める。
「！！」
違った。狙いはそっちではなかった。
どうやら爆弾を隠し持っていたようで、俺と音河に向かって5個くらいの爆弾が来る。
「しくった！」
防御態勢を取れていなかった俺の目の前に飛んできた。

ドゴォ！
小さな爆発だが確かにダメージはある。

まぁ、当ればだが。
「ふぃー・・・・・・」
目の前には海馬が居た。爆弾の場所は彼の右横のブロック塀が壊れているので、まぁ、彼が弾いたと言う事だろう。
「海馬！？どうして・・・・・・・」
花咲が驚く。
「花咲・・・・・・俺はどうやら気絶しなかったようだ・・・・・・

。寝たふりしてみたら、お前が思ったより面白いアクションに出てくれて助かったぜ」
そして海馬は一歩ずつ近づく。
「く・・・・・・！」
花咲が背を向けて走り出す。が、それはかなわず、雅の足に引っ掛かってこけた。

「花咲」
「・・・・・・また、俺は負けたのか・・・・・・。まあいいだろう」
「・・・・・・運が悪かったな」
静かにそう言った海馬の拳は花咲の右頬を殴り飛ばした。
頭を地面にめり込ませて気絶した。

11ー虎郷ー

「今の感じじゃ、どうやら外に出たメンバーは他にも居るな。だが、全員は一緒に行動していない。多分『レッドテイル』は一緒に行動していたと思うけど」
「ともかく今は虎郷さんを助けるのが先決です」
「じゃあ警察に花咲を届けるべきだね」
「俺はすぐに虎郷のところに行く」
そんなミニ会議のすぐだった。
「私がどうかしたのかしら？」
と、何事もなかったように虎郷が帰宅した。
「虎郷・・・・・・大丈夫なのか？」
「大丈夫って・・・・・・何が？」
「え、お前・・・・・・木好さん追いかけたんじゃ・・・・・・？」
「・・・・・・一也・・・・・・！？」
明らかに驚いた虎郷。
「どういうこと？」
「お前・・・・・・新聞読んでないのか？」
俺がよく分からないながらも、虎郷に告げると虎郷はダッシュで家の中へと入り込んだ。

「・・・・・・？」
状況が理解できない俺達は全員首を捻りながら家の中に入った。
「そんな・・・・・・じゃあ、一也は今、外に居るってこと！？」
新聞を呼んだ虎郷は俺の方を見た。
「そりゃ・・・・・・そういうことになるよな」
「・・・・・・」

虎郷は黙って、Uターンして玄関に戻る。
「っと」
海馬がその虎郷の肩を掴む。
「行くな」
「私の勝手でしょう」
「その前に、お前がどこにいたか・・・・・・教えろよ」
「それも私の勝手よ」
「違う」
海馬が言う。
「俺達は仲間だ。隼人が居ない今、バラバラになるわけにはいかない」
「大丈夫よ。構わないで」
「構うよ」
音河も会話に参加する。
「構わないわけ無いじゃん。私達は全員そろって隼人を助けるんだ。火水は居ないとダメだ」
「・・・・・・でも」
「ダメです。どうしても行くと言うのなら、私達全員が全力で押さえつけます」
雅が強く睨む。確かに4人がかりなら勝てるだろう。雅と海馬も居るし。だが、ここはそういう場合じゃない。
「言われっぱなしだぞ、虎郷」
「・・・・・・はぁ・・・・・・」
虎郷は溜め息をついて、うなだれる様に椅子に座り込んだ。
「全くね。確かに言われっぱなし。そして私には反論する言葉も思いつかないわ」
「そうか。そりゃ良かったな」
「ええ・・・・・・全くね」

「私は王城君に会いに行ってたの」
「隼人に！？」
虎郷が居なかった理由の予想外さに驚く。
「どういうことだ？」
「朝、私が新聞を取りに行ったら、黒いリムジンが止まってたわ。誰かと思えば、東先輩よ。で私が出ると同時に東先輩が出てきて、有無を言わさず私を拉致したわけ」
「拉致・・・・・・」
誰かに見られてたら事件物だぞ。東先輩は行動が荒いな。
「で、中にいたのは王城君で、そのまま車の中で用件を済まされたわ。そしたら、嘉島君が外に出てきたから、仕方ないから遠くでおろしてもらったのよ。本当は王城君とあったことは秘密にしておく予定だったんだけど」
「何で？」
「それは言えないわ。王城君だって仲間なの。王城君の行っていた事を考えれば今言うべき事ではないわ」
「そんな・・・・・・」
俺が虎郷の言い分に対して反論しようとしたが、
「一理ある」
「それもそうだね」
「納得です」
という3人の意見により
「まあいいか・・・・・・」
という考えに落ち着いた。

「これからどうするんだ？」
「とりあえず、花咲を警察に連れて行って現状について聞いてみよう」
「そうするか」
俺達は気絶した花咲を抱えて警察署に行く事にした。

しかし、俺達が見た警察署は、まるで倒壊した建物のようになっていた。

１２ー情報ー（前書き）

情報とはこの世の全ての動力源であり、全てを知るために全てを使用する物、またその物体をも情報であるという事実は覆されない。すなわち、この世の全て、感情でさえも情報で構成されているのだ。泣くタイミング、怒るタイミング・・・全てそうなっているのだ。

だから何だ。

12ー情報ー

倒壊した建物。いや、存在として成り立っては居ないから建物と呼ぶのには相応しくは無いかもしれないがそれはそれとして、恐らく警察署だったと思われる。

不幸中の幸いは、見た目以外の機能は何ら問題なかった。警察として成り立っているし、特に事件が内部で起きた様子は無い。ということは外部からの攻撃か。

と、そこまで考えたところで龍兵衛さんが現れた。

「・・・・・・ソイツは脱獄した奴だな？」

「はい。コイツを届けに来ました」

実は既に花咲は目を覚ましているのだが、どうやら抵抗は無駄だと判断したようだ。

「それだけじゃないだろうな。俺に話を訊きに来たというわけか・・・・・・」

「そうです」

「いいだろう。この事件はようやく警察として機能できそうだ。最も捜査できる人間がそんなにはいないんだがな」

そう言って、花咲を別の人間に渡して話を始めた。

「王城だ」

「王城？」

「これもまたあの幹部が関わっているらしい」

「そう・・・・・・なんですか」

「この警察署がこの程度の被害で済んでいるのも、刑務所と少年院が破壊されたにも拘わらず、脱獄囚を7人に抑えられたのも、頭脳探偵のおかげなんだがな」

「隼人が？」

確かに警察の行動力が異常に高いのは不思議に思っていた。いつもならもっと被害が出るところだろう。

「どうやら頭脳探偵は地味に隔離状態にあるらしい。それを助けている人が居て、情報を集めては頭脳探偵の元に集めている。幹部の動きを封じる事はできないから、その行動を邪魔しようって算段らしい。俺達が迅速に対応できているのはそのおかげだ。だが、その助けている人ってのが若干犯罪者だな。スピード違反者の可能性がある。また、無免許運転の可能性も有るが、まあ、それは仕方が無いからってことにしておこう」

スピード違反？無免許運転？隼人は一体誰と組んでいるのだろう。

「話し戻してもいいか？」

という龍兵衛さんの言葉に黙って頷いた。

「囚人を脱獄させた理由はお前らを襲撃するためらしい。まあ、イレギュラーが2人ほど飛び出たらしいが、5人はお前らに恨みがあるはずだとさ」

「はい。それは分かっています」

「また、警察署を破壊したのは1人の少女だった」

「長柄川　里子ですね？」

「ああ。そうだ。何か、妙な力持ってるみたいだな」

「・・・・・・・・・・・・」

「お前らもやっぱりそうなんだな。お前らが捕まえさせる犯人は大抵そうだからよ。木好もそうだったし・・・・・・」

龍兵衛さんは軽く溜め息をついて笑った。

「面白い奴らだよ。本当に」

「どうかしたんですか？」

「いいや。そうだ、作戦準備が完了したぞ」
「作戦？」
「殴りこみ作戦だ。１２月２３日の夜・・・・・というか１２月２４日になった瞬間だな。クリスマスイブに出動する」
「警察の準備が出来たって事ですか？」
「まあそうだ。だから、お前らに任務を与える」

龍兵衛さんは警察手帳を目の前に６個置いた。

「お前らのだ。これから脱獄した連中を捕まえられるだけ捕まえてくれ」
「はい？」

「ここに特別捜査部隊を設立する」

13 ―特捜―（前書き）

いや、特捜ってのは「特別捜査」の略であって、特別捜査部隊の略ではないらしいけど。

13 ―特捜―

つまりはこういうことらしい。

俺達が捕まえた犯罪者（しかも異常な能力を持っている）が逃げ出した。本来、一般人や子どもに協力を求めている時点で警察失格かもしれないが、俺達ならもう一度捕まえられるだろうという方針を上の方が取ったらしい。まぁ多分、龍兵衛さんが掛け合ったんだろうと思うけれど。

その引き換えに、王城グループへの殴りこみを決行する事になったのだそうだ。これも恐らくは龍兵衛さんの交渉の結果。まぁ王城相手に上司がよく重い腰を上げる気になったものだ。世間にこれだけの被害を出したのに、行動しなかったら警察も形無しだと世間に叩かれる事になるのは間違いないが、それでも別の犯人でも作り出しそうなものなのに。その辺りで、少しだけ尊敬には値するのかもしれない。

で、俺達は捜査本部から指令され、特別捜査部隊のメンバーとして迎え入れられた。だから、俺達は警察ということになる。この間だけではなく、特別捜査部隊として恐らくこれからも。その証拠に警察手帳は6個。つまり、隼人の分もある。

さて、特別捜査部隊、略して「特捜」が行動するために、まずは事件概要から整理するべきだろう。というか、俺がそうしたい。

王城グループの幹部がそうした理由は、やはり俺達に対する攻撃のためだ。もちろん、「嘉島達を殺せ」などという指令は出していないだろうが、俺達が捕まえた、死んでいない犯罪者たちが俺達を殺しに来る事には全く不思議は無い。というか、間違いないだろう。「レッドテイル」は間違いなく俺達を狙っているわけだし。

ともすれば、俺達が戦い行く、或いは捜す必要は無く、堂々としていれば向こうから勝手にやってくるというわけだ。

ではいい加減始める事にしよう。捜査を。

俺達は警察署の門を抜けて、歩行者用の道路に出た。やはり、倒壊しかけた建物に近づきたくは無いのか、人通りもほとんど無かった。

「取り敢えずは俺達は全員ばらばらで行動してみようか？」

俺がそう提案すると

「いいや。恐らくアイツらが狙ってくるのは、俺と雅か虎郷だろう？レッドテイルか、木好ってやつだけなんだから。つーことは、2組で大丈夫だろう」

と海馬が答えた。

「2組ってのは？」

「虎郷グループと俺と雅グループだ。狙ってくるものたちを分散する必要があるだろう」

「そうか・・・・・・」

しかし・・・木好さんが虎郷を攻撃してくる可能性は少ない。

だって・・・・・・いや、言うだけ野暮だろう

人の恋心はそう簡単に終わりはしない、とだけ言っておこう。

「では、こうしましょう。私達は海馬君と常盤の行動を遠くから見守ることにするわ。つまり同じ空間に居ない程度の状態にするという手法よ」

虎郷が言った。どうやら2組作戦には反対らしい。

「つまりは私達を尾行するというやり方ですね？」

雅が確認を取る。

「そう。そうすることで私も別行動のように見えるというわけ。だ

から相手も襲ってくるのならそういう方法で来るでしょう」
「そう・・・・・・だな」
海馬は少し迷ってから同意した。

「では今からデートしましょう」
「は、はぁ！？」
海馬が雅の誘いに驚く。
「お前・・・予想外にもほどがあるぞ・・・・・・。俺達は今から狙われる身になるんだぞ？しかも後ろからこの3人が尾行してくるんだ。そんな状況でどうして――」
「嫌なの？」
敬語の消えた雅の発言。うん、確かに怖い。
「嫌って言うか、状況が――」
「嫌なんだ・・・・・・ふーん」
黙って雅は道を1人で進んでいく。

「・・・・・分かったよ。すればいいんだろ！」
海馬が雅の手を取った。
「はい！」
待っていたかのように雅は海馬に寄り添う。
「はぁ・・・」
と、言ったかは分からないが、肩を落とした海馬を見て「落ち込んでるな」と思った。
しかし・・・・・・どうなのだろう。過去に愛した人が今、自らの命を狙っている可能性がある状態で、彼らのような愛し合っている2人を見る感情は。と思って、虎郷を見る。

「微笑ましいわね」
と、虎郷は少し笑って言った。どうやら本心。そして虎郷は先に海馬たちを追いかける。

「そうだな」
俺は取り敢えず同意して、彼らを追いかけた。
「あ、私は今日元さんに頼んで、こっちから相手を探してみるよ」
と音河は言った。
「ああ。それもいいかもな。じゃ、そっちは頼んだ」
「ついでに2人もデートしたら？」
冗談のように音河が
「自然そうなるが、そういう展開は期待したくないな。それに虎郷の気持ちもあるだろう」
「真面目に答えないんだよ、そういう時は。じゃ、また夜に」
と言って音河はそのまま警察署内の戻った。

自分で言っておいてなんだが、虎郷の気持ちはどこに向いているのだろう。
さっきの発言からして、そこまで木好さんに向いてはいない。そりゃそうだ。だって、最終的には木好さんには怒りをもっていたのだから。だが、海馬たちの姿を見て微笑ましいと思うことは、すなわちそれらへの憧れ。

もしも、俺に虎郷の気持ちが向いていてくれれば・・・・・。
虎郷の背中を見て、冗談ではなく、そう思うのだった。

１４ー恋愛ー（前書き）

恋する気持ち・・・分かりますかね？

僕は今まで２回ですね。

１４ー恋愛ー

結局その日は1日中うじゃうじゃと海馬と雅のデートに付き合っただけだった。まぁ、楽しかったからいいとしよう。結局襲撃される事も無かったし。

で、その日は1日を終了させた。ので、
２１日水曜日。相変わらず学校は休学中。でも、学校休んでデートって、ダメだろうな・・・。まぁいい。してるのは俺じゃないし。

さて、今日も勝手に海馬と雅は動き回る予定のようだ。それを俺と今回は音河でついて行くことになった。虎郷は家で休んでいる。
で、既に昼過ぎ。

現在遊園地で、アトラクションで遊んでいる彼らを眺めている。

「いつも元気だね。あの2人は。ていうか狙われているって分かってんのかな？」
「さぁ・・・。分かっていようといまいとアイツらはあんな感じなんじゃねえの？」
「そうね。ところで昨日はどうだった？」
「・・・あぁ。結局何の異常も無かったよ。襲撃される事はもしかしたらないかもしれないな。このまま何人か捜していくほうが早いのかもしれないな」
「・・・・・・うん、えっと、そっちじゃないよ」
は？そっちじゃない？
「じゃあ・・・どっち？」
「デート」
「・・・いや、海馬と雅はそれなりに楽しそうだったけど？」

「私にそういう方面で隠し事は無駄ですぞ」
ですぞ、て。お前はいつ探偵口調を手に入れたんだ。
「嘉島って、火水のこと好きなんでしょ」
「は・・・はぁ！？」
「うわ。わっかりやす」
「くッ・・・・・・！」
俺はこういう類には弱いのだ。恋愛関係にはどうも疎い。ので、俺と隼人の探偵ではそっち方面は全くクリアできなかった。

「いつから好きなの？」
「・・・・・・分からないんだ。それにこれが本当に恋愛感情かどうかも自信が無い」
「なるほど」
「・・・・・・馬鹿にしないのか？」
「そういう人はよくいるよ？にしてもいいなー。私、音楽活動やめてから一度もデートなんか行ってないよ」
本当に羨ましそうに言った。でも、俺には分からない方向性だと思ってしまう。
恋愛経験っていつ以来だろう。幼稚園の頃の初恋をのける（確か先生だった気がする）と、小学校や今の中学校でも運動神経は良い方だったので、いやらしい言い方で「モテた」のだ。でも、恋することは無かった。となるとこれが初恋なのか。

「でもな・・・・・・」
「もうちょっと勇気出してもいいんじゃない？」
「無理だろう。だって、アイツの気持ちって物がある」
「まー・・・それはそうだね。結ばれるかどうかは私にも分からないよ」
「うわー。後押ししてくんねえんだ」
「そりゃそうだよ。彼女の気持ちは1番分からないよ。だって、彼

女は心を閉ざしていた期間が長かったから、心の表現が分からなくなってるんだよ」
「・・・・・・なるほどね」
確かに、感情が余り表に出ない性格ではある。
「それに今はアイツは心が不安定だ。木好さんが捕まってまた落ち着くまではね・・・」
「はー・・・。優しいね、嘉島」
「ありがとう」
「皮肉だよ」
「そうか」
と雑談しているうちに、いつの間にか海馬と雅が帰ってきていた。
こう見ると雅は小学生に見える。俺がロリコンじゃなくて本当に良かった。
「・・・・・・てか、よく考えたら、ここで襲撃されたら大変じゃねえか？」
と、俺は今更ながら突っ込む。
・・・・・・・。沈黙。
・・・・。
「気付いてなかったのか！？」
「え、あ、まあな」
海馬が曖昧に返事した。
「まあ大丈夫ですよ。こんなところで事件を起こすほど不条理な人たちじゃ――――」
ドゴォォォオオオオ！！
雅の発言の邪魔をしたのは、雅の発言を覆すものだった。
遠くで爆発が起こったようだ。
「まさか・・・・・・」

そしてそれを裏付けるように、

「発見！」

と後ろから声をかけられた。

「元気いいじゃねえか。久しぶりだな！！」

「丹波・・・龍馬・・・」

嫌な予感は的中するものである。

１４ー恋愛ー（後書き）

悲しい思い出が多いんで。

１回目は現在トラウマ化です。

１５ー行動ー（前書き）

記念すべき１００話

うっわだから何って感じ。死ぬか死ぬか死ぬか死ぬことにしよう。

15ー行動ー

「で、４人だけか？まぁ、王城のとこの奴が居ねぇのは当然だよな」
丹波は頭をかきながら言った。
「・・・・・なんで遊園地なんかでこんなこと・・・・・・」
音河が悲しそうに言う。
「１番被害がでかいところを選んだんだよ。お前らの所為でこうなったということを教えてやるためだそうだ。長柄川はよくこんな事考えるよ。だが、狙いが結局、海馬と雅の関係ぶち壊しってのが残念だよな・・・。俺っちとしてはてきとーに過ごしていたいんだよ。折角出てこれたんだから」
いきなりぺちゃくちゃと長々と話し始めた丹波は、突然
「なんなら逃げてもいいんじゃね？」
と提案してきた。
「何言ってんだ？」
海馬が誰よりも早く反応した。
「いや、お前らが逃げたら少なくとも俺達は遊園地からは居なくなるからこれ以上被害は増えねーって」
「・・・・・・信用できません」
雅が丹波をにらみつけた。
「あっそ。じゃ、このままやるか。それに俺はそうでも長柄川はこのまま新型爆弾の成果とか調べるかもしんねーから、逃げても意味はなかったけどな」
「やっぱ信用できなかったな」
俺が丹波を睨むと、
「・・・・・・面倒だ。さっさと片付けたいよ」
と、丹波は言った。

「そんな面倒な方法は取りたくない。いいから、さっさとやろうぜ？」
どうやら通信機の送信機だけもっているようだ。じゃあ、どうやって受信してんだ？
「・・・・・・分かったよ。戻れば良いんだろ？」
ああ。分かった。そういえば丹波は「耳と目が良い」のだった。
ふむ、俺の苦手なパターンの奴か。

「じゃ、そういうわけだから」
とそれだけ言うと丹波は身を翻して走り始めた。
「逃がしません！」
雅がその2倍の速度で走る。
そして跳び上がり、丹波に跳び蹴りを向けた。

ドギャ！
という少し間の抜けた音を立てて、雅が倒れ込んだ。

「って、雅！？」
何で雅が倒れたんだ？
その答えは目の前に居た。

「・・・・・・早く帰るよ、丹波」
長堂寺だ。コイツの力は・・・「高速」か・・・。
「了解だ」
そして長堂寺が丹波の体を掴むと、瞬間移動の速度で遊園地の奥に走り去った。

「大丈夫か？雅」
「はい。少し油断しただけです。そこまで強い攻撃ではありませんでした」

「となれば・・・・・・」
俺は考える。こういうとき、どうすればいいんだ？
「どうする？」
海馬が俺に聞く。
「あいつらの方向追いかけようか？」
音河が提案する。
「危険すぎます。丹波さんにはすぐ気付かれるでしょう？」
雅が否定する。
「それにどこに居るか分からない。これじゃ捜しようが無い」
海馬がさらに問題を上乗せした。
「・・・・・・バラバラに行動しよう」
俺はそう答えた。
「なるほど。じゃあその作戦で行こう。恐らく長柄川は俺を狙ってくるだろう」
海馬はそう言って走り始めた。
「私は手当たり次第に捜してみます」
雅も走り出す。
「私は一般人を避難させるよ」
音河はそう言って、ギターを構えた。
そして音を鳴らす。恐らく感情は「落ち着き」。

一般人が音河を見る。
「落ち着いて行動して下さい！しばらくは爆発はありません！ゆっくり行動してください！」
その声を聞いて、一般人は落ち着きを取り戻した。そして音河は命令を始めた。

・・・・・・俺はどうする。俺はアイツらから狙われることは無い。
・・・・・・となれば・・・・・・俺は捜し回るしかない。

だが・・・それでいいのか。この作戦は間違っていないのか。
走り出した俺はそう思った。
隼人・・・・・・お前ならどうするんだ。
そう思いながら走り続けた。

１６ー進化ー（前書き）

人間は足の小指を使わないから、少しずつ消えていっているそうです。

これって退化なんですかね。進化なんですかね。

それとも・・・・・消化？

16ー進化ー

走って走って走って走って走ったってくらい走った。
「居ない・・・・・・どうなってんだ？」
俺がそこで立ち止まってその辺りを見回す。
すると、
「おい、嘉島！」
後ろから海馬に声をかけられた。
「どうなってんだ？全く現れないぞ？」
「そうだよな・・・」
俺と海馬が話し合いを始めたと同時に、
「先輩！」
「嘉島、海馬！」
と、雅と音河もやってきた。
「全く姿が見えないよ。どうなってるの？」
「いくらなんでも消えすぎですよ。全く人影も気配も動きもしない。これは一体・・・」
「俺に訊くなよ。一体何が・・・・・・」
俺達がうろたえていると、
「もしかしたら」
と雅が口を開いた。
「もしかしたら進化ではないでしょうか？」
「し・・・進化？」
「はい。能力の進化です」
言いながら周りを見渡す。

「先ほどの長堂寺先輩・・・・・・。スピードが以前より遥かに速くなっていました。それこそ瞬間移動のような・・・・・・」
「待てよ、雅。そりゃ進化というか・・・・・・まぁ成長はしているような気がするけど、それは運動量とはによるものじゃないのか？」
と、雅の考えに反論すると

「では、その成長のための運動とはいつ行ったのでしょう」
「そりゃ、今までずっとだろう？」
「彼らは今までずっと少年院にいたんです。しかも、彼らのような者達がそう簡単に動ける環境には居なかったと思います」
「・・・・・・あぁ・・・・・・そうか」
「ですから、運動とは関わらない、能力・・・『アクター』ではないかと考えられます」
と雅が言い切った。
「それにしても・・・・・・」
「何でしょうか？」
雅が反応した。自分の考えに穴があると思ったのだろうか。
「いや、何でも無い」
「・・・・・・？」
俺が思ったのは。
それにしても、よくそんな事思いつくな。
まるで。
まるで隼人のようだ。
だからこそアイツは雅を仲間に引き入れようとしたのだが。

「ということはこの状況はアイツらの誰かの能力の進化が引き起こしているって事か？」
「そういうことだと私は思います」
「となれば恐らく丹波だな」

と、海馬が言った。

「アイツの能力は『視聴覚能力増強』だ。とすれば今は『相手の視聴覚減少』という能力を持っていると思われる」

「その仮定で動こう。元より行き当たりばったりみたいなもんだ」

「じゃあ、私に任せて」

と音河がギターを構えた。

「超音波（モスキート・ミュージック）」

そしてピックでギターの弦を弾く。

ほぼ無音。しかし何かが広がっているような印象を受ける。

俺の感覚神経がそれらを受け止めているようだ。他の奴には分からないかもしれない。

「・・・・・・みっけた」

静かに音河は呟いて、

「ショック・ノート！」

音河は向きを変えてもう一度、今度は激しい音を立ててギターの弦を弾いた。

音符が飛ぶ。

「が！」

何かに当る。そこには空気しかない。が、声は間違いなくそこから聞こえた。

そして、それは何処かに倒れてから姿を現した。

「・・・・・・げ」

そこには3人の人間がいた。それは間違いなく長堂寺、長柄川、丹波だった。
「思ったより近くにいたんだな」
「ああ。だから貴方達の見解も聞いていたわ。そしてその通りよ」
と長柄川が丹波の変わりに肯定した。

「で？だから何？」
強気に長柄川が言う。
「私達は全員進化しているのよ。貴方達の力で勝てるはずが無いわ」
それと同時に長堂寺は消えるような速さで走り始めた。周辺をスーパーボールの反射運動のように動いている。
「・・・・・・・・・・・・虎郷はいないのか。じゃ、さっさと行くよ」
そう言って長堂寺は俺達４人を睨んだ（かどうかは定かではない）。

「・・・・・・！」
俺は長柄川と丹波を見る。
・・・・・・丹波が居ない。やはりそういう能力か・・・・・・。
俺達は４人同士で背中を合わせ、警戒する。
「進化なんか・・・・・・どうしろってんだよ！」
俺は思わず叫んだ。
「・・・・・・例えば彼女達がどうしてあのような能力を手に入れたんでしょうか？」
雅がそう言って、俺達に考えを促す。
「・・・・・・どうやって・・・・・・」
「恐らくそれは私達を殺すという強い願い。つまりは私達の能力の進化のためには強い願いが必要なのではないでしょうか」
「強い願い・・・・・・」
「中途半端では駄――――」

雅が吹っ飛ばされた。背中合わせになっていた状態から、一人分外れる。
長堂寺ではない。だとすれば、見えない敵・・・・・・丹波。
「雅！大丈――――」
海馬も吹っ飛ばされる。しかしこの場合は、超速攻・・・長堂寺だ。
「音河！気をつけろよ！」
「分かってる！」
俺は地面を左手で殴った。
地面のコンクリートがとげのようになって、長柄川を狙う。
長柄川は避けようとはしない。
「・・・・・・爆弾（ボム）・触発（フラッシュ）」
そのまま手をそれに向けて開く。
とげが当る。
轟音を立ててぶっ壊れた。
「・・・・・・アイツ自体が爆弾かよ」
「ちょっと危――――」
音河が吹っ飛ばされた。これで現在ここに居るのは俺だけとなった。
「音河！」
飛ばされた3人は気絶している。力も増幅しているのか・・・・・・？いや、この違和感は・・・・・・。
「長柄川・・・・・・これもお前のか」
「爆弾（ボム）・気絶（ショッキング）」

「くっそ・・・・・・」

俺がそう呟くと、丹波は現れ、長堂寺は止まった。

「これでおしまいだぜ」

「・・・・・・・・・・・・弱い・・・・・・」

「貴方達に勝てるわけ無いでしょう？」

3人にそう言われて、俺が搾り出した言葉は。

「・・・・・・お前ならどうする」

だった。

「何言ってるの？」

もちろん長柄川にわかるはずが無い。

俺には勝てない。皆に命令するような能力も無い。そこまで力を持っていない。

どうすればいいんだ。俺は一体何をすれば正しいんだ。

隼人・・・・・・お前ならどうするんだ？俺はどうすればいいんだ・・・・・・隼人。

「願えばいいのさ」

「もういいや。終わらせよ」

長柄川はそう言って、二人の背中を押した。

丹波は消え（視覚的に）、長堂寺も消えた（物理的に）。

見える。
長堂寺が俺に蹴りを向ける。
分かる。
丹波が空気を切り裂いて拳を向けている。

何だこれ・・・・・・。何だ・・・・・・この感覚は。
どうして見えるんだ。どうして分かるんだ。

瞬間。俺は右足を横薙ぎに振った。

「が・・・・・・！」
「く・・・・・・！」
俺の脚は2人にヒットした。
もう一度俺は2人を追いかけて、左手で地面を叩き、剣を二本作る。そして勢いのまま2人の右足に刺した。
「あああああああ！！」
「いってえええええええ！！」
悶える2人を見て
「そのまましばらく死んでろ！」
俺はそう叫んだ。
そして――――。

「！」
長柄川の爆弾がそこに有った。
死ぬ。そう思った。

「・・・・・・・・・？」
爆弾は地面に落ちている。

そこで俺を待っていたのは、真っ黒い空間だった。
地面には方眼容姿のような線。
倒れていた敵味方全て、何の問題も無かったかのように立ち上がり、不思議な顔をしている。

・・・・・・・これは・・・・・・・。

「キングダム」
少し遠くに。
彼が居た。

「・・・・・・・隼人!?」

17 ―敵対―（前書き）

敵とは自分自身であり、自分以外である。

この世界では全てが敵なのですよ！

17 ―敵対―

隼人は一歩ずつ歩いてきて、そのまま俺達の近くまで来た。
「・・・・・・隼人」
俺は思わず呟いた。しかし隼人は
「積もる話があるだろうけど、今は彼女の逮捕を優先しよう」
とだけ言うと止まる事はなくそのまま長柄川に近づいた。

「また貴方ね・・・・・・」
長柄川は隼人を睨む。
「・・・・・・全く・・・・・・・こんな奴ら外に出して何がしたいのか僕には全く分からないよ」
「ごちゃごちゃうるさい！」
長柄川最終形態突入。以前より切れるスピードが速い。
或いはこの短気さが彼女の導火線なのか。だから彼女は爆弾だと。
恐らく隼人ならそういう理由づけをするだろう。

「私の進化は貴方に対する怒りから目覚めている。こんな空間破壊してみせる！！」
長柄川は隼人に触れた。
「！」
瞬間、光る。同時に爆音。

隼人は煙の中へと消えた。
「隼人！」
「焦るなよ、ソウメイ君。この空間はダメージは消えるんだ。だから痛みも火傷も今はないのさ。解除しても食らうのはダメージだけだ。火傷とか麻痺とか凍傷とかは全く意味がない」

隼人は一気にそう言って長柄川を背負って帰ってきた。
どうやら気絶しているようだ。って・・・・・・この空間では気絶も出来ないはずでは・・・・・・？

「解除」

隼人は空間を消す。
これで痛みは元に戻る。故に、爆弾ももう一度爆発するし、海馬や雅、音河も気絶し、長堂寺と丹波に足にさした剣の痛みを受ける事になる。

そう思ったのだが
「・・・・・・あれ？」
「・・・・・・なんともないぞ」
音河と海馬と雅は倒れずに立ったままだが、長堂寺と丹波は剣の痛みに
「あああああああああああああああああああああ！！」
と悶えている。
そして長柄川は気絶したままだ。

「僕のキングダムの進化系だ。特定の人間の痛みを消す事が出来る。また、その空間内でも相手にダメージを与える事が出来るのさ」
と隼人は静かに言った。
確かに隼人にも爆弾のダメージは見受けられない。

「隼人も進化したのか」
「まあね。さてと・・・・・・」
隼人はそれだけ言うと眠るように目をつぶった。

「君らは王城グループの行動を阻止しようとしてくれている。それ

はとても助かる。あの幹部の仙波が勝手なことばっかりするから僕としても嬉しい限りだ。まぁ僕の君らに対する未練をなくすためらしいけど」
「よかった。で、隼人――」
「僕は君らのところには戻らない」

・・・・・・は？
「・・・・・・な、何言ってんだ」
「彼らのやっていることは確かに許しがたい。でも、僕がその未練を失くせば君らに対して攻撃する事はない。だからこれから君らに攻撃がくることはないだろう」
「おい、隼人」
「それに王城が危機に瀕していることは否定できない事実だ。僕は王城を滅ぼすわけにはいけない」
「隼人！！」
俺は叫んだ。

「お前、何言ってんだよ・・・・・・」
「これが僕のやり方なのさ。僕が君らを守るために選んだ方法だ。だから能力もあんな風に進化した」
「それでいいのか・・・・・・？それが正しいのか！」
「知らないよ。正しいかも間違えているのかも。だけど僕は・・・・・・」
そう言って隼人は目を開いて、言った。

「君らが襲撃に来るというのなら、僕は全力で迎え撃つ」

17ー敵対ー（後書き）

その中でも信じられる敵を探しましょう。

それがライバルであり、仲間です！

18 ―如何―（前書き）

どうするのか。

どうすればいいのか。

18 ―如何―

龍兵衛さんはすぐに来た。
「仕事が速いな。レッドテイルは全員確保終了か・・・・・・」
「後は、木好さんとその他ですね」
「ああ。まぁその他の奴らは偶然外に出ただけだろう。おそらくお前らみたいなのではない」
「分かりました。ありがとうございました」
遊園地で簡単な確認と会話だけを済ませて、龍兵衛さんと別の作業を開始した。
俺の右手や雅の行動力で彼らが仕掛けた全ての爆弾を集め終えた。

隼人は敵対宣言をして、そのまますぐに身を翻して消えて行った。
俺達は――少なくとも俺はその場から動く事は出来ず、隼人を追いかけることはかなわなかった。

君らが襲撃に来るというのなら、僕は全力で迎え撃つ

隼人はそう言っていた。

俺達と戦う。そういう意味だろう。

「どうするんだ？嘉島？」
帰り道で海馬が言った。
「どうするって何を？」
「襲撃だよ。もうこれ以上事件は起きないんだろ？だったら王城グループに攻撃する必要はないだろ？」
「ないっていうか出来ないよ。事件が起きないんなら警察側は行動

できないからな」
「だからどうするのかって訊いてんだ」
海馬はそう言って少し前を歩いていた俺の肩を掴む。俺はその場に止まる。
「俺達が単独で行動を開始すんのか？」
「・・・・・・分からないよ」
「分からないってそんな・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・」
俺は海馬の手を肩から外させて、帰路をもう一度踏みしめ始めた。

家につく頃には夕方になっていた。どうやら爆弾回収の作業に思ったよりも時間が掛かっていたようだ。
「遅かったわね」
その時、玄関に虎郷が居た。
「よう。虎郷」
「何かあったみたいね」
「まぁな。中で話すよ」
俺はそう言って止まることなく、家の中に入った。

俺はその日の出来事を話した。レッドテイルが現れたこと、能力の進化、隼人がそこに現れたこと。それら全てである。

「なるほど。忙しかったようね」
「まぁな。で、そっちはどうだった？」
「これといって収穫無しね。それより、本当にどうするつもりなのかしら」
虎郷はそう言って、俺を睨む。
海馬と同じ事か・・・・・・。
「隼人の事か？」

「そう。どうするの？襲撃には行くのかしら？」
「・・・・・・・・・・・・・」
俺は相変わらず黙る。
自分でもどうしていいか分からないのだ。
「・・・・・・まぁいいわ。夕食にしましょう」
そう言って虎郷は立ち上がった。

音河は悲しそうな顔をして、
雅は思案顔で、
海馬は俺を一瞥して
俺は悩みながら
それぞれ自分の部屋へと入っていった。
これから一体どうすればいいのか。それを考えていた。

結局、夕食までに考えが纏まるはずもなく、そのまま食卓のテーブルを囲んだ。
メニューはいう必要はないかもしれないが、一応紹介しておくと、ほうれん草のおひたし、さばの味噌煮、ご飯とみそ汁。朝食と夕飯の両方に利用できそうなメニューである。
「・・・・・・」
口数が明らかに少ない。というか誰も口を開かない。
そして結局夕飯も終わり、俺は自分の部屋へと帰ろうとしていたところだった。
「あの」
雅が口を開いた。
「虎郷さんはもしかして王城さんがあそこに現れることを知ってい

たんじゃないですか？」
雅は虎郷を睨むわけではなく、少し悲しそうな表情で訊いた。どうやら、仲間内にそういう質問をするのは苦のようだ。
・・・・・・・で。
「・・・・・・は？」
というのが俺の反応だった。
もしかして、雅の思案顔はこれのことだったのだろうか。

「虎郷さんなら見えていたはずです。私達が遊園地に行くと、そこにレッドテイルが現れることを。危険が迫っていることでしたから」
「ちょ・・・ちょっと待ってよ、雅ちゃん」
音河が雅の話を止める。
「例えそうだったとして、どうしてレッドテイルが現れるのを知っていて教えてくれなかったの？そんな場所で事件が発生したら危険が及ぶんじゃない？」
「事件を止められる事も見えていたんでしょう。それに虎郷さんは王城さんが現れることを知っていたんだとすれば止められません。あそこに王城さんを現れさせる必要がありますから」
「・・・・・・・・・・・・・・」
音河は少し青ざめた顔で椅子に座り込んだ。

「・・・・・・そうですか？虎郷さん」
「９０点ね」
虎郷はそう言った割には笑顔ではなかった。
「認めるってことか・・・・・・？」
「ええ。私は見えていたわ。貴方が遊園地に行く事も、それを狙ってレッドテイルが現れることも」
虎郷はそう言った。
「だとすれば何故９０点なんですか？」
雅は虎郷に訊く。別に点数が１００点でなかったことに不満なわ

けではなさそうだ。

「王城君がそこにいたのは、私がその情報を知らせたからよ」

虎郷はそう言った。

「この間拉致された時に、レッドテイルと彼らが遭遇したら王城君に連絡するように言われていたのよ」

「何で・・・・・・！？」

「貴方達と会うチャンスはそれくらいだったのよ。幹部の監視がかかっていても、レッドテイルを止めるくらいなら出来たって事でしょう。幹部には『自分達の仲間』に連絡するという言い訳で出てきたんでしょうね」

自分達の仲間――俺たちではなく、脱獄囚か・・・・・・。

レッドテイルと会うという理由なら恐らく見張りもつかなかったということだろう。

「でも、じゃあ何で隼人は帰ってこないんだ？」

「彼も言っていたでしょう？今、王城は会長と社長の不在により、状況は危ない。だから彼は私達の危険とは関係なく王城を継がなければならないのよ」

虎郷はそう言って、

「これが王城君のやり方よ」

と続けた。

隼人と同じような言い方で、虎郷が俺に向かって言った。

隼人はそこまでして俺達と自分を放そうとしている。

そして今更、警察が行動してまで王城グループに襲撃をするはずがない。だってもう危険性のある事件は起きないのだから。

とすれば。

俺達は何もせずにこのまま隼人を――

そう考えていた俺に、

「で？これからどうするの？」
と虎郷が言った。

１９ー理解ー（前書き）

理解するということは認めるということ。

19－理解－

「どうするって・・・・・・？」
俺は虎郷の反応には相変わらずそういう反応しか出来なかった。
「王城君を助けるのか、助けないのか」
「助けるって・・・・・・それはアクターには出来ない――」
「彼は今、昔の私達と同じなのよ。雅とは少し違うけど」
虎郷は無視して言った。
虎郷や海馬、そして音河と同じ・・・・・・。
「彼は今、自分を捜しているのよ。響花の前で堂々と宣言したし、私達にも教えてくれたでしょう？自分の目的を」
隼人の目的・・・・・・。
それははっきりと覚えている。俺を誘う時に何よりもまず宣言した。

「彼は今、自分の目的から遠ざかっている」
「でも、隼人は王城グループを倒すわけには行かないだろ？それは自分の家がなくなるって事で・・・・・・それに、目的のための王城グループが滅ぶのは防がないといけないはずだろ？」
「そう。でも、平常の彼なら絶対にそんなことはしない。いつもの彼ならある可能性に気付いたはず。それだけ状況が危なかったのね。時期的にも考えて、それは響花との婚約選挙に出るぐらいのときに起きたのだと考えれば、全ての理由付けにはなる」
と虎郷が根拠を明確に表示する。
「・・・・・・でも、俺達は助けられるのか？俺達はそれでいいのか？」
「・・・・・・何を言ってるの？」
「前までは俺は自分の考えは自分であった。でも、隼人と関わってからあらゆることをアイツに頼ってきた。自分で物事を考えられな

くなってきたんだ。これからどうすればいいのか。正しい事は何なのか。俺がやっていることは正しいのか。それらが分からないんだよ」
「・・・・・・」
「俺は今、何がしたいのかも、何が正しいのかも、何をすればいいのかも、何をしちゃだめなのかも支持されないと分からない」
俺は馬鹿にされたり、ヘタレ呼ばわりされる事もいとわずに、正直に告白した。
そして、続けた。
「俺は・・・・・・何をすればいいんだ」
俺は虎郷を見る。
虎郷は下を向く。そして、今度は王城のように電灯を見た。
そして次に口から出た言葉は、

「だとすればそれが貴方のすべき事でしょう？」
だった。
「何をすればいいのか分からない。分からないのは王城君がいないから。そうでしょ？」
「・・・・・・」
「それは貴方が王城君が必要なのよ」
虎郷は更に続ける。
「王城君のことを知らずに求めている。あなたには王城君が必要なのよ。それは私達と一緒」
「お前らと・・・・・・」
「そして王城君とも一緒よ。それが仲間なんだから」
「仲間・・・・・・」
「貴方も彼と会ったとき、何かをもらったんでしょう？私達と同じでね」
俺がもらった物・・・・・・。
虎郷や海馬、音河に雅がもらった物・・・・・・。

「・・・・・・っし・・・・・・・」
「どう？嘉島君――」
「しゃあああああああああああああああああああああ！！」
と、突然の俺の大声に世界が震撼――とまではいかなかったが、少なくとも４人を震わせるくらいはできた。

「やるぞ！諦めてたまるか！逃げてたまるか！腕を引きちぎってでも、隼人を連れて変える！！」
「・・・・・・そ、そうか」
海馬が若干引き気味に言った。
「絶対に、助けて見せる！待ってろ隼人！！」
俺はもう一度そう叫んで、

「寝る！」
と言って部屋に戻った。
皆は少し怖がった目で俺を見ていたが、そんなことを一々気にせずに宣言どおり、眠りについた。

２０ー会議ー（前書き）

話し合い。

それが一番の解決法だとよく言う。しかし、それはその場を丸く収めたいという大人の願望を子どもに押し付けているに過ぎない。問題を起こしたくないから、こうして話し合いと言う方法を取らされているのだ。

では、こうしよう。我々は未練を残さないためにも物事に対して殴り合いで決着を付けると。

２０ー会議ー

次の日・・・すなわち、２２日木曜日。
朝、いつもどおり、２番目に目覚めた（１番目は虎郷）俺は
「・・・・・・どうやら事はそう簡単には進まないようだな」
と虎郷に話しかけた。虎郷はキッチンで朝食作り。朝は基本、俺か虎郷か海馬が担当する。
「そうね」
「ああ。隼人の言った通りにはなりそうもない」
と会話していると、
「何か有ったのか？」
言いながら海馬がリビングにやってきた。コイツはいつも示し合わせたかのように、俺が起きてすぐに目覚める。

「・・・・・・コイツは・・・・・・・」
海馬も止まる。
「・・・・・・取り敢えず、皆が集まってからにしよう。そして今日は学校へ行く」
「マジかよ。今すぐにでも対応すべきじゃないのか？」
「そうは言っても私達は受験生よ？学校へ行くのは当然でしょう」
「・・・・・・分かったよ・・・・・・」
話し合いの結果、俺達は現在はこれに関しては触れない方針にした。

そして、朝食。全員が制服に着替えて食卓に集合。
「・・・・・・あの」
「雅。言いたいことは分かる。が、取り敢えずは今日の予定だ」
と、率先して海馬が議長を始める。

「まず、今日は学校に行く。そして、授業が終わったら部活動は・・・・・・誰も入ってないからそのまま帰って来い。それから、コレ・・・・・・」
といって、海馬が指差した先。
「この崩壊した壁について考えよう」

そう。
俺達の家のリビングの壁。それが1日にして崩壊していた。
俺達が起きないようにこんな仕事をしてのけるとは・・・・・・。
「恐らく、王城グループだよね？隼人の部屋もあらされてたし・・・・・」
音河はどうやらコレを見たときに、隼人の部屋を真っ直ぐ見に行ったようだ。
「多分な。俺達が危害を加えられてないのが不思議なくらいだ」
俺がそう答えると、
「でも目的は何でしょうか？」
と雅が訊いた。それに対して
「恐らく俺達への警告。これ以上王城には関わるなという意味だろう」
海馬が的確な解答で答えた。
となれば。
「だとして、結局のところその幹部ってのは何がしたいんだろうな」
俺は自分の疑問を皆に投げかける。
「どういう意味ですか？」
「いや、ここまでして隼人を俺達と引き離そうとしている。でも、隼人を王城グループの人間として機能させるつもりはない。こんな事して意味あるのかな？って」
「・・・・・・確かにそうね」
と、虎郷が頷く。

「いつもの王城君なら何かに気付いたと思うし・・・・・・もしかすると、それもある可能性の裏づけかもしれないわね」
「ある可能性？」
そういえば昨日も言っていたような気がする。
「そのある可能性ってのは何なんだ？」

「・・・・・ここで言うべきではないでしょうね」
そう言って、虎郷は周囲をぐるりと見渡す。

「どうかしたのか？」
「どうして、こうやって私達に警告して来たのかしらね」
虎郷は突然そう言った。
「どうして？」
「だって王城君は私達に敵対宣言までした。だとすれば向こう側にとって、私達に攻撃する意味はなくなったんじゃない？」
「それは・・・・・・」
確かにそうだ。向こうからすれば俺達は諦めたということで収集がついたはず。
だとすれば・・・・・・どうなるんだ？

「・・・・・まさか！」
雅が叫んだ。どうやら気付いたらしい。
「・・・・・多分ここね」
そう言って虎郷がしゃがみこんだ場所にあったのは・・・・・。

「・・・コンセント？」
「じゃないわよ」
「いや、それはコンセントだろ」
彼女がしゃがみこんだ場所にあったのはコンセントだった。特に何か挿しているわけでもない。

「・・・・・・ンッ！」
と虎郷が力を込めて、無理やりコンセントの基盤を引っこ抜いた。
「何して――」
「ほら有った」
そう言って虎郷は俺達にそれを見せた。

「・・・・・・それは？」
海馬が恐る恐る訊く。どうやら彼も気付いたようだ。
「盗聴器ね」
「と、盗聴器！？」
「だから私達がまだ反抗しようとしている事に気付いたのよ」
そう言って、虎郷はその基盤を靴下のまま踏み潰した。
鋭い音を立てて、それは砕け散った。

「さて、朝食にしましょう。早く学校に行かないと遅刻するわ」
「・・・・・・そうだな」
俺の発言を筆頭に、全員席について、静かに朝食を摂り始めた。

朝食が終わり、俺達は家を出る。

「行って来ます」
律儀に挨拶した、久しぶりの登校だった。

20－会議－（後書き）

そして河川敷で語らうのだ。
「お前強いな」
「お前もな」
と。
これが理想の解決法だ。

21ー味方ー（前書き）

学校で友達が出来ずに悩んでいる君！

大丈夫！全世界の二次元が味方している！！

21ー味方ー

そして夕方、学校から帰宅。
学校に行っている間の家の保護と修理は警察にお願いしておいた。
海馬と2人で家に帰る。どうやら俺達が一番乗りのようだ。
リビングに到着。荷物を置いて、ソファーに座り込む。
「・・・・・・海馬」
「どうした？」
海馬の声が聞こえて俺は
「疲れた・・・・・・・・・・・・！！」
と、ソファーから溶けるようにうな垂れながら床へと転がり落ちた。

「・・・・・・。何か、ナメクジをみているようで嫌な気分だ」
「え？マジ？」
海馬の発言に羞恥心が目覚めて、俺は起き上がる。
「つーか、休んだ分が学校で進んでるんだぜ？追いつくのに必死だぜ・・・・・・。てかぶっちゃけると追いついてすらない」
「そうか」
「・・・・・・何か余裕だな」
「俺は受験でも何でも『運』で受かる男だからな」
「あっそ」
ずるいな・・・・・。俺も運が良い能力が良かったよ。
でもコイツの願いみたいに俺のはすばらしく真面目なわけじゃない。
少しだけ自分の話をすると、俺の能力の発端は、姉の『昏睡状態』にある。俺は姉さんの声が聞きたくて願望を持ち続けた。それがこの右手に反応したと言うわけだ。

閑話休題にする。俺がそう決めた。
で、それから３０分程度で、３人とも帰ってきた。

「龍兵衛さんのところへ行こう」
俺は着替えを済ませた後の会議で俺は初めにそう言った。
「何故でしょうか」
「まだ、俺達に協力してくれる意志はあるのかどうか」
「協力する意志・・・・・・ね・・・・・・」
と虎郷は意味深に呟く。
「そもそも協力なんか求めちゃいけないわ」
「・・・・・・何故」
「あっちは警察よ？その気になれば権力で――」
「その権力に負けずに上層部に掛け合った龍兵衛さんや隼人が閉じ込められているから代わりに情報を集めている協力者さんがいるだろう」
俺はそう言って虎郷を見る。
虎郷は少し驚いたように目を見開いている。

「俺は味方が居る可能性は全て使う。絶対に隼人を救い出す」
「・・・・・・男子って立ち直り早いのね」
虎郷があきれたように言ったが
「いや、全ての男子って訳じゃないと思うよ」
と音河が訂正を入れる。
「というか、立ち直りが早いんじゃなくて、前回よりテンションが高い状態で復活してんだよ」
更に海馬が追い討ち（？）をかけ、
「奏明さんは元気いいですね！」
と雅が無意識の棘をぶつけてくる。

・・・・・・俺なんかしたっけ？むしろ格好良いセリフ言ったくらいだと思うけど。

「そ。では警察署に行きましょうか」
「後、木好って奴と、他の脱獄囚である残り3人も捕まえないとな」
「そうだね」
と、雅と海馬と音河が会話しながら玄関に向かう。

「・・・・・・」
「どうしたの。行かないの？」
と虎郷が聞いてくる。
「・・・・・・虎郷」
「何？」
「お前、木好さんに出くわしたらどうするんだ？」
「さぁ。そんなの分からないわ」
「・・・・・・その時は俺が守る」
そう言ったつもりだったけど。

「何？」
「え？」
「『その時は』何？」
「あ、いや・・・・・・その時は・・・・・・」
俺は口篭(くちごも)る。聞こえてなかったのか・・・・・・。さっきは勢いで言っちゃったしな・・・・・・。
「き、気をつけろよ」
あーあ。

「・・・・・・ご忠告どうも」
と、首肯しかねる顔で玄関に向かっていった。
「・・・・・・はぁ」

コレが奥手という奴なのだろうか。
俺にはそういう度胸はないなぁ。
と隼人の事以外でも真剣に悩む内容が出来てしまった。

22ー始動ー（前書き）

本当は『再始動』にしたかったけど、今回は2文字統一なので。

今回は文字数が異常に多くなっております。推理の方向に走っていますので。

情報がメチャクチャ多いので気をつけてください。

これ学園じゃない気もしますが、まぁいいってことにします。

22ー始動ー

警察署での龍兵衛さんの開口一番のセリフはこうだった。俺達が何を訊くでもなく、いきなり

「諦めねーし、逃げねーよ。全員その方向性で固まってる」

と俺達を見た瞬間に言った。

「・・・・・・はい？」

「どうせ、アレだろ？心配したんだろ？この間の隼人のセリフで事態の収拾がついて、俺達が襲撃作戦を取りやめるんじゃないかって」

「・・・・・・そうです」

「冗談じゃないな。俺達は絶対に諦めない。逃げたりしない。大体、そいつらが警察署爆破したのに関与しているっていうネタは上がってんだ。俺達はそれを元に逮捕状請求、ガサ入れ・・・・・・じゃ分からないか。『家宅捜索』って方針で行くんだよ。あいつらはどうせ抵抗してくるんだろうから、俺達は襲撃って言ってるだけで、実際はただの逮捕劇だ」

「でも、龍兵衛さんよ」

海馬が俺の代わりに口を開いた。

「相手は王城だぜ？こっちは分が悪いと思うが？それこそ戦車でも借りてくればいいけどよ」

「ああ。手配してある」

「つってもよ――――」

海馬が止まる。俺も止まる。というか、俺達の思考と視線、及びそれに基づく身体が停止した。

「・・・・・・戦車・・・・・・手配したんすか？」

海馬が震えながら訊く。

「ああ。当たり前だ」
「・・・・・・そんなのどうやって？」
「兄弟だ。ってか、お前ならよく知っているだろう？」
「え？」
龍兵衛さんがそういって海馬を指差した。

「虎兵衛だよ。県　虎兵衛。お前のところの執事だろうが」
「・・・・・・なんでここで爺やの名前が？」
「だから兄弟だって。あっちが弟。向こうの方が老けてるから、兄貴に見られるけどよ」
・・・・・・なんだこの状況。
「って、じゃあこの間の『警備会社の知り合い』ってのは・・・・・・」
「虎兵衛だよ。アイツ警備会社と繋がってんだろ？」

ちなみに上記の情報は全てしっかりと記述してあります。少し過去をさかのぼればあるでしょう。
たまには語り部もしっかり仕事しなければいけないなと痛感させられた。俺が説明していなかったら、独壇場になるだろう。

「マジかよ・・・・・・」
海馬はプチショックを受けていて少し思考停止気味に作動している。いや、していないのか。
いかん・・・俺まで分からなくなってきた・・・・・・。
どうやら皆もそんな感じらしい。
「で、戦車まで用意したという事は間違いなく私達に協力してくれるんですよね？」
そんな中、さすがターニング・ポイントというべきか、さっさと忘れたように、龍兵衛さんに質問している。
「ああ。で、お前らには２４日の深夜０時までに、出来る限りの脱

走者逮捕を頼む」
「できれば木好さん以外の3人の情報を教えてください」
「いいぜ。木好はのことは、後で虎郷か嘉島かにでも訊いてくれ」
「了解しました」
「じゃ、データで渡すからちょっと待ってろ」
そう言って龍兵衛さんは置くの部屋（捜査本部と書いてある）に入っていった。

待っている間に、テンションを戻した海馬が
「戦車・・・・・・か」
と呟いた。
「そんなものまで用意しないといけないんですか？」
「王城ならどっかの傭兵とか連れてくるかもしれないからな・・・・・・」
「そうなんですか・・・・・・」

雅と海馬が会話を進めている中、

「隼人の協力者って誰なのかな？」
と音河が虎郷に訊く。
「あら。気付いていないの？」
虎郷は少し驚いたように言う。
「え」
「・・・・・・まぁいいわ」
「ちょ。え、誰？」
「教えない」
「そんな！」

と、女子2人の会話も聞こえる。

そんな中考える。
本当に隼人がそこまで必要なのだろうか。今、こうやって組織として動かしている以上、幹部の奴だけでも組織としての機能は出来る。だとすれば、その幹部が王城グループを統率すれば良い。それは幹部の人間にとっては嬉しい事態に違いない。しかしそれでも隼人を引き入れようとしている。
そもそも、どうして隼人でなければならないのだろう。今すぐにでも隼人でなければならない理由は？
隼人の父親・・・・・・つまり社長が居ない。そして会長が病床に就いている。だから幹部が暴れている。
だがしかし、いくら隼人の父親だとは言っても――つまり猪突猛進だとしても、幹部が暴れている言い訳にはならない。アイツの父親であると言う時点で、隼人よりも上の頭脳のはずだ。だとすれば、幹部の暴走くらい気付くはず。
もしかしてわざと幹部を暴れさせているのか？いや、しかしそうだとしてもメリットが・・・・・・。

「待たせたな」
そう言って龍兵衛さんがやってきた。
「3人の情報だな。
1人目：如月　戦（いくさ）　殺人罪。つーか、如月家は昔から殺人とかそういう方針に固まりやすいらしい。人を殺す才能がある。もちろん、使わなかった奴もいるけど、基本的には暗殺者とか殺し屋とかで捕まらなかったりしている。コイツが馬鹿な方だ。
2人目：一条字　雷（らい）　同じく殺人罪と殺人教唆とか、後は強盗とか。裏の王者、一条字だ。ヤクザだな。コイツは証拠を残さなかったり、他の奴らにやらせるから捕まえるのに時間が掛かったんだけど、公務執行妨害で捕まえて、それらを再逮捕の方針で捕まえた。にもかかわらず今回逃げられたんだよな・・・・・・。
3人目：x　殺人。コイツは本名が分からない。だから情報も少

ないと思うんだ。名前が分からないのは、こいつがどっかの会社に居たっぽいんだけど、記憶喪失になって、怒りが制御できず、その会社の人間全員殺した。家族は既に死んでいたらしくて、分からない。んで、コイツが誰かを殺す時、毎回こう言うんだよ。

『僕は誰でしょう』

ってな。自分のことを知っている奴を探しているらしい。ちなみに知らないって言うと、殺されるし、知っているって言っても、それについて聞かれた後殺される。こいつと出会って生きていた人間は、1人。コイツを捕まえた少年だけだ。警察官も殺されかけたくらいだからな」

・・・・・・うん。情報が濃いな。

取り敢えず3人の情報のファイルをもらって、雅に渡す。あいつが1番適応力が早いだろう。

「それにしてもどうしてこんな重罪ばかりが出て行っているんですか？」

「重罪っつーか全員死刑囚だ。お前らの連れてくる奴らは異常だからそれなりに拘束力の高い刑務所に入れたんだよ。そこにコイツらが居た。それだけ。

ちなみに爆発させたのはやっぱりあの女子だったな。看守の1人が王城グループに命令されて、拘束具を外したらしい」

「その看守は？」

「ボン！と、消え去った」

・・・・・・爆破に巻き込まれたって訳か。

「取り敢えず、今ある情報はそれくらいだ。・・・・・・今日はもう遅いから、24日の0時までに4人。頑張ってくれ」

「了解です」

俺がそう言うと龍兵衛さんは部屋の中に入っていった。

ココに長居する用事もなかったので、俺達はそのまま警察署を出た。

22 ―始動―（後書き）

長かったですよね。申し訳ないです。でもこんな感じです。

ちなみに、警察に関する知識をいくつか入れました。皆ご存知だと思いますが、分からなければ申し訳ありません。

23 ―遣使―（前書き）

→

この場合の意味は『パシリ』です。

23 ―遣使―

気付けばもう既に１９時を回っていた。
帰路を踏みしめながら考える。
明日までに3人か・・・・・・・。
その途中で、
「これからどうする？」
と海馬が口を開いた。
「海馬・・・・・最近会話を始める時はそればかりだな」
「そりゃそうだろ。俺は何をすればいいか分からないんだから」
「だからって・・・・・・・」
少し疲れたような気分になる。だって、俺だって何から始めればいいか分からないんだから。
「ともかく、家に帰ってから考えましょう。なんだか今日は疲れた気分です」
と、本当につらそうに雅が言った。
「俺の出番だな」
と海馬が俺のところから、雅のところに行く。
そして雅に向かって言った。
「おんぶとお姫様抱っこどっちがいい？」
「既に二択！？」
雅は珍しく叫んで反応した。恐らく、俺達残りも同意見の反応だっただろう。
「お前調子悪いんだろ？」
「いや、それは・・・・・・」
「よいしょ」
有無を言わさず雅を背負う。
「うわ！」

「よし、海馬号発進！」
「降ろしてください！」
「思ったよりも重いな」
「しかも失礼！？」
「いいか？」
海馬は背中の雅を見て言う。
「疲れた奴は誰かを頼っていいんだ。お前は頼るのに慣れていない。王城と同じでな」
「格好の良い事言って、ごまかさないで下さい」
「よし、行くぞ」
「降ーろーせー！！」
という、妙な会話で海馬が走り始めた。うん、アレはどちらかと言えば「兄妹」だな。海馬は身長が高いし、雅は少し低いから。

「・・・・・・あの2人はやっぱり元気が良いね」
音河が微笑んで言った。
「そう・・・・・・だな」
微笑ましい光景である事は否定しないが・・・・・・。
人目は憚(はばか)って欲しい。道中の人々の視線を一気に集めてしまった。

＝＝＝

れは家事には向いていない様だ。
リビングには雅を除いた４人。
「夕飯作ろうか？」
俺が率先して立ち上がった。
「よろしく」
「よろしく」
「私も手伝うわ」
上２人が海馬と音河で、一番下が虎郷だ。ちなみに虎郷の器用さはあらゆる方向に向いている。
というか、人間性分かれるよなー。

「さて、何作る？」
「カレーかな」
「どうして？」
「２日目のカレーが美味いから、明日カツカレーでゲン担ぎと行きたいな」
「ではそうしましょうか」
「材料はあるか？」
「あるわよ」
軽く会話して、俺の不器用さを馬鹿にされながら、カレーを作り終えた。

雅を呼んで（すでにケロッとした顔になっていた）、皆で食卓を囲み、
「いただきます」
という俺の号令で、４人も同時に言う。
俺達に置いて静かな食卓などという物はなく、いつもざわついているのが基本だ。

で、それは例外なく、だ。
一々描写を入れるのが面倒なので、口調だけで誰か考えてください。

「人のこと背負っておいて、重いってのはどうなんでしょう」
「いや、あー・・・・・・冗談だ」
「口篭ってるから明らかに怪しいよ・・・・・・」
「嘉島君、醤油とって」
「あいよ」
「つーか元気になれたんなら俺が背負う必要なかったじゃん」
「それとこれとは話が別です」
「貴方達の痴話喧嘩は後で別の場所でしてくれる？」
「嘉島ー、醤油ー」
「あいよ」
「そうですよ、正先輩。こんな会話は始めないで下さい」
「雅ちゃんが始めたじゃん・・・・・・」
「そうね。常盤が始めた事だから、貴方に責任があるわね。どう責任とってもらおうかしら」
「嘉島。醤油」
「あいよ」
「責任って・・・・・・火水。どうやって取らせるつもりなの？」
「何かやらせたら、ぶっ殺すぞ！！」
「私のイメージって最悪なのかしら」
「奏明さん、醤油お願いします」
「あいよ」

みたいな感じである。ふむ。俺ってつかいっぱしりなのだろうか。

夕食が終わって、
「のど渇いたな」
俺がそう言うと、
「あー・・・ジュースでも買ってりゃよかったな」
と、海馬が応じる。
「私はカルピス」
「私は・・・・・・オレンジジュースで」
「炭酸系でお願いします」
「俺は紅茶で」
「は？」
・・・・・・もしかしてこれは・・・・・・

「嘉島君」
「嘉島ー」
「嘉島」
「奏明さん」
「・・・・・・・・・・・・何？」
「「「「ジュース買ってきて」」」」

・・・・・・本格的にパシり化してしまった。

「ったく、面倒だよ・・・・・・」
俺はお金を持って、玄関からコンビニ向かって歩き始めた。
・・・・・・。
いや、特筆すべき事態ではないと思うんだけど・・・・・・。

酔っ払いみたいに倒れている人がそこに居た。電柱にもたれて座っている。

「あー・・・・・・」

放っておくわけには行かないよな・・・・・・。

「大丈夫ですか？」

「・・・・・・あー・・・・・・大丈夫だ」

そう言って、その男の人は立ち上がる。

「んー。すまん、最近は状況がよく分からず寝てしまうんだ」

「そうなんですか？」

酔っ払いではなかったようだ。うむ、安心安心。

「大丈夫なんですよね？」

「ああ。心配するな。僕はこう見えても頭以外の部分に怪我を負った覚えはない」

それは覚えていないだけでは？

俺は言わなかったのに、

「覚えてないだけかもしれないが」

と答えた。

「それにしても、こんな夜中に出歩くとは・・・・・・見た目は中学生か高校生だろう？帰ったほうがいいんじゃないか？」

「心配要りませんよ。俺は、そんなやわな人間ではありません」

「そうか。強いのか？」

「ええ。常人よりは」

「ふむ。ところで、今、僕は現状が分からないんだ。一つしても良いだろうか？」

「はい。何ですか？」

俺の問を待っていたかのように、その男の人は嫌な笑顔を浮かべた。

そして言った。

「僕は誰でしょう」

「！！」

僕は後ろに跳んだ。

反射・・・というには些(いささ)か遅すぎた。俺のパーカーに明らかな太刀筋が出来たからだ。

というか、明らかにおかしい。どこから2メートル弱の刀なんか出したんだ。

それは物理的法則を無視している！！

「あれ？避けた？もしかして僕のこと知ってた？」

「・・・・・マジかよ」

23 ―遣使―（後書き）

嘉島君が大変だ！助けなきゃ！

ウソッピ。

２４ー殺人ー（前書き）

間違えて、シンデレラバトローションに投稿してました。

深くお詫び申し上げます。

２４ー殺人ー

「で。僕の何知ってんの？過去？現在？未来？」
「未来が見たけりゃ、うちの女子に頼め」
「あー・・・・・・・。それは『フューチャー・ライン』か？」
「・・・・・・知ってんのかよ」
「お！あたりか！言ってみるもんだな。てことは、お前も『何か』なんだな？」
何故か陽気になる。
「言う必要は？」
「ナッシング」
男は俺の胸に向かって、２メートル弱の刀を突いてくる。
俺は刀に手を添える形で避ける。コレは突然の刀の横薙ぎを避けるためだ。
「あっちゃー・・・・・・・。マジでコイツは常人より修羅場慣れしてるわ」
「お前・・・・・・・xだよな？死刑囚の」
「あ」
男は動きを止める。
「そっち知ってたのか。なーんだ。過去を知っているわけじゃないのか。じゃ、いいや」
そう言って刀を戻した。
そして、突然現れたのと同じように突然消えた。
「じゃ。また会う日まで」
「は？」
宣言通り俺から背を向けて歩き始めた。俺の目的地とは違う方向だ。
「・・・・・・おい、ちょっと待てよ」
俺は追いかける。

そして、肩に掴みかかろうと手を伸ば――――。
「！」
刀が僕の右頬の横を通過した。現在その刀は僕の右肩に置かれている。
「あれ。また避けられた」
男はこちらを見ずにそう言った。刀は、その男の右手に握られ、俺の方に向けられている。
「お前みたいなタイプは大概、他人に優しかったり、犯罪者をみすみす見逃せないタイプだからな。いい案だと思ったのに・・・・・・」
「お前・・・・・・」
ギリギリ何かが見えたから反射的に避けたとしか言いようがない。なんて真似しやがるこいつ。
「てな感じで」
そのまま右手の刀を横薙ぎに振る。俺は同時にしゃがむ。だって、首切られたくねえもん。
「このまま、どんどん行くぜ？」
「できれば遠慮したいかも」
「それこそ無意味だ」
そのまま刀を叩きつけるように、しゃがんでいる僕に向かって振った。
というか、あの突然登場した刀は何だ。アレはもしかして『アクター』なのか？そんな最強説を打ち上げようとしているのかこの殺人鬼は。
だが、龍兵衛さんは能力者じゃないって言っていた――――いや、待て。その根拠は何だ。コイツに関わった人間は全員死んでいる。だとすれば逮捕された時、警察たちに攻撃できなかったわけじゃない。コイツの力は武器を出せるんだから。とすれば、原因はコイツの内部か或いは、逮捕したという少年。ソイツが怪しい。

「ちょ、話さないか？」
怖さと焦りで、最初は言葉に詰まったが、何とか言い切ることは出来た。
「何？」
「お前のその力は、いつ出来たんだ？」
「この間、脱獄したときから。逮捕されたときにはなかった力だ」
「は？」
じゃあ、そんな短い期間で、俺とほぼ同様の知識を得たという事か？
「何か、この間あった奴に貰ったんだよ」
「も、貰った？」
「うん。何かよく分からない奴に。『これは［異能］だ。君にやる。僕には要らない。使い方を教えておくから、勝手にやってくれ』だってさ。その時に色々訊いた。」
貰ったって・・・。そいつは何者だ？
「で。お前は何？」
・・・・・・。コイツにその話を訊いても無駄だろう。だったら今は今で何とかするしかない。
「ま、いいか。どうせ殺すし」
そう言って男は刀を持った右手をぶら下げた。
「『キラー・ミラー』だそうだ。あらゆる武器を自分で出せる。そういう能力。さらに」
刀を持っていた右手からもう1本、左手にもう1本。合計4本。
「増殖に限界はない。いくらでも増やせる」
「・・・・・・だからなんだ」
「？」
男は不思議そうな顔をする。
「どういうことだ？」
「お前の刀の射程範囲に入らなかったら、意味がないだろ？刀はお前の腕の長さから考えても、4メートルが限界値だ」

「・・・・・・あー・・・・・・・そういうことか」
そう言って男は笑うと、さらに
「僕に射程距離は関係ない」
と続けた。
「どこであろうがお前を殺してみせる」
「何だ？その刀に追尾性能でもついているのか？」
「そんなわけないじゃん」
と、そこで。
ぱん。

という音がして。
「・・・・・・は・・・・・・？」
俺の肩が撃ち抜かれた。
「言ったろ？あらゆる武器を取り出せるって。刀だけだと思っちゃ負けだろ」
「・・・・・・いっっっってぇぇぇぁぁぁぁぁぁぁぁ」
無様ながら叫んだ。

そいつは刀をしまった右手に、銃を持っていた。
「な、何なんだ！」
「アクターだろ？お前ら風に言うと」
「・・・・・・くっそ！」
とうとう、俺も運の尽きだろうか。
どちらにせよこのままでは負ける。

・・・・・・殺される！！

25 ―恐怖―（前書き）

テスト嫌だ。

25 ―恐怖―

殺される・・・・・・。
殺される殺される殺される

「！！」
動けない。
動く事を拒否しているような感じだ。
金縛り・・・・・・！！
「殺す」
静かにもう1度宣言した。
瞬間、呪縛が解けたように体が動く。
咄嗟に俺は左手を刀に向けてぶつける。拳の形で。
普通なら痛みで触れた物ではないが、俺の左手は特殊だから。
刀の形状を変化させた。
「・・・・・・！？」
男は瞬間に後ろに跳んだ。
「・・・・・・これがお前の力か」
「まぁな」
「まぁ。僕には無意味だな」
そう言って男は刀を消した。そしてもう一度取り出した時には刀は戻っていた。
「無意味か・・・・・・。本当にそうだな」
「ああ。本当なら『諦めろ』と言いたいところだが、まぁどうせ聞くはずもない」
「ご名答だな」
俺はそう言って、今度は自分から走り始めた。
「殺す」
「潰す！！」
俺は殺気を振り切るようにそう叫んで、相手の間合いに入る。
「・・・・・・元気のいいことだ。諦めを覚えろ」
男はそう言って刀を今度は叩きつけるように振る。
俺は体を半身にして避けて、そのままながら空きの腹に左手の掌底をぶつける。
相手の腹部を破壊するためだ。

「ぐッ！」
男は小さな悲鳴を上げて動きを止める。刀も消滅した。
そしてそこにひれ伏した。
「・・・・・・・」
・・・・・・だからといって油断できない。というかおかしい。
俺は殺すくらいの覚悟で攻撃した。本来、もっと大きなダメージを受けていると考えられる。それに殴った時の感触が人間の腹部とは異なっていた。もしサイボーグが居たら・・・という、そんな感触。まるで鉄でも触ったような・・・・・・！！
「・・・・・・・まさか・・・・・・鎧！？」
「・・・・・・そのまさかなんだが・・・・・・僕もまさかの気分だよ」
そう言ってようやく立ち上がった。
「刀を避けられた瞬間に武器として鎧を登場させたのだが・・・・・・お前の左手の掌底は凄いな。内臓がいくつか潰れるかと思った。本当に『潰す』だったな」
「・・・・・・・くっそ」
俺は撃たれた肩を抑える。向こうの武器は消えたが、弾丸は有りそうだ。つまり、アイツが「使った」武器は、アクターては無くなるようだ。

それにしても。
コイツに勝てるのか？俺は。どうやって勝つ？
どうする。俺はどうすればいいんだ。
お前ならどうするんだ・・・・・・！！
「ったく。お前の苦手そうなのでいくか」
男は俺を突き飛ばして、自分も後ろに下がる。
「お前のその左手はどうやら力を使うのに触れなければならないら

しい。しかもダメージをあまり受けないようにしないといけない。だから僕の刀には触れるのではなく、殴ったんだろ？」
そう言って刀を消す。
「てことは、だ。ダメージを絶対に受けるような方法でいけばいいんだろ？」
そして次に出てきた物は。
「！」
銃。しかもライフル系統だ。
「絶対にダメージを受ける手立てだ。コレをどう受けるのか・・・・・・」
笑った。嫌な笑いだ。殺す事を楽しむような。
俺の死を見ているのだろうか。

「最後の宣言だ。殺す」
男はそう言って銃弾の引き金を引いた。
ドンッ！
銃と俺の距離は約５メートル。
銃弾のスピードは想像していた程速くない。・・・・・・・わけじゃない。
だが、銃弾はしっかりと確認できる。俺の腹部を的確に狙おうとしている。
見える。
分かる。
この間と同じ感じだ。この雰囲気は・・・・・・どこにくるのか分かるような・・・・・・。そう、言うならば。
急激に理解力が高くなった感じだ。
俺は弾丸を避ける。
「は！？」

男は驚きで、動きを止めた。
その間に俺は距離を詰める。
「・・・・・・・・まだだ！！」
後1メートルの距離で立ち直り、次に出してきたのは
「殺す！！」
グレネードだった。ほぼゼロ距離で投げてきた。
「・・・・・・・！！」
俺はその動きを見て。
構造を理解する。これはそしてコレは蹴り飛ばしても大丈夫だと判断。
で、男の後方に蹴り飛ばした。そしてそのままの勢いで男の腹部を殴る。
「グッ……！！」
男は今度は後ろに吹き飛んだ。

「だが……痛みは少ない！！同じことをしても無駄だ！！」
それはそうだ。相手にダメージを与えられなかった事をしても意味がない。

しかし。
「さっきと同じだとすれば、ダメージを食らった後は『アクター』を使えないんだろ？」
俺の左手の攻撃を受けた、先ほどの対応を思い出す。
「つまり、今お前が使っている物は消えて、おまえが使っていない物は消えないわけだ。その証拠に俺の肩の弾丸はあるしな」
「だからどうした！！」
「つまり、それは残るわけだ」
俺が指さした先――つまり男の横にあったのは……
「！グレネード！？」
「そしてお前は鎧を出せない」

ダメージを受けたばかりだから。
俺は右手の指を銃の形にして笑いながら言った。

「チェックメイト」
「くっそ――――」

トゴォォォォォォ！！！！
グレネードは男の叫びをかき消すように炸裂音をたて、爆音とともに爆発した。

「……勝った」
そう呟いてから思い出した。
「ジュース……買わなきゃ……」

25 ―恐怖―（後書き）

前書きの事は僕の今の現状です。

26 ―三人―（前書き）

何を表すのかは自分で考えてくださいね。

答えはあとがきで。

26ー三人ー

俺はコンビニ（自動販売機がないほどの田舎だ）で、アイツらの欲しいジュースを買った。何か心配してくれたけれど、軽く受け流した。そして帰る。

「ただいま」
「遅かったわ・・・・・・ね・・・・・・・」
虎郷がこちらを見て止まる。
「ジュース買ってきたぞ」
「おーお疲れ」
「ありがとー」
「サンキューです」
と3人はこちらを見ずにそう言った。ソファーに座ってテレビを見ている。
「ほい」
と俺はジュースをそこに置いて、座った。
「それにしても遅か・・・・・・」
海馬が見る。止まる。
2人も目を向ける。止まる。
「あ、忘れ物」
俺は動いて、玄関に戻る。

そして帰ってきたときには、俺は男を引っ張っていた。
4人は俺の肩の弾痕や気絶した男を見て言った。

「「「「何コレ」」」」

「まさか戦ってくるとは・・・・・・」
「ギリギリで防御されたみたいで殺しまではしなかったが、俺は殺すくらいの覚悟だったな」
「それにしても貴方はどこでも戦おうとするのね」
「仕方ないだろ。向こうから殺しにかかってきたんだ。俺からすればアイツに背を向けるほうが怖かったっての」
「とりあえず今すぐに、龍兵衛さんに連絡しないといけないねー」
「ああ。だから・・・・・・後はよろしく」
俺はそう言ってからソファーに座り込んだ。

気が付いたら朝だった。どうやらあのまま寝てしまっていたらしい。
「あら。起きたの」
「・・・・・・」
それでも、虎郷は俺より早く起きていた。コイツはいつ寝ているんだろう。
「おはよう」
「おはよう」
「調子はどう？よく寝たかしら」
「ああ。ＭＡＸだ。ところで今何時？」
「まだ５時よ。今日は学校は休みだそうよ」
「休み？何で？」
「犯罪者が逃げ出した事をようやく公表したようね。皆に危険が及ばないようにするためでしょう」
「まだ公表してなかったのか・・・・・・」
とそれだけ話す。

いつもならこのくらいで海馬が起きてくるが、どうやらアレは本当に偶然らしい。それも運が良いのか。だとして誰に対する運の良さなのかは全く分からないが。
俺は昨日のままの服を部屋に戻って着替えてから携帯電話を開く。
「・・・・・・そろそろ母さん達にも1回連絡しとこうかな・・・・・・」
俺はそのままメール画面にして、メールを打つ。
『俺は何の異常も無く、元気に過ごしています。心配は要りません』
と、母親の携帯電話に送った。
そして10秒くらいで返信が来た。
『もしも自分探しなのだとしたら、心配はしていないが、あんまり家族に迷惑かけんなよ？父さんと響が居なくなってすっかり広い家なんだから。母さんと奏も心配しているぞ　響也』
『自分探しの旅も良いけど、自分を見つめなおすには家が一番大事なのよ。あんまり王城さんに迷惑かけないようにね　光』
『帰って来い。さみしい　奏』

・・・・・・何なんだコイツら。俺は母さんにしかメール送ってないぞ。何で一気に来た。というか、奏は何言ってんだこいつ。お前は兄妹愛なんか無かっただろう。有っても、それは兄さんに与えとけ。
と心の中で突っ込んでからリビングに戻る。
心配しすぎだっての。
そういえば肩の弾丸が抜かれている。応急処置もされているみたいだ。
虎郷はキッチンからこちらに移動して、ソファーに座ってテレビを見ている。
「どうやら荒れそうね」
「どうした？何かあったのか？」
「今夜・・・襲撃の時間くらいに台風が直撃するわね」

「台風・・・・・・この時期にか？」
「向こうが一々人間様のこと考えているはず無いでしょう。取り敢えず、皆が帰ってくるのを待ちましょうか？」
「そうだな」
俺はそう言って、ソファーに座る。
・・・・・・ん？
「帰ってくる？どっかに出かけているのか？」
「こちらは戦争に行くのよ？武器くらい調達して当然でしょう？」
そう言った時、玄関の扉が開く音。
そしてどたばたと音を立てて、リビングの扉が開いた。

「よっしゃ！これでどうだ！」
と海馬が床に銃器をばら撒く。
「あ、嘉島起きたの？おはよう」
と音河も入ってきて、同じようにばら撒いた。
「お2人の邪魔しましたか？すみません」
と要らぬおせっかいを焼きながら、雅も同じように。
「こんなにもどこから・・・・・・」
「海馬家の地下」
「お前の家は要塞か」
「ああ。元要塞だ」
冗談をマジで返されてしまった。

「よし！寝る。おやすみ！」
「おやすみ、お2人さん」
「すみません、寝させていただきます」
と3人は元気とは裏腹に、眠そうな声でリビングを出て行った。

「・・・・・・嵐のごとく消えて行ったな」
「そうね」

「お前は寝ないのか？」
「貴方の横で寝てたから」
「あー・・・、もしかして肩の銃弾抜いたのも？」
「ええ。私」
「・・・・・・ありがとう」
「どういたしまして」
と、短い挨拶を交わした。

・・・・・・コイツに恋愛感情はあるのだろうか。
何の前触れも無くそう思った。訊いてみるべきか訊かざるべきか。
うーむ・・・・・・。
考えた結果、思い切って訊いて見ることにした。
「なぁ、虎郷――――」

ＰＵＬＬＬＬＬ！ＰＵＬＬＬＬＬ！
俺の携帯電話がなって、俺の発言を掻き消した。

「誰だ・・・・・・？」
俺は少しイラツキを覚えながらも携帯電話の通話ボタンを押した。
「もしも――」
「急いで来い。警察署だ」
「？龍兵衛さ――」
ブッ！
と、勢いよく切られてしまった。
相手は龍兵衛さんだった。

「何だ・・・・・・？」
「どうしたの？」
「龍兵衛さんが警察署に急いで来いってさ」
言いながら俺は立ち上がる。すると虎郷も立ち上がって

「そ。では2人だけで行きましょうか」
といって、リビングの扉に向かった。
「あいつらは？」
「今は寝てるでしょう？起こしてまで連れて行かなくても、私達だけで――」
扉が開くと。

「うわ！」
「うわぁ！」
「痛い！」
と、海馬音河雅の順番で倒れてきた。
「・・・・・・何しているの？」
「いやぁ・・・・・・・はは」
海馬は笑ってごまかす。

「・・・・・・まぁいいわ。行きましょう」
虎郷は先に玄関に向かう。
俺はその背中を追いかけながら、3人を見る。
「いい雰囲気にはならなかったろ？」
と捨て台詞を吐いて、俺は玄関へ向かった。
3人は苦笑いを浮かべて、顔を見合わせた。

26 ―三人―（後書き）

海馬、音河、雅の三人でした。

はっはっは（ネタが無いのです）。

27 ―雑談―（前書き）

今回は単純な雑談です。

27ー雑談ー

結局俺達は5人で警察署へと向かった。着いたのは6時だった。ただその警察署を見ると、それは正義の施設ではなかった。

「というか要塞だな・・・・・・」

海馬の家がそうであったように、今はこれがそうである。まぁそりゃ、海馬の家の要塞自体を移したようなものだから、こうなることは当然といえば当然なのだろうが。

「よう。来たか」

「はい。で何かあったんですか？」

「その前に、xを捕まえてくれた事を感謝する。あいつには梃摺(てこず)ったろう。何せ失う物が無いからな」

「失う物が無い？」

「記憶が無いから自分のことがほとんど分かってなかった。だから、だ。失う物が無い奴は全力投球だからな。で、だ」

と、龍兵衛さんは本題を切り出すために、そう言って1度区切った。

「xはいつの間に力を手に入れたんだ？」

やっぱり気付いていたのか・・・・・・。そりゃそうだ」

「どうやら誰かに聞いたそうですよ。よく分からない奴だそうです。本人に聞いてみてはいかがですか？」

「アイツは殺した。死刑だ。速攻でな」

「こ、殺した！？」

いきなりかよ・・・・・・。

「死刑執行日を急遽早めて、その日のうちに殺したんだ。殺すのにも4人の負傷者が出たけどな」

「なるほど・・・・・・」

「それだけだ。今のところはな。じゃあ夜にまた会おう」
「それだけ・・・・・ですか？」
「それと、脱獄囚の2人を捕まえてくれ」
「・・・・・・はい」
と会話の内容はそこまでなかったようでそれだけ話して、外に出た。

「後は襲撃に行くだけだな」
海馬がそう言って、道を歩き始めた。
「私は早く帰って眠りたいよ・・・・・・」
「俺もだな」
「私はそうでもないですけど」
と音河と海馬と雅は言いながら少し歩くペースを速める。
「東先輩が居たら移動は楽なのにな」
「彼は私達とは違う方向性を持っているわ。私達の仲間ではないけれど、隼人君の仲間なの」
「そうだな。先輩もすでに王城の人間だからな・・・・・・」
俺はそう言って海馬たちを追いかける。

「ところで嘉島君」
「・・・・・・何？」
「さっき、私に何か訊こうとしていたでしょう？」
・・・・・・ああ。
「あー・・・・・・」
「何？」
「何でもないよ」
「煮え切らないわね」
「良いじゃねえかよ。もう済んだ事だ」

「・・・・・・」
睨まれた。めちゃくちゃ睨まれた。
「な・・・・・・何？」
「私に対してそんな態度がいつからとれるようになったの？」
「え、えー・・・？」
ずい、っと。
ギリギリの距離まで顔を近づけてきた。ビックリした。
「何だよ」
「言いたい事があるならいいなさい。今、私達が隠し事をしている場合じゃないでしょう？」
「それはそうだけど・・・・・・。てか、近いよ」
「何？私に対して好意でもあるの？」
そうなんだけど。そうは言わないけど・・・・・・。
ん？視線を感じる。
俺は顔がぶつからないように、視線を横に向ける。

「・・・・・・」
海馬と音河と雅がこちらを見て止まっている。
「・・・・・・何？」
俺の発言に
「あ、いや」
と海馬が言って
「どうぞ、お続きを」
と続けた。
「うっさい。黙れ。そして続けない」
と俺はそう言ってから虎郷に顔を向けた。
「というわけで、中止」
「・・・・・・」
「す、すみませーん。逃げます」

「逃がさないわ」
今度は俺の手を掴んでから
「帰りながら話を続けましょう」
と歩き始めた。

手を繋いで歩く事が出来たのだ。

期せずして嬉しい結果になった。少しだけ幸せな気分になった。
・・・・・・まぁ睨まれているんだけど。

27 ―雑談―（後書き）

疲れが最近取れない・・・・・・まだ若いのに・・・・・・。

28 ―開始―（前書き）

ようやく1話のところに向かって、進行します。

襲撃『開始』

28 ―開始―

俺は睨まれながらも何とかその場を凌ぎ、虎郷（またの名を『ゴーゴン』）からの金縛りを咲け切ることが出来た。

それから俺達は丸1日を準備に使い、銃器の使い方をよく学び、よく寝て、昨日のカレーを、願懸けの意味も兼ねて、カツカレーにして食べた。よく学び、よく寝て、よく食べた。

そして、時間は23時。

襲撃の時が来た。

俺達は全員で王城グループの本社の前に立った。

片田舎でありながら、高級住宅街の多い地域では20階建てのビルやホテルがある。この辺りは田舎だけはあって、観光名所もいくらかあるのだ。その中でも一際大きいビル、32階建てのビルが『王城グループ　本社ビル』である。

台風で風に煽られながらも、歩いてそこに向かった。中央街を歩きながら、高級住宅街地域に向かって足を進める。向かい風だが気にしない。俺達は今からもっと風当りの強いものを相手にするのだ。

「これが成功したら、王城グループはどうなるんだろうな」

「さぁ・・・・・・。滅ぶかもしれないし、何とか立ち直ってくるかもしれないけれど、まぁ王城が相手だから私達にはどうにも出来ないわね」

「それはそれとして頑張ろうぜ。俺達の仲間を取り戻すためにな！」

「そういうセリフは成功してから言ってください。海馬先輩」

「成功してからはそれは言えないんじゃないかな・・・・・・」

俺達はそんな会話を済ませて、警察の軍隊（警察予備隊でも自衛隊でもない）のところに立った。

「よう。来たか」

龍兵衛さんはパトカーから降りながら言った。
「今回の作戦は、お前らはどんどん上に上がっていけ。俺達がサポートする。っていう感じの作戦だ。今回は銃刀法違反に関しては免除してやる」
「そんな権限があるんですか？」
「今回の一生摘発が成功したら、俺は恐らく副署長だ。というかそういう約束だ。それにお前らは警察だろうが」
「ああ・・・・・・。そういえばそうでしたね」
俺達は警察官なのか・・・・・・。そんな事は基本的にはないだろう。こういうことはしていいような事じゃないかも知れないが、一々気にしている場合でもない。
俺達は今から戦いを始めるんだ。

「そういえば、犯人は1人を除いて捕まったぞ」
「え？」
「一条字　雷は、自分の息子、一条字玲王に捕まった」
「む、息子に！？」
「『親父は王座から降りたのだ。これからは俺が王だ。俺は俺であるが故に、王である意味があるのだからな』だそうだ」
「は、はぁ？」
何言ってんだ、そいつは。
「そして如月　戦は、王城の協力者が捕まえた」
「・・・・・・結局その人は誰なんですか？」
「お前らは知ってるだろ？俺は名前は知らん」
「知らないんですか・・・・・・・」
「アイツだよ・・・・・・えーっと、ほら」
龍兵衛さんは少し考えてから
「運転手だ。あの『東』・・・・・・だっけか？」
と言った。
「あ・・・東先輩！？」

「ああ。そうだそうだ。それだ」
龍兵衛さんがそう言って、笑う。
まさか・・・・・・東先輩が・・・・・・。てっきり敵側だと思っていた。だがしかし、そう考えれば納得できる。「スピード違反」や「無免許運転」をしていた人物という点や、王城グループの人間で隼人への協力者・・・・・・そして犯罪者を捕まえられるのは彼くらいのものだろう。
「そうか・・・・・・東先輩も・・・・・・」
俺は思わず笑った。

「嬉しそうね」
「仲間が増える事は嬉しい事だからな」
「そう。私も嬉しいわ」
と淡白に、しかし少し顔を歪ませて、笑いながら言った。

「・・・・・・。もう少しで襲撃の時間だ。心の準備は良いか？」
「はい」
「・・・・・・5秒前」
・・・3、2、1
「作戦開始！」
龍兵衛さんの命令で銃や刀、マシンガンを持った人間が突っ込む。

「よし、俺達も行こう」
と、動いたとき。

入り口から、光が漏れた。そしてその後爆発音が響き渡る。

「・・・・・・！？」
何だ！？何が起きた？
「爆発！？」

海馬が驚きの声を上げた。
兵士のほとんどは爆風のようなもので飛び出ただけのようだ。
「・・・・・・」
中から現れたのは、同じような兵士達だったが、武器が明らかに違う。
そして1人の男が入り口から出てくる。
「帰れ。今なら許してやる」
バズーカを構えていった。後ろにはガトリング砲や重機関銃が設置されている。
「気をつけろ。周りの建物から狙撃班も狙っている」
「く・・・・・・」
龍兵衛さんは珍しく言葉を詰まらせてそのまま止まる。
「さっさと帰れ。貴様らの相手をしている場合じゃないのだ」
男はそう言ってバズーカの引き金に指をかける。

「これから10秒以内だ」
男の後ろから同じバズーカ兵が来る。
「10」
「建物の裏側に逃げろ！」
龍兵衛さんがそう叫ぶ。
「9」
「おい！お前らも早く逃げろ！」
「8」
逃げていいのか？俺はここから離れていいのか？
「7」
「嘉島君！一旦引くわよ！」
虎郷が叫ぶ。
それでいいのか？
「6」

「嘉島！急げ！ここで死ぬわけにはいかない！」
俺はまだ考えられていないんじゃないか。
「5」
「嘉島！逃げるんじゃないんだよ！一旦隠れようよ！」
警察の人々は一気に隠れる。
いや、逃げだ。これはただの逃げなんだ。『何か』がそう言っている。
「4」
「奏明さん！早く！」
何が・・・・・・俺を止めるんだ？
「3」
・・・・・・！何か聞こえる。これは・・・・・・アレだ。エンジンの音だ。
「2」
「逃げるな！俺達の仲間だ！隼人も虎郷も海馬も音河も雅も！」
「分かってる。だから早く逃げるぞ！」
「逃げちゃダメだ。俺達にはまだまだ残ってるだろ！」
「1」
「・・・・・・なんだありゃ」
車が一台走ってくる。
「俺達にはまだ仲間が居る！！」
俺はそう叫んで、車に向かって走った。
皆も走り出す。
「0」
俺は開いていた車のドアに捕まった。その俺や同じように車のドアに捕まったりして、俺達は連結した。

バズーカは周りの車や戦車、そしてこの車に衝突する。そして炸裂して爆発する。

煙が舞い上がった。地面が割れたり壊れたりしている。どうやら悲惨な結果を招いたようだ。これでは何もかも壊れてしまう。
「・・・・・・何！？」
しかし。
男が見た先には俺達が居た。

バズーカの爆発に巻き込まれた、無傷の車の中に。
車は男をも引いて、重機関銃やガトリング砲に突っ込んで、止まった。

「・・・・・・助かった」
「キセキね」
「運が良かったな」
「それにしても凄いね、この車」
「いずれにしても助かりました」
俺達はドアから出てきた。

「何で生きているんだ、貴様ら！！」
兵士達が叫ぶ。俺は華麗に無視するという方法を選んだ。
「ありがとうございました・・・・・・」
俺は目の前に居る、男の人にお礼を言った。
「東先輩」
「初めてだな。お前に敬語を使われたのは」
笑いながら言って、車のバンパーに座り込む。
そして目の前の連中を睨みながら言った。

「ここは先輩と警察に任せな。おまえらは先に行け」
マンガのように、自らの立ち位置を確保していった。

「東先輩・・・・・・」
「隼人のことは頼んだ」
「・・・・・・はい！」
俺はそう叫んで階段を上り始めた。
東先輩の背中は今までより一段と頼もしかった。

28 ―開始―（後書き）

次回はかなり短く、東先輩の『能力』を説明。

29 ―首領―（前書き）

まず、東先輩について。

そして彼らは戦います。

29ー首領ー

東先輩の能力は『ラスト・サーキット』という能力である。
彼の能力は簡単に言うと、どんな乗り物でも感覚で運転でき、操縦できるという能力なのだ。
が、実は彼はもう一段階上がある。それは今聞くと、「能力の進化」であった可能性が高い。

「東先輩は大丈夫なのか？」
海馬が訊く。
「あの人は運転するだけの能力だろう？それであの場を乗り切れるとは・・・・・・」
「いいや。東先輩にはもう1つ上の力がある」
「上の力？」
「それはな・・・・・・」
階段を上りながら言う。

東先輩の『能力の進化』とは「乗り物の意志」だ。彼は乗り物を武器に変えることが出来る。彼の力は、タイヤを足につけ、異常加速できたり、それを止めるためにブレーキをつけられる。また目をライトに交換し、相手の目くらましも出来る。
それは持っていた乗り物によって違いが出る。
「それはまるで・・・・・・」
「俺の乗り物バージョンだ。しかも意思疎通が完璧だから、いいところと悪いところを全てカバーできる。あの人には乗り物さえあれば何でも出来るんだよ。さらに・・・・・・」
さらに、あの人には前歴がある。

「彼は切れると、音河みたいに変身する」
「へ、変身！？」
「あの人は元暴走族の総長だ。切れたら・・・・・・暴力的になり、白い長ランにリーゼントだ。背中には『夜露死苦』とかな。そして、物理的な腕力が上がる。１人で車一台持ち上げられる」
「もう化物じゃねえか・・・・・・」
「だから大丈夫だ。さて、どうやら、階段はココまでみたいだぜ」
５階まで到達して、階段が途切れていた。
「まぁ高層ビルだから階段があっただけでも奇跡か・・・・・・」
そう呟いてから、俺は廊下に出る。そして周りを眺める。
「どの階も準備万端らしいな」
後ろから海馬が声をかけてきた。
「向こう側に階段があるわね。多分、立ち替り入れ替りで階段が続いているんでしょう」
「だといいね」
虎郷と音河も出てきて、それらを眺めた。

敵の人数はざっと２０人くらい。廊下は短い。まぁ、階段から階段に移動する間だけだが。
「躊躇はしない！」
向こうの人々が言って、銃器を構えた。
「撃て！」
指揮官と思しき人がそう叫んで、銃弾が発射し始めた。
「嘉島ァ！」
海馬が叫ぶと同時に、俺は左手の袖を捲って、地面を叩いた。

「壁でガードしたが、長くは保たないぞ」
俺がそう言うと

「私が行きます」
と雅が言った。
「これから私が切り込み隊長として、常に走りつづけて、敵を錯乱して進み続けます」
「じゃあ私が錯乱した敵を潰していくわ」
虎郷の発言に、雅は頷いてから
「次に正先輩が銃を乱射しながら、突っ込んでください」
と続けた。
「俺がか？」
「はい。先輩なら虎郷さんにダメージを与えないように敵を攻撃できると思います」
「分かった」
「奏明さんと音河さんは後方支援をよろしくお願いします」
「……流石だな」
俺はそう呟いた。
「？」
「考え方が隼人に近い。やっぱりリーダーに相応しいよ。俺には……無理だ」
前々から考えていた事。
リーダーに俺には相応しくない・・・・・・。

「アホか」
海馬が言った。
「・・・・・・！？」
「考え方はどうでもいいんだよ。そういういのも全部任せとけ」
海馬がそう言って、笑って、壁に向かって立つ。
「リーダーはどっしり構えていればいいんです」
雅もそう言って立ち上がった。
「私達はコイツらと戦うから、嘉島は隼人を助けてやってくれよ」
音河はギターを出す。格好も変わったので、本気という事だろう。

まぁ、変装と言う意味でそれでもいだろう。
「貴方が私達のリーダーなのよ」
虎郷は拳を構える。

「「「「行くぜ？リーダー」」」」
まるで。
まるで打合せしたように、声を合わせて４人が言った。

「・・・・・・ありがとう」
俺はそう呟いて、左手を構える。
そして虎郷の右横に立った。虎郷は右の拳を構えている。
地面で作り上げた壁を見て
「ぶっ壊すぞ」
と俺は言った。
そして俺は、
「行くぞ！」
と。
彼らの発言に答えた。

そして俺は左手を、虎郷は右手を壁にぶつけた。

29ー首領ー（後書き）

次回からはバトルマンがのお決まりです。

３０ー漫画ー（前書き）

漫画的なシチュエーションが最後の方に。

30ー漫画ー

＝＝＝

何だ！？横を風が通り抜けた・・・・・・・！？

「な、何だ！？」

「何か通りませんでしたか！？」

分からない・・・・・・一体何が・・・・・・。

「これ。返すわよ」

「え・・・・・・！？」

崩れた壁の中から出てきた４人の男女が、何か投げてきた。

手榴弾だ。

「しま――」

ドカーン！

と。

激しい爆破音がして、前の兵士達は煙の中に消え去った。

「く・・・・・・」

こうなったら俺だけでも逃げて状況を立て直さなければ――――。

「悪いわね」

「じゃあな」

「ばいばーい」

「消えろ」

一気に来た４人に色々な攻撃を受けた。走馬灯として思い浮かんだのは、やはり、最愛の妻や息子と娘だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「な！？」

壁を壊した瞬間、手榴弾が飛んでいた。

「私は行きますので後はよろしく。お先です！」
走りながらそう叫んだ雅は、風のように階段に向かっていった。

「取れ！」
海馬が叫んで手榴弾を持つ。
俺達3人も掴んだ。
「これ。返すわよ」
虎郷の合図で、同時に投げた。

爆発音とともに前方が煙にまみれる。
「行くわよ」
と虎郷が颯爽と走り始めた。
海馬、音河、俺の順でそれを追いかける。

「まだ1人居るわ。運がいいようね」
「気絶させようぜ」
「そーしよー」
「じゃ、攻撃しながら走り抜けるぞ」
そして、
「悪いわね」
虎郷が顔面を殴り飛ばす。
「じゃあな」
海馬が銃で右肩を撃つ。
「ばいばーい」
音河がギターを鳴らして吹き飛ばす。
「消えろ」
そう言うだけで、階段を上り始めた。

「何か、一瞬俺の世界の崩壊を感じた」
そう呟いたが誰一人反応はしてくれなかった。

「雅ちゃんは？」
「彼女は本当に速いわね」
「アイツは昔から速いんだよ」
３人はそう会話して、１０階に到着した。
そこには雅が居た。

「何で止まっているの？」
虎郷が訊くと
「・・・・・・危険ですね」
と雅が答えた。
「危険？」
「あれを見てください」
雅の指差した先には、男が居た。
廊下の中心当りで腕を組み、上半身を後ろから引っ張られたように下げて、突っ立っていた。
「ジョジョ立ち・・・・・・？」
何か海馬が呟いたが、まぁ気にしない。
「貴様らが隼人のお友達だな？」
男が口を開く。
「友達じゃねー。仲間だ」
海馬がそう応対した。
「それは失敬。だが、そうに間違いはないらしい」
男は立ち姿を変えずにそう言ってから、
「最後の確認だ」
と続けた。
「今からでも帰るつもりはないか。考えを変えて帰るのだ。それが認められなければ、土に還るか、命（みこと）を神に返すことになるぞ」
「・・・・・・いいや。変えないし帰らないし還らないし返さない」
俺は男の発言にそう答える。
「そうか。ではゲームを始めよう」

「げ、ゲーム？」
「王城グループはゲーム好きな1代目社長が作り上げた『ゲーム会社』だったのだよ。彼は異常な知力とすばらしい社交性と恵まれた人間性で、今の状態を1代で作り上げたのだよ」
「で、どんなゲームだ」
「上には同じようにゲーム目的の人間が居る。そいつらがその度にルールを決めるのだが、今回のルールは1対1の戦闘だ」
「戦闘・・・・・？」
「お前らの中から1人だ。俺を倒すまで続けていい。俺が倒れるまで階段には向かえない。以上だ」
　男はその立ち姿を何一つ変えずに睨み、組んでいた腕を外し、右手で俺達をさした。
「さぁ選べ。誰が来る」
「私が行きます」
　雅が言った。
「常盤。こういうのは私向きよ」
　虎郷が止めるが雅は
「いえ。私は切り込み隊長ですから」
　そう言ってそのまま足を進め始めた。

「すみませんが、こういうのはマンガとかによくある代表例として、絶対に私が勝ってしまうんですよ。どんな傷を負っても」
「そうかもな。だが俺はそんな物に折れるつもりは一切ない。貴様ら全員ココで殺す」
　男は雅の挑発を受けても立ち姿を崩さずに言った。

３０ー漫画ー（後書き）

今更のようですが、感想とか評価とかお願いします＞（＿＿）

＜

31―激闘―（前書き）

雅　VS　明前

31ー激闘ー

「どうした？かかってこないのか？」
男は態勢を変えずに言う。
「……あなたの名前を教えてください」
「俺か？俺は『明前（みょうぜん）』だ。王城グループの幹部をしている。専門はクレーム処理と邪魔者の処理だ」
相変わらず態勢を変えるつもりはないようで、そのまま笑った。

「明前さん。私は全力で行きます」
「そうか。好きにしろ、常盤　雅」
どうやら俺たちの顔と名前は把握済みのようだ。
「なので、貴方が死んでも私は責任を負いません」
「心配するな。俺は強い」
「では行きます」
長い前置きを置いて、雅は7メートルの距離を詰めるために走り出した。

「気をつけろよ。俺は処理専門だから、生かす方法は心得てない」
男はそう言ってから、両手の指を構えた。指パッチンの形で。
「Ｓｈｏｔ」
男は言って指を鳴らした。音は「パチン」ではなく、「パン！」だった。或いは「バキューン！」かもしれない。
「！？」
雅は瞬間的にしゃがみこんだ。俺達からすれば単純に何かから避けたように見える。
「焔の錬金術師ですか？」
「大佐と呼ばれた覚えは無いかな」

２人はそう会話して、明前が続けた。

「避けられたか。まだまだ行くぞ」

同じように指パッチンの形を取り、音を鳴らす。今度は右と左を交互に連続で。

「これは・・・・・・・」

雅は呟いて、跳ねたりしゃがんだりして明前に近づく。

「ほぉ・・・・・・これも避けるか。では、今度はこうだ」

明前は今度は両掌（りょうてのひら）を開いて、濡れた手の水を散らすように手を振った。

「今度は・・・・・・散弾・・・・・・！？」

雅は驚きながら、回転することによって風を作り上げる。

「マジか・・・・・・・」

明前も驚いて動きを止める。一々特筆すべき内容では無いと思うが、立ち姿には１つも変化は無い。

そして雅は距離を縮め切り、ほぼ２メートルの距離で跳び上がる。

「貴方の力、見抜きました」

「貴様の力、見抜いたぞ」

２人は同時に言って、雅は右足で跳び蹴りを、明前も右足で上段蹴りをする。足同士が交差した瞬間、火花が散った。

「くっ・・・・・・・！」

「ぐゥッ！」

２人は少し呻いて、２人は弾かれるようにそれぞれの後方に飛ばされた。

雅は空中で回転してから着地した。明前は立ち姿が立ち姿だっただけに、衝撃を逃がす事に成功し、そのままの態勢で立っていた。

「貴様の足の力・・・・・・見えたぞ」

雅に向かって明前が言い放った。

「貴様、能力者か。足に纏っていたのは回転力・・・・・・その力による風か・・・・・・。しかしどうやらそれはそもそも戦闘目的のものではないようだ。動きが早いところから、恐らく脳の中のスピードを活性化しているのか・・・・・・それが戦闘向きに変化したというところだろう」
「・・・・・・」
「正解か？」
「否定はしません」
「そうか」
「貴方の力も見抜きました」
雅もそう言って、明前を睨む。
「どうやら貴方の力は『銃』のようですね」
「そうだ」
「指の中や手の中・・・・・・貴方の体中を取り巻いている空気を圧縮してそれを高速のスピードで放つ事により、『銃弾』と同じ威力、速度を持つ事が出来る。先ほど私と貴方の足が交差したとき、風と銃弾の速さが重なったということになり、２つの速さが混ざったんでしょう。そして風同士の摩擦力が生まれ、火花が散ったという事ではないでしょうか」
「まぁまぁ当りだ。正確に言えば、指パッチンで威力を上げられたり、連打すればマシンガン、投げるように指を散らせばショットガンだ」
「そうですか」
お互いに答え合わせをして、お互いに興味なさそうな素振りをすると、
「ではこれでもう終わりですね」
「遊びの時間が、だな」
「はい」
「ああ」
２人はそういうと、もう一度構えた。

31 ―激闘―（後書き）

能力とは常に進化するのだ。

僕らはそれに気付かなければならないんだ。

32―回転―（前書き）

雅　ＶＳ　明前　後編。

さーて。どちらが勝つのかな？

３２ー回転ー

「本気で行きます」
「全力で迎え撃つから任せとけ」
雅は走り出した。
明前は指パッチンをマシンガンのように連発する。
「これなら・・・・・・！！」
雅は跳び上がり、地面に平行に横向きになり回転する。風が舞い起こり空気の塊と思しき物がどこかに消える。
「よし！」
「流石だな。では次はこうだ」
明前は走り、そして跳ぶ。
「Ｃｒａｚｙ Ｓｈｏｔ！」
体を一気に折りたたむように、両手を下げ、両足を上げる。結果４つの大きな空気の塊が飛ぶ。
「く・・・・・・！」
雅は避けれないと悟り、そこで回転を始めた。
「うおおおおおおおおおおおおおお！！」
ぐるぐると回り、風を生む。それが４つの空気の塊と衝突して、戦いを始める。
「！」
がしかし、風の気流の中にその塊は入り込み、
「あああああああ！！」
雅の体をまるで刃のように切り裂いた。
「・・・・・・む・・・・・・。そんなにダメージを食らわせれてないな」
「私の風は・・・・・・凄いですから」
「そうだな」
それでも明前は興味なさそうに言った。

「・・・・・・これは・・・・・・」
雅は肩から肩甲骨の辺りの傷を見て呟いた。
「・・・・・・行きます」
そう言って雅はまた走り始めた。距離はそんなに空いていない。
「まだ元気があるのか。ならば・・・・・・」
今度はショットガンと彼が言い表していた形で指を振る。
「これでどうだ」
「・・・・・・」
雅は右手を6つの空気の塊に向かって突き出した。
パァン！
「！？」
「できた・・・・・・」
そう呟いて雅はそのまま明前に飛びつく。上半身を両足で掴むように抱きついた。
「貴様何をした！！」
「私の回転力で貴方の空気塊を分散しました。貴方の攻撃を食らったときに、肩から肩甲骨の辺りの1個しか傷が無かったのはそういうことでしょう」
「しかし・・・・・・今貴様は殴っただけだろう！」
「私の能力の進化でしょう。これを『スパイラル』と名づけました」
「進化・・・・・・」
「では、行きます」
雅は拳を構えた。螺旋状に風が纏っている。
「何か言い残す事はありますか？」
「・・・・・・俺がどうして上半身を曲げているか知っているか？」
「分かりません。個性ですか？」
「これは引き金だ」
そう言って明前は上半身を引き戻した。
ドガァァァ！！

激しい音を立てて、空気が飛んでくる。直系４メートルくらい。
雅にヒットして、その流れはこちらにも飛んでくる。
「下がれ！」
俺は命令してから、床を壁に変形させる。
「ぐ！」
風は壁を壊して俺の体にぶつかる。が、勢いは収まったようで余りダメージは無かった。
「大丈夫？嘉島君」
「ああ。そこまでは痛くない」
が・・・・・・。
直撃した雅はどうなのだろうか。
見ると足を明前に絡み付けたまま、倒れている。

「ふん。俺の力は『周りの全ての空気』だ。今まで蓄えていた分の空気の圧縮レベルから考えてもそう簡単には分散できまい。お前の進化も最近出来たばかりのようだからな」
そう言って明前は雅の足を外して進み始めた。

「さぁ。次はどいつだ？１番体躯の小さい奴を出してくるとは・・・・・・貴様らも厳しい選択をしたものだ」
「く・・・・・・」
雅がやられた・・・・・・。
「私が行くわ」
虎郷が言った。
「だめだ。近距離の雅の速度でも対抗できなかったんだから、無理だろう」
「遠距離の私が行こうか？」
「それも難しい・・・・・・」
と俺達が会議していると、
「何を臆している」

と海馬が言った。
「アイツの特性は『奇想天外予想外（ターニング・ポイント）』だ」
と。

「！」
明前の腰に手が絡みつく。
「私はまだ負けてません」
「く！まだ生きていたのか・・・・・・・。だが、もう虫の息。こんな腕など・・・・・・」
明前がその手を外そうと抗う。
「・・・・・・なんだ！？この強さは！」
「回転力を加える事で締め付けを強くしています。更に、これから面白い事をして見せます」
明前の体が持ち上がる。
「な、何だ！？」
「回転の遠心力・・・・・・・それを私の体の周りに纏わせ、縦向きにしたとすれば・・・・・・・？」
「・・・・・・背後への勢いが増し、それは重力に抗う、垂直抗力・・・・・・！？」
「正解です」
雅はそのまま後ろに向かって明前を叩きつけようとする。
そう。立ったままブリッジをする要領で。
「ジャ・・・・・・ジャーマンスープレックス・・・・・・・！？」
「うおおお

「・・・・・・勝った・・・・・・」

３２―回転―（後書き）

まぁ雅が勝たなかったらビックリだよな・・・・・。

３３ー狙撃ー

「無茶しやがって！」
「すみません・・・・・・」
海馬は雅を背負い、階段をゆっくりと昇っていた。今回は同意の上で、である。
あの後、雅はそのまま倒れてしまった。明前も軽い脳震盪（のうしんとう）のような形で気絶していた。雅は風圧の衝撃が少し遅めに来た様で、マンガならば渦巻きで表現されそうな目で昏睡状態にあったが、それを海馬が背負って階段に向かったという次第である。

「このまま戦いを後・・・・・・何回くらい？」
「おそらく１５、２０、２５、３０でしょう？４回ね」
「そんなに・・・・・・面倒だな」
音河、虎郷、俺は、そう会話して先に駆け上がり、
「雅、何か作戦ないか？」
「・・・・・・すみません。眠いです」
「寝るな！寝たら死ぬぞ！」
「雪山ですか？」
「何だ、嘘かよ・・・・・・」
とふざけながら俺達の後ろを追って来る。

そして１５階に到着した。今までの廊下とは違い、広いホールのようになっている。
真ん中には１人の青年が座っていた。その青年は俺達を見て、
「・・・・・・何？」
と呟いた。

いや、こっちが聞きたいのだが・・・・・・・。
「ああ。明前さんやられたんだ・・・・・・」
自分で自分の質問に答えて、ようやく面倒臭そうに立ち上がった。
「僕は人吉(ひときち)。このホールはよくパーティーに使われるから、こんなに広いんだよ。僕との戦いも1対1だ。ルールはこれから言う。いいかい、よく聞いてくれ。二度手間は面倒なんだよ。こうやって話していることすらも面倒なんだ。ああ、閑話休題と行こう。さっさと話は済ませたい」
と、一気に言った。話すのが面倒なのか、こちらが質問しそうな事は先に全て答えた。

「今回のルールは・・・・・・そうだね。射撃ゲームだ。君らなら海馬　正が得意とするタイプだ」
こちらの考え方を読んでそう答える。
「今回は2つの缶を同時に狙い、先に当てた方の勝ちだ」
と言ってテーブルを出して、缶を並べた。

「・・・・・・じゃあ、海馬」
俺は海馬を指名した。
「ああ。俺の勝負だな」
海馬は静かに雅をおろしてから、歩いて中心に向かっていった。
「正先輩。気をつけてください。おそらくあの人もアクターです」
「そんなことより、俺に対する褒め言葉でも考えとけ」
海馬はふざけて言った。が、目は真面目だ。
そんな海馬を見て雅は
「先輩・・・・・・」
と本当に心配そうに言う。彼が真面目な顔をしているという事は、口で言うほど余裕を感じていないという事だ。
すると海馬は立ち止まって言った。
「・・・・・・大丈夫だって」

笑っていた。
雅の心配を失くすために。彼は恋愛豊富に見えて、肝心な時に――特に雅が相手だと不器用なのだ。自分を正直に表す事が苦手なのである。彼が「正」であったとしても。

「やっぱり君か」
「ああ。で？ルールは？」
「この２つの缶を対極の位置に立って、同時に狙う。どちらか一方でも打ち落とせば勝ち。勝負の回数は１０回だ。君が負けようが僕が負けようが、ここには兵士達がやってくる。僕は負ければ道を開けるけれど、僕を殴り飛ばして先に進むことはできないだろうね。この戦いが終わったときには兵士達が来ているだろうから。大丈夫。時間稼ぎしようとなんて思ってないから」
相変わらず一気に言うと、
「さっさと始めようか。時間ないんだろう？」
「ああ。物分かりがよくて助かるよ。銃持ってる？」
「持っている。貴様は」
「有るよ。別に細工はしていない」
そう言って２人はテーブルをはさんで、対極に並んだ。
海馬が奥側に行って、人吉が手前（すなわち俺たち側）に立った。

「第三者としてそこの少年に審判してもらおう」
人吉はそう言って俺を指した。
「・・・・・・」
俺は雅を見る。雅は頷く。
「分かった」
俺はそう言って、テーブルの横に立つ。
「開始の合図で始めてくれ」

「了解」
「さっさとしてくれ」
人吉は少しいらいらしている。

「開始！」

同時に銃口が火を噴いた。
だが当然、射撃で海馬に勝てるはずが無い。だって彼は『最強の運』なんだから。

そう思っていた。

人吉から見て右、海馬から見て左の缶を打ち抜いたのは、

人吉の銃弾だった。

３４ ― 空缶 ―（前書き）

34ー空缶ー

「・・・・・・！？」
海馬本人も驚いている。
「お前・・・・・・一体何をした」
「手のうち曝すわけ無いだろ？でも今回は僕の運は君の運を上回ったって事かな」
「上回る・・・・・・！？」
海馬は思考が中断されかけて、狼狽えている。

「やばいですね」
雅は呟いた。
「先輩は『予想外』に対応できません。今、彼が何をしたのかが分かっていないから、彼にとって今から人吉さんがする行為は全て『予想外』です」
「そんな・・・・・・じゃあどうすればいいの？」
音河が雅に訊く。
「私達で彼の能力を解明しましょう。それしかありません」

能力の解明・・・・・？それは、つまりコイツもアクター・・・・・。そして海馬の運が勝てなかったということは、それは『普通には起きない現象』がそこに有ったという事・・・・・。
「少年。はやく始めてくれよ。それとも兵士達が来て捕らえられるのを待つのか？」
「・・・・・分かった。準備してくれ」
俺はそう言ってから、思考を中断し試合に集中する。
「開始」

同時に銃弾は銃から飛び出る。
次は人吉の左、海馬の右の缶に銃弾がヒットした。
打ち抜いたのは・・・・・・・・・・

またも人吉の銃弾だった。
「やっほい」
「くっそ・・・・・・・」
海馬が焦りの顔を見せる。かなり焦っている様子だ。
「早く解明しなよ。確か君って予想外に対応できないんじゃなかったっけ？」
「く・・・・・・・」
海馬は自分の能力を解明されている事に、うめき声を上げる。
向こうは余裕過ぎる・・・・・・・。これは本当に勝てるのか？
「早く次やろうよ」
相変わらず人吉が急かす。
「・・・・・・準備してくれ」
俺はそう言って、新しい缶を置く。

「・・・・・・」
海馬は黙ってもう1つの銃を取り出した。二挺拳銃（ちょう）である。
「・・・・・・まさか2つ同時に狙うつもりなのか？」
「さぁな」
そう言って海馬は銃を構えた。

「開始」
銃の音は3発分重なって、同時に狙った。
両方の缶が空を舞う。

「え・・・・・・・？」

当ったのは両方とも海馬の弾だった。
「よっし！」
「チッ・・・・・・」
人吉は悔しそうに舌打ちをして、
「2つの拳銃は僕と同じ条件じゃない。それは僕のほうが不利だ」
「何でだ？先に当てたほうがいいってことは、どっちに当っても早けりゃいいんだろ？」
「僕の一発が外れても、君には2発あるっていうのはずるいよ」
「・・・・・・」
海馬は黙って俺を見る。
「・・・・・・残念だが理屈は通っている。1つにしろ」
「了解」
そう言って海馬は銃をしまった。

「機関銃とかライフルとかにするのはだめなのか？」
「ダメだ」
人吉が答える。
「お前も替えればいいんじゃないか？2択しかないのも面白くないだろう？」
「僕がルールだ。コレは変えない」
「そうかよ」
少し不満そうに海馬は言った。

「準備しろ」
俺はそう言って新しい缶を置いた。

「いけるか？」
「ああ」
「さっさとしろ」
2人の返事を聞いてから

「開始」
と合図を出した。
海馬の銃弾は海馬から右の缶、人吉の銃弾は人吉から見て右の缶でそれぞれ別の缶を狙った。
缶はほぼ同時に空を舞う。そして同じタイミングに落下した。

３５ー銃弾ー（前書き）

このままでは、今回の章は５０越えるかも。

35ー銃弾ー

勝者は海馬だった。
「よっしゃ！」
「またかよ・・・・・・・」

海馬はもしかして打開策を見つけたのだろうか。
しかしその後の5回目では、人吉が深呼吸をして撃った弾丸は、見事に海馬より先に缶を飛ばした。

そして6回目。
「・・・・・・こうなりゃ・・・・・・・」
海馬は呟いた。

「開始」
合図とともに銃弾が発射された。相変わらず同時だったが、明らかに違いが有った。
「！？」
人吉は突然の出来事にしゃがみこんだ。
海馬の弾丸が人吉の右肩に飛んでいったのだ。その間に人吉の弾丸は空き缶を打ち抜いた。
「何するんだ！」
「狙うのは禁止じゃなかったろ？お前を負傷させたら、残りは勝てるかなと思ったんだよ。妙案だと思ったんだけどな」
「お前・・・・・・・！！」
人吉は明らかな怒りを見せる。
しかし・・・・・・・海馬らしくない。海馬ならばもっとスマートに勝とうとするはずだ。

雅たちを見る。音河はギターを胸の前にかけている。雅は今だ思考中。虎郷は何か睨んでる。別に何か特定のものを睨んでいるようではないが。

「これからも俺はお前を狙うぜ？気をつけろよ」

「最低だな・・・・・・」

そんな軽い会話を済ました後、海馬は銃を構え、人吉も立ってから銃を構えた。

俺は黙って新しい缶を置いた。

今、人吉が４回、海馬が２回だ。

次に当てられるか・・・・・・。

「開始」

今度は銃弾の発射音がずれた。海馬のほうが早く缶に到達し、それをとばした。恐らく海馬の脅しに恐怖したのだろう。

そして８回目でも、銃弾がヒットしたのは人吉の方が早くヒットさせられたが、缶にヒットしたのは海馬の弾丸だった。人吉の方の銃弾は彼の心と同様、軌道線を揺るがして机にめり込んだ。どうやら固い素材で出来ているらしい。が、２回位同じ場所にヒットすれば壊れるだろう。

「畜生！」

人吉は叫ぶ。

「このままじゃ、５対５かもな」

海馬は笑う。

「・・・・・・その時は１１回戦にしよう。キリが悪いからな」

すぐに海馬は構えたが、人吉は深呼吸してから構えた。

「開始」

また銃弾のリズムが違った。
今回は海馬の銃弾が軌道線を外して、机の脚にヒットする。自然、銃弾はめり込むだけで止まり、人吉の弾丸が缶に当って壊れた。
「・・・・・・壊れたよ・・・・・・・」
凄いな・・・・・・何かコツでも掴んだんだろうか。
コレで5対4か・・・・・・・。

「よし。下準備は完了だ」
海馬は呟いて、銃弾を装填しなおす。そして、先ほどしまった銃を取り出した。
「海馬！それはダメだって・・・・・・・」
「大丈夫。銃弾は装填してない」
とトリガーを外し、銃弾がないことを見せる。
「もちろん、すでに装填されている事も無い。大丈夫だ」
「じゃあ何で・・・・・・・？」
「こっちにも作戦があるんだよ」
そう言って海馬は両手で銃を構えた。

「・・・・・・ま、いいか」
そう言って人吉は銃を構える。
納得はいかないが、2人が納得している以上、俺には何も言えない。

「・・・・・・開始」
瞬間だった。

海馬は俺が開始という前に一方の銃を投げた。
そしてから2人同時に発砲。

海馬の投げた銃は缶に当たり、テーブルから落ちる。そして人吉

の銃弾は先ほどまで缶があったはずのところに飛んでいく。海馬の銃弾は、落ちていく缶にヒットした。

「・・・・・・何してんだ」

人吉は静かに怒っている。

「こんなの認められないよ。君、合図の前に投げたじゃん」

「いいや。ルールは簡単なんだろ？『先に銃弾を当てた方の勝ち』だ。つまり、銃弾を当てれば勝ちって訳さ」

「だからって銃本体を投げて良い理由にはならない」

「『まぁいいか』って言ったのはお前だろ」

「・・・・・・いいよ。但し、ラストはあらゆる制限をつける」

「いいぜ？但し」

彼はそう言って笑った。人吉のお株を奪うように『但し』と言って。

「俺はお前の能力を見抜いた」

「・・・・・・！？」

いつの間に見抜いたんだ！？と俺は思ったのだが。

俺以外の全員が微笑んでいた。

35 ―銃弾―（後書き）

宣言『シリーズ化予定』

３６ー選択ー（前書き）

ちょっと海馬の話を区切りすぎたような気がします。

ま、海馬好きな人多いし。いっか。

36ー選択ー

「本当かよ、海馬。いつ知ったんだ？」
俺は少し疑いを持ちながら訊いた。
「厳密に言うと、俺が始めて缶に弾をヒットさせたときだ」
「で。どんな能力なんだよ」
「知らん。俺は何も知らずに言われたとおりやっていただけだ」
海馬はそう言った。
「だが、解明はできた。アイツは、『2択』において最強なんだよ」
「2択・・・・・・！？」
何言ってんだ。こいつ。というか言われた通りって・・・・・・！？
俺が不思議そうな顔をしていると、
「雅が教えてくれたんだよ」
「教えたって・・・・・・どうやって？」
「・・・・・・どうやってって・・・・・・」
海馬が悩む。
人吉はその顔を睨んでいる。
「・・・・・・どうやってだ？」
海馬はそう言って俺を見た。何か、逆に聞き返された。

「雅ー」
俺は雅に聞いてみる。
「私は何も。したのは音河さんです」
「？」
「音河さんのギターで、『声』を伝えました。彼女の力の進化です」
「進化・・・・・・！？」
何だ？ここにきて皆の力が進化している。何がおきているんだ・・

・・・・・！？

「嘉島？大丈夫？」
音河が俺を見てそう言った。
「あ、あぁ。ごめん」
俺は謝ってから、「続けてくれ」と促した。
「どうやら思いを伝えるという事を具体化したみたいだよ。音符を相手にぶつけると、その人と繋がれるって感じなんだ」
「へー。そうだったのか」
海馬が１番感心している。

「じゃあ、『２択』ってのは何なんだ？」
俺は今度こそ海馬に訊く。
「単純だ。２択だったら最強って訳さ」
「・・・・・・は？」
「つまり今回みたいに『右か左の缶を狙う』って時には最強なんだよ。ミリオネアで言えば『５０：５０』ってわけだ」
「それはお前の運すらも凌駕したって事なのか！？」
「まぁ、コイツの能力は『運』っていう概念じゃないからな。恐らく、決定事項なんだよ。５０：５０というのは、１＋１＝２という等式と同じって訳だ」
「そう・・・・・・なのか・・・・・・」
しかしだとすれば疑問がわいてくる。
「じゃあどうして勝てたんだ？」
「ああ。こいつに勝つためには、俺は『オーディエンス』と『テレフォン』を使ったんだよ」
オーディエンス・・・・・・つまり雅や音河のことか。そしてテレフォンは音河のギターか。
上手い表現をするものである。しかし。
「一向に伝わってこない」

「俺は雅の指示を音河のギターから聞いて、それを忠実に行った。それだけの話だ」
「具体的には？」
「コイツに3択目を与えた。例えば、俺が2つ同時に狙うことや自分が狙われることによって、避けなければならないかったり、缶の位置が移動することだったりで、2択という状況が乱されたんだ。恐らく、相手も自分と同じ状況じゃないといけなかったりするんだろうな」
そうか。
最初の2挺拳銃は、相手と状況を変えることで優位に立った。
次の人吉を狙った弾丸の意味は、相手に『避けなければならない』という3択目を作り上げた。少なくとも、そう思わせることに意味は有った。
そして最後に銃を投げたのは、缶が移動することによって『右と左』という選択の根本を変えて見せた。
だとしたら。
だとしたら、人吉はどう対応するんだろう。
「・・・・・・なーんだ。そこまでばれてんだ」
人吉はそう言って銃からトリガーを外した。

36 ―選択―（後書き）

アンケートでもしてみようかな。

37 ―信頼―（前書き）

海馬戦・・・・・・終幕

37ー信頼ー

「じゃあ、僕は簡単にルールを決められる」
「・・・・・・どんなルールだ？」
海馬が訊いた。
「弾丸は1発のみ。缶にヒットさせれば勝利。使っていいのは、銃弾と銃それぞれ1つのみだ。それ以外の行動はなしだ。弾丸を缶にヒットさせられればそれで勝ちだ」
「・・・・・・分かった」
海馬は少し悔しそうに言った。
「どうかしたのか？何なら好きに相談しなよ」
人吉は余裕の表情で言った。
そりゃそうだ。向こうは完全に2択を作り上げた。右に当てるか、左に当てるか。先に『あらゆる制限をつける』と宣言したから、この状況を否定は出来ない。
海馬でも負けてしまう、人吉の力。どうやって勝つつもりなんだろう。
そんな俺の疑問や、海馬の焦りの表情を止めたのは
「大丈夫です」
雅だった。
「先輩は強いですから」
「雅・・・・・・！」
「そのままやってください」
雅はそう言って笑った。

「ああ。分かった」
海馬はそう言って、1発だけ装填してからトリガーを外した。
「・・・・・・僕が言う筋合いは無いけどさ」

人吉はそう言って、銃を構える。
「本当にそのままやるのかい？」
「アイツが間違えるたことは無い」
「間違えた事の無い人間なんていないさ」
「そうだな。アイツのただ1つの間違いは」
海馬も銃を構えた。
「俺なんかを彼氏にしたことだ」
「のろけかい？」
「それもある」
「あっそ」
2人とも準備を完了したように笑った。
コイツらはなんだか最終的には楽しそうだった。
だとすれば。
俺としても最後くらいは全力で審判をしよう。

「開始！」
銃弾はほぼ同時に放たれた。
人吉の銃弾を自信と余裕に溢れた、真っ直ぐな軌道で缶向かって行った。
対して海馬の弾丸は、明らかに缶から離れた方向に向かって飛んでいった。

「！！」
その弾丸は机の脚にヒットした。
そう。2つ手前で、海馬の弾丸が『失敗して』め り込んだところである。
そして俺の見解ならば、同じところに弾丸が2度ヒットすれば、間違いなく壊れる。
予想通り机の脚は壊れ、机は斜めに倒れた。結果的に缶は机の傾

いた方向に向かって滑り始めた。人吉の弾丸は傾いた机の裏側にヒットした。

「念のために脚に弾丸を当てといて良かったぜ・・・・・・・」
「このための布石だったのかよ・・・・・・」
人吉はそう言って、銃弾を装填し始めた。
「おい。何してんだ？」
海馬は人吉に向かってそう言い放った。
「は？」
当然間抜けな声で答える。
そりゃそうだ。彼の角度からは見えない。
「終わったぜ。俺の勝ちだ」
「何言ってんだ・・・・・・。今、缶は落ちただろう？」
人吉は言いながら、少し顔に焦りを浮かべた。
海馬は顎で地面のそれを指した。

「・・・・・・」
人吉はそれを恐る恐る見た。
砕けた机の脚の上に、缶が見事に立っている。
「・・・・・・これが何だってんだ？」
安堵した人吉は缶をとった。
そして人吉の表情が一気に強張る。
そこには、弾丸が突き刺さっていた。２つ前にめり込ませた布石である弾丸だ。
「弾丸を缶に当てれば勝ちなんだろう？」
「・・・・・・くっそ！！」
人吉は銃をたたきつけて、地面に伏した。手で地面を叩いている。
「こんな・・・・・・こんなことがどうして出来る！！」
「雅が俺にそのままやれって教えてくれたからだな。アイツが信じていてくれたからだ」

「そんなことで出来るわけないだろう！！」
「だから、まぁそういうことだ」
海馬は言ってから、人吉を見下ろした。
……
「運が悪かったんだ」

37 ―信頼―（後書き）

まぁ主人公補正といいますか、

大抵負けないんですよね。こういうのって。

38 ―迷路―（前書き）

迷子の路と書いて迷路。

迷いの路と書いて迷路。

つまり、この世界は大きな迷路なんだよ。

38 ―迷路―

「・・・・・・あーあ。ま、いいか」
人吉はそう言って立ち上がった。
「いいよ。早く上に行きなよ」
「・・・・・・止めないのか？」
「こう見えても僕はルールは守るんだ。信条なんだよ、これでも」
人吉はそう言って銃にトリガーを戻して、弾を完全装填した。
「補充完了」
「何するんだ？」
「約束は約束だ。追手は僕がしばらく何とかするから」
「そんなことしていいのか！？」
「いいよ。幹部だから」
気楽にそう言って人吉は、笑った。
「まー多分死ぬね。僕。逃がした上に、侵入の促進。挙句に反乱・・・・・・か」
「・・・・・・大丈夫だ。何とかなる。死ぬか死なないかの2択ならお前は勝てる」
海馬がそう答えた。
「はは・・・・・・。君に言われると心なしかそんな気がするよ」
人吉は「あっちいけ」と追い払うように手を振った。
それを最後の挨拶に、俺達は階段をのぼる。
「ショック・ノート！」
音河がギターで階段の天井を破壊して時間稼ぎの対応もしておいた。
これで何とか、上に上がり続けられるだろう。

そして着いたのは２０階。
今度も廊下だった・・・・・・のだが。
階段を昇り終わった後の、目の前の廊下・・・・・・というかそれ自体が、分かれ道になっていた。
「・・・・・・これは」
分かれ道が計１０本。正面の廊下だけでも、さらに派生するようになっている。
迷路。
まさしく迷路という言葉が相応しいような、そんな廊下だった。
「テレビ局は侵入者対策用に、迷路になっているという噂を聞いたことがあるけれど・・・・・・その類かしら？恐らくここから上は有数の職員しか通れないようになっているんでしょうね」
「どちらにせよ、ココの攻略は海馬にしか任せられないだろう？」
そう。分かれ道ともなれば彼の見せ場だ。
「ああ。分かった。やってみよう」
そう言って海馬はまず、真ん中から右に2つの道を進む。そしてすぐの角を左に曲がり、次の角を無視して真っ直ぐ歩く。
というように、適当に歩いて海馬は進んだ。

しかし。
俺達が最終的に行き着いた先は、下りの階段だった。
「戻って・・・・・・きた」
音河がそう言った。
「・・・・・・どうなってんだ？」
俺は取り敢えず海馬に聞いてみる。
「知らん。さっきから俺の運は否定されてばかりだな・・・・・・」
少し海馬は落ち込みムードで言う。
取り敢えず、もう一度海馬の勘のルートを通ってみた。
「・・・・・・」

また戻ってきた。
「やってられっか！！」
海馬はそう言ってふてくされた。
「どうなってんだ？海馬でも通れないなんて・・・・・・」
俺がそう呟くと

『そりゃあそうさ』
廊下からそう聞こえた。
上・・・・・・スピーカーだ。
この声は・・・・・・女？
『海馬君の運の確率は１００％なんだよ。なのに通れない理由・・・・・・それを考えてみれば簡単に分かるよ』
「お前誰だ！！」
『私は魅陽（みよう）。そしてここは［帰りの道］。有数の人間だけが通れる道。残りの人間は帰ってもらわないといけない迷路なのさ。さ、早く私のところへおいでよ』
挑発するように魅陽は言った。

38 ―迷路―（後書き）

何をすればいいかもわからない。

してしまえば戻れない。

後戻りのきかないレール。

常に後ろから列車が来ているんだ。

３９ー蝙蝠ー（前書き）

迷路の謎を解明しましょう。

答えはＣＭの後！

というか、本文の後。

39ー蝙蝠ー

・・・・・・・へー・・・・・・・。
「だとよ」
俺はそう言って海馬を見た。
「俺に言われても困る。今回の事に関しては俺はお手上げだ。1回で出来なかった奴が2回3回やっても無駄だよ。特に俺の場合」
と、海馬は両手をあげて降参の意を表する。
だとすれば頼れるのは雅か・・・・・・。
「雅。何かいい策は思いついたか？」
「・・・・・・嘉島さんの手で人の辿った跡を探りながら進むというのはどうでしょうか？」
「よし。任せとけ」
俺はそう宣言してから右手を地面につけた。
「・・・・・・ここはやっぱり数人しか通る人間は居ないようだ。向かっている足跡は全て同じ方向に向かっている。こりゃ余裕そうだぜ？」
俺はその跡を追って歩き始めた。

が、すぐに壁に到達してしまった。
行き止まりである。
「・・・・・・嘉島君」
虎郷が冷たい声で言う。
「・・・・・・この地面まで反応はあったんだ。壁の正面に立ってから消えた・・・・・・」
「・・・・・・もしかして壁の奥に道があるんじゃないか？」
海馬がそう言って、壁を触る。
「虎郷、頼めるか」
「分かったわ」

淡白にそう言って、虎郷は壁を右足で蹴った。
コンクリートの壁が壊れて、煙が出る。崩れる音は廊下に反響して、鼓膜を揺らす。
が、すぐにその煙は風によってかき消された。
「・・・・・・これは・・・・・・」
底から見えたのは建物。暗闇とそこにちらほら見える光。そして吹きすさぶ風・・・・・・。
そう。

外である。
「ここは建物の端っこだったようね。間違いなく外よ」
「実は映像とか・・・・・・」
言いながら海馬が瓦礫を落とす。
地面に向かって急降下して落ちていき、どんどん小さくなっていった後、暗闇に溶け込んだ。
「・・・・・・じゃ、ねえな」
「嘉島君・・・・・・」
虎郷の冷たい声が通路に反射する。

「俺もお手上げだな」
俺はそう言ってから両手を挙げた。
「私も対応策が見つかりません。そもそもこういう確率戦で正先輩が負けた時点で私としてはお手上げなんです」
雅もそう言って少し落ち込んだ。
打開策無しか・・・・・・。
そう思ったとき。

「おかしい・・・・・・」
音河が言った。
「何が？」

「声が反響しているんだよ。声が壁にぶつかって反射している。でも外と繋がっている以上、普通は反響しないけれど、ほら」
そう言って音河は言葉を区切る。

・・・・・反響しない。
「あれ？」
「いや、さっきまで確かに反響はしていた。何かが変わったんだ」
「・・・・・・・・・・・・もしかしたら・・・・・・」
雅はそう呟いて、風が強く吹いている外を見た。そしてその直前の床を触る。
「・・・・・・音河さん。ギターの効果の『モスキート』を使ってみてください」
「・・・・・・？分かったよ。やってみる」
そう言って音河はギターを構える。
小さな、聞こえるか聞こえないかの音が鳴る。
「・・・・・・どうですか？音河先輩」
「音が・・・・・・反響している・・・・・・？」
「そうですか。では行きましょう」
そう言って雅はその壁から離れた。
「雅？」
結局、４メートルくらい離れて、雅は外に向かって助走をし始めた。
「おい、おま――」
海馬が叫んだが遅かった。
雅は外に向かって飛んでいった。
そして雅は・・・・・・・・・・。
その外に立った。

「な・・・・・・何だ？」
「これは映像・・・・・・しかも本物に忠実な幻覚です」

「げ、幻覚・・・・・・？」
どういうことだ・・・・・・。
そう思ったときには、外であったそこは、ただの廊下になっていた。瞬(まばた)きをした一瞬のうちに変わったという感じだ。
「では行きましょう！」
雅は走り始めた。

「海馬君がクリアできなかったわけね・・・・・・」
虎郷はそう言って廊下を進む。
「どういうことだ？」
俺は走りながら訊く。
「彼は予想できない事に関しては対応できない。それはつまり、選択肢にないものを選ぶ事はできないということなの。だから、彼は壁の奥にある物に気付けなかったし、まさか外の世界が幻覚だとは思わなかったわけ」
「ああ・・・・・。なるほどな」
そりゃ選択肢がないのに答えるなんて真似はできないだろう。
「でもあの幻覚は本当に外と変わりないレベルだったぜ？なのにどうして雅は通れたんだ？」
「簡単です」
雅が答える。
「あれは幻覚を幻覚と信じなければいいんです。信じてしまえば、それは石が地面に落ちていく事まで、『自分』想像してしまう。信じなければそこには道は無いと言うわけです」
そこまで答えて、大きな機械の前に着いた。

「ちなみに私が気付いた理由は、音河さんの言った反響の現象が、突然消えた事です。恐らく、音河さんの話を聴いて、咄嗟に幻覚の作用を発生させたんでしょう。しかし、音河さんの能力に、彼女の能力が勝つことはできなかった。だからモスキートは発動したんで

す」
そう言って雅は笑った。
『いやー・・・すごいね。そこまで見抜いた人間はそんなにはいないよ。まぁ、隼人はさっさと気付いちゃって、かわいくない弟だけどさ』
魅陽の声が聞こえた。
俺達はその方向を見る。
そして驚愕した。
その声は目の前にあった、大きな機械から聞こえたのだった。

39 ―蝙蝠―（後書き）

蝙蝠は物体に対して超音波を放つ事で、物体との距離や形を理解しているそうです。

音河はそれを利用したのです。

ちなみに『モスキート』は、本文では、蚊が飛ぶくらい小さな音、という意味です。

４０ー人間ー（前書き）

人間の定義は何だろう。

どこにあるかも分からない、心があればいいのだろうか。

誰かに思われればいいのだろうか。

人間の活動における、働くべき器官があればいいのだろうか。

人の形をしていればいいのだろうか。

僕には分からない。一生掛けても。

死んだ時に気付けるのかもしれないけれど、それはもう僕ではないから。

40 ―人間―

「アンタが・・・・・・魅陽・・・・・・・？」
俺はそう言った。
『ああ。そうだよ。なんだ、君らもか。どうして私をみたら皆驚愕するのかなぁ・・・・・・・？』
魅陽は言う。
つまり。
つまり、放送の声ではなく、この『機械』が『魅陽』なのか。

「・・・・・・あんた・・・・・・・弟って・・・・・・・？」
『隼人のことかい？そりゃそうさ。彼が生まれるのとほぼ同時に私は生まれたたんだから』
「生まれた・・・・・・・？」
『うん。そうだよ。彼はどんどん成長していくけれど、私は成長っていうのは分からないんだよねー。隼人なんかもうすっかり大人だよ。でも私には子ども時代は無かったから、もう大人なのかな？』
「・・・・・・お前何言っているんだ？」
俺ばかりが質問している。
『あー・・・・・・分からなくてもいいよ。私のことは理解できないから。できるはずないから。だって私は特別な生態だからねー』
・・・・・・。
全員口を噤んでいる。
俺でさえ分かっているんだ。皆気付いているに違いない。
そう。

彼女、魅陽は――王城魅陽は、自分を人間だと思い込んでいる。

人間だと思い込み、それに合理的な理由をつけている。
自分は皆とは違う生物なのだという・・・・・・自分への言い訳。
無意識なイメージ。幻想。幻覚。

・・・・・・そうか。
幻覚という彼女の能力が生まれた理由。
それは『ミラー』だ。
自分を人間だと思い込み、それで『無意識』願った願い。
人間になりたいという願い。
その幻想。

それが彼女の能力を作り上げた。
自分の思っている世界観を作り上げる。
そして、彼女は自分の能力に気付いている。しかし、自分の存在には気付けいない。

「・・・・・・」
『あり？どうかしたのか？急激に元気をなくしたね』
「・・・・・・音河の発言でお前は幻覚を作り上げたのか？」
『ん？ああ、その話ね。そうだよ。まさか洞窟みたいな強い反響じゃないのに、隼人の彼女さんが気付いているとは思わなかったよ』
「まぁ、耳がいいのが音河の特徴だからな・・・・・・。ところで迷路は攻略って事でいいのか？」
『いいんじゃない？そもそも私はここを完備するだけで、動けないからねー。私の後ろに階段があるよ』
魅陽はそう言った。
「おい、嘉島」

「・・・・・・なんだよ、海馬」
「何普通に話してんだよ、お前分かってんのか？」
「ああ分かってるぜ？アイツは隼人の姉貴だ」
「・・・・・・・嘉島」
「それが真実だ」
俺はその判断にした。
それが答えでいいのだ。

彼女の考え方は美しい。
でも正しくない。
それは俺も同様に。
彼女に『本当』を教えないことは、美しくはあっても正しくは無いのだ。
どこかにそんなフレーズがあったのを覚えている。
そしてそれは俺にとって、言い得て妙なのだ。

「魅陽さん。ここを通す事はできますか？」
雅が訊く。
『どうだろう。私は自分の考えで行動できるようになっているから、私が何とかできると思うけれど・・・・・・』
そう言って、少し黙った。
そして次に出た音声は

『・・・・・・・ゴメン、ダメだ』
だった。
『侵入者は全員消去だよ。ここまできてしまった以上は』
その声を合図に、壁や機械本体から、あらゆる武器が出てくる。
刀、銃、機関銃、マグナム、火炎放射器、ロケットランチャー・・・・・・
「！！」

極めつけは大きな『手』だった。
その『手』が、俺達を握りつぶそうとするように俺達を掴む。
『手』には爆弾がついているようだ。

『ゴメンね。隼人の友達達。私は命令に従うように育てられてきたから』
本当にかわいそうだというように、魅陽さんは言いながら、
全ての武器を俺達に突きつけた。抵抗しても無駄ということか・・・・・・。

「・・・・・・マジかよ」
「く・・・・・・」
海馬と雅は必死にもがくが外れるはずも無い。
「うわあああああああああああああああああ！！」
音河は叫んだ。
そして、音河を締め付けていた手が、機械の作動する音と共に爆発した。

41―咆哮―（前書き）

突然ですが、なんとなく今回の話は面白くないような気がします。

でも、物語のつなぎとしての役割をきちっと果たしてくれています。

41－咆哮－

爆発の被害はそこまで酷くは無かった。

というよりもおかしかった。

殺傷能力がある無いの問題以前に、爆発した箇所がおかしい。

爆弾は掌に有ったにも拘らず、爆発したのは手首（あの機械において、それで正しいのかは分からない）の部分が爆発したのだから、それは恐らく別次元。

「何だ・・・・・・？」

音河にはほとんどダメージも無く、そのまま立ち上がってから

「あああああああああああああああ！！」

ともう一度叫んだ。

それで分かった。

咆哮だ。彼女の声から衝撃波が出ている。恐らく感覚だから、これは俺にしか見えていないだろうけれど、それは間違いなく『叫び声』の衝撃波だった。

その衝撃波は波紋のように広がり、俺達を掴んでいたその手を破壊する。

「・・・・・・はぁ・・・・・・はぁ」

音河は肩で息をしていた。どうやらかなりの体力を消費したらしい。

「音河・・・・・・それは・・・・・・？」

海馬が訊く。雅と虎郷も同じように不思議そうな顔をしている。

そりゃそうだ。俺以外には見えてないんだから。
そして当然音河も首を振る。
「恐らく、アレも――いや、アレが進化だ。さっきのギターに声を乗せるという芸当は進化の過程だろう。音河の進化はずばり『声』だったんだ」
「嘉島・・・・・・分かるのか？」
「なんとなく、隼人ならそう考える気がしたんだ」
本当になんとなくだ。隼人がこれに理由をつけるとしたらそう言うだろう。
分かったような気がする。そんな感覚だった。

『凄いことしてくれるね・・・・・・。驚きだよ。本当に。隼人の妻がこんなのだと思うと、頭が上がらないなぁ』
「お前には――」
『・・・・・・ん？何？』
「なんでもない」

お前には上がる頭もないだろう。
そう言おうと思った。
でもそれはダメだ。
俺が選んだのは、『彼女を人間として終わらせること』だ。それが彼女にとっての幸せのはず。
『でもゴメンよ。結局私は止まれないんだ。命令が送られてきているから』
魅陽はそう『言って』、手以外の物を俺達に構えた。
「音河！いけるか？」
俺は取り敢えず訊いてみる。
「・・・・・・ゴメン・・・・・・。あれは体力の消費が激しいみたい」
そう言って、音河の体は少しふらつく。

「虎郷！音河を頼む」
「分かったわ」
初めからそうするつもりだったように、俺が言う前から動いていた。

それにしてもどうする・・・・・・。時間掛けてられない。
どうする・・・・・・。俺の能力や雅の能力では防衛が限界。海馬のおかげで『運良く』死ぬ事は無いだろうけれど、それでも敗北を喫するのは危険だ。
まだ・・・・・・まだ可能性があるんじゃないか？
俺達の最初のピンチを救ってくれたのは東先輩だった。
それは可能性に気付いていなかっただけに、嬉しい参上だった。

待てよ・・・・・・だとすれば・・・・・・！！

『・・・・・・あれ？何？君は』
魅陽の動きが止まる。
『君は・・・・・・何なんだ？どうして私の目の前に居るんだ？どうしてここに居るんだよ！！』
「な・・・・・・何だ！？」
海馬が驚きを隠せない様子だ。
『うわ！！何して――』
ボカン！！
という音と共に、重機関銃が破壊された。
『どうしてそんなことが出来るんだ！？というか君は一体・・・・・・』
さらに、刀や銃が破壊される。破壊され続ける。
激しい爆発音が鳴り響き続ける。
『何だよ！！何なんだよ、君は！！』

【・・・・・・は・・・・・・・大じょ・・・・・・・なのか？】
声。
機械からもう１つ音声が聞こえる。
【あー・・・・・・聞こえるか？】
「この声・・・・・・・」
音河が苦しそうに反応した。
【お、占拠完了かな？よう、お前ら。俺は救世主じゃねえか？】
なんだか、俺は助けられてばかりのような気がするけれど。
それでもとても嬉しかった。
全員がひとつになっているような気がして。
「今日元さん！！」
だから俺は思わず叫んだ。

41ー咆哮ー（後書き）

仲間は突然集まるものなのだ。

誰かが何かしてからではなく、あらかじめ決まっているかの動きなのだ。

42 ―電波―（前書き）

注：電波少年とかそういう意味ではありません。

42ー電波ー

恐らく、魅陽の前には絶世の美人が立っているに違いない。

そう。彼女の作った幻想の自分世界の目の前に、リアルな人間が居るに違いない。

両方ともそこには居ないのに。

『何なんだ・・・・・・。あなたはどうしてココに入られるんだ・・・・・・？』

【俺はアンタと似ているからな。人じゃないのに、人っていうアンタとね】

！！

言ってしまった。

『・・・・・・何言ってんの？』

「今日元さん！それは――」

【おいおい、嘉島。コイツが気付いていないわけ無いだろう？自分が人間じゃない事ぐらい誰でも気付くさ。特に周りの人間との違いを見たときにね】

それは普通はそうかもしれない。

でも魅陽は気付いていないはずだ・・・・・・。

【・・・・・・嘉島。コイツの発言を聞いていなかったのか？言っていただろう？『私は自分の考えで行動できるようになっている』って。つまり、コイツは自分は人以外の何かだって知ってたんだよ。だって、人間なら自分の考えで行動できるのは当然だからな。わざわざ『私は』なんて表現を使う必要も無いのさ】

「でも、コイツは自分がおかしい生命体だから、人間にも自分で考えて行動できない奴が居ると思っていたのかもしれない！」

【それもないな。コイツは命令が『送られてくる』って思っていた】
「それも、さっきと同様の理由が――」
【嘉島は優しいな】
俺の発言を今日元さんはそう言って邪魔する。突然の発言に俺も意表を突かれて、発言が止まってしまう。
【でもな。確実な情報があるのさ。俺がコイツの前に現れたときの動揺聞いただろう？『どうしてここに居るんだ』ってさ。それはここに人がいることがおかしいと思っていたのさ。もちろん、これにもさっきと同じような理由付けが可能だぜ？でも、その過程が壊れるだけでこれら全てが矛盾になるんだよ】
「・・・・・・つまり・・・・・・」
俺は唾を飲み込む。そして、俺は自分に言い聞かせるように自分で言った。
「・・・・・・嘘・・・・・・か」
【そうだ。そしてこうやって黙っている事も最大の理由だろう】
今日元さんはそう言って、黙った。
魅陽の姿は見えないから正確なことは分からないけれど、黙っている事から様子がひしひしと伝わってくる。
しばらく沈黙が流れた後、

『・・・・・・私は人に憧れていた』
と音声が流れる。
『私が2歳の時、自分以外の子どもは私ほど頭が良くない事に気付いた。そこから、私は瞬時に自分が人でないことに気付いた。王城の機械だ。それくらいの演算力はある』
私としては絶望的だったけどね。
と、皮肉交じりに続ける。
『だから、私は人になりたかった。人として生きていたかった。それが私の〔イメージ・バーン〕を作り上げた理由だよ』
魅陽はそう言った。

間違いなく。
言った。
俺のはその姿が目に浮かんだ。

「・・・・・・魅陽さん」
雅が言った。
『何？』
「通していただけますか？貴方がいくら兄弟以外の同級生と話したいと思っていても」
『はは・・・・・・・ばれてたのか』
魅陽はそう言った。
そうか。彼女は兄弟以外に同級生を知らないんだ。だから彼女は遊びたい・・・・・・・いや、話したいと思った。対話したいと思ったんだ。
機械は何も知らない。だから知りたいと願う。人だと思っていたかったのならなおさらである。

魅陽は横にスライドして階段への道を開いた。
『じゃ、また会えたらね』
それだけ言うと、コンピューターとしての機能を止めるように、ランプやエンジン音が全て消え去った。

「・・・・・・行こう」
俺はそう呟いて、先に階段を昇り始めた。

俺は美しかったと思う。彼女を人として終わらせてあげたかった。
でも、正しくは無かった。彼女に真実を告げることが、絶対に正しかったはずなのに。
それを今日元さんはした。
間違いなく、あの人は正しかった。

正しい事をする。
それでも。
どうしても。
正しい事を突きつけることが、俺には正しいとは思えなかった。

42ー電波ー（後書き）

よし。書き溜めていたものが消えた。

どうしようかな・・・・・・

43 ―分裂―（前書き）

人の細胞分裂ってどうすりゃいいのかねー。

あれは微生物の特権かね？

生物が全員アメーバだったら、世界平和につながるよ。

ま、僕は人間で幸せだけど。

皆はどう？今幸せかい？

43 ―分裂―

２５階。

そこは俺の受けた印象としては「資料室」が相応しかった。鉄製の本棚が幾つもある。ざっと数えても３０くらい。

どうしてこんな上の方の階にこんな部屋があるのだろう。まぁ、もちろん、俺達は階段だけを昇っていたから他の部屋を見ていないため、他にも同じようにこんな部屋が多数存在するだけなのかもしれない。あらゆる階におけば、その階の近くに居る人間の行動では楽かもしれない。

けれど、そもそもエレベーターがあるのだ。だからわざわざ、俺達のように律儀に階段を昇ってくる必要も無いのだ。

「違和感・・・・・・だな」

俺はそう呟いた。全員が黙って、同意を示す。

「それにしても・・・・・・ここどっかで見たような気がするな」

俺がそう呟くと

「私もそんな気がするわ。でも、正確には思い出せない」

と虎郷も答えた。

その時だった。

「早いな」

と前方から声が聞こえた。

居たのは見知らぬ男。

「お前誰だ」

失礼ながら海馬がいきなり言い放つ。

「お前らの目的、『仙波　周真』だ」

発言と俺達どちらが早かっただろうか。

俺の右足は仙波の腹部、雅の左足がくるぶしを狙う。

パァン！

と。

俺の右足と雅の左足が交差し衝突した。もちろん、避けられたわけではない。俺達は方向転換したように、脚同士をぶつけた。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

俺達はその状況に対して、冷静に仙波を睨む。

「・・・・・・・なんだ。お前ら。もう少し驚いたりしろよ。ビックリしないのか？」

「そんなの関係ない」

俺は答えてから、雅と脚を外した。

・・・・・・思ったより固かった。強く引っ張らないと取れなかった。

何しやがったんだ、コイツ。

「お前らも能力者って奴なんだろ？どんなのかは知らないけどな」

仙波はそうおどけてから、本棚の前に立つ。

「ルールは簡単。俺が負けたらお前らの勝ちだ」

そう言って、仙波が――いや、仙波ではなく、本棚が動き始めた。床を動くように。

「！？」

本棚は俺達を襲いながら動き続ける。仙波の位置が不明になる。無駄に広い部屋だ。それを見越しての行動か・・・・・・。

そんな事を思ってから、

「全員ばらけるな！コレは向こう側の作戦である確率が高い！」

俺はそう叫んだ。

「どういう！？」

音河が叫んで尋ねてくる。
「分からない。でも、そんな気がする」
「・・・・・・わかった！」
音河は俺のあいまいな返事を信じてくれた。
それにしても、さっきから俺も怪しい情報が多いな。どうなっているんだ。俺の脳は・・・・・・。

その次の瞬間、波のように動き続けていた本棚が、規律正しく、並んだ。
「・・・・・・何をする気でしょうか」
雅が呟いた。
沈黙。
そして次の瞬間。

突然本棚が一斉に動き始めた。しかも先ほどの数倍の速さで。
「避けろぉ！！」
俺は叫ぶと同時に、右側に避けた。音河、海馬、雅は左側へと避ける。すなわち、虎郷は俺と同じ側に避ける。
本棚は、そこに真っ直ぐ並び、連なり、上に積まれていく。そして、左側と右側で完全に分裂された空間になった。さらに、本棚はまだまだ有り余っている。少なくともこちら側には。

「く・・・・・・合流しなおそう！」
「ええ」
そう言ってから2人で1つの本棚を蹴り飛ばす。
「！？」
びくともしない。
「そんな・・・・・・どうなっているんだ？」
俺達が焦っていると、

「それは外れないだろうな。すげー硬くなっているから」
男が現れた。仙波じゃない。
そして・・・・・。

そして、そいつには見覚えがあった。そして、それで俺は思い出す。
ここはあそこに似ているんだ。と。

目の前に現れたのは木好さんだった。
「久しぶりだな。火水。あと、嘉島」

虎郷の動きが止まる。
そう、この空間はあの図書館にそっくりなんだ。
虎郷が思いを解き放ち、燃え尽きたあの建物に。

４４ー炎々ー（前書き）

焔焔に滅せずんば炎炎を若何せん

事がまだ小さいときに防ぎ止めなければ、遂には大事になって手のつけようがなくなる。

４４ー炎々ー

木好さんは右手と左手を両方とも前方に掲げている。
「くっそ・・・・・・」
俺は戦闘態勢を取る。
しかし。
「・・・・・・・！？」
虎郷は動かない。
いや、動けない。
「虎郷！しっかりしろよ！」
「・・・・・・」
今までしっかりしていた。木好さんの情報を聞いても、何の変動も起こっていなかった。のに。
今はこうして動きを封じられたように、何の行動も起こさない。
心が・・・・・・解き放ったはずの心が、戻ろうとしている。閉じようとしている。
俺はどことなくそう感じた。
「何だ？動かないのか？」
木好さんは俺達にそういうと、掲げた手を下げた。
「心配すんなよ、火水。俺はお前は殺さないから」
「・・・・・・」
「面倒だけど、頑張って調節して、嘉島だけ殺すから」
言ったが早いか、彼の姿はそこから消えた。

瞬間移動。
別に奇術、魔術の類ではなく、彼の手から出る炎の発射時の力の反作用だ。
でも、俺には分かる。
どこに攻撃が来るのか。

「右！」
俺は左手を突き出した。
ドガ！
と、木好さんの右手にぶつける。

「・・・・・・へぇ、成長したんだな」
「成長期ですから」
「ざけんな」
木好さんはそのまま、右手に力を込めて思い切り俺を吹き飛ばす。
力技かよ・・・・・・。
「だったら俺だって強いってところを見せてやんぜ」
木好さんはそのまま突っ込んでくる。同じように右手を突き出す。
「！」
しかし、今回は燃えている。右手が炎を纏っている。
「そういや・・・・・・そうだった」
俺はそう呟いてから右手を地面につけて、壁を作る。
「そんなの訊くわけねーぜ！！」
木好さんはそう叫んでから、その壁に右手を叩きつける。
言ってもコンクリートだ。普通の人では壊せない。だから大丈夫だと、俺は高を括っていた
「！」
右手はその壁を溶かし始め、コンクリートは泥のようになる。そしてそこに右手がぶつかり、見事に砕けた。
マジか！コイツ！
俺は全力で右に向かって跳ぶ。拳は俺の後ろの壁にぶつかった。
「どんだけ燃えてんだ！？瞬間でコンクリート溶かすなんて！！」
「さぁな。油断大敵って奴だ」
木好さんは更に左手にも炎を纏わせる。
木好さん・・・・・・両手に纏わせられたのか・・・・・・？

出来てもやらなかったのか、これも一種の進化・・・・・・。
『火水を取り返す』という欲望であり願望・・・・・。
そういうことか。
「待てよ？お前は炎は掴めないよな？」
木好さんはそういうと、
「じゃあこうすりゃいいのか」
といってから、左手の炎を消した。
そして消えた。
瞬間移動だ。
しかし前ほど見えないわけではない。赤い右手の炎が移動ルートを表してくれている。
でも、見えているから俺には何とかできるわけじゃない。
拳は俺の右側頭部狙ってきていた。
「くっそ！」
俺は後ろに転ぶようにそれを避けた。
拳はそこで空を切る。
轟音のような空気を切る音だった。

「お前は避けるしかないよな？でもそれも、いつまでもつだろうな？」
「・・・・・・厄介だ」

４４ー炎々ー（後書き）

脅威になりそうなものはあらかじめ殺しておくべきだ　と。

そういう意味らしい。

45 ―雷電―（前書き）

今回は海馬たちの戦いです。

誰目線なのかは置いておきましょう。

45ー雷電ー

＝＝＝

「まぁな。虎郷への未練を捨てきれないだろうって俺が推測して、脱走させて、見つけて、提案したら一発だった」
仙波がそこまで言った瞬間に、バンという大きな音が鳴った。
「！」
雅の右足が仙波の顔面に向かって伸びた。

「！？」
雅は瞬間的に、海馬と音河の元へと帰ってきた。
「残念。俺の能力だ」
すばらしく、勝ち誇った顔で言った。しかし
「今ので完全に分かりました。貴方の能力が」
雅はそれに向かって言い放った。
「貴方の能力は磁石です。あの本棚は金属ですから、それで止めているのでしょう？」
「・・・・・・へぇ。面白いな、お前。普通はそんなこと考えられないと思うけど」
「お褒めに預かり光栄です」
雅の発言と同時に、何かが目の前をよぎった。
まだ残っていた、仕切り以外の本棚だ。
「まぁ、磁石の力で床と本棚との磁力を逆にしたり、本棚同士の磁力を上げたりして引っ付けているわけだ。だからここの本棚は全て鉄製なんだよ。んで、攻撃が来た時は、俺と相手の磁力を逆にしたり、2人がかりとかなら、その2人の磁力を同じにすればいいってわけだ」
「それだけ分かれば簡単です。音河さん。お願いします」
「了解」
音河は返事をしてから、ギターを構える。
「ショッキング・スリング！」
ギターの弦が伸びて、そこに残っていた本棚全てに突き刺した。
「本棚を壊しても、貴方なら修復させて、壁にする。だから本棚の

動きを止めました。これで貴方を守る盾はありません」
雅はそう言って仙波に指を差した。
「・・・・・・でも、俺にどうやって攻撃しても、意味は無いぜ？俺はそれの磁力を変える。どんなに多くてもだ。例え世界中の石が俺に向かってきても、俺は跳ね返せる」
逆に雅も指を差し返してきた
「そうです。だからものでは戦いません」
雅はそう言ってから、一歩下がった。
そして音河が深く呼吸をする。
「・・・・・・ボイス・バースト！」
音河はそう叫んだ。その『声』は空気を切り裂き、ラインを作って真っ直ぐ飛ぶ。
「音速の衝撃波か！」
仙波はそう叫んでから体の前に腕を交差させて組んで、防御態勢をを作る。しかし、手の平はこちらに向けている。
仙波にそれは衝突して――。
衝突して。

何も起こらない。
「・・・・・・残念だったな。俺には効かん」
「そんな・・・・・・」
雅は後ずさりする。
「ボイス・バースト！」
音河はもう一発声を放った。
「お前なら、これで気付くだろう？」
仙波は言いながらライン上に右手をかざした。
すると、
バリバリ！！
という、激しい音を立てた。
そして衝撃波のラインは消える。

「・・・・・・なんだ!?何が起きた?」
海馬が訊く。
「・・・・・・そうか・・・・・・・電気分解・・・・・・・」
雅が呟く。
「電気分解です」
雅はもう一度そう言った。
「電気分解?」
「ええ。彼の能力は磁石じゃなくて『電気』だったんです。彼の体からは電気が溢れていて、それを体の周りで回転させることによって、自分を『電磁石』にしたんです!」
「・・・・・・コイルってことかよ・・・・・・」
「そして空気を電気分解することで、衝撃波の通るべき道を強制的に排除した・・・・・・。それがあの人の能力です!」
雅はそう言った。
そして3人とも思った。
実体あるものは弾かれ、実体無きものは消される。
これは・・・・・・勝てない。
そう思った。

45 ―雷電―（後書き）

これ、サブタイトルで能力ばれるような気がしてきた。

46 ―勝機―（前書き）

勝つ確率が低くても、光明は必ずある。

それが勝機だ。狙え。

４６ー勝機ー

「どんどん行くぜ？」
木好さんはそう言ってから俺に向かって拳を振るう。彼の右手は相変わらず燃えている。
俺はそれを間一髪で前方へ避ける。本棚があるせいで、こちら側は、縦長な部屋へと変貌してしまい、行動が制限されている。避けるのが難しい。
いや、待て。こういう部屋にはスプリンクラーがあるものじゃないのか？
そう思って天井を見る。
・・・・・・あった。でも、どうして作動しないんだ！？
「スプリンクラーなら作動しないようになっている。魅陽とか言うメインコンピューターで制御されているんだ」
「・・・・・・」
だとすれば、今は作動していないはず・・・・・・。いや、待て？あそこには今、今日元さんと魅陽は「居る」。だから、作動はしてしまうんだ！！電源が切られたからといって、全ての電力が供給できていないわけでない。だってじゃないと電気すら消えてしまう。恐らく、２０階以上の階のみ、電気を供給しているんだ。
「くっそ・・・・・・」
「諦めな。そして虎郷を返せ」
「・・・・・・何言ってんだよ」
俺は立ち止まってから言う。
「虎郷はお前の物じゃなくなっただろ！！お前が取り返す権限なんか無いんだ」
「ああ。無い。だが、お前らのところにおいておくのは癪なんだよ。別に俺の物にしたいわけじゃないけど、お前ら・・・・・・いや」

木好さんはそこで一拍置いた。
「お前の横においておきたくないんだよ」
「・・・・・・何・・・・・・！？」
「元々、お前が火水に声を掛けなければ、俺とコイツは永遠の愛で平和に終わったはずなんだよ。なのにお前が関わった所為で、俺が犯人だってばれて、火水を殺すことは出来なかった」
「・・・・・・」
「お前が俺から何もかも奪ったんだよ！！」
木好さんは右手を俺に振り下ろす。俺はもう一度、後ろに避ける。そして座り込んでいる虎郷の横に並んだ。
「虎郷！しっかりしろ！お前の問題だろう！」
「・・・・・・」
「虎郷！」
俺は何度も名前を呼ぶが反応が無い。
本人が現れるだけでショックはこんなにも大きいものなのか・・・・・・！？
・・・・・・いや、違う。この場所だ。
あの図書館にそっくりなこの場所が、虎郷の神経を呼び覚ましているんだ。
フューチャー・ライン・・・・・・ファントム・ダーツ。
それで不運な未来を見ているのかもしれない。
「俺がお前を助ける。だからそこで待ってろ！」
俺はそれだけ言うと、立ち上がって、走りこむ。
「な・・・・・！」
突然の俺の行為に対応できなかった木好さんは、そのまま俺が懐に入るのを許した。そして左手で木好さんを殴る。
瞬間、右手の炎が揺らぐ。俺の左手で情報を送信する事で体の内部が狂い始めている証拠だ。
「くそが！」
鳩尾を蹴られた。俺の体は、ずれたように後ろに吹き飛ぶ。

「調子に乗んなよ！」
木好さんは走りながら、燃えている右手を構えている。
「波！」
俺は左手を突き出した。久しぶりの衝撃波飛ばし。
「！？」
木好さんは意表を突かれて、そのまま後方に吹き飛ぶ。
さっきから不意打ちしか出来ていないのが情けないが、俺にはその手しかない。
「ふざけた攻撃を！！」
木好さんは怒る。すると
「！？」
木好さんは今度は体まで燃やし始めた。靴は燃やさないように調節しているし、服も燃えない。
「俺だって成長してる。これ以上、お前の好き勝手させっかよ！」
木好さんはそう言って俺に向かって走り始めた。
マジかよ・・・・・・。
床に左手を当てて、壁を作る。
が、
「訊くわけ無いってわかってんだろ！！」
突っ込んできただけで、それは溶かされる。
そして燃える拳は俺の胸部を思い切り突く。
「か・・・・・・」
痛い。そして熱い。俺はそのまま飛ばされた。
でもここで止まるわけには行かない。俺の仕込みはまだ完了していないから。
俺は、受身を取って床に着地し、左手で何個もの壁を作っていく。
「全部無駄なんだよ！！」
「やってみないと・・・・・・わからないだろ・・・・・・」
痛い。肺までやられたか？
そう思ったときには、全ての壁が溶けていた。これ床は溶けてし

まわないのか？と思ったが、よく見たら溶け始めている。
木好さんの拳は、今度は見事を空を切った。

俺を虎郷が引っ張ったから。
「・・・・・・私が・・・・・・・諦めるわけには行かない」
虎郷は震えながらそう言った。
「・・・・・・・そうだな・・・・・・・」
「私が死ねば事は丸く収まるのに・・・・・・・」
「・・・・・・ダメだ。絶対に」
俺はそう答えてから、その場を離れる。木好さんの追撃が来たから。その木好さんは
「大丈夫。お前は俺が殺してやる」
と言い放った。
「・・・・・・！」
虎郷の精神がまた揺らぎ始める。

・・・・・・くっそが！！
「畜生！」
俺は横の壁を左手で叩いて、こちら側に伸ばして壁を作った。正確には壁というより、ハードルのバーのような感じだ。そしてその壁の一部でで剣を作る。

「まだ分からないのか！」
木好さんは走る。
「こんなものは、俺の熱で！」
こちらに向かって突っ込んでくる。
「一瞬で溶かー－」
どぎゃしゃ
と。
木好さんはその棒に顔をぶつけた。

俺はその棒を飛び越えて、剣を右手に向かって伸ばす。
「くっそが！」
木好さんは顔を左手で覆いながら、右手から炎を出す。
俺の周りを炎が通過する。
しかし、めげるわけには行かない。俺の最後の『不意打ち』だ！
俺はそのまま剣を突きたてた。

ズシャァ！！
「いってええええええ！！」
木好さんは叫ぶ。俺はその剣を床に貫通するまでつきたてる。
「種明かしだ」
俺は指をさす。木好さんは見ていないかもしれないけど、気にしない。
それは、黒くこげた壁だった。
「あれは、俺が最初に床で作った壁をアンタの右手が貫通して、俺が避ける事によって勢いそのままあの壁にぶつかった時に出来た痕だ」
木好さんは痛みを抑えながらもそれを見ている。
「あの壁がアンタの高熱に耐えれた。それを見て俺は、理由は分からないが、アレは高熱に耐えられるって分かった。だから、アレを使った。でも、慎重なアンタが、簡単に引っ掛かるとは思わなかった。それで思いついた。アンタに、俺の出したものは溶かすことが出来るって思わせればいいってな」
そう。
あんなにしつこく、勝てない壁を出し続けたのは、コレのための仕込だった。

「ぐ！」
体に激痛が走る。
・・・・・・くっそ。痛ぇ・・・・・・。死にそうだ。

その時だった。

「・・・・・・くっそがぁぁぁ！！」

木好さんはその状態から身を無理やり捩って、立ち上がり、走り出した。

「！！」

虎郷の方に向かって。

右手は燃え盛る拳に成っている。

「お前も俺を狂わせた！責任もって死ね！」

右手を座り込む虎郷の頭蓋に向けて振るった。

ドガァ！！

あぁ。くっそ。

「・・・・・・嘉島君・・・・・・・！？」

木好さんと虎郷の間に割って入り、その拳を背中で受けた。

47 ―開放―（前書き）

突然ですが、風というか、空気の匂いって分かります？

どことなく、何か、感じる時がたまにあります。

いいとか悪いではなく、『気持ちいい』匂いなんですよね。

47ー開放ー

何が原因かと尋ねられれば、真っ直ぐに答えられる。

俺だ。

こんなことまで虎郷の所為にはしないし、ならないし、出来ない。

「嘉島君！！」

もう一度しっかりと虎郷は俺の名前を呼ぶ。

「・・・・・・セー・・・・・・フ」

背中に強い熱を感じる。肌は間違いなく貫通している。骨に到達しているかもしれない。

俺はそのまま前傾姿勢に屈む。

はっきり言って、本当はこのまま倒れてしまいたい。

けれどそんなことをすれば、間違いなく虎郷が殺される。

だから俺はここで倒れるにはいかないのだ。

俺は死んでも虎郷を守ってみせると決めたのだから。

「どうして・・・・・・？」

虎郷は目に涙を溜めながら俺に向かって言った。

「どうしてこんなことを・・・・・・」

虎郷はさらに続ける。

「私が死ねば・・・・・・済む事なのに」

さっきも言ったようなことを虎郷は言う。

「・・・・・・」

「それで貴方は・・・・・・傷つかなくていいのに」
瞳から涙がこぼれ、頬をつたう。

「・・・・・・ダメだ」

俺はそれを見て、静かながらも言った。
「・・・・・・さっきも言ったろ・・・・・・それはダメだ」
痛みが酷いがさらに続ける。
「お前を生かすために・・・・・・隼人はお前を助けたんだ・・・・・・。お前の心を解き放ったんだ」
「でも――」
「それに」
言葉を遮って続ける。
「お前は・・・・・・人が死ぬのを見たくは無いはずだ。だから・・・・・・あの日、あんなにも必死になって助けたんだ。電車に乗ろうとする人たちを・・・・・・」
「・・・・・・」
「なのに、お前が死ぬなんて・・・・・・そんなのは俺が許さない」
何て。
珍しくも俺は嘘をつく。
本当は単純なのに。

俺はお前に死んで欲しくないんだ。いつまでも一緒に居て欲しい。
だからお前を死んでも守る。

「だから・・・・・・お前は死ぬな」
「・・・・・・」
彼女はこれでもかと言わんばかりの涙を流す。

自分の心を解き放った、

隼人に助けられた、
自分を助けた、
あの日のように。
「心を解き放つんだ。負けるな。自分に」
精一杯の力で俺はそう言ってから、痛みに体を伏した。
「別れの挨拶は済んだか？」
木好さんはこの状況でもそう言う。
虎郷は下を見て涙をこぼしている。
俺は渾身の力で木好さんを睨む。
「ったく・・・・・・待ってやっただけありがたいと思えよ。こんな茶番に付き合わされて・・・・・・」
木好さんはそう言って右手に炎を纏った。
「じゃ、虎郷、一緒に逝こう」
木好さんはそう言ってから、虎郷に向かって拳を振るう。

ジュ・・・・・・

と、涙は炎に掠め取られて、蒸発するが。
虎郷の拳はしっかりと木好さんの腹部を貫かんというほどの強さで衝突した。
「な・・・・・・」
木好さんは突然の攻撃に対応できず、思いきり４メートル近く吹

っ飛び、無様に倒れた。

「・・・・・・立ちなさい。あなたに私は殺せない事を教えてあげる」

「虎郷ォ・・・・・・お前もか！！」

木好さんは、またも怒りの炎に身を包む。

憤怒の炎か・・・・・・いや、或いは、嫉妬の炎なのかもしれないが。

「ぶっ殺す！」

木好さんはその姿で虎郷に突っ込んだ。

「もう俺に不意打ちは効かねぇ！」

「あぁ、そう。私はそんな卑怯ではないわ」

そして、炎を身に纏った木好さんは虎郷に拳を振るいながら、

「お前に今の俺がなぐ――」

木好さんはまたも吹っ飛んだ。

恐らく、炎に纏われた体に触れられるはずがないと、高を括っていたのだろう。

しかし虎郷はそんな事は関係ないように、真っ直ぐ殴り飛ばした。

「おま・・・・・・はぁ！？」

木好さんは倒れた状態で虎郷に向かって叫ぶ。

「もう恐いものも、痛いものも無い。私は今を戦わなくてはならないの。それが私なりのけじめ」

虎郷はそう言って、軽い火傷を負った拳を見せた。

見た目は痛そうだ。

しかし、これ以上彼女は痛いものはないのかも知れない。

恐い目も痛い目も全て受けた彼女は、今、木好さんを倒すことにためらいなんてない。

「・・・・・・じゃあ、こっちは卑怯な方法で行くぜ？」

木好さんは、傷ついた体で余裕を見せる。
「・・・・・・！」
消えた。
瞬間移動だ。
「・・・・・・やばい・・・・・・！」
隼人の頭脳は、木好さんの動きを見て、行動できた。あれはアイツの脳があったからこそ出来たもの。
そして俺も、自分でも良く分からないが、突然、向こう側の動きを『分かる』ようになった。
しかし。

虎郷にはそれに対処する方法が無い。

「虎郷！」
俺は痛みに悶えながらも叫ぶ。
「・・・・・・大丈夫。どんな手を使ってでも私は勝つ」
そう言って虎郷は仁王立ちでその場で止まる。そしてゆっくり呼吸する。

木好さんは炎を消している。動きは目では追えない。
俺には見えているが、虎郷に見えているとは限らない。

そして。

木好さんの手が虎郷の左側から伸びてきた。
ドガァ！

と。

虎郷の拳が、木好さんをたたきつけた。

「何・・・・・・で・・・・・・・」
木好さんはそう呟きながら、天井を向いたまま倒れた。
「私の能力は未来予知。それを近未来的にしたの。ありがとう、一也」
そう言って虎郷は木好さんを見下した。
「貴方への怒りと憎しみで、私は進化することが出来た」
そう言った虎郷の目には涙があったが、瞳には明らかな怒りが映っていた。

47 ―開放―（後書き）

さて、虎郷さんも進化したわけですが。

海馬君が進化していない理由はちゃんとあります。

が、シリーズ化して、後々の出現です。覚えて置いてください。

４８ー理由ー（前書き）

今回も語り部変更中。

大丈夫、これが誰かは明らかにする予定だから。

48－理由－

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

海馬は本棚の中の本を投げる。
「無駄だ」
本は突如として磁力を持ち、元の本棚へと戻る。
その間に雅が走り込み、懐へと蹴りを飛ばす。
「効かねーって」
その雅へと磁力を移し、跳ね返す。

「ボイス・バースト！」
音河がすぐに声で攻撃する。
「あのなぁ・・・・・・」
右手を突き出して、その声の衝撃に当てて消す。
「俺の能力である、電気自体は常に体を纏ってるようなものなんだよ。だから、俺がちょっと念じて電気分解したり、磁力を付与するだけでいいんだよ」
「・・・・・・だから？」
海馬は睨む。
「だからぁ・・・・・・」
面倒くさそうに仙波は言う。
「お前らが勝てるわけねーんだよ。俺に不意打ちでもしない限りはな」
「・・・・・・だからなんだってんだよ」
海馬はそのまま睨み続ける。
「俺たちは戦い続けるぜ。どう足掻いてでもな。お前が電気を帯びていて、俺達が敵わない事が、戦わない理由にはならない」
「今なら生きて帰してやる。じゃないとお前らは負けるんだぜ？」

「負けることも戦わない理由にはならないよ」
今度は音河がそう言った。
「俺の力なら殺しちまうかもしれない。それでもいいってのかよ」
「死んでしまうことも・・・・・・戦わない理由にはなりません」
雅が言った。
海馬、音河、雅は3人全員で睨む。

「・・・・・・フッ」
仙波は笑うと
「天晴れだな」
と、ぱらぱらと拍手をし始めた。
「お前らが全力で来るっていうのなら、俺も全力で応対してやる。お前らの心意気は伝わったからな」
そう言った仙波は光った。
何の前触れも無く、仁王立ちのまま彼は光ったのだ。

「で・・・・・・電気・・・・・・」
「ああ。雷と同じものではない。俺自体のスピードはそこまで変わらないから。だが」
そう言って仙波は右手を伸ばす。

バチィィィイイイ！
と、激しい音を立てて、光が飛んでいく。
「電流を流すことが出来る。気をつけろ。俺は強いぞ」
「・・・・・・アンタが強い事も」
「戦わない理由にはならないんだろ？分かってるよ」
そう言って、両手を広げるような構えを取った。どこからでも掛かって来いというような、翼を広げるようなポーズだ。
「・・・・・・正先輩、コイルってどんな仕組みですか？」

「詳しくは忘れたが、棒のエナメル線を巻いて、電流流したら磁力が出来るって感じだ」
「・・・・・・でしたら、いい考えがあります」
「期待してるぜ、雅」
海馬はそういうと、走り出した。

「近接戦闘は得意じゃないんだけど！」
といいながら、拳を振るう。
「ああ。お前は得意そうではないな」
と仙波さんは呟いて、電流を海馬へと向ける。どうやら、電磁石を発生させる時には自分の纏っている電流を消さなければならないようだ。
そして、海馬は飛ばされた。

「大丈夫ですか？」
「ああ。それより、今のでなんか出来そうか？」
「十分です」
そう呟いてから雅は走り出す。

「ボイス・バースト！」
音河の声がさらに飛ばされる。
その声を背後に感じながら、雅は仙波に到達した。
「なるほど。俺を２つの方向から攻撃する事によって、電磁石でお前を止めるか、電気分解で衝撃波を止めるかという、最悪の２択をさせようとしているわけか。だが」
仙波は電流を雅に流す。
「お前を衝撃波に飛ばせばいいだけの話！」
磁力は雅へと移る。

しかし
「！？」
雅は飛ばされなかった。
そしてそのまま蹴りが仙波にヒットして、よろける。海馬は本棚を蹴って、本棚を倒しながら本を取り出す。
「しまった！」
急いで磁力を本棚に戻そうと仙波が試みるが、
「！！」
後ろから飛んで来た衝撃波が当りさらにそれを遮る。
「くそがぁ！！」
仙波はそれでも尚、立ち直って、電流を前方に飛ばす。
「く！」
「うわ！」
雅と音河は追撃を阻止されて、吹き飛ぶ。
「調子に乗るな！俺の力を甘く見るなよ！俺は――」
ドガァ！
と。
かなり鈍い音を立てて、仙波の後頭部に衝撃が走った。
仙波は思いきり床に前頭葉を打ち付けて、気絶した。

「よっし」
本を持った海馬だった。本の角で思いきり殴ったらしい。
「しまりの悪い、終わりだったけど、まぁいいよね」
音河が少し呼吸を乱しながら言った。
「で、雅は何したんだ？」
海馬が訊く。
「コイルは棒にエナメル線を巻いているんですよね？ということは、電流は回転しているはずです。だとすれば、それは私の十八番ですから」

つまり、向こうの電流の動きとは逆方向に、自分の「スパイラル」を発動したという事になるのだろう。
「・・・・・・本当に予想外な事をするよな・・・・・・お前は」
と海馬は呟いた。

ドガァ！！
と、今度は本棚が一気に崩れ落ちるように倒れた。
いや、それ以前に燃えている。

その炎と煙の中から、嘉島と虎郷がドッジボールの玉のような勢いで出てきた。
「嘉島！虎郷！」
「くっそ・・・・・・てっきり気絶したもんだと・・・・・・」
嘉島は海馬の方は見ずに呟く。

「ったく・・・・・・好き勝手やってくれやがるなぁおい！！」
体中に炎を纏った男がそこには立っていた。

４８ー理由ー（後書き）

ドッジボールの玉のような勢いって、伝わんのかな・・・・・・？

４９ー幸運ー（前書き）

なんとなく予想つきますよね？

彼がどこと無く関わる話ですよ。

49－幸運－

男の目は怒りに満ちているというのが良く分かる。
しかし・・・・・・異常だ。

「――って嘉島!?お前、背中!」
海馬が嘉島の背を見て、叫んだ。
「え?・・・・・・あぁ、まぁ、到達していても何とかなんじゃねーのかぁあああっとぁ!?」
嘉島がそんな状況ながら投げ飛ばされる。
「早く治せ!」
海馬は音河のところに嘉島を投げた。
「やってみる」
音河はそう呟いて、口を嘉島の傷に近づけた。
「ヒーリング・ボリューム」
静かにそう言って、「コォー・・・・・・」という、静かな吐息とその音を傷に当てていく。
嘉島の背中は少しずつながら治っていった。

「さて、こっちの処理はこっちでやらないとなぁ・・・・・・」
嘉島を放置して、海馬と虎郷と雅は、男のほうを見る。コイツが木好だろう。
「てめーら、殺すぞ。お前らも嘉島の仲間なんだろ?虎郷の仲間なんだろ?」
「それがわかってんなら、殺すの許すわけ無いだろ?」
「許しなんかいらねーよ。勝手に殺す!」
木好は炎を右手から前方へと放出した。
「電気の次は炎ですか」

冷静に雅が言ってから、しゃがみつつ避ける。
電気ほど早くは無いので、避けるのは簡単なようだ。
が。
「死ねぼけがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
木好の怒りの増幅と共鳴するように炎の勢いと温度、さらに大きさが変化する。

「こりゃ避ける避けないの問題じゃねーな・・・・・・」
海馬はそう呟いてから構えた。
木好が歩いた床は、ほとんど塗装は剥がれ落ちている。断熱材でも使われているのかは分からないが、恐らく王城グループの産業の賜物と言ったところだろう。
「消し炭にしてやる！」
大きくなった炎をさっきと同様で、前方へと放出する。
「はぁ！」
雅はその場で回転して風を生む。風と炎が衝突して、気流を生んだ。風が炎を包み込もうとしている。しかし、炎の勢いを弱まらせ、大きさを減らす事は出来たものの、変わることなく炎は真っ直ぐ雅の方向を目指す。雅は回転していたため、回避は出来ない。
「雅ィ！」
海馬が叫びながら、雅の方向に向かって走り出す。炎のスピードと大きさは変わったため、雅の元へたどり着くことは出来るだろうが、そうすれば海馬が炎に直撃する事は免れないだろう。
「ダメです！正先輩！」
それでも海馬は止まることなく、雅を抱き上げるように持ち上げてから炎を避けようとする。
「くッ・・・・・・！」
炎は海馬の肩当りを完全に喰うように燃やすだろう。
万事休す。

そう思われた時。

雨が降った。俺からすれば降らした事になるのだが。

正確には雨ではなく『火災用スプリンクラー』なのだが。

『本当にビックリするくらい運がいいな、海馬』

俺は海馬にそう語りかける。

海馬は雅を抱き上げたまま、呆けるように立っていた。虎郷と音河は不思議そうな顔。嘉島の顔は「信じていました」といわんばかりの表情だった。

「待ってました・・・・・今日元さん」

嘉島は、俺の名前を呼んで笑った。

４９ー幸運ー（後書き）

本当は題名は『降雨』にする予定だったんですけどね。

それだと、スプリンクラーの件がばれるので。

５０ー爆発ー（前書き）

５０越え達成！
終わらねー・・・・・・・

５０ー爆発ー

＝＝＝

スプリンクラーの水が止まる。
『何度やっても無駄ってことだ。諦めろ』
「・・・・・・くそがぁぁぁ！！」
木好さんは叫んで、炎も何も無く突っ込んできた。
ヤケ。
燃やす炎であり、怒り燃える男が『ヤケ』で突っ込んできた。
彼の人間性には全て炎が関わっていた。それは『妬け』も有った。
「何も使っていない貴方が勝てるはずが無いわ」
そう言ってから虎郷はそのまま、拳を振るった。
宣言どおり、木好さんの顔面にヒットして背後の壁に叩きつけられる。
悲惨な人生を歩んでいる。そしてこれからもそれで終わる。
「・・・・・・勝ったな」
海馬が言う。
「そうね。2回くらい勝ったわね」
虎郷はそう言って、仙波と木好を見る。
「だとすれば、3回だね」
音河はそう言って虎郷の肩を叩く。
「・・・・・・そうね」
彼女は自分にも勝った。
自分を解き放つ事ができたはずだ。

「・・・・・・ん」
小さな唸り声が聞こえた。
「痛かったぜ・・・・・・」
仙波が立ち上がった。
「やってくれたな。お前ら」
仙波が明らかな怒りを見せる。そして横目で木好を見た。
「・・・・・・負けかよ。無様」
と笑ってから

「お前ら絶対許さないからな」
と言った。

「雅！回転だ！」
海馬は叫んだ。
「え・・・・・・！？」
「急げ！」
海馬はそこに居た全員の腕を掴んで、雅を中心に固まる。
そして雅が回転した。

「そんなもんで止められるわけねーっつの！」
そう。
仙波は電流を発生させようと右手を構えた。
しかし彼は気付かない。

スプリンクラーが発生して、自分や床が濡れている事を知らない。

「あああああああああああああああああ！！」
仙波は叫んだ。
そりゃそうだ。
水は電気をよく通す。水に濡れた自分に電流のほとんどが流れたのだ。
だから海馬は雅に回転するように言った。俺達の水と近くの床の水を弾くために。まぁほとんど木好さんの熱で乾いたけれど。
「あああああ！！」
彼の力は電流だった。しかし、正確には電気を纏う力だったのだろう。だから体に直接流れ込んだ電気に対応は出来ない。

仙波の体からは黒い煙が出る。
そして電流の勢いは止まった。

「海馬、よく気付いたな」
「いや、嘉島と虎郷は知らなかっただけだろ？お前らも知ってたら気付いたよ」
海馬がそう言って笑う。

『ヤバイ！』
今日元さんが叫んだ。
「どうかしました？」
『スプリンクラーと監視カメラとかの機械に影響が出た。電気が入り込んだ』
そうか。それらも濡れていた。
「それってまさか！？」
『外に逃げろ！爆発――』
今日元さんの声が途切れた。
階段には昇れない。上っても意味が無いかもしれない。
俺達は窓を開けた。
「２５階だぞ！？」
海馬が叫ぶ。
「やるしかないだろうが！」
俺はそう言ってから飛び降りた。
それに続くように全員飛び降りた。

ドゴォォォォォ！！
爆風に押されて、俺達はかなり飛んでいってしまう。
部屋の窓が割れながら煙と炎を吐き出す。
それよりも。
「どうすりゃいいんだこれ！！」

５０ー爆発ー（後書き）

長々と続きますが、これからもお願いします。

51 ―絶対―（前書き）

今回は入れたかったギャグを詰め込みました。

しばらくギャグパートがなかったので。

51－絶対－

落下。
落ちる。
風が鼓膜を破るように突き抜けていくのが分かる。

「どうすんだよ！」
海馬の声が聞こえる。風音に呑まれていく。
「雅の回転で何とか」
「できません。出来ても私1人です」
「虎郷が地面を」
「破壊してどうするの」
「音河の衝撃波で」
「止まれても落ちるよ」
「海馬！今こそお前の運を」
「発揮できるかぁ！！」
といった感じで、音が色々と混ざりながら落下速度は上がっていく。
「嘉島何も考えずに飛び降りたのか！？」
「・・・・・・まぁ」
「じゃあどうするんだよ」
「・・・・・・ほら、あれだ・・・・・・宇宙船が」
「来るわけ無いでしょう」
「よーし、宇宙船を捜せ！ってあるわけねーだろうが！」
「パトラッシュ、疲れたろう？僕もつか」
「大変です！奏明さんが壊れ始めました！」
「あはは。私達落下し続けてるね」
「ちなみに後、10階分しかないわよ」
落下は留まる事を知らない。

「下、落ちる、地面、固い、死」「それ以上嘉島は言うな！てか、何故片言？」
「ああ。ごめん、面白かったから」
「楽しんでいる場合か！？打開策が無いんだから」
「あるんだ。助かるよ」
俺の発言に４人が止まる。落下はしているけれど。
「本当か？」
「うん。絶対」
「どうやって？」
「さぁ」
「お前何言ってんだ！？」
「あわてない、あわてない。一休み一休み」
地面が近づいた。
と、その時。

「アホか！お前ら！」
声が下から聞こえる。そしてブレーキ音。

「あ、これか。打開策って」
「うん」
俺は海馬の発言にそう答えてから下を見た。

クッションだ。救助部隊の方々が持っていたり、バンジージャンプに使う奴。
そこに俺達は落ちた。

「お前ら・・・・・・」
東先輩と龍兵衛さんがそこに居た。
ごつん！
と。東先輩の拳骨が俺達の頭に振り下ろされる。１人ずつ強く。

「っざけんな！お前ら死んだらどうすんだよ！」
「あそこ居たら、爆発で死んだっての」
俺がそういうと、
「てめぇ・・・・・・俺に口答えすんのか！？」
東先輩がそう言った。
「あれ・・・・・・おかしいな・・・・・・。何か、リーゼントの恐いお兄さんが見える。何か謝らないといけないなー。ごめんなさい！」
全力。
殺されそうな目。下手すれば「x」より恐かったかもしれない。
「でも・・・・・・どうして助けられたんですか？」
雅が東先輩に尋ねる。
確かに、あの爆発のすぐに助けられるほど余裕は無かったよな・・・・・？
「今日元が頼むから」
東先輩は一言そう言ってから、少し頬を染める。いや、ここそんな場面だったか？

「あ！しまった」
隼人のところに行くんだった。
「どこへ行く？」
龍兵衛さんが俺を見て言う。
「えっと、隼人の所まで」
「ダメだ」
龍兵衛さんはそう言ってから、俺の腕を掴んだ。
・・・・・・何故？

51ー絶対ー（後書き）

おっとぉ！？

何だ！？これは！？

無駄にテンションをあげるゲーム。

52 ―協力―（前書き）

いい感じの題名です。

実は早々に使いたかった。

52ー協力ー

「何でですか？」
俺は真っ直ぐ質問する。
「お前、仙波を倒したんだろ？」
「・・・・・・倒したって言うか・・・・・・」
よく考えればあの爆発した部屋に仙波と木好さんが居たはず。ということは・・・・・・。

いや、考えるのはよそう。それが正しいような気がする。
それこそ美しくは無いけれど。
「まぁ・・・・・・そうです」
「じゃあ、これ以上ここに居る事は出来ない。俺達は家宅捜索という名目でここに居た。それの本来の目的は、秩序を乱し続ける仙波たち幹部への警告だった。そして見てみろ」
ビルの入り口を指す。
倒れている兵士達。全員生存しているが明らかな戦意喪失を見せている。
「これ以上は今までの仙波たちと同じだ」
「でも隼人は――」
「お前達に迷惑をかけないように王城グループに入ったかもしれない。しかし、今、頭脳探偵が居なくなれば王城はどうなる？祖父も父も居ない、この現状で、だ」
「・・・・・・」
「この国を支えているのは王城だ。政治や俺達警察の裏にすら王城は居る。分かるか？頭脳探偵が居なくちゃダメなんだよ」
「結局は自分のためですか？」
「そうだ」

龍兵衛さんは堂々と宣言した。
「俺にも家庭はある。悪いがこれ以上は無理だ。これ以上は認められていない」
「独身じゃなかったんですか？」
「両親だって家族だし、俺は自分で『独身』とは言ってない」
と龍兵衛さんは俺を睨む。

「もういいでしょう、嘉島君」
虎郷が言った。
「嘉島、王城も喜ぶって」
海馬も続ける。
「隼人もそっちの方がいいって。ね？嘉島」
音河が無理して笑う。
「奏明さん、行きましょう」
雅が俺を見上げながら言う。
「車・・・・・・乗っけてやるよ」
携帯電話を出して東先輩が言う。

・・・・・・悔しい。このまま諦めるなんて。
・・・・・・なんで？何で諦めるんだ？
「虎郷さん」
「そうね。後もう少しかしら」
諦めるなんて考えは・・・・・・要らない。
「東先輩、バールってある？」
「てか、そもそもバールで外せるものなの？」
「全員溜め口なんだな・・・・・・」
そうだ。

まだ誰も諦めろとは口にしていない！

「風速最大！」
虎郷が叫ぶ。
「東！タイヤ！」
海馬が東先輩に言う。
「先輩だっつーの！」
東先輩はタイヤを投げる。
「奏明さん！跳んでください！」
「おう！」
俺は跳躍する。
「スパイラル」
雅は俺の靴底を蹴り上げる。
風圧で俺は飛び上がる。さらに回転が加わって、空気を突き抜けるように飛ぶ。
1、2、3・・・・・・と12階まで飛び上がった。
「ぶっ飛べ！」
海馬がタイヤを投げる。嘉島の真下に着くように止まる。
「ボイス・バースト！」
音河が衝撃波でタイヤを突き上げるように吹き飛ばす。
体が跳ねるようにさらに飛ぶ。

「く・・・・・・」
22階が限界か・・・・・・。

今度は割りと近くから声が聞こえる。
「コレって、明らかに物理的なこと無視してるぞ」
「心配しないの。落ちるのは貴方だけだから」
「お前ら俺の扱い酷くね！？」
東先輩が・・・・・・。
東先輩がバイクでビルを駆け上がってきた。後ろに虎郷を添えて。
そして隣に並ぶ。

「さっさと行って来い」
「ええ。東先輩も逝ってらっしゃい」
「へいへい」
そこで虎郷は飛ぶ。
東先輩とバイクは地面に落下していく。
「東先輩！？」
「彼ならきっと大丈夫だから」
そう言って虎郷は俺を掴んだ。
「４階分ぐらいしか飛ばせられない」
「十分だ」
虎郷は俺を投げ飛ばす。
虎郷は反動で下に落ちていく。
「悪いな」
「ええ。だから後はよろしく」
俺は爆発して黒ずみ、燃えている２５階を抜いて、２６階に到達。
「今日元さん！！」
俺は叫ぶ。
『あいよ』
窓が開いた。
「波！」
俺は左手で衝撃波を撃って、窓に突っ込んだ。

「・・・・・・すげ」
こんなこと普通出来ないししないよな。
俺は窓から顔を出した。

「ありがとう！行ってくる！」
全力で叫んだ。
聞こえたかどうかは確認せずに、俺は窓から顔を引っ込めた。

＝＝＝

52ー協力ー（後書き）

見よ！嘉島君だけ残った！

これが主人公補正だ！

53 ―宮殿―（前書き）

ギャグあり。

何と1，000文字　ぴったし。

53 ―宮殿―

「・・・・・・」
部屋を改めてみてみると
「これは・・・・・・・」
俺達の家の隼人の部屋を移した様な荷物の置き方。
間違いない、隼人の部屋なんだ。

「・・・・・・行こう」
静かに自分を奮い立たせるように言ってから立ち上がって、その部屋を出た。
宮殿。
レッドカーペットが床を支配していた。壁や床に金色の装飾がなされ、貴族としての風格を漂わせる廊下となっている。
「・・・・・・・」
アイツ・・・・・・・こんなところに住んでいたのか。
窮屈じゃないのだろうか。
・・・・・・いや、窮屈だったはずだ。
だからアイツは今年の夏休みに俺の目の前に突然現れたんだから。
「貴族ってのも楽じゃないんだろうな」
俺には分からないけれど。
階段を見つけた。
一段一段踏みしめながら上がっていく。

３０階。
恐らく最上階だったはず。
まるで王室のような造りの椅子に、脚を組んで座っていた。

「ほら。やっぱり、無駄だと思ったよ」
「誰にやっぱり何て言ってんだ」
「自分かな？半信半疑だったらしいよ。きっと」
「お前って頭おかしいんじゃねーの？」
「否定はしない。僕の能力は異常な脳みそだから」
「・・・・・久しぶりだな、隼人」
「実はそんなにでもないよね。あれから２０話くらい経っているけれど」
「ぶち壊しー」
そんな会話を済ませる。

「来たんだ。結局。来るなっつったのに」
「人間誰しも、否定するもんだろ」
「ろくでもないことといいだしたね」
「眠ってなさそうだな」
「何か、社長って忙しいんだよ。思ったよりも」
「もういいだろ？そのくらいにしようぜ？」
「絶対に嫌だ。僕は王城を継ぐ。というかもう継いだ。仙波が死のうがこのビルのメインコンピューターを支配されようが、僕は父と祖父が居ない今、出来る事はそれくらいなんだよ」
「よくやるよ・・・・・俺なら間違いなく逃げてるな」
「何言ってるんだよ。君がそういうのじゃないことは僕が１番良く知っているよ」
「・・・・・ごめん、負けた」
「勝ったね。しりとり」
「会話しりとりなんかできっかよ」
「途中まではできてたけどね」
これだけ見ると、普通に遊んでいるだけだろう。
でも違う。今、俺と早とはお互いに探りを入れているようなものだ。

相手が自分をどう見ようとしているのか。
これから、どう戦うのか。

「帰ろうぜ？隼人」
「嫌だ。僕は王城を継ぐ」
「何のために俺達がここまで来たと思ってんだよ」
「頼んでいない」
隼人はそう言うと立ち上がり、

「屋上、行こう」
といって歩き始めた。

53 ―宮殿―（後書き）

仲良く話しているように見えて、腹の探り合い。

次回もテンションそのままで行って、殴り合い。

５４ー屋上ー（前書き）

学校じゃないから、屋上だって開いているよ？

ていうか『マンガとかではよく屋上は舞台に使われるが、普通は開いていない』

みたいなくだりはもう古いよね。

だから、『マンガが開けてんだから、もう明け渡そうぜ？』みたいな先生募集。

５４ー屋上ー

屋上。空気が張り詰めているかと思えば、何のことは無い。
いや、何のことは無いわけではないけれど。
強く風が吹きすさぶ。
「風・・・・・・ああ、そうか。台風だったけ？」
「そうだよ。しかも雪だ。冬だからね」
「ホワイトクリスマスか」
「・・・・・・イブなんだけど？」
それでもホワイトクリスマスだ。
俺はそう思った。

「屋上だから風はより強くなっているけれど」
「だな」
俺達はいつもどおりの会話で屋上を見渡した。
「僕を取り戻しに来たんだっけ？」
「ああ。だから――」
「僕は帰らないよ」
隼人は質問の前に答える。
「絶対」
念を押す。
「隼人、虎郷が言っていたけど、お前可能性に気付いてないってさ」
「・・・・・・何それ？僕の進化の可能性？」
「ちげーよ。ったく・・・・・・」
俺はそう言ってから立ち止まる。
「どうしても継がなきゃならなかったのか？」
隼人は歩き続ける。
「・・・・・・多分」

「他に方法は無かったってのかよ」
「無いよ。継ぐか継がないか・・・・・・2択」
隼人も止まる。

屋上はヘリポートだったらしい。
Hの字を挟んで、円の線上立つ。

「隼人・・・・・・もう1回だけ訊くぞ」
「・・・・・・」
「帰って来い」
「ソウメイ君、適当な事を言うのはやめたまえよ。僕だって決断したんだ」
「ソウメイじゃない、奏明だ」
「・・・・・・最近は否定しなかったのに、突然だね」
隼人はそう言って笑う。
「お前の決断くらい、簡単に揺るがしてやるよ」
俺は笑わない。
睨む。

「隼人・・・・・・・腕引きちぎってでも帰るぞ」

「奏明・・・・・・君をそう呼ぶようなときがくるとは思わなかったよ」

雪が途端に止んだ。
・・・・・・。
「キングダムか？」
「似て非なるもの・・・・・・といっておこうか。皆を守るために技だ。支障を与えるものを否定する能力だ」
「あっそ」

風も止む。
台風が去ったかのように。でも、前のような方眼紙の網目が地面には存在しない。

「！」
隼人の蹴りが飛んできた。
「くそ！」
右手で靴を掴んで、投げ飛ばすように後ろに引っ張った。
隼人は空中を舞う。そして地面に手をついて受身を取る。
「急に何してくれてんだ！」
「腕引きちぎるんだろ？正当防衛的な」
「比喩だ！『腕引きちぎってでも』だ！殺すぞ！」
「正当防衛キック！」
脚が伸びるように眼前に迫る。
「イナバウアー！」
叫びながら俺はブリッジの態勢。
「む」
俺の上を隼人の体が通過する。
「殺人シュート！」
その腹を突き上げるように蹴る。
ドガ！
・・・・・・え。
そのまま止まってる。
「痛い！」
隼人は地面へと転がり、受身を取ってから立ち上がる。

「おま・・・・・・腹筋すげー！？」
「キングダムで痛みを減らしてメチャクチャ腹筋、解除しても痛くないけど、次の日筋肉痛です。以上を繰り返せばいい」
「はー・・・・・・凄い事すんな」

言いながら、俺はブリッジの態勢から逆立ちしてそれからもう一度地面に脚をついて戻る。
「身長伸びなくなるな、１６５センチマン」
「君がでかいんだ、１７３センチマン」
こんなところで個人情報出すべきじゃないけれど。

というか。
「案外・・・・・・」

「長期戦になりそうだね」

５４ー屋上ー（後書き）

さて。

乱戦開始どぇー。

５５ー乱戦ー（前書き）

乱れ、戦いけり。

それすなわち乱戦と呼び、獣達の戦を示すものなり。

→適当です。

55 ―乱戦―

思ったよりも隼人の筋力がある。
もっと楽に倒せると思って見栄はっちゃったな。

「アクターで行くか」
左手を地面につけて、刃を作る。
形はほぼクナイと同じ。
「やっぱりどう見ても錬金術師だよね」
「マスタングなら会ったぞ」
「ああ、明前さんね。はいはい、あの人は外国の元中佐だ」
ああ・・・・・大佐と呼ばれた覚えはないってのはそういうことか。

「！」
奇襲。
いつも突然隼人は突っ込んでくる。
「ざっけんなぁぁ！！」
俺は先ほどの刃を隼人の靴に差し込む。
「いってぇ！」
「知るか！」
言いながら俺は刃を抜く。
「うっそぴょん」
隼人は俺の頭を蹴り飛ばす。
体感距離３メーター。
「くっそ！」
左手を突く。地面を盛り上げて、少し通常より高い位置に。
「何してんの？」

「隼人に見下されてばっかりだから、物理的に見下ろしてみた」
「しばく」
隼人は怒りを露にしながら、走ってきた。
「散弾銃！」
左手で盛り上げた地面を突き破るように突く。
ぐしゃ。
という音を立てて、地面が砕ける。それらの欠片がまるで弾丸のように隼人の方向に向かって突き進む。
「コレは・・・・・・？」
隼人は屈む。
破片のうち、２０個くらいが隼人に突き刺さる。
それなりの強度と鋭さを誇る。

だから。

「勝てると思ったんだけどな・・・・・・」
隼人は上着を脱いで、破片を巻き取るようにした結果の上着を持っている。
「何？今の」
「左手で震動を加えて、俺の意志を送ることによって隼人に飛ばしてみた」
「・・・・・・進化ってわけ・・・・・・」
「・・・・・・実は違う」
「は？」
隼人はこちらを見る。
「俺の進化はもっと上を行く」
「・・・・・・あっそ」
隼人はそう言ってから、上着を投げ飛ばす。
「・・・・・・！」
隼人が走ってきた。

「盲点かよ・・・・・・」
「僕の基本スタイルは奇襲戦法だ」
隼人の左足が俺の腹部を突き刺す。
俺の体は低空飛行で後方に飛ばされる。
「くっそがぁ！」
俺はその状態から無理やり地面に手を伸ばす。隼人は走って追撃を掛けようとする。
逆立ち状態で留まり
「うおぉぉおおお！」
海馬や雅のようにその状態から回転して蹴り連打。
「しくった」
隼人は止まれず、その蹴りの連打を受ける。
３、４発ヒットさせて、５発目で隼人を突き飛ばしながら、宙返りで地面に立つ。
「本当に・・・・・・君は強いよね」
「痛めば痛むほど燃える男なんで」
「サイヤ人とＭ・・・・・・どっちがいい？」
「いい加減、マジでやれよ」
俺はそう言って睨んだ。
「・・・・・・ＯＫ」
隼人はそう言って、右手を突き出した。

55 ―乱戦―（後書き）

これからが面白くなるぜ。

だぜだぜ。

（マス○ングとかにしたほうがよかったか・・・・・・）

56ー映画ー

「キングダム」
隼人は言った。
方眼用紙のような世界が来る。
先ほどとは違い、別空間に俺達を誘おうとしている。
「　　！」
俺は叫んだ。

カッ！
と。
目映(まばゆ)い光と共に、空間が削除される。
方眼用紙の網目は消え去る。

「・・・・・・君・・・・・・・一体何をした！」
「・・・・・・・さぁ」
「答えろ！」
隼人はまた走り出した。
視認する。
攻撃の動きを。
俺に蹴りを繰り出してくるのが見えた。
「さっせかよ！」
5秒後、俺の頭蓋を狙うように上段蹴りを繰り出す。
横薙ぎに振るった脚を俺は背を向けるようにして避ける。
「予想通り！」
隼人はそう言ってから、右手に持っていた地面の破片を投げつける。
俺はその破片が隼人の手から出ると同時に同じものを投げた。
その破片を見ずに。

カン！
と、刃同士が当った音をして破片は地面へと落下する。
「！」
「こっちから行くぜ」
俺は瞬時に身を翻して隼人の懐に潜り込む。
「しま――」
「うおりゃ！」
俺は右手を突き出した。
「ぐ！」
「うおおおお！」
右手をねじるようにしてから、元に戻す。
「な・・・・・・！」
乱回転を加えて、さらに吹き飛ばす。
「ぐあああ！」
隼人は腹部を抉り取るような衝撃を受けた・・・・・・はずだ。
回転力を加えたのだから。

「君は一体・・・・・・何をしているんだ！」
「俺は俺であり続けようとしているだけだ！お前みたいに折れたりしない！」
「知ったような口を・・・・・・・利くなあああ！」
彼は瞬間移動のような速度で真っ直ぐ突っ込んでくる。
「俺には見えるんだよ・・・・・・・お前の動きが」
そう。
見える。理解できる。分かる。
「お前は・・・・・・俺には勝てない！」
俺は隼人が瞬間的に現れたと同時に、隼人と同じ方法を使用する。
「・・・・・・！？」
「お前の頭なら、足への伝達速度を異常に早める事によって、反射の速度と同じレベルで脚を動かせる。それを連続して行う事によっ

て、縮地法とまではいかないが、それなりに高速で動く事が出来る」
「・・・・・・何故、それを君が出来る」
「俺には、お前とは違うものが憑いている」
俺は隼人から遠ざかるようにして瞬間移動を中止した。
「だからお前は俺には勝てない」
「・・・・・・だから・・・・・・」
隼人は怒る。
怒りを露呈し右手に拳を固めた。
「君は一体何なんだ！」
隼人は地面のタイルを捲り上げ、俺に投げつけた。
「あああああああああああ！！」
俺は叫ぶ。
地面が捲りあがり、タイルが数枚空中を舞う。
それらに隼人の投げたタイルは防御され、無残に落ちる。
「だから、無理だ。諦めろ。1人のお前には勝てない」
「君だって1人だ！一対一じゃないか！」
「違う。俺にはいつだって仲間が居る」
「黙れぇぇぇぇぇぇ！」
隼人が暴走し始めた。
「俺が絶対止める！」
隼人は俺の言葉を聞いて尚、止まることなく、怒りに固めていた右拳を前に突き出した。

「キングダム！」
さっきとは違い、叫ぶ。
だから、俺はさっきと同じように叫ぶ。右手を突き出して。
「……キングダム！」
カッ！

と、閃光が目を焼く。

「・・・・・・何を・・・・・・君は一体何をしているんだ！」

隼人は息を切らしながら叫んだ。

「・・・・・・神様から与えられた使命（アクター）。迫害から逃れるために導き出した絶望（アクター）。自分の走るべき運命（アクター）」

「・・・・・・？」

「お前は自分の能力をそう言った。でも、俺達は違う。俺達の能力は、使命でも絶望でも運命でもない」

俺は続ける。

「当然、能力なんかでもない。俺達はアクターだ。俳優なんだよ」

「・・・・・・」

「俳優は1人じゃ何も出来ない。それが俺の見解だ。何人もの人間が集まってこそ、俺達、俳優（アクター）は完成するんだ」

俺は自分を指差す。

「お前の攻撃を見破った『近未来予知（こさと）』。お前の攻撃を見ずに石を投げて応対した『運（かいば）』。お前の腹を抉り取ろうとした『回転（みやび）』。お前の瞬間移動を利用できた『電波化（きょうげん）』と『移動（あずま）』。お前の攻撃から守ってくれた『声（おとかわ）』。そして」

隼人を指差す。

「お前の王宮（はやと）を滅ぼした『王宮（はやと）』だ」

「・・・・・・つまり」

「俺の中には仲間が居る。俺を護らんとする仲間が居る。俺と一緒に演じてくれる仲間が居る」

隼人にはないもので。

今、俺が持っているもの。

「俳優（アクター）達が集まって1つの仲間になる。俺はこれを」

背後に仲間達を感じながら、俺は言った。

「仲間（ムービー）と名づける」

56 ―映画―（後書き）

1人では創れないもの。1人では出来ない事。1人では分からない時。
必ず、それはあるから。
絶対に離れなれないから。

57 ―創造―（前書き）

前話とこの話の「東」と「今日元」への呼び捨てはわざとです。

今回は長いかもよ。

57 ー創造ー

「・・・・・・君は・・・・・・何なんだ」
それでもなお、彼はそう質問してくる。
「俺はお前だ。そして皆だ」
「・・・・・・」
隼人は睨む。
「お前は何を睨んでいる」
「君だ」
「そう。嘉島奏明だ。でも、それだけじゃない」
「それだけだ。僕が戦っているのはそれだけで十分なんだ」
「違う」
俺は否定して続ける。
「お前が睨んでいるのは、虎郷だ。海馬だ。雅だ。音河だ。東だ。今日元だ。そしてお前だ」
「違う」
「違わない。俺は背負う。お前みたいに支配していない」
「・・・・・・支配する？」
隼人はそう言って眉間のしわを深くする。
「僕はそんなことしていない。受け入れている」
「受け入れる？何を？」
俺は尋ね続ける。
「僕の王宮へ、だ」
「だったら見せてみろ。お前のルールを」
俺は両手を広げて受け入れる構えを取る。
「キングダム！」
黒い方眼用紙が包んでいく。

「・・・・・・」
「これが僕の王宮だ」
「・・・・・・黒いな」
俺は呟く。
「これがお前の国なのか」
「そうだ。そしてこの国では民に傷をつけることは無い。だから僕が指定した人間が傷つくことはない」
「・・・・・・」
「全員を守るために僕が作り上げた王宮だ」
「・・・・・・違う」
俺は呟く。
「お前はこもったんだ。この王宮に」
「・・・・・・は？」
「出て行けなかったんだろ？誰にも守ってもらえるはず無かったんだろ？だからお前はこの王宮で過ごす事にしたんだろ？」
「何言って――」
「お前はこの国で何を守ろうとしているんだ？」
「・・・・・・皆を・・・・・・守るために」
「違う！」
俺は叫んで、もう一度言う。
「お前は支配しようとしているだけだ！全てを！誰にも邪魔されないために！」
「違う・・・・・・！僕は、皆が傷つかない平和を」
「お前がしているのは支配だ！そしてこの国はお前のたった一つの居場所だ！王城グループとしてでもなく、王城の御曹司でもない。もう2度と、俺達のところに戻れないから、自分のために作り上げた場所なんだよ！」
「・・・・・・」
「ここは、お前を守っている部屋に過ぎない！王宮や国には程遠いんだよ！！」

俺は走り出す。隼人との距離を一気に縮める。
俺は拳を突き出した。
「！」
隼人の頬に当る。
俺に衝撃が来るが、恐らく隼人には何のダメージも無い。
「・・・・・・だったら」
隼人が呟く。
「だったら、僕の居場所はどこにある！？」
隼人は俺の顔面を殴り飛ばす。
当然、痛い。
俺は地面で１度バウンドしてから、横たわる。
「僕は王城を継がなければならない。でも僕は王城の御曹司という肩書きを捨てたい。だって僕の目標は」
「王城を越える・・・・・・だろ」
俺は言いながら立ち上がる。痛みはまぁまぁ酷い。
「そうだ。だから、僕はこの場所を創り上げた」
隼人は言いながら歩いてくる。
「僕は・・・・・・僕で居たかった。僕は僕でありたかった」
「知ってる。だから、夏休みに家を飛び出してまで街を歩いていたんだ」
「そうだ」
隼人は歩みを止めて、俺の前に立った。

俺が自分を捜していたように。
彼も存在を確かめていたのだ。

「居場所くらい・・・・・・いつでも創ってやれるよ」
「・・・・・・」
「俺達はお前から、返せないほどの物を貰ってる」
俺は笑う。そして続ける。

「お前のおかげで、何人救われたと思ってんだよ」
「・・・・・・」
「なぁ。お前は何が欲しいんだ」
俺は隼人を見る。
隼人も顔を上げる。
「虎郷は自分の心を解き放った」
「海馬は自分の価値を知った」
「音河は自分の居場所を得た」
「雅は自分の命を救われた」
「東先輩は自分の想いに気付いた」
「今日元さんは自分自身を悟った」
「俺は初めての仲間をもらった」
「お前は何がほしいんだ」
王城を越えるのが目標だったはずだ。それを諦めるのか。
「・・・・・・僕は・・・・・・・居場所が欲しいんだ」
「だったら、そういえばいいんだよ。俺達は仲間なんだから」
「・・・・・・仲間・・・・・・・」
「ああ。背負う必要なんか無い。支配する必要なんか無い。俺達全員、何もかも全部ひっくるめて、お前なんだ」

「・・・・・・」

「皆は・・・・・・僕なのか」

「そうだ。居場所なんか、本当は創るまでも無い」

俺は笑う。

「お前が自分を見てから、皆を振り返ったなら、そこにお前の『居場所(かま)』があるから」

「・・・・・・そうか」

隼人も笑う。

「帰るぞ。隼人」

俺は手を差し伸べる。

「・・・・・・うん」

隼人はその手を固く握った。

王宮は崩れる。

嵐は過ぎる。

雪は舞い降りる。

57 ―創造―（後書き）

語るねー。

こういうのって作者によるし、実際語ってたら殴りたくなるよねー。

５８ー要点ー（前書き）

→まとめを二文字で書くとこんな感じです。

ま、今回はまとめるようなことはほとんど無いのですが。

58 ―要点―

いつも通りのまとめだ。
手短に話す。手短に聞いてくれ。

そもそも今回はまとめるほどの内容もない。
俺が一々言うほど、皆状況が分からないでもないだろう？
だから、理解しにくい点のみをまとめていこう。

彼・・・・・・王城　隼人は、王城グループの御曹司である自分に嫌気が差していた。その状況そのものを嫌っていた。彼が嫌っていたのは『地位』とそれによる『偏見』だ。彼がいじめられていた原因もそこにあったのだから、それはまぁ仕方が無かった事だろうと思う。

彼には居場所が無かった。それが問題だったのだ。
居場所と言うものは何時、如何なる時も必要なもので、それがないということは自分を認めるものが無いと言う事。自分を認めることができない事は結果論で言えば、自分を理解できないと言うことに発展する。その事実は、自分を苦しめる。

自分は何なんだろう。

どうしてこの世界に生きているのだろう。

自分がここに居る意味は何だろう。

どうして自分が必要なんだろう。

自分の価値は一体どこにあるんだろう。

自分は生きている意味があるのだろうか。

大げさだと思うかもしれないが、実際に王城隼人はその状況に陥った。

自分の居場所が無い事に恐怖した。

だから彼は夏休みに仲間を作った。

それが嘉島奏明だった。

そして「東　諒」「今日元　終」「虎郷　火水」「海馬　正」「音河　響花」「常盤　雅」という仲間を得た。

居場所が出来た。

そう思っていた矢先、王城グループが危ぶまれる状況になった。

実際、幹部達は優秀なのでそうでもなかったりするのだが。

彼は「父と母。それ以前から受け継がれてきた物を滅ぼすわけには行かない」という使命感にとらわれたためだろう。彼なりの全力だった。

それによって彼はまたも仲間という居場所を失った。

だから彼は願った。『居場所が欲しい』と。

それが彼の進化となり、この戦いを招いたのだ。

58 ―要点―（後書き）

さて、もうそうろそろクライマックスだぜ。

59 ―真実―

「・・・・・・え？」
「だから、お前の父親と祖父が本当にこの事実を知らないのかってことだよ」

屋上から（飛び）降りて（何とか助けをもらいつつ）着地した俺達は、東先輩の車で帰宅した。
龍兵衛さんたちやマスコミの人々からわちゃわちゃと言われていたが、忍法『記憶喪失』を適応する事によって何とか切り抜けた。
ごめん、嘘。
俺達は東先輩を除いて、１人残らず車の中で就寝した。だから記憶が無いのである。
コレは朝の９時ごろ、いつもの順番で目を覚ました、僕と虎郷と隼人の会話（海馬は朝早くから雅とともに消え去った。音河は未だ睡眠中）である。
「そういう可能性もあるかもしれないということ」
虎郷はそう言って隼人を見る。
「貴方も手一杯だったんでしょう？だから、この可能性を確かめていない」
「・・・・・・確かに・・・・・・父にも祖父にも会っていない」
「だとすれば、この可能性は否定できないでしょうね」
「でも理由が分からない」
隼人が言う。
「そんなことをして何になるんだ？僕にそれをする意味がない」
「そうね」
虎郷はそう言って、頷く。
「・・・・・・？」

虎郷は不思議そうな顔をする。
「・・・・・・は？」
隼人はさらに困った顔になる。
「・・・・・・え？根拠なし？」
「ないわよ。あるわけないじゃない」
「じゃあ何で・・・・・・」
「私は可能性を提示しただけよ。答えなんて知った事ではないわ」
虎郷はそう言って、立ち上がり、朝食の片付けを始めた。
「・・・・・・まぁ」
俺は虎郷を代弁して、言う。
「つまり可能性が分かったんだから、後は自分で何とかしやがれってこと」
「・・・・・・なるほど」
隼人はそう呟いて納得した後、思考を始めた。
暇。
「虎郷ー。音河起こしといてくれー」
「嫌よ。自分で行って来なさい」
「女子の部屋に入るのは・・・・・・気が引ける」
「・・・・・・仕方ないわね」
虎郷はそう言ってから、食器類を置いて手を洗う。
「後、さっさと着替えるように言っておいてくれ」
「貴方が私に命令する筋合いは無いと覚えておきなさい」
とだけ言ってからリビングを出た。
俺は代わりに食器を洗い始める。
「あ」
思いつきで俺は携帯電話を取り出した。
「海馬。あ、雅もそこにいるか？・・・・・・よし、じゃ帰ってきてくれ。・・・・・・デートなんか知らん。どうせ夜いちゃついてんだろうが。さっさとこい」
と一方的に言ってから電話を切る。

で、残りの皿を片付け始めた。

「・・・・・・っし終わり」
と俺が呟いたところで、
「嘉島君、起こしてきたわよ」
「何ー・・・・・・。何か急ぎ？」
眠そうに音河が出てきた。
「ああ、多分急ぐ」
俺が言った後、リビングの扉が開く。
「何だよ、急に」
「何かありましたか？」
２人も帰ってきた。

「終わったか？隼人」
「ああ。そこまで難しい推理じゃ無かったよ」
そういって隼人が立ち上がった。

「よし、皆行こうぜ」
俺はそう言ってリビングの方へ進む。
「行くって・・・・・・どこへ」
海馬が言う。
「ついてくれば分かるよ」
隼人が笑う。
そして言った。

「さぁ、丸く収めに行こう」

59 ―真実―（後書き）

ほら。
いい感じじゃね？

あ、次回最終話です。

その後、番外編です。

６０ー仲間ー（前書き）

最後の最後まで残しておいたサブタイトルです！

最終回なので長いですよ。

60ー仲間ー

王城家。

俺はこれを初めて見た。

「・・・・・・何というか」

思ったよりも豪邸ではない。

マンションを一軒丸ごと買っても、王城の資財の５％にも満たないほどの金を持っている王城グループの人間の家とは思えない。しかも社長と会長が住んでいるようには。

だってその家は、言ってしまえば海馬の家よりも小さいのだから。

３階建てで、庭にはお祖母さんやお祖父さんの作るような小さな畑と盆栽があり、母親の飾りそうな花がある。庶民的な家を少し大きくした程度の印象しか受けない。

「・・・・・・もっと凄いと思った」

海馬が失礼にも呟く。

「別に金だけのために生きているわけではない。僕は性格の悪い人間ではないようにしたいと思っているし、うちの家系は代々、表舞台にたって行動はしても、一般的生活には支障をきたしたくないらしい」

とそれだけ隼人は答える。

「あと、家はこれ一軒だけじゃないし」

と言ったのは音河だった。

隼人はその発言に睨むという対応で答えてから、門（があるのだ。ビックリである）を開けてから家の中に入っていった。俺達もをれを追いかけて、家にお邪魔した。

「・・・・・・・あ」

中にはジャージ姿の若い女性が1人。外見年齢、２０前後。髪の色は金髪。
「おかえり」
「別に帰ってきたわけじゃない」
「あっそ」
と淡白に反応した後、後ろの俺達を見て、
「隼人、お友達？」
「仲間」
「そう。迷惑かけるわね」
と言って、女性は1度お辞儀した。
「あの、お姉さんですか？」
雅が訊く。
「僕に姉は居ない」
「え、じゃあ・・・・・・」
「息子がお世話になってます」
と余り感情のこもらない声でそう挨拶した。
ということは、
「ああ、お母様でしたか」
と雅が言う。
いや若すぎ。外見で２０前後の母て。実質は３５歳くらい（と仮定すれば、隼人を産んだのは２０歳くらい）だろう。
「ああ、後ろの娘は、響花ちゃんか。うん、息子をよろしく頼むよ」
「はい」
まるで父親のようなセリフに対して、音河は慣れたように返事する。
「あ、お義父さんと鉋は3階だから」
と言ってから母親は何処かに消えていった。
「何というか・・・・・・」
「さばさばした姉ちゃんって感じだな」

俺のセリフに海馬がそう付け足した。
ジャージって・・・・・・。それが王城の社長の奥様なのか？
「ああ見えて実はしっかりしてるんだよ。ＯＮとＯＦＦとか特に」
音河がフォローを入れる。
「でしょうね」
虎郷は淡白にそう言った。
・・・・・・あ。
「隼人の母さんって、虎郷に似てるな」
「・・・・・・ああ、そういえばそうだね」
と隼人は思い出したように言った。
「私ってあんな感じなの？」
虎郷がそう言ったが、まぁ軽く無視しておいた。

「３階って・・・・・・お祖父さんなのに腰とか疲れないんですかね？」
と雅が心配する。
「うちの父を祖母が産んだのが、２０だから。祖父が１８の時。それで今父親が３３だから、祖父は５１」
「若いな・・・・・・」
「結婚相手は早々に決まっていたから、そういうのもさっさと終わらせれたんじゃないか？僕には興味ないけれど」
と階段を昇り始めた。

２階は和室造りになっていた。２階までは階段があったが、そこで途切れている。
「３階への階段は別の場所。王城グループ本社ビルと一緒の構造だよ」
「へー・・・・・・」
どうしてそんな構造にしているんだろう・・・・・・。

「会社の場合は知らないけれど、この家の場合は家族間の会話を増やすため。ここはいつもは祖父と祖母が使用するから」
と隼人は答えてから、いつも通りのように廊下を進む。マイペースだなー、と思う反面、こういう適当さは久しぶりだとも思う。まぁ、一週間くらいしか離れてないわけだが。
なんとなくそっと和室を覗くと、老婦人の姿が見えた。隼人の祖母だろうか。
・・・・・・え。
外人!?金髪じゃん!!ああ・・・・・・だから隼人は金髪なのか。そういえば母親も金髪だった。
と、階段に到着した。
「行こうか」
隼人が言ってから階段を上がる。
次に俺が上がり、虎郷、海馬、音河、雅が上がる。
3階に上がってから俺は驚いた。
そこから見た様子は、俺達の家の玄関からリビングまでとそっくりだったのだ。
「これは・・・・・・」
「この階が王城家だ」
隼人がそう答える。そして続ける。
「1階は来客専用の仮の『家族』をする場所。2階は、家族で過ごすための空間に見える、『仕事場』なんだよ。そしてこの階が、社長が父になり、社長秘書が母になり、会長が祖父になり、議会委員長が祖母になり、社長後継者が息子になる場所なのさ」
言いながら廊下を歩く。横にあるトイレや洗面所、バスルームまで全て位置が同じである。各々の部屋も同じ場所にあるということか。
「僕の唯一の居場所だったところさ」
隼人はそう言って、廊下を奥まで行ってからリビングへの扉を開いた。

「よう、遅かったな」
「ちーっす」
目の前には不思議現象。
大人びたようなセリフを口から吐いたのは、真黒な髪をして正装している男性だった。オールバックに眼鏡という人を選ぶファッションを見事着こなしている。
対して若者言葉で俺達に応対したのは、黒髪の中に金髪を持ち、髑髏(どくろ)のTシャツにチェック柄のシャツを羽織っている青年だった。ジーパンを履いて、裸足で隼人がよく座るソファーに座っている。
「・・・・・・誰！？」
俺は思わず叫んだ。
「マジでなんだ？黒髪の人は、父親なんだろうけど・・・・・・」
海馬がうろたえる。
「そこの青年さんは兄かしら？」
彼は冷静に分析する。
「何か・・・・・・・凄いですね」
雅は曖昧判定を認識した。
「ち・・・・・・違うよ」
音河が少し、おびえた様子で言う。
「あれは」
隼人が口を開く。

「あの黒と黄色のキリン青年が社長のくそ親父で、後ろの黒髪のしっかりした男性がお祖父様だ」
関係が分かりやすい紹介でした。
ていうか、３３歳若いし。５１も若いし。何なんだ、こいつ等は。
「んよっとぉ！」
父・・・・・・・鉋さんがソファーから飛ぶようにして立ち上がる。
「よぉ！お前らがアレだな？王城グループをドガーンした奴らだな

？」
「あ・・・・・・はい」
「ああ、いいよいいよ、気にすんなって！俺は今回のために王城グループを実質的に捨てて別の場所に移してんだよ。新生王城グループが見えるから待っときなって！」
「え・・・・・・？」
そんなことまでしてたのか・・・・・・。
皆も同様の顔つきをしている。
１人を除いて。
「だろうね。アンタならそれくらいはやると思っていた」
「親父にアンタってなんだよ」
鉋さんはそう言ってから笑う。
「ま、隼人が俺を忌み嫌うのも理解できなくないけどにー」
茶化すように彼は言うと
「黙れ、鉋。お前の欠点は何でも完璧にこなす割りに、うるさいことだ」
と祖父、椎名さんに怒られる。
「うっせなー親父は。欠点ばっか探すなっつの」
鉋さんは椎名さんを睨む。

「で。何の用だ？」
椎名さんはそう言って隼人を見る。
「分かってますよね？」
「それも含めて、お前の解答を聞く」
椎名さんはソファーに座り込んだ。貫禄ある大人って感じだ。本当は５１歳なんだけれど。

「僕らは、王城グループを越えます」
隼人は言う。
「そしてここに居るメンバーと、ご存知の東先輩。そしてもう１人

刑務所に居る今日元さん・・・・・・それが僕の居場所で、仲間です」
「・・・・・・OKだ」
椎名は言ってから立ち上がる。

「そいつらが裏切る可能性は？」
鉋さんが訊く。
「ないね。アンタの幹部達は裏切ったけど」
「あいつらは『幹部』だろう？俺の信用できる奴はそんなポジションにはおかない。現に信用できる奴のうち1人は俺の秘書兼妻だろうに」
鉋さんは少しムキになって言う。
「僕らは繋がっているから、絶対に仲間が終わることは無い」
「つながるって何で？心とか？」
鉋さんは笑う。

「右手と左手の法則だ」

「は？」
「僕が今考えた」
隼人がそういうと
「ああ、なるほど」
とまず椎名さんが納得した。
「・・・・・・ああ、そういうこと」
それから鉋さんが理解する。
「へぇ・・・・・・。面白そうだな」
椎名さんが笑みを浮かべる。そして
「隼人・・・・・・帰れ」
と言った。
「終(しま)いだ。今日のところは帰れ」

「・・・・・・」
「後、たまには帰って来い。ここでは王城グループじゃなくて、1つの家族だ」
「・・・・・・暇があったら、そうさせて頂きます」
隼人はそう言ってリビングの扉から出て行く。
俺達もそれを追いかける。
「あー、君らは待って」
鉋さんが俺達に言う。

「ほら、アイツ不器用だから、あんまり言わないだろうけどさ」
「だからこそ、俺らから伝えておきたい」
鉋さんのセリフに椎名さんが続ける。

「感謝する。出来るだけ長く、アイツの仲間で居てくれ」

「といった感じですかね」
「いーねー。青春って感じだ。行けなかったのが残念だ」
ＷＲで今日元さんと会話を交わす。

「あの人たちは僕に王城を越える覚悟があるかどうかと、信じられる仲間を見せることを求めていたんだろう。そのために大掛かりことをしたわけだ」
つまり、王城グループの危機は演技だったわけだ。もちろん、実質的には演技ではなく、王城グループを仙波が占拠したことは事実なのだが、まぁ信用できない者を除去できた点ではよかったのかもしれない――いや。それも計算のうちか。
「おい、こらぁ！てめぇら！さっさと手伝えや！」
東先輩が遠くから叫ぶ。
ＷＲのカウンターを派手に飾っているようだ。
虎郷はキッチンで料理作り。
「というか、部屋にしたんですね。今日元さん」
「そりゃそうだ。今日を何の日だと思ってんだ」
「そんなことまで出来るんですか・・・・・・？」
「外の様子だって出来るぜ？」
そう言ってから今日元さんは酒瓶を取り出す。
「２０歳未満飲酒禁止です」
「固いことというな」
「正式に逮捕してもらいますよ？」
「ごめんなさい」
隼人と今日元さんの会話を見ながら俺は机の準備をする。
「雅、そこの飾り取って」
人々に願いはつきものだ。
「自分で取ってください、正先輩」
付き物であり、憑き物だ。

「嘉島君、これテーブルに運んで」

求めることは終わらず、欲は留まることを知らない。

「へーい。今日元さん、壁とかは飾らないのか？」

醜くても良いと願う。くだらなくても良いと請う。

「飾らなくてもいいぜ。俺が世界を変えてやる」

何もかもを欲しがり、希う（こいねが）。全てのものを手に入れるため、望む。

「おいこら！隼人ぉ！手伝えって言ってんだよ！」

希望とは本来そういう意味なのかもしれない。

「隼人ー、さっさと手伝わないと東先輩がうるさいよー」

それでも俺達は願う。請う。希う。望む。欲しがる。好む。

「へいへい」

それが間違っているとは思わないから。それが美しいと信じているから。

俺も間違っていると思ったことは無い。

これからも俺達は求め続けるだろう。

でも止まるつもりはない。

願いはいつの時代も留まらないのだから。

欲望は人間の正直な気持ち。本能だ。それを止める事を俺は良しとしない。

「っしゃ。準備完了だな」

人間は人間らしく生きていけばいいのだから。

俺は仲間達と共に生きていく。

「テーブルの準備完了だぜ」
「全員、飲み物あるかしら？」
「あるある。大丈夫、大丈夫」
「よし。じゃあ、雪見といこうか」
今日元さんが指をパチンと鳴らした。

床が雪になる。空からも雪が降る。

壁には周りのビルや住宅、店などの灯りが囲むように照らし出す、一本の木。

いろいろな電飾や飾りで彩られたそれを俺達は見上げる。

どんな感情で見ていたかは分からないけれど、まぁ、言いたい事は一緒だろう。

俺達はそれぞれのコップを構えた。

「メリークリスマス！」

コップ同士はぶつかり、音を鳴らす。

きれいな音を何度も鳴らしながら、宴は始まった。

そのまま騒ぎ立て、次の日まで騒いでいたんだと思う。覚えてないけれど。

どんな会話をしたかも良く覚えていない。

全く、ここは無秩序だなぁ。

でもまぁ、そりゃそうだ。ここは俺達だけの世界だから。

丸く収まらないのがこの世界だ。

６０ー仲間ー（後書き）

これで終わりです。
ぴったり６０で終わらせれました！
総合的な感想や評価をお願いします！
感想ついでに好きなキャラを教えていただけると助かります！参考にさせていただきます。

ここからは番外編として、彼らの残りの中学生活等を描いていく所存です！
また、シリーズとして、出会いの夏休みを描きたいと思っています！

これからもよろしくお願いします！

後日談ー右手と左手の法則ー（前書き）

おっと、これを忘れちゃいけねーぜ。

後日談です。

後日談ー右手と左手の法則ー

大晦日の夕方。

俺達は未だ大掃除に励んでいた。

「どうして昨日やっておかなかったんだろうね」

「他人事みたいに言うな」

「いや、昨日やらなかった僕ら自身に疑問なのさ」

隼人はそう言い訳してから、トイレとバスルームの掃除を始めた。

身長の低い（１６５．３）隼人は、身長の関係ないところを掃除している。海馬は１７８くらいあるので、天井の掃除ということになっている。

雅が掃除し始めると危険なことになる（実際、リビングの掃除をさせたら2倍くらい汚くなった。実はまだ大掃除が終わっていないのもその所為だったりする）ので、庭の落ち葉を拾わせている。彼女の能力なら簡単に集められるだろう。

音河は2階の掃除。使用していない部屋ばかりなので、利用方法を考える次いでに、たまっている埃や残されている家具を整理するとか。

虎郷は1番しんどい、キッチンの掃除。しかしてきぱきと済ませて、今は大掃除全指揮者になっている。

故に、俺は残ったリビングの掃除を担当している。

「・・・・・・雅は酷い事をしてくれたものだ」

ソファーがひっくり返り、じゅうたんは捲りあがっている。テーブルも倒れており、唯一無事なものと言えば、テレビくらいのものだ。

何と不器用なのだろう。ただ、怪我に対する包帯等を巻く作業は

とても上手である。

「嘉島君、早くしてくれる？」

後ろから声を掛けられた。

「・・・・・・」

虎郷だった。

「だったら手伝ってくれよ」

「無理。私は今から年越し蕎麦の材料を買いに行きます。９時までに全ての作業を終わらせてね」

そう言ってからリビングの扉を開けて出て行った。

「・・・・・・はぁ」

「嘉島！」

海馬がやってきた。

「そこの蛍光灯も掃除しなくちゃなんねーんだ。さっさとしてくれ」

「分かったよ・・・・・・。手伝ってくれ」

面倒だけれど、まぁやるしかないか・・・・・・。

「終わった・・・・・・」

８時ごろ、ようやくリビングの掃除を完了させた。

「申し訳ありませんでした・・・・・・」

雅が責任を感じているようで、少し落ち込みながら謝った。

「ああ、別にいいさ。雅のおかげで、普段掃除しないような場所とかも掃除できたし」

例えば、ソファーの裏とかね。

「そうですか・・・・・・」

今度は安堵の表情を見せる。分かりやすいなー・・・・・・。
「年越し蕎麦。食べるわよ」
虎郷が６つほど御椀をお盆の上に置いて持ってきた。
「今年は忙しかった・・・・・・」
俺はリビング用テーブル型のコタツに脚を入れてから言った。
「夏休みから動きっぱなしだったからね」
隼人は言いながら、蕎麦をすする。

「そういえば王城」
海馬が隼人を見てから言う。
「お前の親父さんたちの前で言っていた『右手と左手の法則』って奴・・・・・・何なんだ？」
「ん？ああ、仲間である証だよ」
「・・・・・・？」
海馬は不思議そうに首をかしげる。
「隼人、分かりやすくお願い」
音河が言う。雅と虎郷も見つめる。
「・・・・・・僕らが握手するときは普通は、『右手と右手』か『左手と左手』だろ？でもこの法則は違う」
そう言って、隣の音河の手を握る。
「僕が右手で、隣の人と手を繋いだ時、それは『右手と左手』になる。自然、並ぶ形になるんだ」
「ああ・・・・・・それで」
納得だ。
「仲間である印だよ。そしてこれは、繋がりは永遠であることを意味する。例えば、ココに居る６人で『右手と左手』を繋いでも、誰かの左手と右手側に人が居ない。でもそれは、そこにさらに『仲間』が来るって意味なのさ。さらに、端っこの２人が手を繋げば丸くな

れる。丸く収められるってこと」
「そんなこと即興で考えたんですか？」
雅が隼人に質問する。
「そりゃあそうさ。僕は王城だからね」
と、隼人はそれで十分というように言った。

本当に隼人にしか分からない理論だよなー・・・・・・。

と。
思って、目覚めた時には正月だった。
「・・・・・・カウントダウンするの忘れた」
本当にきれいに終わらない。
丸く収められないな。

後日談ー右手と左手の法則ー（後書き）

裏話ー。

この『右手と左手の法則』は、僕が手書きしていた初期設定時の、この作品の題名でした。

仲間といつまでもつながっているっていう意味の題名でしたね。

番外編です！

01ーアクターー（前書き）

皆のアクターについて、長々と語ります。

番外編の主軸を立てました。

01ーアクターー

正月をすっ飛ばした。
いや、別に何もなかったわけではないのだけれど、特筆すべき内容も無かった。強いて言えば、おみくじで海馬が大凶を引いた事だが「逆に凄い」ということで運がいいのかもしれない。
さて、そんなこんなで正月明けの新学期、2日目の日曜日。

「何と俺達は受験生だったんだな」
俺は学校で隼人と海馬の前で言った。
「・・・・・・そうだけど？」
「だから日曜だろうがなんだろうがここには来るんだよ」
隼人と海馬は冷たい反応をする。
「・・・・・・危ないような気がする」
俺はそう呟いた。
「いや、大丈夫だろ」
「君なら何とかなると信じているよ」
2人はそういうが、俺にとってはそんな簡単な問題ではないのだ。
「いいか。俺の能力とお前らの能力には決定的な違いがある」
「確認してみとくかい？番外編だ。そういう風な考え方もありだろう？」
隼人が突然何か言い出したので、取り敢えず殴る。

「隼人の能力は『シンキング・キング』だ。簡単に説明すると『最強の頭脳』だよな。つまりこの世界でもトップクラスの頭脳を誇るって訳だ」
「トップだよ。模試で1位だし」
「だが、実際マンガとか小説に模試の1位が多すぎるから、誰が頭いいのかわからないな」

海馬が正論を言う。確かにそれは実情だ。いつも疑問に思う。

「海馬の能力は『サデンリィー・ラック』だったけ。運がいい能力だよな。この能力があれば、記号問題は満点が取れるだろうし、数学とかは解答欄に適当に数字書けば当る。以上の点より、お前らは勉学に向いているわけだ」

「だけど、君の能力は違う・・・・・・。そういいたいわけかい？」

「そう。俺の能力の『リメンバー・リメイン』は、心を読めるだけ。後、送信も出来るけど、これは意味は無いだろう」

「心が読めれば十分だろう？」

海馬が当たり前のように言う。

「違うんだなー、これが。雑にぐちゃぐちゃ思念が舞っている中、たった1つの答えなんか当てられねーよ」

苦しい現実である。

「でも、虎郷の能力はどうやって利用するんだよ」

「僕から説明しようか」

隼人が言う。

うん、番外編らしくていい。

・・・・・・メタ発言は禁止した方がいいかな？

「ヒスイ君の能力は『フューチャー・ライン』の派生系、『ファントム・ダーツ』だね。最初は不幸な未来しか見えていなかったはずだけれど、心を解き放ってから普通の未来も見えるようになったんだね。また、フューチャー・ラインはよく、『予知無』っていうタイプのに近いけど、実は思念の塊が見せるものだ。だから、彼女は簡単なサイコキネシスくらいなら使えるって訳さ」

「その能力は勉学には？」

「テストとかなら、問題を見ようとすることができるかもしれないけど、コントロールして見えるものじゃないからね」

「ということは、それは利用できないって訳か」
「でも、彼女は普通に頭がいい。そんな卑怯な手は使わなくても勉強面に支障は無い」
隼人はそう言ってニヤリと笑う。久しぶりに俺を見下しているようだ。
ムカつく。

「響花の能力も、利用は出来ない。彼女の能力である『エイム・ノート』は感情を司る、『エモーション・エイム』のギターバージョンといったとこかな。音を武器として利用したり、回復に使用したりするくらいだしね」
「音河はそんなに頭はよくないよな」
「まぁ・・・・・・。でも彼女は理解力はあるよ」
かばいやがった。俺は見放したくせに。

「雅の『ターニング・ポイント』はどうなんだ？」
海馬が続けて質問する。
「頭の回転が速いから、基礎が出来ていれば応用にも利用できるね。彼女はあまり勉強は得意ではなさそうだけれど、やれば出来るタイプだろう。彼女は『予想外』を旨としているからね」
「その所為で俺の能力も消え去るんだが・・・・・・」
海馬は落ち込むように呟いた。
海馬の運は予想外には対応できないから。

「あ」
海馬が思い出したように呟く。
「でも嘉島は能力が進化しただろ？えーっと・・・・・・」
「『ムービー』だ。皆の能力を使える」
「そうそう。それ使えばいいんじゃないのか？王城の頭脳とか、俺の運とか」

「アレは俺の覚悟が必要なんだよ。皆が俺に協力してくれる時とか、使うに相応しい時とかにしか発動してくれない」
「そうなのか？」
「だから基本的には戦闘時にしか利用できないだろうな」
俺はそう言って、さらに続ける。
「後、ムービーの能力は仲間の物だけしか利用できない。だから俺の手から炎は出ないし、爆弾も作れないんだ」
「仲間ってのは、明確な基準があるのか？」
「それも覚悟に通じるんだろう。守りたいと思った奴とか、協力して戦ってきた奴とか」
実は俺自身、そんなに何度も使用してないから。実験で炎を出そうとしたけどでなかったし、普通には海馬の能力も使えなかった。

「虎郷は近未来予知だし、音河は感情を声にするんだったけ」
「ミヤビ君はスパイラル・・・・・・。体中に回転を巻きつける技だったかな？つまり、攻撃に回転を加えられるってことか」
「そう考えると、あんまり勉学には向いてないんだな、進化って」
俺が呟くと
「進化した理由が全て戦闘のときだったからじゃないのか？」
と隼人はそれだけ言った。

「まぁつまりは能力には頼らずに、俺達は受験しなくちゃならないんだなー」
面倒だ。
楽に受験に合格したい。
「だったらヒスイ君に頼めばいい」
「ああ、それがいいと思うぜ？」
隼人と海馬は笑う。
「・・・・・・何言ってんだよ」
「僕は教えられるようなことは出来ない。どうして出来ないのかが

わからないからだ」
「てか、お前虎郷、好きじゃん」
さらにニヤニヤと笑われて、イライラが止まらない。
「そんなんじゃねーよ」
「ま、かなわぬ恋だから、諦めたほうがいいかもな」
海馬はそう言って、俺の肩に手を置いた。

「叶わないかどうかは分からないだろ」
隼人が俺をかばうように言う。
「あれ？知らないのか？」
海馬が不思議そうな顔をして言った。

「アイツ、昨日告られたらしいぜ？」

01ーアクターー（後書き）

主に、受験についてと、中学3年生の恋愛です。

甘酸っぱいのかな？どうだろう。

恋愛経験自体が少ないので。

02ーブレーキー（前書き）

物語の展開が【恋愛】に近くなってきた。

僕。恋愛経験は皆無に等しい。

０２ ―ブレーキ―

日曜日の授業は、午前中で終わることになっているらしい。
海馬は他の友人が話があるようで、授業が終わった瞬間に何処かへ連れていかれた。隼人は推薦入試とか言うので、先生に呼ばれていった。俺はとくに何も無かったので、誰よりも早く昇降口を出て帰途を進む。
「・・・・・・」
頭の中で、海馬のセリフが巡る。

「虎郷は・・・・・・どうするんだろう」
誰に聞くでもなくそう呟いた。近くに人がいないので、独り言ということになろうか。
「・・・・・・ん？」
携帯電話が震える。
着信メール　１件。
「あ」
俺の中の問題の渦中に居る虎郷からのメールだった。
『帰り道にあるスーパーが４時からタイムセールだから、勝ってきて』
勝ってきて！？戦闘かよ！
というか、俺にしかメールを送ってきていない・・・・・・。バラバラに送ったという線はなさそうなので、俺が早く帰るであろうことは理解できていたらしい。
「って！」
携帯電話を見る。表示されている時間は３：５０。
「まじかよ・・・・・・！！」
ここからスーパーまで走って間に合うか否かだ。
足に力を込めて思いきり走り出した。

「間に合った・・・・・・」
３：５７。ぎりぎりセーフということだ。
「タイムセールか・・・・・・・」
あれ？商品について聞いてないぞ。そもそもどこで始まるんだ？
と思ったとき、
『タイムセールです！卵が２パックで１００！数量限定です！』
という放送が聞こえた。

そこで俺は思った。

『勝ってきて』は打ち間違いだと思っていたが、言いえて妙だった。
おばさんたちと俺の戦争が勃発した。

「ただいま・・・・・・」
疲れきった体で俺は帰宅した。
「おかえり。何パック買えた？」
虎郷がそう言って俺の左手で掴んでいる卵を見る。
「６。もう行きたくないな・・・・・・・あれ？」
虎郷以外が居ない。
「音河と雅は？」
「響花は少し・・・・・・・諸事情ね。雅ちゃんは・・・・・・・諸事情ね」

いつの間にか雅が『常盤』から『雅ちゃん』へ昇格していた。
女子はどこで結束が固まるか分からないからなー・・・・・・。
「何だよ、その諸事情ってのは」
「色々よ。まぁ貴方には支障は無いから」
そう言ってから、卵の入っている袋を受け取った。
「割れてないか？」
「大丈夫のようね。ありがとう」
と虎郷はそれだけ言うと、
「王城君と海馬君は？」
と訊きながらキッチンの冷蔵庫に丁寧に卵のパックを入れていく。
「しょじじょーだ」
「貴方の思っている諸事情と私が言っていた諸事情は絶対違うわよ」
「じゃあ教えろよ」
「セクハラ」
「はぁ！？」
突然の発言に俺は思わず叫ぶ。
「プライバシーくらい考えなさい」
「・・・・・・もしかしてあの2人が告られてたりしてな」
冗談のつもりだった。

「そうよ。響花は今日、雅ちゃんは昨日告られて私達に相談してきたわ」
「え・・・・・・マジ？」
「まじるんるん」
え・・・・・・。
何だこの女子告白されている率。
「響花は毎度のことだけれど、雅ちゃんは珍しい経験だったみたいね。どうすればいいか訊いてきたわ」
「どうすればって・・・・・・・海馬が居るのに、そりゃダメに決まっているだろう？」

「ええ。だからどう断ればいいのか分からないって、相談してきたのよ」
「・・・・・・一途だなー・・・・・・」
それはそれは、まぁ真面目な事だ。
「でも、別に海馬君に執着しなくてもいいとは思うわよ」
「・・・・・・・え？」
「だって、男女に別れはつきものでしょう？」
「・・・・・・」
「学生の愛が永遠なんて・・・・・・そんなのは極少数だと思うわよ。王城君と響花は置いておいてね」
・・・・・・そうか。
ずっと一緒じゃないんだ。だって、人の気持ちだから。

だから、俺が虎郷が好きだったとしても・・・・・・そしてそれがたとえ実ったとしても。
それが永遠なはずが無い。

悲しい現実に脆い俺の心は、ブレーキを強めた。

02 ―ブレーキ― （後書き）

ブレーキくらいならあるよ。
簡単には告白できないよね。

僕のブレーキは全開で、アクセルには足も手も伸ばそうとしない。

０３ー他人の目ー（前書き）

ゴメン、まじゴメン。

これ【恋愛】だわ。見たくない人は見なくてもいいけど、展開についていけなくなるかも！

０３ー他人の目ー

「大変な事になりそうです」
偶然、全員が同じタイミングで帰ってきて、制服から着替えた後、昼食を取る事になって、その時に雅が言ったのだ。
「大変って？」
隼人がオムライス（本日の戦利品である卵）を食べながら言う。
「いえ、少し色々有りまして」
雅はそう言って、話を打ち切ろうとした。恐らく、女子にだけ相談したかった事を無意識に口に出していたのだろう。しかし、
「もしかして告白のことか？」
と俺が（冷静に考えると無頓着に）言い放ってしまった。
カタンと。
海馬と雅のスプーンが机に落ちて、音を鳴らす。
「あ」
しまった。簡単に言っていいことではなかったか。
その証拠に虎郷の目が俺を射るように見ている。音河は目を白黒させている。
「えー・・・・・・っと」
「雅。どういうことか説明しろ」
海馬が雅を睨む。
「あの・・・・・・えっと」
「彼女、昨日告白されたそうよ」
虎郷が答えた。
「虎郷さん！？」
「いいのよ。どうせいつかはばれる事じゃない」
と淡白に雅に応対する。
「そうなのか？」

海馬が雅を見る。
「はい・・・・・・。でも断ったんです」
「そう・・・・・・か」
そして安堵した表情になった。いや、安心するタイミングじゃないぞ。
「それで、大変というのは何があったんだい？」
と隼人が訊く。そうそう、それだよ。
「その男子がしつこいんです。断ったのに、一緒に帰ろうとしたり、メアド訊いてきたり・・・・・・」
「俺に任せろ」
海馬が立ち上がる。
「絶対ぶっ潰す！」
勢いあまってチキンライスが口から散布し、俺の顔に張り付く。
ああ、青春しているなぁ。だが、食べながら喋るのはいかがなものかと。
「・・・・・・ダメですよ」
雅は珍しく小さな声で言う。
「え？」
海馬はまさかの否定に対応できずに少しうろたえる。
「私は、学校で目立ちたくないんです。こんな髪色だからそれだけで凄く目立つのに・・・・・・」
「だからって・・・・・・お前は困ってるんだろ？」
「正先輩には関係有りません・・・・・・」
ギリ。
と、海馬の歯軋りが聞こえた。
「あ、いやそうじゃなくて」
それに気付いた雅は必死に弁解を試みるが、
「そうかよ」
海馬は呟いてからリビングを飛び出し、玄関から外に出て行った。

雅はそれから少し落ち込んだ面持ちで部屋へと戻っていった。
食器類を片付けて、俺達はソファーでくつろぐ。
「ケンカ・・・・・・しちゃったね」
音河がそう言って、苦笑する。
「海馬君が怒るのは珍しいね。別に敵対している相手でもないのに」
「それに弁解も聞こうとはしなかったわね。怒り心頭状態ね」
「まぁ・・・・・・関係無いって言われちゃー・・・・・・怒るよな」
そこで少しの沈黙が流れた。

「響花も告白されたのか？」
隼人は思い出したように訊く。・・・・・・待て。隼人の前で、音河の話はしていなかったはず・・・・・・。
「どして？」
「頬の緩みが、ぎこちない。響花が何か後ろめたい事を抱えている時の表情だ。ミヤビ君のときの過剰な反応とかから想定してみても、ただ、この現状に対応できていないだけじゃぁないっぽいから」
こんなときにも冷静分析か・・・・・・。
「まぁ、いつものことだけどね」
音河は笑う。
「あっそ。返事したの？」
「・・・・・・」
「まだなのか。いつもならさっさとするのに」
あ、隼人が少し怒ってる。
これは能力ではなく約半年で見つけた隼人の特徴である。淡々と相手を追い詰めていく動作をする。それは相手を犯罪者と同様に見ているから出来る行為だと、俺は考えている。
「王城君。触れすぎよ」
「僕と響花の問題だよ」

「男子は男子で悩みなさい。女子は女子で考えるから」
「・・・・・・分かったよ」
隼人は言って、ソファーに深く座り、背もたれに身を預けた。
あ。これは。
「・・・・・・寝たぜ」
「寝たわね」
まるで死んだような勢いで睡眠状態に体を持ち込む癖がある。いつも気分を張り詰めているからだ。

「・・・・・・隼人、超怒ってるね」
「ああ」
俺と音河の会話に、
「そうなの？」
と虎郷が入ってくる。
「・・・・・・私、部屋戻るよ」
音河はリビングから出て、そのまま部屋へと入っていった。

「ケンカ2連続かよ・・・・・・」
「どうする？私達もケンカしてみる？」
「っていいながらファイティングポーズをとるな。俺、死ぬ」
「そう。つまらないわね」
虎郷は手をおろす。
「どうして音河は返事してないんだ？」
俺は疑問を口にする。
「さぁ。私にはさっぱり」
「・・・・・・女子ってやっぱり世間の目とか気にするのか？」
「世間というか・・・・・・。まぁ、クラスでの立ち位置くらいは」
「俺推理」
宣言してから言う。
「音河は、結構告られている。そのたび、音河は断っているはず。

だから、男子に高飛車とか言われたり、女子に嫉妬されたりする事があって、簡単に断れる状態じゃない・・・・・・とか」
「・・・・・・ま、ご想像にお任せするけれど」
正解ってことか。違う時は違うって言うから。
「だとすれば王城君は気付いているはずよね・・・・・・。そのくらいの事なら」
「隼人は・・・・・・まぁ、アレだよ。うん、男子にしか分からない世界だ」
「・・・・・・そう。そういう言い方するなら、貴方に女子の話はしないわ」
「いいよ。別に。どうせ教えてくれるんだから」
俺はそう言って、リビングから出た。

そして部屋に入り、その扉に背中を預けて座り込む。
「・・・・・・だよな、隼人」
そんな事は関係ないんだよ。君は自分のものであって欲しい。だから、他の女子の目とか男子の目とか気にせずに、自分のそばにいて欲しいんだ。

頭では分かっていても、簡単に受け入れられないんだよな。間違っている事も分かっているんだよな。

そして、次の日を迎えるのだが。
その日、俺と虎郷も話さなくなってしまう。

０４ー不和と歪みー（前書き）

１５０話です！

題名書いて思ったけど、不正羊我って縦書きしたら、歪義って読めそう。

あ、意味は無いよ。そう見えるってだけ。

０４ー不和と歪みー

その日の朝食は静かだった。

まず、朝から海馬が居ない。この家自体には帰ってきているようだが、朝食は１人分余っていた。

隼人は「朝ごはんは食べないと調子が出ない」とのことで、朝食は取ったが、その後は１人で家を出て学校へ行った。

俺と虎郷は起床が早かったので、朝食は早めに取っており、学校へは行こうと思えば行けたのだが、どうもこの空間を放置していく事が忍びなかったのだと思う。

音河と雅は大体遅めに起きてきて、食卓を見て、俺達を見る。俺達は肩をすくめた。

恐らく全てを悟ったのだろう。そのまま食事を取って、２人も家を出て行った。

「・・・・・・なんだろう」

「気まずいわね」

「ああ」

なぜだろう。雰囲気や空気の所為で、俺と虎郷の会話も淡白になっていた。この空気の原因が、何だかんだで俺と虎郷に有る事も起因しているのだろう。

取り敢えず、家を出て学校に向かうことにした。

途中までは道が一緒なので歩いた。

「あの２人は・・・・・・その、いわゆる、モテる奴なのか？」

「まぁ、そうでしょうね。私自身もそれに値するでしょう」

「自分で言った！？」

「貴方はどうなの？」

「え？」
突然、その話題を振られた。
「えっと・・・・・・？」
「貴方も女子には引く手数多(あまた)なのかしら？」
「あー・・・・・・まぁ、否定はしないけど、その言い方には語弊があるかな？俺は誰かと付き合った経験は無いから」
そう言って、分かれ道に着いた。
「じゃ、行ってきます」
「行ってらっしゃい。行ってきます」
「行ってらー」

学校では、隼人と海馬は普通にしており、別に空気が張り詰めては射なかったが、少し後ろめたい所があったので、真面目に授業を受けた。それで何かが打ち消されるわけではないけれど。
で、放課後。
いつもなら（昨日は例外）海馬と隼人はすぐに席を立って、準備の遅い俺の席の周辺に寄ってくるのに、自分の席で物思いに耽(ふけ)っている様子だった。
「帰ろうぜ、隼人、海馬」
「あー」「あー」
「・・・・・・気の抜けた返事だな」
俺は荷物を降ろして、隼人を椅子ごと運んで、海馬の席の横につける。
騒いでいた生徒達はいつの間にか居なくなっていた。そりゃそうだ。受験生だから部活も終わっているしな。
「音河と雅・・・・・・少し落ち込んでたぜ？」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」

「お前らも自分が悪かったって分かってるだろう？向こうの主張を何一つ訊かなかったんだから」
「分かってるよ」「分かってるよ」
２人とも同時に返事をする。
「でも今更、引き下がれないんだよ」「けど今更、謝れねーよ」
「・・・・・・ま、分からなくないけどさ」
何だろう・・・・・・。その場の勢いで言ってしまったことに、自分が悪いと分かっていても、負けを認めたくないという・・・・・・。
男子特有だろう。いや、分からないけれど。もしかしたら女子にもあるのかもしれないし、男子だけでも一部かもしれなかった。
「多分、しばらく口は聞かない・・・・・・つーか、聞けねーよ。顔合わせたくない」
「右に同じ」
「何で？」
「絶対悲しそうな顔して現れるだろ！？」「泣きそうな顔してたらどうするんだよ！！」
何なんだ、コイツラは。でも分かる自分も居る。
そうだよなー・・・・・・好きな人の涙とか見たくないもんなー。
だから木好さんに対して俺はあんなに全力で戦ったんだろうけど。

「あ、嘉島ー」
同級生が１人やってきた。名前は出したところで、今だけのような、モブキャラなので控えておく。
「どうした？」
「お前って、彼女居るのか？」
あー・・・・・・今その話題は禁止。
「いや・・・・・・いないけど？」
「そうか。じゃあ、あれは別に問題ないな」

「あれって？」
何か気になることを言っているので、俺は聞いてみた。
「いや、昨日の帰りにさー・・・・・・」

「え」
ブレーキから俺の脚は離れたと思うけど。
ギアをバックにセットした感触を心の奥に感じた。

０４ー不和と歪みー（後書き）

自分の好きな人を誰かが泣かした時、そいつに怒りを覚えると同時に、そいつをうらやましく思う。

人が人前でなかなか出さない感情を出したのだから。

自分に出来ない事をしたのだから。

だからってしたいとは思わないけど。こっちも悲しくなるから。

嬉し泣きならいいけど。こっちも嬉しい気分になれるから。

０５ー天秤の釣り合いー

帰り道。
隼人と海馬は「気まずいから時間潰して帰る」そうだ。それなら俺だってそうしたいくらいだ。

「はぁ・・・・・・」
先ほどの話を頭の中に思い浮かべる。
「・・・・・・はぁ」
二度目の溜め息。
すると、後ろから
「何か悪い事でもあったのか？」
と声を掛けられた。
「・・・・・・東先輩」
本屋へ行った後の帰り道のようで、本屋の名前が入った紙袋を持っていた。
「溜め息１回に幸せが１つ逃げていくらしいぜ？」
「夏休み以降で、既に１００００は超えてるよ」
「あっそ。で？何かあったのか？」
「あー・・・・・・別に、なんでもない」
俺はそう言って、話を打ち切ろうと思ったけど、
「東先輩は」
と口走っていた。
「ん？」
「今日元さんのどこが好きなんですか？」
「何だかんだでほとんど完璧に出来るところ。けど、方向音痴っていう、俺がカバーできるところが抜けているところがかわいいと思う。あと、ミステリアスで、印象としては大人の女子感じる。成人

にもなっていないのにな」
恥ずかしげも無く、詰まることなくそう言った。
「・・・・・・何？」
「何で簡単に言えるんだ？」
「いや、好きな人の好きなところの１つや２つ、何時尋ねられても答えられないと・・・・・・って」
東先輩は、そこで思いついたような顔をする。
「虎郷か」
「・・・・・・あの、俺ってそんなわかりやすい？」
「いいや、別に。単純に、あのメンバーで空いてるのは虎郷だけだったから」
東先輩はそう言ってから、笑った。
「大丈夫だって、虎郷はお前と一緒にやっていけるから。失敗のある恋愛なんて無い。俺はそう思ってるぜ？」
「それは無いぜ」
「人を好きになった事を、失敗だと思うなってことさ」
東先輩はそう言って、途中で立ち止まった。
「じゃあ、俺はこれから今日元に会いに行くから」
「・・・・・・どうして苗字なんだ？」
「は？」
東先輩は止まる。
「どうして『終』って呼ばないんですか？」
「・・・・・・ああ、それは――」
少し思案したような顔をして、
「わかんね」
と答えた。
本当に分からないようだ。
そして東先輩は靴裏に小さな車輪をつけて、
「そんなもんだよ」
と言って、ローラーブレードの要領で走り去っていった。こんな

舗装されていないアスファルトの上をよくもまぁ、ローラーブレードなんかで走れるもんだな。

と、このタイミングで携帯電話が震えた。

「・・・・・・・」

文面。

『鶏肉買ってきて』

勝って来てじゃないな。そして虎郷だった。

「・・・・・・無理だ」

東先輩の発言と今日、同級生から聞いた話を天秤に乗せる。

・・・・・・やっぱりなぁ・・・・・・。

俺は簡単に割り切れなかった。

０５ー天秤の釣り合いー（後書き）

本来入れる予定の無かった話。
東先輩と今日元さんが余り語られていなかったので。
ちなみに２人は付き合っていませんが、お互いに好きです。それを知ってます。

前回から書かれていない、同級生のセリフは次回です。

０６ー背中を預けるその扉ー

スーパーで鶏肉を買って、帰り道を進む。
「・・・・・・」
隼人も海馬も自分の非は認めた。それは間違いなく正しい。そして、いいことだと思う。
そして俺はこれから虎郷に尋ねる。俺の中では、問い詰めるのとほぼ同義だ。だって俺は悪くないから。そして、虎郷も悪くないから。
俺は今から最低になる。
そのために足を動かしている。

時間を掛けてみようと思う。どうせ、帰るのに時間が掛かるから。
俺が虎郷を好きになったのはいつのことだったろうか。と、考えてみれば。
もしかしたら、最初にぶつかった時だったかもしれない。俺はあの日から、彼女を守ろうとしていた。確か、電車から。
今の俺なら他人が傷ついたり、事件に巻き込まれることを知れば、全力で助けようとするだろう。だが、あの当時の俺は、他人に干渉する事を嫌っていた。他人がどうなろうが知った事ではなかった。そんな中で、俺は虎郷を助けたいと思った。
もちろん、夏休みの隼人との経験で俺の何かが変わっていただろうことも要因だろうけれど、それでも俺の中で何かがあったことは分かる。もし虎郷と出会っていなかったら、他人を守ろうとする俺もいないはずだから。
「やっぱりなぁ・・・・・・」
大好きなんだよ、俺は。アイツの事が。
なのに。
俺は今から、彼女を諦めなければならないのだ。

「ただいま」
俺は靴を脱いでリビングに向かう。
「おかえり」
「音河は？」
「部屋で告白の返事を考えているわ。雅は今日もその男子にしつこく誘われて、一緒に帰って――というか、雅がストーカーされている状態で、帰ってきたわ」
「・・・・・・そうか」
俺は鶏肉を置いてから、ソファーに座った。
「・・・・・・どうかしたのかしら？」
「・・・・・・昨日さ。俺、卵買いに行ったじゃん？」
「そうね」
「その時、お前何してた？」
「・・・・・・？」
うん、そりゃそうなるよな。
「お前・・・・・・誰かと一緒に居たんじゃないのか？」
「・・・・・・！？」
虎郷の表情が変わる。
「虎郷も告白されたんだろ？」
「・・・・・・」
「別に隠さなくてもいいのに」
俺は無理して笑う。でも、向こう側には無理しているとばれないように。
「よかったじゃん、虎郷」
「・・・・・・あの、嘉島君、私は別に――」
「何で、隠してたんだ？」
責めるような言い方になってしまった。別に悪くないのに。
「・・・・・・私も・・・・・・考える時間が欲しかったから」

「そっか。相談してくれてもよかったのに」
俺はまた、無理して笑う。
「あー・・・・・・。俺、今日は夕飯要らないから」
そう言って、俺はリビングを出る。
「嘉島く――」
バタンと。
俺は扉を閉めることで、声をシャットアウトした。
そして俺は自分の部屋に入り、鍵を閉めた。
「・・・・・・あぁ・・・・・・」
そのままそこにうずくまる。扉に自分の背中を預ける。

別にいいんだよ。虎郷は自分の青春をしているだけなんだ。俺が何かできることじゃない。俺が鑑賞していいことじゃないんだよ。
なのに、怒りは抑えられなくて。
虎郷は悪くないのに、責め立てるように言ってしまった。
「・・・・・・・あ・・・・・・」
頬を伝う、冷たいものを感じる。
・・・・・・だっせ・・・・・・。
俺は最低だ。
自分の想いも伝えず、相手を悪く思って、嫉妬して。
俺は最低の男だ。

０６ー背中を預けるその扉ー（後書き）

甘酸っぱい少年です
好きな人に他の意中の人ができると、意識して話さなくなります。
向こうも話さなくなりますよ

07ー『俺』と『私』ー

例えば、それはいつものことで。
いつもそこに会話はない。
そういう情景に慣れていれば。
俺達の
今、　　胸に穴が空く事は無いのに。
私達の
＝＝＝

海馬が呟く。
「ソウメイ君に至っては、悪いどころか最低だからね」
「分かってるよ・・・・・・。別にアイツは何一つ悪い事はしてないんだから・・・・・・」
「まぁ好きな人が別の人と付き合ったら話しにくくなる気持ちは分かるけどな」

海馬は頷いてから、部屋に横になる。俺もそれに続くように横になった。

フローリングの床がひやりと冷たいのを感じた。

＝＝＝

私に何か悪い点あったかしら。
「ヒスイはねー・・・・・・うん、悪くは無いかもしれないけれど」
「奏明さんのことを考えてあげてください」
「嘉島君？」
何のことを言っているのだろう。
「嘉島はヒスイがすきなんだよ」
「・・・・・・そうなの・・・・・・！？」
「うわ、気付いてなかったんだ・・・・・・」
「鈍感ですね」
・・・・・・。
それは・・・・・・気付いていなかった。
だとすれば・・・・・・。
「私・・・・・・最低ね」
そのまま私はソファーに倒れ込んだ。

ふわりとした感触が私を皮肉るように蝕んでいく。

私は、大変な事をしてしまった、と。

先に立たない後悔をしてしまった。

＝＝＝

07 ―『俺』と『私』―（後書き）

僕が言いたかったのは、鈍感は主人公の特権じゃないということです！

嘘です。

０８ー語る口も無しー

２月に入ってしばらくしたのを覚えている。
肌寒さは一層強くなったような気がするが、そんなのが気にならないくらいに俺達は全員、心が凍えていた。
女子側からは話しかけようという行動は見られるが、男子側が受け入れようとしていない。心が狭い男子達だと笑うがいい。
俺はというと向こうからも何のアクションを起こされないし、俺も起こそうとはしない。寒さが一層強くなる気がした。
行動の時間は全てずらそうとした。しかし、向こう側もそれを行っているのか、全員が集合してしまう事も少なくは無かった。風呂で遭遇した事もあった。気まずい関係性の中での気まずい空気というものは一層修羅場に拍車を掛けるのだということを感じつつ、静かに出て行ったこともあった。仲直りした時のことが、とても恐い。

そうだ。

俺は仲直りしたいんだ。できれば何も悪い関係は無く終わらせたいと思っている。それでも、俺から頭を下げる事はなかった。特に俺の場合は、何に対して謝ればいいのかも分からない。向こう側から行動を起こしてこないのは、向こう側に何らかの後ろめたさがあるということだが、それが一体何なのかということは分からない。

俺は虎郷が好きだ。それを虎郷は多分知らなかったのだろう。最近知ったのだと思う。俺がそう「感じた」。恐らく音河や雅が教えたのだろう。余計な事をしてくれたものだな。と、格好つけてみるものの、実際、告白する勇気も無く終わった恋なのだから、全く格好よくも無いな、と反省した。

生活には支障を来たさないようにした。例えば、男女が会話をしなかったといっても、それはケンカしている間柄同士であって、俺の場合は音河と雅とは会話して、虎郷に伝えたい事があったら、そこを通じて伝えてもらうようにした。利用してないけれど。向こう側も伝えてくる事は無かった。音河と雅は俺に、虎郷と会話するように言ってくるかと思ったが、それは一度も無かった。まぁ、向こう側も同じ事が言えるからだろう。後ろめたさってところか。

そんな中、俺達は学校から時間をずらして帰宅した。

「・・・・・・」

リビングの扉が閉まっていて、そこに張り紙が貼ってあった。

「『男子厳禁』だってさ」

俺はそう2人に言う。

「・・・・・・頼まれたって入れないよ。響花が居るもん」

そう言って隼人は自分の部屋に戻った。

「・・・・・・あー・・・・・・王城、頼みがあるんだけど」

と言いながら隼人の部屋に入っていった。

俺は黙って自分の部屋に入り、意識を外す。

WR行き。

「・・・・・・ん？」

今日元さんがこちらを見た。

「ああ、嘉島。聞いたぜ。虎郷と会話してないんだってな。やきもちなんか焼くなよ。最低だなー」

「一行で現状を纏め上げてくれてありがとうございます」

「何か用？」

「今日元さんは東先輩のどこが好きなんですか？」

「人を見た目で判断せずに、相手をしっかり理解してくれるところ。少しキレやすいところもあるけど、それを俺がカバーできるくらいの優しさで包みたくなるところ」

早いな・・・・・・。
「何でそんなつらつらと言えるんですか・・・・・・・？」
「好きな人の好きなところくらい、いつでも言えるくらいじゃないとな」
似たようなことまで言う・・・・・・。
「もういいです」
「あ、そう」
俺は帰ろうと意識を戻す。
「ああ、そうだ。明日は楽しみにしてろよ」
え。

起きた時、それは今日元さんの言う『明日』だった。
２月１４日。
「あぁ・・・・・・そう」
俺の１番嬉しくない日が来てしまった。
何を楽しみにしろと・・・・・・？

０９ ― バレンタインデー ―（前書き）

ま、そういうことっす。

０９ ―バレンタインデー―

２月１４日。

この日は誰でもご存知の「バレンタインデー」だ。

そしてそれは俺に限っては、最悪の日として迎えられる。

俺と海馬と隼人は、一緒に学校に行った。

「・・・・・・」

自分の下駄箱に着く。

既に３個入っていた。

「モテモテですね、嘉島さぁん」

海馬がニヤニヤ笑いながら見てくる。

「うらやましいか？」

「別に。１００個貰っても嬉しくないだろう？特定の人からの１個が大切なんだぜ」

海馬は言いながら下駄箱を開ける。

「うぉ！１個入ってる！やりぃ！」

「３秒前の自分殴って来い」

俺はそう言い放ってから、隼人の方を見る。

「・・・・・・隼人」

下駄箱が既に役目を果たしていない。

「・・・・・・気付かなかった振りってのは」「ダメだろ」

隼人の提案を速攻で否定する。

「・・・・・・はぁ」

隼人は溜め息をついて、鞄の中に詰めていく。

どうも俺達3人は、この学校でも指折りの「いけめん」なのだそうだ。麺類の一種だろうか？
というのは冗談で、嬉しい事実である。が、それでもこの日だけは嫌いなのだ。

「嘉島ー、義理チョコやるよー」
という、誰にでも優しい女子類と話してチョコをもらえるという点や
「か・・・・・・・嘉島君」
「ん？」
「・・・・・・・コレ・・・・・・・」
と、普段は話さない女子とも話せるという嬉しいこともあるのだが。
「・・・・・・・バレンタインの・・・・・・・」
「・・・・・・・ありがとう」
どうも、俺はこの日を好きになれない。
別に好きでもない人から貰っても、その人の期待には応えられないという点が表向きの理由なのだ。俺はそれが本質としてありたいくらいだが、それは俺がこの日を好きにならない理由というよりは、バレンタインデーという日本体への批評に過ぎないのだ。
裏の理由がある。しかし、それは俺の小ささを示すのだ。
だからこそ、この日が嫌いなのかもしれない。

そんなわけで放課後の教室。
「・・・・・・・１０個」
「・・・・・・・４個」
「・・・・・・・・・・・・じゅ・・・・・・・・１２？」
「「嘘付けええええええ！！」」
俺と海馬は同時に隼人に向かって叫んだ。
隼人はどこから持ってきたのかも分からない、１袋の紙袋一杯の

チョコレートを抱えていた。
「１２なわけねーだろ！！お前、何でそんな貰ってんだよ！音河に向かって強い事全く言えないじゃん！」
「見ろぉ！俺は４個。嘉島は１０個だ。何だ？お前、５０個くらい？」
「いいじゃん！女子から４個でも十分だろう！？普通は１個貰うことすら厳しい男子社会でそんだけ貰っただけいいと思いなよ！」
「ほー！お前は、そんな悲しい男子社会でうらやましくも５０個と！？舐めんなよ！俺なんか、誰にでもあげてる女子から貰った義理チョコ３個と下駄箱の無名の１個だっつーの！」

それから隼人を２人係でボコボコにし（ようとしたが返り討ちにあっ）たあと、俺は帰ろうとしたのだが、
「海馬、今日も遠回りか？」
「ていうか・・・・・・時間稼ぎか？」
「隼人は？」
「帰宅る」

その時間は既に７時だった。
「・・・・・・どうすんだよ」
「何が？」
「謝ったらいいだろ？」
「・・・・・・僕はわるくない」
「じゃあ、『謝れ』って言いにいけよ。お前は悪くないんだろ？」
「・・・・・・」
「それができないってことは何処かで、自分に非があることを分かってんだろ？」
「・・・・・・それは君にも言えるだろ？」
「言えないよ。だって、全面的に俺が悪いから」
俺はそう言ってから、歩き続ける。

「よーぉぉぉっす！！」
凄く元気な声がうしろからした途端、体を前に向かって倒されるように、肩を組んできた男が居た。
「あ」
「げ」
「うぃーっす」
鉋さんだった。隼人の父親だ。しかし見た目の年齢では俺達とそう変わらないので友達に見られるぐらいだろう。
「お？何だ、隼人。お前めっちゃ貰ってんじゃん」
「うるせ。帰れ」
「だが、全盛期の俺には勝てない。俺はリムジンバスの後ろに入れて帰ったくらいだ」
と鉋さんはそう言って、ニヤリと笑った。
「キリン。帰れ。動物園へ」
「そう言うなよ。俺、お前の親父だぜ？お前の仲間を見るのは俺の心眼だ」
「もういい・・・・・・この人会話成立しない」
「それにしても、最近はよくお前らに会う。1か月前に火水さんと会ったのを皮切りに、この間は響花ちゃんで、雅ちゃんだ。ああ、さっき、何か考え事をしながら正君も通り去っていったなぁ」
「で、隼人、奏明くん。一体、何に落ち込んでるんだ？」
鉋さんはそう言って俺を見た。
「え・・・・・・？」
「ほとんど同じ内容で悩んでるな・・・・・・、何だ！恋愛か。そのくらいは誰でも悩むものだ。そう、アレは俺が高校三年生のことだった。それが今の妻との出会」
「うるせーってんだ！」
隼人はキャラを覆して、鉋さんを睨んだ。
「・・・・・・何で、悩みが分かったんですか？」
「俺のアクターだ。『パラサイト・シンキング』っていう奴。他人

の心を食い物にして、思考を開始する。空気とかでも喰う。ともかく、物事の流れに対して敏感な脳だ」
ニヤリと鉋さんは笑った。
「ああ、そうそう。隼人。急いだほうがいいぜ。お前の悩みの種はお前の所為で、成長しちまったらしい」
「え・・・・・・」
「予定ではそろそろメールが届くそうだ。親父が言ってたよ」
鉋さんの父・・・・・・椎名さんか。椎名さんも能力者なのか・・・・・・。
どうも、この世界にはそういうのは案外溢れかかっているのかもしれない。
「！」
本当に隼人の携帯が震えた。
「・・・・・・！？」
隼人はそのメールを見て、驚いた。
「どうした！？」
「・・・・・・今日元さんから・・・・・・」
と文面を見せる。
「！！」
『監視カメラで見たんだが、音河が危険だ。音河が振った男子がキレて、数人のメンバーで連れ去られた。今、街外れに向かっている映像が見えた』
「・・・・・・行ってくる！！」
隼人はそう叫んで走り出した。
「俺も行く！」
「来るな！コレは僕の問題だ！！」
隼人は尚もそう叫んで、走り去っていった。
「はは！隼人も面白いなぁ。自分は自分でしか助けられないと思っ

てんのかねぇ？」
「・・・・・・」
「ああ、奏明君の問題も解決しようかね？」
「え・・・・・・？」
「・・・・・・あ？・・・・・・うん、あれ？これは・・・・・・・」
独り言のように呟き続けた、鉋さんは、最終的に
「はははははは！！」
と笑った。
「あー・・・・・・・面白いな、お前らは」
「え・・・・・・？」
「あのな、君のそれは」

「え？」

０９ ― バレンタインデー ―（後書き）

モテモテですね。彼ら。いや、うらやましいよね。
主人公補正ですよねー。

あ、僕は最高で４個です。地味に自慢！！

１０ーそれが、『運』命だからー

＝＝＝

「貰うぜー。今日はこれで良いやー」
高らか箱を上げた男は言った。何が良いのだろうか
「ダメです！それは――」

「俺んだ」
その箱を、何の苦も無く、普通に取った。
「え・・・・・・！」
でけええええ！！
男はそれを見て思った。
「返せ。俺のなんだよ」
「あ・・・・・・え・・・・・・お、お前何だよ」
それでも、男は強く出る。
「海馬正だ」
「だから何なんだよ！」
男は引っ張るようにその箱を強く持った。
が、その瞬間箱のパッケージのみが破れて、地面にしりもちをついた。
「運が悪かったな」
海馬はそう言って雅の横に立った。
「雅、これ貰うぞ」
「え・・・・・・あ、はい」
「ん」
そう言って海馬は雅の手を握った。
「・・・・・・お前・・・・・・常盤の何だ」
男はそう言って立つ。
「このチョコも雅も俺のだ。雅は俺の嫁だ」
「・・・・・っざけんなぁぁ！」
男は海馬を殴ろうと拳を握った。
「ふざけてない。俺は雅が好きだ」
そう言って、海馬はそのまま拳を振るってカウンターで対処した。

民家のブロック塀に背中を打ち付けて、男は倒れた。
「雅を好きになったのは、運が・・・・・・」
そこまで言って、海馬は「いや」といって、雅から手を離して歩いて近づいて、見下ろした。
「ひぃ・・・・・・・」

「お前が悪かったな！」
吐き捨てるようにそう言ってから、その状態で男を1度蹴った。
男は頭をブロック塀にぶつけて、そのまま倒れた。
「・・・・・・・帰るぞ」
「あ・・・・・・、あの正先輩。ご」「ごめんなさい」
海馬は雅の発言を遮ってそう言った。
「・・・・・・・」
「・・・・・・・はい」
そう言って雅と海馬はもう一度手を握って歩き出した。

「でも、どうしていつものセリフで吐き捨てて去らなかったんですか？」
「雅を恐がらせたのがムカついた」
「・・・・・・」
雅はそこでにこやかに笑った。海馬はその顔を見て頬をかいた。
月明かりが2人の踊り手にスポットライトを当てていた。

１０ー それが、『運』命だからー（後書き）

このシチュエーションは海馬君の決め台詞を作ってから、考えていたものです。

「てめぇが悪い」です。

11 ―白と黒の挟間で今日も―（前書き）

ま、流れ的には。

11ー白と黒の挟間で今日もー

＝＝＝

白い世界が包んでいく。
方眼用紙ではなく、それは真っ白な紙に包まれた空間だった。
「へぇ・・・・・久しぶりに使ったら、どうも僕の世界も変わっていたみたいだね」
以前、壊されて、戻っていないその鋼の扉を踏みしめて男は入ってきた。
そしてそのまま白い世界が全てを支配する。
「な、何だ！？」
それは世界という概念とその男に関してだった。
金髪に制服で、且つ、乱れている服装。更に言えば、強い眼光。
「隼人！」
音河は叫ぶ。
「てめーら・・・・・何してくれてんだ！！」
隼人はまるで飛ぶような速度で、間を詰めてきた。
「あ」
ドゴォォ！！
と、拳は最大限の強さで男を1人吹き飛ばす。
「な」
会話の間も無く、もう1人を蹴り飛ばした。
「てめぇ！」
1人が隼人の顔を殴る。
「死ね」
隼人はそのまま頭で、拳を押し返し、さらに髪を掴んで、膝蹴りで顔面を潰す。
「お前ら舐めてんじゃねーぞ」
隼人の言葉は乱れに乱れて、拳は更に暴れる。
そして残り2人も難なく、吹き飛ばした。
『解除』
白い世界は今までのように崩れるのではなく、フェードアウトす

るように消えていった。
「・・・・・・隼人」
音河が呼ぶ。
「ゴメン・・・・・・・僕の所為で・・・・・・・」
「いや、大丈夫だけど」
「でも嬉しい」
隼人はそう言って音河の縄を解いた。
「響花は、他人の目より僕を選んでくれたんだから」
「・・・・・・・うん」
縄を解いて、音河に手を伸ばす。
「帰ろう」
「・・・・・・・動けない」
「え・・・・・・・、キングダムでダメージは完治させたはずだけど・・・・・・」
「動けない」
「・・・・・・・ま、いいか」
隼人はそう言って、音河を背負う。
「あ、思ったより軽い。ちゃんと飯食ってる？」
「昨日は食べてない・・・・・・・あれ？何時から食べてないっけ？」
「そうだ。チョコくれない？」
「え・・・・・・・」
「昨日作ってたんだろ？」
「・・・・・・・うん」
音河はそう言って、口を閉じた。
「あれ？響花？」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・寝ちゃってる」
隼人はその顔を見て、にこやかに笑った。

１２ー真実は『恋』ー（前書き）

題名で心当たりのある人は、僕の作品をよく読んでくれている人です。

１２ー真実は『恋』ー

俺は走った。
家に向かって。
自分のしたことを反省しながら。
「まただ・・・・・・」
俺は最低だ・・・・・・！

家について、玄関に立つ。
そしてドアに手を掛けて、
「・・・・・・」
・・・・・・。
・・・・・・どうする？
俺・・・・・・なんて言えばいいんだ？
「・・・・・・知るか」
誰に言うでもなく、僕はそう呟いてから、扉を開け放つ。
こうなったら、何でもいいや。多分、何か思いつくだろう。

「虎郷！」
俺はリビングの扉を開いた。
「・・・・・・」
虎郷は、突然の来訪で、息が上がっている俺を見て目を丸くした。
「あ・・・・・・えっと・・・・・・」
言葉が全く出てこない。テンパって、頭が真っ白だ。
「・・・・・・何か飲む？」
冷静に虎郷はそう言うと、特に何も無かったかのようにキッチンのほうへ向かった。
「・・・・・・ください」

一応意思表示をしてから、俺はソファに座った。

俺の前に紅茶を置いて、そのまま隣に座った。そして自分の分のカップに口をつけた。

「・・・・・・・・・・・・・」

あぁ・・・・・・。語彙力のなかったことを後悔した。

「知らなかったわ」

虎郷から言葉を紡ぎ始めた。

「貴方の気持ち」

「・・・・・・そうか」

「気付いてあげられなかったことは、謝るわ」

「あ、いや・・・・・・」

先に謝られてしまった。

「・・・・・・でも、どうして貴方が怒っているのかは分からないの」

「あ・・・・・・っと・・・・・・」

さっきから俺はほとんど会話という会話をしていない。口から言葉が出てこないのだ。

「・・・・・・1ヵ月前に・・・・・・街でお前と一緒に男子が歩いていたって同級生から聞いたんだよ」

「・・・・・・」

「それで・・・・・・何というか・・・・・・やっぱ虎郷には虎郷の恋愛があるんだろうなって、納得しようとしたけど・・・・・・それでも何か、こう・・・・・・許せないというか・・・・・・さびしくなったというか・・・・・・よく分からないけれど、思っちゃって・・・・・・」

言葉になっているのかなっていないのか、俺には分からないが、

それでも話し続ける。
「それで、虎郷の前に立ったら・・・・・・分からなくなって・・・・・・。虎郷が誰かと付き合っているっていうのが・・・・・・嫌になったから・・・・・・いや」
いや違う。
そうじゃなくて。
「そんな風に嫉妬していた自分が小さいと思って・・・・・・最低だと思って・・・・・・その時に木好さんが入ってくるような気分になって・・・・・・それがまた嫌になった・・・・・・。だから、虎郷とはあんまり関わらないようにしたんだ」
「・・・・・・そう」
虎郷はそう言って、もう一度自分のカップに口をつけた。
「でも、今日、鉋さんに会ったんだ・・・・・・それで聞いた」
「・・・・・・あぁ・・・・・・それって」
「ああ。1ヵ月前に一緒に歩いていたのは、鉋さんだったんだろ？」
そう。

俺達から見たら、年齢差が有ると考える事が出来るが、傍から見ればそう見えるのも頷ける。
そういうことだったのだ。

「そんで・・・・・・今、謝ろうと思って、走って帰ってきたんだ」
そうだ。俺は謝ろうと思ったんだ。
「ごめん」
俺はようやくその言葉を言えた。先に謝られてしまったので、決まりは悪かったけれど。
「・・・・・・」
虎郷は黙って立ち上がると、キッチンの方へ向かっていった。
そして帰ってくると箱を持っていた。
「・・・・・・これ」

「あぁ・・・・・・・バレンタインの・・・・・・」
悲しいなぁ・・・・・・、やっぱりこの日は最高の日にはならない。
好きな人にもバレンタインのチョコしか貰えないのだから。
そう思っていると
「違うわ」
と虎郷は言った。
「え・・・・・・」
「そんなことしたら、貴方かわいそうじゃない。今日元さんからかなり前に聞いたのよ」
そう言って、その箱を両手持ちした。

「誕生日おめでとう」
・・・・・・そう。

俺がこの日を嫌いな理由は、これだ。
バレンタインの物として渡される。そして誕生日に貰ったそれらのお返しをしなくてはならない。
この日を祝ってくれるのは、家族だけだ。
知っているのは家族だけだと思っていた・・・・・・のに。

「あ」
頭に昨日の今日元さんが浮かんだ。
『楽しみしとけ』って・・・・・・これのことか・・・・・・。
何て格好いいことをしてくれるんだ。あの人は。
「？」
「・・・・・・虎郷、ありがとう」
「どういたしまして」

虎郷はそう言ってさらに
「紅茶冷めるわよ」
と言って、自分の分を飲み干した。
「あ、あぁ・・・・・・」
俺は自分のに手を伸ばした。
「・・・・・・」
そして、戻して、虎郷に向き直る。
「虎郷」
「・・・・・・？」

「好きです。付き合ってください」
そう言った。
その時。

「あ」
「お」
「はは」
「え」
４人が帰ってきた。
「・・・・・・！！」
「こんなシチュエーションに遭遇できるとは、運がよかったよ」
海馬はそう言って、買い物袋を食事用のテーブルの上に置いた。
「俺は自分の運の悪さを恨む・・・・・・」
ああ、最悪だ。
「よかったね、火水！」
音河はそう言って虎郷の横に座った。
「ええ」
「これで、何かいい感じの６人になりましたね！」
雅は嬉しそうに言った。
「響花・・・・・・。やっぱり、動けたんだ・・・・・・」

何故かやつれた様子の隼人はそう言ってから、同じように買い物袋を机の上に置いた。

「・・・・・・何でそんな買い物してんだ？」

「はぁ？今日が何の日か忘れたのかよ」

そう言って、海馬は俺を見た。

「お前の誕生日だろうが」

「え・・・・・・」

「やるよー、誕生会」

ああ。

俺は恵まれた環境に居る。

久しぶりに涙腺をノックされた。

こうして、色々有りはしたものの、俺達は更に結束を固めた。

そうそう。

２月１４日は、一生の最高の日になりました。

１２ー真実は『恋』ー（後書き）

第一章にありましたよね？真実は『愛』。

それをもじったんです。気付いていただけたでしょうか？

13 ―卒業―（前書き）

過去編終了後の話の最初です。

すなわち、ややこしい話です。

13ー卒業ー

それは突然だった。

3月に入り、高校入試が一週間後と迫っていた。

「まさか・・・・・・ここまで絶望的とは・・・・・・・」

隼人が俺と音河と雅と海馬を見た。

「彼氏が馬鹿というのは、何というか・・・・・・自分のことのようで悲しいわね」

「・・・・・・うるさいよ。何だよ、連立方程式って。こんなの習ってねーよ」

俺はそう言って歯向かう。

「まぁ、海馬君は最悪、適当にやってたら答えは合うみたいだけど・・・・・・」

「理論とか嫌なんだよ。俺は。まだ、記号問題のほうが楽だっての」

つーかてめーは記号は満点だろうが。

ずるいっつーの！

「雅くんも頭の回転は速いから、応用は何とかなるみたいだし・・・・・・。数学は公式を覚えて、英語は文法を覚えていこう。で、問題は君らだよ」

俺と音河を睨む。

「・・・・・・・ＯＫ。これからは、完全態勢だ。僕が響花を担当して、ヒスイ君は嘉島を担当してくれ」

「待てよ」

止める。

「俺は隼人が相手がいい」

「君の考えは分かっている。僕相手なら、わからなければすぐに聞

けばいいからだろう？」
・・・・・・ばれてましたか。
「君は精神的に追い詰められてなさすぎる。君はストレスで強くなる男だと信じているよ」
「いや、それは・・・・・・」
「君は精神的に追い詰められてなさすぎる。君はダメージで強くなる男だと信じているよ」
「俺はそんなサイヤ人的な男じゃない」
「君は精神的に追い詰められてなさすぎる。君はMだと信じているよ」
「死ね」
という会話を済ませて。

突然、海馬が吹っ飛んだ。
そして、そのまま壁にぶつかる。
「何だ！？」
「気にするな。一瞬だ」
男が居た。
「音速を感じろ」
男はそう呟くと、彼の速度に遅れてきたかのような風が窓を割りながら突っ込んできた。
突っ込んできた。
そう表現するに相応しい、弾丸のような連発の風。
「ぐ・・・！」
体を貫きはしないものの、ガスガンの連打されている痛みを感じる。
テーブルやソファーがずり動く。
「・・・・・・うむ、やはり気絶はしない」
男はそのまま、仁王立ちの姿勢になった。
「お前・・・・・・なんだ！？」

海馬は立ち上がって言った。
「『必然的偶然』はこんなところでも発動するのか・・・・・・。予想外には対応できないはずだが、こんなことまでまさか予測していたのか」
「！！」
知っている・・・・・・？
コイツは単に能力を使って、自分のために生きている人間じゃない！？
しかも、海馬のような新能力でさえも・・・・・・！！
「貴方は一体何なんですか・・・・・・？」
隼人が聞く。
「『希望の崩壊』だ」
彼はそういって俺を見る。
「うむ・・・・・・折角、気道閃には『キラー・ミラー』を授けたんだが・・・・・・意味が無かったか。まあ、記憶をなくす前に奪ったから、能力は０になっていたということだろう。しかし、それでもお前の力は計り知れないな、『残留思念』」
「！？」
残留思念・・・・・・それは、俺のアクターの日本語名だ・・・・・・。
いや、まて。
それより先に・・・・・・！
「キラー・ミラーって・・・・・・！？」
「ああ、お前らはアイツを知らないのか。アイツは元仲間のＸだ。あいつ自身の記憶の中には、俺達仲間は殺した事になっているから、あいつ自身を知っているのは俺達だけだろう」
淡々と男は話す。
「しかし、『超脳力』と『残留思念』がコンビを組むとは・・・・・・、それは最強になるだろうな。『残留思念』では出来ない推理を『超脳力』がして、戦闘方面を『残留思念』に任せると・・・・・・

」
虎郷が動いた。
そのまま、拳を突き出す。
「焦るな、『未来予想図』。俺の話を聞け。いや、聞くな。音速で理解しろ」
そう言って、またも男は消えるような速度で移動する。
「ん？ああ、そういえば『未来予想図』では無く、『悪夢の夢』だったな。いやそんなことはどうでもいいのか」
男は俺達の真ん中辺りに立った。わざわざ囲まれたのか・・・・・・。
「貴方の能力、見抜きました」
「ん？そうか、『赤い靴』は頭も言いのか。だから、『奇想天外予想外』なのだったな。いいだろう、聞いてやる」
男はそう言って雅を睨む。
「貴方の能力は音速です。単純にそれだけです」
「ああ、そう見えるのも当然だ。お前らには俺が分かっていないはずだからな」
まるで、雅がそう答えるのを知っているかのような速度でそう答えて笑う。
違うという事か・・・・・・・！？
「俺の能力は教えん。しかし、音速という概念はいいのかもしれんが・・・・・・しかし『感情と戦争の演奏』は、俺から何も感じていないはずだ。それはつまり、そういうことだ」
男はそう言ってから、
俺と肩を組む。
「！」
まただ。いつの間にか移動している。
「俺とお前は鏡だぜ。『残留思念』」
「鏡・・・・・・・！？」

「似て非なるものってことさ」
と言って、男はそこに招待状のような封筒を投げた。
「お前らを高校に招待する。それが俺達との戦いの始まりだ」
男はそう言って、また消えた。

ふと見てみると、机やソファーの位置も戻っており、窓も何事も無かったかのように戻り、俺達の体も元通りだった。

「な・・・・・・なんだったんだ・・・・・・」

「隼人どうする？」
「・・・・・・はっきり言って先が見えない戦いになるような気がする」
隼人はそう言って、ソファに座る。
「だな・・・・・・」
俺は頷いて、隼人の座っているソファーの端に座るか立つかの間ぐらいの姿勢で立つ。
「ですが、私はここで諦めたくありません」
「それに向こうから諦めるとも思えねーぜ？」
雅はソファの前に座り込み、海馬はソファの背もたれに背中を預けて立つ。
「どうするの？隼人」
いいながら、音河が隼人の横に座る。
「罠かもしれないけれど・・・・・・どうする？」
虎郷は言って俺を背後に置いて、俺と同じ場所に座る。

「決まっている」
隼人は顔を上げた。
「絶対に彼に追いついてみせる。彼が一体何者か・・・・・・敵か

どうかも分からないけど、それでも絶対負けない」

さぁ、始めていかなければならない。

これからの未来を。

１４ー お返しー（前書き）

３月１４日の話。

１４ー お返しー

さて。
決まりが悪くて申し訳ないが、この後の話をさせてもらう。
よく分からない形で、高校への進学の入試をパスする事になった俺達は、暇を持て余していた。

ので。
俺達は作戦を立てた。

「今日が決行の日だ」
学校を女子達に内緒で無断欠席した俺は3階の部屋でそう言った。
「何とか間に合ったね」
隼人はほうき類で埃を集めながら言った。
「それにしても粋な計らいだな、嘉島」
海馬はいくつかの椅子を並べていく。
「まぁたまにはそういうこともしないとな」
「うぉ！この椅子リクライニングじゃん」
「まぁね。旧王城グループからもらえそうなものを奪ってきたんだよ」
と適当に会話しながら準備をしておく。

ガチャッ。
という静かな音を聞いた。
「おい！女子は１０時まで遊んでくるんじゃなかったのかよ！」
「まずい！予定より帰ってくるのが早かった！」
隼人はそう言った。
「こちらの素行がばれたら大変だな」
海馬がそういうので

「嘘をつくのが上手い奴がいこう」
と提案すると、
「・・・・・・隼人だな」
「タダシ君」
２人が争い始めた。初めから初ターンを放棄させてもらっている俺。

下がざわつき始めた。
ヤバイな・・・・・・。
「俺が行く」
俺はそう言って勝手に出て行った。

そして、そのまま階段から降り立つ。
「よ」
「あ、居た」
虎郷と正面衝突しかけた。
「何をしていたの？」
「２階の広い部屋で乱闘中だったけど、今治まったところ」
「そう」
虎郷は淡白にそういうと、リビングのほうへ歩いていった。
「あ、今何時くらい？」
「１０時前」
そう言って歩いていく。
「・・・・・・何怒ってんだよ」
「別に怒ってないわよ」
「分かるよ、俺には」
そのままリビングに入る。
・・・・・・。
何だ、この不穏な空気は。
女子が３人とも不機嫌だ。

「おい・・・・・・何怒ってんだよ」
「じゃあ聞くけど」
虎郷は振り向いて俺に詰め寄る。
「何か無いの？」
「な・・・・・・何か？」
「今日は何日か知ってる？」
「・・・・・・えっと？」
「１４日よ」
・・・・・・うん。
「あー・・・・・・、えっと・・・・・・」
確認が取れてないから勝手にするわけにも行かないし・・・・・・・・。
と考えている間に音河と雅もこちらに迫ってくる。
ああ、ヤバイ。
「嘉島」
後ろから声がする。
「海馬・・・・・・」
「いけるぞ」
「分かった」
そう言って俺はリビングの方から出る。

「来い」
俺は虎郷の手を引っ張るように取った。
「あ」
虎郷はそう声を出すと、何も言わずについてきた。

「雅、行こうぜ」
海馬はそういうと、雅の横に並んだ。

３階の階段を昇りきると、まるで屋上へ続くように扉があった。
「ここ。今日、男子だけで掃除したんだよ。学校休んでな。そして準備した」
「準備？」
俺は虎郷に返事をせずに扉を開けた。

そして隼人の横に並ぶ。海馬も来る。
「コレが、俺達のホワイトデーのお返しだ」
３人にそう言った。
それが聞こえていたかは定かではない。
女子達は天を仰いで止まっていた。
そりゃそうだ。これを見て感激しないものは居ないはずだ。

天窓。
それが３階だった。
都会の街中では絶対に気付く事の出来ない星と月の美しさ。
２つが織り成す幻想的な自然美は、王城グループ本社があったような地区では普通は見られない。
しかし、ここは閑静な住宅街に作られた、天窓のある家。

「さて、座りなよ」
隼人はそう促して、俺の様にではなく紳士的に音河の手を取った。
うーむ・・・・・・。恋愛経験もそういう作法も分かっていない俺には出来ない芸当だ。
と思いながらも虎郷を椅子へと促す。

「きれいですね・・・・・・」

「お前の方が（略）だ」
「大事なところ略さないで下さい」
海馬と雅はふざけながらその空を見る。

「これでお返しになったのかな？」
「いーんじゃない？少なくとも私は」
「ならよかった」
隼人と音河は静かにその空を見上げる。

「てか、こんなことで怒ってたのかよ」
「怒ってないわよ」
「・・・・・・」
あからさまに嘘をつきやがった。
と、心で悪態をつきながらもそんなことも忘れるような美しい空を見上げた。

心が表れるようなその空を見上げて、それぞれが何を思っていたのかは分からないけど。
自分の大切な人を想う気持ちがそこにあったことだけは、俺でも容易に想像できた。
結局、お互いにその手を離すことなく、その日を終えることになったのだった。

15 ―※―

その日、学校では卒業式があった。
のは、まあ私にはどうでもよかった。

正先輩に助けてもらってから、学校で、私が告白される事は無くなった。彼が先輩の存在を皆に教えたのだろう。
女子や、親しい男子に正先輩について聞かれたけれど、そこまで嫌な気分にはならなかったし、写真を見せると「格好いい」と評判だった。自分のことのように嬉しかった。
帰り道は珍しく1人だった。というのも、これから火水さんと響花さんと一緒にショッピングだから。
3月14日。
今日はホワイトデーだった。
学校の登校中に
「彼ら・・・・・・返す気あるのかしら？」
「いやー・・・・・・最悪忘れてるよね・・・・・・」
と2人は話していた。
どうしてだろう、と思った。
自分の好きな人くらいは信じないのだろうか。
少なくとも正先輩は女性にそんな態度は取らない。いつでも一生懸命だ。
私以外にも同じ態度なのは、何故か嫌だけれど、それが男子だというのだから仕方が無い。

私の願いは「正先輩と一緒に居たかった」という願いだった。
初めて正先輩を見たのは、海馬家のパーティーだった。
私が中学1年生の時だったと思う。まだ出来たばかりの会社だったけれど、資金繰りがとてもよくて一気に大企業に進歩したらしい。

私の家は老舗の料理店なので、そこに御呼ばれしたらしい。
私は普段そういうパーティーには出席しないのだが、ダンスパーティーという事もあり、出る事にした。別にダンスなら何でも出来たから。
特に面白くも無いと思っていた。
その時。
「アンタ誰」
と声を掛けられた。
「・・・・・・」
「見たところ同級生くらいか」
「・・・・・・」
「あー・・・・・・一応返事してくれるか？」
「常盤雅です」
「雅か。風情があるな・・・・・・。ダンスとか得意なほうか？」
「貴方は？」
「ああ、俺は海馬正だ。よろしくな」
一目惚れではなかった。
むしろ第一印象は嫌いだった。
青い髪の毛で、手錠のペンダント。
ふざけている。そう思った。
「踊るか？」
「いえ」
「よし、行こう」
「は？」
先輩はペンダントを外して、髪の毛と服装を整える。
そして右手を出した。
「御手をどうぞ」
瞬間的に紳士になった。身長がそこらの男子より大きいことにも気付いて、男らしく見えた。
それからのダンスも長かったはずの時間を短く感じた。

その後は、２人で紅茶を飲んでいた。
「んー、あんまり作法を知らなかったけれど、案外上手くできたな」
「知らなかったんですか？」
「ああ、俺は運がいいから、何でも勘で出来るんだよ」
「勘ですか・・・・・・」
「てか、何で敬語なんだよ」
「え」
突然の質問に驚く。
「お前、同級生なんだろ？じゃ、敬語なんか使うなって」
「昔からの癖ですから」
「昔からって・・・・・・」
「うちではそういう仕来りが厳しくて・・・・・・小学校に入るときにはそういう癖が身についていたんです」
「ああ、そう・・・・・・」
先輩はそう言って、その場は落ち着いた。
その後、
「連絡先教えてくれよ」
と言われた。
「今度は別の日に会おうぜ。こういう張り詰めた空間以外の場所でさ」
「・・・・・・はい！」
で。
私はそのまま抱きついた。
周りには誰も居なかったが、先輩は驚いて、そのまま倒れた。
「お前・・・・・・想定外だよ・・・・・・」
そう呟いた。
それから、何度か会うことがあり、私はそのときに「正先輩と一緒に居たい」という願いが増幅していった。
それはいつからか「一生一緒に居たい」になった。

いつまでも、一緒に居たい。来世もその次も。
輪廻のごとく。いつまでも巡(めぐ)り続けたい。
廻(めぐ)って、回(めぐ)って。
いつまでもこの世界を回り続けていたいと。

「聞いてる？雅」
響花さんがそう言った。
「え、あ、はい」
いつの間に呼称が呼び捨てになったのかは分からないけれど、友達に近づいてきたような気がする。
「だから、あの人たちは返す気はあるのかって」
「はぁ・・・・・・・」
「雅はどう思うの？」
火水さんがそう聞く。
「・・・・・・自分の恋人くらい、信じてみたらどうですか？」
「「え・・・・・・」」
「私は信じていますから」
私はそう言った。
満面の笑みだったと思う。
私は玄関の扉を開けた。

１５ー※ー（後書き）

１４話の帰ってくる直前ですよ。

題名は、『こめじるし』⇒『繰り返す』⇒『巡る』という意味です。

０１ー始まり始まり、この世界ー（前書き）

紡がれ行くあの過去。

移行開始。

０１ー始まり始まり、この世界ー

その日は終業式だったらしい。
中学３年生の１学期の終わりだった。明日から夏休みでクラスの皆はテンションの上がり方が激しい。
「らしい」と使ってしまうくらいに、俺にとっては学校は既に退屈を極めていた。親しい友人も居なかったため、まぁ結局言ってしまえば、どうでもよかった。

終業式が終わり、クラスで先生の話を聞いて、夏休みの宿題のプリントやらをもらって、ＨＲを終えた。後、３年生で受験生だから、今日・・・・・・７月２０日から１０日程休み、その後また学校でしばらく補習。そして８月２０からまた１０日程休みだそうだ。
「嘉島・・・・・・だったか？」
と声を掛けられる。
えっと・・・・・・青い髪の毛で、手錠のペンダント。こんな奇抜な奴は・・・・・・そうだ。海馬だ。
「何？」
「これからカラオケ行くけど来るか？」
彼はそう言って僕を誘う。人当たりがよく、誰にでも優しく出来る。
後、席替えしてから、一度も１番前の席になったことが無かったり、ゴールを見ずにバスケのフリースローが入ったり、今まで一度もサッカーのＰＫで外した事が無いとか・・・・・・。
まぁ凄い奴なのだ。
が。
「・・・・・・」
その海馬以外の数人が怪訝そうな顔で俺を見ている。
まぁ、慣れた。

って思えるような、俺はそんな人間なのだから別に気にしない。
ま、海馬くらいの奴じゃないと俺を受け入れてはくれないだろう。
「いや、今日はいいよ」
俺はそう言って断った。
「ん。そうか？じゃ、また補習中にな」
海馬は尚もそう言ってくれた。

俺は家に帰って、荷物を置いて、別の荷物を持ってからまた家を出た。
向かう先は病院である。

「・・・・・・」
俺は病院についていつも通りエントランスへ。
「あ、奏明君。今日も来てくれたんだね」
「はい。いつもお世話になります」
「気にしなくていいよ。あ、今日からお姉さんの部屋の隣、新しい患者さんが入ったから」
「はい、わかりました」
と、いつのまにか常連になってしまった俺はそのまま廊下を歩く。

どうも俺の姉は絶望的らしい。
生きている事が奇跡的らしい。
何なんだ医者は。何なんだ神様は。
どうして絶望と希望を同じ場所に置こうとするんだ。
とまぁ誰に言うでもなく、そんな仕方の無い事を考えながら俺は姉の病室の扉を開けた。
姉を媒体に幾つもの回線が伸びている。そういう印象を受けるよ

うな姿だった。植物状態というのだろうか。こういうのを。姉は人工呼吸器とかそういったものを必要とするほどの重傷だったのだ。
俺はそんな姉の手を両手で握る。

コレが俺と姉さんとの唯一の会話方法なのだ。

「あれ？奏明は今日は学校無かったっけ？」
「あるよ。全然。終わったんだよ」
「ああ、そう。ゴメンね。この状態だと曜日の感覚無くてさ」
「いや、響が気にする事じゃないよ。今日は終業式だったから、曜日の感覚があっても分からなかったと思うしね」
「そう・・・・・・」
「あ、そうだ。響也と奏から１つずつ伝言だよ」
「ん？何？」
「響也が『響の楽器どこだっけ』と奏が『伝説の肉じゃがのレシピ』だってさ」
「そう。じゃあ、今から教えるから奏明覚えてね」
「おうよ」
それから俺はたわいも無い話をして、時間を潰した。

そして、夜になってから病室を出るとほぼ同時に隣の部屋から少年が出てきた。
「・・・・・・」
顔には出さないようにしたが、俺は思う。

何だコイツ。
髪の毛は金髪、眼鏡を掛けている。ファッション云々以前の問題で、ジャージを着ているのにも拘らず、それすらも似合ってしまうほどの美男子だ。
っていうかあのジャージ・・・・・・うちの学校の指定体操服じ

ゃん・・・・・・。
何だコイツ・・・・・・マジで。おい。
「・・・・・・何？」
「いや・・・・・・」
「そ」
そう言って、少年は過ぎ去っていった。
誰だろう・・・・・・と思って、隣の病室のプレートを見る。
「音河響花・・・・・？」
って確か響の弟子だったような・・・・・。
しかし、他の情報を思い出せない。弟子って何だ。弟子って。
と思ってからもう1度少年の方を見る。
「アイツはつまり音河ってことか・・・・・？」
音河・・・・・？そんな奴いたかな・・・・・？
まあいいや。

とそんな風に思って俺もそのまま家へと帰ることにした。

思えばこれが俺と隼人の最初の出会いだったのだ。

02ー同級生だよー

次の日の7月21日の朝、俺は宿題を始めた。
夏休みの宿題は、さっさと終わらせることを目標にしている。出来るだけ7月中に。別に友達と遊ぶような約束は無いけれど、どうせやることもないのだから、それが有意義な時間の潰し方ではないかと思うのである。
そんなとき、
「兄ちゃん」
小学6年の妹こと、奏(かなで)がそう言って部屋に入ってきた。僕はシスコンではないが、そういう観点は置いておいて、かわいい妹である。
「何？」
しかし、悪いタイミングで、しかもノックもなしに入ってきたので自然不機嫌な口調になる。
「昨日、お姉ちゃんから聞いてきた？」
「ああ・・・・・・うん、聞いてきたよ。あれは・・・・・・」
と、それからレシピについて説明しておいた。
「響也(きょうや)は？」
「さぁ？朝早くから出て行って帰ってきてないよ」
奏はそれだけ言うと、部屋から出て行った。
俺は少し悩んでから、まぁいいかという結論に達したため、そのまま宿題を進めることにした。

その日の夜にいつもどおりに俺は家を出る。
そして、昨日とは違い自転車もないので、電車を使って病院へ向かうことにした。
電車は苦手だ。
人が多いので情報量が多すぎて、パンクしてしまいそうだ。

「あの」
「え」
隣から声をかけられた。
「大丈夫かしら」
髪の毛が腰の辺りまであるロングヘアーを結ぶでもなくそのまま伸ばしてある少女。その長さを髪の毛をきれいに手入れしているようで、美しさを感じる。
「・・・・・何が？」
「顔色が悪いわ。何か有ったのかしら？」
何だコイツは。
何で一般人である俺にここまで話しかけてくるんだ。
「いや、大丈夫だ。ありがとう」
「そう。ならいいわ」
そういうと少女は、そのまま前を見て立っていた。
コイツは一体何なんだ・・・・・？

と思ったときには、病院の最寄の駅に着いたので、その少女に一礼してからそのまま電車を出た。
「・・・・・それにしても」
本当に一体なんだったんだろうか。
人の顔色でも見て生きてきたのだろうか。後、少しかわいかった。

「さて」
俺は1度そう仕切りなおしてから、駅を出て病院に向かった。

昨日と同じように病室に入って、荷物を置いて。
それから言う。

「お前何だよ」
丸椅子に座っているその金髪男に向かって俺は言う。

「昨日すれ違った少年だよ」
「だから何でここに居るのかって聞いてんだ」
「ちょっと興味深い反応を感じたからね」
そう言って立ち上がる。

「王城隼人。同級生だよ」
何だコイツは。

03ー『アクター』って言うんだよー

「同級生・・・・・・・!?」
こんな奴居たか・・・・・・・?
「君はアレだろ?嘉島・・・・・・・ソウメイ」
「はぁ?」
何言ってんだ?コイツ。
「俺は嘉島奏明だ」
「・・・・・・ああ、アレは「かなあき」って読むのか。いいや、ソウメイ君で」
・・・・・・。
今日は変な奴によく会う。
「で、何か用か」
「君は自分が何か分かるか?」
「・・・・・・」
突然何を言い出すんだ、コイツは。
「俺は嘉島だ」
「そっちじゃねーよ。アホか」
そう言って隼人は笑った。
「君は自分の異常性に気付いているだろう?」
「・・・・・・」
「いや、異能の力と言うべきか?それとも超能力?まぁそんなのはどうでもいいのさ。結局のところ、何かといえばそれは『異常』なんだよ」
「何が言いたい」
「君はおかしい。だから協力して欲しい」
何なんだ・・・・・・。

一体、何が起こっているんだ・・・・・・・俺の身の回りで。
「リメンバー・リメイン」
「・・・・・・？」
「君の能力の原型だよ。よく分からないけど、君にはよく分からない何かが追加されているみたいだね」
何か・・・・・・あぁ「タケル」のことか。
「自らの身体で人の心を読む事の出来る能力・・・・・・。正確にはそこに存在する空気の『記憶』から人の心を読むらしいけれど、そんな事はどうでもいい」
どうでもいいなら言うな。
「僕が必要なのはその能力の深部に有るであろう、能力・・・・・・『ロック』だ」
「『ロック』・・・・・・？」
「人が無意識に強制的に思考を中断する事で消えてしまったり、絶対にばれたくない事に関して全力で隠したり、忘れようとしている記憶や思考・・・・・・それを見つける事の出来る能力だよ」
「ちょ・・・・・・ちょっと待てよ」
俺はコイツの話を止める。
「お前・・・・・・何なんだよ・・・・・・。確かに俺は普通じゃないけど・・・・・・それは人の心を読んで、情報を得るだけの話で・・・・・・俺はお前が言うような存在じゃないんだよ！」
「そうかい？君は凄い存在だと思うぜ？滅多に居ないタイプの人間だ」
「それに・・・・・・お前の言っていることをそのまま信用する事も出来ない！いきなり超能力だのなんだの言われても・・・・・・俺はそんなヒーローみたいな人間じゃなくて――」
「ヒーロー？笑うねぇ」
そう言って王城は鼻で笑う。
「何か勘違いしてないか？僕らはただの人間だったのに、演じようとしているんだぜ？この能力を」

「え、演じる？」
「僕らがヒーローなわけないじゃん。僕らは助けられたんだぜ？君で言えば、『リメンバー・リメイン』という能力に、ね」
「何が・・・・・・言いたいんだよ」
俺のセリフに王城は笑う。
「僕らみたいなのが、人を助けられるわけねーだろ？」
「・・・・・・！！」
「僕らは卑怯にも、願ったんだよ。こういう力に。皆はそんなものにも頼らずに、努力しているというのにも拘わらず、だ。そんな僕らが人を助ける権利があると、君は本当に思うのかい？君だって心当たりの１つや２つあるだろ？自分がこうなってしまったことの理由くらいは」
「・・・・・・」
「僕らは他人を助けられない。助けているなんて思っちゃならない。僕らは『当然のことをしている』と思わなくちゃならないのさ」
とそこまで言って、王城は「ともかく」と続けた。
「確かに君が僕を信用できない事は分かったよ。そりゃあそうだよね。僕の説明もしてないのに信用しろってのも無理な話だ」
そしてようやく丸椅子から立ち上がって、言った。
「僕は『シンキング・キング』。そしてこういう能力を『アクター』って言うんだよ」

０４ー誰かを頼るなんて最低さー

家に帰ってから、俺はベッドに横になった。
「・・・・・・」
今日は本当に、何て日なんだろう。

「あ、アクター？」
「俳優って意味。自分を演じているってことさ」
「演じる・・・・・・」
それは――。
それは俺がしていることだ。
「さっきもいっただろう？僕らは人を助ける『権利』が無いって。そりゃあそうさ。真面目に生きている人間に『演じている』僕らが何をしてあげる（・・・）のさ。僕らは誰かを助けられない。助けているなんて思っちゃならない。そして助けられる事も無い。だって、僕らは助かるためにこうなったんだから、誰かを頼るなんて最低さ」
「・・・・・・お前は・・・・・・これの何を知っているんだ」
「僕は何も知らない。でも、何でも知っている」
「何言って――」
「僕は僕が知らない事を知っているんだよ。無知の知って奴だ。そして、僕の力ならばそれを追求できる。それが今の僕をつくっているのさ」
王城はそう言って笑うと、
「じゃ、今日はこれでいいや。また明日ね」
と言って病室の扉に手を掛けた。
「おい、お前――」
「お前じゃない。隼人だ。王城隼人」

さらにそう言ってから病室を後にした。

「な・・・・・・何なんだ・・・・・・・！？」

俺の周りで一体何が始まろうとしているんだ・・・・・・。

俺はいつの間にか、入ってはいけない渦に巻き込まれているんじゃないのか。

と。

思ってから響を見る。

「・・・・・・」

不安定な心で何かを理解できるはずも無いので。

俺はそのまま響には触れずに、病室を出た。

電車に乗らずに歩いて帰ることにした。街中は今は8時くらいだが、まだ日が少しだけ残っているので、そんなに暗いとは感じない。

「・・・・・・」

アクター。演じる。もう1人の俺。リメンバー・リメイン・・・・・・。

ダメだ・・・・・・。ただでさえ、いつも混沌としている情報が脳内を蔓延(はびこ)っているというのに、新たな情報を詰め込まれても理解できるわけが無い。さらに心も不安定なのだから・・・・・・。

ドン、と。

「・・・・・・」

俺はしりもちをついた。

どうも男子高校生とぶつかったらしい。

「・・・・・・前見て歩け、ボケ」

周りに2人ほどの連れも居る。

「・・・・・・」

俺は黙って立ち上がる。

そしてそのまま通り過ぎようとする。

が。
「おい、てめぇ謝れよ！」
「すみません」
「で、済むと思ってんのか！！」
街中である事にも躊躇することなく、その男子高校生は俺の頬に向かって拳を突き出す。
あ、そう。
俺は自分の皮膚を左手で触れて、厚くする。
そして拳を受けて、わざとらしく吹っ飛んだ。
こういうときは被害者を演じるが吉だ。
周りの人の視線で、俺がかかわってないことは明らかになるはず――。
「てめぇら何してんだぁ！！」
謎のリーゼントが急に突入してきて、高校生を一気に倒す。
「げぇ！暴走族！？」
「やべえ、逃げろ！」
高校生はそう言って叫んで逃げていく。
「おい、大丈夫かよ後輩」
「え・・・・・・」
「お前、榛2だろ？今、1学期が終わっている中学はそんくらいだからな」
「はい・・・・・・」
「立てるか？」
「大丈夫です」
俺はそう言って立ち上がった。
「さて、警察が来る前に帰るぜ、俺は」
「は・・・・・・はぁ」
「じゃ、また会うかもな。後輩」
そう言うと、靴にエンジンでもついているのではないかという速

度で走っていった。

俺も警察官に何か聞かれるのは避けたかったので、出来るだけ早めに消え去る事にした。

そして、走って家に帰って、ベッドに寝たと。

「今日は人によく会う・・・・・・」

美人の中学生に会ったり、何か言い出す同級生に会ったり、高校生に殴られそうになったり、謎のリーゼントに出会ったり・・・・・・。

意味の分からない1日だったと感じてから目を瞑った

０５ー『青天の霹靂』ー（前書き）

誰かには誰かにしかできないことがある。

僕には僕にしかできないことがある。君には君にしかできないことがある。

何かできることをしよう。誰かのために。

０５ー『青天の霹靂』ー

『いいか？俺は、お前に全てを託したといっても過言じゃないんだよ』
「それくらい知っているよ。僕は、そのためにも生きなければならない」
『分かってないな・・・・・・。いいか？俺は俺に出来ない事をお前にやって欲しいんだよ』
「お前に出来ない事なんてないだろ？」
『今は出来ない。だから、今こうしているんだろ？』
「それは・・・・・・」
『ほら、面白い流れがあるじゃねえか。巻き込まれろよ』
「面白いって――」
『聞こえてきたぜ？始まりの警鐘だ』

目が覚めたのは、３時ごろだった。
「！」
・・・・・・なんだよ・・・・・・。
でも、言われたからには仕方が無いか。
俺は耳を澄ます。
・・・・・・パトカーが家の前を通り過ぎていった。その後ろをついていくように救急車も通り過ぎていく。
「何かあったのか・・・・・・？」
俺は服を着替えてから、自分の部屋を出る。それから、冷蔵庫か

ら昨日の夕飯の残り物を取り出して、電子レンジに入れてから、テレビをつけた。
・・・・・・。
番組が終わっているところがほとんどだが、緊急でニュースをしているところもある。
話が前後したり、その危険性やらで専門家がうじゃうじゃ言っているので、時間が掛かりそうだ。
なので、話を簡単にまとめると。

昨日、いたずらとしか取れないような脅迫文を警察に送りつけてきた『何者』かが、実際に事件を起こしたらしい。
その脅迫文の内容は、
『中央街の中に光を落とす。その時死者は光を崇めるようにひれ伏す』
だそうだ。
何が言いたいのかも分からなかった警察官は、それでも中央街に数人を置いた。しかし、事件は思ったよりもでかいものだった。
空から、雷が落ちてきたそうだ。それも天気の良い夜空から。

「・・・・・・」
俺は早めの朝食を取ってから、家を出た。
そして中央街に向かう。

そこにはよくドラマで見る、「ＫＥＥＰ　ＯＵＴ」と書かれた黄色いテープが張られていた。既にそういう対策はバッチリのようだ。
人ごみの流れは、それらに飽きて去っていく人や野次馬として参上した人などが往来していた。
「・・・・・・」
何だよ、案外あっけないもんだな。

ただの災害じゃないのか？
と、『思っている』人々の声を聞く。
・・・・・・違う。
晴れた空からは雷は落ちないはずだ。そんくらい知っているだろ？
それに、こんな高い建物や避雷針が乱立している街中に、どうやったら雷が落ちるんだ？

「『青天の霹靂』」
「・・・・・・！？」
隣でアイツが言う。
「アクターだね・・・・・・・」
「王城・・・・・・」
「分かるかい？何かを願って手に入れた力をこうして悪用する奴らも居るのさ」
「・・・・・・なるほどな」
願いにおぼれた人間。煩悩を制御していない人間。欲にまみれた人間。
最低な人間。
そう。
低俗な人間達の末路だ。
「行こう」
王城はそう言って俺に向かって笑った。
「どこに？」
「調査だよ」
「どうやって」
「まずは、外側から調査する。そしていずれ、開放されるのを待ってからこの辺を調査する。常套手段だろ？」
「てか、お前、そんなことできるのかよ」
「出来るに決まっているだろ？僕は探偵だからね」
そう言って王城は笑った。

ちょっとまて。
それには俺も協力するのか！？

０６ー僕に知らないことは無いー

別に義務は無いけれど、面白そうだと思った。
それにここで逃げても、王城はすぐにでも俺を捕まえて、協力させようとするだろう。
まぁ、面白そうな物語になりそうだ。探偵の真似事なんて初めてだけれど。

「正式名称、サンダー・ボルト」
王城はそう言いながら事件のあった中央街の周囲を歩く。
「日本語名ってのが、存在してね・・・・・・。それが言いえて妙さ。『青天の霹靂』だよ」
「晴れた日に空から雷が降るようなことを言い表す語・・・・・・だな。なるほど」
「でも恐らくそれだけではなさそうだよ」
「それだけじゃ・・・・・・ない？」
俺は王城の言葉を反復するように訊く。
「能力者が１人だけじゃない可能性・・・・・・或いは、能力が１つではない可能性だね」
「どういうことだ？」
「一応、警察官たちの厳戒って程ではないけれど態勢が捕られていたんだぜ？そんな中、誰にも気付かれずにそんな能力を発生できるかな？」
「そうか・・・・・・雷を落とすんだから、それなりの危険性はあるよな・・・・・・」
「それに『サンダー・ボルト』は、雷を自らの体から発生し、それを空に送り込み、それが地面に落ちる。放物線のような動きをしてから地面に落ちてくるのさ。だから、雷を自らの体から発生させるような奴が居たら目立つさ」

そう言って王城は、歩き続ける。
「でも、能力者が1人じゃないっていうのは？」
「ステルス・アーマー」
またも突然そう言う。
「別名を『透明人間』だろう。似ているものに『見えざる影』という事も有るんだけれど、これは消えるのではなく、他のものに意識を反らさせる力だ。現実に消えているわけではない・・・・・・」
と、そこでハッとしたように、
「話がそれたね」
と続けてから、話を戻した。
「『ステルス・アーマー』の凄いところは、自分だけでなく他人に能力を付与できる点だよ」
「つまり、他人を消せるってことか」
「そういうこと」
「・・・・・・じゃあ、能力を2つ持つっていうのは？そんな事がありえるのか？」
「事例はある。理由も方法も分からないけれど」
そこで、王城はベンチを見つけてそこに座った。俺もその横に座る。
「その流れで言うと、『サンダー・ボルト』と『ステルス・アーマー』の2つが同時に存在している人間ってことか・・・・・・」
「の可能性もあるってこと」
王城はそう言ってから空を見上げる。
「ふむ・・・・・・。夜の間に開放される事は予想通り無いな。また、後でもう一度行ってみよう。恐らく、警察もただの事故として処理するだろうから、普通に街中を歩く事は可能だと思うよ」
「あっそ。俺は協力しないからな」
「いや、君は来ると確信しているよ」
「勝手に確信するな」
俺はそう言ってから立ち上がった。

「俺は寝る。家で」
「そうかい。ところで学校の宿題は終わったのかい？」
「終わってない。今日中には終わる」
「僕はもう終わらせたよ。あのくらい1日で終わらせたまえよ」
「自由研究はどうしたんだよ」
「僕に知らない事は無い。だから、どんなものでも既存の情報があれば研究なんかする必要は無いのさ」
そして王城も立ち上がり、俺より先にその場を去る。
「じゃ、また後で」
と言って。

俺は協力しないと言ったのにも拘わらず、それを気にも留めていなかった。
「・・・・・・」
それにしても眠い。1度帰って寝ることにしよう。そして昼におきてから、宿題をしよう。
そう思ってから、俺もその場を去った。

「！」

ピシャァ！

と。
俺の目の前に雷が落ちた。

０６ー僕に知らないことは無いー（後書き）

ちなみに。

本来なら、雷が落ちたのを確認してから音が聴こえるような状況なので、ピシャァ！っていう音は彼には聴こえてないはずですが、まぁ補正ってことで。

07ー助けられないー

目が覚めると、俺は病院に居た。

「・・・・・・」

「目が覚めたか」

そこには響也が居た。

「お前、街外れで倒れてたらしいぞ」

「あぁ・・・・・・」

「まぁ今更心配なんかしないけど、母さんには迷惑掛けるなよ。兄さんも世話しきれないから」

「悪いな、響也」

俺はそう言って、ベッドから起き上がる。

「何処かへ行くのか？」

「俺が倒れた場所まで」

「ああ、そうか。院長さんが言うには、どうして倒れたのか分からないけど、心配停止状態だったらしいから気をつけろよ」

「分かってる」

「行ってらっしゃい。勝手に退院したって伝えておくな」

「ああ」

俺はそう言ってから、病室を出た。

そして、閉まっていく扉を背中に

「いつも悪いな・・・・・・」

と伝えた。

「いいよ」

響也がそう答えると同時に病室の扉が閉じた。

病院を出てから走った。

俺の全力疾走なんて高がしれているかも知れないし、今更急いだ

ところで意味は無いだろうけれど、それでも走る。
太陽は既に昇りきっており、時間的にはまだ昼が来ていないだけだろう。体感（或いは腹）時計からして１１時だろうか。
長々と気絶していたものだな。
まずは走りながら現状確認。
服は変わっていないし怪我も見つかっていない。しかし心配停止になった。
それはつまり、俺に雷自体は落ちていない。
ではショックで心配停止という事か？
いや、それは無い。俺に限ってそれはありえない。つまり――。

つまり、雷が落ちてきてそれに目を奪われている間に後ろから殴られたという事か。心配停止は恐らく、『タケル』の行動だろう。あいつが俺を心配して、死んだように見せかけたということだ。
閑話休題。
透明人間にして雷を持つもの。
今回の犯人である確率が非常に高い。
だったら、これは俺は被害者だ。
もうやるしかないな・・・・・。

しばらく走って、ようやく俺が倒れた場所についた。
雷が落ちた形跡として、そこには焦げたような跡がある。
超至近距離で俺の目の前に落ちてきたのにも拘わらず、俺にはヒットしていないところから考えて、これはただの雷ではないという事が容易に分かる。
人はまばらで、それを見ていた人からすれば、俺に雷が当りショック死。或いは、それを見て驚いて心配停止だろう。

「どうでもいいか」
人の気持ちなんて考える必要は無い。
「・・・・・・」
俺が狙われた理由を考える。当然、それは俺がこの事件に首を突っ込み、答えに近いところまで忍び寄った事。つまり、王城と俺の見解を聞いていたということだろう。ということは必然的事実が存在する。

王城も同じ目にあっているということ。

「・・・・・・さて」
アイツは家の方向に向かって帰っていったのだろうか？いや、アイツの事だから捜査をしているに違いない。となればまだこの周辺をうろついていたのだろう。
わざわざアイツを助けてやる義理や人情は存在しないわけだが――いや。

助けられないのか。

だから、俺はアイツを見に行くに過ぎないのだ。
俺はアイツの生死を確認するためにまた走り始めた。

０８ー自嘲にも似てー

「何で生きてんだ」
「何で残念そうに言う？」
俺は王城と遭遇した。
王城の目の前には俺のときと同じような焼け焦げたような後が見受けられる。
そこは、街の中心を軸に、俺が襲撃された場所とは点対称の位置にあった。
もう日は照っていた。しかし、事件は丁度先ほど起きたらしい。
「向こうが僕らを襲撃する事は分かっていたからね。まずは見つからないように逃げ続けて、昼になるのを待った。それから、あからさまに登場したのさ」
「何で昼まで待ったんだよ」
「目撃者を減らすためさ」
「減らす？」
増やすならまだしも、減らしてどうするというのだろうか。
「いいかい？僕らが事件の調査をするためには、あの中心街で起きた事件は『事故』として警察に処理してもらわなくちゃならないのさ。じゃないと、僕らが底に近づくのは無理だからね」
「そりゃ・・・・・・そうだな」
「だから、間違っても『晴れた日に雷が落ちてきた』なんてことを常識にさせちゃならない。夜だったら、雷が落ちてきたら目撃されやすいけれど、日中雷が落ちても見えにくいだろうから。人があまりいない、町外れで事件を起こさせたのもそういう理由からだよ」
なるほど・・・・・・。案外考えているらしい。
「・・・・・・でも、どうして怪我をしてないんだ？」
アイツは雷を落としてすぐに後ろから殴りかかってきた。例えそれを避けたとしてもすぐに攻撃がくるだろう。見えない敵を相手に

して『無傷』というのもありえない。
「ああ、それは別の事実があったんだよ」
「別の事実？」
王城は俺の発言に、待ってましたと言わんばかりに指を出す。
「アイツは、ステルス・アーマーを持っていないらしい。その証拠に、僕は犯人の攻撃を避けた瞬間に、犯人が逃げ去っていくのを見たよ」
「そんな・・・・・・」
じゃあ、どうやって――。
「そう、ここで新たな疑問だね」
俺の心を見透かしたのか、王城はそう言って笑う。
「どうやって誰にも見られずに落雷を落とせたのか」
「・・・・・・」
そう。犯人が何らかの形で『ステルス・アーマー』を使用、或いは付与されていることを前提に俺達は事件を追っていた。
しかし・・・・・・。
向こうがそういうスキルを持たずに、そんなことをする方法があるのだろうか。
「行こうか」
王城はそう言ってから、街の中に向かって歩いていった。俺も自然にその後を追う。
「行くってどこに行くんだ？」
「こういう時にはまず、事件の近くに拠点を構えなければならない。偶然にも王城グループが経営しているホテルが近くにあるからね。そこに拠点を構えよう」
「金って有るのか？」
「おいおい、僕は王城の人間だぜ？そのくらいの金はいつでも持っているに決まっているだろう？」
「そうか・・・・・・。それに、よく考えれば王城の人間だって言えば金なんか掛からないよな」

「・・・・・・はッ・・・・・・・」
王城はそう笑うと少し悲しそうな顔をしたまま、街へと歩き続けていった。
なんだろう。
あの笑い方は自嘲にも似ていたと、そう感じた。

09ーありがとねー

「なるほど。確かにコレは、いいかもしれない」
「だろ？ホテルよりココの方が情報は集まりやすいぜ？王城のお堅いホテルなんかよりは、な」
「ＯＫ、ココを拠点にしよう」
王城はそう言って、部屋のパソコンをつけて寝転がった。

隼人が王城グループの経営する、お偉い方々しかこなさそうなホテルに入ろうとしたときに俺はある１つの案を思い浮かんだ。
「ココの事は、ここをよく知っている人に頼ったほうがよくないか？」
と。
このホテルで情報は集まりそうにないし、何より移動が面倒だ。ならばもっと楽に、しかも身を隠しやすいところにするべきじゃないだろうか。と考えたのだ。
そこで俺が選んだのは、事件の起こった３つ（最初の事件と、俺と隼人の事件）の場所の丁度中心あたりに当る場所・・・・・・ネットカフェだった。

「ここなら寝るのにそんなに金は掛からないし、パソコンで情報も集められる上に、あんなホテルに集まる人よりは『晴れた日に雷が落ちる』っていう噂を信じている奴が多いと思うぜ。その辺りから情報も引き出せるだろ？」
「一石で幾つもの鳥を手に入れれそうだね」
「そういうことだ」
俺はそう言ってから隼人と同じように寝転がる。ダブルの広い部

屋を取ったので、広さは十分だ。
「で、これからどうするんだ？隼人」
「そうだね。１回僕は仮眠をとろうと思う。君もそうしたほうがいい」
「いや、俺は気絶した時に寝れているから大丈夫だ」
「そうか・・・・・・。そうなると君も暇だろう。宿題でもすればいい」
「いや、持ってきてねぇよ」
「自由研究くらいできるだろ？統計系の、ね」
そう言って隼人はネットを立ち上げて、ツイッターのようなチャット系の画面を開く。
「『晴れた日に雷が落ちるって知っていますか』」
言いながらその文章を打っていく。
「しばらくすれば、これに何らかの反応があると思うよ。これで自由研究も出来る。『人間の【噂】に対する反応の統計的実験』とかね」
そういいながら、隼人は横になった。
「隼人はそんなことまで思いつくのか・・・・・・」
俺はそう言ってからパソコンの画面とにらめっこする。
すると、
「ところで、何でさっきから僕のことを『隼人』って呼ぶんだ？」
と質問してきた。
「は？」
俺は振り向いて聞く。隼人は目を瞑っており、既に眠っているようにも見える。
「ちょっと前まで、『王城』だっただろ？」
「ああ・・・・・・いや、だってさ」
俺はそう言って１度言葉を整える。
「だって、お前、何か王城気に入ってないみたいだし」
「・・・・・・」

「嫌な事をされるのは嫌だろ？だったら、お前は王城を感じる前に『隼人』っていう1人の人間であればいいんだよ」
「・・・・・・ああそうかい。ありがとね」
隼人は今度こそそう言って眠りについた。
・・・・・・ん！？
俺は思わず振り向く。
「・・・・・・いや」
コイツ、今「ありがとう」って言ったのか・・・・・・？
普通にプライドの高い奴だと思っていたのに・・・・・・。
まぁいいや。俺は俺の仕事をするだけだ。
表面では自由研究。裏では調査だ。
コイツが寝ている間に俺の出来る事をしよう。

１０－最悪のモーニングコール－

「起きろ」
俺はそう言って隼人を蹴った。
「最悪のモーニングコール」
隼人は言いながら、痙攣する。うむ、思ったよりも強すぎたかな？
隼人が落ち着くまで待つ。
「で・・・・・・何？」
「１時間くらい経ったから、飯持ってきた」
「ああ、そう」
隼人はそう言ってから俺の持っている食糧を取った。
「で、検証どうだった？」
「噂は凄い速度で広がっているな。情報量自体は足りなくて困っているけれど」
「そうかい。そりゃよかった」
隼人はそう言ってから食糧をほおばる。そしてペットボトルの水でそれらを流し込む。王城の御曹司なのに行儀悪いな・・・・・・って、ことは置いておいて。
「『よかった』？」
「ん？」
隼人は口に含んだ、食糧と水を飲み込まずにそう言って反応する。
「いや、よかったのか？」
「んぐ・・・・・・。ああ。それはさっきも言ったろう？」
隼人はそう言ってから笑う。そして紙に何かを書き始めた。
「アレは、事故として処理してもらわなければならないんだよ。だから、事件だってばれそうな情報は少ないほうがいい。恐らく、集まった情報は『急に雷が落ちてきた』って程度だろう？」
「そう・・・・・・なのか？でも、じゃあ噂が広がっている事も悪いことじゃないのか？」

「逆なのさ」
隼人はそう言って、紙を折りたたんで、俺に渡した。
「そういう噂が広がれば、こういう愉快犯型の犯人はもう一度事件を起こしてくる。注目されたい人間の典型的な犯罪者だよ」
隼人はそう言ってから、部屋を出た。

凄いな・・・・・・。犯人の事まで考えて行動しているのか・・・・・・。
と思いながら、貰った紙を開ける。
「・・・・・・」
自由研究のまとめだった。内容を変えて、実験結果を記載している。それを、１０枚くらいに水増しするための方法とかも書かれてある。
あんな話しながら、これ書いていたのか・・・・・・。もしかしてアイツ、脳が２つくらいあるんじゃないのか？

しばらくして隼人が帰ってきた。
「この部屋はしばらく借りて置けるように頼んでおいた。少し料金が掛かるけど、そのくらいの余裕はあるさ」
そう言って隼人は荷物を持って、外に出た。そして首をひょこっと、もう一度見せて、
「ソウメイ君もいくよ」
と俺を呼ぶ。
「誰がソウメイだ。俺は、奏明だっつってんだろ」
「そーですね」
隼人は軽い態度をとって受け流し、そのまま首を引っ込めた。
俺はその隼人を追うようにして出て行く。

中央街。
事件の発端となった場所に俺は立った。
「さて、始めようと思うんだけど・・・・・・」
隼人はそう言ってから、周りを見渡す。
「特に情報もなさそうだね」
「そうか？」
「ん？」
「情報ならここに溜まってんじゃねーか」
俺はそう言ってから右手を出した。
「情報を回収する」
「ああ、そうか。リメンバー・リメイン・・・・・・・」
俺は右手を地面につけた。

「別名『残留思念』」

11ーおかしいー

残留思念。

俺はそれを空気や土地、物から読み取る。

その空気や物が記憶している情報や思い出、思い入れや念じた事。それらを汲んでやるこの右手は、何より情報収集に適している。

俺の右手で触れたものから、俺が知りたい情報を検索する。或いはそれが有している全ての情報を取り込むことも出来る。

それを利用する事で、俺は他人から記憶や思いを読み取っている。だから正確には他人の心を読んでいるのではなく、他人の所有している心臓、肝臓、腎臓、胃、血管、血液、リンパ腺、目、耳、口、毛、肌などが感じてきた物を俺が理解するという事だ。

この能力は『占い師』に近い。そしてそれだけではない。

その気になれば、そこで死んだ人と会話する事まで出来るのだ。しかしそれをすることはない。

第1に異常なまでの集中力を必要とする。それだけでも精神力を使うというのにも拘わらず、第2に、幽霊とご対面になる。こういうような場所ならまだしも、片田舎の道路など、場所によっては思いもかけない人数の地縛霊や浮遊霊、さらには人に憑いた霊から、憑くも神まで見えてしまったりするのだ。

余談ではあるが、1度それで少年と話したことがあった。その時少年は言ったのだ。

『ここでお母さんが来るのを待ってるの！』

と。

地縛霊は情報的記憶を蓄積しないのだ。だから、彼はここで、お母さんを待っている間に死んで、それ以降もここに居続けていることになる。そういうことは更に俺を苦しめる。

以上3点により、俺は精神力を異常に使うこの行為を忌み嫌って

いるのだ。
閑話休題。
そんなこんなで、俺は地面や壁から記憶を収集していく。
人が歩く。何も感じていないようだ。そして。
突然、落雷が降ってきた（・・・・・）。そこを狙っていたかのように、1つが枝分かれしたのではなく、一気に幾つもの落雷が落ちてきたようだ。

「・・・・・・不自然だ」
「何か分かったのかい？」
隼人が俺の発言を聞いて言う。
「おい、本当に落雷なのか？」
「・・・・・・？」
「落雷にしてはおかしいぞ。いくら能力といえど、雷なら、1人の人間に向かって直撃しないだろ？」
「・・・・・・」
「それに、雷が当った人々の近くから発生していない。だって、近くで輝きがなかったみたいだからな・・・・・・」
「・・・・・・なるほど、そういうこと」
隼人は1人でそう納得すると、
「おかしいと思ったんだよね・・・・・・。そもそもサンダー・ボルトは神様になりたいとか願っていた、『太古の人々』によく見られた性質だからね」
といって、近くのビルの階段を上り始める。
「じゃあ、何なんだよ」
「つまり、雷の類ではなかったのかもしれないってことさ。いや、電気系統ではあるんだろうね。『光』だから」

「だから、何なんだって」
「それを君に確かめてもらうのさ」
「はぁ・・・・・・？」
本当に、コイツは何言ってんだ。しかも元々の考えからどんどん離れていっている気がする。

そして、到着したのは屋上だった。
「・・・・・・何なんだ？」
「ここから雷を落としたんだろう。いや、電気に関係する何かか？」
「・・・・・・なるほどな」
「君の出番だ。任せる」
「任せろ」

どうも今回の事件は俺の力が必要のようだ。

１２ー万事休すってことだな？ー

人々を見下ろす視線。そこから見た世界を見て、笑う。
鞄を突き出した。その中にはスタンガンが幾つも入っている。
そしてそのスタンガンを投げた。
瞬間だった。一つ一つが光・・・・・・雷を帯びた矢となり、人々に降り注いだ。

「・・・・・そうか」
俺が見た情報をそのまま隼人に伝えると、隼人はそう言って冷静に空を見上げた。
「だとすれば『青天の霹靂（サンダー・ボルト）』では無かったね。それは『落下所為（シューティング・スター）だ』」
「流星の間違いじゃないのか？」
「いいや、物事の責任を落として、自分の責任を捨てる。『落下』の『所為』にするのさ」
隼人はそう言って続けた。
「つまり、自分のミスやしたくないことを、何かに押し付けたい。そう思ったときに選んだ方法が投身自殺だった。でも、自身を失くして、それを願ったことが形になった・・・・・とか、そんなところじゃないのかな」
「投身自殺・・・・・・！？」
「君も知っているだろう？自分だってそうだったはずだ。傷から新たな自分を作り上げる。それが僕らのスタイルだろ？」
「・・・・・でも、ということはその人は、そのタイミングで能力を得たってことなのか？」
俺の質問に

「・・・・・・恐らく、能力の内容は落下させることだということだ」
と答えた。
「しかし、それは能力の断片・・・・・・つまり、初めの能力として、自分の持っているものを狙ったところに落下させる能力なのだろうと思う。でも、それを雷の矢に変えて落とすなんて、そんな一朝一夕で身につくような能力じゃない」
「つまり？」
俺の質問に隼人は頷く。
「つまり、長い間時間を掛けて、自分の能力を研究して発展させて現在を作っている・・・・・・そういうことじゃないだろうかと思うんだ」
「なるほど・・・・・・。つまりは向こうは初めから、この事件を起こすつもりだったってわけだな？」
「当然だろうね。それに投身自殺しようとしている人間が、スタンガンを大量に持っているなんていうこともありえないだ。更に言えば、犯行声明文も渡してはこないだろう」
「ああ、そうだな」
俺は動いて、屋上から下を見下ろそうとした。
ヒュ・・・・・・。
「！」
と、小さな音で、風を切り裂くのが聞こえた。
俺は咄嗟に横に飛ぶ。
ガ！という音を立てて、ナイフが刺さった。
「・・・・・・なんだ！？」
「どうした？ソウメ――！」
俺と隼人は自分が入ってきた入り口を見た。
ナイフが、所狭しと浮かんでいる。
「は・・・・・・はぁ！？」

「落下・・・・・その進化系・・・・・・・というよりは原型に近いところまでいったんだろう・・・・・・。サイコキネシスの類だよ」
ナイフが真夏日の太陽の光を反射して、殺意に磨きをかけている印象を受ける。
「切れ味はやばそうだな」
「あと・・・・・・」
そう言って、隼人は指を差す。入り口だ。
「あそこに犯人が居る」
黒い影が見える。
「らしいな。けど・・・・・・」
「僕らに打開策は無い」
「だな・・・・・・」
ナイフは一斉に矛先を俺達に向けた。

「隼人、何とかできるか？」
「出来なくもないけれど、それをしても、最終的には痛みを伴う。後、最初は痛みは無くても、量が量なら、僕の集中力もきれる」
「・・・・・よく分からないけれど、万事休すってことだな？」
「Ｔｈａｔ'ｓ　ｒｉｇｈｔ」
ナイフがこちらに飛んできた。

フム。だとすれば全て受けるしかないな。
僕はそう思った。

そして全てのナイフを受けた。
「・・・・・くく・・・・・」
男の笑い声が聞こえる。
「・・・・・な！」
男の驚愕の声が聞こえる。

そりゃあそうだろう。誰でも、自分の目の前に突如――。

巨大な壁が現れたら驚く。

「くっそが！」

俺はそう叫んでから、男のほうに突っ込んだ。

「って、あれ？」

居なかった。壁が巨大すぎて、こちらから相手の位置を見れないというのもあったが、どうも、壁を見た瞬間に逃げ出したらしい。

「・・・・・・逃げられた」

「恐らく、自らの靴にでもサイコキネシスを使ったんだろう。飛んで逃げた可能性がある。或いは、まだ近くに居るかもしれないけど」

「いや、俺の右手が感じ取っていないから、多分それはない」

「そうかい。ところで」

隼人はそう言って、俺の左手を掴んだ。

「この左手は何だ？」

「ああ、それは」

ふむ。これは、俺の冗談のセンスが問われるところでは！？

「鋼の錬金術師」

「死ね」

１２ー万事休すってことだな？ー（後書き）

これ勝手に出していいんですかね？名称・・・・・・。

13 ―よろしくな―

その後、一度拠点に戻り相談する事にした。
というより、俺の能力について聞きたいらしい。

「あの壁・・・・・・君が作ったんだろ？」
「当然！」
俺は左手でグッジョブの形をした。
「で、その左手は一体何なんだ？」
「何って・・・・・・『リメンバー・リメイン』じゃねーのか？」
「・・・・・・ああ、違和感の正体が分かったよ」
隼人はそう言って、指を差した。
「その左手は『リメンバー・リメイン』じゃないね」
「そう・・・・・・なのか」
「恐らく、君の右手の変化に適応できなかった体が、左手に別の情報を与えてしまった。その結果、左右の能力が逆作用になってしまったんじゃないかな」
「・・・・・・なるほどな。お前は、よくそんなこと考え付くよ」
「まぁ、答えがあっているとも限らないけれどね」
隼人はそう言ってから、それでも自信満々の顔で、寝転んだ。

・・・・・・。
違うんだぜ、隼人。その回答は。
もしも、そうだとしてもそれは違う。
変化に対応できなかったんじゃない。それ相応のギリギリの適応状態なんだよ。
単純に俺の体の中には2つの能力があるだけなんだ。

「これからどうしようって算段だ？」
「まずは、警察へ行こう。僕らが出会った現状について説明するんだ」
「現状って・・・・・・ナイフが宙を舞ってこっちに飛んできたなんて、誰が信じるんだよ」
「そっちじゃない。僕らの目の前が光って、後ろから殴られたことだよ」
「ああ・・・・・・そっちか」
忘れていた。そういえば、俺、殴られたんだった。
「でも、雷が落ちてきた事なんて信じるのか？」
「恐らくだけど、最初の事件や君や僕のときに『目撃者』はいたはずだろう。いくつか、証言があるはず。それに、最悪、君が殴られた事を口実に事情聴取させてもらえる。その時にこちらから質問させてもらおう。今は少しでも情報が欲しい」

警察署内。
初めて来た。
「・・・・・・何か・・・・・・思ったより普通だな」
「刑事ドラマの見すぎじゃないのかい？まぁ、人の期待や願いなんて、僕らみたいなのじゃない限り、叶えられる事も無いよ」
「だな」
俺はそう頷いてから、隼人の後ろを歩く。
隼人がロビーの警察の方に話をつけている間、俺はソファーに座っておくことにした。何しろ交渉関係には滅法弱いので。
「おい」
横から突然声を掛けられた。

「お前ら、何しに来たんだ？」
２人の青年・・・・・新米だろうか？若々しい警察官が言う。
「ちょっと、中心街での落雷事故でのことで・・・・・」
「ソイツなら、俺たちの担当だ」
警察官の１人はそう言って、ロビーのところに行って
「コイツらの話を聞く。外のどっかで訊いて来るから、取調室はそのまま他の奴等のこと聞いておいてくれ」
と伝えると、隼人の頭を軽く叩いてから、こちらにやってきた。
「喫茶店行こうぜ。話しはそれからにしよう」
その警察官はそういうと、
「おっと、自己紹介を忘れていた」
と言って、こちらに向き直った。
「コイツは、新米刑事の、双葉」
そう紹介されたもう一人の刑事はこちらにぺこりと頭を下げた。
「俺は、各務原（かかみがはら）　龍兵衛（りゅうべえ）だ。よろしくな」

これが、しばらく世話になる龍兵衛さんとの出会いだった。

１４ー因縁になりそうな気がするー

「４３・・・・・・！？」
「ああ。こう見えてな。よく若く見られるけど、俺はこう見えてベテランなんだよ」
「そう・・・・・・ですか」
何だろう、見た目の年齢はまぁまぁ近いのに、実年齢は父くらいあるのが悲しい。
「・・・・・・」
父か・・・・・・。
「で、話を聞かせてくれるか？」
「はい」
隼人が話を始めた。
大体は普通のないようだったが、俺達が出会った犯人の話（すなわちナイフが浮いて、飛んできた話）は、隠して、自分達が殴られそうになった事を話した。
俺は一言も口を出さなかった。食い違いが生まれたり、アイツの筋書きと違ったりすると困るだろうと判断した。
ゴメン、嘘。口を出すなと、隼人に言われたんですよね。いやはや、ホント・・・・・・。
悲しい気分になりました。

「なるほど・・・・・・」
龍兵衛さんはそう言って頷き、双葉を見る。
「やはり情報から考えても、そういう人間が居るようですね」
「だな。雷を落としているのか・・・・・・？」
「・・・・・・」
どうやら警察側も『そういう』事件として処理していくらしい。
だが、超能力者という意見では固まっていないらしく、科学の賜物

という事になっているようだ。
「1つ、いいでしょうか？」
隼人が聞く。
「何だ？」
「警察はあの中心街で何か起こるとして、配備されていたんですよね？」
「ああ、俺達もそこに居たぜ」
「そうですか。状況に関して知りたかったんです。ちなみに2人はどこ担当だったんですか？」
「ん？」
「龍兵衛さん！情報の漏洩は禁止です」
双葉さんがまだ何も言っていない龍兵衛さんを止める。
「ああ、分かってるけど、言ったって問題ないだろうしな」
と龍兵衛さんは立ち上がった。
そして右手を出す。
「なんとなく、お前らとは因縁になりそうな気がする」
「同意見です」
隼人が握手する。その後、僕のほうにも龍兵衛さんが、手を伸ばす。
その手を俺は右手で取った。

[配置：ロックを確認しました。解除コードの確認後、もう一度入力をお願い致します]
静電気をかけること3倍の衝撃で、反射的に手を離した。
「いって！」
「うお！？」
俺と龍兵衛さんは同時に反応した。
「何だ？静電気か？こんな時期に」
「・・・・・・」
今のはなんだ？一体何が起きたんだ？

「大丈夫ですか？」
双葉さんが俺と龍兵衛さんを心配してくれる。
「まぁ、痛みはあったけど。静電気みたいなもんだろ？」
「彼は昔から静電気関係を溜め込みやすいようです。いつも、ドアノブとかに手を掛けた時に、なっていますから」
隼人がそう言って言い訳する。
「ところで」
さらにそう続けた。少し語尾が強調されている。
隼人の思っていることは・・・・・・俺の体が感じるところでは『焦り』と『予感』だな。
「２人はどこに配置されていたんですか？」
「ああ、その話か。えっと、双葉は中央街の事件が起きたところから１００メートルくらい離れた電気街のところだったな」
龍兵衛さんのセリフに、双葉さんは驚愕の表情を浮かべる。『言っちゃった』ってところかな？
「で、俺の配置は確か・・・・・・ああ、そう」

龍兵衛さんの口から出たセリフ。

それが今回の事件を左右する。

「屋上だよ。あの近くに大きなビルがあったろ？」
「屋上・・・・・・！」
屋上に配置されていたのは・・・・・・龍兵衛さん！？

15 ―ただの直感―

その後、喫茶店で刑事のお2人さんとは別れた。俺と隼人も1度拠点に戻る事にした。
誰かに聞かれて良い話ではないので、個室型の部屋が適切だと判断して、拠点をホテルに移す事にした。事件の現場に戻る事はもうそこまで回数を重ねる事はないだろうと（隼人が）考えたのだ。
そしてホテルの一室を新たな拠点とすることにしたのだ。
中に入って、ボーイがルームサービスを運んできてから、僕は言った。

「・・・・・・果たしてスイートを取る必要があったのだろうか」
「一々気にしなくてもいいだろう。今更考えたって仕方ないし、君だってゆったりしたいだろう？」
「むしろ出来ないかもしれないけどな」
若干、緊張を感じる。
「それに」
隼人は言った。
「多分だけど、これからは部屋から出る必要もなくなるだろうし」
「え・・・・・・・？」
「根拠はない。これは直感」
「・・・・・・・」
何だろう。ただの直感なのに強い説得力を感じる。
「ところで」
隼人はルームサービスで頼んだ、紅茶を片手にソファーに座った状態で話を始めた。
「君は龍兵衛さんの手を握った時に『何を聞いた』？」
「え」
僕は対面のソファーに寝転んだ状態で、止まった。

「聞いたんだろう？『何か』を」
「・・・・・・なんで分かったんだ？」
「簡単さ」
隼人はそう言って紅茶を置き、脚を組む。
「リメンバー・リメインの深部に有るであろう能力・・・・・・『ロック』の発動後は火花が散るほどの衝撃が起きる。手同士の静電気・・・・・・つながりが過剰に拒絶するからだと言われている」
「ああ・・・・・・ってことはアレがロックなのか」
えーっと・・・・・・。
確か・・・・・・。
「ああ、思い出した。『配置：ロックを確認しました。解除コードの確認後、もう一度入力をお願い致します』だったな」
「配置・・・・・・ね」
隼人はそう呟いてから思考を始めた。
「なぁ、もう一度、ロックについて説明してくれよ」
「・・・・・・人が無意識に強制的に思考を中断する事で消えてしまったり、絶対にばれたくない事に関して全力で隠したり、忘れようとしている記憶や思考・・・・・・それを見つける事の出来る能力だよ」
「それこの間と同じじゃねーかよ」
「文句ばっかだなぁ。もう。僕の思考の邪魔はあまりしないでくれよ？」
隼人の態度に取り敢えず
「はいはい」
と適当に返事した。
「・・・・・・まあいいか」
隼人は組んでいた脚を組みなおす。
「人は少なからず隠し事をしている。また、精神的な傷・・・・・・トラウマだって抱えている。それはもう、当然の如く。人はその中でも特に隠したい内容がある。その時に君・・・・・・『リメンバ

ー・リメイン』が触れたとき、深層心理が反応して、声が上がるのさ」
「深層心理・・・・・・」
「そうだね。言わばその声が『ロック』という能力だ。そして、そのロックのキーに合う言葉・・・・・・すなわち『キーワード』から、その隠された内容を推理するのさ」
それはつまり・・・・・・。
「今回の場合は『配置』というキーワードから推理すれば、答えに導けるってことか・・・・・・」
「そう。そしてその答えが『解除コード』だ。その解除コードを相手に向かって言い放つ事で、相手の隠していた内容が分かるってことさ」
「なるほど・・・・・・。根拠をすっ飛ばして、考えるべき内容が分かる上に、相手の答えまで分かるってことだな？」
「そんな感じさ・・・・・・って、あれ？」
隼人はそう言ってから、再思考を開始する。
「・・・・・・？」
「・・・・・・これはもしかしたら・・・・・・」
隼人はそう呟いて俺を見る。
「これはもしかしたら、相当面白い事件かもしれない」
何故か笑顔だった。

１６ー生きてるだけで恐いでしょう？ー（前書き）

すみません。今回は分かりにくいかもしれません。

16 ―生きてるだけで恐いでしょう？―

僕は夜の街に居た。

「・・・・・・」

ホテルを見上げる。

隼人はあれからずっと寝ている。いや、寝ているだけではないし、思考を積み重ねているが、しかしアイツには全て分かっているようだ。この事件の全容を理解しているようだ。

「面倒だ・・・・・・」

俺はそう呟いてから、夜の街を静かに歩いた。

「・・・・・・」

中心街は深夜でも騒がしい。むしろ時間を追うごとに騒ぎは酷くなっていく。

しかしココ最近は余り問題は起こっていない。どうやら『義賊』の存在が見られているようだ。すなわち、正義の意思を持った賊・・・・・今回の場合は暴走族らしい。

犯罪者が治安を維持するような社会を持つ、危ない街。そんな街だからこそ、人は希(こいねが)うのかもしれない。だから俺達のような、アクターが生まれるのかもしれない。実際に、俺、隼人、今回の犯人、そして『響』と『タケル』の5人が既に数えられている事になる。そしてそれ以外にもこの街、或いは世界に居るであろうことが容易に考えられる。汚い話で言えば、G様を1匹みたら、5匹は居ると思えというような考え方である。

閑話休題。

そういう街の中には、夜遅くでも未だ帰ろうとしていない中高生（俺が言えたことではない）や、義賊の存在を知ってか知らずか、

暴れ狂うチンピラたち。あと、目立つところでは長く赤い髪の毛の少女とその周りに居る、数人の同級生くらいの男女が、激しく音楽を流して踊っている。
「事件が起きても何一つ変わらないな・・・・・・・」
俺はそう呟いてから空を見上げる。

晴れている。
こんな日に雷が落ちてくる。
・・・・・・ぞっとした。
「嘉島君じゃないか？」
突然声を掛けられた。
「双葉さん」
あの刑事さんだった。
「どうかしたのかい？空を見上げて・・・・・・」
「雷が落ちてくることを想像してみました」
「どうだった？」
「ぞっとします」
「だよね」
はは、と快活に笑った。
「考えないほうがいいよ。こういうのは。雷が落ちる原因もよく分からないけれど、何がおきても危険であることには変わりないし」
「ですね」
「・・・・・・王城君は？」
「アイツなら今、ホテルの部屋で寝てますよ」
最初は嘘をつこうと思ったが、正直に答えておく事にした。
「それにしても、君も王城君もおかしいね」
「何がですか？」
「どうせ君らアレだろ？犯人探ししているんだろ？」
「・・・・・・」
「隠さなくったっていいよ。少年の内はそういうことを考えがちだ

から。でもさ」
双葉さんはそう言って続ける。
「そういう何か分からないものに首を突っ込むなんて、恐くないのかな？」
「アイツは分かりませんけど、俺はそうでもありません」
「・・・・・・どうして？」
「だって・・・・・・・」
俺は思い浮かべる。
「人なんて、生きてるだけで恐いでしょう？」
「・・・・・・」
「では失礼します」
俺は言い切ってからホテルに入り込んだ。

それから
「くく・・・・・・」
と自分で笑う。
俺は生きていると感じた事なんて無いのに。
だって人は、死ぬまで生きていたかどうかなんて分からないんだから。

１６ー生きてるだけで恐いでしょう？ー（後書き）

僕の中では、人は生きてなんて居なくて、

死んだ時に初めて、『生きた』という結果が生まれる。だから人は死ぬ直前まで自分の人生を評価できないし、１番恐い瞬間を『死』と感じるんだろう。

という考え方なんです。それを嘉島君に流用しました。

説明しましたけど、分かりにくいと思います。僕の勝手な想像ですから。

17ーだから、ー

深夜過ぎとは言え、それでも人々の流れはホテル内に多くあった。
流れ作業のようにスムーズな人ごみを尻目に、ＶＩＰ専用のエレベーターを使って、スイートルームへ向かう。
エレベーターは静かに稼動し、他の場所に止まる事も無く目的の場所に着いた。
「・・・・・・」
エレベーターから降りて、そのまま部屋に向かう。
廊下の絨毯を踏みしめる。音を床が吸収する。もしも、後ろから追いかけられていたら、洒落にならない。
「隼人、開けろ」
「はいはい」
隼人はふたつ返事で扉を開けて、
「仕事はしてきたのか？」
と、突然聞いてきた。
「それなりに」
「ＯＫ、いいだろう」
何様だ。
と思ったけれど、言わずに部屋に入り込んだ。
「どうだった？」
「思ったような感じだ。お前の推理どおりだと思うよ」
「そうか。ということはそろそろ、アレだね」
そう言ってから、隼人はルームサービスで何かを頼んだ。

「腹が減っては戦は出来ぬ・・・・・・か？」
「・・・・・・知っているかな？」
隼人はそう言って脚を組んで、ソファに座った。
「コナン・ドイルのシャーロックホームズは、お腹がすいている時

のほうが推理力が増すと言っている」
「じゃあ、何を頼んだんだ？」
「君の夕飯。食べてないだろ？仕事を頼んでいたから」
「ああ・・・・・・そういやそうか」
体質柄あまり空腹感を感じる事が無いために、いつも食べるのを忘れている。特に、朝食は抜く事が多い。

ルームサービスが届いてから、俺は食事を取り始めた。
名前もよく分からないものがあったが、取り敢えずマナー等は無視して口の中へと運んでいく。
「お前の推理だと、この後どうなるんだ？」
「僕の予想が正しければ、今夜から明日の昼までには新たな犯行予告が来るはずだ。僕はそれを狙う」
「狙う・・・・・・ってことは、そこで犯人を捕まえるってことか」
「そういうこと。協力してくれよ」
「分かってるよ」
でも俺にはそれより先にしなくてはならない事があるのだ。
「俺、実質的にはあんまり寝てないんだよな」
気絶で寝たような気分ではあるけど。
「知っている。僕は長い事寝ていたから、夜は大丈夫だ。後は犯人がどう動くかを全パターン考える」
「すげーことしますね」
「王の宿命だ」
隼人はそう言ってから、同時に頼んでいたであろう、紅茶を口に運んでいく。
俺は隼人のご好意に是非とも甘える方針で、ベッドに潜り込んだ。

僕は夢を見た。
その夢の中にはいつもどおり、２つの人影。同じ夢ばかりを見ている。

影はいつもどおり会話する。

僕は何も知らない。　お前は何一つ知らない。
でも強い。　だから弱い。
勝てる。　負ける。
動かない。　覆される。
留まる。　流れる。

対極の言葉が飛び交う。１つの『知らない』という情報を肯定するために。

次の日の朝。
「ソウメイ君」
俺はその声に起こされた。
「何・・・・・・？」
「テレビ。見てごらん」
言われたとおり、寝ぼけ眼でその画面を見つめる。
「予想通り。次の事件だ」
だから、どうしてお前は笑っているんだ。

１８ー助けますー

夕方・・・・・・正確に言うならば、１９時になった。
俺たちは犯人が現れるのを、中央街の喫茶店のテラスの席で昼から待ち構えている。
次の犯行場所は、前回と変わらず中央街だった。
街に視線を向け、
「それにしても・・・・・・」
呟いてから、隼人の方を見る。
「警察の配備が思ったより多いな」
「だね。でも今回の配置が分からないからまだどうとも言えないけれど」
「この配置がいいのか悪いのか・・・・・・ということか」
「そういうこと。まぁ、相手は世間からすれば、『何か分からない超能力のようなもの』なのだから、警察が何人導入されようともあまり変わることは無いと思うけど」
隼人は言いながら紅茶を含む。ちなみに、昼食からここを動いていないので、かなりの量の飲み物と食糧を消費している。これいくらくらい払う事になるのだろう。

「よぉ」
突然掛けられた声を見る。
「・・・・・・！」
店外から自由に入ることの出来る、テラスに入ってきたらしい。
この事件の最後の鍵・・・・・・。
「こんばんわ。龍兵衛さん、双葉さん」
突然現れた人物にどもっている俺と引き替え、隼人は立ち上がり、スムーズに挨拶した。いつも通りの冷静さを保っている。俺はその

隼人に次いで立ち上がった。
「双葉から聞いたぞ。この事件に首を突っ込んでいるらしいな」
「えぇ、まぁ」
「・・・・・・お前らの命のために言ってやるが、警察沙汰のしかも、こういうわけの分からない事件に関わるな」
龍兵衛さんはそう言って俺達に近づいてくる。そして、俺と隼人の間に立った。

「余計な真似をするな、死ぬぞ」

そう言い放って、そのまま真っ直ぐ歩いていく。殺気を発しながら歩き去っていくその背中に恐怖を感じながら、目で追う。
「それでもやるというのなら、やればいい。捕まえられるものなら捕まえてみろ。生き残れるものなら生き残ってみろ。倒せるものなら倒してみろ」
龍兵衛さんはそう言ってそこで立ち止まった。そして

「俺に出来ない事を・・・・・・やってみせろ」
と言って、また足を踏み出した。
「僕らは」
隼人は言った。龍兵衛さんを全く見ようとせずに、真っ直ぐ前を見つめている。

「貴方を助けます」

隼人はその一言だけを言って、そのまま自分の席に座って、紅茶のカップを口に運んだ。

「・・・・・・フッ」
とその言葉に小さく笑うと、龍兵衛さんまた足を動かして、喫茶店のテラスから出て行く。
道は真っ直ぐで、龍権兵衛さんの背中は常に見えている状態だった。
しかし、隼人と龍兵衛さんがお互いを振り返ることは無かった。

１９ー決まりきった未来なんてー

龍兵衛さんの姿が遠くなってから
「ごめんな。先輩、よく分からないけど、この事件に対して殺気立ってるんだよ」
と、先ほどまで隼人の正面に居た双葉さんがそう言って弁明する。
そんな双葉さんに、
「今回の警察の配置はどうなっているんですか？」
と隼人が訊いた。双葉さんは一瞬たじろいだような反応をしてから言った。
「あ・・・・・・いや、やっぱり機密事項だから、言えないね」
「ですよね・・・・・・。ありがとうございました」
「役に立てずに申し訳無いな」
そう言って苦笑すると、
「じゃあ、俺も配置につかないといけないから、また会おうね」
といって、走り去っていった。
その後はまた座って時間が経つのを待った。

「・・・・・・どうかしたのかい？」
突然隼人が言った。
「・・・・・・どうしたって・・・・・・何が？」
「何か言いたい事があるんじゃないか？」
「・・・・・・」
俺は自分のティーカップを置いてから、その紅茶に映る自分の顔を見ながら
「俺達は誰も助けられないんじゃなかったのか？」
言った。

「・・・・・・」
「さっき言っただろ？『貴方を助ける』って」
「・・・・・・ああ」
「俺達は出来ない事を今からするのかよ。俺達は助ける事は出来ないんだろ？」
「・・・・・・そうだよ」
「じゃあ、アレはなんだったんだ？適当な事言っていいのか？」
「違うよ」
隼人は少し暗そうに言った。

「僕が何で事件を追うと思う？」
「・・・・・・興味本位」
「無いとも言えない。でも、違う。一般人ならその人と親しいどっかの誰かや、江戸川コナンや金田一にでも任せておけばいい。でも、僕らみたいなのを知った人間に、一般人が関わろうとする事はない」
気持ち悪いからね。
隼人はそう言って続ける。
「そんな彼らを助けられる人なんて限られているのさ。助けようと思える人自体少ない。だから、僕は色々な人の前に現れて、その人に現実を突きつける。そして、自分が正しくない事を思い知らす」
・・・・・・だからか。
そうか、分かった。
コイツが俺の前に現れたのもそういうことだったんだ。
俺に厳しい現実を突きつけ、そして自分という存在を知らせて、孤独感を感じさせずに助ける。
恐らく、同じような事をとても多くの人々にしてきたのだろう。

「助けることはできないし、助けられることもない。それでも」
そう言ってようやく隼人は顔を上げた。
「助けたい」

「・・・・・・」
「無理でも無茶でも無駄でも無意味でも無価値でも何でも、僕は彼を助けたいんだ」
そう言って強い視線を向けた。
「・・・・・・そうか。よく分かったよ」
「時間だ」
そう言って隼人は立ち上がった。

「1つだけいいか？」
俺は隼人に訊いた。
「どうしてそこまでしようと思う？いくら俺達と同じ『アクター』だって言っても、犯罪者だぞ？」
「・・・・・・だって」
隼人は言った。

「決まりきった未来なんてつまらないだろ？たまには神に逆らおうぜ？」

２０ー抗えよー（前書き）

時系列に注意。

20－抗えよ－

彼が言った、「決まった未来なんてつまらない」という言葉の真意を知るために、俺が知っている王城隼人という人間について語っておくことにしよう。

今日の午後の話だ。
「僕はね、王城グループの跡取りとして決定付けられているんだ」
「・・・・・・はぁ」
突然言い出した発言に俺はそう答える事しか出来なかった。
「決定付けられている・・・・・・つまり、それ以外の方針を許されていない」
「・・・・・・」
「僕にはその道しか与えられていないんだよ」
そう言ってから、脚をを組み替えて虚空を見つめる。
「・・・・・・王城も大変なんだな」
「そうでもないさ。勝手に決められて与えられたレールに沿って歩いていくだけで、誰よりも早く、誰よりも高い地点に到達できる。案外、楽かもしれないぜ？」
隼人はそう言って、紅茶のカップを口に運ぶ。

「いいのか？」
俺の発言に、隼人は手を止める。
「お前の未来が勝手に決められようとしているんだぞ？お前はそれでいいのか？」
「さっきも言ったろう？楽なんだって。そっちの方が」
「お前がそれでいいのかを訊いているんだ」

強気に俺は言う。しかし隼人は余裕そうにカップに口をつけた。
そして飲み込んでから、
「良いに決まっているだろ？」
と言って笑った。
「楽に簡単に早く高い場所にいける。それの何に不自由があるってのさ」
「自由を手に入れるために自由を手放すのか？」
「・・・・・・」
「そこに何が残るんだよ」
「・・・・・・じゃあ、僕はどうすればいいんだよ」
隼人は茶化すように笑う。しかし目は真剣そのものだ。

「抗えよ」

俺はそう言った。
隼人は目を丸くした。それから言った。
「相手は王城だぜ？どうやって――」
「何のために演じるんだ」
俺の発言にもう一度隼人の動きが止まった。今度はこちらを見て驚いている。

「お前が手に入れたいものを手に入れるために手に入れたんだろ？『シンキング・キング』を」
「・・・・・・」
「嘘つかずに言ってみろよ。お前はそれでいいのか？」
隼人の止まった動きは、紅茶のカップを置くという行動を起こし、そしてこちらへと視線を向ける。
「・・・・・・いいわけない」
「・・・・・・」

「そんなことしても何の意味もない。僕は僕でありたい」
「・・・・・・自由が欲しいんだろ？」
「ああ。不自由な自由なんていらない。僕にだって道を選ぶ権利はあるはずだ」
「それが真実だ。一々誰かに確認してもらうような問題じゃない」
俺はそう言ってから自分のコーラをストローを通して自分の胃に入れていく。
それから、
「これを求めてたんだろ？誰かに一蹴して欲しかったんじゃないか？そんな考えはおかしすぎるって」
と隼人に確認した。
「・・・・・・そうかもしれない」
隼人はそう言って笑った。
「そうだね。僕は僕のために頑張ろう」
「ファイト」
俺はそう言ってから、コーラを飲み干した。

隼人は自分の決まった道を外れる事を。
レールを無視して進むことを。
さらに高いところを遅くてもいいから目指す事を決めた。

21ー犯人はお前だー

夜8時。
空は雲1つない真黒な海。虚空とは別の意味で、虚無感を感じさせるような空だった。
「・・・・・・」
そんな空の下、俺と隼人は龍兵衛を尾行していた。
「・・・・・・バレてないのか」
隼人に尋ねた。相手は言っても警察だ。どちらかというと向こう側の十八番と言うべきだろう。
「分からないさ。でもやるしかない」
隼人はそう言いながらも龍兵衛さんから視線を外そうとしない。
「そもそもプロを相手取って、尾行しているんだ。最悪バレるであろうことくらいは理解しているつもりだよ」
「大体、龍兵衛さんを尾行する意味が分からないんだけど・・・・・・」
「仕方ないだろ・・・・・・」
隼人は言ってから、こちらに視線を移す。代わりに俺が監視を続けた。
「僕らが彼を助けるためには、こうして何処かの屋上へ行くのを待つしかない。そして事件が起きる前に止める」
「なるほどな・・・・・・」
と、そこで龍兵衛さんの動きが止まった。
1つの建物を見上げている。
それから建物の中に入っていった。
「今回はあそこってことか」
「らしいね」
隼人はそう言ってから追いかけて建物の中に入る。

「ここの上・・・・・・なんだろうな」
「事件の解決が近いと同時に、事件が再発するのも時間の問題だ」
「でも早く止めるのが先決じゃない」
俺はそう言って隼人を見る。隼人はそれに頷いて、
「僕が止めるのが、先決だ」
と言って、階段を強く踏みしめて昇り始める。
昔は何かの会社だったようだが、今は会社はなくなっている。もう既に誰からも頼りにされない、機能を失った見取り図によると、4階までしかなさそうだ。高層ビルが立ち並ぶ中央街では珍しい光景である。
「それにしても、どうしてこんな場所から『落下』させるんだろうね」
「確かに、もっと高い場所を選ぶ奴も居るかもしれないけど・・・・・・近いほうが狙いやすいんじゃないか？」
「高ければ高いほど威力と速さは増すだろ？落とすものを岩にすれば隕石くらいの力は出せる。英名は『シューティング・スター』、流星って意味だ」
「・・・・・・じゃあどうしてこんな低い場所を選んだんだ？」
「僕の予想では選んだんではなく、そこしかなかったんだよ。今回も前回も」
隼人はそう言って俺の前を歩き続ける。
「前回は警察によって配置を決められている。だから、あの場所からしか物を落とす事が出来なかった。だから電気・・・・・・雷を落とす事にしたんだろうね」
「今回は？」
「今回は前回の教訓で、『犯人は高いところに居る』という先入観から、高い建物のほとんどに警察が配置されたり、ヘリコプターで上空からも監視している。それが彼を閉じ込めた」
「なるほど。だから、敢えて低い場所を選んだと・・・・・・」
「配置を無視してでも、屋上にいける場所がここくらいだったんだ

ろうね」
そこまで話したときには既に４階に到達していた。
「ここの階段を昇れば、屋上って訳か」
「そしてそこに彼は居る」
そう言って隼人は足を階段へと伸ばして――

止まった。
「・・・・・・龍兵衛さん」
階段の上・・・・・・屋上への扉にはその人が立っていた。
「何をしている」
「・・・・・・宣言どおりのことをしにきました」
「分かっているのか？お前らがやろうとしていることの意味を」
「分かっているつもりです」
隼人は躊躇せずに上っていく。
「貴方の願いです。僕と彼で叶えましょう」
俺はそんな隼人についていく。
「・・・・・・貴方に出来ない事を僕らに任せてください」
そう言って屋上の扉を開けた隼人を龍兵衛さんはまたも振り返ることなく言った。

「・・・・・・すまんな」

扉を開けた。
「ようやくだ」
そこには居た。
さきほど隼人が言った言葉・・・・・・『僕は貴方を助けます』。
そのセリフの真意に龍兵衛さんは気付いていた。だから龍兵衛さんはその言葉に何の反応も示さずに去っていったのだ。
そりゃそうだ。
だって隼人は初めから、ずっと犯人に語りかけていたのだから。

ずっと隼人の正面に居た人に。

「こういう立場で会うのは初めてですかね？」

「どうだろう。あの時完全に、僕に向かっていっていたからね・・・・・・。おかげでたじろいでしまったよ」

「では改めて、探偵らしく言っておきましょう。実際の警察や探偵はこんなことしないんでしょうけど」

そう言って隼人は指を差す。

「犯人はお前だ。双葉さん」

22ー嘘ですー

言い放ってすぐに、隼人は右手を突き出した。
「本当は、嘉島君が言うべきだけど僕に任せてくれ」
「は？」
「ロックオン、キーは『配置』」
隼人の言葉。
そこに特に意味も効果も無いはずだ。しかし空気が変わる。特に――。
特に俺の胸の内で何かが騒いでいるような感触。
「キングダム。解除コードは『庇い』」
空気が変わる。先ほどの黒さではない、空間の黒さ。
『暗い』から『黒い』に変わったような・・・・・・イメージとしては真黒な世界に、緑色で方眼用紙のような線が、壁と床に引かれているイメージだ。
「な・・・・・・なんだこれ・・・・・・！？」
戸惑っている俺を見て隼人は言う。
「空間支配みたいなものさ。僕の能力『シンキング・キング』の真髄『キングダム』。この空間は、限られた人間しか、かかわることが出来ない一種の『箱』になる」
隼人が言う。確かに、外にもかかわらず壁や床が存在しているように見えるところからも、箱という言い方は的を射ている。
「今回の場合、僕と君と双葉さん・・・・・・そして本来、扉の裏に居るはずの龍兵衛さん以外の人・物はこの世界に干渉しない」
振り向くと壁と扉は存在せず、龍兵衛さんの姿がそこに合った。
「無理やり理屈をつけるならば、僕の王としての『威圧感』が、他の何かを感じられないようにしていることになる」
「威圧・・・・・・・それだけで・・・・・・」
「その所為で、痛覚や時間すらも感じなくなっているし、他の人々

は『なんとなく』ここに近づいたり、気付かなかったりする。威圧感だけで、ね」
そう言って隼人は話を続ける。

「事件の始まりは関係ない。そもそもこんな事件を起こす人間の気持ちなんて知ったこっちゃ無いから」
隼人は放り捨てるように、手を払うジェスチャーをする。
「動機も知らない。どうせこの世の中に不満でもあったんだろ？」
「・・・・・・」
双葉さんの顔色はあまり変わっていないが、俺は分かる。図星だ。
「この事件をややこしくしたのは、龍兵衛さんが貴方を庇った（・・・）事だ」
「・・・・・・」
「キーが発生した原因は龍兵衛さんの嘘だ」
隼人はそう言ってから、龍兵衛さんを見る。
「配置に関する嘘・・・・・・。配置を龍兵衛さんは自分が屋上に居た、と言った」
「ああ、言ったな」
「嘘です」
「根拠は？」
「嘉島君です」
そう言って笑う。
「嘉島君は情報屋と通じているんです。なので、あらゆる方向から情報を集めてきます。その辺りは機密とさせていただきますが・・・・・」
「なるほど・・・・・・。差し詰め情報探偵か・・・・・・」
お前といいこの空間といい、不思議なものだな・・・・・・、と続けた。

実際のところでは、龍兵衛さんが『絶対に隠したい内容』を持っていたときに俺が触ったから、キーが発生したのだろう。

隼人が言っていた。

「それを根拠としているのだから、本来のやり方ではない。そもそも、動機も分かっていないのに、逮捕なんて出来ない。だから僕らは、犯人の『自供』のみが鍵となる。そして警察の裏づけ捜査の必要が無いくらいの『現実的な根拠』を突きつけるのさ。まぁそれでも効果なんてほとんど無いから、そういう犯人は大抵、死刑か無期懲役・・・・・・或いは、外部に漏れないところで一生研究に使われている可能性もある」

言い方から考えても、龍兵衛さんはまだ「こういったもの」にかかわりが少ない、或いは0ってことか。

「さて、嘘というのはたった1つ。ここまでくれば誰でも答えは分かる」

「・・・・・・」

「屋上に配置されていたのは双葉さんだ。だから、配置について嘘を吐いた時、双葉さんすらも驚愕の表情を見せた。何故庇われたのかが、わからなかったから」

そういって双葉さんに視線を向けなおした。

「ですね？」

「・・・・・・ああ」

双葉さんはそう言って、龍兵衛さんを見る。

「・・・・・・どうしてですか？」

双葉さんが訊く。

「・・・・・・」

「どうして庇ったんですか？」

「・・・・・・この一見平穏なのに、不穏な社会には若い力が必要

だ」
「・・・・・・」
「というのはまぁ後付の設定だ。本当は単純に後輩を守りたかっただけの、間抜けな先輩だよ」
そう言って龍兵衛さんは笑う。

「双葉・・・・・・守れなくて悪いな・・・・・・」
「・・・・・・今までありがとうございました」
そう言って、双葉さんも笑う。

「だけどすみません。僕はここで捕まるわけには行かないので」
そして双葉さんはこちらを睨んできた。

23 ー干渉できないー

双葉さんが少しずつこちらに詰め寄ってくる。
「痛覚を否定するんなら、あんまり意味は無いかもしれないが、嘘かどうか殴って試してみる事にしよう」
そう言って拳を構えた。視線の方向は俺に向いている。
「く・・・・・・！」
左手を構え、床に向かって思い切りたたきつけた。思念を送り込むことで、壁を作ろうとしたのだ。
「無理だ！」
「！？」
壁が出来ない。どういうことだ・・・・・？
思ったときには目の前に拳が迫ってきていたので後方に下がって避ける。『痛覚』を感じないという隼人の発言を信じていないわけではないのだが、条件反射だ。
「な・・・・・・何だ？」
「言ったろう？何も干渉できないって。現実世界には恐らく壁ができているだろうけど、ここには何も現れないよ」
隼人はそう言ってから、双葉さんの動向を探りつつ、話を続ける。
「あと、そこからは離れたほうがいい。今、現実世界の壁の中にいる。キングダムを解除した瞬間に君は壁に埋まって死ぬ事になるだろう」
「ま、マジか・・・・・・」
少しあわてて、そこを離れる。
「更に言えば、少し向こうに行けば、現実世界の『空』に立つ事が出来る。解除したら落下するけどね」
そう言って笑う隼人に少しぞっとする。
そんな会話を聞いた双葉さんは、

「・・・・・・動かないほうがよさそうだな」
そう言って拳を下ろして、
隼人の顎に向かって足を振り上げた。不意打ちというわけだ。
「・・・・・・・！？」
その行為に驚いたのは、双葉さんだった。いや、正確には『行為』にではなくその結果に、か。
隼人の体はびくともしなかったのだ。
「・・・・・・言ったじゃん、さっきも。ダメージは食らわないんだって。そもそも関係ない物自体が干渉できないんだから、『衝撃』だって干渉できないのさ」
そう言って隼人は手を伸ばして、双葉さんの顎を掴んだ。
「だから、あんたが僕らを『空』の上に連れていこうなんて考えは無駄なんだよ」
強い口調で言った。
「・・・・・・・バレてんのかよ」
双葉さんはそう言って苦笑を浮かべて、足を戻してから離れた。
「そもそも、この空間は僕の意思か、或いは僕が死ぬまたは気絶するかしない限り無理だ。更に言えば、この空間で僕を殺すことは無理。攻撃以外の方法で気絶させれば何とかなるかもしれないけど」
そう言って隼人は笑った。それから、「しかし」と続ける。
「このままの状態で居ても何の解決にもならない」
と右手を伸ばした。
「キングダム、解除」
言いながら指をぱちんと鳴らす。
一瞬だった。
瞬きをしたら、戻ったような・・・・・・そんな感覚で空間が戻る。
空間の黒が、星を移す藍に近い色に戻った。なるほど、こう考えるとやはり空は『暗い』だけだったようだ。

さて、事件は解決したがまだまだ戦いは続くようだな。

２４ー最後に落とすものー

解除されて、屋上の風の強さをようやく始めて感じた。
「……あ」
見ると、隼人の言った通り、地面が壁になっている。形も俺の思ったとおりの形だ。つまり、あれは間違いなく俺が作った壁ということになる。
と。
ドサリ、という音を立てて隼人がへたり込んだ。
「ど、どうした？」
「いや・・・・・・。集中しすぎていた疲労と・・・・・・痛みが最大の原因だね」
「痛み・・・・・・？」
何の事だろう、と視線を向ける。
「・・・・・・お前・・・・・・顎・・・・・・！」
顎が赤くはれている。
「折れては無いよ・・・・・・。だけど、痛いね」
「それって、さっきの双葉さんの・・・・・・？」
「ああ、キングダムで受けたダメージは解除したら帰ってくる。仕方ないのさ・・・・・・。それより」
隼人は言って視線を双葉さんへ向ける。
「向こうもやる気だよ」
「あぁ・・・・・・」
俺も視線を向ける。
「そうらしいな」
ライターが数個、スタンガンが数個、ペットボトルが数個、針や何かの金属の先端のようなものが数個浮いていた。
「構えよう」
隼人は身を低くして構えた。

「・・・・・・行くぞ」
双葉さんが呟く。
ライターが炎に、スタンガンが雷に、ペットボトルがバズーカの弾に、金属類は槍へと変化した。

・・・・・・なるほど。そうですかそうですか。
浮いているものを指差してから、俺は隼人を睨む。
「アレはどういうことだ」
「ああ。僕も驚いている。てっきり落とす物・・・・・・ライターを炎にするような『威力』をあげるものだと思っていたよ。まさか物質を変化させてくるとはね」
「『驚いている』じゃねーよ！」
あっはっはっはっは。と笑いそうなので、取り敢えず隼人に掴みかかってみた。
「アレにどうやって対抗すればいいんですか！？あれだけの数をどう相手にすればいいんですか！？」
「思わず敬語だね」
「いいから答えろよ！」
「分からない。けどどうにかなる。１つだけ考えれば」
そう言って隼人は人差し指を立てた。目に刺さるかと思った。
「・・・・・・何を考えればいいって言うんだよ」
「最後に落とすもの・・・・・・それを考えればいい」
そう言って隼人は俺の手を服から離させる。

「仲間割れは終わったか？」
双葉さんはそう言って余裕の笑みを浮かべる。キャラ変わってらっしゃる。
「何が言いたいのか分からないが、俺が最後に落とすものがお前らに分かるのか？」
聞こえてらっしゃるようで。

「ま、気にしない方針で」
と、隼人は茶化しながらも真面目な顔で俺を見る。
何かを悟れってことか・・・・・。俺の得意分野でありながら苦手な分野でもある。特に考えなければならないような内容は。
「・・・・・・ま」
双葉さんはそう言って、
「どうでもいい」
雷を飛ばしてきた。俺達はその行動の前に回避行動を取っていた。
さて、勝負もどうやらクライマックスのようで。

25ー横暴な『王』ー

雷が激しい音を立てて地面へ落下する。
「追撃開始」
双葉さんがまるで指令するように言って、手を前に突き出した。
その行動によって、雷があらゆる方向から襲ってくる。
それらを2人ともバラバラにメチャクチャにランダムに動く事で狙いを定められないようにする。
「狙っているのは双葉さんだ。雷に意志があるわけじゃない。アンタに僕らの動きの全て見えないだろ？」
「チッ・・・・・・」
雷を全て放ち終えた双葉さんは舌打ちをして、突き出していた手を戻した。
ふと、雷の落ちた場所を見てみる。そこにはスタンガンが落ちていた。静かに稼動して、雷を帯びている。
「変換攻撃後は戻るらしいね」
隼人は言いながら双葉さんの方へと走っていく。
「俺に近づくのは無理だ」
そう言って双葉さんは炎を投げ飛ばす。発射ではなく、飛んでいっている。ダイの大冒険での『メラ投げ』のようなものか。狙いは隼人。
「速くないなら・・・・・・」
隼人は言って、地面を強く蹴った。
「避けられる！！」
叫んで隼人は跳躍という方法で炎をかわす。
それを見て双葉さんは
「阿呆が」

言った。
炎が隼人を追うように動く。
「隼人！」
「！？」
俺の叫びでようやく隼人は気付いた。
「くっそ！」
言って、着地後の勢いそのまま、地を転がって炎との距離を引き離す。
炎は宙をふわりと浮かんで、双葉さんの元へと戻る。
「物を投げるタイプの能力者は、その物体を操れる・・・・・・マンガでも何でもそういう風に相場は決まってるだろう？」
双葉さんはそう言って笑う。
「てことは・・・・・・貴方の倒し方は、貴方が投げた物体を貴方にぶつける方法ですかね？」
「いや、それは出来ない。俺に当るような事になれば、そこで消え去るようになっている」
「面倒ですね・・・・・・じゃ、このまま続けようか」
隼人は言って尚も走る。
「動きを止めてやろうか・・・・・・」
双葉さんは笑顔を消すと、右手を突き出した。
「一斉攻撃。避けられたら戻って来い」
全ての浮いていた物体が隼人へ突っ込む。
「・・・・・・！」
隼人は急に体を止めて、俺の方へと走ってくる。
「あと宜しく」
「はぁ！？」
突然の行為。ビックリマーク2、3個。
咄嗟に左手地面に突き出して、壁を作る。
「これだけ全部は受け止められないぞ！」

「しばらく頼む」
そう言って隼人は襲ってくる猛威の中にもう一度走っていった。

くっそ・・・・・・。
隼人の言っている意味が分からない・・・・・・。アイツが最後に落とすものなんか分かるわけ無いだろうに・・・・・・。
「・・・・・・落とすもの・・・・・・」
待てよ。
いや、もしそうだとしたら・・・・・・。
隼人・・・・・・お前の考え方は横暴な『王』だ。さしずめ暴君ディオニスだ。じゃあ俺はソイツのために走っているメロス・・・・・・。
てことは、後はセリヌンティウスだけだな。
俺は屋上の入り口の方を見た。

そしてそちらに走る。

そして扉を左手で破壊して、言った。
「頼みがあります」

25ー横暴な『王』ー（後書き）

走れメロスからの抜粋。

怒られませんように。

26－阿呆が－

・・・・・・。
おさまったな。
殺しは出来ていないだろう。先ほど壁が出来ていたのを見た。
嘉島と王城・・・・・・奴らは一体何者だ。

「・・・・・・やっぱり生きてるか」
２つの影があった。槍は１つも帰ってくること無く、バズーカの弾は当然コンクリートを破壊したりしているため、帰ってきているはずも無い。あるのは炎だけ。
最後に落とすもの・・・・・・それは炎か。
アイツはこれを読んでいたのだろうか？
・・・・・・いや、そんなはずもない。
「何をした？」
王城に訊いてみる。
「少し、回収させてもらった」
手にはスタンガン。
「コイツらをもう一度使われたらこっちも困るんで」
「だろうな」
王城はそれらを嘉島に投げる。
「処理宜しく」
「了解」
嘉島はそう言って、左手を突き出す。
そしてそれらの全てを黒い塊へと作り変えた。
「・・・・・・貴方が最後に落とすものは、これで『炎』だけになりました」
「なるほど・・・・・・。だが、それで俺は十分だ」
炎の数は５つ。これだけあれば、何とかなるだろう。

「だったら大きさで勝てばいい」
炎を１つにまとめる。
これで直系１０メートルくらいの巨大な火の玉の出来上がりだ。
騒ぎになるかもしれないが、コイツらさえ何とかすればいいだろう。
「１人ずつ、確実に殺す」
まずは、王城！
炎を投げた。
「・・・・・・」
王城は黙って突っ込んでくる。
「本当はこういうのはすべきじゃないんだよ。だって、良い子がまねするだろ？」
突然そういったかと思うと、屋上の手すりの方向へ。
そして飛び上がって、屋上の手すりに立った。
「ここに立てば何の問題も無い！」
王城はそう言ってこちらに向かってくる。
全く・・・・・・。

「阿呆が」

炎の熱が手すりを溶かす。
「げ」
王城はそう呟いて、飛ぶようにして離れる。それでも尚、こちらに突っ込んでくる。
「大きければ大きいほど、速さも増す。本来は落下のほうが得意なんだがな」
炎を王城の方向へとついてこさせる。
「貴方にぶつければ炎は消える！」
「だからそれは無理だ」
王城は俺の前をダッシュで通り過ぎる。

炎はこちらに近づいてくる。
「王城を追跡だ」
指令を出す。炎はその命を受けて王城の方へ向かう。
「・・・・・・」
王城の方を見る。
「・・・・・・！」
頬が歪んでいる。
笑った・・・・・・！？
突然だった。
頭に電流が走った。

物理的な意味で。
見ると、スタンガンの塊を嘉島が投げてきたようだ。少し電気を帯びていたようで、頭の激痛が当社比2倍くらい違う。
「くっそ・・・・・・！！」
そうか。王城は炎がでかくなる事も分かっていた。そして、その影に嘉島を隠す事で、不意打ちをしたんだ。

「くらえ！」
嘉島はそう言って走りこんできて、俺の頭を右手で狙う。
「・・・・・・大人を舐めるな」
ここまでくればただの力技だろうが！！！
俺は嘉島を地面にたたきつけた。

「バカが！大人に力で勝てるわけ無いだろうが！」
「取った」
ぱん。
え？
・・・・・頭から力が抜ける。
死ぬ時に人の思考は異常に働くのかもしれない。
見えたのは、入り口で銃を構えている先輩の姿。目から涙がこぼれている。

聞こえた気がした。
「双葉さん・・・・・貴方が最後に落とすもの・・・・・それは」

なるほどな。

27 ―例えば、の話をしよう―（前書き）

はい、まとめー。

２７ー例えば、の話をしようー

例えば、の話をしよう。

生まれた瞬間に母が死に、父は２０歳も年下の女と再婚。その母から邪魔だと虐げられ、飯もろくに食えず、仕事から帰宅した父からは暴力を受ける。それに関して嫌気がさして、家から脱走して、親に見つかって捕まって殴られて、死にかけてを繰り返す。気がつくと、母親も父親も近くには居らず、親戚も祖父母も存在せずに途方にくれていた少年（仮にＦとする）は、公園で何年も過ごした。そして年齢的に小学生になったころにに出会った、交番の警察官（仮にＲとする）に拾われた。その時、ようやく自分の存在に気付く事が出来た。

小学生までにコレだけの経験をした人間は、普通は歪む。狂う。

つまりはそれが原因なのだ。

無責任であるにも拘らず、責任を背負ってきた双葉は幼少期の間に、『責任』を押し付ける事を学んだ。突発的にそうなったのではない。『人生』が彼を作ったのだ。

最初の事件は、新米刑事にして『今まで世話をしてくださった』警察官とコンビを組んだ彼には、重圧がのしかかる。或いは、プレッシャーとも言うべきだろうか。

それを押し付ける・・・・・・自分の肩の荷を下ろすことが、彼の能力だった。

下ろす事が落とす事につながった。

２度目の事件を起こすきっかけも同様にプレッシャーだった。原因は王城隼人だった。

自分が犯人だと疑われている。先輩も自分を守ってくれたが、そ

れでも『奴』には何の意味も無かったらしい。
そう思い込んだ。嘉島の仕事のおかげで。
嘉島の仕事とは、双葉が現れるだろうことを考えて、さらにプレッシャーを更に掛けるために『出会う』ことだったのだ。
ともかく。
それを結果として、双葉は暴走した。

とまあ、こんなところだろうか。分からないところは、ご愛嬌。
まとめとしての役割を果たせたかどうかに関して言えば、まぁ気にする事じゃないだろう。

最後に1つ。
双葉が最後に落とすもの。

それは彼の命だったのだ。
はい、まとめ終わり。

28 ー探偵ですよー

「上がりなよ」
隼人はそう言って、玄関の扉を開ける。
この小さな家の立ち並ぶ住宅街に、1つ大きな家があり、それが隼人の家だった。白く、他の家より、頭1つ出た3階立ての家で、その3階が天窓であることが分かる。
「ああ、アレはデフォルトでついていたんだけど、僕は使わないから数年前の状態で放置されてるよ」
「家族で利用しないのか？」
「ん？・・・・・・言わなかったっけ？」
隼人はそう言って、こう続けた。
「この家には、僕だけしか住んでいない」
「え・・・・・・？」
じゃあつまりこいつは一人暮らしってことか？
「実家にいたら、嫌でも王城を感じなければならないからね」
「ああ、そういうこと・・・・・・」
「まぁ、この家ももとは王城グループの所有物で、それを僕が買い取ったにすぎないんだけどね」
そう言って部屋の廊下を歩く。いくつか部屋の扉がある。風呂やトイレも完備されているようだ（家だから当然ではあるけど）。
廊下の一番奥にあった扉を開けると、リビングが広がっていた。かなり大きい。部屋を半分に分けた右側にソファは3人掛けが1つで、2人掛けが1つ。その2つを直角とした間に、長方形の机が1つ置かれている。また大きなテレビも1台ある。対し、左側には食卓用のテーブルと椅子が置いてある。その奥にキッチンがあり、食卓まで料理を運びやすく、また食卓に座った家族と母親が話しやすい環境となっている。
で、当然違和感。

明らかに家族向けの家だ。何故こんな家に隼人は住んでいるのだろうか。
「さてと、これで僕のことはほとんど明らかにしたつもりだぜ？」
「・・・・・・」
「次は君の番だ」
俺の番ね・・・・・・。
つまり俺の願い（・・）ということか。

屋上での事件が形の上では解決して、その後の会話だ。
「奴がああなってしまったのは俺の責任もある。双葉が抱えていた歪みを取り除くことが出来なかったのだから」
それを知っていたのは俺だけだったというのにな。
まるで自嘲するかのように龍兵衛さんはそう言った。
「しかし、双葉さんを助ける方法は彼が、自らに責任を持つことだけでした。それができないとなれば・・・・・・」
「・・・・・・そうだな」
龍兵衛さんは納得したように上を見る。
「取り敢えずここにも警察が来るだろう。お前らはさっさと離れた方がいい」
「分かりました。では、またお会いしましょう」
隼人はそう言って、階段の方へと向かう。
「最後の1つだけいいか？」
「何でしょうか？」
龍兵衛さんと隼人は相変わらず背中で会話する。
「お前は一体何なんだ」

龍兵衛さんの問いに、迷わず、間髪いれずに答えた。

「探偵ですよ」

２９ー例え美しくても、正しくなければ意味が無い。ー（前書き）

今回は題名が少し長いですね。

２９ー例え美しくても、正しくなければ意味が無い。ー

事件の起きた建物から急いで外に出て、少し離れると、すぐに警察のパトカーが到着して野次馬が集い始めた。間一髪というところだろう。事情聴取も免れた。恐らく無関係を装えたはずだ。

そして行く当てもないのでベンチに座り込んだ。

そして空を見て、呟く。

「・・・・・・わざわざ、予告してまで他人に押し付けようとした重圧・・・・・・か」

「双葉さんのことかい？そうだね・・・・・・」

そう言って思案顔をして、３秒くらいして話し始めた。

「犯行予告をした上で、成功させる・・・・・・そこに彼のストレス解消にでもなったんだろ」

そう言って、肩を竦めると

「まぁ、考えないほうがいい。人のプレッシャーなんて他人に分かるものじゃないし、特に歪んだ人間がどこでどんな荷を背負うのか、他の人に分かるわけも無い。他人の気持ちなんて、人には分からないってよく言うだろ？」

と言って、笑った。

その笑顔がどうも気に入らず、

「・・・・・・助けるんじゃなかったのか？」

言った。

「は？」

「双葉さんだよ。助けるんじゃなかったのか？」

「・・・・・・あぁ」

「あぁ、じゃなくて――」

「助けるにも形は幾つもある」

隼人はそう言って真剣なまなざしで俺を見る。

「命が無ければ助からなかったわけではない。『いっそ殺してくれ』を叶える事だって、助ける事と一緒だ」
「それは・・・・・・」
「彼を助けるには、全てのストレスを僕らに放ってもらい、重圧から解放されるしかなかった。しかし、彼には計り知れないほどの重圧があったということだろう。しぶとく、強かった。あのままじゃ以前と比べ物にならないほどの大量殺人を生むだろうと思った。だから急遽『双葉さんごとプレッシャーを消し去る』という助け方にした」
　隼人は冷静に言い放った。
「・・・・・・最初からそのつもりだったのか？」
「最悪のパターンとして、ね」
「それは良かった事なのか？」
「良くないね。僕としても後味が悪い」
　淡々と言い放つその姿に怒りを覚えた。
　思わず隼人に掴みかかった。
「・・・・・・お前・・・・・・何言っているか分かってんのか？」
「分かってるさ。君は今にもこう言おうと思っている。『人の命を何だと思っているんだ』ってね」
「だったら・・・・・・・！！」
　掴む手が強くなる。
「じゃあ！！」
　先ほどまでの冷静さを突如として失い、同じように俺の襟元を掴む。
「あのまま僕らは死んで、大量殺人が行われて、双葉さんだけ助かればよかったのか！！」
「！」
「彼だけを助ける前に、人々を助けなくちゃならない。だったら、彼が助ける手段で全員を助けるべきだ」
「でも殺さなくってもよかったかもしれない！」

「だったら君は何で協力した！！」
隼人はそう言って睨む。
「それは・・・・・・」
「正しいと思ったんだろ？そのやり方を」
・・・・・・。
そうだ。確かに俺は、双葉さんを殺せば、それ以外の全ての人間が助かると思った。
隼人のような『双葉さんを助ける』という理念も放棄した。
俺に・・・・・・隼人を責める資格は無い・・・・・・。
「だけど自分を責める必要は無い。君の考え方は『美しい』。人を殺すことは『美しく』はないから」
「・・・・・・」
「でも、僕らはその中で『正しい』方法を選び取っていかなくちゃならないのさ」
例え美しくても、正しくなければ意味が無い。
俺が隼人に教えられた、初めての教訓だった。

２９ー例え美しくても、正しくなければ意味が無い。ー（後書き）

感想があまりなくて、ちょっと落ち込んでます。

よろしくお願いします。

３０ー夢の話さー

「それはそうと」
もう一度歩き始めて、隼人はそう言って話を始めた。
「君に話したいことがある」
「何だ？」
「夢の話さ」
隼人は言って、後ろの俺を振り向く。
「夢・・・・・・？」
俺が呟くように隼人に尋ねる。
「まぁ、歩きながら話そうよ」
そう言ったので、俺は隼人の横に並んだ。
「どういうことだ？夢って・・・・・・」
「君に言われてから、自分の将来について考えてみた」
「・・・・・・あぁ、昼の話か？」
そう言えば、えらそうに説教した覚えがある。
「で？どんな夢だ？」
「王城を超える『何か』になる」
「・・・・・・大雑把だな・・・・・・」
「仕方が無い。夢なんて考える事事態始めてなんだ。何分昔から、王城グループのことばかり学ばされてきたから、要領が分からない」
隼人はそう言って肩をすくめた。
「・・・・・・『何か』か」
そもそも王城を超えようと思うことが、王城グループにいる隼人にはどれだけ難しいことかを分かっていないのかもしれない。
まあ、子どもの頃は大きな夢を持っていた。僕なんて、確かウルトラマンだったような気がする。仮面ライダーだったかな？どっちでもいいか。
夢なんて、大きく持つべきなのかもしれない。

「君には夢は無いのかい？」
「そりゃあるだろ」
無いわけが無い。
「何？」
「教えないって。俺がお前に関して知りたい事を教えてくれたら考える」
「それは困った。君は国家機密に触れることとなり、狙われることになるだろう」
「な・・・・・・・！？」
何！？王城に触れるとは、国家機密に触れることと同義！？否、そうだ。王城グループは国のトップで、世界でもトップクラスの企業・・・・・・音楽、自動車、工場、住宅など、何にでも関わっているような企業だ。ともすれば、それは不思議ではない――。
「ゴメン。嘘」
一蹴だった。
「でも、僕の何を知りたいんだ？」
「何よりもまず・・・・・・っていうか、たった1つだけ訊きたい事がある」
「何？」
「お前はどうしてアクターについて知っている？」

隼人の動きが止まった。
「・・・・・・やっぱその話か・・・・・・」
「うん？」
「ああ。それは、誰でも訊こうと思うだろ」
「はぁ・・・・・・」
「じゃあ、その話から始めようか」
そう言って隼人は、夜空を見上げて思考を始めた。

31ーどうして分かったー

アクターとは。
元来、人間が超能力としてきたもの『だけではない』。いままでの歴史の中にあった事実すらもそうなのではないかと考えられている。
例えば俺で言う、『リメンバー・リメイン』――日本語では『残留思念』だが――とは、分かっている通り、人の心を読む力である。この能力は有名占い師などが持っていることもあるが、滅多にいない。そして、本当にこういう能力を持っている人間は基本的には占い師なんかせずに、心理カウンセラーになる。なぜなら、『リメンバー・リメイン』は心優しき人にしか現れない、『演じ方』だから。

「歴史的に言うならば、聖徳太子とか卑弥呼とか・・・・・・あとは、預言者として有名なムハンマドとかね」
隼人はそう言って、説明した。

「また、これらが起きる理由として、現在分かっていることは、名前から生じる『ネーム』、存在・過去から生じる『ミラー』、突発的に生じる『アウトブレイク』という、3種類ある」
「いや、そういうことじゃなくて」
「ああ、ごめんごめん。どうして僕が知っているのかということだね？」
そう言って隼人は笑いながら、歩き続ける。
「この世の中のほとんどの書物が王城グループには存在する。そして、僕はその全てを読了し暗記している」
「・・・・・・はぁ」
「それで、僕が読んでいた書物の一部――恐らく世間に公表されているものではない、王城の研究対象の何かだったんだろう。それを

読んだ時、気になる記述があった」
「気になる記述・・・・・・」
隼人の言葉を反復する。
つまりそれが・・・・・・。
「この世界に置ける、裏の存在・・・・・・アクターだ」
「なるほど・・・・・・その書物からこういうことを知っていったわけか」
「いや、ちょっとだけ違う」
隼人はそう言って笑う。
「え・・・・・・？」
「アクターに関する内容はほとんど書かれていなかった。だから、僕はその研究所に侵入したり、僕の仕事柄、出会ってきた人々から情報を収集したりした。こういうのを、少しながら知っている人もいるようでね・・・・・・。その情報を集めたんだ」
「・・・・・・仕事柄って・・・・・・？」
「・・・・・・あれ？言ってなかったっけ？」
隼人はそう言ってこちらを振り向いた。
「今から、仕事場に向かうんだけど・・・・・・」
「仕事場・・・・・・？」
おいおい、中学生でバイトはまずくないか？
と言おうと思ったのだが、
「家にある。僕はパソコンのサイトを使って、人々を探索しているのさ」
「だから、何の仕事をしているんだよ」
「さっきも言ったろ？」
隼人はそう言って、「ついた」と続けた。
「僕は探偵さ」

回想終了。
さて、そして家の中に戻るわけだが・・・・・・。

俺の夢・・・・・・・か。

さて、どうしたものだろう。

「俺の夢・・・・・・か」

自分でそう呟いて、思考を開始するように促す。

結果。

正直に言うべきだろうと判断した。

「俺には、お前も知っている通り、姉がいる。姉の病状ははっきり言って最悪だ」

「・・・・・・」

隼人は黙って、話を聞いている。まあ、茶々入れられたら話しにくいし、都合のいいことではある。

「隼人は、『嘉島家族』を知っているか？」

「・・・・・・知らない」

「だろうな。じゃあ『嘉島　響』は？」

「・・・・・・知らない」

「それもそうだろう。しかし、これらは全て検索すれば、トップに出るくらいの有名な人たちだ。お前は、これらを忘れているんだよ」

「・・・・・・どういうことだ？」

隼人は、そう言って俺を改めて見つめる。

「俺の姉の・・・・・・恐らく、アクターだろう。その力は『人々の記憶を混沌させる』こと。結果的には全員、誰も俺の姉を知らないという状況になる」

「・・・・・・」

「俺の家系は、そういう『記憶』に関係する何かを持っている」

そこまで言って、隼人を見る。不思議そうな顔をしている。

「で、何で俺がこんな話をしたのか・・・・・・だよな？」

「そう。驚きの内容だったけれど、それが君の夢とどう関わっているんだ？」
「俺の夢は『家族を守ること』だ」
俺の発言を隼人は相変わらず不思議そうに訊く。
「俺の父さんは、ある美術品を持って失踪した」
「美術品・・・・・・？」
「どうせ知らないっつーか、忘れているからいいよ。でも、バイオリンらしい」
「バイオリン・・・・・・？」
「そ。それで、そのバイオリンを手に入れるために、皆、俺達家族を狙っていた。それを守るために、姉さんは、自分の能力を使って、家族全員とバイオリンの存在を隠したんだ。その代償として、今、姉さんはあの状況なのさ」
そこまで俺が話して、改めて隼人を見た。
「俺は、家族全員を守りたい」
「・・・・・・」
「だから、俺はお前の仲間になるような余裕は無いぜ」
俺はそう言って、隼人を睨む。
それを訊いた隼人は目を丸く見開いて言った。
「どうして分かった？」

32―よろしく！！―

隼人は驚いた後、少し落ち着きを取り戻して、もう一度
「どうして分かったんだ？」
と言った。
「俺は、言っても心を読む力といっても過言じゃない。お前がどうしてここまで俺にかかわっているのかが分からなかったからな。俺は全力を心を読むことに注いでみた」
「・・・・・・」
「もう一度伝えとくぜ？俺は、俺の夢を叶えるためにも、お前の仲間にはならない」
俺はそう言って、隼人を突き放す。
しかし、隼人は
「どうしてそうなるんだ？」
と更に問いただしてくる。
「僕の仲間になること・・・・・・それがどうして君の夢を叶える妨げになるんだ？」
「・・・・・・俺の母さんは」
そう言って、俺は俺の過去を紡ぐ。

「俺の母さんは父が失踪して、しばらく、体調を崩した。その上に、姉さんの長期入院且つ、治療方法も分からないと来たもんだ。母さんは病んだよ。そして、自殺まで追い込まれた」
「・・・・・・！」
「だから、母さんを傷付けるわけには行かない・・・・・・。俺だって、『家族』だ。だから、母さんを・・・・・・家族全員を守るためにも、俺は死ぬわけには行かない。姉さんとの唯一のつながりも、俺だけだしな」
「・・・・・・」

「俺がお前と仲間になったら、俺は死ぬかもしれない」
少なくとも、今日の実情を見た限りでは、な。
と、俺は続けた。
そして隼人を見る。
「なるほどね・・・・・・」
そう言って隼人は、納得したようにソファーにふんぞり返る。
そして、ハッ、と笑った。
「何だよ・・・・・・」
「それだけじゃないね。君は、もっと抱えているんだろ？」
「・・・・・・」
「僕が言ってあげようか？」
そう言って隼人は立ち上がり、前にあった机の上に腰を低くして座り、俺の頭を掴んだ。

「君がもし死んだ時・・・・・・僕が心に傷を受けるのを、恐がっている」
「！」
「図星か」
そう言って隼人は元の席に戻りながら言う。
「君は優しいね・・・・・・。思わず笑ってしまうほどの優しさだ」
「・・・・・・」
「言っておくけど、僕にそんな優しさはいらないぜ？」
隼人はそう言って、急に真面目な顔に戻った。
「僕は何人もの人を犠牲にして今を作っている」
「だけど、仲間になったときは、人の重みは変わってくる」
「・・・・・・なるほど。それはそうかもしれない」
隼人が自らそう言った後、何かを思いついたかのような表情をすると、
「ＯＫ、僕らは仲間にはならない」
「ああ」

「だから、僕は君を利用する」
「・・・・・・は？」
「契約内容はこうだ。君は、僕の夢をかなえるために全力で僕をサポートする事」
「おま・・・・・・！何言ってんだ！」
俺は思わず立ち上がる。
「そんな契約のめるわけねーだろ！」
「代わりに」
隼人はそう言って人差し指を出した。
「僕は、君を含めた全ての家族を守ることに協力しよう」
「・・・・・・！」
「当然、僕は君の夢をかなえるためにも、君の命が危ない事までやらせようとはしない。君も自分の命を最優先にしてくれ」
「・・・・・・」
何だ、コイツ。
「ハハ！！」
「な、何笑ってるんだ、ソウメイ君」
コイツ・・・・・・面白い！
「いいぜ！了解だ。俺はお前を利用する！俺はお前に全面的に協力する代わりに、お前は俺と俺の家族を守れ！」
「な・・・・・・なんかよく分からないけど・・・・・・」
そう言って、隼人は右手を出す。
「・・・・・・」
俺は、黙って右手を振りかぶって、その右手へと持っていく。
パチン！
と大きな音を立てて、右手と右手が重なり合う。
「「よろしく！！」」

同時にそう言って俺達は『契約』を完成させた。

33 ―そう思っていたのに―

「宿題が終わっていない」

「はぁ・・・・・・」

俺の発言に、そっけなく隼人は言った。

「いいか。俺はいつも宿題だけは真面目にやる、学校では孤立こそしていないが少し忌み嫌われる習性がある、成績は上の中くらいの中学生だ」

「あと、地味に女子にもてる」

「それは置いておけ」

「了解。続けて？」

「で、そんな俺が明日から始まる補習までに宿題が終わっていないのは、どうだろうか」

俺はそう言って、隼人を見る。

「だから？」

「そもそもお前の所為でこうなったんだ。手伝え」

「・・・・・・まあ、君のキャラを守るって意味では君の願いを叶えることにもなるかな」

隼人はそう言って、僕の問題集の課題を解き始めた。その間、僕は読書感想文に手をつけた。

「そういえば、この辺で暴れてた暴走族ってどんな奴なんだ？」

「あー・・・・・・、義族たちね」

えーっと・・・・・・。

と呟きながら、思考をめぐらすように上を見る。

「ああ、そうだ。確か、リーゼントの総長だよ」

「リーゼント？」

「うん。でも、最近行動が起きていないな・・・・・。もしかしたら、連続殺人の犯人が横行していて、治安がそこまで悪くなってきていないからかな？そういう大型の殺人犯はいくら義賊でも追えないだろうし・・・・・」

「へぇ・・・・・そんな事件があったのか」

相変わらず世間の事を知らない俺。

うーむ、困り者だな。

次の日、8月1日。

その日から補習が始まる予定だった――のだが。

この間言っていた、連続殺人犯が横行しているというのは、案外

危険なものだったらしく、家の外は危ないという判断で、学校に行く事はなかった。
「宿題も無事終了してやる事も無いってかんじかな？」
その日、俺は隼人の家に居た。
家族には、隼人の家に夏休み中は合宿すると伝えておいた。すると、「おう、一生いっとけ」と響也に言われてしまった。悲しいかな、んなことないかな。

そんなこんなで隼人と過ごしていた。
「まあ、僕はアクターしか関わらない事件を担当しているわけじゃない。一般的な事件だって、探偵業の１つさ」
「一般的な事件？」
「猫探しとか、落し物とか・・・・・・・。浮気調査は無理だけど、身辺調査はするよ」
「はー・・・・・・。道理で、お金にも困ってないわけだ」
案外物資が整っている割に王城グループとは関わってなさそうだったのは、そういう理由だったのか。
「大抵、デスクワークだけ済ませて、一気に片付けていくんだけどね」
そう言って隼人は相変わらずの様子でパソコンを操作している。
猫の生息しやすい場所や依頼者の情報から落し物の落ちている場所として可能性の高い場所を記述した地図（この間、探偵マップと言っていた。正直、センス無いと思う）を作っているようだ。

「忙しそうだな」
「まぁ、仕事だからね」
そう言って隼人は笑いながらも作業の手を緩めない。
隼人は脳が幾つもあるのではないかと思う。それこそ、聖徳太子のように、書物を読みながらも俺と会話して、且つテレビの内容を記憶しているのだから、情報処理能力に長けているだろうというこ

とを痛感している。
コイツを観察していると面白い。

隼人の観察情報？
案外、不器用。
料理を作るのはへたくそで、紙を切る作業や貼る作業も苦手。
隼人の観察情報？
世間を知らない。
この間、テレビを見て、
「かき氷ってのは、最近のトレンドかい？」
と言っていた。
てか知らずに探偵とか名乗れるのか？
隼人の観察情報？
病院に誰かのお見舞いに行っている。
訊いても、はぐらかされるので、名前しか知らない。確か響花だ。

こういう奴なのだ。
正直、変だと思うけど、俺もそう変わったものでもない気がしたので言わないでおこう。
しかし暇だ。
隼人がこういう状況では、暇で仕方がない。
ので、テレビを点けた。

『速報です。この地域で横行していた無差別殺傷事件の犯人が捕まりました』
「ってさ」
「そうかい、じゃあ明日から学校だね」
ふーん、そんなもんなのか。探偵っていうから、大きな事件に興味があるのかと思ったのに。
隼人にそう告げると、

「事件の大きさは関係ない。関係あるのは、僕が頼まれた仕事、もしくはアクターが関わる何か・・・・・・それだけだ」
と冷静に答えた。
まあ、自分が関わっていない以上、そこまで興味もないよな。
学校の先生の親が死んだところでどうでもよかったりする感じだ。
今回は飽く迄、第三者でいよう。

そう思っていたのに、俺は、第三者は第三者でも、かなり深いところに立たされることになるのだった

３４ー お邪魔します ー

次の日。
昨日隼人と話したとおりに、俺は学校へ向かった。
だがしかし、俺のキャラというものがあるので、俺は隼人より早く起きて、一緒に行くことはせず、学校に向かった。
日差しは良好。先ほどまで雨が降っていたらしいが、今は既に晴れ、水溜りもそこまで気にならないくらいになっている。しかし、夏の日差しによって気化されたその水分のおかげで、蒸し暑くなってきている。８月の気温の高さを身にしみて感じる。
（隼人の）家から学校まではそんなに時間は掛からないが、なんとなく走って学校に向かった。
学校についてからは、取り敢えずさっさと荷物を机の上において、開放されていない学校の屋上の扉へ向かう。
扉のドアノブには『Ｒ』と書かれたプレートが掛けられていた。『Ｒ』は『Ｒｅｓｔ』の略で、『使用していません』という意味。俺はその扉を開けて、プレートをひっくり返した。プレートは『Ｗ』で『Ｗｏｒｋ』の略で『使用中』という意味だ。基本的に、プレートが『Ｗ』の時は、招待客以外は屋上を使用してはいけない。
俺がココに来てすることは基本的に、空を見上げる事だ。
何故だろうか。ココに来ると、気分がどうしても空へ向く。学校という空間に置いて、屋上以外に空を見上げられなくなってしまうからだろうか。
さてと・・・・・・。どうも俺は自分騙りのようなのは苦手なようだ。だから、俺は飽くまでも語り部なのだと思う。
「・・・・・・」
夏休みに入ってから、色々な事に巻き込まれているような気がする。描写はしなかったが、いろいろなことを手伝わされていたりする。

猫探しから落し物探し。おとり捜査や尾行までいろいろ・・・・・・。
それもこれも隼人の所為ではあるのだが、それでもいい経験だったりもする。
何より、王城グループの御曹司が土に汚れながら、必死に誰かのために頑張っている姿を見ると、ああ、コイツは気取っていない奴なんだな、と考えたりする。
隼人という人間を俺は恐らく誰よりも知っている。以前は同じクラスであるということも知らなかったくらいだが、今では誰も知らない隼人の姿を俺は知っているわけだ。
そこで。
コンコン、と。
扉を叩く音がした。
来訪者あり・・・・・・か？だが、俺も今すぐ出て行けばいいだけの話。
そう思って扉を開けてから、見た。
「・・・・・・！？」
何だ・・・・・・コイツ・・・・・・！？右手にナイフを持ち、血が滴っている。体中に怪我をしているが、昨日今日でついた傷ではない・・・・・・。
違和感がする。
「お前、誰？」
少年はそう言った。
無関心そうだった。
「・・・・・・嘉島」
「あっそ。お邪魔します」
そのまま通り過ぎていった。
そして俺と同じスタイルで空を見上げる。
恐らく同い年だが、見覚えが無い。俺の記憶に無いだけかもしれないけれど、いくら何でもこんな強烈なキャラクターは忘れない。

不審者か・・・・・・？
だとすれば本来先生に連絡しないといけないけれど・・・・・・。
それでも、まぁいいや、と深く追求はしなかった。

それからクラスに戻り、椅子に座り、時が過ぎ去るのを待つ。
ああ、今日も俺の日々は守られているのならばそれでいい――――。

「ソウメイ君」
俺の平和を脅かす。
その正体は果たして・・・・・・いや、分かってるけど。
俺はその男の姿を見上げた。
「・・・・・・」
「忘れ物してたよ。しっかりしたまえ」
全く・・・・・・。
教室に揃っていた大半の生徒が、俺と隼人の異色を見る。
俺のキャラが崩れていく。
ああ・・・・・・。

35－平和終了。－

昼休み。
俺は先ほどと同様で屋上へ上がる。しかし、今回は隼人つき。
そして、『W』のまま俺が放置していたであろう、その扉を開けた。
やはり誰も居らず、俺が放置した状態だったようだ。そこには、先ほどの少年の置き土産と思われるナイフと彼の軌跡を示すかのごとく、血痕が置かれていた。
奴はなんだったんだろう・・・・・・。いや、今はどうでもいい。
「昼飯を食おう」
隼人は相変わらずのテンションだが、俺はまず問題を突きつける。
「おい、こら。俺のキャラを前に言わなかったか？」
「ああ、あれだろ？」
そういいながら隼人は弁当を出した。
「『俺はいつも宿題だけは真面目にやる、学校では孤立こそしていないが少し忌み嫌われる習性がある、成績は上の中くらいの中学生だ』だっけ？後、女子にもてる」
「まぁ、備考は置いておいて、大体そうだ。そんな俺がお前と関わっているとどうなると思う？」
「・・・・・・さぁ？」
「俺は、『あの王城隼人と関わっている、謎の少年』というイメージがつくようになる。だから、例えば、お前を好きな女子がお前に告白するとき、俺はその媒介としてしようされるのさ」
「なるほど、かわいそうに」
言って、隼人は一つ目のサンドイッチを頬張る。
「でも、僕は君を守る契約をしている」
「・・・・・・は？」
「君のキャラを守るより、君が孤立しないようにする事こそが大切

だと思った。だから、君の言い方を借りるなら、僕は君が孤立しないための媒介になるのさ」
「そう・・・・・・か」
「勝手なことをして悪いとは思うけど、それでも僕は止めないから」
そう言って、隼人は『昼飯、食べようよ』と、サンドイッチの入ったバスケットを僕に突き出した。
僕らはそこで、新たな平和を手に入れた気がした。

当然、そんな簡単に終わるわけも無く、その後はクラスの男女に色々問い詰められた（しかも何故か俺だけ）。適当にそれら全てを捌いて、学校が終わって逃げるように家に帰った。

「はぁ・・・・・・。疲れた・・・・・・」
思い切り溜め息をつき、ソファに伏せた。
「お疲れー」
「お前の気の抜けた声を聞くたびに、俺はお前の殺し方を学びたくなってくる」
「物騒な事は言わないでくれたまえ」
隼人はそう言って、俺の脅迫を受け流すと、着替えを始めた。
「犬猫捜しか？」
「うん。下準備は出来たから、今から出来る事を1つずつ潰していこうと思う」
「俺も手伝うよ」
「助かるよ。助けてもらっているわけじゃないけど」
「へいへい」
とまぁ。
言うほど、何か事件が起きたわけでもないし、平和といえば平和だった。殺人鬼も捕まって、治安もようやく守られてきたのだろう。殺人鬼が横行している当時の方が良かったかもしれないけれど。

ともかく、平和だからそれでいい。
このまま今日が終わりますように。
猫探しと身辺調査を終え、尾行を隼人に任せて、先に帰宅した。もうすぐ終わるらしい。
「死ぬ・・・・・・」
夏場、夜が近づいてくると、熱気の強さが増す気がする。恐らく少し前までの夜の涼しさと比べてしまう所為ではないだろうか。
「お疲れー」
その言葉は俺に当てられたものかと思い顔を上げたが、部活帰りの少女たちの会話だった。誰かに、お疲れ、などといわれる事は滅多に無いので、羨ましいような気がする――いや。
ココ最近、隼人には言われまくっている。
女子に言われたいという心も奥底にある。

さて。
家の中にいるはずの俺が、何故少女達の話が聞こえているのか・・・・・・。
それは、家という既存の枠にはまるべきではない我々を自己表現するために――――。
はい、嘘。
アイツが家の鍵を所持しているために、僕は外で待つ以外の方法がないのだ。
「くっそ・・・・・・・」
そう呟いてから、僕は玄関から庭に移動した。
天然芝で気持ちのいい庭だ。
アイツが帰ってくるまで、睡眠と行こう。
俺は寝転がった。

「起きたまえよ」
隼人は偉そうにそう言って、俺を起こした。
「・・・・・・」
「まぁ鍵を持っていたままだった僕も悪かったけど、こんなところで寝たら風邪引くぜ？」
「・・・・・・バカは風邪ひかないから・・・・・・」
「夏風邪ならバカが引くんだぜ？」
「バカを否定しろ」
雑談をしてから、俺は立ち上がり、家の中に入る。

「これで粗方、解決できたのか？」
「粗方っていうか、全部」
「あっそ」
「で、ちょっと気になる事件があった」
「・・・・・・？」
そう言って、隼人は夕食を作り始めた。不器用なので俺も手伝う。
「この間あった、殺人鬼の事件」
「うん」
「僕の予想が正しければ、犯人は別に居る」
「は・・・・・・？」
パリン！
皿一枚割れた。
「え・・・・・・あれ？」
「別に捕まった人と会ったわけでもないし、龍兵衛さんに聞いたわけじゃないけど、どうもおかしい・・・・・・」
「おかしいって・・・・・・何が？」
「それは――」

ピーンポーン。
というチャイムによって、その声は遮られた。
「・・・・・ちょっと出てくるよ」
そう言って、隼人は出て行く。
俺は割れた皿の破片を集めて、キッチンに置く。
さて。
隼人はどうなったのだろう？時間が掛かっているという事は、お客さんだったはず・・・・・。

よく耳を済ませると、大きなエンジン音がする。しかもかなりの台数分・・・・・。
俺は扉を開けて、玄関を見た。
「だーかーらーよー！」
リーゼント・・・・・。暴走族・・・・・？
「お前、探偵なんだろ？叶えてくれって！！」
「あなた義賊でしょう？自分でやってくださいよ」
少しいざこざってるようだ。俺は離れたほうがいいだろうか・・・・・。
あれ？あのリーゼント・・・・・。
「あ」
思わず、俺は口を開いた。
「ん？」
そう言って、こちらを見たリーゼント。
「ああ、いつぞやの後輩じゃねーか！！」
「どうも・・・・・」
この人・・・・・隼人と出会った日に、ケンカに割って入ってきた人だ・・・・・。
「えっと、何のようですか？」
「依頼だよ、依頼」
「ハァ・・・・・」

「っと、名乗ってなかったか？」
そう言って、見せた彼の後方には。
十数人の暴走族とバイクが有った。

ああ。
あれだよね？確か、『平和は戦争と戦争の騙しあい・・・・・・・』

「今、義賊を名乗っている、そこの総長の、東諒(あずまりょう)だ」

平和終了。
俺の中でそんな声がした気がした。

３６ー君の力を借りるー

次の日だった。
俺達は先生へ、それぞれそれなりの理由をつけて、今回の補習を休ませてもらう手続きを済ませた。教師側には未だ俺達の噂は入っていなかったようで、特に怪しまれることも無かった。
そして、今、僕らは殺人現場を回っていた。

「依頼内容はよぉ！」
夜なのに叫び声から変わらない東先輩（呼称決定）はそう言って、玄関で話を続けようとする。
「分かりましたから、叫ばないで下さい！」
隼人はそう言って、叫び返す。
「お、おう。分かった。じゃあ、中入れてくれるか？」
「分かりました・・・・・けど、貴方１人でお願いします」
「おうよ」
そう言って東先輩は、外の皆の方を見た。
「てめぇら！今日は解散だ！さっさと帰れ！」
「「「了解っす！！」」」
全員そう叫んで、エンジン音を激しく鳴らしながら、エンジン音に負けないくらいの叫び声で
「うぉぉぉぉおおおおおおおおおお！！」
と去っていった。
・・・・・。
嵐のように現れて、しかも元凶が滞在している・・・・・。
何なんだ、この状況は・・・・・。
「では、中へ」
そう言って隼人は東先輩を促す。

「さて・・・・・・」
隼人は紅茶のティーカップを3つ机の上に置き、ソファに座った。もう1つの方に東先輩が座ったので、俺は隼人の横に立った。こうすると、なんとなく助手というか執事っぽい。
「依頼とは何でしょうか？」
「お前、アレだろ？よく分からんの専門の探偵なんだって？」
『よく分からんの』・・・・・・？
それは・・・・・・もしかして・・・・・・。
「・・・・・・どこでそれを・・・・・・」
「おいおい、俺達を舐めんなよ。俺は義賊やってるような奴だぜ？情報網がそれだけあるってことだぜ？」
「・・・・・・で、用件は？」
隼人は先程より俄然興味が沸いてきたのか、身を乗り出す。
「最近逮捕された、例の殺人鬼を救って欲しい」
「はぁ！？」
思わず叫んでしまった。
「いいから、慌てんなよ、後輩」
東先輩はそう言って、俺をなだめる。
「あの事件は、犯人は別にいる」
「何で、そう思うんですか？」
「その殺人鬼として捕まった奴が俺の友達なんだよ。で、ソイツは、普通、捕まらない」
意味は分かるよな？
と、東先輩は続けた。
・・・・・・ということはそのお仲間さんはアクター・・・・・・。
「・・・・・・なるほど」
「俺は脱獄の手伝いをしろって言ってんじゃないんだ。真犯人を捜してほしい」

そう言って、東先輩は頭を下げた。
「俺には出来ない・・・・・・。俺の『力』じゃ無理なんだ・・・・・・」

「しかし・・・・・本当に犯人は別に居たのか・・・・・・」
「まあ、推理によればそういうことになるよね」
「そういえば、あの夜言おうとしたことって何なんだ？」
確か、途中で東先輩が入ってきたはず。
「ああ。それは犯人の捕まった場所だ」
「捕まった場所？」
「犯人が捕まった場所は、路地裏だ。しかも気絶していた」
「気絶・・・・・・！？」
「もうこれは絶対に、誰かが犯人に仕立て上げようとしたとしか考えられない・・・・・・のに、捕まった女性は何一つ口を開いていないらしい。おかしいだろ？」
「だな・・・・・・」
「ま、その辺はアクターだって分かったから、それで解決だろ」
隼人はそう言って地図を見る。

「それにしても、急にアクター絡みが多くなったな・・・・・・」
「僕の場合は昔から関わっていたから、そんなに印象深くないけど、確かに向こうからやってくるパターンは初めてだ。もしかしたら、君にひきつける力があるのかもしれないね」
そう言って隼人は不敵に笑った。
おいおい・・・・・・冗談じゃねーぞ。無理やりそんなことこじ付けすんなよ・・・・・・。
「巻き込んでいるのは君じゃないか？」
「いくらなんでもそれは――」

チュン！
という、静かな鋭い音で地面がはじけた。
事件現場を歩いていただけだぜ・・・・・・？
でも、この音・・・・・・。
「サイレンサー・・・・・・！？」
チュン！
「逃げろ！」
隼人が叫ぶと、
ズガン！チュン！
と銃声が増えた。

隼人の背中を追うようにして走る。
銃の音は相変わらず、聞こえてくる。
「こっちだ！」
隼人は叫んで、俺の手を引いて、建物の影に隠れた。
「マジかよ……俺たちは今どんな奴を相手にしてんだ……？」
「相手はアクターだ」
「は？」
俺は隼人を見る。息が上がってしんどそうだ。
「いや、向こうはサイレンサー付きの銃で狙ってきてんだぜ？アクターなわけ――――」
「サイレンサーは君が思うほど、効果はない。映画の見すぎだ」
「え？」
「サイレンサーっていうのは、バイクのマフラーと一緒で、それなりにしか働いてないのさ。サイレンサー付きの銃……一般的な９ミリパラベラム弾でサイレンサー付きなら、車道を走る車レベルで音がなる。さらに言えば、サイレンサーをつけていなかったら、高架下で電車の音を聴くくらいになる」
何が言いたいのか分からない。
何だ、９ミリうんたらかんたらって。

いやそれよりも大事な事がある。
「じゃああの音は何だって言うんだ？」
紛れもなく聴こえたあの音は、それこそ、映画で聴いたことのある、チュンという音だった。
「銃自体の可動部を減らし、構造自体を消音構造にして、音速を越えず、ガス量の少ない銃で発砲すれば、できなくはない」
「そんな銃あるのか？」
「だから、恐らくアクターだって言ってるんだ」
そう言って、ようやく息を落ち着かせ、隼人は続ける。
「想像から創造する力だろう。恐らく、君と同じ映画の見すぎだ」
「想像から創造するって、それ強すぎねーか？化物とか出されたら・・・・・・」
「大丈夫。僕の記憶が正しければ、あの能力はそこまで大きなものは作れないし、多用できないはず・・・・・・」
ドカン！と。
俺たちの正面の建物の一部が爆発した。
「これはどういうことだ？」
「っかしーね」
そう言うと、隼人は苦笑を浮かべた。
「逃げるか？」
「ｙｅｓ」
隼人は頷くと、まるで飛び上がるかのように、横へ飛び出す。
「一体どうなっているんだ！？」
俺はそれを追うようにしながら叫ぶ。
「どうもバズーカか何かをぶっぱなしたんだろう。リアルな方の」
「つまり現実の武器とアクターの併用か？」
「そういうことだ」
そう言って隼人はさらに走り続ける。
銃弾やバズーカ、さらにはナイフやフォークまで飛んでくる有様だ。

「おい！！これどこまで逃げ続けるんだよ！？」
「君の力を借りる」
隼人は冷静にそういうと、突然角を曲がった。
「壁だ！」
「了解！」
左手を地面につけて、壁を作る。出来るだけ高く、周りと合った色合いの壁を。
「想像の創造には、同じように対抗しないと」
その後、追っ手は来る事は無かった。
上手くまけたようだ。

37ーあの少年がー

まず、家に帰宅した。
そりゃあそうだ。まずは現状について整理しなくてはならない。
それから、俺達は移動する。
どこかの廃ビルのようだ。
『義賊　暮射（くれいる）』という暖簾（のれん）や旗がそこら中にある。

「おぉ！嘉島に王城だなぁ！」
そう言って、最上階の広場に1つだけ石の椅子を設けて座っている東先輩は言った。
「で、何の用だ？」
「何の用、じゃねーよ、コラ」
俺はそう言って、東先輩に掴みかかった。
周りの子分（？）たちも動き始めたが、どうも東先輩が人差し指を出して、止めた。
「どうなってんだ？超狙われたぞ？」
「あぁー・・・・・・。まだ、あいつら居たのか・・・・・・」
そう呟くと東先輩は乱暴に俺を突き放した。どうも、簡単に俺の攻撃など避けれるようだ。
「折角、関係ない強い奴らを捜して事件の調査させたのに・・・・・・まぁいいか」
さらにそう言って、
「いいよ。お前ら。依頼終了」
と言い放った。
「な――」
「事情だけは説明してやる。だから、聞いたら、もうこの事件には関わるな。絶対だ」
そう言って、俺達が反応する間もなく話を始めた。

「アイツらが大量殺人の犯人の一味だ。アイツらを指揮している奴の息子が、快楽のために大量殺人を起こした。それを隠すために、事件に関わろうとしている連中を全員殺そうとしているんだろう」
「な・・・・・・・！！」
それじゃあ、つまり、俺達はこれからも狙われ続けるってことか！？
俺がそう言うと、
「いや、それはない」
と東先輩は一蹴した。
「関わる事をやめているということが証明されれば、狙われることは無い」
「・・・・・・」
「俺達は顔がわれていたから、他の誰か・・・・・・出来ればあいつらみたいな異常な奴らを空いて取れる奴を捜していた。それが」
「僕たちだった」
そこで始めて隼人は口を出した。
「なるほど。これでようやく繋がった。どうして、貴方が僕らのところに依頼しに来たのかが最大の謎だったんだ」
そう言って隼人は
「依頼終了だ」
と言った。
「な・・・・・・・！？いいのかよ、隼人！」
「このまま長居すれば、僕らがまるで義賊の仲間みたいじゃないか」
「・・・・・・だとして、それがなんになるってんだ？」
俺がそういうと、隼人はこちらを睨んだ。
「それをばれてしまえば、向こうはもう一度義族たちを狙いに来る・・・・・・すなわち、東先輩達を」
そう言って隼人は東先輩を見た。
「狙われるのは僕らだけでいい」

そして東先輩の方向へ歩く。
「？」
東先輩は不思議そうな顔をした。
そして、隼人は
「すみません」
殴った。
東先輩を、だ。
「隼人！？」
「さぁ。僕らを早くつまみ出せ。それで、僕らの仲間関係はなくなる」
「・・・・・・！？」
東先輩は驚いた顔を見せ、
「・・・・・・そういうことか」
そう言って笑った。そして、
「感謝する」
と1度言った後、
「やさしく、つまみ出せ」
子分たち2人がやってきて、「失礼するぜ」とだけ言って、俺達を引っ張った。

2人は何も言わずに俺達の体を投げ捨て、廃ビルの中に戻っていった。
「何なんだ？あいつらは・・・・・・」
隼人はそう言う。
「隼人？」
「義賊の頭領だって言うから、どんな奴らかと思ったら、ただの乱暴な奴だったね」
そう言って隼人は、1度僕にウインクした。

・・・・・・なるほど、演技ね。
「さっさと帰ろうぜ。今日はよくわからないのに狙われたりして忙しかったし」
「怪我してばっかだな。まぁ、ムカついたから殴っただけだけど」

家について、俺はキッチンに立った。そして夕食を作り始めた。
「これで、東先輩達は守られたんだろうか」
俺はそう言って、東先輩達が居る建物の方向を見やる。
「さぁ・・・・・・。必ずしも大丈夫とは限らない・・・・・・。もしかしたら、僕らの行動の意味がばれているかもしれない」
「ていうか、わざわざ殴った意味はあったのか？」
「そう。そこがポイントだ」
隼人はそう言って、食卓テーブルの自分の席に座った。
俺はそこにハンバーグプレートを置いた。
そして、自分も着席して、
「どういうことだ？」
と尋ねた。
「あれによって、実は僕らの命も永らえているんだよ」
「・・・・・・？」
「ああやって殴れば、僕たちは東先輩に頼まれて行動をして、挙句、仲間割れしたようにも見える」
「・・・・・・待てよ！それじゃあ――」
「そう。危険が及ぶのは東先輩の方になるだろう」
隼人は冷静にそう言って、ハンバーグを口に入れた。
「・・・・・・その言い方じゃ、策がありそうだな」
「そう。奴らから見れば、『僕ら』と『義賊』のどちらが敵なのか分かりにくくなっている。この錯乱状態なら、今日の内はまだ行動できないはずだ」

「けど、行動してくるかもしれないぜ？」
「だから、東先輩には警戒するように伝えた」
「どうやって？」
「僕らがつまみ出される時に、子分さんの1人にメモを握らせておいたのさ。念のために作っておいたメモを、ね」
そう言って隼人はニヤリと笑った。
・・・・・・相変わらず、やることなすこと先読みだなぁ、コイツは。
「それで？これからどうするつもりなんだよ」
「さっきも言ったとおり、恐らく奴らは今日は攻撃してこれないはずだから、僕らが明日、朝一で仕掛ける」
「・・・・・・なるほど。そうすれば、向こうの狙いは俺らだけに定まるわけだ」
「そーいうこと」
そして隼人は、どんどん食べ物を口に入れていく。

「ところで、犯人が殺した奴らが一体どんな奴だったのかについて調べてみた」
「ほぉ。で？どうだった？」
「全員犯罪者だ」
「・・・・・・え」
どういうことだ？
犯人は快楽のために殺していたんじゃ・・・・・・。
「もちろんそれだけじゃなかった。だけど犯罪者が多数を占めていたね。ああ、でも濡れ衣を着せられた人の時は犯罪者じゃなかったらしい」
「なるほど・・・・・・」
納得した瞬間だった。
何故か、思い出した。

この間出会った少年・・・・・・。
あの少年が・・・・・もしかしたら・・・・・・・。
突然そう思ったが隼人には言わなかった。
理由は分からない。

３８ ―そこまでだ―（前書き）

２００話到達。

ああ。何て長き小説。

38 ―そこまでだ―

次の日。
昨日の内にほとんど殺人現場を全て回り終えたので、今回の事件の犯人が捕まったらしい場所に行った。
路地裏のようで、3階建てくらいの建物が数多く立ち並んでいる。
「ここで最後の死体が見つかったらしい」
「つまり、最後の人間を殺した直後に警察に捕まったわけだ」
「正確には『そう思われてしまった』んだけど」
そう言って隼人は、現場へと少しずつ歩を進ませる。

「そこまでだ」

後ろから、何者かがそう言って俺達2人の頭部に『何か』を突きつけた。
「まだ関わろうとするのか」
声は言うほど渋くない。恐らくまだ高校生程度の年齢だろう。
つまり、あの謎の少年の関係者という事になる・・・・・。
「貴様らが関わるのは自由だ・・・・・と、言いたいところだが、そうもいかない」
「・・・・・」

「俺達の計画は、犯罪者を根絶やしにすることだ。その邪魔をする輩は、何者であれ容赦はしない・・・・・・が」
男はそう言って言葉を止める。
「その齢なら恐らく、中学3年生といったところだろう。卒業に意味がある年齢だ」
どういう意味だ・・・・・・？
「命は助けてやる。事情を話せ。今、この状態で」
「貴方が何者か分からない以上、話すわけにはいきません」
「話さなければ、答えは一緒だ」
「なら話しても一緒ですよね？」
「余計な事で俺の気を紛らわせ、隙を狙おうという手段なら防いでいる。今、この路地裏を挟んでいる建物の上には、世にも珍しい忍者とその『眼』が居る」
忍者・・・・・・そして、眼・・・・・・？
アクターなのか・・・・・・？いや、そんなことを考えている場合ではない。
どうするんだ・・・・・・隼人・・・・・・。
「・・・・・・僕と同じくらいの頭脳の持ち主のようで」
「貴様の頭がどの程度か分からんが、こういう修羅場は卒業式で経験しているのでな」
男はそう言って笑った。
「僕らは、あなた方が庇おうとしている人間の所為で代わりに捕まってしまった人を助けるために調査しています。ですから、あなた方が庇おうとしている人が、さっさと自首していただければ、とても助かるんですよ」
「なるほど。事情は理解した。ならば、事件が終わっていないことをしっかりと伝え、その濡れ衣を着せられた奴にある程度の自由をやろう。俺は警察関係者にも顔が利くのでな」
そう言って、男は
「しかし、解放はしない」

と続けた。
「俺達も、相手が解放されないほうが行動しやすいのは当然だ。社会は犯人が捕まったと油断して、無秩序に戻るはずだからな」
「・・・・・・じゃあ、あなた方を全員捕まえるしかないですね」
「それは一生無理だ。諦めろ」
そう言って、男は銃で俺達の後頭部を殴り、倒れた体を更に腕で押さえつけた。
意識は朦朧としている。隼人にいたっては気絶しているようだ。
「俺達は、絶対に捕まらない」
それだけ言って、男は身を翻して去っていった。
それから俺の意識もフェードアウトした。

「どうなってるんだ・・・・・・・？」
「コレは、やはり1度あの人のところへ行ってみるしかないね」
「あの人？」
俺は聞き返した。
「決まってるだろ？龍兵衛さんだよ」
「ああ・・・・・・。なるほどね」
「行こう。この事件・・・・・・何かおかしい」
そう言って隼人は立ち上がり路地裏から出て行く。俺もその背中を追って、路地裏から出た。

「・・・・・・」
警察署に入った瞬間、少し空気がおかしいのが分かった。俺にしか感じられない感覚だろう。
「何かあったのか？」
俺は軽く隼人に聞いてみる。隼人も直感的に異常を感じたようだ。

「・・・・・・まさか、本当に警察に手を回したのか・・・・・・・・？」
隼人は独り言のようにそう言って、ロビーの方に駆け出した。俺もその隼人を追っていく。
「すみません、各務原龍兵衛さんをお呼びいただけないでしょうか？」
「龍兵衛さんは、今、ちょっと立て込んでおりまして・・・・・・・」
「何とかなりませんか？」
「申し訳ございません、今は――」
「探偵！」
ロビーの女性の声を遮った主は、話の中心である龍兵衛さんだった。
「丁度良かった。こっちに来い」
龍兵衛さんはそう言って、俺と隼人を手招きした。
俺達は龍兵衛さんの元へと向かう。
「何かあったんですか？ロビーの人でさえ、貴方が立て込んでいるのを知っていたようですが・・・・・・」
「お前ら、あの殺人鬼の事件かぎまわってるんだろ？」
突然龍兵衛さんはそう言って、こちらを見る。
「ええ、まぁ・・・・・・」
「突然、今捕まっている奴が犯人じゃないと、警視総監が言ってきやがった」
「警視総監・・・・・・・！？」
それって・・・・・・・！
じゃあ、あの男は・・・・・・・！？
「そして、その証明として新たにもう1つ事件が起きた」
「新たな事件というのは・・・・・・？」
「人が1人殺されたよ。例によって例の如く、犯罪者だ」
お前らもそのくらいは調べてんだろ？
と、龍兵衛さんはこちらを見下ろす。

「・・・・・・」
「でだ。お前らが居るって事は、よ」
龍権兵衛さんは少し身をかがめた。
「そういうことなのか？」
「・・・・・・少なくとも、多少以上の関わりはあるでしょう」
「・・・・・・・そうかよ」
はぁ・・・・・・。と、龍兵衛さんは溜め息をついた。
「まぁいい。それより、お前ら俺に用があるんだろ？」
「ええ、今、大体済みましたけど、１つお願いがあるんです」
「何だ？」
「その容疑者さんに会わせてください」
「・・・・・・いいだろう。面会ってことだな？」
ついて来い。と龍兵衛さんは言って、廊下を進む。
隼人は少し神妙な顔をして歩き始める。僕もそれを追いかけた。

39ー俺の名前はー

「ここだ」
龍兵衛さんは、その扉の横にもたれかかった。
「俺はここで待っている。好きに話せ」
「ありがとうございます」
隼人はお礼を言って、部屋に入る。俺も頭を下げてから部屋に入った。

「・・・・・・こんにちわ」
「・・・・・・」
隼人の挨拶にどうでもよさそうな顔をして、こちらを見る。
「貴方が容疑者さんですね？」
「・・・・・・」
「貴方が殺人を犯していないことは分かっています」
「・・・・・・」
「ですが、警察は貴方を拘留した状態から話すことはしないでしょう」
「・・・・・・」
その容疑者さんは、俯いたまま返事をせず沈黙を守り続けている。
顔が見えない。

「・・・・・・あの、返事してもらえます？」
「・・・・・・」
「僕ら、人に頼まれてきたんです」
「！」
ようやく、容疑者の人が静かに顔を上げた。ロングヘアーで顔が隠れて表情が見えない。

「・・・・・・」
「東諒という人です」
「・・・・・・へぇ。東に頼まれてきたんだ。ってことはお前ら相当優しい奴なんだな」
先ほどまでの沈黙とは裏腹に、とても気さくに話し始めた。
「ああ、最近あんまり口開かなかったから、だるくてしょうがないや。まぁ、それもある意味楽しみではあるか。それにしてもこんな事件に首を突っ込んでくるなんて珍しいね」
「・・・・・・」
唖然としてしまった。
先ほどまでの沈黙が嘘のような饒舌だ。
「ああ、失敬。申し遅れたね」
そう言って、その人は長い髪を後ろに回す。
「え・・・・・・」
その顔は、綺麗に整っていて、格好いいという印象だった。
しかし、どうみても・・・・・・。

「女・・・・・・!?」
「ん？東から何も聞いていないのか？まぁいいや。アッハッハッハッハ」
女性は、そう言って快活に笑ってから言った。
「俺の名前は今日元（きょうげん）　終（おわり）。君の言ったとおり、冤罪を掛けられているかわいそうな女性だよ」
『女性』のところで俺を見て、にやりと笑った。

「では、今日元さん」
隼人は特に気にした様子もなくそう言って話を始めた。
「いくつか質問しても？」
「いいぜ。好きにしな。答えられる事には答えてやる」

今日元さんはそう言って笑う。
そして、笑ったのも久しぶりだな、と言った。
その発言も気にせずに隼人は、
「では遠慮なく」
とだけ言って、話を始めた。
「じゃあ取り敢えず、自己紹介がてらに僕らのことを紹介しつつ、貴方のことも聞いて行きたいと思います」
「そう。好きにどうぞ」
「僕は王城隼人」
「王城って言うと、あの王城の関係者か？」
「その王城の御曹司です」
「ああ、そう。あ、ゴメン、続けてくれ」
「そして彼が――」
「嘉島奏明です」
俺は隼人が紹介する前に自らの紹介を始めた。
「そして、俺は残留思念（リメンバー・リメイン）です」
「僕は超脳力（シンキング・キング）です」
「へぇ・・・・・・依存者か」
今日元さんはそう言って笑った。
依存者・・・・・？
「アクターの別名の事だよ」
隼人が言うと、
「ああ、お前らはそっちで呼ぶのか」
と今日元さんは、意味深に言って笑った。

「やっぱりご存知なんですね？」
「ああ。俺は中でも、よく知っている方だ」
「貴方の力は・・・・・・？」
「『トランスミッション』。お前らで言う別名なら『電波変換』だ」
「・・・・・・隼人」

俺は隼人に語りかけた。

「何か？」

「俺が知っているゲームに同じような言い回しのを聴いた事がある。気のせいだろうか」

「それは木の精」

「森の精」

駄洒落であわせて、俺達はコレに関しては話を避ける事にした。

「じゃあ、質問を続けますね。どうして貴方は今捕まってるんでしょうか？」

「それだよ。聴いてくれよ、おい」

「聞いてますよ」

「俺、超絶方向音痴なんだよ」

・・・・・・・。

・・・・・・・ん？

・・・・・・・。

「えっと・・・・・・？」

隼人も同じ疑問だったようだ。

つまり言いたいのは、『だから？』だ。

「俺が家に帰ろうかなって思ってた瞬間に、自分の居る場所が分からなくなっちゃって、そんでうろちょろしてたら、路地裏に居た。そしたら急に気絶しちゃって」

アッハッハッハッハ。

と快活に笑った。

「・・・・・・あの、どうしてアクターの能力を使わなかったんですか？」

「知らん。よく分からんが瞬間的に気絶させられたから。そしたら警察が来てそれで、怪しい奴だっていわれて捕まっちゃったんだよなー。それはもう流れ作業のように」

この人はどこまで本気で言っているんだろう。

「あ、でも、俺のことは放っておいてくれていいぜ。俺もそこまで追及したいわけじゃないし。それに俺の能力を使えば、警察署に居ても飽きないからな」

今日元さんはそう言った。

「だから、怪我はすんなよ」

「・・・・・・しかし――――」

隼人が口を開いた時、同時に扉が開いた。

「面会終了だ。残念だがな」

そう言って龍兵衛さんが現れた。

「ったく・・・・・・警察官ってのも楽じゃないぜ。上に振り回されまくりだからな。何かあったらすぐ連絡しろよ」

龍兵衛さんは少しやつれた様子でそう言って、俺達を送り出してくれた。

「帰るか・・・・・・」

「ゴメン。僕は少し、町のほうで用事がある」

「そうか。じゃ、また後で」

俺は先に帰る事にして、鍵を預かった。

夜ともなるとネオン街は若干、騒ぎ方が荒くなる。

が、俺達の家の住宅街はどちらかというと田舎なので、そんなに気にする事も無い。

そして田舎道を歩き、住宅街に着いた。ここから、数メートルで俺達の家だ。

「なぁ」

突然、隣の路地から声を掛けられる。
「お前、何者だ」
ソイツはそう言って俺を見た。
「・・・・・・アンタ！！」
この間屋上に現れた男だった。
「アンタ・・・・・・殺人鬼だろ？」
俺は冷静さを取り戻しつつ尋ねた。
「そうだ。お前は何だ？よく分からないが、強い気配がする」
「・・・・・・」
「殺しはしないけど・・・・・・、反抗勢力だよな？」
そう言ったときには俺の体にナイフを突きつけようとしていた。
「うぉわ！！」
な、何してくれてんだコイツ！
「お前・・・・・・！？」
「避けれたか・・・・・・。益々面白い、僕にとっては」
「何なんだよ、お前！」
「僕は如月。犯罪者抹殺計画を実行している殺人鬼だよ」
少年はそういう。
「勝手にやってるからばれるとアイツに怒られるんだけど、まぁ気にしない方針で行く」
さぁ、自己紹介はこのくらいでいいか？
如月はそう言った。

４０ー シンデレラだー（前書き）

分かる人には分かる。コラボ！

僕の作品は、世界観ごと変わらない場合、同じ世界なので。時間軸は違いますが。

40ーシンデレラだー

「うわ！」
俺の反応速度を上回る速度で、如月はナイフを突きつけてきた。
「避けるなぁ・・・・・・」
「こっちも死にたくないんだよ！」
俺は叫んだ。
「僕のナイフを避けたのはこの世で・・・・・・・・・・・・・・うん、まぁ数多く居るよ」
「何だよ！じゃあ言うな――」
ナイフが更に俺を狙ってくる。今度はどうやら、首を狙って斜めに切りかかってきているようだ。
「人の発言は最後まで聞け！」
「僕はそんなことには興味は無い。君の力に興味があるんだ」
如月はそう言って、笑った。
「何なんだよ！」
いい加減避けるだけでは何とかならないと思い、俺も武器を調達する事にした。
「作るから待ってろ！」
俺はそう叫んで、ブロック塀を左手で叩く。
ブロック塀の一部が形を変え、ナイフと同型の形をする。
「こっちは本物。そっちは石だぜ？」
「だからなんだ。量産型だぜ。しかも大きさだって変えれる」
「ああそうですか」
如月は躊躇なく、ナイフを投げた。
「はぁ！？」
唯一の武器を投げるなんて・・・・・・どうかしてる！！
それでも俺は思わず避けるしかなかった。
「だろうな」

そのとき如月は既に目の前に居て、拳は俺の目前まで迫っていた。
「やば――」
俺はその状況から、上半身だけ倒して拳を避ける。
あ。しまった。
「隙だらけだ」
如月はそう言ってその状態から俺の体を蹴り飛ばした。
俺の体はボールのように1回跳ねてから地面に倒れこむ。
「強ェ・・・・・・！！」
コイツただの人間だ・・・・・・よな？
「お前・・・・・・アクターなのか？」
「アクター？英語の授業の話か？悪いけど、僕は高校は通ってないんでね」
冗談を言っているような風潮ではなく、恐らくマジだ。
てことは違うのか・・・・・？
「ああ、もしかして先の妙な能力が、そのアクターって奴だな？」
「・・・・・心当たりは？」
「あるぜ」
如月はそう言ってナイフを持った。先ほど投げたナイフだ。
「殺すことだ」
如月はそう言った。

発言の真意は分からないし、殺人鬼なのだからそのくらいは当然だろうと・・・・・。
だがしかし。

明らかな殺意。そして俺自身の感覚。
それらから分かる。
「これは・・・・・アクターじゃない」
純粋な殺意。作り物じゃない殺意。
殺すことだけなら何にでも長けている。

そんな殺意。
何なんだ・・・・・・コイツは！！
「何だよ、なんかやる気なくしたのか？」
如月はそう言ってナイフをギラつかせる。
「・・・・・・お前が犯人なんだよな？」
「そうだ」
「じゃあ、お前を殴って捕まえてそれで俺の依頼終了だ」
先手必勝だ。
俺は如月より早く動く。
如月も俺の動きをみて動き始めた。

「そこまでだ」
俺の背後から声が聞こえたかと思うと、如月の体が吹っ飛んだ。
「・・・・・・！」
後ろに居たのは、東先輩だった。
バイクにまたがり、珍しく1人で立っている。
「悪いな、嘉島。ここからは俺のターンだ」
そう言ってバイクから降りる。
「・・・・・・何をした？」
如月はそう言って東先輩を睨む。
「タイヤを投げた」
そう言って東先輩は手の上に小さなタイヤを作る。
「・・・・・・この街にはこんなのばっかりなのか？」
如月はそう言って。
背を向けて走り出した。
「逃げるが勝ちだな」
如月の捨て台詞が聴こえる。

「無理だぜ」
東先輩はポケットに手を突っ込んだ。
そしてそのまま走り出した。
「！？」
そして如月に追いついた。
「何で・・・・・・！」
「俺の靴には車輪とエンジンがついているんだよ」
そう言って、如月をラリアットの要領で後ろから殴り倒した。
「ぐぁ！」
如月は叫んで、床に伏す。
そしてその首を掴んで東先輩は如月を押し倒す。
「捕まえたぜ・・・・・・！」
「僕の殺人を舐めるな」
如月はそう言ってナイフを後方に向かって投げた。地面に伏した状態でだ。
そしてそれを見もせずに両足の靴の間で掴みなおす。
「！」
その状態から膝を曲げた。つまり、東先輩の方に向かっては靴は動く。
ザシュ！
と。
東先輩の腕に突き刺さる。
「ぐ・・・・・・！」
東先輩は思わず、手を離す。
その瞬間に如月は態勢を取り直すと、すぐに動いて東先輩の腕からナイフを抜いた。
「コイツは返してもらうぜ」
「逃がしゃしねーぞ」
そう言って、２人は睨む合う。

「はい、残念」

そう言って、如月の後ろに黒い影が降り立った。
「如月。勝手に行動するな。お前1人の行動で全員やばくなるんだぜ？」
「あー・・・・・・」
如月はそう言って残念そうに頭を掻く。それから言った。
「悪いな。だけど来たのがお前でよかったよ。神道とかが来たら僕は――」
会話している2人の後方から3人の影がやってくる。
「如月ィ・・・・・・」
「げ」
「勝手に行動するなといっただろうが！！」
男はそう言って如月を睨む。
「神道！落ち着け！」
「貴様は何故こうも自分勝手に――」
「おい！」
思わず俺は叫んだ。
「お前・・・・・・あの時の男だろ・・・・・！」
「ん・・・・・・ああ。それがどうした」
何の事無いように『神道』は答える。
「お前ら何なんだ・・・・・・」
「如月　幽鬼」
「神道　結弦」
「羽賀　祝人」
「橋田　明日香」
「無花果　弥生」
全員がそう言って名を名乗る。

「シンデレラだ」
『神道』がそう言った。
「シンデレラ・・・・・・？」
「俺達はシンデレラと名乗り、様々な場所で犯罪者駆除を行っている。そういう面子なんだよ」
『羽賀』が答えた。
「それより、如月。もうここから離れるってさ」
『橋田』がそう言って如月を呼ぶ。
「え！？何で！？」
「聴いてなかったの？ここでの犯行が大きくなりすぎて、模倣犯が出たわ。しかもその所為で罪無き人が捕まってしまった。それは私達の主義に反するの」
『無花果』がそう言って、如月を引っ張る。
「と、言うわけだ。じゃあな」
神道の発言を合図に、他の４人も道を引き返していく。
「逃がすわけねーだろ！」
東先輩が動こうとするが、それを
「ああ、そういえば」
と神道が止めた。
「貴様らが免罪だと言っているあの女・・・・・・。あの女が捕まった事件は、俺達の模倣犯の犯行だ。気絶したのもその模倣犯の所為だろう。だから俺達を怒るのは間違えている」
「信じられないな」
「信じなくてもいい。だが、２つ教えておいてやる。１つは、俺達を相手にすれば間違いなく貴様らは明日のうちには死体だ。いくら妙な力を持っていようとな。そしてもう１つは、犯人は貴様らのような奴らだから、貴様らに任せてやろうという考えだ」
そう言って神道は歩く。
「中央街の１０階建て以上のビルが立ち並ぶ場所だ。そこに行けば貴様の仲間の頭脳なら分かる」

何故だか分からないけれど、俺と東先輩はその場を動けずに居た。

41ー『隼』の背中ー

家に帰ってきた隼人に奴らの話をした。
「そんな事だろうと思っていたよ。僕も違和感を感じていたところだ」
隼人はそう言って、ソファに座った。

あの後、取り敢えず東先輩を家につれて帰って、応急処置をした。
そして隼人は帰ってきて言ったのだった。
「違和感？」
「そ。違和感」
「・・・・・・どんな？」
「話すと長くなるけど」
といいつつも得意げな顔をして彼は言う。
「僕たちが殺人現場を歩き回っていた時に出会った謎の連中は、集団行動で、しかもアクターを理解していたうえで行動していたように思う。対して如月たちはアクターのことは知らないし、集団で行動しているような様子も無い・・・・・・んだろ？」
「ああ。あの5人で『シンデレラ』と名乗っていたのだから、恐らくそういうことだな」
東先輩が代わりに答える。
「つまりは模倣犯・・・・・・ということだろう」
隼人はそう言って、
「急いでココを出るよ」
と続けた。
「何で？」
「この家が最悪、破壊されるかもしれない以上、このまま居るわけには行かない。模倣犯側はどうも、兵力と武力が優れているようだからね」

「で、どうするんだよ」
「まずは警察署だ。あそこなら模倣犯たちも狙ってはこれない。話をして龍兵衛さんに入れてもらおう」
「俺も入れてもらえんのか？言っても暴走族だぜ？」
「分からない。でも今は時間が無い。早めに行動しておく事が大事になってくる」
隼人は言いながら自分の部屋へと歩き出す。
「アイツは行動が早いな・・・・・・」
「誰よりも早い行動・思考をする人。で、『隼』のような『人』だからな」
「なるほど・・・・・・」
東先輩は笑うと、玄関に向かって歩き始めた。
「さてと・・・・・・」
これからの行動に身を任せる前に、俺なりに考えておこう。

東先輩の情報は、如月のことから間違いだったと推測した。
しかし、あの情報がもしも模倣犯のみのじょうほうだったとすれば、あながち間違いではなかったということになる。
と、いうことは、だ。
犯人はガキで、恐らく金持ち属性の人間だな。さらにアクターである可能性が高いわけだ。となればそれは俺と隼人の出番であるってことか。龍兵衛さんに丸投げして、俺達はのんびり過ごすことも難しい。そもそもその気になれば犯人達は警察署だって破壊しかねない。

まあ、目の前に困った人が居る以上、俺が動く理由になる。
動かないわけには行かないよな。

「ソウメイ君」
隼人はそう言って、リビングに顔を出す。

「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ？」
「ＯＫ，ｌｅｔ'ｓ　ｇｏ！」
今宵は誰を助けるのか・・・・・・。
『隼』の背中に乗って、頑張るとするか。

42－後は探偵に任せるぜ－

「いいだろう。お前らの事情は把握できたからな」
龍兵衛さんはそう言って快く俺達全員を入れてくれた。
それから奥の部屋へと招き、部屋の鍵を閉めた。それから俺達を座らせて
「現状を確認するぞ」
と言った。
「あの女は濡れ衣を着せられている。そして、その犯人はこの街から逃げ出した・・・・・・。そうなれば俺達の管轄ではないが、その犯人達の模倣犯が存在し、未だにこの街に存在しているということだな」
「そういうことになります」
隼人はそう言って、外を見る。
「ここももしかしたら、大変な事になってしまうかもしれないんですが・・・・・・」
「心配いらない。今回の事件に当って、警察のお偉いさんたちが来ている。恐らく模倣犯はお前らみたいなやつらなんだろう？」
露骨な言い方を避けて龍兵衛さんは自分の推理を繰り広げた。
つまり、警察のお偉いさんたちはアクターについて情報を知っている、ということだろう。だが、龍兵衛さんも立場上、露骨な言い回しは出来ないわけだ。どこで聞き耳を立てているか分からないから。

「ああ、そういえば」
突然そう言って龍兵衛さんは東先輩を見た。
「東諒だったか？」
「そうだ」
「あの女と面談しなくていいのか？アイツを助けようとしたのはお

前なんだろ？」
「今日元を俺と関わらせるわけには行かないんでな」
東先輩はそれだけ言うと、それ以上話をさせないかのように腕を組んで俯く。
「・・・・・・よく分からんな」
「あの、代わりに面談に行ってきていいでしょうか？」
俺はそう言って挙手をする。
「？いいけど・・・・・・」
龍兵衛さんがそう言って不思議そうな顔をした。

場所を思い浮かべながら歩く。
やはり夜遅くなると一般人の姿は見られなかった。しかし、警察の人々は忙しなく動いているようだ。お疲れさまです。頑張ってください。

「確か・・・・・・あった」
部屋に到着して、ノックもせずに俺は入り込む。
「嘉島か」
今日元さんがそこに居た。
「ということは、東は面談を拒否したってことか」
「・・・・・・あの」
俺は自らの疑問をぶつける。
「東先輩とはどういうご関係でしょうか？」
「・・・・・・うん。やっぱりその話題だよな」
今日元さんはそう言って、天井を見る。
「東も俺も、隼人みたいな立場でね」
そう言って俺を見た。
隼人みたいな立場・・・・・・。
「御曹司・・・・・・と、お嬢様ですか」
「そういうこと。んで、俺はそのお嬢様なんていう言われ方が気に

入らなかったから、自らを『俺』って呼ぶことに決めた」
「・・・・・・」
「それでも、向こうは俺をお嬢様だと呼ぶ。そして、その身分に縛られる」
「・・・・・・」
「で、挙句の果て逃げ出しちゃったのさ」
そう言って今日元さんは笑う。
「・・・・・・それで・・・・・・」
「東が義賊として行動している原因は俺にある。アイツの義賊としての行動の1番最初が俺だったから」
今日元さんは昔話を始めた。

「俺が家を飛び出してから、ものの数ヶ月だ」

今日元さんはそう言って続けた。

その時は中学3年生で、丁度卒業式を終えて、中学生でも高校生でもない時期を見計らって家を飛び出した。出来るだけ計画してから行動していたつもりだ。生活用品を準備して、バイト先も見つけてから家をでていたからな。
バイト先でとにかく自らの生活費だけ稼いで、路上で生活していた。家に関しては考えていなかったわけではないけど、足がつくようなことはしたくなかったから。

しばらくして、俺は迷子になった。
昔から方向音痴で、迷子になる事が多くてね。だが、俺は既に自らの才能を持っていたから、まぁ大体何とかなっていた。
しかし、予想外な事が起きた。
そこがチンピラの溜まり場だったことを俺は知らず、そのままそこをうろついていた。

後はご想像通り、俺は奴らに捕まった。
で乱暴されかけた。
まぁ犯(おか)されかけた、ということだな。

そこに現れたのが、東だった。
第一声は、大きな声で

「死ね、お前ら」
だったよ。
別に俺を助けに来たわけではなくて、他の女にも色々と手を出していた連中が、俺を連れて行っているのを見て、我慢できなかったらしい。
東はその時点では、俺みたいな力は持っていなかった。
けど、そのチンピラたちは東の相手にならなかったよ。

「お前も俺と同じなのか」
東はそう言った。
「俺もつい最近出てきたばかりだ。今から俺は暴走族を作る」
「犯罪か・・・・・・」
「いや、俺は族は族でも義賊になる！」
堂々と彼は言ったね。
『ぞく』の字が違う事を知らなかったらしい。

どうも義賊になるための第一歩だったらしいよ。つまり俺は踏み台に過ぎなかった、と・・・・・・。
言いすぎ？
ああ、そうだな。それは東に悪い。少なくとも俺は助けられたの

だから。
それをキッカケに俺は東に協力し始めた。同様に東もそれをキッカケとして、力を持ち始めた。
それだけだった。
それだけで私は十分だったのさ。
なのに・・・・・・。

「ああ、そうだ」
そう言って今日元さんは話を打ち切った。
「俺が今回、路地に居たのは、呼び出されたんだ」
「呼び出された・・・・・・！？」
つまり。
つまりソイツが犯人の関係者だという事では・・・・・・！？
「呼び出したのは、俺の父だ」
「え・・・・・・！？」
「いくら反抗して出て行って気に入らなかったからといって、俺を犯罪者にしようとするか、普通？」
分かっていたのか・・・・・・。
「俺の話を聴いてくれたお礼だ。本当は黙っていようと思ってたんだがな」
「・・・・・・どうしてですか・・・・・・？」
「こんなこと言ったら、お前らは犯人だけを倒しに行くだろうけど、東はそうは行かない。俺の家族も潰しにいく。まぁ別に俺の家族はどうなろうと関係ないんだけど、そんなことになれば、東は犯罪者だ」

そう言って今日元さんは、天井を見た。

「これ以上東を関わらせる訳には行かない」

東が俺に迷惑を掛けないように関わらないのと同じだ。

と続けた。

東先輩は恐らく気付いていないだろうが、今日元さんは知っていた。

東先輩が今日元さんに迷惑を――心配をかけないように努力している事を。

「さて。後は探偵に任せるぜ」

今日元さんはそう言って、手錠をパキッと破壊してから

「頑張れ～」

と気の抜けた応援をして去って行った。

どうでもいいけど、東先輩の心配はするけど、俺達の心配はしてくれないんだな。

まぁいいや。

俺もその後部屋を出て、廊下を歩く。

特に異変も無い。

安心安心。

そして元の部屋に戻ると。

その部屋だけが綺麗に爆発していた。

43 ―しょうもない。―

どうなっている・・・・・・・！？
部屋を開けるまで気付かなかったくらいに、他の場所には被害はなく――当然、隣接する壁、窓、扉は全くへこんだり膨らんだりする事もなく、この部屋だけが爆発されたような印象を受ける。

「まさかの襲撃だぜ・・・・・・」
龍兵衛さんはそう言って、後ろから現れた。
全く傷は見られず、衣服に多少の汚れがついているくらいだ。
「無事だったんですか・・・・・・？」
「全員ちゃんと無事だった。あの2人のおかげでな」
そう言って、近くの椅子に座らされた。
「探偵が誰よりも早く気付いて、その後あの、暴走族少年が手からバイクを出して、爆破の被害を抑えた。おかしいとは思っていたが、やっぱりアイツもお前らと一緒なんだな」

龍兵衛さんはそう言って渇いた笑いを上げた。
「・・・・・・」
「全く、この世界は何時からこんな意味不明になってたんだ・・・・・・」
「隼人は昔から――卑弥呼が居た時代から、こんなものだったと言っていました。気付いたかどうかが問題なだけだと」
「じゃあ、知りたくなかったものだな」
龍兵衛さんはまたも笑う。
「あの2人は行ったぞ」
「そうですか」
「で、お前も行くんだろ？」
「残念ながら当然です」

「じゃあ、気をつけていけ。悪いけど手がかりは何一つ無いから頑張って捜すんだな」
「はい。でも、心配要らないですよ」
俺はそう言って、爆破によって空けられた壁に立った。

「手がかりはありますから」
俺は走り出す。

そして携帯電話を取り出した。
「・・・・・・」
まずは待機。
しばらくすると電話が鳴った。
「電話してきてくれると信じてました」

『おかしなことになってるな』

通話相手は今日元さんだった。

「彼らはどこに居ますか？」
『俺は見える風景を伝える以外の事は出来ない。地名は覚えてないし、見ただけじゃ何処かも分からないからな』
「じゃあ、それでお願いします」
『隼人と東は別行動中だ。東はバイクで走れる範囲を走っている。隼人は街の中を探索中』
「つまり向こうも見つけられてないということか・・・・・・」
ありがとうございました。
俺はそれだけ言うと、通話を切って走り始める。
「さてと・・・・・・追跡は俺の十八番だ」

先ほど言った手がかりとは、俺がこの右手で触れた記憶に基づい

て、犯人を捜索する事である。
記憶から相手の情報を揃え、それと同調するものを地面などの記憶から捜していく。
集中力を使うが、かなり正確な足取りを終えるのだ。

「・・・・・・見つけた」
再度、俺は足の動きをせかす。

・・・・・・どうでもいいけど。
本当にどうでもいいんだけれど。
『手がかり』を捜すのは俺の右『手に掛か』っていて、それは俺にとっては『お手の物』なんだよな。
あー、しょうもない。

４４ー残念でしたー

「みーつけた」
俺はそう言って、男の前に立った。
広い公園。
しかし真夜中ともなると人は１人も居なかった。そして風でブラブラと無造作に揺れている片方のブランコの横のもう１つのブランコに、悠然とした面持ちで男は座っていた。
「・・・・・・」
「かくれんぼは終わりにしようぜ」
「ああ。そういうことね」
男は立ち上がった。
「見つかるはずが無いって聞いていたんだけどな・・・・・・」
「俺の存在を知らなかったんだろうな」
「だと思う。俺は写真でお前の顔は見たが、お前までそういうのだ（・・・・・・）ということは聞いていなかった」
「だろうな」
隼人は昔からコイツらで言う『そういうの』と関わり続け、東先輩はここ最近でコイツらと関わり続けている。
それに対して俺は、コイツらと関わった時も目立った行動をしてないし、『そういうの』に関わり続けたのはごく最近だ。
俺の存在が割れていないのもまあ当然だろう。隼人と東先輩はブラックリストだろうけど。
「これからどうするつもりだ？」
「アンタを捕まえて、警察に突き出す」
「俺みたいなのが、お前に捕まると思うか？ましてて、警察官ごときが俺を捕まえたままにしておくのはほとんど不可能だ」
「・・・・・・」
それもそうだ・・・・・・。

いや、ここで納得している場合じゃない。相手のペースに飲み込まれる訳には行かない。
「どうだろうな」
「・・・・・・どういうことだ？」
どういうことなんだろうな。自分でも考えながら言っているのだから、俺に聞かないで欲しいくらいだ。
「警察にも『そういうの』に対する特殊対策部隊が存在するんだぜ。お前くらい捕まえられるだろう」
「嘘だな。そんなもの存在する情報なんて聞いたことが無い」
ばれた。しかし、男も多少焦りを見せている。
「嘘じゃないぜ。俺はその内の1人だからな」
「・・・・・・何だと・・・・・・」
掛かった。
飲み込めそうだ。
「特殊対策部隊だからな。俺みたいなガキでも出来るわけだ」
「という事はあの眼鏡の少年もか・・・・・・」
男はそう言って俯く。
「・・・・・・ここは戦うよりも逃げた方がよさそうだな」
「逃げられると思ってんのか？」
「逃げられる」
男はそう言って立ち上がる。
俺と男の距離は2メートル程度。
ともすれば、逃げられるはずが無い。
「お前の能力は分かってるぜ」
「・・・・・・本当に分かっているのか？」
男はそう言って余裕の表情を見せた。
「俺の能力はお前の斜め上を行くぜ？」
瞬間。
男は動いた。
その動きにあわせて動く。

「反応速度はすばらしい。身体能力は高そうだから、物理的に逃げる事は不可能だな」
「分かったら大人しく捕まれ」
「戦えば負けるだろうが、逃げる事は可能だと信じているぜ」
男はそう言って、俺の方に向かって走りこんできて拳を振るってきた。
「くっそ・・・・・・！」
ギリギリでかわせそうだったが、無理だった。拳は俺の頬をかすめる。そしてそのまま素通りする。
立ち位置が逆になり、俺はブランコ側に転がり込んだ。
「戦わないんじゃなかったのかよ！」
俺はそう言って、男のほうに飛びついた。
「俺には下準備が必要なんだよ」
男はそう言って、突っ込んでいる俺から離れるように後方の空に高く飛んで、俺を指を差した。

「残念でした」

瞬間。
俺の体は空気に張り付いた。
傍から見れば、とても上手なパントマイムだったろう。

「・・・・・・なんだ・・・・・・・・これ・・・・・・・・！？」
俺はその壁に手を添える。ガラスを触ったような感覚を得た。
「俺の力だよ」
「・・・・・・・何だと・・・・・・・・」
「どうせお前のことだから、爆発の能力だと思ったんだろう？残念だったな」

男はそう言って、俺の手のひらに重ねるように手を置いた。
「お前は俺の能力も分からず――何も見えずに（・・・・・・）逃げられる。大丈夫だ。俺が3キロ以上離れれば解除される仕組みになっている」
何も見えず・・・・・・！？
どういうことだ！？
「くっそ！」
俺はその壁を思い切り叩いた。
ドンという鈍い音がした。
俺の拳が痛いだけだった。
「今度会うときは、殴り合えるくらい強くなっとくんだな。少年」
男はそう言って、歩き去っていった。

気付いた時には俺は公園の中央に寝転んでいた。
どういう経緯があったのかは全く覚えていない。

45 ―笑う。―

「・・・・・・」
右手の力を使えば追跡は出来る。
1日かければ、間違いなくあの男を追いかけることも可能だろう。
だが。
追いかけたところで俺にはどうにも出来ない。先ほど同様、撒かれてしまうだろう。それに行き着いた先には恐らく化物が揃っているに違いない。
今この状況で俺がやれることは、ない。
「・・・・・・帰ろう」
俺は地面に向かって呟いて、足を進めた。

「お帰り」
帰ると隼人がそう言って迎えてくれた。
いや、迎えてくれたというには少し乏しい出迎えだった。
扉を開けて、玄関に倒れていた。
「酔っ払いか」
「こう見えて――」
と言いかけて、少し黙った後、
「見た目どおり、僕は運動はあまり得意じゃないんだよ」
と言い直した。
「走ってたのか？今まで」
「いや。帰ってきて、10分は経ったかな」
「何で倒れっぱなしなんだよ・・・・・・」
俺はそう言って隼人の横に座り込む。
「体力が無いもので」

「ていうか、キングダム使って何とかできないものなのか？」
「アレは異常に精神力を使う。慣れたら戦いにも利用できそうだけど・・・・・・それにそれ以前に、アレは本来の世界とは別次元にあるといっても過言ではないし、対象者がいないと使用できない」
「対象者ってのは？」
「基準が無い。どうも、そのあたりは『アイツ』が勝手に決めている」
「アイツ・・・・・・？」
・・・・・・。
ああ、そうか。
「僕は会話したこと無いけれど、アクターだね」
「会話って・・・・・・」
「僕も良く分からない。それ以上聞かれても何とも答えられないよ。それより」
手早く話を切って、追求を避け、さらに話を転換する。
行動が早い。
「君は一体何をしていたんだ？」
「・・・・・・」
「いやいや、深い意味は無いよ。僕らが居なくなってから君が帰るのは遅かったから、聞いているだけだよ」
「・・・・・・別に何も」
「本当に？」
隼人はそう言って尋ねる。
「・・・・・・」
「例え君が犯人を追跡する事が出来て、見事見つけることが出来たけれど、『聖域指定（ゼロ・ジャミング）』によって負かされて撒かれたとしても、僕は責めたりしない」
「知ってたのかよ・・・・・・」
全く。
お前は本当に「見透かした野郎だ」と隼人が先に言った。

見透かされた。
「いやいや、僕は僕の予測を話しただけだよ」
「嘘つけ」
「それにしても君はテンプレのような天才的な展開だね。さすが主人公」
「俺は主人公じゃない。それより、現状の話しをしろ」
「ふむ。じゃあ能力の話から」
そう言って隼人は体をようやく起き上がらせた。
「聖域指定（ゼロ・ジャミング）」
聖域指定（ゼロ・ジャミング）とは、科学的に根拠を見出すとすれば、空間把握能力を司る器官をかき乱す事で違和感を感じさせる、ということらしい。
どんな人間でも経験した事があると思う。
階段を下る際にもう一段あると思って足を踏み出した瞬間や、逆にもう階段は無いと思って歩いた瞬間に、違和感を感じた事があるだろう。
アレを瞬間的に起こすのが、聖域指定だ。
脳や視線ではそこには壁は無いと判断しているが、実はそこには壁が（・・・・・・）あったのだ（・・・・・）。
「君が謎の男を見つけた公園を君はしっかりと見たことがあるのか？」
隼人はそう言った。
「無い・・・・・・」
「だろうね。だったらすぐにも違和感に気付いたはずだ」
そう言って隼人と俺はその公園に立った。
朝だというのにも拘らず、人っ子一人見当たらない。だからこそとも言うが。

いや――。
それよりもブランコだ。
「あれ・・・・・・？」
ブランコが見当たらない。
「ブランコが無いんだが・・・・・・・？」
「あるよ。あそこに」
そう言って指差したのは、壁だった。
「は？」
「あの後ろにあるんだよ。この公園はちょっと特殊なのさ」
「・・・・・・って、待てよ！それじゃ俺が立っていたはずの場所の後ろには――」
「壁があったはずだよね」
冷静に隼人は言った。

俺がブランコのあるところに現れた瞬間、あの男が聖域指定を発動させて、壁を感じないようにした。
アイツの前に立つまでは壁を見ていて、立った瞬間に能力を使われ、壁を忘れたという事か。
そして俺を攻撃しながら壁を飛び越えた。そういえば1度、異常に高く飛んだ覚えがある。
上手い事しやがる。俺が騙されるわけだ・・・・・・。

「でも、それって幻覚ってことなのか？」
「まぁそういう類になる。警察署であったのは、他人の意識をその部屋から反らしていたから。空間に関する幻覚だと思ってくれ」
そう言って隼人は笑った。
「でも普通の人間には避けられないね。いくらそういう類に強くても」
「・・・・・・じゃあどうすれば？」

「その場所の構造を把握して場所を記憶する。それによって、明らかにおかしいものを削除していく。これが一番確実」
「そんなことが出来る奴はお前くらいだよ」
「いやいや、僕でも初めてきた場所では分からないよ」
そう言って隼人は笑顔を浮かべる。
「あとは、脳を単純化させて、幻覚対する態勢をつける」
「バカになれって事だな？」
「何も考えるなって事だね」
できるかそんな事。
少なからず何か考えるだろう。
「まぁ・・・・・・。後はもうひとつあるよ」
「あるのか？」
「さて、じゃあ行こうか」
「・・・・・・」
そう言って隼人は歩きだす。
俺はソレを追っていく。
「どこに行くんだ？」
「犯人達のアジト」
隼人は笑う。
「・・・・・・さっきから何で笑ってるんだ？」
「・・・・・・笑ってる？」
「笑ってるよ」
「ああ・・・・・・。無意識だね」
さらに笑った。
どういうつもりなのだろう。
「・・・・・・何なんだよ」
「何って・・・・・・」
隼人はこちらを見ずに言った。
「アクターとの決戦だぜ？」

顔は見えなかったけど、間違いなく笑っていた。
運動神経が悪い割りに、好戦的な男だった。

４６－ＯＫ、任せてくれ－

『神道』が言っていた場所を訪れた。
『中央街の１０階建て以上のビルが立ち並ぶ場所』に、確かにその建物は有ったのだが。

その建物は目には見えなかった。
見ていなかった、見えなかった、視線に入っていなかった、消えていた、脳が勘違いしていた・・・・・・等々、色々表現は可能だった。

「アジトごと隠してるのかよ・・・・・・」
「まぁ、あの能力はそういうの専門の能力だから。そもそも戦闘に向いていないってのは本当だよ」
建物の正面にようやく立つ事が出来て、隼人は少し疲れた調子で言った。
「思ったより高い建物じゃなかったな」
建物は3階建くらいの一軒家とも取れるようなものだった。
ていうか、これ普通に自宅とかじゃねーの？
「お坊っちゃんが相手だろ？このくらい当然じゃないか？」
と、隼人は言った。
「そういやそうだったな」
「色々と混沌としているからね・・・・・・」
「・・・・・・あれ？」
待てよ。
この犯人の情報を集めていこう。
？シンデレラと呼ばれる連中の模倣犯
？快楽のために殺している
？犯罪者のみを殺している

?どこかのお坊っちゃんである
?今日元さんの家族とかかわりがある
?アクターである
?グループである
「・・・・・・・・隼人」
「どうした?」
「訳が分からない」
「・・・・・・・OK。任せてくれ」
そう言って隼人は笑った。
犯人のアジトの前で何やってるんだ。

「シンデレラの基本姿勢、犯罪者を殺す・・・・・・。その主軸を守り、犯罪者を殺している。これは恐らく間違いないだろう。模倣犯だからその姿勢を崩すわけには行かないよね」
「だな」
「でも、その犯罪者を殺すという行動が彼らにとっては快楽でしかない」
「・・・・・・」
「思うことはあるだろうけれど、まあ気にしないで置こう」
隼人はそう言って話を続ける。
「アクターであることはまず間違いない。それも1人以上だということも分かっている。アクターの数人グループだってこと」
「そして兵力は多いようだ」
「ココまでで大体纏まった・・・・・・。となれば、犯人は今日元さんのどういう立場の人間なのか、ということになる」
「そうだな」
「で、僕は王城グループだ。今日元さんの家のことは調べるまでもなく知っているのさ。じつは初めてであったときから、その辺の事は気づいていた」
そう言って隼人は得意げな顔をする。

「犯人は今日元さんの弟だ」
「弟！？」
「動機はそれこそ快楽と犯罪者を殺すことだけを考えているのだろう。今日元さんの父親は自らの娘を犠牲にして息子を守ったわけだ」
「それが親のやることなのかよ・・・・・・」
「怒りの矛先は敵に向けてくれよ、僕ではなくて――」
隼人の視線が強張った。
目の前に男が現れたのだ。

「よぉ」
「・・・・・・なんですか？」
「お前の話の中心人物だよ」
「・・・・・・何のようですか？」
「用があるのはお前らだろ？」
まぁいいや。
と、男は言う。
そしてこう続けた。

「王城隼人、嘉島奏明・・・・・・貴様らを歓迎してやるよ」

47ー最終戦争と行こうかー

「どういうつもりだ」
誰よりも早く口を開いたのは、隼人だった。
口調が少し荒れている。
怒っているのか、或いは相手より優位に立つための演技か・・・・・・。
どちらにせよ、俺は黙っている事にした。
「貴様らなら知っているだろう？今回の事件で死んでいった人間の特徴を」
「・・・・・・犯罪者」
「そうだ」
男はこちらに向かって歩いてくる。
「俺達は犯罪者を殺すために集まった組織だ」
「それはシンデレラを模倣しただけに過ぎない」
「ああ。俺はあいつらのやり方を推奨した・・・・・・が、あいつらとは訳が違う」
男は立ち止まり、ニヤリと笑う。
「俺達なら完全犯罪が可能だ。俺達は普通じゃないんだから・・・・・・」
「バカが」
そう言って、隼人は男を睨む。
「完全犯罪なんてこの世には存在しない。どんな物語でも小説でもマンガでも・・・・・・そして現実でも、絶対に存在できない理由がある」
「理由・・・・・・ねぇ・・・・・・。俺は昔同じ事を言っていた男を知っているぜ？」
「・・・・・・」
「確か、そいつも王城だったな・・・・・・」

そう言って男はニヤリと笑った。
「・・・・・・なぜなら」
そう言って隼人が口を出した。

「「どんな世界観においても、完全なんて存在しないから！」」
同時だった。
「今日元の人間だからか・・・・・・祖父の言葉だ」
「祖父？青年ぐらいの男だったがな。俺達を１度滅ぼした」
男はそう言って隼人を睨んだ。
「だが。まぁ、それはお前とは関係ない。単純にお前の力を必要としているんだ」
「・・・・・・つまり、僕に犯罪の協力をしろと？」
「世界平和のために協力しろって言っているんだ」

名目上は格好いい事を行っているかもしれない。
しかしだからといって人を殺していい理由にはならない。
とまぁ。
俺が言うまでも無いのだが。

「論外だ」
隼人は強い口調で言う。
「犯罪を世界平和の一環にしていることは、まぁどんな思想を持っていてもいいだろう」
「・・・・・・」
「だが、アクターが世界平和なんて出来るはずが無い」
隼人は強い視線を外さない。
「俺達はやって見せるぜ？犯罪者を殺してでも」
「そんな事させてたまるか。僕を舐めるなよ」
隼人はそう言って走り始めた。

「やはり、戦争開始か」
男はそう言って、膝も曲げずに浮かんだ。
しかも3階の高さまで。
「はぁ！？」
「俺の能力で作った靴だ。ちなみにこの家も俺が作ったから、破壊も出来ない。そしてあらゆる装備がついているから無理に来ようとせずに、ちゃんと俺達全員を潰しに来い」
男はそう言ってから家の天井に着地した。

「行くぞ、ソウメイ君」
ミスマッチな喋り方で隼人は進んでいく。
「うわ、キャラについて行けねー」
俺は笑った。

さて、最終戦争と行こうか。

48－結局、－

1階には何もなかった。
絨毯と壁紙以外、何一つ無い。
「何も無いな」
「・・・・・・・・・・・・・」
「じゃあさっさと行こうぜ」
「何も無いはず無いだろ？」
隼人はそう言った。
どうも、先ほどから怒った口調が変わらない。
「いや、どう見ても――」
・・・・・・。
ああ、そうか。

「聖域指定・・・・・・」
「引っ掛かったばかりなのに、成長しないな君は」
「うるせえ」
俺はそう言って隼人を見る。
当の本人である隼人は、まるで気にしていないかのように歩いていく。
時には何も無い空間を避けるようにしている。
「おい、隼人――」
「ソウメイ君！右だ！」
言われた瞬間、何のことかも分からず、俺は右に向かって手を出した。
「！？」
何かが手に当った。
そしてその衝撃が俺の体を吹き飛ばした。
「っと・・・・・・」

衝撃を受け流そうと、そのまま流れに沿って吹き飛ばされ――。
「っで・・・・・・！？」
何も無い空間に躓(つまづ)いた。
「と、あ、わ、ああ！！」
こけた。
しかも、何も無い空間に頭をぶつけた。
「痛ぇ・・・・・・・・・・・・・・」
「大丈夫かい？」
そう言って隼人は俺の横に立った。

「どういうことだ・・・・・・？」
何も無い空間から声がした。
聖域指定の男の声だった。
「・・・・・・」
「どうして、お前には分かるんだ？この場所にきたはずの無いお前に」
そう言って男は姿を現した。

「貴方が、例の聖域指定の・・・・・・」
「久留巳(くるみ)仁志(ひとし)だ。質問に答えろ」
「・・・・・・この部屋のおかしい点が1つだけある」
「・・・・・・」
「階段まで消したのは間違いでしたね」
隼人はそう言って、何も無い空間を指差す。
「・・・・・・そうか」
「僕の脳なら、この空間に何があるか分かるんですよ」
「見えているのか・・・・・？」
「ええ。だから、この世界で僕に勝つのは難しいかと」
そう言って、隼人は拳を突き出した。
「そして、これで終わりにしましょう」

隼人は笑った。
「キングダム」

世界が真黒に変わった。
目を閉じて、開けたときには既に、だ。
この感覚は慣れそうも無い。
「これは・・・・・」
「貴方より格上です。物を見ないようにして騙す能力とは違い、これは物の介入を完全に拒みます」
「・・・・・・」
「しかもこの世界では貴方は能力を使えない」
「チェックメイトだと言いたいんだろうな」
「ええ」
「舐めるなよ」
男は走り出した。
それから隼人を蹴る。
隼人は微動だにしない。
「この能力は把握している。この力の最中はダメージを受けない。そして蓄積されたダメージを全て後で衝撃として受ける事になる」
「・・・・・・」
「なら、今この間にダメージを与え続ければいいだけの話！」
「解除」
そう言って隼人は笑った。

「な――」
「任せた」
「あいよ」
俺はそう言って左手で久留巳の頭を殴った。
「結局、殴り合いは出来なかったな！！」

そう叫びながら。

当然ながら。

あらかじめ作戦を立てていた。

聖域指定の男と出会ったとき、隼人の脳ならば対処できる事を聞いていた。

「嫌だ」

「は？」

「俺は悪い意味でアイツに借りがある」

「・・・・・・そうか。まぁいいよ。君のプライドを守ることも君を守ることと同義だ」

そして立てられた作戦は、単純だった。

隠れた状態や物体を隠した状態で現れれば、俺に対処は出来ない。が。

1度キングダムを使えば、それらは全て解除になる。

後は相手が油断した瞬間――そして能力を復活させれていない間にけりをつける。

「大丈夫。君の左手なら脳だって破壊できる」

「いや、そこまでするつもりはない」

「そうか？でも、右手で殴るのはやめたほうがいい。頭を殴った時に膨大な量の情報が君の中に入り込む。言っても『頭』だから」

「・・・・・・分かった」

作戦は見事成功した。

無駄に人を殺すこともなく、男は倒れ伏した。

「コイツどうする？」

「警察に突き出そう」

「で？それまで倒れてくれている保証は無いわけだけど・・・・・・」

「そうだね。でも心配ないよ」
そう言って隼人は家具を指差した。
「これらをコイツの上においておこう。いくら消えても、透明人間みたいなものになるだけで、逃げれるわけじゃないし」
「・・・・・・そうだな」

何だろう。
隼人は怒ると異常なストイックさを出す。
コイツは怒らせないほうがいいなと、思うこと頻りだった

49ー分かるか？ー

「人間とは常に不思議を纏っている」
「・・・・・・」
「すなわち人とは異常なはずだ」
「・・・・・・」
「例えば完全な人間が居たとすれば、それは不完全さという人間らしさがないということで異常だ」
「「・・・・・・」」
「普通すぎる人間が居たとしても同様のことが言える。何もかもが普通というのは普通じゃないという普通の考え方があるから、結果その人間は普通じゃないと言われるのだ」
「「あなたは誰ですか？」」
声を合わせて俺達は聞いた。
2階に上がって、扉を開けると男がいた。
部屋の内装はまるで図書館を思わすほど書物で囲まれており、違和感しか感じなかった。
いや。
それよりこの男の方が違和感がある。
その図書館のような部屋に図書館のようなカウンターを設け、そこに座っていたのだ。
そしていきなり俺達に言ったのだ。
「更級（さらしな）だ。王城と嘉島だな」
「・・・・・・」
「まぁ落ち着け。アイツに会いたいなら俺の後ろの扉を開けて、突き当りを左に曲がった後、数えて3番目の部屋の中のクローゼットを動かせ。そこに階段がある」
「ご親切にどうも」
「これは俺の親切心ではなく、アイツがそうしろと言ったからそう

したまでだ」
「アイツというのは？」
「今日元　始(はじめ)だ。姉のほうに『終り』と付け、弟のほうに『始め』とつける。皮肉なものだ。しかし、皮肉とはそれすなわち人が気付かなければ意味の無いことでありながら、例え自らそれに気付いたとしても笑い話にもなりはしない。つまりは皮肉など得する人間などいないわけであって、ならば言うほうが無駄だという結論に――」
「「感謝します」」
面倒クセェ！！
俺達はそう言ってカウンターを素通りした。
そして扉を開く。
不思議にも男は何も言わず――正確には話の続きをしているが――俺達を放置していた。
俺達は扉を開ける。
すると、目の前には長い1本道の廊下。突き当りで左右に道が分かれているのが見える。
「行こうか」
「ああ」

俺達は廊下を進み、突き当たりまで到着して左に曲がる。
そして言われたとおりに数えて3番目の扉を開いた。

すると誰かの部屋の一室のようになっていて、テレビやパソコン、その他色々置かれていた。
そして教えられたとおりにクローゼットをずらす。
「あれ？」
「動かないな・・・・・・」
俺達2人で思い切り押しても動かない。
「どうなって――」
ドタ！と。

急に動いた。
しかもクローゼットは倒れることなく、教室の扉のようにスライドしたような形で立っていた。
いや、それより
「本当に階段があった」
クローゼットの裏に階段があった。
「こんな簡単に進んで言いのかな？」
隼人は不思議そうな顔をする。
「まあ運が良かったということで」
俺はそう言って隼人より先にその階段を昇る。
思ったよりも急な階段で、少しきつい。
そしてようやくの思いでたどり着いた部屋で――。

「――結果的には人間とは普通ではないという議論に戻るのだ。どうだ？分かるか？王城、嘉島」
「・・・・・・は？」

その部屋は図書館のようで、図書館のようなカウンターがあって――そしてそこには男が座っていた。

そして同じように違和感を漂わせていた。

「アンタ・・・・・・何でここにいるんだ！？」
「お前らがやってきたんだろ？俺はここに滞在して説教していただけだ。お前らが帰ってくるのを待ってな」
「・・・・・・隼人、コレは・・・・・・！？」
「アクターに・・・・・・こんな能力は無い」
「そんな・・・・・・」
「新型の可能性がある」
つまり僕に対応策はわからないってことだ。

そう言って隼人は表情を強張らせる。
「で・・・・・・どうするんだ？お前らは」
「・・・・・・」
「俺の説教でも聴いているか？それともこの現象の根拠を捜すか？一応言っておくと、俺は階段の場所を教えたが、３階にいく階段だとは一言も言ってないぞ。ここに戻ってくる階段だったかもしれない」
そう言っている更級を見る。
だが、俺でも分かる。

それは無理だ。
なぜなら俺達はこの２階から、扉を開けて廊下を進み左に曲がり３番目の扉を開けてクローゼットをずらし階段を昇った。
つまり、それまでの経過で俺達は２階に居たのだ。
だから３階に行き着くのが当然のはずだ。
少なくとも２階に行き着くことはありえない。
アクターで何か細工をしたということか・・・・・・。

「してない」
隼人は言った。
「してないって・・・・・・？」
「分かった。ていうか、少しおかしいとは思っていたんだ」
「おかしいって・・・・・・」
「彼は答えを教えてくれていた。彼が言ったとおり、『ここ戻ってくるための階段』だったのさ」
そう言って男を指差す。
「彼の言っていた階段ってのは、この階に通じる階段だったのさ」
隼人は、男の横を通り扉を開いた。
長い長い廊下。

先ほど見たのと同様だった。

「まず」

隼人は、廊下を指差す。

「この廊下は緩やかな下り坂だ。しかも人が普通では気付けないほどに」

「・・・・・・そうなのか？」

「間違いないね。発想を逆転させれば」

「逆転・・・・・・？」

「ああ」

そう言って隼人は笑う。

「どうして2階に到達してしまったのか、じゃない。2階に到達するにはどうすればいいのか、だ」

「それは・・・・・・」

「前提が崩れている、だろ？そうだ。僕は前提を変えたのさ」

隼人は廊下を進む。

どうでもいいけど男を放置しているのはいいだろうか？

「左に向かって曲がる」

「ここに細工は？」

「無い」

そう言って隼人は3番目の扉を開く。

「ここに細工は？」

「無い」

「部屋には」

「ある」

隼人はようやく肯定した。

当然

「どんな？」

と俺が訊く。
「気付きにくいよ。でも、ちょっと意識すれば気付く」
そう言って隼人は扉を閉めた。

・・・・・・ん？
体が少しずつ体が下がっていく。いや、上がってる？よく分からない、あの感覚。
・・・・・・分かった。

「エレベーター・・・・・・だよな？」
「よく分かったね」
隼人はそう言ってクローゼットを持つ。
「エレベーターが止まるまでは、クローゼットは動かない。そして、到着すれば――」
エレベーターが止まった感覚を得る。
そしてその瞬間、静かな音でクローゼットはスライドした。
何も力を加えなくとも動いたのだ。

「・・・・・・階段が急すぎたのもそういうことか」
「そういうことだね」
俺達はそう言って階段を昇った。

当然先ほどと同じで、図書館のような部屋にたどり着いた。
そしてカウンターには１つの空席。

空席。

そこに男は居なかった。

50 ― つまるところ ―

「隼人！！」
俺は隼人を呼ぶ。
「どうかしたのか、ソウメイく――」
「更級はこの部屋に居る！消えてるんだ！」
「消えてる！？何言って――」
隼人の動きが止まる。
「お前・・・・・・何時からそこに居た！」
「隼人・・・・・・？」
まさか――。
「おお。良かったな。２人とも俺の存在が見えるぞ」
更級が現れた。
「どうなってるんだ、ソウメイ君！」
「コイツの力だ！アンノウン・スポットだって言ってた！」
その瞬間、また更級が消えた。
「・・・・・・そういうことかよ！僕の一番苦手な相手だ！」
そう言って隼人は身構える。
そうか。
隼人は基本的に不思議がらない。この能力だって知っているから。
「くッ・・・・・・見えなくなった！」
隼人はそう言って、周りを見渡す。

「心配するな」
更級はまた現れる。
「お前らが俺達の姿を知りたいと思えば俺は現れ、見た瞬間に消える」
そう言って更級はさらに消える。
「どうする、隼人」

俺は隼人と背中合わせになる。
「相手が1人だけど、まるで囲まれたかのスタイルだね」
隼人が言うと、更級が現れた。
「おいおい、しっかりしてくれよ、会話だってしにくいじゃな――」
更級は会話の途中で消える。
「マジでどうすんだ！これ！」
「どうにもならない。だから」
更級が現れた。
同時に隼人はそっちに飛んだ。
「一気に勝負を決める！」
言ったが早いか、拳を固めて、更級に向かって振るった。
「残念」
更級は言って、隼人の拳を受け止める。
「運動神経だってバカにはならないぜ？」
言った瞬間消えた。
「うぉっと・・・・・・」
隼人はバランスを崩す。
言っていた。
触れられない。しかし

衝撃は受ける。

「がッ・・・・・！」
隼人が何らかの攻撃を受けて、こちらに吹っ飛ぶ。
「おい、これって・・・・・・」
「攻撃を避ける事は出来ない。しかも相手と触れると触れた感覚はないのにダメージだけ食らう」
隼人はそう言って、苦笑した。
「どうすればいいんだ・・・・・・」
「諦めろ」

更級は言った。
「俺達に協力しろ。今ならいつでも迎え入れてやる」
現れては消える。
「・・・・・・そんなことするぐらいなら死んだほうがマシだ・・・・・・！！」
「じゃあ死ね」
更級は俺達の後ろに現れた。
目の前には拳。

間に合わない。

「！？」
が、更級の体は吹っ飛んだ。
「おいおい・・・・・・俺を放って何してんだ？」
そこには男が1人居た。

リーゼントで、白い長ランの後ろには『暮射』と二文字。
そして男はバイクにまたがって部屋の中にいた。
もう心当たりは1人しかいない。

「・・・・・・東先輩・・・・・・！」
「ピンチっぽいな・・・・・・けど」
東先輩は笑った。
そしてバイクから降りて、俺たちと更級の間に立った。
「後は任せろ」
そう言って両手を広げた。

その背中はとても大きかった。
「東先輩！ソイツは――」
「言うな！ソウメイ君！」

隼人はそう言って邪魔をする。
「知らないほうが今は勝てる！」
「・・・・・・そうか」
「はぁ？お前ら何言ってんだ？」
東先輩はそう言って、首だけこちらに向けて怪訝そうな顔をする。
「気にすんな、東先輩は自分でやってくれ」
「お前タメか。殺すぞ、後で」
東先輩は言いつつ正面を向いた。
「お前、俺の後輩達に何やってんだ」
「・・・・・・お前は東諒だな・・・・・・。ブラックリストが・・・・・」
「ぶっ潰すぞ」
東先輩は一歩ずつ歩いていく。俺達から見れば更級は現れたり消えたり忙しい。

「俺の能力を教えてやる」
更級は咄嗟に言った。
「え、マジで？教えてくれるのか？」
「ダメだ！」
隼人が言う。
「何だよ、どういうことだ？」
「いいから、気にしないでくれ！」
隼人がそう言って焦りを見せる。

その様子を見て、東先輩は言った。
「・・・・・・分かった」

・・・・・・あれ。

待てよ。これ・・・・・・・。

「分かっちゃったのか？」

更級は笑った。

「何だ！？」

東先輩が言った。

やっぱりだ・・・・・・！

『分かった』・・・・・・『知った』から、消えた！

恐らく東先輩にはもうすでに更級の姿が見えてない！！

東先輩の体がこちらに吹っ飛ぶ。

「が・・・・・・！？」

宙を舞う。

「くっそ！」

東先輩は空中で身を翻し、着地する。

「どうなってる！？どこ行きやがった！？」

東先輩はそう言って周りを見渡す。

「教えてやろうか？」

目の前に更級が現れた。

「俺の能力を・・・・・・」

「え、マジで！？教えてくれるのか！？」

まずい。

知ってしまえば、東先輩も俺達と同じになる。

――が。
今ここで止めてそれを『分かって』しまえば、東先輩は更級の姿を見失う。
それにもしも、止めたとしても更級が一方的に説明してしまえば、東先輩は聞いてしまう。
結果、俺達は固まる。

「俺の能力は、自分が知らないことと出会ったときに俺と出会うことが出来る」
「・・・・・・」
「そして、何かを『知った』という感覚を得たら、俺の姿を見えなくなる。以上だ」
そして俺の視線から更級は消えた。

「東先輩。何とかできるのか！」
「・・・・・・分からん」
「そんな・・・・・・」
その瞬間、更級が現れて拳を固めていて、拳は既に東先輩の前に有った。

「東先輩！！」

拳は。
拳は空を切った。
「・・・・・・分からん」
東先輩はもう一度そう言って顔面を掴んだ。

「え・・・・・・」
「何だ！？」
俺と隼人は焦る――いや、１番焦っているのは更級だが。

「反応できた・・・・・・のか？」
「分からんな」
東先輩は何度も言う。
「・・・・・・だが、俺は消える！」
言った瞬間に俺と隼人の視界から更級は消えた。
が。

確かに東先輩は何も無い空間を掴んでいた。

「一発でいくぞ」
東先輩は言って、拳を固めた。
「何故だ！」
更級は姿を現す。
恐らくもう消えない。

俺達にも何がおきているのか分からないから。

「何故お前には俺が見えている！？」
「さっきから言ってるだろ？」
そう言って東先輩は顔をしかめた。

「お前が何を言っているのか、お前らが何を理解しているのか・・・・・・俺には分からないんだ」
つまるところ。
バカだから。

東先輩の拳はしっかりと更級の顔面を思い切り潰した。

５０ー つまるところ ー（後書き）

感想爆発的募集中！

よろしくね！

５１ ―ラスボスを倒しに―

「東先輩強いねー」
「今日元さんによれば、東先輩は１人で１０人くらいの武装チンピラを相手に出来るらしいぞ」
「おい、こら。今日元はそんなこと言ったのか？舐めんなよ、俺は１人で２４人と１匹を相手にしたんだよ」
１匹って何だ。

東先輩には後で能力を説明したが「俺には分からない」と言い放つので、もう無視に近い方針を採った。それから更級を縛り、後からやってきた東先輩の部下の方に預けた。下に居る久留巳も同様だった。
「で、これからどうするんだ？」
「僕らが教えられた情報は嘘だったから、どうすることも出来ないよね」
隼人はそう言って思考を始める。

「そういえば、どうして東先輩はココに？」
「昨日の夜から捜し続けてたんだ。俺達全員で。そしたら丁度さっき、急に現れた建物があると聞いてな。後は直感だ。ココだと思った、それだけだ」
「ああ。そうか、久留巳が気絶したから能力が消えてしまったわけだ」
ていうことは警察が来るのも時間の問題だな。
「・・・・・俺は良く分からないけどさ」
隼人に向かって言う。
「アイツ・・・・・・更級がいきなり現れて小難しい事を言っていたのは、自分の存在を見てもらうためだったんじゃないかな？」

「・・・・・・」
「忘れられたり、気付かれなかったりって・・・・・・やっぱり傷つくんだよ」
「経験があるような物言いだね――あ、そうか。経験があるのか」
隼人は言って、少し苦笑する。
「皆に見て欲しくて・・・・・・アイツは難しいことをわざと言っていた。そうだと俺は思う」
難しいことを言って、理解されなければそれで存在を認識し続けてもらえるから。
そういうことだろう。
「例えそうであろうとなかろうと、僕には関係ないよ」
「冷たいな。冷血って言うより、冷酷だ」
「観測者は常に新たな気持ちでなくてはならない。彼に関する僕の調査は終わった。だから、もう考えない」
そう言って隼人は顔を上げた。
「・・・・・・よし、行こう」
隼人は言って、俺達が通った、カウンター裏の扉を進む。

「この廊下が坂道になっているけれど、エレベーターに乗らなければ、ちょっと傾いているだけの廊下だ。恐らく傾かせた事に意味があるはず・・・・・・」
そう言って隼人はポケットをあさる。
「・・・・・・何やってんだ？」
「誰か、丸い物体持ってない？ボールとか」
「任せろ」
そう言って東先輩は手のひらからタイヤを出した。そんなに大きくない。三輪車の補助輪のような大きさだ。サイズも調整できるのだろうか。
「これでいいか？」
「ありがとうございます」

隼人はそう言ってタイヤを廊下に静かに置いた。
すると廊下を静かに転がっていく。
「行こう」
隼人はタイヤについていく。

タイヤは廊下の突き当たりで1度止まった。
「どうすんだ？」
「こうする」
隼人は言ってから、タイヤの向きを修正した。
前方に向かって進んでいたタイヤを横向きにする。
すると今度はタイヤは右に向かって進んだ。
「こっちだね。僕が思うにこの坂道は、恐らく3階に行くためのルートを教えているのさ」
「教えているって？誰に・・・・・？」
「僕たちに。この家はアイツが作ったんだから、僕たちのために内装を変えることくらい容易だろう」
隼人はタイヤを追いかけながら言った。
タイヤはその後、隼人の修正を借りながら俺達を導いていく。
そして最終的に1つの扉の前で止まった。

「・・・・・ここだな」
東先輩がタイヤを戻す。
「じゃあ、行こうか。ラスボスを倒しに」
隼人は言ってドアノブに手を掛けた。

52ー全力疾走の力を見せてやるー

扉の置くには当然の如く、階段があった。
階段を上がる。
階段は先ほどとは違って急ではなかった。少しずつ眼前に光が見えてくる。
「ラスボスに関してだが・・・・・・」
東先輩が言う。
「相手はわかっています」
隼人は端的に答える。
「そうか。奴の能力に関しても粗方予想がついているのだろう？」
「・・・・・・東先輩は戦えるんですか？」
「舐めんな。俺の拳でぶっ潰す」
「そうか。まあ、東先輩なら何とかできるだろうね」
「おい・・・・・・。敬語使うか使わないかドッチかにしろ」
「東先輩、頼りにしてるよ」
「使わねーのかよ！使え、こら！！」
ふざけながらも階段を昇っていく。
平和だ。続くはずの無い平和だ。

階段を昇りきる。
そこは広いホールになっていた。
「・・・・・・また形状変えたのか」
外から見たら、こんなに大きくなかったから。
「・・・・・・外にも野次馬が沢山現れ始めた。久留巳が居なくなったのは痛い結果を生んだな」
ホールの中心で、場にそぐわないビーチベッドに横になったまま、アイツが言った。
「ココにお前らがいるということは更級が負けたという事か。あい

つの力は不定だから利用は出来なかったが、奴の知識には舌を巻くこともあったのだが・・・・・・まあ、これも天命だということにしておこうか」
男はそう言ってビーチベッドから降りて立ち上がった。同時にビーチベッドは存在を消す。
あれもアイツが作った物体か・・・・・・。
「お前ら全員で戦うんだな？」
「一対一の方がいいってのか？」
東先輩はそう言って相手を見る。
「いやいや、何人で掛かって来ようと俺には勝てないけど。ま、改めて確認さ。それにしても」
と、アイツは外を見る。
「メディアも居るね。丁度いい、ここで君達を倒して宣言しよう。今日元　始の世界征服を」
「世界征服・・・・・・それが、アンタの望みかよ」
「そりゃあ、俺は姉のようにはならないからな。誰かのために頑張るんじゃない。自分のために尽力する。『我田引水でも勝ちは勝ち』。これが今日元の基本思想だ。そして、俺は創るのさ。自分の思った世界を」
今日元はそう言って銃を出した。
「最低だな」
俺は言って拳を構える。
「・・・・・・じゃあ、一気に攻めるぜ」
隼人が言った。
「開始だ。俺が負けたらお前らは世界を救えるぜ」
今日元は笑った。

「キングダム」
拳を突き出す隼人。
キングダムの力が発動して、世界が一瞬で暗転する。

「もう面倒な事は避けるよ。一気に決めよう」
隼人はそう言って、走りこんだ。
「・・・・・・能力の干渉を拒絶する・・・・・・そんな力が俺に聞くと思ってんのか？」
今日元は銃を見せる。
「この世界では武器の類にほとんど意味は無い。意味はダメージの蓄積のみだ」
「他にもあるぜ？大いにある」
そう言って今日元は引き金を引いた。
銃声が響いた。
・・・・・・響いた？
そして銃弾は、隼人の肩を貫いた。
「な・・・・・・・！？」
隼人は小さく声を漏らし、驚く。
すると、黒い世界はいつものように瞬間的に戻らず、少しずつ崩れ、元の世界を見せ始める。

「な・・・・・・何なんだ！？」
「簡単さ。この銃だ」
今日元は笑う。
「俺が考えたのさ。『キングダムの世界に干渉できる銃』というのをな」
「・・・・・・・くっそ！」
俺は床に左手を当てて、武器を作ろうとする。
・・・・・・・！？
武器が作れない。床が変化しない。
「ああ。これは『リメンバー・リメインの行動を無視する床』だ」
そう言った今日元はいつの間にか俺の前に立っていた。
「あ・・・・・・」
「残念だったな。お前らに打つ手は無いぜ？少なくとも手からタイ

ヤを出す程度の力じゃ俺には勝てない――」
そう言って東先輩を余裕の表情で見る今日元。
「右翼」
そう言ったのは東先輩だった。
気付くと、東先輩の右腕から飛行機の羽が生えていた。
「・・・・・・は？」
「食らえ」
東先輩はその腕で、今日元の頭部を殴った。

今日元は吹き飛び、壁にぶつかる。
「・・・・・なんだよ・・・・・・その力」
「姉のように真面目に勉強しておくべきだったな・・・・・・。代わりにお前に教えてやるよ。俺の力・・・・・」
そう言って東先輩が左手から出したのは。

「・・・・・は・・・・・？」
「全力疾走（ラスト・サーキット）の力を見せてやる」

東先輩は2階においてきたはずのバイクを手から出していた。

53 ―静寂だった―

東先輩はバイクに乗って構える。
「嘉島。隼人を頼むぞ」
そう言って東先輩はバイクで今日元に突っ込む。
「あ、分かりました！」
思わず敬語を使ってしまうほどだ。

「隼人！大丈夫か！」
「痛い・・・・・・けど、大丈夫だ。それより、今の内に君に教えておく。今日元の能力を」
「あ、ああ」
隼人の冷静さにはいつも驚かせる。自分よりも他の利益を考えている。
「あの能力は『深層心理（クレイジー・シーン）』という能力だ。想像を武器にする力や考えた事を武器にする力ではないんだよ。正確には『思ったこと』が事実に『なる』力だ」
「・・・・・・何か違うのか？」
「『そうする』のか、『そうなってしまう』のか。『意思』なのか『現象』なのか。ということだ」
「・・・・・・それでなんか変わるってのかよ」
「変わるよ。大いに変わる」
先ほどの今日元の台詞をまねるようにしていった。根に持っているようだ。
「それより、東先輩が勝てるのかどうかも問題だ――」
そして視線を向けると。

東先輩と今日元は空中戦をしていた。
今日元はともかく（空を飛ぶ靴とかだろう）、東先輩はどうやっ

ているのかと思えば、足にホバー式のプロペラをつけているようだ。そして靴からジェットを出して、空を自由に飛んでいるようだ。もう、アレは人間じゃない・・・・・・。
「・・・・・・」
「今日元はともかく、東先輩は何なんだろうね・・・・・・あの力は」
「東先輩は全力疾走（ラスト・サーキット）って言ってたぞ」
「・・・・・・聞いたことも無い。となれば・・・・・・」
「新型ってことなのか？」
「だね」
そう言って東先輩の戦況を見る。
「くっそ！そんな力知らないぞ！『ラスト・サーキットの効果を消す剣』！」
そう言って今日元は剣を出して、東先輩を斬りにかかる。
「効くか！バック！」
東先輩が言うだけで、特に何かが起きるでもなく、瞬時に体が下がる。
「食らえ！」
右腕にバイクのマフラーが現れ、装備される。そして、その状態でエンジンをふかし拳が目にも留まらぬ速さで今日元の顎にヒットした。
「が・・・・・・ぁ・・・・・・」
今日元は空中から落下して、地面に墜落する。

「やったか！？」
東先輩は静かに下りてきた。
「・・・・・・う・・・・・・」
今日元が少しずつ体を起こす。
「・・・・・・最後だ・・・・・・もう終わりにしてやる！！」
今日元はそう言って、右手を上に挙げた。

すると。
家の内装が変化した。
そして俺達の前に。
１００を有に超える銃器が現れた。
「な・・・・・・！！」
「気をつけろよ。これはアクターの力じゃない。実物の銃器だ。そして、『自動操縦』を俺の力で付与している上に、『ラスト・サーキットとシンキング・キングとリメンバー・リメインの効果を無効化する』という効果をつけている」
「くっそ・・・・・・！！結局ただの銃じゃないじゃねーか！」
俺は床に手をつける。
意味が無い。
「隼人！」
「無理だ。僕らに打つ手は無いよ」
「東先輩」
「恐らく俺でも無理だな」
２人は異常に冷静だった。
「これで終わりだ！」
今日元は手を振り下げた。
「畜生ォ！！！！！！」

静寂だった。
「え・・・・・・・」
頭を守るようにしたまま俺は前を見る。
２人は先ほどまで何だかんだ冷静そうだった割りに、伏せて防御の態勢を取っている。
「何が起きた・・・・・・・！？」
俺達は全員で視線を今日元に向ける。
「・・・・・・な、何だ！？」
当の本人の今日元も驚いている、
見ると、銃器が何の作動もせず、煙を上げていた。
「・・・・・・どうなってる！？」
今日元が焦るように、銃器に駆け寄る。
すると
『――いｙろあｍｃづｓがうｋｈじゃ――』
雑音が入り始めた。
銃器本体ではなく、どうもこの家から聴こえてくるようだ。
『・・・・・・だー。繋がったか！？よっしゃ！』
今度は日本語だった――いやまて、これは――。
「お前誰だ！」
今日元はそう言って天井に向かって言う。
「一体何者だろうね」
隼人が言う。
「分からないのか？隼人」
「え？」

どうも本当に隼人は分かってないらしい。

「今日元。何しに来た」

口を開いたのは、東先輩だった。

「え・・・・・・今日元・・・・・・・って」

『弟にも分かられないとは・・・・・・・』

そう言って、呆れたように溜め息をした。

そう。

声の主は今日元さんだった。

「姉上・・・・・・・・!?」

『始・・・・・・・余計な真似しやがって。お前の尻拭いにどうして俺が選ばれなきゃならないんだ』

「・・・・・・・くっそ!!『トランスミッションを遮――」

『遅い』

言ったときには、天井が爆発した。

「な、何だ!?」

今日元が焦る。

「お前の能力は、考えたことが自動的に現象になる」

隼人が言う。

「つまり考えてしまえば、それを現象として認識すると同義ってことだ。そして『トランスミッション』でそれを弄った」

「トランスミッション・・・・・・・・!?」

「もしかしてトランスミッションの能力を知らないのか?」

そう言って隼人が笑った。

『トランスミッションは波長を司る。そして人間は微量ながら電気を纏っている。静電気然りだ。そして俺は、その電波から手に入れ

た波長と自らの電波を合わせてそいつの中に入ることが出来るのさ』
「そんなこと・・・・・・聴いてない！俺が知っているのは、電気を帯びている機器に入り込めるということだけ・・・・・・」
『それも波長を合わせるに過ぎない。まぁ確かに、俺は普通は人の脳内に入り込むことは出来ない。けどな、悲しくも』
そう言って今日元さんは笑った。

『俺とお前は兄弟だぜ？』
「・・・・・・くっそ！！」
『そして俺は、お前の脳内に入り込んで、この家が爆発する事を想像した。それだけだ・・・・・・』
「・・・・・・未だだ！まだ終わっていない！」
そう言って今日元は構えた。
「『トランスミッションを拒絶する』想像！」
『残念だけど、もう遅いぜ』
今日元さんは笑う。
「な――」
今日元は俺達の方向を見た。

「「「終われ！」」」

俺達の3人分の拳がヒットした。

今日元の体が遠くに飛び、壁に激突して倒れ込んだ。

５４ ―だが敢えて、―

憎しみ。
小さな頃から家族、友達、見知らぬ人から壮絶なるいじめを受けた。
見た瞬間に、『コイツは俺より下だ』と思わせるような存在だった。
皆、何もかも、全て、全部、ＡＬＬ、ＥＶＥＲＹＴＨＩＮＧ
消したかった。消させたかった。

悲しみ。
小さな頃から家族、友達、見知らぬ人が何一つ見ようともしなかった。
視線に入らなかった。視界に入れなかった。
入れるつもりもなかった。
だったら、見せようと思った。

見なければならないくらいの絶望を与えようと思った。

妬み。
小さな頃から家族、友達、見知らぬ人から、姉と比べられてきた。
劣等感を感じてきた。優越感を消されてきた。
何もかも姉が上だった。
上に立ちたかった。

上に立たなければならないことを信じた。

憎しみ。悲しみ。妬み。

憎悪。悲哀。嫉妬。
それらの感情は人々を縛っていく。
３人はその感情を元に集合した。
集合の仕方は運命としかいえない。
単純に同じ志を持って、３人の『シンデレラ』の模倣犯が生まれた。
ただそれだけだった。
犯行は基本的に更級が行う。
事件の隠蔽、アジトの確保等は全て久留巳。
事件を追ってくる連中を今日元の組織を利用し、食い止める或いは殺すのは今日元だ。
それでこの世界の平和を守る。それが彼らの正義だったのだ。
正義。
それはどこにだって存在している。
正義の反対は悪ではない。敵でもない。
なぜなら悪の反対は良で、敵の反対は味方だ。
正義に反対なんてない。
『正義の反対は正義だ』という言葉はよく言われる。
違う。
正義に反対は無い。
それは正義を見たときにそれを感じる人の違いだ。
強いて言うなら、正義の敵は違和感だ。
自分とは違う。自分達の考えとは違う。相手の思想は嫌いだ。
そういうような何かが、衝突を生む。
それでも、正義の反対はない。

一生分かるはずが無い。
永遠に議論は終了しない。

だが敢えて、正義の反対上げておくとすれば。

それは意義だと思う。

５５ー狂った場面ー

知るか。

俺は俺だ。

味方なんか始めからいなかったようなもの。想像で創った俺の世界がたとえ崩壊しようがしまいが、それは俺の人生には関係ない。

姉は関係ない。

「関係ないんだよぉぉぉぉおおおおおおおおおおおおお！！！！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今日元が立ち上がり、叫んだ。

気迫。

ただの気迫だ。明らかにそこにアクターの感じは無い。

しかし、それは俺達の勢いを消すには十分何かだった。

「な、何だ！？」

『これは一体・・・・・・・』

隼人と今日元さんのあわてる声。

『・・・・・・気をつけろ、お前ら。何かおかし――』

ブツッ。

という音を立てて今日元さんの声は聞こえなくなった。

それを合図に家が変化する。

「うわ！」
「く！」
東先輩と隼人が倒れる。
「大丈夫か――う」
頭痛が走った。
俺の体も静かに崩れ落ちた。

気付いた時には、俺は立ち上がっていた。
真白な空間に居る。奥もなければ、上もなさそうだ。

隼人と東先輩は横に居た。

「・・・・・君らが今日元の望んだ相手？」
目の前に1人の人間が居た。
その姿は今日元だったが、車椅子に乗り、目には眼帯をしている。
「何だ、お前」
俺の質問に帰ってきた答えは
「クレイジー・シーン」
と簡潔だった。

「な・・・・・・」
「彼は僕と繋がったね。完全にリンクした」
「どういうことだ！」
東先輩が訊く。不謹慎ながら言わせて貰えば、あんたが聞いても分からないだろう。

「彼の強い願いによって、2、3、4を飛ばして最終形態にまで到達したのさ」
「最終形態・・・・・・」

隼人が言葉に引っ掛かったようだ。そして思案するよな顔をする。
「もう今日元は居ないよ。立場逆転だ。ここは今日元の脳内。彼の想像の塊。そして君らの相手は僕だ。どうする？多分君らは勝てないよ」
「出してくれって頼んだら出してくれるのかい？」
隼人はこんな状況でも相手を挑発する。
「・・・・・・どうだろう。彼の願いは『姉へ絶望を与えたい』という願いだ。んー・・・・・・、君らを殺したところで今日元終に絶望が与えられるかどうかは・・・・・・」
1人ごとのように男は言う。
男・・・・・・クレイジー・シーンだ。
「まあ、言っても僕の体はこんなだから。君らでも勝てると思うけど」
「先手必勝だ」
そう言って東先輩は走りこむ。
「後手必殺ってね」
男はそう言って右手を突き出す。
手に青い球体が作られ、それが東先輩に向かって飛ぶ。
反応できる速度じゃない。
「が・・・・・・！」
東先輩は球体が当ると、目にも留まらぬ速さで俺達2人の間を突き抜けた。
「え――」
「おっと、壁を忘れてた」
そう言って男は右手の指を振った。
柱が突如として現われ、東先輩の体がそれに衝突して――。
さらにその柱を突き抜ける。
「あれ？」
そう言って男は新たに柱を幾重にも出す。その柱を4、5本突き抜けてから、東先輩は床に落ちた。

「な、何だこれは！」
「クレイジー・シーンさ」
言った男は目の前に居た。
車椅子は放置されている。
「え――」
「目に見えているものが全て本当だと思うなよ。この世界は全部が全部」
隼人の体を右足でける。
すると隼人の体は乱回転して飛んでいく。
「狂った場面（クレイジー・シーン）だから」

「今度は上手くキャッチするぜ」
そう言ってガチャガチャのカプセルのようなものを出した。
そしてその中に隼人の体を入れて、ふたを閉める。
「酸素は何分持つかな」
「お前・・・・・・！！」
俺は拳を突き出す。
男はそれを避けて、眼帯を外した。
「目からビーム」
ふざけた調子で男は言うと、言った通りに眼帯のところからビームが出てきた。
腹部を貫通した。
それが衝突した瞬間、強烈な痛みを感じる。
そしてもう痛みは感じなくなっていた。
俺の体が崩れ落ちる。
俺は意識を失った。

56 ―嫌いじゃないぜ―

＝＝＝

そして俺の目の前に到達した。
「くらえ！」
男は足を突き出す。
目には見えない速度だったが、なんとなくそれっぽいところを掴んだ。
足に手が当たる。
だが結局掴む事も出来ずに俺の体は投げ出された。
「死ね」
その先には剣山が作られている。
「・・・・・・」
俺は黙ってその剣山に向かって左手を突き出した。
剣山にまず、左手が刺さる。
「・・・・・・」
その瞬間に剣山は形を変えた。
剣山はただの大きな剣に変わる。
「な・・・・・・」
男は驚きを隠せない。そりゃあそうだ。自分の世界の中で自分の思い通りになっていない男が目の前に居るのだから。
「・・・・・・ってな」
やはりこういう・・・・・・なんだろう。語り部？だったか。ソレは俺には向いていそうではない。
「お前・・・・・・何なんだよ！！」
「慌て過ぎだぜ？だが、嫌いじゃないぜ？その焦燥感」
俺は巨大な剣を構えた。
「お前は考えてしまった事を現実にする。だったら、１つ試してみたいな」
「・・・・・・」
「もし自分が死ぬことを想像したら、お前はどうなるんだろうな？」
「は・・・・・・はぁ！？」
「この大剣はお前の世界観にあるものだ。つまりお前の想像。それ

でお前が殺されるわけ無いよな？」
「・・・・・・！！」
焦りを見せる。
ちなみにこれは俺のハッタリ。
失敗する事を前提としたようなやり方だ。
さぁて・・・・・・王城の坊っちゃんのようなスマートじゃない
やり方で勝つ少年の力を見せようか。

俺は剣を投げ飛ばした。

剣は途中で消えた。
しかし男は出血して倒れていた。
「・・・・・・まとめに続きをたしておかないと」

正義の対義語である意義。

それは自らが存在している意味だ。意味とは自分の考えだ。

考えは想像。想像は自分を守るための鎧であり、自分を傷つける
毒だ。そして、他人を殺すための道具だ。
どう活用するか。それが一番大事なのだと思う。

５６ー嫌いじゃないぜー（後書き）

謎の決め台詞。

57ー『タケル』ー（前書き）

今回は短めです（＾＾）／

57ー『タケル』ー

目覚めるとそこは、病院だった。

「・・・・・もう久しぶりとしか言いようが無いぜ」

「僕もだよ。響花のお見舞いには何度も来たけど入院はあんまり経験して無いね」

「あんまりってことはあるのか？」

「まぁね」

「・・・・・ていうか当然のように同じ病室なんだな・・・・・」

「それより訊きたい事があるんだけど」

隼人がそう言った後、静かに病室の扉が開いた。

「・・・・・」

東先輩だった。松葉杖をついている。

「おい、嘉島・・・・・どうやって今日元を倒したんだ」

「・・・・・は？」

「僕も同じ質問を呈するよ」

「・・・・・え・・・・・」

話によると。

あの後、家は崩れ去った。瓦礫のように地面へと落下したそうだ。

そしてその瓦礫の中から俺が2人を背負って現れたらしい。

その後

「救急車を呼んでくれ。こいつ等と俺を頼んだぜ」

と俺が言って、意識を失ったそうだ。

「ああ・・・・・そういうことね」

「分かったのか？」

「ああ。それは俺がやったことだろう。深層心理の暴走ってところかな？」
「・・・・・・訳が分からんな」
「まぁつまり何も考えずにやってるんだけってことだよ」
俺はそう言ってから病室を後にした。

屋上。学校とは違って開放されているため何ら問題ない。
そして偶然にも誰も居なかった。
強いて言うなら高いフェンスで囲まれているため、見下ろす事は出来ない。
「・・・・・・」
やったのは俺じゃない。きっと『タケル』だ。
勝手にやりやがって・・・・・・。

「俺の体だぞ・・・・・・」
いや――。
俺の体ではないのか――――。

||||||||||3年前||||||||||||||

57 ―『タケル』―（後書き）

次の話からちょっとややこしいので気をつけてください。

０１ー一人称の矛盾点ー（前書き）

過去編の過去編。

英語文法的に言えば、大過去編ってところですかね？

０１ー一人称の矛盾点ー

僕は不治の病だそうだ。そんなものがまだこの世に存在していた事に僕は驚きだけれど。

父と母は生まれた時には居なかった。母方の祖父母が僕を育てていてくれた。

そんな祖父母は僕が治らないと知って、泣いた。医者も匙を投げた。

諦めたのだ。僕に見切りをつけた。

世界は僕を見捨てた。

「・・・・・・」

祖父母は死んだ。その他の親族の場所も分からない。

ＴＨＥ天涯孤独。

「僕は何かしただろうか？」

呟く。誰も居ない屋上で。

呻く。誰も知らない場所で。

僕の右手は誰の考えている事でも分かる。だから僕は皆の声を聞いている。

「かわいそうに」
だってさ。

『かわいそうに』？

誰がだ？
僕は僕をかわいそうだなんて言ってない。それどころか、僕は今まで生きてきた道に後悔はしていない。
皆が匙を投げたところで僕が諦める理由にはならない。

僕の余命はあと1ヵ月。

さて。あと1ヵ月をどう楽しく過ごそうか。

僕は屋上から去る。
階段を降りる。
集中治療室のランプが光っている。
「・・・・・・」
1人の少女と少年が居る。
「・・・・・・何やってんの」
僕は訊いた。
「・・・・・・お母様とお父様が・・・・・・交通事故で・・・・・・」
「僕はただの付き添いだよ」
横の少年はそう言って僕を睨む。
金髪で綺麗な髪の毛だった。隣の少女は泣いている。
「・・・・・・その程度の絶望感・・・・・・僕はどうでもないね」

僕は言い放った。
そして廊下を歩く。

そのとき、少年とすれ違う。
その少年は僕と同様に、彼らの前に立った。

「何やってんの？君ら」
「・・・・・・」
少女も少年も黙っている。
「あ、そう。まぁいいや。その心意気、嫌いじゃないぜ」
少年はそう言って笑う。
「お前ら、どんな絶望があっても諦めんなよ。その心に俺が元気を送ってやる。だから俺のこと覚えとけ！」
少年はそう言って2人を指差す。

「・・・・・・何言ってるんですか・・・・・・・」
少女は泣き腫らした目で少年を睨む。
「邪魔だ。何処かへ行け」
隣に居た少年も言った。
「飽く迄、人を信じない気持ち・・・・・・嫌いじゃないぜ」
少年はそう言った。

「・・・・・・君の事は覚えてやる」
金髪の少年はそう言って立ち上がる。
「おう。また会おうぜ」
少年は笑って手を振った。

意味が分からない。
そんなに幸せを覚えたいなら、僕の絶望を消してみろ。

少年は屋上へと上がる。
僕はその少年を追って屋上へと戻った。

「・・・・・・何、お前」
僕はいきなり言い放つ。
「・・・・・・・いきなりの敵意を見せるその視線、嫌いじゃないぜ！」
少年は言って、指を指す。
心を読んでみる。
・・・・・・本当に、『嫌いじゃないぜ』って思ってるらしい。

「お前何なんだよ」
「俺は世界中に幸せを運ぶ男だ」
「・・・・・・意味わかんねー」
俺は思わず笑った。
「何だよ。お前、その絶望の顔。幸せになりたいのか？お前」
そう言って少年は俺の手を握った。
「俺の幸せ分けてやる！」
そう言った瞬間。

体に何か流れた気がした。

「・・・・・・うぉ！？」
「ほら、元気になったろ？えーっと・・・・・・誰だっけ？」
「名前は先に名乗れ」
「おう、そっか。その礼儀のよさ嫌いじゃないぜってな！」
少年は手を離して、親指で自分を指す。

「俺は嘉島　奏明。幸せの左手を持つ男だ！」

０２ー相互関係の相違点ー

「嘉島・・・・・奏明・・・・・・」
「おう。俺のことは奏明で頼む」
「やだよ。友達か。僕はお前のことは・・・・・・嘉島って呼ぶ」
「天邪鬼は嫌いじゃないけど・・・・・・その呼び方は嫌いだぜ」
嘉島はそう言って笑った。その笑顔は苦笑と呼ぶに等しいような、先ほどまでとは違う笑みだった。

「じゃあ、また会おうぜ」
嘉島はそう言った。
「って、え？」
「姉の検査が終わる頃だから・・・・・・会話しに行かないと」
「・・・・・・僕も行っていい？」
「・・・・・・いいけど・・・・・・」
嘉島はそう言った後、少し考えるような素振り見せた。
それから顔を上げた。
「・・・・・・大変言いにくいのですが」
「・・・・・・なんだよ」
「名前をお教えしていただけないでしょうか？」
「ああ。言ってなかった」
僕は今度は右手を出した。
嘉島はその手を取った。
「君長柄（きみながら）　健（たける）だ」
「ああ、よろしく」
嘉島はそう言った。

「君長柄って変な名前だな」

僕は嘉島に向かって言う。
「は！？」
嘉島は『図星』という顔をした。
「お前の心を読んだ」
「・・・・・・何？読心術？」
「まぁ・・・・・・・そんな感じ」
僕は階段を静かに下る。
「・・・・・・ふーん」
そんな僕を追いかけて嘉島も階段を降りてくる。

病室の札には『嘉島　響』と書かれてあった。
静かに扉を開けると――
「・・・・・・え・・・・・・」
そこには幾つものパイプに繋がれた女性の姿が有った。
植物状態。
まさしくそれだった。
「・・・・・・」
「君にはこれが絶望と希望・・・・・・どちらに見えた？」
「え・・・・・・・？」
「治療法の見つかっていない病気。医者も匙を投げるような絶望」
それは――。
それは僕と一緒じゃないか・・・・・・。
「でも、姉はこうして生きている。生きている事が奇跡だそうだ」
「・・・・・・」
「さぁ。ここに希望と絶望が置かれている。どちらが正しいんだと思う？」
「正しいって・・・・・・そこに正しさは無いだろ」
「そうか？正しさはどこにでも置かれている。俺達が気付くかどうかだぜ？」

そう言って嘉島は姉の横の椅子に座った。
そして左手で姉の手を握る。
「・・・・・・姉さん。友達が来たよ」
姉と思しき女性は、返事をしない。
「・・・・・・どうしたんだ？」
「姉さんに俺の声を送っている」
「・・・・・・送れてるのか？」
「分からない。でも、通じていると信じたい」
「・・・・・・」
植物状態の人間でも、僕の右手なら深層心理に働くはずだ。
だったら、僕は――。

僕は右手で嘉島の姉の手を握った。
『・・・・・・なんだ？君・・・・・・』
声が聞こえた。
「嘉島。僕のことを紹介してくれ」
「・・・・・・コイツは、健。さっき会った友達だ」
『あれ？お前と会話が成立してるぞ、奏明。珍しいな』
「会話が成立してて珍しいってさ」
「・・・・・・お前・・・・・・何なんだよ」
「お前が左手で『送れる』んだとすれば、僕は右手で『受けれる』のさ」
僕はそう言って笑った。
「・・・・・・大概おかしいな、俺達！」
嘉島も笑った。

僕らは友達になりましたとさ。

０３ー矛盾点と相違点の交点ー

あの日から１０日たった。
お互いの意味の分からない力の話をした。楽しい日々を送っていた。
そしてようやく胸のうちを話のが、その日だった。

僕らを街を歩いていた。
広場のベンチに座り会話をする。
「２０日！？」
「うん。後、２０日だよ」
「え、お前、はぁ・・・・・・！？」
「１回落ち着けよ、奏明」
僕はそう言って奏明を制す。

「・・・・・・不治の病って・・・・・・どういうことなんだ？」
「お前の姉みたいに植物状態にもなれないくらいの不治の病らしい。発症する時期も大まかにしか分かっていない。だから２０日って言っても、もしかしたら明日には死ぬかもしれないし・・・・・・」
「どんな病気何だ？」
「話によると、急性心臓麻痺って感じかな？でもそんな単純なものじゃないらしいよ」
「らしいって・・・・・・」
「よく分かってないんだよこの病気も。ただ１つ分かっているのは、発症したらすぐにあの世逝きだそうだ」
僕は言ってから立ち上がった。
「・・・・・・大変だな、お前も」
奏明はそう言って笑う。
「でも大丈夫そうだな」

「は？」
「お前なら長生きしそうだ」
「何でそんな根拠の無いことばかり言うんだよお前は・・・・・・。
希望的観測しすぎだっつーの！」
僕はそう言って奏明の体を軽く突き飛ばした。
「うぉあ！」
奏明は叫び声を上げてしりもちをつく。
「うぉ！？大丈夫かよ・・・・・・」
僕は右手を差し出した。
「あぁ・・・・・ちょっとビックリしただけだ」
そう言って奏明は俺の手を取る。

『俺ももうそろそろ・・・・・・』

奏明の声が聞こえた気がした。
いや。
右手で触ったから、心の声・・・・・・。
「・・・・・奏明、お前・・・・・・」
「・・・・・・え？」
奏明は右手を見る。
それから
「ああ・・・・・」
と言って苦笑した。
「俺は多分、もうすぐ死ぬ」
奏明は笑う。

椅子に座りなおし、会話を始める。
「俺の左手・・・・・お前も触れただろ？」
「・・・・・」
「アレで俺は自らの生命力を送った。それで皆が少し元気になる」

「僕も・・・・・・・それは受けた」
「だろ？」
奏明は笑う。
「何で・・・・・・・何でそんなに笑うんだよ」
「・・・・・・？」
「何でそんな笑ってられんだよ！！」
「おいおい、落ち着けよ」
「落ち着いてられねーよ！お前、死ぬの分かっててこんなことばっかりやってんのかよ・・・・・・」
「そうだよ」
奏明はまたも笑う。

「俺は誰かを助けて死ねるなら本望だ。そういう生き方・・・・・・嫌いじゃないからな」
「・・・・・・どんだけプラス思考なんだよ・・・・・・」
僕は呆れて笑うしかなかった。
「・・・・・・行こうぜ。お前も長々と病院抜け出すわけには行かないんだろ？」
「まぁな。向こうからすれば僕は研究材料だから」
僕らは立ち上がる。
そして帰り道に立った。

「お互い長生きしたいもんだな・・・・・・」
「無理だろ。少なくとも僕は」
「そうか？でも俺は――」
奏明はふと横断歩道へ目を向けた。
そして目を大きく開いた。

「あ――」

信号、赤。

横断歩道。

車、少年、ボール。

「くっそが！！」

奏明は走った。

運動神経はいいのか、走るのは異常に速かった。

そして少年の体を押す。

少年の体はその衝撃で車の直線上には居なくなった。

そしてその衝撃で奏明の動きは止まった。

それはつまり――。

「奏明――！！」

奏明の体は吹っ飛んだ。

宙を舞った。

目の前に落下した。

ああ！！

「奏明・・・・・・！」
本来なら駆けていくべきなのだろう。
しかし、心とは違って行動は異常に冷静だった。
僕はゆっくりとその体に近づいていく。
「・・・・・・・よぉ・・・・・・・・」
「何やってんだよ・・・・・・・長生きするんじゃ・・・・・・・なかったのかよ・・・・・・・！！」
僕はその体に手を伸ばそうとして右手を出した。
ピキッと。
体中の筋肉が固まった気がした。
それも束の間、今度は胸に痛みが走る。
ズキリ、と。強い痛みだった。
「あ・・・・・・」
僕の体は奏明の横に倒れる。奏明が仰向けなのに対して僕はうつ伏せだ。
「・・・・・・どうしたんだよ・・・・・・健・・・・・・」
「・・・・・・多分・・・・・・発症だ・・・・・・」
僕はそう言って、態勢を仰向けに変える。
呼吸のたびに痛みが走る。
野次馬が集まっている。どこかで救急車に連絡する声が聞こえた。
「・・・・・・お前だって・・・・・・長生きするって言ってたじゃないか・・・・・・」
苦しそうに奏明が言う。
「それは・・・・・・それだ・・・・・・。僕は・・・・・・発症してもおかしくはなかったから・・・・・・」
「そうかよ・・・・・・」
死に掛けている。いや――。
間違いなく僕達は死ぬ。

「お前・・・・・良かったな・・・・・・・。最期に誰かを・・・・・・守れたんだから・・・・・・」
僕はそう言って空を見る。
「・・・・・・まぁ・・・・・・・人生に満足はしてる・・・・・・・後悔はしてない・・・・・・・」
「僕は後悔だけだ・・・・・・・」
そう言う僕に奏明は首だけ曲げてこちらを見た。
「・・・・・・僕もお前みたいに・・・・・・誰かを守って生きていられたら・・・・・・良かったのかもしれない」
「・・・・・・まるで死ぬみたいな言い方だな・・・・・・」
「死ぬだろ・・・・・・間違いなく」
「諦めるなよ、健・・・・・・」
奏明はそう言って僕の右手を彼の左手で握った。
「まだお前は生きられる」
奏明は先ほどまでとは違い、しっかりした声で言った。
「俺の人生をお前にやる。お前は生きろ」
「・・・・・・人生って・・・・・・お前だって死にかけじゃないか・・・・・・」
「人一人くらい、まだ助けられる」
握っていた手に強さが増す。
「約束しろ。誰かを助けて、誰かのために生きれるような過ごし方をしろ。面白そうな事には進んで首を突っ込め。後、俺の家族の事は頼む。姉と妹と母が心配だ。兄はまぁ・・・・・・どうにでもなるだろう」
「・・・・・・お前、まさか――」
僕は再度、握られている手を見る。
僕の『受け取る右手』に『送る左手』が重なっていた。
「俺とお前、どちらかがどちらかになる」
「奏明か・・・・・・僕か・・・・・・」

「でも、意志は全てお前だ。だから、お前の人生を助けるために俺は消える」
「・・・・・・何でもかんでも勝手に決めやがって・・・・・・・」
僕は空を見上げる。
別に絵になるからとかじゃない。
「でも、嫌いじゃない・・・・・・・」
瞳から零れ落ちる涙を隠すためだ。
「・・・・・・じゃあ、俺は先にあっちに逝ってるよ」
奏明はそう言って空を見上げた。
「天国があると思ってんのか・・・・・・？」
「あると思わないと報われないしな。大丈夫。多分、お前の中に俺は居る」
「・・・・・・気障な意味ではなく・・・・・・・か・・・・・・」
「そうだ。じゃあ、また後で」
「ああ・・・・・・」
救急車の来る音が聴こえた。
僕の耳に聞こえたのだろうか？
それは分からないけれど、僕に分かるのは。
このとき、僕は俺になった。

０３ー矛盾点と相違点の交点ー（後書き）

次の話が特にややこしくなっているので、ご注意ください。

０４ー右手と左手の変則ー（前書き）

注意　ややこしいので気を付けてください。

０４－右手と左手の変則－

目が覚めると、母と兄と妹がいた。

「・・・・・・母さん、響也、奏・・・・・・・」

「・・・・・・奏明・・・・・・・・！！」

俺は体を起こした。

「お兄ちゃん！」

「うぉわ！」

まずは奏。

目からは当然の如く、涙が溢れている。

「奏明・・・・・・お前、心配かけんなよ・・・・・・・！！」

疲れたように椅子にへたり込む響也。しかし安堵の表情も伺える。

「良かった・・・・・・。お父さんが居なくなって、響があんな調子で・・・・・・奏明までそうなってしまったら・・・・・・」

母はそう言って俯いた。

涙をこらえているようだ。

「・・・・・・ああ」

心配かけたんだな・・・・・・、と思った。

「・・・・・・ありがとう」

俺はそう言って、しばらく安静にしているように医師から言われたので、そのままベッドに横になった。

その後、健のことを聞いてみたが、あの場所には俺以外には誰も居なかったらしい。

健は肉体と精神、そして体力や・・・・・・この左手ごと、俺の中に入っていったということか。

俺はそのまま天井を見た。

健とは会話できないけれど、俺の中に・・・・・・そしてこの左

手にアイツは残っている。だから、それでもいいか。と俺は思うのだ。

さて。

後はアイツの意志に沿うだけだ。

面白い事には進んで首を突っ込んで、助けられる奴は絶対助けてやる。

勝手に色々やってやる。

そう思って俺は天井を見た。

回想終了っと。

＝＝＝

るために自らの存在を送ったと。

彼と俺の中での錯覚が置き、この世の中には最初から『君長柄健』という人間は居ない事に等しくなったのだ。

まぁ、難しい話をして理解してもらえるとも思っていない。だから、簡潔にこれだけ分かっていて欲しい。

この物語の語り部である『彼』からすれば俺は『タケル』だ。
しかし本当は俺が嘉島だ、ということだ。
俺達の記憶の相互関係が、何らかの不和を起こしたということだろう。

以上、終わり。

以後宜しくお願いします……かね？

０４ー右手と左手の変則ー（後書き）

話がややこしい、間違っている、説明になっていない等の意見があれば、感想の方にお願いします。

訂正すべき事項だった場合、意見を優先して訂正させていただきます。

58 ―食べろってことだ―（前書き）

現代に戻りましょうか。

58 ー食べろってことだー

退院したその日、9月1日に始業式があった。

俺達は始業式を受け、その後のホームルームを終えてから学校を出た。残りは全てサボった形になる。

そして隼人の家に向かった。

夏休みも明けたのでこの家には住んではいない。だから今回は遊びに来たのと同じような形なる。

「早く着替えろよ。急ぐぞ」

俺はそう言って隼人をせかす。

「焦るなよ。君も着替えてないじゃないか」

「俺はここに服は置いてないんだよ！ていうか、だったらお前だって制服で行けばいいって言っただろ！」

「叫ぶなよ。うるさいな・・・・・・」

叫ばせるような事するなよ！

言わなかったけど。

そして部屋から出てきた彼は、いつも通りの私服姿で出てきた。

「さっさと行くぞ」

俺はそう言って先に玄関で靴を履いて、外に出る。

しばらくしてから、隼人はゆっくりと現れてきた。

「・・・・・・遅いぞ」

「いいだろ。のんびりやろうぜ」

そう言って隼人は先に歩き始めた。それを追うように俺もついていく。

目的地は警察署だ。

そして目的は当然、今日元さんだ。

警察署に着くと龍兵衛さんが居た。
「来たか。今回はお手柄だったな、と言っておいてやろう」
龍兵衛さんは言った。
「・・・・・・ということは・・・・・・・」
「ああ。あの3人は死んだ」

今日元、久留巳、更級は東先輩の部下によって、あの家の中に縛り付けられていたそうだ。
そして今日元を倒した瞬間に家は崩壊して、3人とも家に押しつぶされて亡くなってしまった。

ということになっている。

本当は違うそうだ。
久留巳、更級は東先輩の部下によって、拘束後は外で見張られていたが、突然、東先輩の部下達が気絶させられた。
そして部下達が起きた時には2人の姿はなかったそうだ。
同様に今日元も一緒だ。俺（正確には健）が今日元を倒した後、家は崩壊した。そして今日元の肉体はそのまま家の中にあった。が、その躯も見つかっていない。

「周りにいたメディアに関しては上の方々が処置してくれたようだが・・・・・・」
「つまりはあの3人が消えたのは、上の方々が連れ去った、と考えてよさそうだな」
「そこまでして彼らについて調べたかったのか・・・・・・」
隼人はそう言って、考えるような素振りを見せた。

が、すぐに顔を上げた。

「だが、その所為もあってか今日元・・・・・・姉の方の今日元はこの警察署に縛られたままになっているな」

「それでも以前ほど行動に制限はされていないんでしょう？」

「上からの命でな」

「まぁ・・・・・・当然といえば当然なんだろうけど・・・・・・」

つまり、警察署にしばったままにする代わりに、行動に制限が掛からなくなっている。つまり今日元さんも自由に行動が出来るわけだ。

今日元さんがそれを喜んでいるかどうかは分からないけれど。

そんなこんな話している内に到着してしまった。

「俺はここにいるからさっさと行って来い」

龍兵衛さんはそう言った。

俺達は扉を開けて入った。

さて、今日元さんの反応はいかに。

「よぉ！来たか」

そこには予想外に元気のいい今日元さんと、黙ってみている東先輩が居た。

「・・・・・・で、何の用でしょうか？」

「取り敢えずはお礼だ。お前らが本当にやってくれるとは思わなかったぞ」

「ありがとうございます」

「で、始・・・・・・弟のやっていたことが、もしかしたら俺にも出来るんじゃないかって思って、やってみたら出来たから、これやるよ」

そう言って今日元さんは、家の鍵と自転車の鍵、あと遠隔操作の車の鍵を置いた。
こうして、物の受け渡しができるようになったのも制限が開放されたからのはずだ。
で。
「これは何ですか？」
「俺の創った世界への鍵だ。家に帰って、電子機器・・・・・・パソコンがある部屋にでも入って、目を閉じろ。そうすれば世界に飛べる」
飛ぶ・・・・・・？
「詳しい話をここでするよりは実践した方が早い。家に帰って繋いでみてくれ」

そう言われたので、家に帰るつもりだったが隼人の家にもう一度お邪魔する形になった。
そしていつの間にか俺の荷物が多くなった部屋（すなわち俺の部屋だが）のベッドに俺は横になっていた。

「・・・・・・」
どうしてそんな風に寝転んでいるのか。
躊躇しているのだ。

「あぁ、そうそう。それだけじゃだめだったな」
今日元さんは去り際にそう言った。
「その鍵を胃袋に入れてくれ。それで大丈夫だ」
「・・・・・・それって・・・・・・」
「食べろってことだ」
今日元さんは言い去った。

「何だ、そんなことかよ」
そう言って東先輩は口の中に車の遠隔操作キーを入れた。
そして少し悶えた後、のどをそれが通るのを見た。
「・・・・・・マジかよ」
流石の隼人も驚いていた。
「うー・・・・・・ん」
俺も同様に迷っていた。

59 ―僕はヘタレです―（前書き）

そういう存在ですよ。

僕なんか。

59ー僕はヘタレですー

「・・・・・・」
お茶を用意し、最悪のパターンを考えて救急車への番号は用意しておいた。
「うぉぉおおお！！」
勢いよく口の中に入れた。そしてお茶を流し込む。
無理矢理のどをとおし、胸の辺りを何かが通っている感覚がする。
「・・・・・・ぐ・・・・・・」
セーフだった。
何とか、胃の中に落ちた感じがする。
「・・・・・・これで、寝ればいいのか？」
俺は目を閉じた。
疲れていたのか、瞬間的に眠りに着いた。

「来たか」
その声が聞こえたかと思うと、目を覚めた俺は白い世界に立っていた。

これは・・・・・・そうだ。
今日元――クレイジー・シーンと戦った場所とそっくりだった。
「・・・・・・どうなってるんですか？」
「ああ、ちょっとまて。二度手間は嫌だから」
「・・・・・・二度手間？」
ということは、まだ何か待たなくてはならないのだろうか・・・・・・。

と思って見ると、今日元さんと東先輩は居るが隼人は居なかった。

「遅いな、アイツ」

「何かあったのか？」

東先輩に続いて今日元さんも尋ねてくる。

うーん、何かあったとすれば・・・・・・。

「躊躇しているんだろうな、多分。鍵を飲み込むのに」

「あんな自信満々な奴がこの程度のことに躊躇したりしないだろ」

東先輩はそう言って笑った。

「で？何があったんだ？」

今日元さんは尚もそう聞いてくる。

「何もありません」

そう言って隼人は現れた。

「お、来たか」

「クレイジー・シーンの世界ですね。きっと、今日元の頭の中に居たからこの世界も知っていたんでしょう」

「まぁな。でも少し違うぜ」

そう言って、今日元さんは何も無い空間に腰を下ろした。

するとそこにシックな木材の椅子が出現して、そこに座った。

「これは・・・・・・」

「この世界はお前らの部屋のパソコンなどの電子機械類から発生された電波に俺の意識を伝え、それを脳波と上手い事会わせる事で、『夢の世界』に形成された空間だ。そのまま『Ｗｈｉｔｅ　Ｒｏｏｍ』と呼ぶことにしたよ。そしてそれをまるで否定するかのようにこんな事も出来る」

そう言って今日元さんは指を鳴らした。

すると、今日元さんの立っていた位置から少しずつ空間の色が変わっていく。

床や壁や新たな家具なども増えて、気付けば、木材を基調としたシックな喫茶店に変化していた。
「おぉぉおお！！」
何かテンション上がる俺と隼人。
東先輩も静かに驚いている。
「どうよ？」
「・・・・・・んー」
そう言って隼人は少し考えていた。
そして口を開いた。
「凄いのは分かったんですけど・・・・・・これが何なんですか？」
そうだ。
この空間が凄いのも分かったし、楽しそうだとは思う。
けど、だから何なんだ？という話だ。

「おお。それは東との話し合いで、決まったことがあるんだよ」
そう言って今日元さんは笑った。
「東はできるだけ多くの人々を助けたいと思った。俺は東の考え方を尊重してやりたいと思っている。それで決めた」
「はぁ・・・・・・・」
「俺達にお前らの協力をさせてくれ」
今日元さんは隼人を見た。
「・・・・・・」
「良いか、悪いか。答えてくれ」
隼人はその質問に少し考えるように黙った。
そして
「・・・・・・一応、理解しておいてもらうとして」
と口を開いた。

「僕はヘタレです」

隼人は宣言した。

「・・・・・・は？」

「僕は怯えますし、嫌な事はしたくないですし、嫌いな食べ物は食べません。食べ物じゃなくても・・・・・・僕は鍵を飲み込むことでさえ、簡単に躊躇してしまうような男です」

自虐のように言っているわりに、堂々とした風貌だ。

「死にたくはありませんし、自分が死ぬなら相手を殺すくらいの非平和主義です。とどめをさすことにも躊躇はありません」

「・・・・・・」

「僕だけでは皆さんの期待にこたえられるようなことが絶対できる保障もありません」

隼人は勢いよく、堂々と続けた。

そして言った。

「だから、僕に巻き込まれてください」

・・・・・・。

俺は黙る。

隼人もそれで口を噤む。

「・・・・・・面白いな！」

口火を切ったのは今日元さんだった。

「そんくらいの気持ちで無いと、俺もやりがいがねーよ！」

「・・・・・・だな」

東先輩は静かに言った。

が。

「断る」

俺は言う。

「え・・・・・・」
3人は驚いている――いや、隼人は驚いていなかった。
予測していたのかもしれない。
「正直、俺は本当はあなたたちと関わりたくありません・・・・・・が、隼人は巻き込んできますし、俺は隼人と契約しています。それに俺が巻き込むことだってあるでしょう。だから・・・・・・」
・・・・・・何て言えばいいんだろうか。
上手い言葉が見つからない。
・・・・・・。

「お互い、利用し合うか」
言ったのは今日元さんだった。
「お前が仲間が嫌だってんなら仕方ないな」
「あ、いや・・・・・・」
「お前には俺達が必要だろ？俺達もお前が必要だ」
そう言ったのは東先輩だった。
「だから、俺はお前を利用するし、お前も俺を使っていい」
「・・・・・・」
「後は、まぁ・・・・・・俺も暇だし、友達として仲良くしてくれよ」
今日元さんはそう言って、またも笑った。
「・・・・・・ありがとうございます」
俺はそう言って、頭を下げる。
「じゃあ、嘉島は帰りな。目を閉じて意識を外すんだ。じゃあね」
そう言って今日元さんは笑った。
言われたとおりに意識を外そうと目を閉じた。
「後、お礼を言うのはこっちもだぜ。嘉島」

最後、今日元さんのそういう声が聞こえた。

６０ー何のために行動しているんだろうー（前書き）

僕の思いを込めています。

６０ー何のために行動しているんだろうー

次の日の朝。

「なんと！！」

目覚めると俺はそのまま隼人の家に居た。

恐る恐る携帯電話を開いた。

・・・・・・！！

着信履歴が悲惨な事になっていた。

主に妹。次点で母。そして兄が１回のみだが、最初だった。

「・・・・・・」

心配させすぎだな・・・・・・。

やっぱり死ぬわけにはいかないんだけどな・・・・・・。

俺は部屋を出ると、隼人はまだ寝ているようだった。

俺はそのまま家を出て、１度家に帰った。

「お前・・・・・・なにやってんだ」

兄・・・・・・・響也が居た。

息を上がらせて、座り込んでいる。

「隼人の家に泊まってたんだ」

「そういうことがあるならちゃんと言え」

「・・・・・・どうかした？」

「何もしてない。が・・・・・・疲れた」

そう言って響也は家の中に入っていった。

玄関の扉が閉まってから、俺も続くように入っていく。

「あ・・・・・・」

目の前には母が居た。

「・・・・・・ただいま」

「おかえり。隼人君の家にいたのね？」
「ああ・・・・・・迷惑掛けた・・・・・・」
「それは響也と奏に言いなさい。響也は夜中ずっとあなたを捜していたし、奏は早朝からご飯を作って待っているわ」
母は淡白だ。いつも淡々としている。別に父や姉の所為ではなく、昔からだ。
この話を隼人としたとき、
「奇遇だね。僕の母もそんな感じだよ。無駄な事は話したくない主義だからね」
と言っていた。
俺の母は別に無駄な事を話したくないわけじゃない。単純にしゃべりに感情がこもらないだけだ。
よく分からないが、昔からそうらしい。

母がリビングに入った。俺も続いてはいると、奏はソファで寝ていた。
「・・・・・・今日は」
今日は土曜日だった。学校は無い。
「・・・・・・」
俺は奏をお姫様抱っこの姿勢で持ち上げた。
それから2階に上がって、奏の部屋の扉を開けた。
小学生とは言え、あらゆるものに気を遣っているのだろう、いい匂いがした。
そのまま奏のベッド・・・・・・下に机があって上にベッドがある、二段ベッド方式のようなベッドに寝かせてから俺は部屋を出る。
それから隣の部屋をノックする。
・・・・・・返事が無い。
ただの屍のよ「居る？」無駄な事を考えながら入り込んだ。

「・・・・・・・響也ー？」
「・・・・・・」
俺と響也と奏と響。全員同じ部屋のサイズだが、デザインはそれぞれ好きなようにしている。
それを含めた上で言っておく。

響也の部屋は和室仕様になっている。
そして響也は。

「・・・・・・」

ドラえもんのように、押入れの中で寝ていた。
「・・・・・・サンキュー、兄さん」
「・・・・・・」
響也にそう言ってから、俺は部屋を出た。

「響也を兄さんって呼んだの・・・・・・いつ振りだろうな」

そう呟いてから、俺は私服にに着替えた。昨日の夕方から制服だったらしい。
着替えを終えて、俺は家を出た。
「お兄ちゃん！」
「あ」
妹さんが降りてらっしゃった。
「最近、どこ行ってるの！また昔みたいに危ない事に首突っ込んでるんじゃ」
「そんな突っ込んでないよ。心配するな」
「おかしいよ・・・・・・お兄ちゃんは事故の日から、今までとは違って危険な事に首を突っ込むようになったって、響也も・・・・・・」

「・・・・・心配するな。だけど、俺はこれからもっとやばいものに首を突っ込むぞ」
「そんな――」
奏はそう言って悲しそうな顔をする。

「大丈夫。昔から言ってるだろ？俺は死なないから」
俺は奏を軽く抱いてから、
「行ってくるよ」
と言って外に出た。

静かに歩いて目的地……つまり隼人の家に向かった。

「・・・・・・」
隼人の家に行くと、一台の黒塗りの車が有った。
恐らく、隼人の何かなのだろうけれど・・・・・・。
もしかして王城グループの誰かだろうか？
思いつつも、玄関の扉のドアノブに手を掛けた。

開けると正面に隼人が居た。
ジーパン、半そで、赤いチェックのシャツを来て、首からヘッドフォンを提げていた。
「ああ、嘉島君。おはよう」
「おはよう。目覚めたら次の日だったから驚いたぜ」
「あの世界は『夢』だから、あの世界から去ると『寝た』ということになるらしいね」
「なるほどな・・・・・・」
で。
本題に入ろう。

「何処かへ行くのか？」
「ああ。病院だよ。君も行くかい？姉にも会いたいだろう？」
「・・・・・・うーん・・・・・・じゃあそうするかな」
俺は隼人より先に玄関の扉を開けた。

「・・・・・・」
目の前の車から男性が1人降りてきていた。
その男はタバコを口にしていた。火はついていない。そしてつける気もなさそうだ。
超美形でオールバックの気のいいお兄さん。しかし目のきつさからか、近寄り難い雰囲気をかもし出している。
強いて言うなら・・・・・元ホストの高校生か？
「・・・・・・あぁ、嘉島か。お前も行くのか？」
その男は俺の顔を見てそう言った。
「え」
・・・・・・この人俺と会ったことあるのか？
「隼人は・・・・・・まだなのか？」
「・・・・・・は、はい・・・・・・」
「何だ？急に堅苦しい挨拶しやがって・・・・・・今までためだったじゃないか」
「・・・・・・え・・・・・・？」
いや、待て。
この人の雰囲気・・・・・・。
「嘉島君、どうかしたのか」
隼人が出てきて、固まっている俺を見て隼人は言った。
「おう・・・・・・来たか」
「あ、来てたんだ。東先輩」
「・・・・・・ん？」
東先輩・・・・・・？
視線を男の人に向ける。

リーゼントではないが・・・・・・目や喋り方などからわかることもある。
ああ。
本当だ。この人は間違いなくあの人だ。

「今回のことで俺は自分の力の無力さを感じた。で、義賊をやめて本格的に正義活動をしたいと思った・・・・・・というよりは、お前らに協力すればいいんじゃないかと思ってな」
言いながら東先輩は車を運転し続ける。
「・・・・・・あの確認していいか？」
「何だ」
「東先輩、高校生ですよね？」
「・・・・・・」
「車の運転していいん「正義に犠牲は付き物だ」
東先輩は逃げた。

「で色々あって『暮射』を引退して、隼人の付き人の役割を確保した」
「というわけなのさ」
そう言って隼人は笑った。

ふーん・・・・・・。
まぁ彼らにはそういう生き方がぴったりなんだろうな。
３人全員、自由を求めている。
東先輩も今日元さんも隼人も自由のために行動している。

だったら、俺は。

俺は何のために行動しているんだろうか。

61ー運命の日ー

9月8日。

始業式から数日経った。

「・・・・・・」

「どうしたんだい？嘉島君」

その日の夜に唐突に現れた僕にそう言った。

「親に言って、しばらくこっちに腰を下ろすことにした」

「え」

「つーわけでよろしく」

「・・・・・・OK。いいだろう」

意外にも隼人は何も訊かずに受け入れてくれた。

「でも荷物とかはもう少ししてから持ってくる」

「そうか。紅茶飲む？」

「ああ」

隼人はキッチンに向かった。

俺はその間に着替えなどの軽い荷物を自分の部屋に置いた。

「・・・・・・」

それからリビングに入った。

隼人は既に紅茶を作り終えていた。もしかしたら、自分が来る前から作っていたのかも知れない。

「早く飲めよ。冷めたら美味しくなくなる」

隼人はそう言って、ソファに向かって右手を出して座るように促す。

俺はお言葉に甘えて座った。

「・・・・・・隼人」

「何？」

「何で来たのか訊かないのか？」
「訊いて欲しいのかい？」
隼人は俺の質問に意地悪な質問で返してきた。
「・・・・・・」
「まぁなんとなく分かってるさ。だから訊きはしない」
そう言って紅茶を口に含み、飲み込む。
それから、隼人は
「考え事をするときは、夜に散歩でもしながら夜空を見上げるといい。答えは見つからなくとも、気分は晴れる」
と言った。
「・・・・・・」
「12時までに帰ってきてくれ。帰ってこなかったら、鍵は閉めるよ」
隼人はそれだけ言うと、自分のカップを片付けてからリビングを後にした。
「・・・・・・見透かしてるなぁ・・・・・・」
俺はそう思って、紅茶の入ったカップを口に運んでいく。
そして全部飲み終えてから、隼人同様、片付けた。

それから外に出て街の方に歩いていった。

どのくらい歩いたかは分からない。
どのくらい滞在していたかも分からない。
「夜空・・・・・・ね・・・・・・」
そこには光が多くあった。
いつでも夜空には星と月が浮かんでいる。
それを毎日感じている人は居るのだろうか。
少なくとも俺は感じていない。
だって俺達は『当然＝必然』ということを国語で学ぶほど、意識

をそういう風に作られているからだ。
しかしその考えは間違いだという事を俺は今回痛感した。
アクター。
存在は人間そのもの。内部には別の人間。
有り得ないことが有り得てしまう。

「それにしても・・・・・・」

街にはまたも、犯罪が増殖している。
爆音を出して走り続けるバイク達。
どこからでも間違いが見つけられる。

狂った街と思わざるを得ない。
無秩序という単語を彷彿とさせるようなこの街。
時間が経って、季節が変わっても変わろうととしない街。
事件が起きても何一つ変わらない街。
そしてそこに住んでいる人々。
それらを見て、俺は思った。

「相変わらずだよな・・・・・・」
俺は思うところをぶちまけるようにそう呟いた。

9月8日。

運命の日。

地球は丸い。僕らの世界は紡がれる。

紡いだ過去は流さなくては。

丸く収まったこの世界に。

61 ―運命の日― （後書き）

この後日談は、一話からです。

このまま一話に続くんです。

０１ー惑う光に、日和ありー（前書き）

題名はこれから考えていきますが、そんな感じで新章スタート！

０１ー惑う光に、日和ありー

今朝は目覚ましはならなかった。
珍しく、なる前に目が覚めたのだ。
そして全員同じだったようで、同じ時間くらいに全員がリビングに集合した。
それから早めの朝食を摂って、もう一度、それぞれ自分の部屋へと戻った。

自分の教科書、筆箱などを指定の鞄に詰めていく。
「・・・・・・」
さらに財布を入れてから、指定の制服に着替える事にした。
「・・・・・・」
きっちりとした紺色のブレザーで、いかにも高校生らしい服装である。
自分には似合わないことはとてもよく分かっている。

「嘉島君」
虎郷はそう言って、俺の部屋に入ってきた。
男子とは違い制服の色は臙脂(えんじ)色だった。
「何・・・・・・・？」
「お弁当。ここに置いておくわよ」
そう言って机の上に置いてから去っていった。
「・・・・・・」
どうでもいいけど、着替えしている最中に入ってくるか普通・・・・・・。
ちなみに着替えはほとんど完了しており、後はネクタイとブレザーだけだった。

先に弁当を鞄の中に入れる。それから、ネクタイを締めなおしてブレザーを着る。
「おっと・・・・・・」
机の上に置いたままの携帯電話を手に取り、ポケットのなかへ入れる。

「嘉島ー！まだか？」
廊下から海馬の声が聞こえる。
「あ、今いく！」
俺は返事をしてから鞄を持って、自分の部屋を出た。
玄関に雅と音河と海馬と虎郷が既に居た。
「隼人は？」
「まだ。すぐ来るだろ」
海馬はそう言って俺の後ろを見て、
「ああ、来た」
と笑った。
「遅くなったね」
隼人もそう言って笑った。
それから全員で玄関を出た。それから隼人が1度大きく伸びをする。
そして、
「行こうか」
隼人はニヤリと笑った。

入学式。
4月8日。
桜凛(おうりん)高校。
「・・・・・・」
謎の男が置いていった招待状には高校の名前だけが書かれていた。
桜凛高校は16年ほど前――すなわち、俺達が生まれた当時くら

い――に出来た高校で、最新鋭の設備を取り揃えている公立高校だ・・・・・・そうだ。
校門には入学式と書かれた板がピンク、赤、白の花で飾られて、立てられていた。

「しかし・・・・・・」
あの男はアクターだった。その男が置いていった招待状だ。
てっきりアクターの人間のみが行く学校、とかそういうものだと思ったのだが。
「全然そういうわけじゃなさそうですね」
雅がそう言って生徒を観察する。
中学校からの友人と話している男子や女子。
高校生活というものに期待に胸を膨らませている生徒達。
高校生デビューというもので、調子付いている不良たち。
どこをどう見たところで、アクターが存在しているようには見えないのだ。
「あの男は何を仕掛けようとしたのかな？」
音河がそう言って隼人を見る。
「分からない。データが足りなすぎる」
そう言って隼人は昇降口に向かった。
それに続くように音河が歩いていく。俺達もそれに続いた。
・・・・・・。
観察しただけじゃ分からないけれど、何かが渦巻いているのを感じる。
アクターではない。しかし・・・・・・・。
俺には良く分からない。

「・・・・・・」
クラスは４クラスに分かれているそうだ。
俺達は全員、１組だった。

「・・・・・・招待状効力か？」
俺はそう言って笑う。
「もしかしたらそうかもしれないわね。じゃなければ招待状の意味をあまり感じないわ」
「いや、そうじゃないと思いますよ」
雅は虎郷の発言に微笑んだ。
「？」
と、疑問を抱いたが
「運が良かったんじゃねーの？」
と海馬が靴箱に靴を置いて俺達の後ろを歩いていく。
ああ・・・・・・、なるほどね。
海馬正。必然的偶然（サデンリィー・ラック）。運がいいという能力。

その海馬の後ろを静かに歩いてついていく。

1年生の教室は本館の2階で、1組はその一番端のクラスだった。
出席番号順に席は並んでおり、男女別ということらしかった。1クラスの人数は36人。一列6人が6列ある。
「となると」
出席番号　3番　王城隼人、4番　海馬正　5番　嘉島奏明　と3人が一列にならんだ。
「近いな。よかったぜ」
「ああ。それに」
女子の方を見てみると、音河と虎郷が順番に並び、その音河の隣の席に雅が座っていたのが確認できた。
雅がこちらに手を振っている。
「向こうも向こうでいい感じの並びだな」
「ああ」
入学。
あの妙な男が強制的（というのは少しおかしい表現かもしれない

けれど、）に入学させた学校だったため身構えていたのだが、何かが起きるというわけでもなかった。
むしろ普通の入学といった感じで俺たちの会話もどうでもいい雑談へと変わっていったのを感じた。

しばらくして、担任の先生と思しき人がやってきた。
「はい、起立」
先生が言った。
俺たちは立ち上がる。
「気を付け、礼」
先生が小気味よく言って、ＨＲが始まった。
「このクラスの担任になった、島原だ。１年間よろしく頼む」
どうも必要最低限のことしか言いそうにない男だった。
「じゃあ、入学式に向かうぞ。廊下に出席番号順に並んで、階段を下りて体育館に向かえ」
そう言って島原先生が先に廊下に出た。
俺たちもそれに従うように廊下に出る。

教室も廊下もすべて普通の学校にしか見えない。
が、それでもなにか不穏な空気が漂っている。
１年生の教室に入ってからはその空気はなくなったが、体育館の近くに行くとまたその空気が帰ってきた。

「何なんだ……この空気」
「どうしたんだい？」
「なんかあったか？」
一列に並んだ隼人と海馬が俺の小言に反応する。
「いや――空気が……おかしいんだ」
「……何か感じるのかい？」
「ああ。恐怖っていうか……」

これは……圧力？

『入学生、入場！』

聞こえた声を合図に、俺たちは静かに歩き始めた。

「！」

空気が凛としていた。

生徒のほとんどが、なんだろう……。圧力でも恐怖でもない――説明のつかない『何か』を感じているようだった。

俺たちが全員静かに座った。

『生徒会長挨拶』

生徒会長？

こういう時は基本的に、校長先生の挨拶ではないのか？

そう思いつつもステージの方を見る。

「……！」

黒髪にオレンジがメッシュのように混じっていた。

その男は静かに壇上に上がり、マイクに顔を向ける。

『起立』

え……。

立つのか？

俺たちは戸惑いつつも、立ち上がった。

『……』

生徒会長は息を一度吸った。

『俺は、一条字　玲王。生徒会長だ』

宣言する。

晴れ舞台で『俺』という言い方をしている。

奇妙というより、異常だ。

『手始めにまず』

そう言って、生徒会長はマイクから顔を遠ざけて

「WooooooooooooooooooaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA！！」

思い切り叫んだ。

鼓膜が揺れる。

悲鳴が聞こえる。

先生、先輩、生徒……全員が崩れ落ちて、跪（ひざまず）いていく。

最終的には立っていたのは数人だった。

『まぁ……2年と3年は置いておくとしても』

マイクを通して生徒会長が言った。

『貴様ら一体何者だ』

「王城隼人」

「嘉島奏明」

「海馬正」

「常盤雅」

「音河響花」

「虎郷火水」

俺たちは選手宣誓のように一人ひとり名乗った。

向こうに聞こえているはずはないだろうが。

０２ー魅せる風景、帰る跡ー（前書き）

どんな話になるのかわからない。

０２ー魅せる風景、帰る跡ー

入学式を終えて、俺たちは教室に戻った。
そして、先ほどまでの楽な気分はなくむしろ淀んだような『圧力』のみが残っていた。
ほどなくして、島原先生がやってきてＨＲを終えてその日は終了となった。残りは学校見学でもなんでもすればいい、だそうだ。
昼食をとりながら、俺と海馬と隼人は話し合った。

「情報収集ってのは、最大限の力になるぜ」
海馬がそう言って俺たち６人の行動が始まった。

「いいかい？こうなってくると、僕らが仲間であることをわざわざ露見させて行動する必要はない――むしろ、僕らは特になんの関わりもない雰囲気を出しておいた方がいいね」
「となれば、チーム分けと行こうか」
という会話の末、バランスを考えてチームが決まった。

『チーム探偵』俺と隼人、『チーム警察』虎郷と雅、『チーム諜報』海馬と音河

「つまるところ、僕らは情報をまとめて考えたり、聞き込みしたりして解決する」
「『チーム警察』はとりあえず行動ってことか。まぁ美人二人だから男子への声掛けも楽にできそうだな」
「『チーム諜報』は海馬による運でいろいろ情報は集まるだろうし、音河は耳がいいから小さな話でも聞き逃さない」
「なーる。いい感じの人事だな」

という会話をしながら俺たちは誰もいない教室でのんびりしていた。
俺は海馬の席に座り、隼人は椅子の背もたれを前にして俺の方を向いている。
椅子を浮かせたり戻したりして、舟を漕ぐように揺れていた。
「ていうか」
俺はそう言って隼人の方に視線を向けて舟を漕ぐのをやめる。
「お前は何がしたいんだよ」
「聞いてなかったのかい？」
「いや、聞いてたけどさ」
俺はそう言って机の上に腕を置いて、身を乗り出す。
「あの生徒会長がこの学校を支配しているこの状況を知りたいってだけだろ？」
「ああ」
「でも知ってどうするんだよ。まさか生徒会長にでもなるつもりか？」
俺は笑っていったが、
「ああ、そうだよ」
と隼人は至極真面目な顔で答えた。
「……マジ？」
「そりゃ、僕は王城を超えることが夢だからね。去年はもう遅かったけれど、今年は生徒会長として上位に立つよ」
「第一歩ってわけか」
「ま、そういうこと」
隼人はそう言って笑う。
まあ、キングがやりたいようにやるということなら、俺は最大限利用されることにしようか。
「情報収集の結果は家に帰ってからだ。僕らはそろそろ帰ることにしよう」
「……なんで、俺たちは今まで残っていたんだ？」

「僕らが仲間であることを印象付けるためさ」
「……誰に」
「彼らに」
そう言って指をさした隼人。
窓の外、別館校舎。
屋上。
数人の男女が双眼鏡片手にこちらを見ていた。
「何なんだ、あいつら」
「推測の域だけど、生徒会役員かな？」
「なるほどな……」
「僕らが同じ家に住んでいることはばれない。王城グループの警備力と東先輩、そして今日元さんに頼んでるから、何とかなると信じてるよ」
そう言って隼人は荷物を持った。俺も荷物を持ってから教室を出る。

「ちょっとコーヒー買う」
と言って校内の自販機に隼人が向かった間、暇だった俺は体育館の裏に向かった。
学校の体育館裏は、告白の場や不良のたまり場となることが多いような気がするので、この学校では一体どんな場所になっているのかが気になったのだ。
できるだけ足音を立てずに、静かに歩く。
そして体育館裏につくと、
「……」
何もなかった。
いや、本当の意味で何もなかったのだ。
「は……？」
普通は芝や伸びた草木が固まっているものだが、それもなく、むしろ整備されたようにきれいだった。そして四角くコンクリートで

固められている。
「何なんだ、ここ……」
俺はそこを静かに歩く。
「……！」
殺気！
俺は上を向いた。
体育館の上から飛び降りてきた何かが俺を襲ってきた。
「な！？」
俺は咄嗟にコンクリートに触れて日本刀くらいの棒を作り、攻撃を受け止める。
キンッ！
とぶつかり合う音がした。
得物は日本刀だったようで、相手は少し驚いたような顔をすると同時に、すぐに俺から離れた。
「な、なんだよ急に！」
俺はようやく相手の姿を見る。
「って」
女だった。
ポニーテルの髪を花の簪（かんざし）で留めている。制服をきっちり着こなしてはいたが、改造しているようで、みんなのものとは少し違っていた。
「……」
なんでだろうか。俺を攻撃してくる奴は基本女子なのだが……。
「アクターだと……貴様、一体何者だ」
女はそう言って、刀の切先をこちらに向けた。
「何者って――アンタこそ何なんだよ！」
「生徒会副会長、日下（くさか）だ。私を知らないだと……？」
そう呟いて、女は俺をにらむ。
「しらねーよ。ていうか、いきなり襲ってくるってなんなんだよ！」
「……ああ、新入生だったのか。これは失礼した」

女はそう言って、先ほどまでとは打って変わって笑顔を見せた。
「すまなかった。てっきり、体育館裏で悪さをする連中の何かだと思っていたのだが、勇み足だったようだ」
「え……あ、ああ。いや――」
「改めて自己紹介させてもらおうと思う」
そう言って女は俺に手を伸ばした。
「生徒会副会長、日下入（くさかしお）だ。気軽に、『シオ』と呼んでくれ」

０３ー落として砕いて、葦の糧ー

「で、その女生徒はアクターのことを知っていたわけだ」
「そうだけど……」
隼人と一緒に帰り道を歩きながらその話をしていた。

あの後、
「失敬、まだ仕事の最中だからな。またいずれ会おう」
とシオさんが言って、屋上へとまた飛び上がっていった。
結局俺は名前を名乗ってはいない。

「その女性から話を聞ければいいんだけれど……まぁ、相手は結局生徒会役員だからね」
そう言って隼人は少し思案顔をした。

「ただいま」
「お帰りー」
俺たちが帰ると全員がいた。
玄関の方に虎郷が出てきて、
「会議、始めるわよ」
と言って虎郷が俺の方を見た。
そして少し強くにらんだ。
「……何だよ」
「後で話すわ」
隼人が先にとおり、虎郷が前を行く。俺はそれを静かに追いかけながら考える。

弁当はちゃんと食べた。伝えることは伝えたし、当番を忘れてはいない。
なんだ……俺は何をした……。

「まずは、諜報の結果だ」
そう言って海馬が口を開いた。
「情報を大まかにまとめて話す。桜凛（おうりん）学園の生徒会発足時、生徒会長の支持率は２０パーセントだった。しかし、他の生徒会長になろうとした者たちが、全員怪我や病気で倒れた……ここまでならよくある話だ。その生徒会長が全員ぶっ潰したんだろう」
だろう。
しかし、違うということは――。
「現生徒会長はその犯人を捕まえて、支持率を上げたんだ。最初は自作自演という線もあったが、それからの行動も正義に満ちていて、今のようになっている」
海馬はそこで音河に目をやる。
「考えてみればわかるけど」
と、今度は音河が話を始めた。
「もしも威圧感だけでこの学校を支配していたら、支持率なんてそんなに持たない……すぐにリコールされてしまう。ということは絶対王政ではなかったんだよ。今、2、3年生が彼に生徒会長を任せられるのは、それと同時に絶対の『信頼』があるからなのさ」
音河はそう言って、諜報の話は終了、というように雅の肩をたたいた。
「では、チーム警察ですが、こちらは反生徒会勢力と生徒会の情報を集めてみました」
雅が話を始める。
「単刀直入に言って、反生徒会勢力は存在しませんした」
「しなかったのか……」
「はい。治安を乱す連中は当然多かったようですが、生徒会自体に

戦いを挑んだものはほとんどいなかったようです。そして生徒会ですが」
そこで、今度は虎郷が
「メンバーの構成は」
と話を始めた。
「庶務、書記、会計、副会長、会長の5人と、学園補佐会のメンバーが2人の計7人で構成されているわ。そして中でも堅物なのが、副会長の日下という女よ」
「堅物……？」
「数多くの男が彼女に話しかけたけれど、全員が粉砕されている。彼女が会話を成立させられるのは、生徒会のメンバーだけらしいわ」
と、そこで俺をにらんだ。

「なのに、新入生の男子が副会長と仲良く話しているという情報があったの」

……なるほど。
それが俺か。
「それで、奏明さんはいきなり堅物に話しかけに行って、しかも粉砕されずに済むなんてすごいですね、っていう話をしてたんです」
雅が嬉しそうに言う。
うん、違うんだけどなー……。
「ともかくこれで話し合いは終了だね」
そう言って隼人は笑った。
「では、夕飯の支度に移ろう。今日は担当は……」
「ああ、俺と音河だ」
海馬が立ち上がる。音河も言われてからついていく。
家に住む人数が6人になってから、量も多いので2人で作業することにしたのだ。
「じゃ、僕は思考を続けるかな」

そう言ってテレビをつけて隼人はソファーに寝転がった。
雅はちょこんと、その近くに座りソファーにもたれかかった。

「嘉島君」
嫌な予感。
俺は虎郷を見る。
「ちょっと来なさい」
「……はい」

０４ー舞えば乱れて、春来るー（前書き）

青春というわけですよ。

０４ー舞えば乱れて、春来るー

オンマイルーム。
「うぉわ！」
俺の体はその部屋に投げ出された。
「どういうつもり」
……『？』すらない、彼女の冷淡な言葉。ていうか、
「どういうつもりってどういう意味だよ」
俺は虎郷の質問に質問で返す。
「……敵対するべき副会長にわざわざ話しかけてどうするのよ。わかってるの？こちらの情報をわざわざ与えるわけにもいかないでしょう」
もっともな理由、だ。
でも、その理由にはぶつけることのできる事実がある。
「俺から話しかけたわけじゃないし」
むしろ攻撃されかけて驚いたくらいだ。
と、そこまでは言わなかったが。
「あの人には、聞きたいこともあるし」
「……だからといって、話しをしていい理由にはならないわ」
そう言って虎郷はにらんでくる。
はぁ。
「言っとくけどな、虎郷。俺は巷で噂の『鈍感な主人公』じゃないんだよ。そんな使い古されたネタは俺には通用しない」
「そうね。むしろそれが多すぎて、最近のライトノベルは面白さに欠けている事が多々あるわ」
「逆にこいつは俺に気があるんじゃないか？と、深読みしすぎる主人公もいたりする。何が正解なのかわからないな――というのは置いといて、だ。俺は鈍感ではないから――」
そう言って虎郷を見た。

「お前が怒っているのはもっと私的なことだろ？」
「……」
「妬いてんのか」
俺はそう言って虎郷を見る。
虎郷は突然、鋭い目に変わり先ほどより強く俺をにらんだ。
「貴方は、どうして、そういう！」
表情や行動は変わらないが、言動は変わってしまっている。
「落ち着け、バカ」
「貴方にバカって言われる筋合いはないわ！」
「うん、気持ちはわかるけど――」
「大体、あならは」
「呂律が回ってない！」
俺は叫んで、虎郷を強制退場させる。そしてリビングの方に向かった。

「女子めんどくせー！」
俺はそう言って隼人が寝ているのとは別のソファーに座りこむ。
「待ちなさい！話はまだ終わってないわ」
「俺の中では解決だっつーの！誰か、助けて！」
「大変そうだね、ソウメイ君」
「女関係ならいつでも相談承ってんぜ」
俺の発言に隼人と海馬は笑って答える。
「大体、火水は妬きすぎだよ」
「学校で女子と話しているだけで不機嫌になりますからね」
女子二人が教えてくれた新情報！
「そうなのか、虎郷」
「彼女たちは適当に言っているだけよ。私がそんな存在なわけないでしょう？」
「嫉妬の炎ってわけか」
「だから、違うって言ってるでしょう！」

キレる虎郷。怖い。

夜は俺たちは普通に騒いでいた。

虎郷を見て、ああ、もういろいろ吹っ切れたんだな、と思えて少しうれしかったのだが。

次の日、俺は人生初の修羅場を経験する。

０５ー会えば絡みし、赤の糸ー

昨日、俺とシオさんが出会った体育館裏。
そこに、今は俺を含めた４人の人間がいた。
ていうか。
「あの、やめにしませんか２人とも」
と俺は怯えつつも、虎郷とシオさんに提案する。
「……」
「……」
ゴゴゴゴゴ……
と、漫画ならば地響きが聞こえてくるような面持ちで２人は俺の提案を黙殺する。
虎郷はともかく、シオさんまでここまで怖いとは思っていなかった。
「ていうかよ」
と、俺の横でもう１人の人物が口を開いた。
「大体、お前の所為でこうなったんだろうが、嘉島」
「海馬……こんなことになるとは俺も思ってなかった――ていうか俺の所為じゃない……」
「おいおい責任逃れかよ」
海馬はそう言って俺を少しだけ蔑むような目で見る。
「責任逃れって――」
「誤解を解かなかったのはお前だろ？それで十分な責任だぜ」
「それは――」
「女には責任を負わせちゃいけないのさ。時には、男が丸ごと背負うべきなんだぜ」
海馬はそう言って正面の２人を見た。
俺は少し俯きつつも、その２人の方に視線を向けた。

どうしてこうなってしまったのか。できればタイムマシンでも使いたいくらいだが――そして俺に『余計なことだけは言うな』と伝えたいくらいだが――そんなことはできないので、時間を遡(さかのぼ)るにとどめることにしよう。

昨日とは違い、今日は全員バラバラに学校へ登校した。チーム分けした以上、俺たちが関わっていることはばれたくないわけだし、起きる時間が本来みんな違うからだ。

隼人は基本はマイペースなので、人を呼ぶときなどのみ早起きだが、それ以外は遅起きなのだ。

で、俺は皆より早めに起きて――それでも虎郷は誰よりも早く起き、みんなの朝食を作ってから出てったようだが――学校へ向かった。

そしてクラスに入ると、教室には既に数人の生徒がいた。虎郷は俺の顔を一度軽く見たが、すぐに視線を落として、教科書を読み始めた。

俺は自分の荷物を置いて、これからどうしようかと悩んでいると

「ん？」

廊下がざわざわしているのが聞こえる。生徒もそんなに多くはないのにここまでのざわめきとは、怪獣でも現れたか――。

「君」

と、俺の近くで声がした。

「あ……」

目の前にいたのはシオさんだった。

「思い出したよ。玲王の演説を聞いて立っていた少年の一人だな、嘉島奏明」

「あ、はい……」
そう言えば名乗ってないのだった。
「興味深いと思ったのだ。君たちに対する監視をつけていたんだけれど、監視は外しておいたぞ」
「あ、ありがとうございます」
「お礼代わりと言ってはなんだが、ちょっと付き合ってくれないか？」
「え？」
俺は少し固まってしまったが、
「まぁ、来てくれよ」
そう言ってシオさんは俺の手を引っ張る。

「待ちなさい！」
叫び声が上がった。
虎郷だ。
「……ああ。君も玲王の演説を訊いて立っていた子だな」
シオさんは、口調は変えていない。しかし、言葉に冷たさを感じる。
「同じ理由なら私も行くわ」
「いや、君には興味はない。私が用があるのは奏明だけだ」
「……！！」
あ、虎郷がキレている。
「行こう、奏明」
「あ――」
「待って」
虎郷はそう言ってシオさんの腕をつかんだ。
「監視していたということは私たちが敵対していることも知っているのでしょう？それについていくと思うのかしら」
なるほど確かに虎郷らしい。しかし、いつもの虎郷ならここでこんなことは言わない。なぜなら、敵対していることを知らない可能

性もあるから――。
恋は盲目。
客観的に見れなくなっている。
「……まったく、貴様は面倒な女だ」
そう言って、シオさんはため息をつく。
「ついてこい。格の違いを教えてやる」
シオさんはそう言って歩き出した。虎郷はそれについてくる。
教室を出ると、
「……で、これはどうすれば勝ちのゲームなんだ？」
と、登校してきたばかりの海馬が笑って出迎えてくれた。

０６ー若さ愚かさ、紅と散るー

「修羅場っていうのはね」
隼人が昔言っていたのを突然思い出した。
確か、虎郷が俺たちの仲間になってすぐの病院で、だったような気がする。
「主に恋愛ごとに多いような気がするけれど、元々は修羅……勝ち負けを争う血なまぐさい戦争の場所のことを言うのさ」
「そうなのか。色恋沙汰以外の意味で聞いたことはないが……」
「実際に修羅なんてものを経験したことのない人間の方が多い。だから身近な血なまぐさいもの……つまり恋愛関係における女同士の喧嘩を修羅場と呼ぶんじゃないかな？」
「……確かにためになる話ではあるけれど、それがどうかしたのか？」
「何だろう。ヒスイ君ではないんだけれど、予知っていうのかな。なんとなく予測できるんだ。君はいつか、修羅場を経験する」
「……お前に言われると説得力があって怖いんだよな……」
その時はそう言って話を流したような気がする。

それを今、経験するとは思っていなかったよ……。

「おいおい、深く考えすぎんなよ。本当の意味で修羅場でないだけマシだと思おうぜ」
「ていうかこれから何をするつもりなんだよ……」
俺は視線を二人の方に向けた。
「先に膝をついたら負け……でいいですよね？」
「ああ。武器の使用は？」
「そうでもしないと勝てないのならば、どうぞ」
虎郷はそう言って挑発する。シオさんは少し目を細めたが、すぐに

「そうか」
と視線を和らげて、手品なように日本刀を一振り取り出した。
「はは、手品のように見えたか、奏明」
そう言ってシオさんは笑顔を見せる。
「単純にブレザーの中から取り出しただけだよ。手品なんかではないさ」
シオさんは日本刀を左肩の後ろに構えた。
なんだろう。普通の刀の構え方ではなく、左手で鞘を持ち右手で柄を持っている。
魅せるような構え方だ。

「ていうか、日本刀って……修羅場じゃねーのリアルに」
海馬が冷や汗を流す。
「そりゃあそうだけど……」
それでも勝敗は歴然だ。
近未来予知を持つ虎郷に普通の――それがたとえ学園内で刀を振り回す副会長だとしても――人間に勝てるわけがない。

「先手は後輩に譲ろう、虎郷」
「いえいえ。結構です。ハンデとして先輩に譲ります」
「ハンデなんていらないさ。私は怒りに身を任せるようなタイプではない。故にちゃんと相手の力量は見えている。貴様に私の全力を出す必要はない」
「……だとすれば、貴方のメガネは曇っているようで」
「色眼鏡なんざしているつもりはないが」
そう言って静寂が訪れた。

「お言葉に甘えます」
言ったが早いか、虎郷はすさまじいスピードで行動し始めた。
一瞬で3メートルくらいの間合いを詰めて、右足が腹部に向かっ

て伸びる。
ガン！
という音で、シオさんの体は上に向かって浮いた。
決まった。
そう思われたが、虎郷は少し驚いた顔をしている。
「なるほど。強い攻撃だ。だけれど」
シオさんは空中で言いつつ、くるくると回り、きれいに地面に着地した。
「洗練されていない。狙いをぎりぎりまで定めず、空いた場所に攻撃を突っ込んだだけ……だな」
「……」
虎郷は黙っている。こういう時に黙っているということは、『図星』という意味だろう。
未来が見えていなかったのか？
「貴様がどんな能力を持っているのかはわからないけれど、今のは能力を使うまでもないと貴様が判断したということか」
そう言ってシオさんは――
虎郷より早いスピードで、虎郷より長い距離を埋めた。
「甘いな、後輩」
シオさんはいつの間にか鞘から抜かれた刀を横なぎに振った。
虎郷の体に当たり、虎郷は体育館そのものにぶつかり、落下する。
「く……」
身をよじって、無理やり着地した。
「相手の力量を見誤るな。『獅子は兎を撃つに全力を用う』とは正にこのことだ」
「……貴方は貴方で舐めたことをしてくれますね。峰打ちとは」
「殺したいわけではないのだ。舐めているわけではない。もしこれから先も盾突こうというのならば、それもまた一興だ。私の日々は刺激が足りないからな」
そう言って、シオさんは刀身を虎郷に向けた。

「……全力でやって見せるわ」
「いや、残念だがもう終わりだ」
そう言ってシオさんは顎で虎郷を指す。
虎郷は地面を見た。
そして気づいた。
「あ……」
片膝をついていたのだ。
「あらかじめ、勝負には全力を注がなければならないんだよ。後悔は先には立たない」
シオさんは刀を鞘にしまって、
「もうＨＲが始まる。放課後にまたここにきてくれ、奏明」
そう言ってシオさんは身を翻して去って行く。
その時には既に刀は無かった。

虎郷はしばらく呆然と立っていた。
「虎郷、お前の負けだ」
海馬はそう言って、虎郷の肩に手を置く。
「……油断しただけよ」
「違うな。油断した『所為』だ」
「……」
「もし本当の戦争なら――本当の修羅場ならば、虎郷……お前は殺されてんだぜ」
海馬はそう言った。
そしてシオさんのように身を翻してから、俺の横を通り、
「帰るぞ、嘉島」
「え……でも――」
「今、お前にできることはこの場所が終わったことを認めて、日下副会長の約束を守ることだ」
「……」
「それに、今お前は何も話しかけることはできないだろ」

そう言って海馬は俺の体を無理やり引っ張った。

虎郷は膝をついたまま、肩を震わせていたのが見えた。

07 ― 逢瀬に叶わず、縁も無く ―

放課後。
俺と隼人、そして音河は一緒に体育館裏に行った。

「ああ、奏明。来てくれたのか」
コンクリートの上に椅子を作って、そこにシオさんは座っていた。
そして、俺の後ろの王城を見て
「ああ。君も知ってるよ。奏明の友達の……そう、王城隼人と音河響花だね」
「名前を知っていただけて、光栄ですよ。日下副会長」
「いやいや、この間、玲王の唸りを聞いても立っていた者は数名だからね。その中にいた者は全員覚えてるよ」
シオさんは思ったよりもフレンドリーな対応を見せた。
虎郷に対してのみきつかったのか……？
「ところで、何の用だ？隼人、響花。言い方は悪いけれど、君らはお呼びでないんだけれど……」
「いえ、僕は自分の用を済ませたら、早急に帰りますので」
と隼人は笑う。
ていうか、この人普通に下の名前で呼んだな。
「用……というと、アクターかな？」
「ええ。どうしてあなたがアクターを知っているのかを訊きたくて」
「それは簡単だよ。そして、それは私が奏明を呼んだのと理由がある」
「え……」
どういうことだろう……。
「君への伝言だよ。嘉島奏明」
「伝言って……誰からですか？」
シオさんの口から出た人物――それは

「嘉島奇跡（かしまきせき）」
「奇跡……！？」
どういうことだ。
どうして……どうしてアイツが！！
「嘉島……ということは知り合いかい？ソウメイ君」
「……嘉島奇跡は」
俺はつばを飲み込んだ。
無駄に間を開けてしまったが、俺は口を開いた。間をあけるべきようなことなのだから。

「俺の父親だ……！」
「父親……って、嘉島のお父さんって蒸発したんじゃ――」
音河がそう言って驚く。
そりゃあそうだ。俺だって、今すぐシオさんを問い詰めたいくらいだから。
「伝言はこうだ。『お前とその仲間である君たちがこの学校にいるということは、君らは大きな戦争に巻き込まれるだろう。それを阻止するための一歩として、君らには生徒会選挙を長引かせてほしい。どうすればいいかは、シオに聞いてくれ』だそうだ」
「……どういうことだかわかるか？隼人」
「……よくわからないけれど、小さなことでもいいなら」
「言ってくれ。それで十分助かる」
「多分だけれど、君の父親は、『あの男』を知っている」
あの男……。
つまりこの学園への入学を勧めたアイツか。
「あと、君の父親はしっかりとアクターを理解しているようだ」
「それは間違いないぞ。私たちはアクターの知識を教えられたからな」
「……」
どういうことなんだ。

俺の父親がアクターだったことは間違いないが、それをあの人はしっかり知っていたということか。

「……まあ思うところはあるだろうけれど、私の話を聞いてほしい」

「話というのは？」

「うん、恐らく君も関わることだろうから、あらかじめ話しておこう。二度手間は私も嫌なことだ。一応言っておくが、この件にかかわっているのは、奇跡さんと私だけだ」

そう言って、シオさんは俺たちを見た。

「生徒会長選挙のルールを説明しよう」

０８ー決別に笑いし者ぞ、愚者の極みー（前書き）

今回は短いです。

ちょっと、ここで区切りたかったので、短くしました。

08 ― 決別に笑いし者ぞ、愚者の極み ―

桜凛高校：校則

15．生徒会選挙に関する項目

1．生徒会代表会長選挙

本校の生徒会を組織する際、生徒会長に就任する者のみが立候補する。生徒会役員および生徒会を決めるのは、生徒会長に立候補したものに一任するものとし、生徒会役員を決めておかなければならない。生徒会代表選挙（以下選挙とする）の規則は以下に記載する。

（1）選挙における規則

選挙活動は、立候補してから一週間とする。投票方式は『役職別方式』と『生徒会方式』とする。

役職別方式は、立候補した生徒会長が任命した生徒会役員を、役職別に選挙する方式である。この方法は、生徒会長と任命された役員が必ず同じものになるとは限らない。

生徒会方式は、立候補した生徒会長のみが結果として選ばれ、その生徒会長が任命された役員は無条件で生徒会役員に任命される。

例外として、そのほかの規則がある。

（2）生徒会役員実力選挙

生徒会選挙において、最多得票数が他の候補者の１．２倍以下の場合は生徒会役員実力選挙が行われる。
生徒会役員の役職別にそれぞれが実力を見せつけ、総合成績で勝利した生徒会を、生徒会とする。

「以上がルールだ」
「つまり、僕らにこれに参加しろと、君の父親は言っている訳だね」
「まぁ……そういうことだろう」
「そして、この中で一番期間を長くとるものが」
そう言って、シオさんは一度ためた。
そして言った。

「生徒会役員実力選挙」

この戦い。
まさか、世界の破滅に近づくとは思ってもいなかった。

０９ー明日の空、昨日の雲と今日の月ー

話の腰を折っておこう。
でなければ俺は考える能力を失ってしまいそうだ。
理解できるできない云々は置いておくとして、だ。
俺の父親は、目の前にいる日下　入さんと知り合いだった。そして、彼女の話ならば生徒会長である『一条字　玲王』も知っているようだ。そして父からアクターに関する情報と知識、そして使用方法等を聞いたらしい。
そして全面的に親父を信頼しているらしいシオさんが預かった言伝（ことづて）によれば、俺たちは生徒会選挙に立候補して、生徒会選挙の期間を延ばさなければならないそうだ。話はシオさんだけしか聞いていない上に、そうしなければならないということしか聞いておらず、理由も分からないそうだ。
ルールに則るならば。
立候補して、俺たちは生徒会選挙を長くする必要がある。そのためには『生徒会実力選挙』まで持ち込むしかない。
つまり俺たちの条件は、『最多得票数を得た立候補者と他の立候補者の得票数を１．２倍以上の差を残さない』ことだ。

「難しいことに首を突っ込んでしまったような気がする」
隼人はそう言って帰り道を踏みしめながら空を見上げた。
「どうせ生徒会には立候補するつもりだったんだから、まぁいずれ知ることだったろうけれど……」
「……」
「……ソウメイ君？」
「え」

声は耳に入っていたが、何を言っているのかまではしっかり理解していなかった。
「聞いてなかったのかい？」
「ああ、悪いな」
「……まぁ今まで失踪していた父親の情報を聞いてしまったんだ。そうなってしまうのも無理はない」
「……」
確かにそこに驚いている、というのもある。
だが俺が何よりも疑問なのはその上だ。
どうして父親がアクターを知っているのか、だ。
父親の力は簡単に言うならば、相手の記憶を消し去る力。世間に残った嘉島家の存在を抹消し、自らの消息までも完全に隠してしまうようなことができる能力。
だが父親はこれを『よくわからない力』としか表現しなかった。
失踪してから知ったのか、それともわざわざ隠していたのか……。
……わからない。考えたところで結果が出そうなものでもない。
「まぁ今は親父の言ったことを遂行するしかないのかもな」
「だね。取りあえず1回家に帰ってから作戦会議ということになる。けれど……」
そう言って俺の方を静かに見た。
「君は家族の元に帰りなよ」
「え……？」
「父親のことで少しでも情報がわかったんだ。伝えるべきじゃないのかい？」
「……それはダメだ」
俺はそう言って足を止める。隼人もそれを見てから止まった。
「その話を聞いたら、母と兄は止まらなくなる。俺の血縁だからな」
「……」
「何より、親父には自分の口から説明してもらわない限り俺自身納得できない。今でさえ、その情報が嘘ではないのかと考え続けてい

る」
俺がそう言ったのを見て隼人は少し考えるようなそぶりを見せてから、
「……そうかい」
と言って歩き始めた。
俺はその背中を静かに追いかけた。
「ソウメイ君」
「何だよ」
「僕が思うに――つまるところ直感だけれど」
「？」
「君の父親はすぐに僕らの前に現れると思うよ」
「……どういうことだ？」
「だから直感だって。根拠はない」
そう言って隼人は歩き出す。
見透かしたような言動。根拠のない行動。
隼人はそれで生きてきた。
もしかしたら……。

「あれ？」
隼人は言った。
気づくと家の前にいた。
「どうした？」
俺が尋ねると隼人が指をさす。
指した先には――
「……？」
居たのは、虎郷と海馬と音河と雅――つまるところ全員。
皆が手持無沙汰のように門にもたれかかっていた。
「何をしているんだい？こんなところで」
隼人が尋ねる。
「……嘉島君」

隼人を無視して虎郷が俺に言う。
「何だ？」
虎郷は少しためらうように唇を震わせていたが、一度唇をかみしめてから言った。
「私と勝負しましょう」
「……は？」
「真剣勝負よ」
虎郷の眼は今までに見たことのある――それは戦うときにいつも見せていた、闘志に燃えた目だった。

１０ー絆の岩を、穿つ雨ー（前書き）

恋愛難しい。

っていうか、女子ってめんどい。

１０ー絆の岩を、穿つ雨ー

俺たちはＷＲにいた。
道路なんかでアクター同士が乱闘を起こせば、それこそ修羅場になってしまう。
というのは建前で、どういう理由で虎郷が俺に戦争を申し出たのかが全くわからなかったからだ。

「よくわからんが……取り敢えずお前らが戦うんだな。この空間で」
今日元さんは俺と虎郷に言う。
「はい。どうなるかわからないので、できれば退去していてください」
「まあそれはいいんだけど……ふむ」
今日元さんはそう言って俺を見る。
「お願いします、今日元さん。後で理由は話しますから」
「……分かった。じゃあ、１時間後にここに来るから」
今日元さんはそう言って、静かに目を閉じる。
すると彼女の体はパッと消え去ってしまった。

よくわからないが、海馬と雅と音河、それに隼人はこの空間には入ってこなかった。
海馬と雅と音河は原因を知っているのだろう。それを受け入れて俺と戦うことを止めようとはしなかったほどの原因――理由を。

「虎郷。どういうつもりなんだ」
「……」
「何でいきなりこんなことになった。シオさんが原因なのか」
「……」

「今日の敗北か。それとも、そんなに俺がシオさんとかかわっていることが気に入らないのか。なんにせよ、それで俺がお前と戦うっていうのは明らかにおかしいと……俺はそう思うぜ」
「……」
「何とかいえよ」
俺がそう言っても、彼女は何も答えない。
但し、それでも相変わらず強い殺気を放っている。
しばらく静寂の中、虎郷が口を開くのを待っていた。
「私にもよくわからないわ」
突然だった。
「今までの私なら、好きな人が他の女子と話しているくらいのことで頭に血が昇るようなことはなかった」
「……」
「きっとそれは……そう。貴方という人間を深くまで知っていて、尚、あなたのことが好きなのは私だけだったから」
虎郷は自らの発言を考えながら口に出している。
「でも日下副会長は違う。貴方がアクターだっていうことも知っているみたいだし、私たちがそういうのにかかわっていることも分かっている。そして、それを踏まえた上で貴方に興味を持っている」
「いや、あれは別に恋愛感情とかじゃない――」
のか？
いや、恋愛感情ではないだろう。それは俺もそう思う。
だが、１００％ではない。
適当なことを言って、虎郷をこれ以上苦しめることも俺は良しとはしていない。
「何より私より強いわ」
「……」
「私たちは私たちの目的のためにお互いを利用している。そして私の利用価値は『力』」
「おい、虎郷、それは――」

「もし日下副会長があなたたちの味方になれば、私の必要性はなくなるわ」
「それは違うだろ。お前は――」
「だから貴方の手で決めて」
虎郷は俺の話を尚も聞こうとはしない。
「私の力が必要かどうか、同情や悲哀なんて感情は捨て去って吟味して頂戴」
そう言って虎郷は俺をにらんだ。
なるほど。
そういうことか。
「行くわよ」
「来いよ、虎郷。言われたとおりに吟味してやる」
俺は構える。
瞬間だった。
すでに虎郷は俺の懐まで瞬時に間合いを詰め、拳を握りしめていた。
速い。
誰が見てもそう思うはずだ。
「悪いな」
だがそれも俺には通用しない。
俺の右の手のひらは突っ込んできた虎郷に伸ばすだけだった。
鳩尾(みぞおち)に俺の手のひらは吸い込まれるように入る。
「か……」
空気を一気に抜いてしまったのだろう、そんな音がした。
「俺のムービーの力があれば、近未来予知もできる。運もいいし、分析能力も高い。俺には勝てないよ、虎郷じゃ」
俺は厳しいことを言うように虎郷をゆっくりと地面に降ろしてから座った。
「正直なところ、ずっと前から俺は虎郷に利用価値なんか感じてはいなかったさ」

「……」
虎郷は顔を伏せる。彼女のプライドから考えても、彼女は人に涙を見せたりはしないだろう。
「でも、俺は虎郷がいなかったらダメなんだよ」
虎郷は特に何の反応も見せない。
「お前は居てくれるだけで、俺を作ってくれているんだ。絶対大丈夫だから」
「……日下副会長のことはどうするの」
「あの人は別に俺に興味があったわけでもないだろう。俺を名前で呼んだのは彼女の癖ってだけだと思うし」
「貴方はどうしたいの」
「虎郷と一緒に居たい。それだけ」
本当は顔から火が出るほど恥ずかしいけれど、恥ずかしがって彼女を傷つけることに比べれば、なんともない。と、そう思えるのだった。
「……」
彼女は何も言わなかった。
けれど肩が震えていることからも泣いているのはわかっていたから、俺はその横に何も言わずに座っていた。

１１ー過去が渡す、明日の橋ー

「生徒会役員を決める」
俺はＷＲから帰って、全員にそう宣言した。
本来、ＷＲから帰ると睡眠状態と同じになってしまうため、意識を回復することはできないが、あらかじめ海馬に起こしてくれるように頼んでおいた甲斐があった。
「……えっと、解決したのかい？」
隼人はどうも海馬たちから話は聞いていたようで、解決したという結果に驚いていた。
まあ今までの俺なら解決できたはずもないだろう。
「解決したわけじゃない。納得いっただけの話」
虎郷はそう言ってソファに座り込んだ。
「……そうかい」
隼人はいつもの『まあいいか』の顔をしてそう言ってから
「つまり、君は父親の意思を酌むってことだね？」
「そういう言い方は気に入らないけど、そういうこと」
「となれば、一人余るわけだが？」
海馬がそう言って、料理をテーブルに置いていく。
「庶務、書記、会計、副会長、会長では５人。ここにいるのは６人」
「誰か一人が役員にならないってことになりますね」
海馬のセリフに雅が付け加える。
「生徒会役員実力選挙」
音河が言った。
「実力ってついているから、多分戦闘ってことになるのかな？」
「いや、実力だからって戦闘とは限らないぜ？『運も実力』のうちってな」
海馬はそう言って笑う。

「庶務は年功序列で私が担当します」
雅はそう言った。
「戦闘であれ何であれ、私は実力勝負ならイーブンまで持っていけますから」
「だね。じゃあ悪いけどそうしてもらうよ。で、音河」
そう言って隼人は音河の肩に右手を置く。
「君に役職はつけられない」
「……まぁ、隼人がそういうならそうなんだろうね」
音河はそう言って特に嫌がったり落ち込んだりすることもなく、受け入れたようだった。
信頼が垣間見えていた。ああ、あれが本当の恋愛の形だったりするのかもしれないな、と仕方のないことを考えていた。
「で、書記は……」
俺は皆の顔を見渡す。
……うん。
「海馬。頼む」
「俺か？あんまり字がきれいじゃないけど、いいのか？」
「いや、今は役職は気にしない方がいいし……気にしたとしても海馬に会計は無理だろ？」
「ああ……そういうことか」
海馬は納得したようだ。
海馬は字はともかく、金銭感覚はほとんど崩壊している。
彼の家はもともと裕福で、今でも爺やこと『県　虎兵衛』さんから仕送りをしてもらっているようだ。だから今でも金銭感覚はそこまでよくない。
ちなみに虎兵衛さんは龍兵衛さんの弟である。見た目的には龍兵衛さんの方が若いが。
閑話休題。
「じゃあ私が会計っていうことでいいわね。私はしばらく貧乏生活

が続いてたから、金銭感覚も大丈夫でしょう」
「となると、生徒会副会長だけれど」
隼人が言った。
「いや、それはもう決まってるだろう」
俺が言うと
「そうだね」
と隼人が言った。

「会長は隼人がやるんだろ？」
「会長はソウメイ君がやるだろ？」

同時に言った。

「「……え？」」

１２ー歩む足、戸惑う心ー（前書き）

最近ちょっと短めです。

申し訳ございません。

１２ー歩む足、戸惑う心ー

「……いやいや、だって君の父親が命令してきたことだろう？」

「でも、お前生徒会長やるって言ったじゃん！」

「あれはあの時の状況！今は別だ！」

「いや、お前やればいいじゃん。俺はそんな器じゃないよ！」

「器とかじゃなくて、どちらに使命があるかということで……」

「使命感とか俺がそんなもの持っているわけないだろう！」

「親父さんの言ったことだろ！君は責任を取らなくちゃ！」

「責任とかしるか！ずっと居なかった親父だぜ！？」

「そうは言っても、血はつながっているだろう！」

「血のつながりは今は関係ないだろ！そういうならお前は血がつながってるんだからもうちょっと親と関わりを持てよ！」

「話が変わっている！今はそんな話題じゃない！」

「ていうか、お前がやりたいならお前がやればいいだろ！」

「やりたいとかそういうことじゃ……」
「我慢はよくないぜ！ほら、欲望の赴くままに行動してみろよ！」
「わーわー！聞こえないー！」
「生徒会長の玲王を倒すのはお前にしかできないだろ！」
「……あ、そうだった」
俺たちの喧嘩というか会話はここで途切れた。
「彼の能力がわからない」
隼人が唐突にそう言い始めた。
「え……？」
「恐らく新しい能力なのだと思うんだけど……ちょっと違和感を感じる」
「違和感というのは？」
雅が尋ねる。
「今までとは違う意味で規格外だ」
「規格外……」
「僕が今まで接してきた新能力……つまり、海馬君や東先輩の類は、それでもアクターという印象はあった。でも今回のはアクターとは違うような雰囲気を感じる」
「アクターじゃないのか？」
「いや、アクターなんだ。アクターなんだけれど……うむ」
と、そこでとうとう一人で悩み始めた。
こうなってしまうと会話は成立しない。
「どうすんだよ……」
海馬はそう言って苦笑いを浮かべる。

「取り敢えずは……まぁ」
俺はテーブルに視線を落としてから
「飯にしよう」
と宣言した。

皆は何も言わずに着席した。

生徒会実力選挙まであと2週間。

１３ー仄かに進み、音に啼くー（前書き）

なかなか物語が進みませんねｗｗ

１３ー仄かに進み、音に啼くー

「貴様か。俺の婚約者のお気に入りというのは」
「え……」
学校の到着していきなりの発言で俺は戸惑いを隠せなかった。

いやいや……。
ラスボスがいきなり登場して俺に話しかけてくるって……何なんだよ！
こういうのは最後の方に初めて話すか、気さくに話しかけてきた奴が実はラスボスでした、のどちらかしかないだろ（ちなみのこの場合は前者しか考えられない）！
つくづく、この世界は漫画や小説のように簡単に進むような物語じゃないんだな、と思った。
「貴様か、と聞いている」
「……」
「いや、待て。貴様に違いなさそうだ。そういえば、貴様は体育館で残っていた男だな。嘉島奏明だ」
「あの一つ質問してもいいですか」
「許可する。一つならず、いくつでも受けよう」
「……どうして俺の名前を知っているんですか」
「決まっている。お前が言ったのを聞いたからだ」
「聞いた……！？」
「ああ。聞いた。俺は耳がいいからな。シオはお前の名前を知っていただろう？」
「……」
なるほど。

つまりこの人の能力は耳に関係している……？
いや、待て。重要な要素がもう一つ。
この人の叫び声だ。
「あの――あなたは」
「ちょっと待て。貴様ばかりに質問させるのは忍びない。俺もお前に聞いておきたいことがあった」
忍びない、というのは少しおかしいような気もするけれど
「何ですか？」
俺はとりあえず応対した。
「嘉島……というと、奇跡の親縁か？」
「……そうです」
「そうか。いや、だからなんだということもない。アイツには仮があるが、それは貴様には直結しないものと考えているからな」
「そうですか。それは助かります」
「……で、貴様の話を続けてくれ」
一応、皆様にお伝えしておこう。
今、俺の目の前にいる男は生徒会長『一条字　玲王』だ。
そして彼の口からいきなり飛び出した婚約者は『日下入』と推測される。
まぁ、聞いていればわかることだろうけれど。
「あなたもアクターなのですよね？」
「新型だ。恐らく規格外と呼ばれるだろうな、貴様らからすれば」
「……実は生徒会選挙に立候補しようと思いまして」
「そうか。なら生徒会に正式な申請をしろ。俺たちも次期生徒会を担当するつもりだからその覚悟をしておけよ」
「ええ。楽しみにしています」
「こっちもだ。ではまた会おう」
一条字生徒会長はそう言って、去っていった。
「思ったよりも普通の男だったな」

後ろから海馬が突然現れた。
「見てたのかよ」
「ああ。面白そうなものには関わるけれど、面倒事には首を突っ込まないようにしている」
「ったく……」
「しかし……何か違和感を感じる」
今までの軽薄な表情から急に神妙な顔になった。
「どうしたんだよ」
「分からない。だけれど……今回の闘いは難しくなりそうだぜ」
「難しく……ね」
それは俺も思っていた。
相手の生徒会長と副会長がアクターならば、庶務と書記と会計もアクターなのかもしれない。ともすれば、ただの相手ではないのだから注意しなければならないだろうな、と。
その程度でしか考えていなかった。

１４ー相手取るには、役不足ー（前書き）

注意：役不足の誤法はしておりません

１４ー相手取るには、役不足ー

放課後。
正式な書類を書いている最中だった。
「さぁ、ここまで来たぞ」
ほとんどの記述を終えた書類を前に隼人は呟く。
そこにいるのは俺と隼人と、そして何故か雅だった。珍しいメンバーである。
というのも、海馬は一度家に顔を出しに行くと言い（昨日の会話で唐突に爺やにお礼を言いに行こうと決意したらしい）、音河と虎郷は当然のように洋服を買いに行ったのである。
雅はというと、あまり服装に興味がないようだったので、今こうして俺たちと残っているというわけである。
で、だ。
そのほとんどの記述を終えた書類というのは、唯一２つ空欄があった。

会　長：
副会長：
会　計：虎郷　火水
書　記：海馬　正
庶　務：常盤　雅

と以下に続く。

まあつまり、副会長と会長をどちらにするか、という議論だ。
「どうするんだ」
「どうしようか」
「もうどっちでもいいじゃないですか……」
雅は少し眠そうな目をしている。
「いや、この議論は大切だ」
「そうだな」
「じゃあじゃんけんでもしてくださいよ」
「そんな簡単に決めて言い訳ないんだよ、ミヤビ君」
「だったら決闘でもして決めてみてはいかがだろうか」

そう言って突然現れたのはシオさんだった。

「え……」
「まあ冗談だ。奏明、隼人。お前らがけんかしているのを見て、雅が暇そうだからやってきただけだよ」
「え、私ですか？」
「ああ。私は君のことも気に入っているよ、雅」
てっきり、女子のことは嫌いだと思っていたんだが――。
虎郷が気に入らないのか？
まあ、よくわからないから質問するのもなんとなく阻まれるが。
「雅も選挙に出るのか？」
「ええ……私は雑務向きですから」
「そうか。うちの庶務も雑務向きだからな。実力選挙ではいい戦いになりそうだ」
「役職別に戦うんですよね？」
「ああ。ちなみに副会長は誰なんだ？」
そう言ってシオさんは俺たちを見る。
「俺たちのどちらかです」

「……忠告しておこうか。一つだけ言っておこう」
人差し指を突き出したシオさん。
「玲王には勝てない。私の婚約者は最強だ」
「……婚約者……ですか」
そう言って隼人は少し不穏な表情を見せた。何か思うところがあるのかもしれない。
「ちなみに私にも勝つことはできないだろうな」
自信満々――というよりは、冷静に考えて間違いない、というような表情だった。
「玲王は王座に立つ男だ。それ以外を許さない、という感じだ。だから私はそれをサポートをする役目として結婚するんだ。だから副会長になった」
シオさんはさらにそう続けた。
なるほど。

これを聞いて決まった。それはきっと隼人も一緒だろう。
「シオさん」
俺は言った。
「いい戦いをしましょう」
俺の発言にシオさんは面食らったような表情をした。
「あと、玲王さんは僕が戦うので」
隼人がそう言った時にはそれぞれの名前が既に書かれていた。

会長：王城　隼人
副会長：嘉島　奏明

１５ー同等にして、往々にー

約一週間後。
４月１５日月曜日。

生徒会選挙が始まった。代表として、生徒会長の職に就く予定の者が挨拶することになっている。
その日の午後の最後の授業は、代表としての演説を行うことになっていた。
「まさかと思うが緊張してないだろうな？」
俺はステージ袖で隼人に確認してみる。
「君はわかってないね。僕は王城だ。スピーチなんて数えられないくらいにやらされている」
「あっそ。じゃあ取り敢えず応援だけはしとくぜ」
「任せた」
隼人の発言を聞いてから俺はステージ袖から去って、列に並ぶ。
横一列に出席番号順に並ぶため、隣は自然海馬ということになる。
「どうだった？」
「アイツが緊張なんてするわけないだろ」
「やっぱそうだよな」
海馬は苦笑すると、前を見た。

既に代表者はステージ上に並んでいた。
隼人と先輩であろう男子生徒と女子生徒が一人ずつ、そして現生徒会長の一条字先輩。

『まずは生徒会長、一条字玲王から任期を終え、辞任することを表明していただく』
先生によるアナウンスで一条字先輩はゆっくり前に出て、マイク

のついた台の前に立った。
『……まあ』
そう言って始まった。全然しっかりとするつもりはなさそうだ。
『去年1年だったこの俺が、生徒会長などというものをできたこと自体、今ここにいる生徒たちのおかげといえるだろう』
って、一条字先輩って今、2年！？
てっきり3年生だと……。
『任期満了ということでこれで辞任することになるが、今年度の生徒会長にも立候補した。長々と話すつもりはない。これで、俺の辞任表明と演説まとめて終わりにしよう』
そう言って礼をすることもなく元の場所に戻る。

その空間に包まれていた信頼。
それを俺は肌で感じた。
今の2年と3年は彼の生徒会長っぷりを見てきて、それにより彼は高い信頼を勝ち得ている。
あの圧力のようなものは、彼が王座に立っているということの証明……のようなものだったのだろう。

『順番に宣誓してもらう。1年1組王城隼人』
アナウンスに従うように、隼人は前に出て演説台に立った。

『……まあ』
と。
隼人はいきなりそう言った。
それこそ一条字元生徒会長の真似をするように。

『1年生風情が生徒会長を目指すことに言いたいこともあるでしょうが、それでも一条字先輩も同様の状況から今のような人望を手に

していることを聞いて、安心しました。なぜなら、彼にできたということは僕にもできるかもしれないということです』

んなわけあるか。

そういう声が聞こえた。

俺は少し苛立ちを覚えたが、隼人の宣誓中に問題を起こすわけにはいかないので踏みとどまった。

『手始めに、という言い方をすれば正しいのかもしれませんが、まあなた方に証明してみせます』

一条字先輩にできることは僕にもできるということを。

そう続けて、隼人はマイクから離れる。

そして

「ぁぁぁ

俺たちの周りにはほとんど人はいなかったし、立っていたのは元生徒会役員と見える人たちと、壇上に残っている、選挙候補者だけだった。

『ほら、ね』

隼人は演説終了と言わんばかりの顔で、下がっていった。

１６ー策士の水には、土残るー（前書き）

題名の意味は、『策士策に溺れる』から、変形させた感じです。
まあ、溺れないってことです。

後、題名は大概、次の話の予告みたいになってます。

１６ー策士の水には、土残るー

１年１組　王城隼人
２年３組　一条字玲王
３年３組　乾（いぬい）　暁（あきら）
３年４組　朱里沢（あかりざわ）　美咲（みさき）

以上４名を生徒会長候補とする。

「だとよ、こら」
「やめふぉ！」
家に帰ってから、俺は隼人の頭をソファーに押さえつけた。

「お前何やったかわかってんのかよ」
隼人に向かって海馬は言った。
「いやだから一条字先輩と同じことを――」
「あのタイミングであれやるってことは、お前はどちらかといえば圧力で生徒を抑えたようにしか見えないぜ？」
「私もそう思うわ」
「同意です」
「隼人……しっかりしないとだめだよ」
４人に責められる隼人。
ソファーにうずめられて表情は確認できないが『ああ、しまった』という表情に違いない。

「隼人。これからどうするか考えているんだろうな」
「……考えてるつもりだよ。取り敢えずは人望を得ることから始めたいんだけれど」

「だったら、雅を使え」

海馬は言った。
「虎郷は先日のいろいろから論外。音河は婚約者として隼人のそばにいるということが一条字と状況も似ているためむしろそれは公表した方がいい」
冷静に海馬は言う。
「どういうことだ？」
「女子はそれだけで票を獲得できる。だから、生徒会役員である雅の存在を外に出せればいいんだよ」
なるほど、つまり女子で票を稼ぐと……。
「でもそれなら虎郷も音河も大丈夫じゃないのか？見せつけるっていうなら、二人でも十分できる――」
「あほか。女子に相手がいるとわかってる時点で男子はその女子に少し期待が減るんだよ」
「ああ、そういうことか……」
つまり、虎郷は俺という相手がいて、しかも先日からの行動から他の男子に色目を使うことはできない。そして音河は先ほどの通り、隼人との関係を表に出した方がいいということか。
「でもそれは雅ちゃんがかわいそうだよ」
音河が少し暗い顔をして海馬を見た。
「だって、海馬の大切な人でしょう？」
「大切な人じゃない」
海馬は静かに言った。

「悪いけど俺は虎郷みたいに助けられたわけでも、嘉島のように存在にひかれたわけでもない。まして隼人と音河のように昔からそういう関係でできたものでもない」

久々だった。
何というのだろうか。いつも海馬は中立的立場。何かをするにも何かと戦うにも、『他人の指示を待つ』ような人間だった。だから、久々に海馬の存在を理解した気がする。
いつも客観的なのだ。
何をするにも、何を見るにも、何を言うにも、何を聞くにも、何もかもが冷静なのだ。
感じた。
海馬の冷酷さを。
でも間違いなく、海馬にはそれだけではない何かがある。

「いえ大丈夫ですよ」
雅はそう言った。
「ああ。俺もそう思う。雅は結局は俺を選んでくれる」
海馬はそう言って笑う。

客観視が冷たいとは限らない。
客観視の温かさ。それが彼にはあるのだ。

「まあ、ともかく」
隼人は言った。俺の手はいつのまにか隼人を開放してしまっていた。

「これから話すことを聞いておいてほしい」

隼人の作戦は、とても緻密だった。

オチから言ってしまうと俺たちに降りかかる災難はすべて隼人のおかげで対応できたのだった。

１７ー回ってくるには、遠すぎてー

次の日。
カレンダーの日付は４月１６日。
学校到着。
作戦開始。

第一作戦：人助け

「この学園には小さな問題が多発していることは容易に想像できる」
それが隼人の発言だった。
となれば行動だ。
行動するのは俺と音河と虎郷。音河の耳や声なら反応できるし音河はちゃんと強いのだ。
虎郷は未来が見えるから、その力で問題を根底から処理するのだ。
そして俺は、他人の些細な心の動きにさえ対応できる――らしい。その能力で対応しさえすれば、ほとんど器物損壊も起きずにことを済ませられる――そうだ。
正直な話、自分にそんなことができるとは思っていないが。
閑話休題。

第二作戦：選挙活動

「一条字先輩とは違って、僕らには人望がない。だから真面目に稼ぐしかない」
これは隼人と海馬と雅。
海馬と雅はこの間説明したとおり、その身で稼ぐ（なんか言い方

が悪いが、そういうことらしい）。
彼らなら票を稼ぐのも簡単だろう。彼らの関係は全力で伏せるが。
隼人は代表者だから行動するのは当然だが、この間のこと――つまり、隼人が先生や生徒の心を威圧感でへし折ったことにより、皆が彼におびえているので、あまり表立って行動するのではなく、本人なのにも拘わらずまるでサポート役のように行動するようだ。
おもにこの二つの作戦を実行するそうだ。

放課後。
一応ちゃんと言っておくけれど、授業はまじめに受けている。先生の心証を害するとロクなことにはならないのはちゃんとわかっているつもりだ。

「じゃあ行ってくるぜ」
「行ってきまーす！」
海馬と雅はそう言って教室を出て活動に出かけた。

「俺と音河も外に出るってことでいいのか？」
「そうだね。ヒスイ君は予知が有り次第、みんなに報告或いは自ら行動するっていうことで」
「そうね。そうしましょうか」
虎郷と隼人を置いて俺たち二人は行動を始めた。

「これからどうするんだ？」
廊下を歩き始めてすぐに会話を始めた。
「取り敢えず歩き始めて、何か聞こえてきたらそれを確認しよう。暴力沙汰になりそうな感じや大きな問題になりかけたら私たちで止めに行こう」

「そうだな。流石音河考え方が隼人とそっくりだぜ」
「まあ一緒にいると考え方は似るよね」
「それにしても音河と話すっていうのはすごく久しぶりな気がするな」
「まあ、みんな個性が強いから私みたいなキャラは自然に発言権がなくなっていくのは物語の常なんだよ」
「おい、何の話をしているんだ」
「キャラクターが増えると登場シーンもあんまり強くは描かれなくなっちゃうし」
「帰ってこーい、音河」
「17話もやってるのに、新章に入ってからは東先輩の出番がまだ一度もないんだよ、ああかわいそうに」
「メタ発言禁止だって！！」
と。
面白おかしく話し合いをしているのもつかの間だった。

「……聞こえてきたよ」
音河が言った。
「どんな会話かわかるか？」
「……話し合い？かな」
「暴力沙汰には？」
「発展しそうにもないかな」
「そうか。一応、気を配っておいてくれるか？」
「うん」
音河はそう言って少し眉間にしわを寄せた。集中しようとしているようだ。
「俺はどうするかなー……」
呟いて俺は、ふと窓の外を見る。
ここは本館４階、３年生が生活する部屋だそうだ。
で、その窓から別館の屋上が見えた。

屋上。
人影が柵を越えた。
「音河ここは頼んだ」
俺はあくまで冷静さを持って、音河の集中を切らさない程度に言った。
対して音河は一瞬だけこちらをみて、それでも
『何かあったのかもしれないが、頼まれたからにはそれに従う。後から話は聞くことにしよう』
という、『隼人がそう発言するとき』と全く同じ顔をして頷くとすぐにまた集中し始めた。
流石だ。案外隼人より物分りもよくて対応しやすい。

Ｐｕｌｌ……Ｐｕｌｌ……。
「ああ！？なんだ、隼人！」
『いきなりキレんなよ……。ヒスイ君が予知した』
「何だ！？手短によろしく！」
俺はそう言って渡り廊下を走り上を見上げる。
まだ落ちてはいないようだ。
『焼却炉周辺で殴り合いをしている様子だそうだ。って、今、君走ってなかったかい！？』
「見えたんならわかるだろ！取り込み中だ！」
『分かった。ここからも焼却炉の様子がうかがえた。どうももう始まっているらしいから――って！ヒスイ君！？』
「何があったかは後で聞く！」
そう言って俺は階段を駆け上がる。
屋上入室禁止、という張り紙を見てから駆け上がり、扉を開けた。
靴を脱いで、横に遺書を置いているようだ。
「待て、コラ！」

「……」
女性がそこにはいて、目には涙を浮かべていた。
「何があったかは知らないけど、とりあえず止まれ！」
「……」
少女は黙って、飛び降りようと足を向けた。
「止まれって言ってんだろうが！」
俺は再度走り出す。
少女はそれを見てすぐに飛び降りた。
「くっそがあああ！！」
叫んでから俺は柵を飛び越える。そのままの勢いでビルの外に体を投げ出した。そして落下する。
「勝手に死ぬな！」
俺はそう言って左手を壁につける。
俺はそれで――

コンクリートの丸い塊を作り出した。

そして俺の落下速度は上がる。
女性を抜いて、そのまま1階の近くまで行く。
それから塊を話して今度こそ、壁を錬成して突起を作る。
俺はそこに手をひっかけて、急停止する。当然肩が外れそうなほどの痛みを感じるが、構わず今度は足場を作り上げた。
そして女性の体を抱くようにして受け止めた。
衝撃を全部受け止めてしまったようで、俺の体にさらなる激痛。
そしてその勢いで倒れこみ、コンクリートの足場に背中を思い切りぶつけた。
「……痛いな……」
しかし。

隼人のアドバイス通りの行動しておいてよかった。

１８ー未来のためには、昨日を見よー

２階。

教室。

会議。

「私の方は大丈夫だったわよ」
虎郷はそう言って、少し汚れた制服で帰ってきた。
「ああ、この汚れはここから飛び降りたからついただけ。彼ら相手に苦しむことはなかったわよ」
「だから隼人は電話で叫んだのか……」
そりゃあ目の前にいた人が唐突に窓から飛び降りたりしたら驚くわな……。
「２階だからやってみただけよ。まあ軽く痛かったわ」
「そりゃそうだ」
「で、何があったんだ？嘉島」
海馬はそう言って、俺を見た。
「ああ、自殺しようとした女性を助けた」
「……なるほどねぇ。流石だな、王城」
海馬はそう言って笑った。
「雅ちゃんもなんかあったの？」
音河がそう言った。
「不良集団がやってきて、襲われかけました。返り討ちにしましたが」
「まあ、予想通りの行動だったわけだからな」
海馬がそう言ったのを聞いて全員で隼人を見た。

「……行こうか」
隼人はそう言った。

本館４階。
教室。

「失敗したってどういうこと！？」
「知るか！全てのことに対応されるとなんて思っているわけないだろ！しかも自殺未遂をさせた奴の話によると、『まるで魔法使いだ』っていうだけだったんだぜ！？」
「まぁ、彼女には無理やりやらせたから仕方ないわね。私たちに協力させてくれるわけがないだろうけれど……」
「どうするんだよ、これから。不良軍団を返り討ちにしたところを大衆にみられているから、むしろあっちの評価は上がってるんだぞ……」
「そんなの私に言わないでよ。私だって予想外なのだから……」
「はい、いただきました」
そう言ってそこに俺たちは現れた。
隼人はレコーダーを手に持っている。
「……貴方は」
「やっぱりあなた方の仕業でしたね」
隼人はにやりと笑った。

「乾先輩、朱里沢先輩」
「何のことだ」
乾先輩はとぼけようとしている。
「だから話は全部聞いているし、録音もしたんですって」
「……そんなものに証拠能力はないから大丈夫だ」

「証言があるとしたら？」
隼人はそう言った。そして音河の方を見る。
「……先ほど、この階であなた方が小声で話しているのを耳にしました。『計画』や『自殺』、『不良』などの単語が聞こえたので注意して聞いていると、どうも私たちを陥れる作戦を考えていたようだったから……」
音河は少し申し訳なさそうに言う。
あの時聞こえた男女の話はそういうことだったのか……。
「それだって証拠には……」
「いや、十分だと思いますよ。ていうかそういうことではなく」
隼人は笑顔で近づく。
「犯人はアンタたちだ」
そう言ってにらむ。
威圧。
候補者宣誓の時は怯まなかった二人が、極度の震えを起こしている。
何故だろうか。
というのは今は関係ないのだった。
「アンタらは一条字先輩の強さを知っているんだろう。だから僕らとは違って候補者を潰すことを選んだ。そうだな？」
「知ら……ない」
「白を切り通せると思ってんのか」
隼人は軽くキレている。
「僕が一番怒っているのは、アンタは不良たちに問題を起こさせるために気弱な男子生徒を焼却炉に呼び出したことや、弱みに付け込んで少女を自殺しようとするフリをさせたことだ」
「……それは」
「僕はアンタらを許さない。僕はともかく、僕以外の人間に危害を加えるのは絶対に許さないからな」
隼人はそう言って2人を強く睨み、

「分かったか！」
と叫んだ。
２人は急に糸が切れたように膝を折った。
「……職員室まで連れて行こう」
隼人はそう言ってその役目を俺たちに任せるようにその場を離れた。
その隼人の表情には怒り以外の何もなかった。

19 ―包まった明日に、健闘を―

昨日。

第二作戦まで話した後の話だ。

「ここまでが『正攻法作戦』だ」

「正攻法……」

隼人の発言を小声で反復する。

「まさかとは思いますけれど、反則をしようというつもりではありませんよね？」

「そんなわけないじゃん。相手が『正攻法』をしてきたとき用の『作戦』だから『正攻法作戦』だよ」

「ってことは、相手が『反則』をしてきたとき用の『作戦』で、『反則作戦』ってことか？」

海馬がそう言って笑う。

「そうなるね。どんなことを相手がしてくるかわからないけれど、まあ推測くらいはできる」

そう言って隼人はどこから持ってきたのか分からないホワイトボードに文字を書き始めた。

「って、マジでどっから持ってきたんだ」

「こんなこともあろうかと、発注しておいた。これからも使うだろうからね」

そう言って隼人はホワイトボードを見せた。

？、？、？と3つの項目が書かれていた。

「まずは……そうだね。やるとすれば『巻き込み型』だ」

言いながら、？の横に『巻き込み型』と書き込む。

「巻き込み型？」

聞きなれない言葉だ。
「つまり、目の前で問題を起こしてそれに巻き込ませて、こちらに暴力を加えるやり方だね。正義感で助けにきた人間をボコボコにしようと言う算段だ」
――ちなみにこれが虎郷のパターンである。

「他には？」
海馬がそう言ったのを合図に隼人は文字を書き始めた。
「後は、『濡れ衣型』とかもある」
？の横に文字が書き込まれた。
「濡れ衣……つまり犯人に仕立て上げるということかしら？」
「そうなるね。たとえば、何かを盗んだ後僕らの荷物の中に忍び込ませたり、投身自殺させてその現場に僕らを呼びつけたら、そこにいたということで『殺人』ということで疑われる。たとえ、それが濡れ衣だと発覚してもその噂が立った時点で問題あり、ということなのさ」
「はぁ……そんなこと考える奴いるのかね？」
俺はそう言った。
――で、その作戦にかかったのは俺なわけだが。
「もし、君が投身自殺のに引っかかってしまったら1つ言っておくけど、遠距離で足場を作り上げて助けるんじゃだめだよ」
「なんでだよ」
「普通に落ちていった人が、急に足場が現れたら頭からぶつけて死ぬ」
「……じゃ、どうすればいいんだ？」
「君が先に落下する。例えば鉄球でも持って下りていけば、先に下に行けるだろ？それで下に回ってから、足場を作り君が受け止めればいい」
隼人はそう言って、3つ目の項目を書き始めた。
俺がもしこの話を聞いていなかったら、どうなっていただろうか

……。
恐らく、見事引っかかってしまっていたのだろうと思う。
「で、後は『奇襲型』だね。これは『総合型』といっても過言ではないかな」
「総合型？」
「ああ。これは、今言った2つを掛け合わせ、僕らを全員バラバラにする。そして攻撃のできないだろう人間を一気に襲うのさ」
――この作戦が海馬と雅に実行された。だが、二人も当然強く歯が立たなかったということだ。

「まあ、こんな作戦建てたところで何も起きないよね」
そう言って音河は笑う。
雅も笑っていたし、虎郷は無表情だった。
海馬はいつも通りの客観的無表情を貫いていて、俺は正直なところ隼人の指示に従うだけだからなんにもするつもりはなかった。
そんな中隼人だけが、眉間にしわを寄せて不快そうな顔をしていた。

何が起こるかわからないこの状況でどうあるべきかを考えているようで、この作戦があって俺たちは臨機応変の対応が取れたのだった。

王城隼人。見透かす男。未来を見るのではなく、未来を感じる。そういう男なのだ。

２０ー恋心、あずかり知らぬ、夢もありー（前書き）

俳句っぽく。

20 ―恋心、あずかり知らぬ、夢もあり―

カコン、と古い庭園にあったししおどしがなる。
そして水の流れる音がまた聞こえ始めた。

その日の夜、俺たちは日下副会長の家に招かれた。
話してもそう長くはならないが、いつも通りに時間軸を戻してほしい。

「王城隼人」
そう言って隼人を呼び止めた男がいた。
「……一条字先輩」
隼人がそう言って立ち止まる。それから、
「……先に帰っておいてくれ」
と言って俺たちに背を向ける。
俺たちは何も言わずに足をもう一度動かし始める。
「いや、待て。嘉島奏明、海馬正、音河響花、虎郷火水、常盤雅」
と、一条字先輩はそんな俺たちを止めた。フルネームで全員を呼んだ。
「貴様らにも用があるそうだ。少し待っておけ。日下が呼んでいる」
「日下先輩が？」
虎郷がそう聞き返して少し不快そうな顔をする。彼女にとってはもしかしたら不安要素――トラウマなのかもしれなかった。
「何の用かはよくわからないが、虎郷火水、貴様もしっかり呼ばれている。貴様がいくら不快に思おうが――そして入本人が貴様に好印象を持っていなくても、体裁というものもあろうからな」
そう言って一条字先輩は隼人の前に立つ。近づくと隼人の身長の

小ささが――一条字先輩の身長の大きさが際立つというものであった。別に隼人は小さいわけではないのだろうということにしたい。
「よくやった、王城隼人。学院の平和を見事守って見せた、ということだな」
「そんな大それたことをしたつもりはないですよ。僕は僕の感情の赴くままに行動してみただけです。僕のやりたいようにやった結果と言っても過言ではないんですよ」
「自分のやりたいようにやってこの結果とは、根っからの人助け向きの体質と見えるな」
「助けているつもりはありません。僕らみたいなのは、人助けはできませんよ」
「……ふむ。貴様はやはり変わった奴だ」
そう言って一条字先輩は荷物を持って階段を降り始めた。
俺たちは何も言わずにその後ろを追って階段を降り始める。
昇降口にはほとんど人はいなかったので少しさみしさを感じたが、お構い無しに皆は靴箱へ行く。
そして靴を履いてから、門のところまで歩くと
「玲王。思ったより遅かったわね」
と、頭上から声がした。
見るとシオさんが街灯の上にバランスよく立っている。
「日下か。いつもどこにいるのか分からん女だ」
一条字先輩はそちらの方を見ずに歩き始めた。
シオさんは飛び降りてきて、
「やあ。みんな。久しぶり、なのだろうか？」
「そうですね。で、何の用ですか？」
俺はシオさんに尋ねた。
「いやいや、特に用があったわけではないが……。まあ、貴様らが学園平和のために頑張ったと聞いたので、小さくながらも宴でもしないか？」
シオさんはそう言って俺たちを見た。

「……日下。まさか、そんな用だったのか。そしてそれには俺も参加させる予定なのではあるまいな」
「そのとおりよ。よくわかってるじゃない、玲王」
「……まあいいだろう。たまには挨拶もしておかなければな」
そう言って一条字先輩も立ち止まる。
シオさんはもう一度こちらを見て
「では、行こうか」
「行くってどこに？」
「私の家だよ」
回想終了。

21 ―策略の末、満ちる時―

大きな日本屋敷だった。
日本庭園、というべきなのかそうではないのかは基礎知識のない俺には分からないが、和風の大きな建物だった。俺たちはその廊下を歩いていた。
一条字先輩は早目に屋内に入り、離れの方に向かっていたのを見た。
「日下……一条字……？」
隼人はそれを見てすぐにつぶやいて、思考を始めた。隼人がこうなると止められないので取り敢えずしばらくは放置しておくしかない。
「大丈夫なんですか、日下さん。そんな急に宴なんて」
と音河がシオさんに尋ねる。
「私のことは気楽にシオと呼んでくれていいよ」
シオさんはそう言って一度笑うと、
「正直なところ急ではない。一度、こうして全員で対面しておきたかったところだ」
「そう……なんですか」
「玲王には事情を説明していないからね、宴としておいただけだ」
シオさんはそう言って前方を見る。
「……全員ということは」
虎郷が口を開いた。
「もしかして、そちらの方の役員もいらっしゃるんですか」
「そうだ。よく気付いたな、虎郷」
シオさんはそう言って笑う……が。
名前ではなく名字で呼んでいる。格差……差別というべきかもしれない。
「私たち側の庶務、書記、会計も呼んでいる。名前を憶えてやって

くれ」
と、そこまで言って宴会場と思しき広い場所についた。
すでに料理や机などは置かれてあり、準備万端という様子だった。
で、そこにはすでに3名の先着がいた。

「日下副会長。お疲れ様でした」
「で、そこにいる人たちが一条字の敵対すべき相手……」
「よっす！」
やはり生徒会役員の人々らしい。
「やっほ！ちわっす！」
挨拶を3連続でしたのち、元気のいい男子生徒が立ち上がる。
「オイラ、1年2組の華壱（はないち）　匁（もんめ）。同級生だぜ、よろしく！」
「同級生……庶務に抜擢されたのか？」
俺はそう言って尋ねる。相手の身長が思ったよりも低くて、見下ろす形になってしまう。
「舐めんなよ！庶務じゃないぜ！書記だぞ！」
「書記……なのか」
ということは後ろの二人のどちらかが庶務ということになるが……1年生には見えないぞ。
「1年生ではありません。当然でございます。私が庶務を担当させていただいています」
と、敬語口調で紳士風の青年が言った。メガネをかけて、洋風の正装をしている様子は執事という感じだ。
「申し遅れました。2年3組の御手洗（みたらい）　新（あらた）と申します。以後お見知りおきを」
「アンタが庶務をやる理由は？」
そう言って海馬が睨んだ。
海馬と身長が同じくらいだ。いや、御手洗さんの方が大きいかもしれない。
が、威圧感よりも包容力を感じる。

「私は雑務程度、皆様の行動のサポート程度しかできないのでございます。ゆえに、私は皆様のお手伝いをさせていただいている所存でございます」
「……そうか」
海馬はそう言って下を向いた。
何か思うところがあるのかもしれない。
「では順番と言っては何だけれど私のあいさつってことになる」
そう言って女性が立ち上がった。
「私は3年3組で一条字と日下と同じ学年クラスだ。姓は籠目、名は加護女。上下合わせて『かごめかごめ』だ。会計を担当している」
話口調はシオさんを思い出させる女だ。
「ちなみにオイラは『花一匁』だぜ」
「……」
御手洗さんは黙っている。
よくわからないが、思うところはありそうだ。

「揃っているようだな」
一条字先輩とシオさんが現れた。
和服だった。
「ここの父親にあいさつしてきた。婚約者の父親だ。それくらいしなければな」
「玲王。仕方がなくやっていることではあるとは思うけど、そんな言い方は関心しないわよ」
「……まあいい」
そう言って一条字先輩とシオさんはテーブルの上手側に並んだ。自然残りの役員も上手側に並んで座った。俺たちは自然、下手側に並んで座った。
「じゃ、いただくとしようか」
そう言って一条字先輩は手を合わせ――

「政略結婚」
という、声が聞こえた。
ここ２０分ぐらい何も話さなかった隼人だった。
「そういうことか。なるほど。だから、日下と一条字なんだ」
「隼人？」
「思い出した。一条字家。『裏の王城』だ」

２２ー宴に水は、さすべからずー（前書き）

今回は短め、

伏線回収のためだったので。

22ー宴に水は、さすべからずー

『一条字　雷』という男を憶えているだろうか。

少し前、俺たちと隼人が対立していた時の話だ。まあ対立といってもそれは王城側の幹部たちの仕業であって、隼人と対立していたわけではないのだが――そう。

その幹部たちが、俺たちを処分するために、海馬の元友人でレッドテイルという爆弾魔のグループのリーダーを務めていた女、『長柄川　里子』を脱獄させた。そして彼女はレッドテイルの仲間で同じく囚人だった仲間たちを連れ出すために、アクターや重要犯罪者が収容されていた棟を破壊した。

その時、全く関係のない3名も脱獄していたのだった。

その中の一人が一条字　雷。

その男に関する龍兵衛さんの説明は、確かこうだった（といっても俺が覚えていたわけではなく、隼人から聞いたのだが）。

『殺人罪と殺人教唆とか、後は強盗とか。裏の王者、一条字だ。ヤクザだな。コイツは証拠を残さなかったり、他の奴らにやらせるから捕まえるのに時間が掛かったんだけど、公務執行妨害で捕まえてそのあと、さっき言った犯罪を再逮捕の方針で捕まえた。』

と言っていた。

そしてこの男を捕まえたのは、なんとその息子。そしてその息子の発言はこうだった。

『親父は王座から降りたのだ。これからは俺が王だ。俺は俺であるが故に、王である意味があるのだからな』

まさしく、彼だ。

その時龍兵衛さんも名前を言っていた。

「一条字……玲王……」

そこまで聞いて俺は一条字先輩を改めてみた。
この話の流れから考えて、つまりこの男はヤクザの現頭領……若頭ということに……。
「よくわかったな、王城隼人。流石だ、としか言いようがない。まあ、情報を知っていたにしては気づくのが遅かったような気もするが、及第点だ。ちなみにお前のことは知っていた。表の王城、裏の一条字。これがこの街の基本スタイルなのだから」
「……」
隼人は黙って眉間にしわを寄せて、正面の一条字先輩をにらんでいる。
「どうした、王城隼人。まさか貴様はヤクザを嫌う立場の人間か？」
「いえ。若頭になってから、行動が抑制され、むしろ裏側での治安が守られているのは貴方のおかげだと聞いています」
「では、どうしてそんな嫌悪の目で俺を見ている？」
「先程いった、政略結婚ですよ」
隼人は目付きを鋭くして言った。
「そう、それ。どういうことなの？」
音河が隼人を覗き込むようにして聞いた。
「日下組」
そう言って地面を指差す。
「ここはヤクザの家だ」

２２ー宴に水は、さすべからずー（後書き）

思い出されない人は、第五章の２２をご覧ください。

期せずして話数が同じでしたｗ

23 ―癒えぬ傷には、手向けの花を―

隼人の発言には俺たち全員が固まった。
いや、全員というには乏しいか。なぜなら、向こう側のメンバーは誰一人として驚いていなかったからだ。ただ、飯を食べ始める空気でもないことを感じたのだろう、手持ち無沙汰に待っている（のは華壱だけで、残りの二人は想像以上に冷静だったが）。
「ここが……ヤクザの家……」
日本家屋。
政略結婚。
一条字家。
ヤクザ。
……マジかよ……これだけの情報があれば俺でもわかる。
「本当ですか？」
俺はシオさんを見た。
「ああ、本当だ。間違いなくな」
その着物姿には似合わないほどの男らしい口調でシオさんは言った。
「それが何？」
「……先ほども言いましたよね、僕は『政略結婚』という物が嫌いなんですよ」
昔経験していた故に、ですが。
そう言って隼人は眉間にしわを寄せた。
俺は隼人の隣に座っている音河を見る。少し表情が曇っている。今思い出せば、この2人も元々は政略結婚のような形で結婚話が出ていたことも事実だ。というよりそれを最初として始まって、結果的には今のように丸く収まったが、もしそのままだったとすれば隼人はこの人たちを責める権限がない――否、そういうことか。

自分がその立場になっていないのは、そういう状況を嫌っていたから。
だから今、その立場になろうとしているこの2人に対して、軽蔑の意を示しているのだ。
「……貴様が王城である以上、避けては通れない道なのではないのか？」
一条字先輩は当然のように、正しい推測を投げかける。
「当然通ってきました。拒絶しましたが」
「その結果が音河響花だと？音河財閥のお嬢様……音河響花を選んだ、と貴様はそう言うわけか？」
信じていない様子だ。
「……」
「ありえないな。結局貴様も同じ穴のムジナ。答えは一緒だろうに」
「……愛ってなんですかね？」
隼人は唐突に言った。
「何の議論だ？そんな議論に価値がないことを俺はよく知っている」
「愛は価値じゃないんですよ。愛は意味じゃないんですよ。愛は理由じゃないんですよ」
隼人の中に怒りが芽生えているのが感じられた。
ふつふつと、徐々に溜まっていくような、そんな怒りだった。
「僕は響花の価値に惹かれたんじゃない。僕は響花といることで人生に意味を持つと思った訳じゃない。響花と一緒にいることで僕の存在の理由づけをしようとした訳じゃない。アンタには一生わかんねーよ愛なんてものはな」
口調が荒くなり、イライラが見える。
「日下副会長」
俺は言った。
「何だ」
「今回は申し訳ありませんが、帰らせていただきます」

「……」
「選挙戦が終わった後、もう一度お誘いください。その時、僕たちが分かり合えていたら、楽しみましょう」
俺は返事を待たずに立ち上がる。
「皆行こう」
「お送りいたしますよ」
気づくと御手洗さんが既に前方に立っていた。
「結構です」
「学園生徒のサポートとしての行動でございます。それにこちらからお呼びした挙句あなた方に不快な思いをさせてしまったようなので、申し訳ついでの行動と思っていただければ幸いでございます」
「……ではお言葉に甘えて」
「ありがたき幸せ」
そう言って御手洗さんが宴会場の扉を開けて、外に出る。それについていく。隼人と海馬と虎郷はさっさと出て行き、音河と雅と俺は一礼してから外に出た。性格が出ているな、と思った。
「言い訳するようではありますが」
御手洗さんはそう言って少しほほえみを見せる。
「王城様の言うように、一条字様は恋愛という物が分からないのですよ」
「……」
本当にいいわけだな、と俺は思ってしまった。
が。
「私たちには名前がありませんでした」
と。
いきなりそう言ったのだった。
「詳しくはお話しできませんが、私たち3人――つまり私と華壱様と籠目様は、元々孤児でございます。そんな私たちを救ってくださったのが一条字様なのですが、だからこそというべきでしょうか。あの方は息を吸うように人を助け、息を吐くように悪を撃ち滅ぼす。

誰でも助けるのでございます」
「それは……」
それはさながら、隼人やタケルのようだと感じた。
「誰にでも優しいということは、つまり特定の誰かを愛せないということにございます。それゆえ、あの方は政略結婚の様な形でしか愛を示せないのでございます。当然、それを本当の愛だと表現するつもりは毛頭ありませんが」
と御手洗さんが言ったところで、門の外についた。
「本日はお忙しい中お集まりいただいたのに、このような結果となってしまって残念でございます」
「いえ、こちらこそ申し訳ありませんでした」
そう言って隼人が謝った。事情を聴いて心の中で何かが変わったのかもしれなかった。
「あと、常盤様」
「な、何ですか？」
少し動揺した様子を見せた。
「庶務戦はよろしくお願いします」
「あ、はい。よろしくお願いし――」
「いや」
と。
海馬が口を開いた。
「庶務戦は俺が出る」
「え……」
隼人が驚いた顔を見せる。
「確か、後に生徒会役員職を変えることは認められているし、それに雅も俺も庶務と書記どちらでもいいようなものだ」
「でも、どういう理由で」

「御手洗　新」
海馬がそう言って御手洗さんの前に立った。
「貴様の嘘、俺が暴く」
「……なるほど」
そう言って御手洗さんは笑顔を浮かべた。
「かしこまりました。ぜひ、よろしくお願いいたします」
先ほどまでの包容力のあった雰囲気が一気に威圧に変わった。

２３ー明日は未来と、似て非なりー（前書き）

この話を投稿した、今日。一年前に始まったこの物語が２５０話を越えてとてもうれしく思います。

長らくありがとうございます。

23 ―明日は未来と、似て非なり―

その日のことは俺たちの中では何もなかったかのようだった。
家に帰ると、隼人も落ち着いたようだったし、突然何か言い出した海馬はそんなこと覚えてないかのような面持ちで部屋に入っていった。

そして次の日。
「あの……」
学校の門を入ると、待っていたかのように女性に声をかけられた。
「……」
なんだろう、今思うことではないが、この学校の女性はレベルが高い。いや、正確に言うなら俺に関わってくる女性のほとんどが美人だ（例：虎郷、音河、雅、シオさん、籠目さん、目の前にいる女性）。
ていうか、誰だろう。
「この間は……ありがとうございました」
と女性は深々とお辞儀した。
「……」
ここであなたは誰ですかなどと聞くわけにはいかない。
ので。
「いえ……」
と無難に謙虚にしておくしか方法がなかった。
「死ぬかと思ったのに、まさか飛び降りてまで助けていただけるなんて……」
「……あ」
ああ！この女性……あの飛び降り自殺の……。
ありがとうございました、ってそれのことか！

「いや、あの……何か思わずっていうか、何が起きたのかよくわかんなかったから」
取り敢えず、あわてて言葉を取り繕う。
「あ、それで、あの……えっと」
未だ慌てている俺。かなり格好を悪いと思う。
そんな俺を見て女性はくすくすと笑っている。
「……ゴホン！」
と、一度咳払いをして落ち着いてから
「どうしてあんなことをしたんですか？」
と発言した。
女性は俯いて、少し困った様子を見せる。
「というのは聞きません」
「え……」
俺が続けた発言に女性は驚いて顔を上げる。
「でも困ったことがあれば、誰かを頼ってください。頼る人がいなければ、俺を頼っていただいて結構です。どんな理由でも――たとえ理由を教えていただけなくても、貴方さえ信用できれば俺たちは助けますから」
俺はそう言って、そのまま立ち去ろうとする。
「ああ」
いいことを思いついた。
体を女性の方に向けて、笑顔を作る。
「できれば、ですが、生徒会役員の選挙では俺たちに投票していただけると嬉しいです」
「……はい！」
女性もそう言って微笑みを見せた。

「遅かったな」
教室に入ると海馬がそう言って出迎えてきた。

「ああ、ちょっとあってな」
と笑ってから海馬と一緒に自分たちの席の方に向かう。
海馬は先に座って、椅子の背もたれ側を前にして座る。俺は自分の荷物を置いてから海馬を見る。
「見たぜ。女生徒と話していたな」
「見てたのかよ。まあ、そんな色恋みたいなことではないから大丈夫だぜ」
「どうだろうな、お前は勝手にフラグを建てて去っていく性質がある。だから案外恋愛に発展させてくるかもしれないぜ」
「やめてくれよ……」
ちなみにこの『やめてくれよ』は、『そんな妄想はやめてくれよ』ではなく、『近くに虎郷がいて、いつ聞き耳を立てているかわからないのに、そんな話をしたら後で俺がどうなるかわからないんだから、やめてくれよ』という意味である。
と思いながら、ちらっと見てみる。
「！」
にらんでいた。
「ごめんな、嘉島……」
「救急箱だけよろしく……」
心の底から申し訳なさそうにしている海馬に、俺は苦笑いで答えるしかなかった。
「で、あの女性は何の用だったんだ？」
「ああ、この間自殺未遂した女性だったみたいでさ、助けてくれてありがとうだってさ。だから、票を入れてくれるように頼んでおいた」
「おお、それなら俺も声をかけられたぜ。この間の不良をブッ飛ばしたことで先輩にいろいろ言われたぜ。空手部とか柔道部とか、勧誘がいっぱい来た」
と海馬はニヤリと笑う。
「僕も先生から褒めていただいたよ」

と。
気づくと隼人がいた。音河と雅もすでに着席しており、隼人はやはり最後に来ていたようだ。
「こういう行動を積み重ねて、頑張っていこうよ」
「だな」
キーン、コーン、カーン、コーンと。
チャイムがなり、一日が始まる。
終わって放課後が来れば俺たちの活動も始まる。

5日後。
選挙結果発表日。

２３ ― 明日は未来と、似て非なり ―（後書き）

企画を張り付けておきましたので、ご覧ください。

２４ー負け犬吠えるに、空響くー

生徒会長選挙結果発表。

一条字玲王　１５０票
王城隼人　　１２７票
残り２名は失格とする。　無効票８６票

よって選挙は生徒会実力選挙に移行するものとする。

第一線　庶務戦　は４月１８日に開始する。

楊瀬　通　対　海馬　正

「……は？」
俺はその掲示板を見て、そう言うしかなかった。
「こんな簡単な掲示板で表してくるとは思ってみなかったな」
海馬はそう言って笑った。
「これ何て読むんだ？」
「『やんせ　とおる』だろう。『通りゃんせ』ってわけだ」
海馬は言う。
そして、それが誰なのかもわかっているようだ。
「まあ、そういうことでございます」
後ろからそう言う声がした。
「御手洗　新、改め、楊瀬　通でございます。以後お見知りおきを」
そこにはそう言ってお辞儀をする御手洗さんが――いや楊瀬さん

がいた。
「アンタの嘘を暴きたかったんだけど、まあいいだろう。アンタとはこれで戦うことが決まったな」
「楽しみにしていました。一応聞いておきますし、言っておきましょう」
とようやく楊瀬さんが顔を上げた。
「私はアクターなのですが、貴方もそうですか？」
と。
楊瀬さんはそう言ってこちらを強く見た。
「……」
「そうでございましたか。やはり……となると、あなた方のチームは全員そうであると見えます」
「楽しみにしている、と言ったな」
「ええ」
海馬は楊瀬さんの正面に立ち、
「俺もだ」
と睨んだ。
「お前の力を見抜いてやる。そして、お前に打ち勝ってみせる」
「そうでございますか。こちらも、準備万端で戦って見せましょう」
「ああ。そうでないとこちらも困る」
「では、私は捜索活動に戻ります。あなた方も何らかの情報があったら報告してください」
と、言った瞬間。
楊瀬さんは姿を消した。
「え！？」
「これがあの人の能力か……」
海馬は冷静に言った。

さて、今は実は特に何もしていないのだ。
今日は入学生歓迎会のようなもので、一日、まるで文化祭の如く

皆自由に校内を周りまわるのだ。
また屋台や様々な企画が行われており、何が起きてもおかしくないのだが……。
何故こんなことをしているのか、それは少し前まで戻る。

「未来を見たわ」
虎郷が言った。
「は……」
「校内で事件が起きることしかわからないけど、何かが起きるわよ」
「ま……マジかよ」
俺はそんな対応しかできなかった。
「となれば僕らのやることは決まっている」
「やるしかなさそうだね」
隼人と音河がそう言って笑う。
「嘉島、俺と一緒に行動しろ。それが一番得策そうだ」
「え、なんでだよ！？」
「隼人は今から一条字先輩のところに向かうはずだ。ともすれば、ペアはどうなるかわからない。だったら俺はお前と一緒に行動する」
海馬はそう言った。
「私は校内を探索します」
雅はそう言って、瞬間移動の速度で消えた。
「やるしかないね。行くよ」
隼人はそう言って音河と一緒に階段へ向かった。
「私は……こっちについていった方がよさそうね」
と言って隼人の方へついていった。

「よし、じゃ俺たちもって！」
海馬がいなかった。
「海馬！？」

「ああ、こっちこっち」
と言って、生徒会掲示板の前にいた。
「何やってんだよ！」
「ほら。これ見てみろよ」
と。

回想終了。

２５ー三者三様、日照りの岸部ー（前書き）

嘉島、海馬、日下以外のメンバーです。

……あってるよな？

25 ―三者三様、日照りの岸部―

正直な話、これから先のことは俺が把握していることではないので、文体がおかしくなる。別に他の物語になってしまっている訳ではないことを報告したうえで、ご心配なさらぬようお願いいたします。

「一条字先輩。事件が起きます」
「楊瀬。生徒会役員に伝えてこい」
「かしこまりました」
と、瞬間的に会話を済ませた。
「世界などという物は所詮平和ではないのだな」
「そうですね。まあよく言われることです。戦争と戦争の間の騙し合い、ですよ」
「ともすれば学園の危機にさらされているというその情報を信じたとして、俺たちが今すべきことはいったい何なのか……答えて見せろ、王城隼人」
隼人は一条字と生徒会室に居た。
先に虎郷と音河は別の行動に向かわせた隼人は、単身で生徒会室に入ったのだが、そこには楊瀬と一条字しかいなかったのだ。
「それはつまり」
「貴様の頭の方が俺よりも優れている。さらば、貴様に指示してもらったほうが行動しやすいと思ってな」
「何も聞かずに僕のことを信じたんですか？」
「楊瀬でもあるまいし、意味もなく嘘をつくはずもないという俺の考えが間違いだというのか？」
「……まあ合ってますけれど」

なんか調子が狂うなぁ、と隼人は思いつつ、次の言葉を紡いだ。
「では僕の方から指示を仰がせていただきます」
「期待しているぞ」
「じゃあまず……」
隼人が話を始めようとしたとき

ドゴォォォ！
という激しい音とともに爆発とその煙が生徒会室を包んだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「だからオイラも一条字先輩のために頑張んないとって思ったわけ！わかる！？」
「分かりますよ。私も正先輩のために頑張ろうとしてますから」
「話が合うなー、雅さんは」
華壱と雅は屋上で意気投合していた。
「書記戦は雅さんとやるんだよな？」
「そうです。よろしくお願いしますね」
「書記戦では敵だけど、普通の生活は友達だぜー」
シシシと華壱は笑った。
「はい！」
雅も笑う。
「ここにいましたか」
と、突然楊瀬が現れた。
「どうかしたのか、楊瀬」
「いえ、常盤様といるところを見ると華壱様はご存知のようですが、まあ一応報告しておきましょうか」
と、楊瀬が登場していったとき。

ドゴォォォ！

という激しい音。校舎が揺れる。
「な、なんだ？」
「下の方からでございます」
楊瀬は静かに任務を遂行するように、下をのぞいた。
「……急ぎましょう。私も今回はゆっくり行きます」
と、楊瀬は消えずに走り始めた。
雅と華壱もそれを追った。
……ちなみに楊瀬さんは異常に早かった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「やあ」
そう言って籠目は虎郷と音河の前に現れた。
「どういう理由かは知らないけど、楊瀬から聞いたところ事件が起きるらしいな」
「まあそうですよ」
「どうして分かったんだ？」
と、籠目は明らかに怪訝そうな面持ちで虎郷をにらむ。
「犯行予告が私の耳に入ったんです」
と、音河が言った。
ああ、そうか、と虎郷は思う。
音河は戦闘に参加しない。だから、こうして自分の能力をバラしても何ら問題がないということなのか。
「耳がいい能力なのか？」
「当たらずも遠からず、ですね」
「……そうか」
「その言い方から考えて、貴方も能力を持っているということですね？」
虎郷は籠目を見た。
「ああ。説明しておこうか。私の能力は――」

ドゴォォォ！

発言を怒号が邪魔し、校舎が揺れる。

「……話はあとだ。どこで起きたかわからんが探索するぞ」

と籠目さんは言った。

26 ―道に於いては、障る音―

「正、奏明。こんなところにいたのか」
俺たちは運動場で出店を見ていたところだった。そこにシオさんがやってきた。
「何やってんだ、日下副会長」
「先輩に敬語を使わないんだな、正」
「既に恋愛中の存在には興味がないんだよ」
「なるほどな」
シオさんは笑うと、
「お前たちの仲間の誰かは、危険を察知する能力でもあるのか？」
と話を変えてきた。
「そんな能力を持っている奴は居ませんが……」
「じゃなんでだ？」
「それを教える理由は俺たちにはないな」
「……」
まあ、それもいいだろう。できるだけイーブンな条件で戦いたいのはこちらも同じだ。
とシオさんは続けた。
「申し訳ありませんね」
俺はそう言ってシオさんに軽く頭を下げる。
「いいさ。しかし、勝負は負けるつもりはないぞ」
「それはこっちも一緒だ。俺も負けるつもりはない」
俺が言う前に海馬が言った。
なんだろう、この感じは。
いくら相手がいるからと言って海馬の言い方が冷たい。それこそ日下先輩が虎郷にするのと同じ態度だ。
どういうことだ……？

「さて、どうしたものだろう」
「俺たちは取り敢えずこの辺を探索してるぜ。なんか見てないのか日下副会長」
「何も見てはいないな。まあ何か大きな事件が起きるのだとすればすぐわかるはずだろう？」

ドゴォ……。
と、何かが壊れる微かな音がした。
「どうした、嘉島」
「何かが……崩壊した音が……」
「！あれは……」
シオさんが校舎を見た。
俺たちもその方向に目を向ける。
俺たちから見える校舎側の反対側から煙が上がっているのが見えた。
「あの辺りって生徒会室じゃ……」
「行くぞ」
海馬は走り出した。ほぼ同時にシオさんも走り出す。俺は少し遅れ気味に駆け出した。
その時運動場を軽く見渡す。
ほとんどの生徒が煙の存在には気づいていないようで、気づいた生徒もどうでもよさそうに戻った。
そりゃそうだ。出店からはよく煙が出ているのだから――とは言え、運動場以外の場所には出店はなく、それに気づけば不思議に思うのだが――。
「……」
走りながら推理を開始した。
また、生徒会室は第二校舎にあるので、今日は何にも使われていない……。
恐らく人的被害はないはずだ。

まあ隼人がいるから事件はさっさと解決してくれるはずだ。

生徒会室の前には既に、隼人と一条字先輩を除く全員がいた。
「何があった！」
海馬が叫んだ。
「恐らく爆発でしょう。しかも外部からの爆発です」
楊瀬さんが冷静に答えた。
「爆発……？」
海馬がしかめ面を見せた。
「外部からの衝撃とともに、一部ガラスが融けたり燃えたりしています。が……一つおかしいんですよ」
楊瀬さんが言う。
そして、それは誰から見ても明らかな『違和感』だった。
確かに室内も室外も爆発した形跡はある。焦げたり融けたりしてることから見ても間違いなく爆発したのだろう。
が。
先ほど爆発したばかりということは、だ。
今、この部屋は『燃えていなくてはならないのだ』
「燃えない爆弾……でも作ったというのか？ともすれば相手は演者だが」
籠目さんは冷静にそれらを見る。
演者、というのはアクターのことだろう。楊瀬さんや一条字さんはこちらに合わせてアクターという言い方をしていたけれど、一条字先輩側ではそういう言い方をするようだ。
「しかし、そんな演者いるのかな。面白い力ではあるけれど」
華壱が言う。
……あ。
「嘉島。龍兵衛さんに連絡してくれ」

海馬も気づいたらしい。雅と虎郷も気づいたようだ。
「どういうこと？」
気づいていなかった音河だけが質問した。
「分かるだろ？もし、これが爆弾の仕業だとすれば……火薬抑えた爆弾とかではなく、燃えない爆弾とすれば、だ」
海馬は眉間にしわを寄せて言った。
「長柄川だ」

27 ―夢現、落つる―

『すまない。長柄川は本庁のそういうのを捕まえている場所に居るから確認には時間がかかりそうだ』
と、龍兵衛さんは言った。
『ただ、昔そういう爆弾を作って、その辺に流出させてたらわからないんだけどな』
「そうですか、ありがとうございます」
『どうした？なんか事件か？』
「そうなんですが、ちょっと事情が事情ですのでまた後でお話しします」
『そうか。頑張れよ』
ブツ。
と、龍権兵衛さんは電話を切った。
「海馬。長柄川が刑務所にいるかどうかはまだわからない」
「そうか」
「だけど長柄川が昔流出させた爆弾をすべて回収できているわけではないから、可能性はあるかもしれない……」
「……そうか」
海馬は眉間にしわを寄せたままだ。
「ていうか、王城と一条字はどこに行ったんだ」
籠目さんは俺たちにそう言った。
「いないんですか？どこに……」
「……爆発に巻き込まれたとか……」
音河が静かに言った。
「可能性はありますね。私が行動を始めてからもずっとここに居たとすればその可能性は大いにあります」
と、楊瀬さんは言った。
「どうするんだ、嘉島」

「お前は俺の指示を待つのをやめろ」
「俺たちのリーダーはお前だぜ？隼人がいない今は、な」
「……じゃ、指示を出す」

ムービー。
シンキングキング。
それだけで、隼人と同じ脳を手に入れられる。だから、後は今ある情報で推理するにはその方法しかない。
「……響花」
「え……」
「ああ、ごめん。隼人ならそう言うだろう、というスタンスでやったら、思わずそう呼んでしまった」
と、一応訂正を入れてから、
「音河は取り敢えず人の多いところを耳で探索。雅は機動力を利用して二人を探してみてくれ」
「だったら、オイラも雅を手伝うよ。オイラも機動力には自信がある」
「そうですか。では華壱様も担当して頂けると助かります」
楊瀬さんがそう言って、俺の発言を止める。
もう無視しておこう。集中力が切れる。
「虎郷と海馬は一緒にいてくれ」
「ああ。分かった」
「了承したわ」
とそこまで済んで、楊瀬さんが
「では、皆様は自分のできることをやってください」
と、ほかのメンツに言っていた。
「「御意」」
シオさんと籠目さんは同時に言って、走り出した。
「では行きましょうか」
「おう！」

と、行きぴったりのスピードで雅と華壱も走り始めた。
「では、私は推理と行きましょうか」
楊瀬さんは言った。ちなみに俺のシンキングキングの能力消えました。集中力終了。
「でも推理なんてできるんですか？」
「最近の執事は何でもできるのですよ。執事最強ブームに乗っかりたいと思います」
何を言っているんだ、この人は。
「さて。何よりもまず現場を見てみましょうか」
……何か探偵みたいだな。
「まず、先ほど言った通り、燃えていた様子がありません。また、水が飛散していることもないからすぐに消火したわけでもないでしょう」
「だろうな。それがどうした」
「となれば……ふむ」
と、楊瀬は言った。
そして立ち上がって
「行きましょうか」
と歩き始めた。
「どこへだよ」
「犯人のところですよ」
「え……」
「王城様と一条字様もいらっしゃることでしょう。さっさと済ませて私ものんびりしたいんです」
楊瀬さんはそう言ってマイペースに歩いていく。足が長いので歩幅が長い。
「どうしてああなっているのか。海馬様の言う『長柄川』という方が犯人でないとすれば、どうして燃えていないかは『そうした』のではなく『させられた』のです」

「させられた？」
「王城様の能力に、『相手の能力を削除する』みたいなものはありませんか？」
キングダム。
それが彼にはある。
「図星のご様子で」
「……」
「まあつまり、能力だと判断したか或いは攻撃がきたから直感的に発動したのかはわかりませんが、王城様は能力を使って邪魔したというわけですね」
「で、それが分かったとしてどうやったらどこにいるかがわかるんだ？」
「決まっているでしょう？攻撃を避けたのなら、あのお二方なら追い駆けていったでしょう」
「……」
「そして、私たちは屋上に。あなた方は校舎の外に。虎郷様や音河様は校舎の中腹に……」
「あ……」
「そうです。タイミング的に校舎の外に犯人は出られません。そして、当然のようにこの生徒会室の階よりしたでしょう。わざわざ上に逃げる犯人なんていませんから。まあ、恐らくいるのは本校舎の方ですね。きっと何らかの痕跡があるでしょうから……ほら」
と、楊瀬さんは地面を指さす。
黒い足跡がいくつか。そしてそれを追うようにいくつかの足跡も。
「汚れですね。恐らく爆弾でも使って、汚れてしまったのでしょう」
「てことは……」
「これを追い駆ければ到着するでしょうね」
行きましょうか。
と、楊瀬さんは言った。
その背中は隼人のそれと似ていた。

28 ー未知の明日に、差し伸べるー

足跡の大群（という表現は聊か比喩にしても言い過ぎだとは思うが、それら）は、1つの教室の前でなくなっていた。
「やあ」
「おう」
というか、そこに3人の人間がいた。
「隼人。生きてたのか」
「昔とは違って、普通の安心してくれたね。以前は無傷で残念、みたいな態度をとっていたのに」
「何の話をしているんだ」
「夏休みの話をしているんだよ」
と、隼人は言って下の男を見た。
「楊瀬。貴様の推理はいつもに増して上出来だ」
「ありがたき幸せ」
「ついでだ。王城隼人の意見を聞いて、思うところを述べろ」
「了承いたしました」
と、楊瀬さんは隼人の方を見る。
「まず、ソレは？」
「ああ。今回の犯人だよ」
そこに居たのは、見知らぬ男。間違いなく、長柄川ではない
軽く振り向くと海馬が少し安心したような微笑みを見せていた。
「離せよ！さっさと離せ！」
男は暴れている。
「で、お前の推測というのは？」
「ああ。こいつの能力だ。本人に聞いても能力の名前も内容も教えてくれなかったけど、僕たちに追われているときに異常なスピードや、異常な腕力から想定できるのは、『マシン・メーカー』だ。日本語名で『機械仕掛け』だ」

「内容は？」
今度は楊瀬さんが尋ねた。
「それですね。『機械仕掛け』っていうのは、ウェポンではなくスーパーナチュラルだ」
「……兵器類ではなく、超能力、ということでいいですね？」
「ああ、そうですね。そういうことです」
「続けてください」
「ええ。この能力は、兵器を『作る』という、能力です」
「兵器を作る。なるほど、それで爆弾を作ったわけですね」
「そういうことです。そして僕たちから逃げる時には足に何らかの装備を、僕たちの追っ手を振り払うためには腕に何らかの装備を、というわけです」
「……そこまでばれたら、仕方がない」
何だ、この負け犬台詞。
と思いつつも口を開いた男を見下ろす。
「俺の能力はそれだ。そして俺はある実験をしたいと思ったのさ。怨念も込めてな」
「怨念……？」
「お前らはどうせ覚えてもいないだろうが、俺は一条字……てめえになぁ！」
「覚えているぞ、枡居孝敏（ますいたかとし）」
「え……」
「だが、貴様に恨まれるようなことをした覚えはないのだが？」
そう言って、枡居と呼ばれたその男に顔を近づける。
「貴様がこの学校の工学部を作り、いろいろなものを作ったはいいが、とうとう爆弾まで作り始めたから、貴様に反省文を書かせ工学部を退部させた。貴様の責任ではないのか？」
「……く！」
どうやら事実らしい。
「だが、貴様の実験とやらはすでに始まっているようだな」

「ああ。今、この学校の校庭に向かって俺の作った最高兵器が5台向かっているところだ」
「そうか。まったく、余計なことをしてくれるものだ」
と、一条字先輩は呟いて、携帯電話を取り出した。
「……ああ、高見澤放送部長。一度、体育館に全員集合するように頼んでおいてくれ。すまないな」
『校内放送。全校生徒は、一度体育館に集合してください』
そう言って電話したかと思うと、
「楊瀬、全員を呼べ。演技の時間だ」
と、楊瀬さんに命令した。楊瀬さんは声を聴く前にすでにいなくなっていたが。
「戦うんですか？僕らも手伝いますよ」
「ダメだ。お前らじゃ足手まといだろう。俺たちは『第三形態』だからな」
「第三？」
俺はその言葉に引っかかる。
確か。
確か夏休みに誰かが同じようなセリフを……そう、『最終形態』とかなんとか……。

一条字先輩は窓の外を見る。全員が体育館に移動したのを確認したらしい。
そして
「行くぞ」
そう言ったかと思うと、一条字先輩は窓から飛び出した。
すると五つの影が、校庭に降り立った。
のだが。
「え……」

そこに人はいなかった。いや、確かに二本足で立っているし服も来ているが、それでもだ。
俺の目がおかしくなければ。
そこにいたのは
狼、猿、蛇、鷹、そして、ライオンだった。

29ー蟻と一筋、光差すー

「私がお教えいたしましょう」
と、瓦礫の山に立った楊瀬さんが言った。
そこに残ったのは、楊瀬さんと俺と海馬。
残りのメンバーは全員体育館に向かった。一条字先輩と隼人、それぞれの生徒会メンバーで事情（もちろん架空の事情だが）を説明するのそうだ。
だから、いなくても何ら問題ないメンバーとして、庶務の2人とついでに俺も残ったのだった。

「あれの正式名称を私たちは知りません。が、一条字様と日下様は『獣』と、そのまま仰っていました」
「『獣』……」
「或いは、『ビースト』でございます」
俺は思い出す。
スーパーナチュラル……超能力。
フェノメノン……現象。
ウェポン……武器。
そしてウェポンは、体の一部或いは体から武器を形成するタイプ（例：東先輩）と、武器をそのまま使うタイプ（例：音河）の二つがある。
が。
ビーストというのは聞いたことがない。

「当然でございます。この能力を持った者はそれはもう多くいらっしゃいますが、ビーストになってしまえば、それは他とは違い『化け物』としか見られません。妖怪を見たら、逃げ出すでしょう？そ

れと同じでございます」
　楊瀬さんはそう言って少し苦笑を浮かべた。
「それが……アンタらの言う第三段階ってわけか？」
　海馬が楊瀬さんに質問する。
「そうでございます。という反面、それが全く同義ではございません」
「要領を得ないな。率直に言え」
「ここまでお教えしているのに、それ以上の情報を得ようとは、あまり合理的ではありませんね」
　楊瀬さんは厳しい目を見せる。
　いつもの包容力ではなく、威圧感に他ならない。
「そもそも私たちは自らの能力をばらしたようなものでございます。あなた方が自らの能力をお教えなさらないのであれば、私がこれ以上何かを言う必要というのは皆無でございましょう」
「……確かにイーブンではないぜ、海馬」
「……わかっているさ」
「お分かりいただけてうれしく思います」
　と、楊瀬さんは言って身を翻して、その瓦礫を崩し始める。
「華壱様……いや、これは全員にお手伝いして頂くか……」
「俺に任せてくれませんか？」
「……はい？」
「別に見返りを求めていません。むしろ、今まで手伝っていただいたお礼程度です」
　俺はそう言って、瓦礫の山の頂上に立つ。自然、楊瀬さんの真横に立った。
「……」
「リメンバー・リメイン。だそうです」
　俺はそう言って左手の袖をまくった。そして瓦礫の山に左手で触れる。
　イメージは四角い塊を幾つも作るような感じだ。

２０秒もすると、８個くらいの四角い塊ができた。
「……錬金術師ですか？」
「そのネタは偏見でしょうね……」
本当の錬金術はこんなものじゃなかったはずだ。
「私たちも行くとしましょう」
「そうだな」
海馬と楊瀬さんは歩き出した。俺もそれを追って歩いていく。
体育館がどうなっているのかはわからないが、まあうまくやってくれていることだろう。

３０ー想定外ー

「落ち着け。別に祭りの邪魔をしようというわけではない」
と。
一条字先輩が数人の倒れ伏した人の山の上に立っていた。
「そうです。諸事情でこうなったのですから」
と。
同じような格好で隼人も立っていた。

「上手くやってくれてなかったー！！」
俺は悲痛な叫びをあげた。
「何やってこんなことになってんだ！？」
「祭りの邪魔をするな、って暴れだした生徒を抑え込もうとしたらこんなことになったのさ」
「俺の学校でルールに従わない奴は、潰す。俺の理論に口を出すなら、貴様も潰してやろうか、嘉島奏明」
と、一条字先輩は強く睨む。
それからマイクを掴んで、
『祭りの再開だ。何も言わずに、さっさと再開しやがれ！』
「おおおおおおお！！」
と、生徒たちは叫んだ。そして体育館から出ていく。
「ご苦労だった、楊瀬。処理までやらせてしまって」
「処理は嘉島様が担当してくださいました。ご負担のほど、感謝いたします」
「そうか。よくやってくれた、嘉島奏明」
と、一条字先輩は言った。
「さてと……次に会うときは、敵同士ということになってしまうわ

けだな」
「ですね。まあ、禍根の残らない戦いをしましょう」
「だな。だが……海馬正」
と一条字先輩は海馬を見た。
「楊瀬は強いぞ。貴様に勝てるのか？」
「心配無用だ。俺も強い」
「強い目だ。改めて楊瀬とそっくりだな」
「……」
「……」
楊瀬さんと海馬が同時に不快そうな顔をする。
「こんなのと一緒にすんな」
「ひどい発言でございますね。心に強い傷を負ったような気分です」
と、無表情で楊瀬さんが海馬の発言に対して言った。
「まあ、そんなことはどうでもいい」
と、きっぱり一条字先輩は話を捨てた。
「４月１８日。当日にルールは決められる。学園補佐会の厳選なる審査によって決められるルールだ。安心しろ」
「学園補佐会のメンバーは変更されないんですか？」
「されない。そもそも、生徒ではなく、理事長の側近二名だからな」
と一条字先輩はそう言った後、
「俺はもう寝る。生徒会室の片づけもせねばなるまい」
と身を翻した。
「じゃあ、また今度な！」
華壱は元気よく言う。
「では、失礼いたします」
楊瀬さんはそう言って深々とお辞儀してから、消えた。
籠目さんは何も言わずに去り、
「楽しみにしているぞ。生徒会選挙」
と、最後にシオさんが笑って去って行った。

「さてと、それじゃ祭りに参加するとしよう」
隼人はそう言って制服をきれいに着直した。
「眠い」
海馬はそう言いつつも、誰よりも早く体育館から出ていき、
「待ってください、一緒に行きます！」
と雅が追い駆けていった。
隼人と音河も静かに出ていき、俺と虎郷も後を追うようにして、祭りを楽しんだ。

僕らの最終戦争のための時間が動き始める。
僕らの最終決戦のための歯車が回り始める。
僕らの最終対決のための布石を置き始める。

僕らの最終演技のための世界が――作られ始めた。

01ー宝探し　開始ー（前書き）

一応、ここで新章に

０１ー宝探し　開始ー

４月１８日　木曜日。
学校、特別休日。
午前１２時前。

第一戦　庶務戦。
楊瀬通　対　海馬正。

ゲーム　『宝探し』
ルール説明：校内に設置された５つの宝箱から色のついた水晶玉を手に入れること。水晶玉を獲ってから、１分以上、単独で保持した場合、保持したものの所有物ということになり『獲得』となる。先に３個の水晶玉を手に入れたものの勝ちとする。獲得した、あるいは、宝箱から取り出された水晶玉が割れた場合、『獲得』を無効とする。制限時間は無し。終わるまで戦い続ける。ゲーム開始時刻は１２時。チャイムで知らせる。
ハンデ：新入生徒である海馬正にハンデを付ける。最初の１０分間、楊瀬通の行動を禁じる。

「これが今回のルールだ」
と、一条字先輩は集まった全員のそのプリントを配った。
当然、俺たち六人と向こう側の候補者である。
「まあ、簡単に言えばトレジャーハンティングだ。さっさと始めて終わらせろ、楊瀬」
「ルールによれば、私が行動できるのは１２時１０分からでございます。少々お待ちくださいませ」
と、余裕そうな発言をする。

「……」
海馬は無表情だ。
このゲームの攻略法でも考えているのかもしれない。
「あまり余裕じゃないようだな、海馬正」
一条字先輩は海馬を見て言った。
「……まあな。ハンデの１０分なんかいまいち役に立ちそうもない」
「それもそうか。まあ、あきらめろ。こいつの能力はわかってるだろう？」
「どんな能力かはわからないけど、どんな効果があるかはわかっているつもりだ」
海馬はそう言って、準備を始めた。
「運動靴で走ってもいいのか？」
「いいぞ。貴様の自由にしろ」
一条字先輩は言った。
「……玲王」
シオさんが言う。
「この勝負、そう簡単にはいきそうもないと思うけれど……」
「だろうな。驚くほどに冷静な男だ」
２人は静かに会話した。

「先輩」
と雅が海馬に近づく。
それから
「頑張ってください」
と言って海馬を見る。
「任せろ。運に」
「運任せ、だと？」
籠目さんが怪訝そうな顔をする。
「まあ探索活動にある程度の運が必要ではあろうが、それだけで攻略できる戦いでもないと思うぞ」

「……忘れるな」
と、海馬は言った。
「プリントを見ろ。これは『ゲーム』なんだよ。一種の賭け事だ。所詮は運が全てだ」
俺はそう思いたい。
と、海馬は続けた。
「信じてます、貴方を」
と。
雅は言った。
「……死亡フラグになりかねないこと言わせんなよ……」
と言って、海馬は小さな体躯の雅の頭に手を置いた。
「任せろ。勝ってくる」
と言った。

キーンコーンカーンコーン……。
「行ってくる」
海馬は言ったが早いか走り出した。
そして昇降口へと消えていった。

「楊瀬はここに残れ。俺たちは行くぞ」
と一条字先輩は言った。

校内には監視カメラが設置されており、映像で状況を確認することができる。また音声も拾ってある。それは応接室で確認できるが、楊瀬さんはこれから戦うので確認することは認められてはいない。
俺たちは一階の応接室前に到着した。
「まあ、海馬正がどんな男かはわからんが、楊瀬は強い。そう簡単に勝てる相手ではないだろう」
「どうでしょうか。それは」
と。

隼人が言った。
「……？」
「僕ら側は何一つ心配はしておりません」
「まあ、信頼するのは構わないが、客観的に見るのもリーダーの務めだぞ？」
「分かってますよ。そして、すぐにわかります」
と。
隼人は言った。
「何だと？」
と、言いながら応接室を開けると。
音声が漏れてきた。

『一個ゲット。さっさと次行くぞ』
と。
海馬の声だった。
「何！？」
一条先輩側の候補者が一気に駆け寄る。
そして映像を見ると。

赤い水晶玉を上げては下ろしを繰り返している海馬の姿が画面に映っていた。
「ほら。彼は強い」

02ー宝探しー

「早……」
華壱がつぶやいた。
「どこにあったものを手に入れたんだ……」
と、籠目さんが画面を食い入るように見つめる。
「……1階の会議室からのようだ」
シオさんが言った。
「何だ、虱潰(しらみつぶ)しに1階からやってるだけか……」
と安心したように籠目さんが言った。
「……そんな簡単だとでも？」
隼人が笑う。
「……どういう意味だ」
一条字先輩も言った。
が、その表情はなぜか笑っている。
「見ていればわかりますよ」
「ならば見よう」
と、全員で画面の方に視線を向ける。

海馬は階段を駆け上がる。
「……」
何階にある？どこの部屋にある？いつになったら、アイツは来る？
それを考えながら走る。
直感的に3階を曲がり、別館の方向に向かう。それからさらに上へ駆け上がる。この上にあるのは情報室……パソコン室、というわけだ。
そこにしよう。
俺の運なら間違いなくある。

「情報室に入ったな」
と、一条字先輩が言った。
カメラの映像が室内に変わる。
室内を四方から見た様子。
「見たところ、何もないようだな」
やはり、偶然か。
と籠目さんが言った。
が。
映像を見ると、海馬はすべてのパソコンの電源を入れ始めた。
『あるはずなんだ！』
海馬の声が室内にこだました。

俺の運が間違ているはずがない、俺の運がここに呼び込んだということはこの部屋のどこかにはあるはずなんだ。
この部屋にあるのは大量のＵＳＢメモリーと何台ものパソコン。
それらすべてをチェックすれば当たりにたどり着く。
が、そんなことする必要はない！
そこまで考えた海馬は、ＵＳＢメモリーの入った箱を上に投げた。
そして落下してくるＵＳＢメモリーを一つ掴んだ。
「こいつだ」
海馬はパソコンにそのメモリーをつなぐ。

「何やってんの、海馬は」
と、華壱は言った。
「分からん。あんな中に宝箱があるわけな――」
『あった！』
と、海馬の声が映像内から出た。

メモリーの中には宝箱のアイコン。
そこをクリックすると、青い水晶玉のアイコン。
「よし……」
海馬はそのあと、少しパソコンを軽くいじってから、メモリーを抜いた。

「……何なんだ、アイツは」
と籠目さんが呟く。
「どういうことだ。王城隼人。差支えなければ、説明を頼む」
「差し支えは……まああありません」
と、隼人は言った。
「彼は運がいいんです」
「……ふざけているのか？」
「いいえ。大真面目ですよ」
「運がいい……それが奴の力ということなのか？」
今度はシオさんが聞く。
「おもしれー！なんじゃそりゃ！」
華壱ははしゃぎ出す。
「それが真実なのか、嘉島奏明、虎郷火水、音河響花、常盤雅」
「ああ」
「そうよ」
「ええ」
「そうです」
全員即答だった。そりゃあそうだ。だってそれが真実なのだから。
「なるほどな。貴様らの余裕な態度はそれが理由か」
と、一条字先輩は笑った。
「何ですか？」

「よかったよ。相手の能力がわかってな」
と一条字先輩は言う。
シオさん、籠目さん、華壱も笑う。

「その程度なら、アイツは負けん」
一条字先輩は笑った。

「……そろそろでしょうか」
校舎の外で私は一人つぶやいた。

０３ー宝探しー

物音を立てずに、海馬の前に現れた男。
「な……！？」
楊瀬通だった。
「１０分経ちました。私の出番です」
と、さらに瞬間移動して海馬の後ろへ。
「頂戴しますよ」
と言って、ＵＳＢメモリーを奪う。
「な」
「この中に入っているのですね、水晶が。よく見つけられましたね」
「返せ！」
「では」
と言って楊瀬さんはすぐに消える。
「くっそ！」
海馬は窓から飛び出し排水管のパイプを伝う。
そして、２階の窓から廊下に入る。
「……適当だ！」
と、目の前にあった教室を開いた。
教卓の上に一つの宝箱。
「あった！」
海馬はそう言って教卓の方へ走りこむ。
が。
「失礼」
と、またも楊瀬さんが現れた。
「頂いていきましょう」
宝箱を開けて中の緑色の水晶を手に入れてから言った。
「待て！」
海馬は間一髪で楊瀬さんをとらえる。

「残念です」
と。
楊瀬さんはそのまま消えて、海馬はバランスを崩して倒れる。
「な……」

「どういうことだ！？」
俺は隼人を見る。
「……瞬間移動系統の能力は、衣服や触れている物が移動できる物体である限り、一緒に持っていける。だから、建物や地面はともかく海馬君くらいなら一緒に連れて行かれてもおかしくない……」
「ということは……」
「ああ。あれは『瞬間移動』ではないということだ」
と隼人は言う。
「じゃあなんなの？」
音河が不安そうな顔をした。
「……心当たりは一つあるけど……まだ推測の域を出ない」
隼人は言ってから、また画面に視線を向けた。

「畜生！」
海馬はそのまま窓から飛び降りる。
二階から飛び降りた程度では、彼の運を壊すほどの痛みはない。
まあ、つまり、彼はほとんどダメージなしに着地した（受け身が成功しただけかもしれないが）。
そして体育館に走りこむ。
それから、準備道具が大量に入っている部屋に入り込んだ。
「あった」
宝箱がマットの上に置かれていた。

「これだけは……獲る！」
海馬はすぐに宝箱を開けて、紫の水晶玉を手に取った。
一分。
一分間これを保持すれば、良い。

「なんと。先に取られてしまいましたか」
と、楊瀬さんが現れた。
「……！」
楊瀬さんは透明な水晶玉を持っていた。
つまり、楊瀬さんは青、緑、透明の水晶玉。そして海馬正は赤と紫の水晶玉を持っている。
「まだ、二つの水晶玉は一分経っていませんので、正確には私は青のみです」
「そうか。俺も赤だけだ」
「そうでございますか。では、取り合いですね」
「だ」
と。
海馬は言った瞬間に、赤の水晶玉を投げた。
速い速度に対応できなかった楊瀬さんの持っていた透明な水晶玉にあたる。
パリン、と。
２つの水晶玉が落ちて割れた。
「な……」
「さあ、その緑を俺が奪うか。お前が緑を持って逃げ続けるか、勝負だ」
と。
発言の時にはすでに海馬は楊瀬さんの目の前に。
「く……」
「消える前に勝負をつける」
と、海馬は緑色の水晶玉を掴み取って、上に向かった投げた。

「貴方……」
「さぁて。勝てるかどうか。お前の『力』、見極めてやる」

０４ー宝探しー

「貴方はいったい何を考えているのですか」
「何も考えていないね」
と、海馬は言ってそのまま飛び上がる。それを見た楊瀬さんも飛び上がる。
バスケのジャンプボールのようだ。対象物の大きさも違うし、高さもそんなものではないが。
「届け！」
「届くわけがありません」
と、楊瀬さんは消えた。
そして少し上に現れる。
「私が先に取りますから」
「届け！」
「ですから届きませんと――」
と。
楊瀬さんの体が急に落ちた。
「届いた！」
海馬は言った。
そう。
海馬は文字通り、楊瀬さんの足を引っ張ったのだ。
「な……」
「お前はここに居る！」
「く……」
そのまま二人で落下する。
「どうして今消えなかったのかしら」

と、虎郷が言った。
「ああ、そうだな」
今、海馬に掴まれてから消えてまた現れれば離れることもできたはずだ。
「……そうか。分かったよ、能力が」
「一体、どんな……」
「気にしなくていい。海馬君もほとんど気づいているようだ」
隼人はそう言ってにやりと笑った。

「今だ！」
海馬は水晶玉の方に走り出す。
「私はどこにでもいますよ」
と、水晶玉のほぼ目の前に楊瀬さんが現れる。
そして水晶玉を手に取った。
「ではこれで」
「お前は只の二年生だろうが！そこに居ろ！」
海馬は言った。
楊瀬さんは固まる。
「くっそ……」
楊瀬さんは言って、走り出した。
普通に走る行動でも楊瀬さんは十分に早いが、それでも消えるのとはわけが違う。
体育館を出て、楊瀬さんは言った。
「私の脚力ならば、校舎ひとつくらい余裕なんですよ」
と。
言ったが速いか飛び上がった。
「俺は運がいいんでな！」
と、海馬は言ってからそのまま排水管を駆け上がる。
普通なら倒れてもおかしくないが、『運よく』靴が溝に引っかか

り続け、ほとんどバランスを崩さずに校舎の屋上まで辿り着いた。
「すさまじいですね。貴方の能力は」
「気づいたのか？」
「ただ、運がいいだけでよくここまで生きて来れましたね」
「お前の能力も見えているぜ」
「私はここから飛び降りても生きながらえるだけの存在ですよ」
と、飛び降りようとした楊瀬さんに、
「嘘つけ」
と。
一言海馬が言った。
「……ばれましたか」
と、楊瀬さんは笑う。
「単純な話だったのさ」
海馬もそれを見て笑う。
「お前の能力は『嘘を本当にする』っていう能力だ」
海馬の発言に楊瀬さんは即答した。
「ご名答でございます」

０５ー宝探しー

「トゥルー・ルート」
隼人が言った。
「俺たちは『嘘から出た真』だ」
と一条先輩も言う。
「能力について改めて説明するまでもないだろう。嘘を現実にする。それだけの能力だ」
「アイツが消えて現れたりした能力はいったいどういうことだったんだ？」
「あれも簡単。彼は日常的に嘘を吐いているだろう？」
「……はあ？」
「彼の名前を君は知ってるか？」
「楊瀬通だろう？」
「それは『仮名』だろ？彼には名前がない。だから、彼の存在はそこにはない」
「いや、それは違うだろ？名前がなくても存在はそこにあって」
「妖怪とか神様に名前を付けるのは、その存在を縛り付けるためだ」
「は？」
「アクターに名前を付けるのは、その存在が暴走しないようにするため」
「……何が言いたいんだよ」
と、隼人に俺は突っかかる。
「今日元を憶えているだろ？」
「……ああ」
この場合の今日元は恐らく今日元始のことだ。
「アイツは最後の最後に『クレイジー・シーン』になった。アイツはあれを最終段階と言っていた。つまりあれが、能力を知らなかっ

たことによる暴走だ」
「……だとして、なんだっていうんだよ」
「ああいう風に暴走するには彼がアクターの名前を知らなかった所為。精神的な観念に基づくもの――神様や妖怪、幽霊そしてアクターはそういう名前を重要視するのさ。だからネームっていうのも能力の構成にかかわることがある」
「……」
「分からなくても構わないよ。それでも、名前の大切さは知っておいてほしい」
隼人はそう言ってすぐに画面を見た。
……名前。
俺は。

俺は何か大切なことを忘れているような気がする。

「それでも今、この現状は私が優勢です」
「どうだろうな。俺の紫はすでに一分経った。後はその緑だけだぜ」
「そうですね。しかし、貴方の能力は私の能力を打開できてないでしょう？」
「……」
海馬は止まる。
「貴方の運は他人に作用しない。つまり、私が消えることを止めるのは貴方の運ではなく貴方の言葉です。貴方が私がここに居る、と宣言しない限り――『嘘だ』と認めない限り、私はここにいないのです」
「……ばれてたか」
「ええ」
「だが、そこまでわかってても無理だろう？つまり、お前の能力は『嘘だ』と否定されれば、そこで消え去ってしまう。見抜かれたら

能力は使用できない」
「……ばれているのですね」
と。
二人でお互いがお互いの弱点を確認し合う。
お互いこの点では嘘を吐くことはしなかった。
「ですが」
と、楊瀬さんはそう言って、突如として姿勢よく構えた。
「私は、貴方の口を封じればもっと楽に行動できるということです」
と言って静かに礼をする。

「……！？」
海馬の表情が一転する。
目の前に居た楊瀬さんを見て。

「では、第二ラウンド開始です。一匹狼の私と」
と。
目の前の楊瀬さんの姿は、狼へと変貌していた。

06 ー宝探しー

「……マジかよ」
「言っておきますが、この状態でも私の能力は使えます」
「嘘だ」
「嘘ではありませんよ。リアルです」
と、前置きした。
「しかし恐らく私は消えることは無理でしょう。貴方から見れば私は『狼』ですから」
「ただの狼というわけか」
「そうです。それより大丈夫ですか？早く保持しておかないと、一分経ってしまいますよ」
と楊瀬さんが持っていた水晶玉を見せびらかす。
「チッ……」
海馬は走り出した。
そのまま真っ直ぐ楊瀬の体をつかみかかる。
「狼ですよ、私は」
と楊瀬さんは消えた。
「消えねーって言ったじゃねーか！」
「物理的な高速移動ですよ。消えたかどうかを判断したのは貴方ですから」
「でも、俺の勝ちだぜ」
と。
楊瀬さんの目の前には石ころが数個あった。
海馬が投げた物だ。
「いえいえ。その石ころはここで砕けます」
と。
言った瞬間には言った通りに石ころが粉砕した。

「……く」
「貴方が嘘だと言う前に事象が発生しさえすれば何ら問題ないのです」
「が、それでも俺の勝ちだ」
海馬は勝ち誇った顔をした。
「何を――」
と、楊瀬さんの体が崩れ落ちる。
「！？」
「この屋上の床は毎日俺が金槌で叩いてたからな。俺より体重が重いやつが乗れば壊れるさ」
そう。楊瀬さんの体は崩れたコンクリートの床に足を取られて、沈んだのだ。
「石ころの出所を推測しておくべきだったな」
海馬は言う。
つまり、壊れやすくした床の一部を無理やりはぎ取って石を作ったということ――。
と、楊瀬さんは思考に意識を奪われていた。
そしてその瞬間を海馬は見逃さなかった。
水晶玉を屋上の外部に向かってはじき出す。
「しまった――」
「俺が獲る！」
と海馬は手を伸ばして、水晶玉をつかんだ。
が。
「……予想外だ」
水晶玉は屋上の外に出て、空中を舞う。それを海馬は飛び込むようにつかんだ。
すなわち、海馬は屋上の外にいるのだ。
落下。
予想外。
運は効かない――。

「しまった！」
海馬の体は落下し始める。

「やばい！」
「予想外って言ってたぞ！？」
「これじゃ彼の運は作用しない！」
「どうするんだよ！」
と俺と隼人が焦るのを見て
「心配すんなって！」
と、華壱が笑った。
「この学校で人が死ぬなんて、そんなことさせやしない」
と、一条字先輩が続けた。

「アイツがいる限り」

楊瀬さんは崩れた足場から体を無理やりねじって、屋上の外に出る。
それから屋上の壁を四足歩行で駆け降りる。
落下速度を上回る、謎の速さ。
「うおおお

海馬の体をつかみそのままの勢いで体育館の丸みを帯びた天井の上に立つ。

「……ふう」

と楊瀬さんは落ち着いた様子で言った。

「助かった。ありがとう」

「いえ。私はこの学校で人を死なせることが嫌なだけですので」

と、言って。

楊瀬さんは人の姿に戻った。

「では。これにて」

と。

消え去った。

「しまった！」

海馬の手の中にはすでに緑色の水晶玉はなく、丸い天井という、動きにくい場所に海馬一人が取り残されていた。

07 ー宝探しー（前書き）

海馬君の独壇場。

07ー宝探しー

ああ。
空が青い。
俺の髪の毛の色と比べても、大差ないくらいの青さだ。
あと、比べる対象としては、今俺の中にある無感情さに近い何らかの『青』だろうか。

ああ。

清々しいくらいに負けた。

俺もまだ青い餓鬼だったということだろうか。

俺はその場に座り込んだ。
少し暖かくなっている床となった天井に仰向けに倒れた。
「……くっそ」
これほどまでに俺にとっての天敵な男がいただろうか。
あれの能力は予想外というよりも、『予想できない』のだ。いや、例え予想していてもそれに対して俺の運が作用することはできない。
『運よく嘘だと俺が発言する』などという事象が起きるはずもないのだ。
それに、アイツの消えるという能力に対しては、一瞬でも奴を『楊瀬通』として見てはいけなかったのだ。だから俺は『ただの二年生』や『庶務の男』、『狼』など、そういう見方だけをしていた。
だが、俺は助けられた瞬間にアイツを『楊瀬通』だと認識した。
客観的に見ることを封じられた。
「……」

もしかしたらそこまで計算尽だったのかもしれない。
俺を助けて、足場の悪いこの体育館の上に連れて行き行動を封じ、さらに俺を助けることで『主観的』に自らを認識させようとした。
そういうことだとしたら、俺は間違いなく完敗だということだ。
でもまあ。
取り敢えずは俺は立ち上がった。
周りを見渡す。
「見えるわけないよな……」
あきらめる。
雅には悪いことをしたよな。
死亡フラグではなかったけど負けフラグは立ってしまったわけで。
俺の運も１００％ではないことが分かって、それも『運が良かった』ということに――。

「海馬ぁあああああああああああ！！」

思考を中断させる叫び。
「てめえ、何勝手にあきらめてんだ！」
最初は普通に嘉島かと思った。
が。
叫んでいたのはなんと王城だった。
「思い出せよ！君はまだ進化すらしていないだろう！君はまだ第一段階だ！」
「……ああ」
そう言えば、この間皆はレベルが上がったというのに、俺は上がることもなかったな。
……で？
「まだ３０秒あるだろうが！願えよ！君の思うところを！」
「願うって……」
何を。

俺は客観的に自分を見ることはできるが、最早欲望なんてどこかに落として忘れてしまった。
だから俺は思考の際、他人の意見にすがるのだ。こんなに考えているのも久しぶりだというのに……。
大体、客観的に考えたら、俺の負けは決定だろうが。狼という強さの前に俺の武力では到底立ち向かえないし、俺が頑張る理由なんて……。
ああ。
あるのか。

雅。

あいつのために俺は頑張らないといけないのか。

「……だよな」
俺は呟いた。
今までの思考を吐き出すかのように。
そうだ。
だったら、客観的な感情で願えばいい。

俺に足りない武力を。

「……よこせよ。俺の運」
ぶつける。

「俺に足りない力をよこせ！」
叫ぶ。
突然、自らの体が後ろ向き倒れる。

青い空が笑ったような気がした。

０８ー宝探しー

「……よし」
逃げ去った楊瀬さんはそう呟いて、教室に立っていた。
これ以上何も起きない。
一分所持していれば勝ちだ。
少なくとも彼は一分以内にここに来ることは不可能だ。
そう言う意味で、楊瀬さんは「よし」と余裕綽々といった感じで呟いたのだ。
が。
「！？」
窓から小型ミサイルが飛んできたのが見えた。
窓を突き破り、衝突し爆発する。
「何だ……！？」
「見つけたぜ」
と。
楊瀬さんの視界に入ったのは海馬だった。
「な……！？」
「次は……この辺にしてみるか」
と。
海馬は何かをいじる。
すると、
『スイッチ？１０：ポンプ』
という効果音が聞こえた。

瞬間、楊瀬さんの体を水流が襲う。
「う、が……！！」
楊瀬さんの手から水晶玉が落ちる。
これで時間はリセットだ。
と、同時に煙が水流の力によって晴れる。
「な……何ですか、それは」
こんな焦っていても、尚も敬語を貫き通す楊瀬さん。
いや、それよりも注目すべきは彼が手に持っている大型と呼ぶべき大きさの兵器。
大筒のような銃口とバズーカのそれと同じ引き金。いや、見た目的にはほぼバズーカ。
しかし、その大筒の横に、様々なスイッチがついていた。
「分からない。が、お前のおかげで俺も進化できたってことだ」
「く……しかし、それでも私は逃げる」
楊瀬さんは緑の水晶玉を獲って消えた。
「……」
海馬は適当にスイッチを押す。
『スイッチ？４４：追尾ミサイル』
海馬はその状態でそのまま引き金を引いた。
ドォン！という音を立てて、砲口から一発のミサイル弾が飛び出した。
その弾丸は窓を抜けてどこかへ飛んでいく。
「次は……」
と、またスイッチを押す。
『スイッチ？５９：推進エンジン』
音を聞いてから海馬は今度は銃口を下に向けてから、窓の外に飛び出した。
それから引き金を引く。
すると砲口からジェットエンジンが飛び出した。
そのままミサイルを追い駆ける。

すると、その先に楊瀬さんがいた。
「く……！」
楊瀬さんはスピードに追い付けず、逃げることができない。
そのまま海馬は楊瀬さんの前に立った。
「これが俺の力だ」
「……なるほど。分かりました。全力をお見せしましょう」
楊瀬さんはそう呟いてから、静かに両腕を開いた。
「ｗｗｗｗｗｗｗｗｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＮＮＮ

０９ー宝探しー（前書き）

先日分のものに、７００文字ほど足させていただきました。

続きからご覧ください。

０９ー宝探しー

最初に動いたのは楊瀬さんの方だった。
動いたと言っても、見える速度ではなかった。
気づいた時には海馬の体が吹っ飛んでいた。
「狼は……そんなに早いもんなのか？」
海馬は少し、苦笑いを浮かべていった。
「これは私なりの努力の結果ですよ」
そして追撃と言わんばかりにタックルで攻撃して壁と狼の体躯が海馬の体をサンドイッチする。
「……が……は……」
海馬の口から空気とともに、血の混じった胃液が飛び出す。
「……くっそが！」
海馬は適当に銃のスイッチを押した。
『スイッチ？１０：ファイア』
とその音とともに、銃口から飛び出した炎。
楊瀬さんの体を炎が襲った。
「熱ッ……！？」
楊瀬さんは声を上げて、後ろに下がる。
火は燃え移りはしなかった。
「どういうことでしょうか」
「何のことだ」
「先ほど、スイッチは？１０はポンプだったはず……」
「ああ、それなら簡単さ。こいつは気まぐれだ。スイッチなんて言っても規則性もなく適当に代わっていく。いかに状況に適した武器が使えるかは、運しだいってわけさ」
「……」
楊瀬さんは焦燥感を表情に露わにした。
「ケリを付けるぜ」

海馬はボロボロになった体を無理やり起こして、そのままスイッチを押した。

『スイッチ？１００：スロット』

音声がしたかと思うと、次はスロットが回る音。そして銃口からルーレットを回すレバーのついたスロット台のスロット部分だけが飛び出る。

「な……何だ！？」

海馬自身が焦る。

「……さっさとけりをつけるんですよね？」

と、楊瀬さんが重々しく立ち上がる。

「先手必勝！」

楊瀬さんはそう言って走る。

といっても目に入る速度ではないが。

「く……」

海馬はレバーを必死につかむ。

と同時。

海馬の体は窓外に投げ出された。

「……」

それでもレバーを海馬は引いた。

スロットがゆっくりと止まり始める。

海馬の体は落下し続ける。

スロットが止まる。

『７』『７』『７』だ。

『ケースバイケース』

音声がした。

そして海馬は地面にたたきつけられた。

「……死んではないでしょうが……」
楊瀬さんは少し苦そうな表情を見せる。そして窓から背を向けた。
高さ的には死ぬような高さではない。彼の運なら打ち所が悪いということはないだろう。しかし、疲労やダメージはかなり蓄積された状態だったことから、０と言い切れるわけではない。
が。
「死んではないぜ」
楊瀬さんの後方から声がした。
海馬正。
その男が窓の桟に立っていたのだ。
しかも。
「……無傷……！？」
落下のダメージはおろか、今まで食らったであろうものでさえもなくなっていた。
「どういう……！？」
「ケースバイケース……時と場合による、だ。スロットの力によって発揮される効果はその時求められる力のようだ」
「まさか……その力で傷を回復したということですか？」
「そんなわけないだろ？この武器は武力。攻撃の道具しかない。だから、これは只の時間稼ぎ。お前を騙すための、な」
そう言った海馬の体は。
かすれていたような気がした。
ドォン！と。
その海馬の体の後ろからミサイルの弾が飛んできた。
「な！？」

楊瀬さんは対応できない。
ミサイルは楊瀬さんの体を的確にとらえて、爆発した。
緑色の水晶玉は、パリンという音を立てて割れた。

１０ー宝探しー

楊瀬さんと海馬は保健室へ。
俺たちもそこに集まっていた。

「俺がやったのは……『ビジョン』だ」
海馬はボロボロの体でそう言った。
スロットによる『ケースバイケース』という力は時と場合によって能力が変わる、ようだ。
そしてそれは海馬の対抗策につながるものである、らしい。
しかし、回復などという魔法のような武力はなく、代わりに相手の目の前に海馬の姿と音声を流した、ということだ、そうだ。
『ようだ』『らしい』『そうだ』などという言葉遣いになってしまうのは、この力は新能力で、誰もその力を知らないからだ。しかも当の本人の海馬でさえ、先ほど手に入れたばかりのこの能力の扱い方はわかっていないらしい。

分かっていることだけをまとめておくとするなら、まず、この銃は左右に５０ずつ、計１００のスイッチがある。つまり１００種類の武器があるようだ。そして、そのスイッチと武器の連動性はしばらくすれば変わる。きまぐれ、と海馬は表現していた。
実際に実験したわけではないから詳しいところはわからないが、そのビジョンというのも、備わっていう武器であろう、というのが海馬の考えだ（もしかしたら武器自体は１００を超えているのかもしれないとも言っていた）。
他に分かっているのは、この銃は『アクター』であるということだ。

「響花の力を知っているだろう？武器……ウェポンだ」

「それは知ってるけど……」
「響花のはその中でもアーム……つまりあのギターそのものが『アクター』だったわけだけれど、進化してその力が体に移ったと考えられる。『声』という武器としてね」
と、隼人は海馬に説明するというよりもこの場にいる全員に説明しているようだった。
「そして東先輩もウェポンだ。しかし彼の場合は『サイボーグ』だ」
「ああ。その話か。あれだろ？あれは海馬先輩そのものが『乗り物』としての機能を果たしている……だったか？」
「そう。で、それを踏まえた上で見てみると……」
と、隼人は言って海馬を見た。
「君のは、恐らくアームだろう。サイボーグではないからね」
「……」
「ちょっと興味深いから、今度実験させてくれたまえよ」
隼人はそう言ってから僕の話は終わり、といった。
「……では勝敗を決めようか？」
一条字先輩が言った。
「楊瀬は青色の水晶玉の入ったＵＳＢ。そして海馬は紫色の水晶。よって一個ずつの保持ということでいいな？」
「……ええ。そう言うことになります」
楊瀬さんはボロボロの体でそう言った。
海馬は眠り込んでしまっていた。あるいは気絶したのかもしれないが。
「なら、勝負は引き分け――」
「お待ちください」
と。
声がした。
保健室の扉が開いていて、そこには一人の女生徒の姿があった。
「……誰かしら」
虎郷が静かに臨戦態勢を整える。俺と雅も同時だった。

これは、ただの生徒ではない……。
隼人と音河は感じては居ないようだったが、俺たち3人には伝わった。
「落ち着け、嘉島、虎郷、音河」
と籠目さんが言う。
「こいつは『生徒会補佐会』の一(いっ)だ」
「生徒会……補佐会……」
ああ、そう言えばそんなのもいたような気がする。
「この選挙は私たちが管理していますので、私たちの方から勝敗に関してはお知らせさせていただきたいと思います」
と、一と呼ばれた女性は言ってから、ハッとした顔をして
「申し遅れました。本校の校長から名を受け『乱一(みだれっ)』と名乗らせていただいております。以後お見知りおきを」
「名を受けた？」
俺は女性に聞き返す。
「この学校では生徒会補佐会になるということは、この学園を上層から管理するということ。故に今まで通りの存在ではならない。ということにより、校長の方から新たな名を受けるのです。唯一無二の名前を」
少し中二っぽいですが。
と、乱さんは笑った。
「……で、勝敗はどうなんですか？」
と雅が話を切り出した。
「ああ、そうでした。庶務戦、楊瀬通　対　海馬正」
乱さんは、言って。
驚くべき事実を続けた。

「勝者、海馬正」

11ー宝探し　終了ー

「……乱ー」
口を切ったのは一条字さんだった。
「何を言っている、貴様。事と次第によっては、手段を選ばんぞ」
「いえ。ちゃんと理由はあります。楊瀬さん、あなたの水晶玉を見せてください」
そう言って乱は楊瀬さんに手を伸ばした。
楊瀬さんは静かにその上にＵＳＢメモリーを置いた。
そして乱は保健室の教員用のパソコンの電源を入れてからＵＳＢを差し込んだ。
ファイルが自動設定で開き、画面に宝箱のアイコンが移った。
「……これがどうかしたのか？」
「見てください」
と、乱が宝箱のアイコンをクリックする。
「！？」
そこの画面には青色の水晶玉が移っていた。

しかし、手の込んだいたずらのようにそのアイコンにはひびが入っていた。
「この通り、水晶玉は割れてしまっています。よって、この水晶玉は認められませんので、勝者は残り１つの水晶玉を保持している海馬さんです」
では、私はこれにて。
と、乱は扉を開けて去って行った。
「……正先輩。いつあんなことやったんですか？」
と雅が訊いた。

「……」
「寝たふりすんな」
俺はそう言って海馬の頭を軽くたたいた。
「ばれたか」
海馬は言って身を起こす。
「一番最初にあれを見つけた瞬間、これを偶然を装って楊瀬に奪わせれば、だまし討ちができるんじゃないかって考えた。だからすぐにペイントでヒビを入れておいたのさ」
「それはそれは、見事に騙されてしまいました」
楊瀬さんはそう言って笑う。戦いのときとは違い、優しい笑顔に戻っていた。
「天晴でしたよ。海馬様」
「……まあ、助けられた身だ。感謝はする」
海馬はそう言って、笑った。

海馬と楊瀬さんをしばらく保健室で休ませてから帰ることになった。だから俺たちは一旦保健室を出て、廊下に並ぶ。
「次はオイラだな」
と。
華壱は笑う。
「楊瀬さんが負けちゃったから、オイラは勝つぜ。雅」
「そうはいきません。このまま二連勝と行かせてもらいます」
雅もそう言って笑った。
笑顔。
本来敵対すべきもの同士の笑顔。
そこにはただの『楽しみ』という感情しかなかった。

何だろう……。戦いという雰囲気ではないということに少し違和感を感じていた。
「ちょっと外に出てくるよ」
俺はそんな違和感にも似た空気が少し合わなかったので、一刻も早く立ち去りたかった。だから俺は昇降口から出て、少し離れてから窓に背中を預けるようにしてもたれかかった。
「……ふう」
「どうだ。この学園は」
と。
唐突に声が聞こえた。
この声……！？
「お……お前」
振り向こうとしても振り向けない恐怖感。
「思ったよりも楽しい学園生活を送れているようで何よりだ。『残留思念』」
この呼称……やはりあの男……『希望の崩壊』……。
「何しに……来た？」
「俺はこの学校に居続けているからな。貴様の見えないところにいるぞ」
「……マジかよ」
「楽しそうに戦いをしているようだな」
「おかげさまでな」
余裕そうな発言をしているが俺の中には余裕なんて言葉はない。
いつ殺されるかわからないから寧ろビクビクしてる。
「だが気を付けるんだな。この選挙……お前たちが負けたら、俺たちの勝ちだと思えよ」
と。
男は言った。
「な！？」

「ああそう。俺と会ったことは内緒な」
じゃ。
と男が言ったと同時に、俺は気絶した。

１２ー箱入れ　開始ー（前書き）

書記戦。

１２ー箱入れ　開始ー

３日後。
すなわち、４月２１日。

「何なんだよ、けがは治ってないんだけど」
と海馬は頭に包帯を巻いたままの格好で学校にやってきた。
「仕方ないだろ、全員出席がルールだ。だから楊瀬さんも来てるじゃないか」
俺はそう言って楊瀬さんを指さした。
「どうも」
ピンピンしていた。
「まあそれなりに鍛えていますので、そこまで怪我も深くはなかったのですよ」
と楊瀬さんは笑った。
「じゃあ、今回の試合のルールだ」
「試合？ゲームじゃないのかしら？」
と虎郷が突っ込む。
「……ああ。ゲームではなく、試合と書いてある。前回とは違うということなのかもしれんな」
一条字先輩はそう言ってから俺たちにプリントを渡す。

試合　『箱入れ』
ルール説明：校庭の中心から１１か所に設置された箱にボールを投擲し、中に入れる。交代制で一度ずつチャレンジを与えるものとする。校庭にある円の中に入り、その中からのみ投擲することを許す。但し、先攻が入れた後も後攻にはチャンスが与えられる。入ったときは両者に１ポイントずつ入る。最終的にポイントの高かった者を勝者とする。

「……これだけなの？」
音河は思わずタメ口をきいてしまった。
「そうだ。単純明快なルールの様だぞ」
「んじゃ、さっさと始めようぜ」
華壱は言って校庭に向かって歩く。
「では、行ってきます」
雅もそう言って歩く。

俺たちは今回は傍で見ることができるようだ。
校庭には円が2つ並んで描かれており、そこの中央に2人は立つ。
キーンコーンカーンコーン……と、チャイムの音がした。

「……じゃあ始め！ってことで、いいよな？」
華壱が雅に言う。
「ええ。先攻後攻はどうしますか？」
「んー、じゃ、先攻もらっていいか？」
「どうぞ。私は後攻で」
そう言って雅は手で華壱に行動を促した。

「じゃあお言葉に甘えて」
そう言って華壱は、周囲を見渡す。

『開始します。まず、時計をご覧ください』
と放送がした。
すると、校舎の時計が開き四角い空間が現れた。
「……あそこに居れるってことだな」
と華壱が確認すると、待っていたかのように、円の中の地面からボールが飛び出す。
ボールはサッカーのボールだった。

「んー。じゃ蹴った方がよさそうだな」
と華壱は言って、右足を構える。
それから時計台を見た。

「……は……で……だ……で……の……が……だから……」
華壱は一人でぶつぶつと呟いている。
「彼は何をしているんですか？」
俺は隣に居たシオさんに聞いた。
「ああ。計算？っていうか、測定？ていうか……んー、まぁ見てればわかる」
とシオさんはあいまいな答えを返してきた。
測定？計算？
いったい何のことを言っているのだろうか……。

「じゃ、行くぜー！」
華壱は言った。

そして転がっているボールを右足で蹴り飛ばす。
ボールは少し左に反れながら時計台の方へと向かう。
「入らない……」
隼人は言った。
が。
左から強い強風が吹き荒れる。
ボールは風に流されて、吸い込まれるように箱の中に入っていった。

「な……！？」
唖然だった。
普通じゃない。あんなやり方は。

「どうだ？あれが、あんなガサツな奴が書記をできる理由だ」
そう言って一条字さんは不敵な笑みを浮かべた。

13 ―箱入れ―

推定距離。
ここから校舎までの距離が5キロ。時計は大体校舎の一番上だから、校舎の高さが約3キロ。
平面で考えれば、三平方の定理からおよそ6キロ。
さらに斜め上に向かって蹴り上げる力とその加減、風圧やこれから来る風までも読み取り蹴ることで、見事時計の中の箱に入れることに成功した。

……見事。

見事って……これは……。
「常人技じゃないだろう……！」
俺は思わず感嘆――いや恐怖の声を上げた。
正確に言うなら、箱に入れるための角度やらなんやらがさらに関わってくるから……。
計算なんてものじゃない。
予想、想定、感覚……――。

「メーター・ライター」
「測定器」
同時だった。
隼人と一条字先輩が言った。
「……」
「貴様の口から説明すればいい」
「ではお言葉に甘えます」
隼人と一条字先輩はそう言って会話を済ませた後、

「測定器（メーター・ライター）というのは、その名のまま、『体を利用して測定する』という単純明快なものなのさ。つまり感覚的に距離や重さ、角度、力等々を計算することができる。しかも限りなく正確な情報をね」
「だから、あの距離で箱に入れれたのか……」
「つまり、貴方たちのところのあの女には勝てる可能性なんてほとんどないということだ」
と、籠目さんが笑った。
「いやいや、こちらも舐められたら困るぜ」
海馬はそう言って笑った。

「……じゃあ私のターンですね」
雅は多少の動揺もありながらも静かに言った。
ボールが飛び出す。
形はラグビーのボールだった。
「ボールの形状は運次第なんですね」
と、雅は言ってボールを構えた。
女性の腕力では届くはずもない。なんなら蹴った方が彼女の場合は入るかもしれない。
それでも彼女は手に持ってボールを構えている。
「行きます」
間髪入れずに投げた。

「な！？」
ボールは回転が加わって飛んでいく。
ラグビーのボールは確かに回転がかかれば、その速度と威力は増す。

しかし、それでも摩擦でボールに火がついたりはしない。

「燃えてる！？」
「私の力は回転です。少し回転をかけておきました」
「いや、回転って……！？」
ボールはそのまま真っ直ぐ時計の箱の中に入った。
燃え上がるボール。
箱の中で光り続けていたかと思うと、しばらくするとその赤い炎の光は燃え尽きたように消えた。

『両者ポイント獲得です。よって無効点とします』
放送からそう言った声が聞こえる。

「勝負は始まったばかりです」
「だな！燃えてきたぜ！」
華壱は叫んだ。
雅も笑った。

１４ー箱入れー

『次の箱に移ります。後方の屋外プールをご覧ください』
放送に従い、俺たちは後方の屋外プールを見た。二人からの距離は大体１キロと５００メーターってところだろうか。そしてプールは高いフェンスに囲まれている。
『今回の箱はプールとします。但し――』
と放送が釘を刺すように言うと、全員の携帯電話が鳴った。
『メールに動画を添付しております。そこの映像に移っているプールの水の中にボールを入れてください』
俺たちはメールの動画に目を向けた。
「これは……」
映像に移っていたプールそのもの。そしてその水中の中に一つの鉄の箱が置かれていた。
「ただのボールじゃあれは入らないだろうな」
華壱は呟いた。
それはそうだろう。だって、重さ的に考えても、例え力押しで籠の中に入ったとしても浮いてしまう。それではクリアーとは認められないはずだ。
すると、それを見越していたかのように
『今回は普通のボールと鉄球の２種類をご用意しています』
と放送が聞こえた。
「じゃ、オイラ鉄球ね」
と華壱は笑う。
するとすぐに鉄球が飛び出してくる。砲丸投げのそれと同じだった。
「んー。どうしたもんかねー……」
華壱はそう言って構える。

「どうやってくると思う？」
俺は隼人に尋ねた。
「さあ……どうだろう。測定でどうにかなる問題でもないだろうけど……相手が相手だし……」
「無理だろうな」
と。
即答したのは一条字先輩だった。
「……え？」
「無理だ。間違いなく」
こ……こうもあっさり……。
「あっさりと言われても仕方がないだろう。だが、奴には無理だ。あいつはただの人間だぞ。普通にやったって無理だ」
「でも……信じないんですか？」
音河が静かに尋ねる。
「信じてるさ。俺は俺自身を。過大評価も過小評価もしていない、俺の考えを、な」
そう言って一条字先輩はすぐに視線を戻した。
これが一条字玲王。
自らの身を信じ、友や信じる者は持たない。絶対的な力しか信じていない。
王。
傲慢で豪傑で殊勝な王。

「せーのっ！」
華壱はそう言って思い切り鉄球を投げる。
しかし、そこまでの距離飛ぶはずもなく――とはいっても、明らかに日本人の砲丸投げ以上の距離は出ており、大体1キロ近くは飛

んだが――落下した。
「あっちゃー無理か……」
華壱はそう言って残念そうに肩を落とした。
『交代です。ボールか鉄球をお選びください』
「……」
この場合はボールを選ぶのが正しい判断と言える。
男の華壱が鉄球を投げて届かなかった距離を雅がいくら回転をかけたところで届くはずもない。それに回転をかければ必ずしも強くなるわけではないのだ。重いものであれば重いものであるほど、負担もかかる。
この場合は、体に負担をかけずに終わらせるのが吉。
と、まあ。
俺の横にいる金髪眼鏡からの受け売りだが。
「……」
雅は熱心に動画を見ている。
もしかしたら、何らかの策があるのかもしれなかった。

「どうだ？なんか思いつくか、隼人」
「ない。ボールではどう考えても浮いてしまうだろう。しかし、相手はあのミヤビ君だ。僕の考え方なんてどこ吹く風だろうね」
隼人はそう言った。
これが、隼人のスタイル。
完全放置とも言えるほどの徹底した信用。
できると思い込み、それを前提の行動をしがちで後から後悔する。
……まあ、全員その期待には応えてきたが。

「……よし」
雅は携帯を閉じて言った。
「鉄球でお願いします」

そう言って雅も飛び出した鉄球をつかむ。
「行きます」
雅は呟いて
「え……！？」
回った。

雅が。
その場でハンマー投げのように回転したのだ。
「これならいける……！」
そうか。これなら勢いを増して突きっ切ることが可能だ。

「いや、ダメだ……」
隼人が言った。
「え……！？」
「恐らくミヤビ君はフェンスごと越えようとしているんだろう。でも、多分それは無理。だって彼女は女性だから。彼女の力考えてもそれは難しい。遠心力を加えたところでね」
「いや、もしかしたらフェンスを突き破って」
「それも無理だ。距離的に力は弱くなってしまうだろう。フェンスだって甘く見ちゃいけない。彼女の判断ミスだ」
「……」
「けど、何かあるかもしれない」
と、隼人はそれでも信じようとしていた。

「行きます！」
雅はもう一度そう言った。
そして投げた。

ターニング・ポイントとさらに進化のスパイラルがあるので、普通の遠心力の倍以上の力がかかっている。

「え……！？」
予想外だった。
鉄球はフェンスではない場所に飛んで行っていた。
「あの方向は……？」
「シャワー室……のようですが」
楊瀬さんが言う。
シャワー室……いったい何を……。

鉄球はシャワー室の上部を破壊してから落下した。
「……何がしたかったんか分からないけど……狙いでもそれたか？」
華壱が心配そうに聞いた。
肩を心配しているのかもしれないかった。
「……」
雅はプールを見ていた。

「何をしようとしたんだ……！？」
俺はそう言って隼人に聞く。
「……分からない。いったい何を――」
『後攻、1ポイント獲得です』

放送は隼人の思考を遮って、信じられないセリフを言った。

１４ー箱入れー（後書き）

物理分からないからな……こんなことできるかわからないけど……。

まあ、超次元的な能力ですから（・・；）

15 ー箱入れー

何が起きたのかを説明する必要がありそうだ。
というか俺にも何が起きたのかがまったく分かっていなかった。
「……」
しかしこの件に関しては『シンキング・キング』こと王城隼人の能力では何の効果も発動しない。なぜならその能力の斜め上を逆走するような発想を持つのが雅なのだ。
ターニング・ポイント。
奇想天外予想外。

「ふむ……」
そう呟いた楊瀬さんは、唐突に消えた。
どうもプールの方の様子を見に行ったようだ。
「いつでもすぐに消えれるという能力はすさまじいな」
海馬はそう言って苦笑いを浮かべる。
あの能力と正面衝突した男であるが故の感想かもしれない。

『聞こえますか？』
突然俺たちのもとに声が聞こえた。
「何だ！？」
『私です。楊瀬ですよ』
「え、なに、これ……！？」
『私はテレパシーも使えるんですよ』

嘘つけ。

全員の意見が一致したが、言ってしまうと面倒なことになるので

黙っておくことにした。
嘘を吐くことが彼の力だから。

『確かに、雅さんの鉄球は箱の中にあります』
「バカな！アレはシャワー室の中に入っていったぞ！？プールの中の水に入るわけがない！」
籠目さんが叫んだ。
『それができるようです。なるほど、これは盲点でしたね』
楊瀬さんは続ける。
『放送の発言と映像を思い出していきましょう。まず、放送によれば今回の箱はプールです。但し、水中の中の箱に入れること、と』
楊瀬さんはそこで一度発言を止めた。
『映像に移っていたのはこのプール全体。つまり、シャワー室も含むプールです。そして、』
と、発言が止まったとほぼ同時に、メールが届く。
『今、先ほどのメールに全員送信で送り返す方式で、シャワー室の映像を送りました。自らの目でご確認ください』
そう言って楊瀬さんはテレパシーを切ってから、
「ふぅ……」
と、こちらに現れた。
俺たちはメールに添付された動画を確認する（どうでもいいが、メールの料金が大変なことになっていそうだ。本当にどうでもいいが）。
映像に写っていたシャワー室。
天井を這っている水道管のパイプが幾ヶ所も破損して水が流れている。
そしてシャワー室内に溜まっており、その水中に鉄球が落ちていた。

「……そういうことか」
隼人は呟いた。
楊瀬さんは頷く。
もうすでに海馬と虎郷、一条字先輩は黙って目を瞑って笑っていた。一条字先輩は、敵ながら天晴だ、
という感じなのだろう。
「で、隼人。どういうことだ？」
「いや、どういうことだも何もこれは言葉のあやだよ」
隼人は笑う。
「箱は『プール』とする。そして鉄球を入れるのは『プールの水の中』だ」
「ああ、そうだったな」
「そして箱は映像に移った『プール全体』とする。それじゃあこういうことさ。A＝B、A＝C、のとき、B＝Cだ」
「つまり、箱＝プール、箱＝プール全体だからプール＝プール全体ってことか」
俺が言うと、そういうことだ、と言わんばかりの表情を俺に向けた。

「……で？」
「うん？」
「それで何なんだよ」
「……まさかわからないとは……」
と隼人は呆れたどころか、同情の表情を見せる。
「いいかい？つまり置き換えさ。『プールの水の中』は『プール全体の水の中』だ」
「ああ！」
そうか。
つまり、プール全体の水の中……。
シャワー室に水が溜まれば、それがプール全体の水……！

「んなの屁理屈じゃん！」
華壱が叫んだ。
「でもアナウンスが決定したことだ。さらに言ってしまえば、矛盾はない」
「……ちぇっ！」
と少年のらしく吐き捨てて、華壱は校舎を見た。
「さっさと次やろうぜ！」
『かしこまりました。では次の箱です』
と言った瞬間。
校舎の窓がいくつか開いた。
数えると８つの窓が開いていた。
『これらの箱に、秒差１秒間隔以内でボールを入れてください』

15 ―箱入れ―（後書き）

俺＝男
男＝レオナルドダヴィンチ
より、

俺＝レオナルドダヴィンチ　！

やべえ、天才だ！

１６ー箱入れー（前書き）

テスト終了！
一気に行くぜ！

16 ―箱入れ―

秒差1秒間隔以内で8つの窓にボールを投げ入れる。

つまり、1つのボールが入ってから1秒以内に全ての窓にすべてのボールを入れること。

それが今回のルールということだ。

「じゃあ、さっさとやろうか」

華壱はいきなり言った。

「こんなことができるのか？」

「一気に8個のボールを投げ飛ばすことが可能ならば、ね」

隼人はそう言って笑った。

『では開始します。華壱さん、お願いします』

「あいよ」

ボールが一気に8個出てくる。

全てラグビーボールだった。

「……計算式を発動する」

華壱は呟く。

「計測開始……が……だから……で……」

「どうするつもりだろうな？」

「さあ。方法はいくらでもあるだろ」

隼人は言って笑う。
どうしてこいつは危険になればなるほど笑顔を見せるのだろう。
よくわからない性格であること限りなし。

「いっくぜえええええ！！」
華壱は叫んだかと思うと、全てのボールを様々な方向から蹴りまくった。
それぞれが一見乱雑に飛んでいく。
が、それらはすべて、窓に向かって飛んで行っているのが分かる。

「計算……じゃない」
「そうですね。あれが華壱様の素晴らしいところでございます」
楊瀬さんが言う。
「今まで培ってきた経験と予測……それと、計測結果と計算。そして繊細で微妙な調整までこなす、それが彼なのです」

その言葉を待っていたかのように、
すべてのボールが吸い込まれるように窓の中へと入っていった。

『秒差０．７１。クリアです』

華壱は見事にすべての箱にボールを入れて見せた。

17 ー箱入れー

すげえ。
感嘆の声しかなかった。

この方法でやるには、色々な事象を踏まえる必要がある。
最初に蹴るボールはそこから一番遠い位置に、最後にけるボールはそこから一番近い位置に。
また、それをできるだけ最短時間でできるような蹴り方と距離の関係を理解し、些細な力の変動、蹴りを入れる角度など、細かいことが関わってくる。
それを緻密な計算と大雑把な経験則でやる。
体が覚えていることで為しえる最強の業。
感激するほどのものだった。

『8pt獲得です』
放送の声で引き戻されるように意識が帰ってきた。
「どうよ、雅」
と、にやりと不敵な笑みを見せる華壱。
「……」
「お前にもできるのか？」
「出来るかどうかは関係ありませんよ。やるんです。後は可能性に懸けます」
「……へえ。力量を測定するのも大事だって俺は思うぜ」
「……貴方の意見も関係ありませんよ」
そう言って雅は快活に笑って見せた。
「やっぱお前良いな！」
華壱も言ってから笑った。

あの二人似ている……。
何がって言われるとわからないけど……そうそれは、この間の海馬と楊瀬さんのように。
直感的に、根本的に、客観的に、そしてそれら多方面からの視線が示す酷似。
まったく掴めはしないが、まるでお互いを高めるように強まっている。
同類項を足し合わせれば、その係数が増える、数学のように。

『では、後攻のターンです』
そう言って、ボールが飛び出す。
今回は全てがテニスボールだった。

「蹴りにくいかわりに一気に投げやすいな。案外ラッキーかもしれない」
俺は言った。
「……どうだろう。一気に投げる手法は彼女に限ってはできないと思うぜ」
隼人は横槍を入れてくる。
「どういうことだ？」
「彼女の能力は回転。一気に物体を投げて回転させてしまうと、それらが乱れてしまうから真っ直ぐは飛んでくれない」
「あ……」
そうか。なんなら先ほど同様蹴るだけの方がよかったはずだ。
突風などの自然状況は関係なく蹴り飛ばす。
回転さえかければ威力だけを気にしてければいいのだから案外普通は楽だったのかも知れない。
「雅はどうするつもりだ……」

「アイツには時代を塗り替える力がある」
と。
突然海馬が言った。
「え……？」
「ターニング・ポイントは革命の力があるのは、当然だろう？王城」
「……そうだね。今までとは違う観点から行動する、それがターニング・ポイントだ」
「だ。忘れてないか？アイツの最終奥義を」
海馬は言った。
最終奥義？

正直俺たちも驚いた。
その力は想像を絶するほど強大で、以前見た時よりも激しかったのだ。

雅は呟いた。

「……一世風靡」

１８ー箱入れー

瞬間。
雅はその場で回転し始めた。
地面が氷なのかと思わせるような、超高速スピン。
フィギュアスケートでも見ているような気分にさせる……なんてどころじゃなかった。
「え……？」
華壱は呟いた。
雅を中心として周りの砂が舞い上がり、砂埃が雅の周りに纏うように集まっていく。
台風。
それを実体化したような形。
「……あ。これ……」
そういや初めて会ったときにこれと同じことをしていた気がする。
「って……！！」
以前は半径３メートル程度だったはずだ。
今は……！？
「ここまで来るって……！？」
半径３０メートルっていうところか。
などと冷静な発言が俺にはできない！
「なぁあああ！？」
俺は思わず叫んだ。
一条字先輩も籠目さんもシオさんも隼人も音河も驚いている。
驚いていないのは、未来が見えていた虎郷と冷静な目で見ている楊瀬さん。
そして雅を信じ切ってる海馬だった。

華壱に至っては、風の中に紛れて見えなくなってしまっているため、どうなっているのかもわからない。校舎のギリギリまで竜巻が入っている。
「これで雅はいったい何をしようとしているんだ！？」
「分からない。何がしたいんだ……！？」
「奇想天外予想外。それがアイツだろ？」
海馬はにやりと笑った。

突然だった。
風の中から飛び出すように、ボールが出た。
しかもほとんど同時に。
「そうか！」
隼人が言った。
「一気に投げたんじゃ回転を加えられないけど、こうやって竜巻を起こすことで、投げる方向自体を分散したんだ！」
つまりこういうことらしい。
８個のボールを持って、回転を加えて投げると、それぞれがそれぞれに影響し合ったりした場合に正確な方向には飛んではくれない。
しかし、竜巻を起こしてその気流の流れにバラバラにボールを置く。
それから、スパイラルで『気流の方向』を変えたのだ。別にスパイラルの効果は形ある物体にのみしか作用しないわけではないということだ。
右回りしている物を同じ力で左回りにすれば、回転は止まる。
その原理を応用し、少しずつ気流のラインを作る。
それぞれがバラバラの方向に飛び出すことができるということらしい。
物理の法則に則った上で、常識的にはありえないことを起こしている。
「ということは……」

雅の位置から窓まで、ラインはできているってことか！

窓の中に吸い込まれていくようにテニスボールが入っていく。

『秒差０．４４。クリアです。８ｐｔ獲得です』

音声が結果を報告した。

現在点差、１ｐｔのみ。

19ー箱入れー

激戦や接戦という言葉がしっくりくるような気がした。
最後の箱。
残す勝負はそれによって決められることとなった。
同点になれば、恐らく引き分けではなくサドンデス。
つまり、雅が入れさえすれば勝ち。
『ご覧ください』
と、放送が言った。
瞬間だった。
何かが飛ぶ様に過ぎていく。
「！？」
それが2人の周りをくるくると回る。
「これは……箱？」
どうも今回の箱は超高速で動き続けるようだ。
「……」
不規則に。
眼にもとまらぬ速さで、
その箱は動き続けていた。
『今回は先攻後攻は関係なく、先に入れた方を勝者とします。弾数

は一人１０個までです』
放送が言う。
『準備ができ次第、報告お願いします』
と、続けた。

この勝負。

初めて雅に有利な勝負運びとなった。
なぜなら、今回は測定によって何とかなる問題では無い。
ともすれば動体視力とタイミング。
それなら華壱より雅の動体視力の方が勝るだろうし、タイミングに関しては持ち合わせたダンスの力で大丈夫のはず。

ならば、この勝負もらった――。

「早く始めましょう」
雅が言う。
「そうだな」
華壱も言った。
『では、開始してください』
言った瞬間にボールが飛び出す。
雅は野球ボール。
華壱はバスケットボール。
お互いボールを手に取り――。

『終了です』

放送が言った声に驚く。
いや、放送の声に驚いたわけではない。

正確には、もうすでに驚くべき事態にはなっていたのだ。
ボールを受け取った瞬間、華壱は躊躇なくボールをすぐさま投げたのだ。
そしてそのボールは見事箱の中に入った。

「な……！？」
どういうことか、判断に迷う。
いったい、どうやって……。
「測定器だ」
隼人が言った。
「どういうことだ？」
「測定っていう言い方をしているけど、要は『計算機』だ」
「計算機……」
「つまり、あの無秩序に動いているように見える箱に法則性を見つけた、そういうことだろう」
隼人は言って、正面を見る。

「悪いね、雅」
「いえ、流石です」
「さて……サドンデスの始まりだ」

そうは言ったものの、このサドンデスが始まりそうな雰囲気の中、次の箱で勝敗は決まるのだった。
それはあまりにも無理難題で越えられないような箱だった。

20 ―箱入れ―（前書き）

20ー箱入れー

『続いての箱はあちらです。校舎の方をご覧ください』
放送は言った。
……。
……。
……。
「は？」
何も起きなかった。
『今回の箱はあなた方から見た校舎の裏側にあります』
「な……！？」
『映像も見せません。場所もお教えしません。但し、１つの球につき距離感をお教えします』
「……」

つまり、１つボールを投げれば、落下地点との距離を教えてくれるというわけか。
『また、方法として発射台を用意しました。ご自由にお使いください』
という放送とともに、地面からバズーカの様なものが出てきた。
『では、開始です。サドンデスルールです。先に居れた方の勝利ですので、先攻後攻はありません』
放送はそこでブツリと途絶えた。
ボールが飛び出す。
「じゃあ、さっさとやるか」
華壱は言って、サッカーボールをバズーカの中に入れた。
そして速攻で放つ。

屋上を飛び越して校舎の裏に。
『目標の箱まで、１０メートルです』
「ちぇ……もう少し遠くかぁ」
華壱は言う。
次の瞬間には、素早く新たな球を入れて発射した。
ほぼ同様の、それでも遠くへとボールが飛んでいく。
『目標の箱まで、７メートルです』
「さっきより伸びたな。着実に場所には近づいている……」
華壱は言って、またボールを用意しようとしている。
「雅！急げ！」
「分かってますよ」
雅は言って、すぐに一回転してサッカーボールを投げた。
遠心力＋スパイラルで、勢いだけは良い。
そして距離としても申し分ない。
が、方向が少しくるっている。吉と出るか凶と出るか……。

ボールはまた校舎裏へと消えていった。

『目標の箱まで５メートルです』

「近寄った……！！」
が、これがあまりいいこととは言えない。
なぜなら華壱にヒントを与えてしまったわけだから――。
「今、華壱にヒントを与えたとか思ったか？」
「……え？」
一条字先輩が言う。
「甘いな、嘉島奏明」
「どういう――」
「王城隼人、貴様ならわかっているのではないか？」

「……」
隼人は黙って俺の方を見た。
「相手は測定器。合計３つの距離情報があればある程度の位置予測はつく。それに風の流れとかをうまく感じることが出来れば、どこに何があるかとかもわかるんだろう」
「ってことは――」
「あと一発撃てば、恐らく華壱君は入れてくる」
そう言って隼人は唇をかみしめた。
「……雅なら何とかしてくれる」
俺はそう呟いた。
それは悲痛の叫びや期待にも似ていたと思う。
「……」
雅は固まって動かなかった。
雅の脳の回転ならば、隼人と同じことに気付いたのだろう。
「俺の勝ちだぜ」
華壱は笑った。

次の瞬間、華壱が放ったボールは、箱に入った。

勝敗は決した。

『勝者は、華壱　匁　です』

放送は言い放った。

２０ー箱入れー（後書き）

劇的ってこういうことだろ？

21ー箱入れ　終了ー

勝負が終わった後、項垂れる雅に海馬は言った。
「大丈夫だ、心配するな」
海馬は笑う。
「……はい」
雅は小声で言って、大きな海馬の体躯に隠れるようにして抱きついた。

もしも海馬と雅が反対の状態、つまり最初の状態だったとすれば勝敗はどうなっていたか。
残酷なことに、恐らくどちらにしても雅は負けていただろう。
雅は負けていた。
今回の勝負では雅は誰の相手にもならないのだ。
まだ残り3回勝負があるというのにも拘わらず俺はそう感じた。
雅はまだ未熟なのかもしれなかった。
俺が言っていいセリフではないだろうが。

「さっさと帰ろう。俺たちは先に帰る」
そう言って海馬は雅を連れて歩いて行った。

「次は私と貴様だ」
籠目さんがそう言って虎郷の目の前に現れた。
「……そうですね。よろしくお願いします」
虎郷はそう言って籠目さんを静かに見つめた。
「私を倒せば、次は日下だ」
籠目さんが言う。

「え……」
「私は日下の影だ。そして二番手だ。だから私を倒したとき、貴様は日下と対等になれるであろう。貴様の目的はそこだろう？」
「……」
「楽しみにしている」
籠目さんはそう言って笑った。
そして静かに歩いて行った。
気づくと楊瀬さんは居なくなっており、華壱と一条字先輩、シオさんも既に歩いて行こうとしていた。
残ったのは俺たちだけになった。
「僕は王城の方に用があるから、東先輩に頼んで連れて行ってもらうから、先に行くね」
そう言って隼人は歩いて行った。
「帰るわよ、嘉島君」
虎郷が言う。
「ああ、先行っててくれ」
「そう。では行きましょう、響花」
「うん」
二人は先に歩いていく。
俺は昇降口の方へ行き、それから校舎の壁にもたれかかった。

「居るだろ？」
「ほお、わかるようになってきたか」
俺の問いを待っていたかのように、男は答えた。
「なんとなく今日もいるような気がしていた」
「そうか。ってことはこの間俺と会ったのを思い出したのか」
「……まあな」
「つくづく面白い男だよ」
男は笑った……と思う。
「……お前、何を知っている」

「全て、と言えばそれっぽいだろう？」
「答えろ」
「そうだな。なら１つ答えよう」
そう言って男は俺の横に立った。
瞬間移動である。

「柴山刃（しばやまやいば）という男がこの学校にいる。そいつとその仲間数人が、今回の選挙を妨害しようとしている」
「……それは事実か？」
「ああ、事実だ。そしてお前らはどうあがこうとそれを止めることはできないだろう」
「……」
「そして妨害されてからお前らの行動……それによって選挙結果が左右される。だから忠告だ」
そう言って俺の肩に手を置いた。
「お前の仲間は、学校だけか？」
「……何を――」
「ちゃんと忘れずに覚えておけ」

そう言って男が手を放すと、
俺はまた気を失った。

21ー箱入れ　終了ー（後書き）

次話『閑話休題』

たまには休もうぜ、なぁ？

22 ―閑話休題―

目を覚ますと、自分の部屋の天井が見えた。
「……」
確か学校に居たような……そう、俺はまたあの男と出会って、それから……。
……駄目だ。何を話したかも思い出せない。
ただ、二度会った、ということは三度目のチャンスもきっとある。
俺はベッドから起き上がって部屋を出た。
廊下に出ると、光がリビングから漏れていた。他にも光もないので、夜ということだろうか。しばらく眠ってしまっていたということになる。
俺はリビングの扉を開けた。
「やあ、おはようソウメイ君」
最初に気付いた隼人が俺を見て言った。
「帰ったら寝てるとか、疲れてたのか？」
海馬はそう言って笑った。
この言い方から考えて、俺を運んだのはここに居るメンバーの誰かではない。
……あの男か。
いったい何を考えている？
「どうかした、嘉島？」
音河が心配そうに俺の顔を覗き込んだ。
「いや大丈夫だよ、ありがとう」
俺はそう言って、ソファに座った。
「あー、腹減った」
「もう皆は食べちゃったわよ」
「じゃ適当に作ってくれよ」

「……」
虎郷は黙って吉院の不緒へと向かった。うん、こうやってやってくれると亭主関白のような感じはして悪くな――。
ドゴォッ！
と。
後頭部に激痛。
そして俺に激痛を与えたそれは、
「残り物」
と虎郷に言われて机の上に置かれた。
「虎郷……次からは普通に机に頼む。切実に」
「精進するわ」
そう言って虎郷はまたキッチンへ向かった。

その後しばらくして机の上にある程度の料理（と言っても残り物を温めただけだが）が揃ったので、少し遅めの夕食を始めた。
海馬は風呂に入り、音河は楽器の手入れ、虎郷は食器の片づけをしている。隼人はソファでニュース番組を見ており、雅はその横で隼人の横の席で丸まっていた。ふて寝、といった感じだった。
各々が各々の好きなことをしていた。
まあこういう休憩時間もいいものだ。

「そういや」
突然思い出したので、俺は隼人に向けて言った。
「王城に用って？」
「ああ、大したことじゃないよ。一応親だから、現状報告さ」
そう言って隼人は、俺を見て雅の頭をなでる。
「君らもたまには親に連絡した方がいいよ」
俺たち二人だけに言っているようだ。
そりゃそうだ。
残りのメンバー――海馬は親とは疎遠。音河と虎郷は両親ともに

なくなっている。
そう言った意味でも俺たちは救われているのかもしれなかった。
……現状報告ね。
「そうだな」

『お前の仲間は、学校だけか？』

唐突に男の言葉を思い出した。
アイツが言いたかったのはそう言うことなのか……？
家族を大切にしろって？
……あー。
「駄目だ、頭痛い」
俺はそう言って自室に向かう。
「会計戦は来週だ。それまでに万全にしておきなよ」
隼人のそう言う声が聞こえた。

そして、一週間後。

虎郷が居なくなった。

２３ー鬼ごっこ　準備中ー

それは一週間後だった。

その日は本来ならば会計戦ということもあって、虎郷は早目に家を出た。

それを追いかけるように１０分遅れで俺も家を出た。

そして学校につくと、校門の前に血文字で書かれていたのだ。

『コサトとカゴメはユウカイした』

と。

「……は？」

俺は思わずつぶやいた。

「どうしたよ、嘉島」

固まっている俺に向かって、後から現れた海馬が言った。

「……これは」

海馬も同時に固まる。

「いらっしゃいましたか」

そう言って現れたのは楊瀬さんだった。

「皆様、会議室でお待ちです。お二人もいらっしゃってください」

楊瀬さんは言って、また消え去った。

「来たか」

そう言った一条字先輩は眉間にしわを寄せて、深く考え込んでい

るような様子だった。
「どういうことだ」
海馬が聞く。
「そのままの通りだ。誘拐された。籠目と虎郷火水がな」
「根拠はあるんですか？」
「ある」
「どのような？」
「二度手間になるから、後にしよう。お前らのとこの3名がいないからな」
そう言って一条字先輩は机の上に両足を乗っけて、黙り込んでしまった。
「……」
仕方がないので俺たちは3人を待つことにした。
急かすために俺は電話を掛ける。

しばらくして黒塗りのリムジンが校庭内まで入ってきた。
そして3人が車から降りて、楊瀬さんがその3人を連れて会議室に入ってきた。
「どういうことだ、ソウメイ君」
そう言った隼人は珍しく冷静さを欠いている様子だった。
「説明するぞ。全員座れ」
そう言って一条字先輩が場を制した。

「では説明します」
説明するといった一条字先輩は口を開かず、楊瀬さんが説明を始めた。
「実は籠目様には昨日この学校の夜間の見回りをお願いしておりました。いつもは私が担当しておりましたが、昨日は所用で私の代わりを頼んでいました。しかし、今朝私が学校へ来た時には――」

「既に血文字が書かれていた……ってことだな」
海馬が言った。
「その通りでございます。そして、私が学校を全力で徘徊しましたがすでに見当たらず、嗅覚でも探してみましたが、学校を離れて車の様なもので移動したようで、嗅覚での追尾は断念せざるを追えませんでした」
「籠目ってのがサボった可能性はないのか」
「残念ながらなしとは言えませんが、ほぼ同時に虎郷様の匂いもほぼ同じ場所から消えているところから、お二人が同時に居なくなったということです」
「……なるほどな」
海馬は納得したように黙り込んだ。
確かに、これならサボった可能性よりも二人同時に居なくなった可能性が高い。
「だけど、虎郷が捕まるっていうのは相手は只者じゃないぜ？」
「そうだな、それは俺も同意する。虎郷火水や籠目が居なくなるということは、能力者を相手取って勝利したということになる」
そう言って一条字先輩は隼人を見た。
「どう思う、王城隼人」
「……」
今回も作戦は王城に任せるということらしい。
「この学校にいるアクターのリストはありますか？」
「その辺の調査は籠目がしている。籠目のファイルは既に用意してある」
と、顎で楊瀬を指す。
「かしこまりました」
と言って楊瀬さんは消え去って、しばらくして1つのファイルを持ってきた。
用意してないじゃん。今、明らかに用意したじゃん。
シリアスな空気をぶち壊しにはしたくないため言わなかったが。

「これだけですか？」
「そんなものだが、しかし犯人はこの学校の者とは限らないだろう」
一条字先輩は言って隼人を見た。
そりゃあそうだ。
この学校の者が犯人とは限らな――。
……あ。

「柴山刃……」
俺は呟いた。突然思い出した名前を。
「……誰だ、それは」
シオさんが俺を見て聞いた。
「この選挙を妨害しようとしているメンバーの一人だ。というよりリーダーである可能性が高い」
「何故貴様がそんなことを知っている」
と、一条字先輩が睨んでくる。
上からでもないのに、この威圧感。すごい。
「……それは今重要じゃない。今大事なのは、そいつがアクターかどうかだ」
「……チッ！」
一条字先輩は舌打ちをして、黙り込んだ。
「調べようよ、早く」
音河が隼人をせかした。
隼人も一条字先輩と同じことを思っていたようで俺を見ていたが、音河の声ですぐに調べ始めた。
「……いた」
隼人は言った。
「能力者だ」
「どんな能力なんですか？」
雅が尋ねる。

「分からない。調査中ってことになってる」
「……相手の強さも分からずに戦うしかないってことか……」
華壱が少し辛そうに言った。
「楊瀬、追跡できないのか？」
一条字先輩が楊瀬さんに聞いた。
「私には無理なことは無理なのです。ご存知でしょう」
楊瀬さんは答える。
「どういうことですか？」
「私の能力は『分かること』しかできないんです。目的地が分からないのに追跡もできませんし、瞬間移動もできません。テレパシーはあなた方の居場所がわかりましたからできました。つまり私の行動は基本的に場所が関係ないといけないんですよ」
まさかのタイミングで弱点を知ってしまった。
そして一番頼れる人がつぶれてしまった。

「王城隼人、どうにかできないのか？」
「……今の現状、必要なのは『機動力』と『強さ』と『場所情報』です。場所情報はせめてこの街についてですね。しかもこれらが１人に備わっていることが最高条件です」
「そんな贅沢言ってもできないだろう？」
一条字先輩が言った。
隼人も黙り込む。

機動力と強さとこの街に詳しい人間。
そんな奴がいるわけがない。しかもアクターを相手取るほどの強さなんて――。

「おい、お前ら。俺は帰っていいのか？」

そう言って会議室に一人の男が入ってきた。
スーツ姿できっちりした姿で。

「「あ、居た」」
俺と隼人は同時に言った。

「あ？」

東先輩は間抜けな声で返事をした。

２４ー鬼ごっこ　開始ー（前書き）

【一話目にキャラ投票結果発表とそのお礼として嘉島君イメージ画を貼り付けました。

よかったら見ていってください。】

この辺から嘉島君目線だけど嘉島君はその場にいない、みたいになってますが、三人称だと思ってください。

２４ー鬼ごっこ　開始ー

『諒、準備はできたのか？』
「万端だ。任せとけ」
『俺は方向音痴だから、周りの情報しか教えられないぞ』
「心配するな。お前は近くの監視カメラの映像から見えたものをどんどん教えてくれればいい。できるだけ目印になりそうなものをな」
『ああ、心配するな』
ライダースーツに身を纏って、東先輩はインカムのマイクで会話しながらヘルメットをした。
『虎郷の鍵から位置情報は特定できた。現在進行で走っているようだ。街から出る気かもしれない』
「県を跨ぐまでは俺の範疇だ。心配するな」
『じゃあさっさと開始しよう』
「ああ」
東先輩はバイクに跨った。

「じゃあ行くぜ」
東先輩が言うと
「私も行きましょう」
と楊瀬さんが言った。
「お前俺の速度についてこれるのか？」
「心配しなくともダッシュですよ」
「いや、逆に心配だが……」
東先輩は言った後、
「まあどうせ大概におかしいんだろう。じゃあ行くぜ」
と笑って、アクセルに手をかけた。
「大丈夫です。私はバイクと同じ速度で走れますので」
嘘つけ。

とは今回は言えないな。実際、狼なのだから出来ないとは限らないし嘘とも言いにくい。
東先輩はそのままバイクで走りだした。

「なるほど、あれなら機動力もあるし、この街の情報も詳しい。先ほどリムジンを吸収したようだし、アクターであるのは間違いなさそうだ。しかし――」
そう言って一条字先輩は隼人を見た。
「アレは強いのか？」
「アレとか言ってるとぼこぼこにされますよ？」
隼人は言った。
割とマジ顔で。
「リアルな話、あれには僕とソウメイ君が2人がかりでかかっても勝てないでしょう」
「そんな強い能力を持っているのか……？」
「いえ、能力はそんな大したものではありませんが」
いやあの能力でも十分強いと思うが？
言わなかったけど。
「物理的に強いです。ただの人間相手なら戦う方が間違っているように思わせるでしょう」
確かにその通りだった。
あの人の強さは人外だ。
人のそれではない。
「なるほど、ならば俺の相手ではないな」
それでもなお、一条字先輩は言った。
「……」
「俺は世界最強になれる男だ」
堂々と言った。
しかもふざけた様子もなく、だ。

「……」
「信じる必要はない。どうせ最後には王者として俺とお前は戦うことにはなるのだからな」
そう言って一条字先輩はまた口を閉ざした。

「時にお前」
東先輩は隣を並走する奇妙な男こと、楊瀬さんに語りかけた。
「何故ここまでしようとする。俺に任せておけばいいだろう」
「信用していません」
即答だった。
「どういうことだ」
「貴方が今から虎郷様を助けるのは間違いないでしょうが、籠目様の命を助けて下さるとは思えません」
「助けるよ、仁義に反する」
「いえ、そういうことではなく」
そう言って楊瀬さんは東先輩を見た。
それでもなお走り続けているのだから、周りから見たら恐怖だろう。
「もし、籠目様が命の危機にさらされたとき、貴方が貴方の身を呈してまで守ってくださるか、ということです」
「……」
「そう言う意味で信用していないだけです」
「なるほど。確かに虎郷とその籠目とやらのどちらか助けられなければ、俺は迷いつつも結局虎郷を選ぶだろうな」
「そういうことです」
「貴様も後処理係のようだな」
「……も？」
楊瀬さんは怪訝そうな顔を見せた。

「基本的に誰かがいなくなったり誘拐されたり、あるいは消えたりしたとき、探す役回りは俺なんだよ。まあ別にいいんだけどな」
「……なるほど。そういう意味ですか。ですが」
楊瀬さんは言った。
「後処理係という言い方は嫌いですかね」
「……確かに言い方が悪かったかもな」
「そう言う意味ではなく、後処理係というのはまるで何かが起きるのを待ってから行動しているような言い方ですから。私はできるだけ先を読んで行動しているつもりですからね」
「ふむ、そう考えるとお前は」
そう言って東先輩はスピードを上げていった。
「限りなく海馬に似ている」
「……そうですか」

25 ―鬼ごっこ―

『大きな電化店と本屋を抜けたぞ』
「スクランブル交差点か！？」
『そうだ』
「じゃあ、街の北側だな！」
そう言って東先輩はハンドルを右側に切った。
楊瀬さんは、道路の反対側に向かって飛び越えることで東先輩についていく。
「急ぐぜ」
「ええ、ご心配なく」
東先輩と楊瀬さんはピッチを上げる。

『諒、距離は着実に近寄ってるぞ』
「当然。俺はこの街は制覇している」
『だが急げ、よくよく見るとこの車、蛇行運転してる』
「……どういうことだ？」
『分からん。だが、もしかしたら車内で暴れているのかもしれない』
「チッ……余計なことを！」
「急いだほうがよさそうですね」
「ああ」
こうなると手段を選んでいる場合じゃない。
制限スピードギリギリで東先輩は運転する。
楊瀬さんも少し息を上げながら走り出した。

目の前に蛇行する車を見つけた。
周りの車に軽く衝突しながら違反したスピードで進む。
気になるのはその周りの車はその車に気付いていないのか避けよ

うともしないし、パトカーも来る様子がない。
「一体どうなってる……？」
「分かりませんが、恐らく能力でしょう」
「だとすると厄介だ。誰もいない場所まで運ぼう」
「出来るんですか？」
「お前も手伝え」
「かしこまりました」
楊瀬さんは返事をした。
東先輩はその車の後ろにつき、ウィーリー状態で車に引っかかる。
「お前、気をつけろ」
「はい？」
「俺の進化は見えないぜ」
「それはどういう――」

工場跡地についた。
「ことですか？」
「よし、離れたぜ」
そこには車と、車の中に居たであろう人間がいた。
車にもたれかかるようにして、三人の男が倒れて目を白黒させている。
そして虎郷と籠目さんは東先輩と楊瀬さんの傍に倒れていた。
「手荒な真似悪かったな。拘束は外せたが、そこまで時間がなかった」
「え、え？」
その場に居た全員が固まっていた。

『嘉島、市街地の北部にある工場跡地のどれかだ』
「どれかって……」
『すまん、俺にはその程度が限界だ』
「……分かりました。頑張ります」
俺は電話を切った。
「市街地北部の工場跡地だ」
「行くぞ」
一条字先輩が言った。そして歩き出そうとする。
「待ってください」
隼人はその一条字先輩の肩をつかむ。
「何故だ」
「少数で行きましょう」
「だから何故」
「相手の能力も分からないのにこちらが全力で向かうのは得策ではありません。ここは対応力のある少数で行きましょう」
「……チッ」
一条字先輩は納得したように（？）舌打ちした。

「華壱くんと日下さん。僕と嘉島君と響花で行きます。後のことは任せてください」
「……いいだろう。俺の能力も分からず連れて行く必要もないしな」
そう言って一条字先輩は校舎の方へと歩き去っていった。

「よく切り捨てられるなぁ」
海馬が言った。
「あの人は私たちのことは手駒としか思ってないのだよ、悲しいことにな」
とシオさんは言った。

「行きましょうか。時間もありませんし」
隼人は言って、走り出した。
俺たちも全員、それについていくように走り出した。

26 ―鬼ごっこ―

「何をしたんですか？」
楊瀬さんは極めて冷静に言った。
「特別なことをしたわけじゃない。俺の力だと思ってもらえばいい」
東先輩は言った。
目の前の男たちは恐怖の表情を浮かべていたが、突如として表情を戻した。
さながら百面相だなこいつら、と東先輩は思う。
「何だ……ただの能力者か」
「……相手が能力者なら余裕ってことか」
「俺たち3人の能力に勝てるわけがないからな！」
そう言って男たちは構える。
そしてその瞬間消えた。

「！？」
「気を付けて！東先輩！」
虎郷が言ったが早いか、東先輩の体が遠くに吹っ飛ぶ。
「……」
東先輩は静かに、ドラム缶の山に突っ込んだ。
「へへへ……」
3人で拳を振りかざした姿でそこに居た。
「俺の能力は、『タイムズ・ミリタリー』。味方の人数分、力を倍にする能力だ」
唐突に自分の力を報告し始めた。
ついでに名前を付けることにしよう。
金髪時間バカ。
「俺の能力は『マインド・オール』。その場にいる味方の息を合わせる力だ」

脳天気バカ。いや、バカの人数は少ない方がいい。
脳ブルースガイ。どうだろう、スカイとガイをかけてみたぞ。
「俺の能力は『キャパシティ・ブレイク』。１０メートル内の範囲の視界を奪う」
この中では一番強そうだ。
よし称号として、つよしくん。にしよう。
名前は決まった。

東先輩は静かに立ち上がった。
「……痛ぇな、おい」
そして静かにライダースーツを脱いだ。
タンクトップ姿に黒のスラックスという、さながら仕事から帰ってきてシャツと上着を脱いだサラリーマンを思わせた。
「まだまだ行くぜ……」
ブルースガイが言った。
ふっとまた消え去る。
東先輩は仁王立ちで構える。
「……ああ、そうか」
つよしくんの１０メートルの範囲は、時間バカの効果によって３０メートルになる。だからここまで離れていても見えないのか、と考えて東先輩は逆方向に向かって投げ飛ばされた。
三倍になるのは力だけでなく速さもそうなるのか。そして息ぴったりだからみんなでせーので投げれる。
怖いなぁ、この力は。
東先輩は思考をしながら今度はセメントの袋に突っ込む。粉塵が舞い上がり、東先輩の姿はその中に隠れた。

「楊瀬！助けろ！」
籠目さんが言う。
「そんなこと言い出したら貴方の能力の方が強いでしょうに」

「見えない相手に『後ろの正面』を使ったってしょうがないだろ！」
「ああ、そうでしたね。虎郷様は？」
「私の『ファントム・ダーツ』もあんまり今回は期待できないわ」
「聴いただけではわかりませんね。お互い能力を隠したい気持ちはわかりますが、ここはお互い腹を割って戦った方がいいのでは？」
虎郷はその言葉に黙り込む。
今回は虎郷は戦った方がいいのだから。実際問題、今回は虎郷の能力は一番応対できそうだ。
「……私の後ろの正面は、相手の後ろを常にとることのできる能力だ」
と、籠目んさんが先に言った。
「……私のは『未来予知』です」
「予知……！？」
楊瀬さんが珍しく驚く。
「近未来も予知できます」
「ならうってつけじゃ……」
籠目さんが言う。
「さっき車の中で暴れたせいか……ちょっと」
そう言って虎郷は足を抑える。
「……折れたのか……！？」
「分からないですが、まあ響花がいるからそこは大丈夫です」
「……そうか」
籠目さんは焦ったり落ち着いたり忙しい。
「楊瀬さん。助けてください」
虎郷は楊瀬さんを見た。
「……申し訳ございません」
「何故だ？お前の力なら相手の姿を見えるようにできるだろ？」
「……本能です」
と、楊瀬さんは下がった。
「狼の方の私の本能が、『関わるな』と」

「そんなに相手は強いって言うのか？そうは見えないが……」
籠目さんはそう言って敵を見る。
「いえ、そちらではなく……あの、東様に……」
「東先輩？」
虎郷は東先輩に視線を向けた。
「あれは……怖いですね。正直」
楊瀬さんはそう言って汗を垂らした。

「……あぁ……」
東先輩は静かに立ち上がった。
そして粉塵の中から影が現れる。
「お前ら……舐めんなよ……」
そして、その影は立ち止まると。
「ぶっ殺すぞぉぉぉぉォォォォオオオオあああああああああああああ！！」
叫んだかと思うと周りの粉塵が吹き飛び、東先輩は姿を現す。
その姿は白い長ランに身を纏い、リーゼントという暴走族だった。
「……誰だ」
籠目さんは冷静に突っ込んだ。
鬼だった。
「さあて、鬼ごっこを開始しようか」

そう言ってにらむ姿は鬼そのものだった。

27 ―鬼ごっこ―

「……ふん」
時間バカは余裕の表情を見せた。
「見た目が変わっても何の意味も持たない！」
スカイブルーが言って笑った。
その瞬間に3人の姿が消える。

東先輩は仁王立ちで少し腰を落としているというだけの格好で動こうとも構えようともしない。

次の瞬間、3人が現れた。
そして東先輩の体に向かって右足を突き出した。
そして。
そして。

それだけだった。
「……え……」
3人の攻撃は東先輩の腹筋で止まっている。
というより、東先輩が微動だにしないのだ。
「……それで終わりだな」
そう言ってつよしくんの頭を左手でつかんだ。
「失せろ」
そしてそのままもう一方の手で顔面を殴る。
つよしくんはそのまま吹っ飛んでいき、さきほど東先輩がぶつかってへこんだドラム缶に衝突し、さらにその奥まで行ってから倒れこんだ。
「これで消えるのは無理だぜ。そして……」

時間バカを見下ろす。
「一人減ったな……！」
「くっそぉ！」
そして時間バカは東先輩の顔面を殴る。
東先輩はヘッドロックでそれを受け止める。
「な……！」
「このままいくぞ」
東先輩はそのままヘッドロックで拳を押し戻す。
「死ね」
そしてその位置から、東先輩は足をふりあげた。
時間バカは反応する暇もなく、天井に突き刺さった。
「……は……はぁ！？」
「なめてかかったな。俺を」
「お前……何の能力だよ！」
「はあ？何の能力でもねーよ、スカイブルー」
「スカイブルー？」
「ああ、まあ気にすんな。もうお前はつながる人間もいないんだから、さっさと消えろ」
そう言った時には既に足を振りぬいていて、スカイブルーは目の前から消えていた。
「……完了」
東先輩はそう言ってにやりと笑った。

27 ―鬼ごっこ―（後書き）

今回短いのは次回につなぎたかったからです。

28 ―鬼ごっこ　終了―

「前に言ったと思うけどアームスってのは、感情論に左右されているところがある。つまり突発的に怒るタイプだってことだね」
「それは聞いた。確か、感情が高ぶると姿が変わる……んだったな」
俺は音河と東先輩を見た。

俺たちが到着するとその場は既に落ち着いており、音河が早急に虎郷の治療を始めた。
それから東先輩と楊瀬さんは何か話している様子だったが、年齢が近いからだろう、なかなか意気投合している様子だったので聞いてみると、

「お互い苦労しているな……世話をする側同士」
「そうですね。そちらも大変そうで……」

と会話していたので、俺が入るとなんかこう、あれが……こう……だったので参加しなかった。

「つまり、アームスは感情によって力が変わるのさ」
「そうなのか？」
「姿が変わる、というのは感情が最高潮に達したということ。つまり、あの状態は全てのステータスがその人間の１００％に達したということなのさ」
と、隼人は言ってニヤリ笑った。
全力なんてそう簡単に出せる者ではないが、それが１００％達したということは――つまりそういうことだろう。

「おい、さっさと帰るぞ、お前ら」
東先輩がそう言った時には既に姿は元通りのスーツになっていた。

「アンタが何を考えているか知らないが、俺はどうともいわないぜ」
「ならばわざわざ話しかけるな、海馬正」
「言いたいだけのことは言いたい主義なのさ」
「面倒なものだ。昔の楊瀬にそっくりでむかつくぜ」
「その倍くらい俺もむかついたぜ」
２人は生徒会室で会話をしていた。
雅はその様子を遠目で見ていた。
「貴様の口ぶりからすると、俺の何かが気に入らなかったようだが」
「そうだよ。人を手駒のように使う態度が気に入らなかったのさ」
「……おかしなことを言うなぁ」
と言って一条字先輩は不敵に笑う。
「まるで貴様の王は手駒のように使わないという言い方だ」
「使ってないさ。あいつは」
「本当にそうか？」
一条字先輩は笑った。
「思い当たる節が一つもないのか？」
「無いね」
「例えば、お前たちの行動がアイツの予め考えていたことと全く同じだったことはないか？それはつまりアイツの手の上で動いていたということだぞ」
「……」
王城隼人が、王城グループの継承を行うとき。
俺たちの行動は先に書いた手紙によって読まれていた。

「例えば、お前たちは行動をするとき、ほとんどのことを王城に任せてはいないか？信用とは違う意味で、そいつの言った通りに行動はしていないか？」
信用だけではない。
確かにそうだ。
アイツの発言に……気圧されているところは当然ある。
「別にそれを惨めだとも思わない。いけないことだとも思わない。しかし、それで俺を責めるのはおかしいとは思わないか？」
「……なるほど。確かにそうだ。よし、謝ろう。申し訳ない」
「お前の謝罪には心がこもっていないな」
と話していると、
「ところで柴山刃は捕まったようだ。さてと、どうしたものだろう」
と、一人の男が目の前に現れた。
「このままでは選挙が思うように進んでしまう」
そう言った瞬間にはその場にいた3人を気絶させた。
「さてと……いったいどうしようかね」
男はそう言って笑った。

29 ー鬼ごっこ　後片付けー

帰るとすぐ、倒れていた海馬と雅、そして何故かすでにパイプ椅子に座っている一条字先輩の姿があった。
何故二人を放置していたかを聞くと、こっちも混乱しているから色々整理していたのだ、といった内容をもっと冷たく言っていた。
そして俺たちは2人を介抱して、しばらくして話を聞いた。
全て聞き終えてから隼人は、

「男ってのは例のあの男のことだろう？」
と海馬に聞いた。
「ああ。そうだ」
「ともすれば、何かをしに来たはずだけど……何か言ってなかったかい？」
「何か言っていたけど、その時には俺たちも朦朧としていてよくわかんなかったんだよ」
「そうか」
隼人は言って、
「ところで今日の結果はどうなったんですか？」
と話を変えた。
「……どうだろう。ここは引き分けということにしよう。そうすれば、状況は0対0のままだ」
「そうですね。一応、今回のことは何も関係なかったということにしましょうか」
「よし。それでは今日はさっさと帰れ」
そう言って一条字先輩は黙りこんだ。
「では」
隼人も淡泊に言ってから、身を翻して部屋を出ていった。

「で、何か思うところでもあるのかよ」
俺たちが家に帰ってから俺は隼人に聞いた。
「……へえ、よくわかったね」
「そりゃあんなにあからさまに帰ろうとしてたら、バカでもわかるわ」
「それもそうかもしれないけどね、まあ流石だ」
おい、その言い方じゃ俺はバカだということになるぞ。
それはいいとして。
「で、何に気付いたんだ？」
「いや、小さなことだよ。恐らくあの男にとってこの選挙が成功することは好ましい事態じゃない」
「何でそう思うんだよ？」
「かその逆で、成功してほしいと思っている」
「……どういうことだ？」
「あの男がこんな風に選挙関係のことに関わろうとしているのは不思議だ」
「……」
「まあ、今は深く考えずに今度のことを考えたまえ。次は君の番だろう？」
「……ああ」
それからは他愛もない話をしながら夕食を済ませた。

自室に戻って、俺はベッドに寝転がる前に学習机の椅子に座って、くるくる回りながら考え事を始めた。
もしも隼人の言うとおり、あの男が俺たちの選挙を邪魔しに来たのだとすれば、俺にあの柴山刃の名前を教える必要はあるのか？
もしも本気で邪魔するなら、虎郷や籠目さんを殺した方が早い――。

いや、待て。
実際選挙は進まなかった。邪魔することに成功した。
つまり、選挙自体を邪魔するつもりはない、ということか？
もし選挙を中止にしたければ、それこそアイツの力ならば校舎の1つや2つ軽く壊せそうだな。
ともすると、アイツはこの選挙を中止にするつもりはない。
……分かった。
恐らくアイツは今回の虎郷と籠目の闘いで『どちらかが勝ってしまうことを止めたかった』ということだろう。
つまりアイツはどちらかがこの選挙で負けること……あるいはどちらかが勝つことを求めている。

選挙止めるのではなく、この選挙において俺たちか一条字先輩側が勝つことを……。
そこまで考えてから俺は、隼人の部屋に行った。

「何？こんな時間に？」
隼人はパソコンで何かをいじっている様子だった。
「話がある」
「……オッケー」
俺の突然の来訪に対して、そう言って隼人は応対した。

３０ー大掃除　開始ー

５月５日。こどもの日。
つまりゴールデンウィークは満喫して、明けた日ということだ。
「始めるぞ」
一条字先輩がそう言ってまた紙を投げるように配った。
大掃除。
校内に何人かの手勢がいる。そいつらを気絶させた人数で勝敗を決める。

……え。
「これだけですか？」
「説明はいらないだろう。これだけだ。日下、さっさと準備しろ」
「分かってるわ」
そう言ってシオさんは準備を始めた。
と言っても刀を構えるだけだが。
「俺は海馬の武器を使うことはできないのか？」
「俺の武器は運が悪かったら意味の分からない結果を与えるだけになる」
「音河の武器は？」
「ギター弾けるだけじゃなくて能力とちゃんと見合わないと意味がない」
隼人が言った。
「ていうかそもそも、その人の武器に触れた時点でその武器はそこから存在を消す」
「ってことは音河のも海馬のも使えないってわけか」

結局俺はこの右手と左手で戦えと……。
しかもあの刀とかよ……。
「嘉島奏明。貴様もさっさと用意しろ」
一条字先輩に急かされて、俺は昇降口に立った。シオさんも遅れて、俺の横に立つ。
「奏明、よろしく頼むよ」
そう言ってシオさんは右手を出す。
俺もその手を握って
「よろしくお願いします」
とあいさつを済ませた。

ところでこの間の夜の話の続きをしておこう。
「そうか」
俺の推理を聞いて隼人は一言呟いた。そして黙った。
「……」
「……」
「……」
「……？」
「え、何かないのか？」
「別に何もないけど？」
「……お前の意見を聞かせてほしい」
「君の推理が当たっているという確証も、外れているという根拠も僕は持ってない。だから君の考えに関しては、そうか、としか答えられない」
いや、そうだろうけどもう少し何か言ってほしい。
「そうだね。ならば僕の考えを言おう」
隼人はそう言って俺の方を見た。
「君の推測は間違えているのかもしれない」

「……え？」
「例えば、僕ら側を勝たせたいのだとすれば、どうしてミヤビ君の時に行動しなかったって言うんだい？」
ああ、それは確かに……。
「逆も同様に、一条字先輩側を勝たせたいのだとすれば、どうして楊瀬さんの時に行動を起こさなかったのか、ということになる。」
……。
「つまり、間違えているのかもしれないということだ」
「いや、反論させてくれ」
「どうぞ」
「向こう側も予想外だったんじゃないか？」
「根拠は？」
「海馬の運の良さと、雅の予想外能力だ」
俺の発言に隼人が止まる。
「つまり――結局どっちなのかはわからないけれど、もしも俺たちを勝たせたいのだとすれば、予想外的に雅の行動が負けの方向に動いてしまった。逆に、一条字先輩側を勝たせたいのだとすれば、海馬の運が予想以上によくて、進化するとは思っていなかった……とか」
「……なるほど。説得力はある。しかし、どちらにせよ僕の推論にも君の推論にも根拠がないね」
「……そう……だな」
「そうだ」
隼人が言った。
そして俺を見る。
「君はシオさんの闘いを見ているだろ？」
「ああ」
「だとすれば、わかるはずだ。君とシオさんが戦ったとしたら、どちらが勝つ？」
「……俺が負けるだろ」

「ということは、もし次の闘いで相手側が何か介入してきたとしたら、僕らを勝たせようとしているってことだ」
「でも俺が負けるっていう根拠もないだろ？」
「それは今回の籠目さんとヒスイ君との戦いでも一緒だろう」
……それもそうか。
「まあ介入してきたときに相手がどちらが勝つと思って介入してくるかもわからないからこの考えも意味ないね」
「否定が早いな」
「完全に思い付きだからね」
ま、やってみればわかることさ。
隼人はそう言って、
「眠いから寝る。出てって」
と言ってからベッドに横になった。
俺はその言葉を渋々受けてからそのまま出ていった。

わざわざ何故このタイミングでこの話をしたのか。
それは始まってからの驚愕の事態につながるからである。
事態について端的に説明するなら、結局はこの戦いも勝敗の決められない戦いとなってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7003o/

丸く収まったこの世界

2012年1月7日23時53分発行